

加賀藩史料

第六編

自正德四年
至元文貳年



加賀藩史料第六編

正徳四年

正月朔日。前田綱紀朝服を着けて年寄中諸大夫たるもの、年賀を受く。

〔政隣記〕

正月朔日御直衣に而御出。於御奥書院諸大夫本多安房守・前田美作守・奥村伊豫守布直垂に而年頭御禮被爲請。奏者番並御太刀引御小姓素袍着用。御取合之御家老本多圖書・前田修理布衣着伺公。御熨斗持出青地源次郎、御腰物持候前田權太夫・田邊藤藏各素袍着用。

但、本多安房守政長・前田駿河守孝貞叙爵後、初而御在國之元日、兩人共裝束に而御禮被申上。是は只一度に而、其後は長袴に候處、今日右之通之儀は、伊豫守殿叙爵後初而之御禮に付、裝束に而御禮仕度由依願也。

伊豫守は奥村有輝

右相濟、一先被爲入、御長袴被爲召、御大廣間に御出、年寄中等御禮、其外年頭御儀式如例。

江戸表も如御例。

正月廿八日。大聖寺侯前田利章金澤城に登る。

〔政隣記〕

正月廿八日備後守様御旅宅ゟ御着、御登城。去々年正月廿六日之通御作法。

附、四月十八日大聖寺へ御歸。

二月七日。富山城の本丸災に罹る。

〔政隣記〕

二月七日夜亥下刻、富山御城御本丸足輕番所より出火、八日辰之刻迄に御本丸不殘燒失之段申來。同夜戌下刻富山御家老中迄、御大小將堀半右衞門御使に被遣。から尻早打に而急、九日辰刻富山ゟ參着、申刻罷立、同夜丑刻金澤ゟ歸着。

但、御本丸之外類燒無之。

二月廿一日。金澤城に於いて將軍宣下祝賀の爲能を張行す。

〔政隣記〕

二月廿一日將軍宣下爲御祝儀御能被仰付、御姫樣方及備後守樣へ御料理被進、年寄中・御家老中ゟも御料理被下、頭分以上のしめ。廿六日右御祝儀御能有之、人持・頭分・人持嫡子・隱居之面々見物、御料理被下、頭分以上のしめ着用。

二月廿九日。前田利長の百回忌法會終りたるを以て金澤城に能を張行し諸寺の住僧を招請す。

〔政隣記〕

二月廿九日瑞龍院様百回御忌相濟候に付御能被仰付、瑞龍寺幷如來寺・寶圓寺・瀧谷妙成寺・芳春院・玉泉寺・天德院看坊御招請。御作法前々之御通り、御給事人のしめ着用。

二月。一季居奉公人缺乏するを以て町方等に住して之に適するものを調査し屆出でしむ。

〔政隣記〕

一、左之通御月番安房守殿被仰渡、御家中一統頭々より觸出。

御家中一季居奉公人、次第に致拂底候。是は奉公いたし候より、日用・ざるふり等自分に渡世仕候方勝手宜候に付、宿等へ引込申者多有之候故、右之通と相聞候。向後左様之族は爲致奉公、勝手次第引込候儀不仕様に、夫々吟味仕可然与申談候。依之當時所々町方は勿論、御家中長屋其外寺社門前地等に罷在候輕者は、日過仕候類不殘書付、歲付をも仕、其內獨身或は妻子持は、其厄介人何人有之候段書記、來月五日切に可被差出事。

但、人數多候者帳面に記可被出候。

午　二　月

右之後三月廿日御用番奥村内記殿より、下々奉公人當三月迄致奉公、其後浪人に而不有付、侍共長屋等にたより居候者有之候哉、致吟味早速可書出旨御觸有之。又五月十日御用番伊豫守殿より、自分幷又者小者奉公人不足分、幷定日用雇置候人々共人數、當十五日切書付可差出、幷長屋等貸置候者、職人之外一々可書出旨等、御觸有之。

〔政隣記〕

五月廿六日近來小者奉公人寡く、諸士及難儀候に付、公事場・御算用場・町奉行へ被仰渡、町方・御郡方より出之、與力六人相定令裁許。六月四日御用番前田美作守殿より、御家中奉公人致取持候町人四人相極指引爲仕、御家中小者等不足之分、右之者共へ申渡、先々へ罷越、相應之奉公人相濟候樣仕、請合狀向後は取持之者兩人宛名を記證文出申筈、夫々下請人も相立、急度申付候故、異變候而も指操無之候。奉公人仕立候人々へは、指引有之間、取持人より主人〱へ可相斷候條、給銀之內殘置、取持人へ直に渡候樣仕度。且四人之取持人へ、諸事爲入用奉公人一人より、春給銀之內に而一匁、暮給銀之內に而一匁、江戸詰之者は五分宛增銀請取申筈に相極。半途に召置候者も、右之圖りを以主人方に殘置、取持人へ直に相渡候樣仕

度旨、町奉行津田織部・前田兵右衛門申聞候條、組支配夫々可申談旨御觸有之。同月廿二日にも、美作守殿より與力水野甚兵衛・澤崎彌源次・井口藤藏・牧七左衛門・水谷四郎兵衛・筒井又兵衛江、御家中奉公人裁許申渡候。小者等召置度候者、右與力中江直に以書付相斷候樣、諸組江可被仰渡旨、富田治部左衛門・奥村源左衛門・菊地大學・永原左京紙面出候旨、御觸有之。

三月朔日。金澤城橋爪門内の御厩飼料所に放火せしものあり。

〔政隣記〕

三月朔日午後橋爪御門御番所後、御厩飼料所より烟多起怪敷に付、當番人壁を毀ち見候得ば、一間四方計燒拔候故、下番・足輕等相交り消之、二之御丸江相達、御横目入江八郎左衛門達御聽、八郎左衛門且橋爪御番人頭佐々木左兵衛も當番に付罷越見分仕、重而及言上候處、御城代美作守可致指圖旨被仰出。則美作守殿見分、掃除被申付に付、御作事奉行等罷出、燒跡晝夜足輕兩人宛付置之、御番所御道具等夫々しらべ有之處、御定書之紙に焦色有之、且右御厩之鍵は、右御番所預り之處見え不申。右兩件共何日以來与申事相知れ不申候。廿九日夜泊番は原九左衛門組半井七郎兵衛・分部源左衛門に付、兩人之口狀書九左衛門より翌日上之、兩人を公事場江九左衛門召連罷出吟味有之處、源左衛門儀泊番之刻、蠟燭を燈し投入候。將又御定書焦し候儀も、御厩之鍵紛失之儀も、皆源左衛門所爲之旨白狀。因之手鎖禁牢、一類共遠

廿九日は二月晦日

四月とするもの前書と異なり

空穗は靫

慮、弟丹次郎一類ハ御預、七郎兵衛ハ無御構候。同月廿一日源左衛門儀、於公事場縄掛ニ而刎首被仰付。其節丹次郎ハ、兄之罪弟ハ御懸之儀無之候得共、源左衛門重罪至極ニ付、永ク一類ハ御預之旨申渡有之。但源左衛門領二百石也。

〔菅家見聞集〕

一、四月朔日御馬廻組(原九左衛門組也)分部源左衛門二百石(初筆之助と云)橋爪御番所御廐に火を付る。此間様子無心元品有之、相番共より頭迄断に及。其上前夜之泊番之相番薗田傳藏よりも及断、源左衛門所為なりと。様子無心元儀共有之に付、於公事場段々御吟味之上、白状無相違によりて、禁牢之上刎首に被仰付。弟一類中ハ御預。此間源左衛門おのれが宅の屋根へも、火は無之つこにいたし、火付のなげ候仕形いたし、則其身見付候様子に申候而、頭原九左衛門方へ致持參為見申候由。品々か様に人の不審がり申事、面白存候様子に候。公事場にて御吟味之時分は、御小將横目永原彌平太も罷出申候。為・躰口上其外少も亂心之躰には見不申、心底惣而仕形、何茂あらはれたる亂心よりは品重き事共に候。橋爪御番所にかざり有之空穗の内、弓がけなども取出し、いつの間に哉覧すんくに切捨置、又は落書なども仕置候。落書の内には頭の噂あしく書、又は金澤中やきまくり可申などゝ申文言も有之由。其間々には字のわけも見え不申、べろくと書と申ごとく如此之書様(略)、兒共の書ける様成處も多く有之候。落書

弓がけなども、御城代前田美作守一々見屆、入御覽被申候。

二之御丸檜垣之間より瀧之間へ參候御緣頰にて、伊藤平太夫取次、落書・弓がけ之樣子も致一覽候。

源左衞門は少學文も有之、平生は人品も不惡樣に致風聞候。乍風あやしき事共仕候而、人々不審がり申儀面白き心に罷成、其より以來わけもなき事共仕候由、橋爪御門之鍵などもねぢりて、御門番之足輕あけにくがり申事なども有之候由。能時分に相知申候、亂心至極、いか程成儀仕出し可申も知不申事と申慣候。御城に火を付申候儀、希代之罪人と申慣す。

三月八日。前田綱紀他國に派遣する諸士の、出發前その勤番を缺くことなからしむ。

〔菅綱記〕

一、八日諸組頭へ御家老を以被命は、前々以來他國に被遣候者共、發出前勤番等爲引候旨達御聽候。御近習之ものなど御發駕の日迄相勤、又御着城の日より相勤候。表向之樣子不宜候。此以後何れの組にて茂觸事共儀出候はゞ、必至与御咎可有之旨也。先是御小將組は歸着之後十日、御馬廻等は二十日休日有之候。此度之命に付、御徒組等迄茂休日といふことなし。

三月十一日。前田綱紀家老前田修理等を遣して去年大聖寺藩動搖の善後

三月なり

觸事云々本のまゝ

策を講ぜしむ。

正德三年八月二十日の條參照

〔政隣記〕

三月十一日御家老前田修理・公事場奉行伊藤平右衛門・御歩頭青地彌四郎都合三人、備後守様御願に付大聖寺江可被遣旨被仰出、御横目里見孫太夫被加之。御用之品不詳、去年以來上中騷動は、畢竟貧困より起候事に付、此糺斷与云々。

廿五日於御前、修理江黄金三枚・御羽織二、平右衛門・彌四郎江白銀廿枚・御羽織一宛被下之、廿六日孫太夫江白銀五枚・單袴二具被下之。同日四人發出、修理等三人之於宿、從備後守様以御使者大儀之段被仰含。附、修理五月廿一日歸。

四月十五日。前田綱紀養女壽姫金澤を發して京都に上り次いで西三條公福に嫁す。

〔政隣記〕

四月十五日壽姫様御發輿、其儀都而正德二年榮君様御發輿之節之如し。御先江御家老本多圖書幷山本源右衛門罷越。御供人持組奥村織部・成瀨内匠、御馬廻頭佐々木佐兵衛、御歩頭奥村助三郎、足輕頭茨木左太夫・永井七郎右衛門、御横目茨木貞右衛門、御小將四人、御馬廻六

人、組外七人、與力十八人、御歩八人。但廿一日於越智川驛御外醫堀以悅亂心自殺。
廿二日京都御着、三條様御本家轉法輪左大臣殿御猶子に被成、君號を被進、被稱壽君様与、
廿七日夕三條ゟ様御入輿御婚禮。
附、御弘并御供人歸着一件等も、都而榮君様之刻御同例故留略す。

六月二日。出銀奉行岸村豐太夫公金を費消したるを以て自殺す。

〔政隣記〕
六月二日御馬廻組出銀奉行三百石津田兵庫組岸村豐太夫自殺、御横目茨木覺左衛門・永原彌平太罷越見屆之。此事は同役御馬廻組三百石安宅甚右衛門、去年十月以來病氣に付役儀御斷申上度旨、去月頭迄相願候處、豐太夫承之、安宅方ゟ參、御預之銀高不足有之候、是を不相濟内は役儀斷難成可有之旨申聞候に付、安宅難心得、何程計之事に候哉与相尋候處、二十貫計与申候に付、過分之事に付償候事は難成旨申入。其後嫡子并安宅四郎右衛門兩人を以、豐太夫方へ指遣、銀高等彌承合、右之趣共書付に認之、頭齋藤中務ゟ令持參、役方之儀に付言上之紙面に候間、御上可被成候、且又役儀御斷之紙面は引之候旨申達候。然處昨朔日、岸村より内々之銀子は如何仕候哉与申越候に付、先日より申入候通、兎角下に而難埒明事与覺悟仕候條、いか様共勝手次第に可仕旨及返答候處、今朝致自殺候。引負之銀高三拾一貫目、内

十六貫目は金分・高座祠堂銀預り之内也。（金分高座は能登珠洲郡三崎權現の南社なり）四日於公事場、安宅手前御吟味頭中務、并寺西十左衛門誘引之、岸村家來男女暨實弟町醫鈴鹿春昌等御吟味有之。豐太夫子五歳に相成候を一類に御預、春昌も同斷。九日御吟味之節春昌及白状候は、豐太夫一人之引負に而、春昌も相加り候而、銀子は博奕に遣捨候段申上。依之春昌禁牢。廿一日豐太夫子於公事場刎首、春昌斬罪、家財闕所、一類遠慮。同日安宅甚左衛門に被仰渡左之通。

私曲無之段御聞屆被遊、御銀不足仕候段承候者、氣色押罷出、早速相改可申處、無其儀不念仕合に付、役儀御取上、遠慮被仰付候。

六月十六日。前田吉德夫人袖留の儀を行ふ。

〔政隣記〕

六月十六日松姫君樣御鬢削（俗に云袖留之事）に付御祝有之。依之御兩殿樣に上使本多權左衛門殿を以、二種一荷宛御拜領、御作法如御例。吉治公御登城、御下り以前に付、上意前田近江守拜聽。（御拜領は將軍よりなり）

一位尼公等よりも御使・御拜受物有之。

〔德川實紀〕

六月十六日嘉定の慶會例の如し。けふ松姫の御方ふかそぎの御いはひあるにより、秋元但馬守喬知御使して、紗綾五十卷・二種一荷・行器五荷、天英院殿より眉箱・縮緬三十卷・銀五十枚・

行器五荷・三種二荷、瑞春院御かたよりは紗綾十卷・一種一荷、竹姫君・法心・蓮淨・壽光の三尼より、各一種一荷なり。同じことにより、松平綱紀には二種、天英院殿よりもおなじ。瑞春院の御方をはじめ方々より各一種。松平若狹守吉德には時のふく十・二種一荷。天英院殿よりは時服三・一種一荷、瑞春院の御方其他の方々は各一種なり。松姫の御方・加賀守綱紀・若狹守吉德よりも献物あり。後閤の方々にもさゝげ物いと數多し。

六月廿一日。德川家繼使者をして前田綱紀及び吉德の暑候を問はしむ。

〔德川實紀〕

六月廿一日、日光兩法親王および三家の方々・松平若狹守吉德に御使して暑候をとはせたまひ、物おくらせらる。松平加賀守綱紀には、驛使もて御尋問あり。

七月二日。江戶にて諸士の使役する家來の取扱に關する心得を諭す。

〔典制彙纂〕

覺

一、在江戶之面々召仕候家來致欠落候者、請人捕出之、又者其身立歸候族、禁籠之上御宥免被成候得者、借銀・貫懸等不及沙汰由候。向後者禁籠御宥免候はゞ、借銀等可及其沙汰候事。

一、御門外ゟ罷出候者儀に煩出、又者無據儀に而暮六時過候而御門ゟ入候はゞ、其品御門ゟ

相達入可申候。左候はゞ主人委細承屆、頭・支配等に及斷可受指圖候。其內者先締等に及申間敷事。

一、御門外に罷出候家來、用事之品主人承屆可差遣候。勿論大酒等仕、又者見物所などへ罷越、時節を取うしなひ不申樣、急度可申付置候事。

一、家來大勢召仕候而も欠落人無之、少身に而茂度々家來欠落仕人々有之候。これは主人より締等之申付候樣不宜故に而茂候哉。又者何こそ召仕樣不宜筋も有之故にも候哉、其段は主人々々了簡可有之儀に候事。

一、御貸小屋に而下々草履・わらじ等賣申外は、食物之類賣不申等に候處、其段猥に有之由候。食物之類賣申下々有之候はゞ、其主人も不調法に可罷成候間、嚴重に可申付事。

一、夜中者主人々々御貸小屋之外へ者、家來出申間敷候。若無據儀に而罷出候はゞ、其品主人承屆可指遣候。他所之者參り懸り有之候共、及暮候はゞ相返し可申事。

一、博奕之儀は前々より堅御停止之事に候。自然下々之內博奕等仕者有之候者、其主人越度可罷成候間、兼而其趣を存可申付事。

右之通被得其意、自分之儀は不及申、組・支配等に嚴重可被申渡候、以上。

甲午七月二日

七月十日。加賀藩の士伊藤平右衞門等大聖寺藩家中動搖の善後策を講じてこの日金澤に歸る。

〔政隣記〕

六月四日青地彌四郎大聖寺より被召呼、翌廿五日御馬廻頭に被仰付、又大聖寺に被遣、奉願名改藏人に。七月十日伊藤平右衞門・青地藏人・里見孫太夫、大聖寺より歸着。翌十一日青地兼役被命。

兼役とは馬廻頭青地藏人も御簡略方御用を命ぜられたるをいふ。

大聖寺諸士令納得候趣、近年諸士中より被借置候知行、去年之分不殘御返、今年は簡略之始に付半分御返、來年より全御返。且諸士に御貸置之銀子は年賦を以無利足に返納、江戶御扶持方は增被下。神谷外記は永く金澤に被留置、逼塞被仰付置候處、七月十九日逼塞御免之旨、於越後邸年寄中等列座、御月番被仰渡。其節永く被留置候御樣子与被申聞。

神谷外記は當時內膳なり

七月十八日。前田綱紀金澤を發して江戶に向ふ。

〔御年表〕

七月十八日金澤御發駕、坂本の驛にて御老中秋元但馬守殿重病の旨聞召れ、御使者御大小將山崎九郎右衞門を遣さる。但馬守殿より白銀三枚九郎右衞門に賜ふ。廿九日御着府、晦日上使阿部豐後守殿參出。

八月十一日。前田綱紀登營して參覲の禮を行ふ。

〔御年表〕

八月十一日御登城、奥村内記温良・成瀬内藏助當隆御供にて御目見。

〔德川實紀〕

八月十一日臨時の朝會あり。松平加賀守綱紀始め、參覲の拜謁するもの十人。

十月二十日。富山侯前田利興の江戶邸長屋類燒す。

〔政隣記〕

十月廿日酉刻過、水戶樣御下屋敷より出火、茅町より湯嶋天神女坂迄類燒。備後守樣御邸火之粉參候に付、御人數を以防之。相公樣も御中邸より御出馬、御上邸に被爲入、吉治公も御出馬御下知。長門守樣御長屋へも火移、二之手・三之手御人數被遣、御兩殿樣御見舞。御長屋三筋燒失、四時過鎭火。于時長門守樣に而、外に道無之、御書院之內を御馬來通候處、不宜致樣之旨追而被仰出有之。翌廿一日被仰出。

夜前備後守樣御居邸前、火消之面々乘馬乘付置候儀、不宜被思召候。馬は廣みに指置、道狹き所には頭々步に而罷越、御人數を屋根へ揚可申儀に候。年寄中抔は格別、頭々は左樣に可心得旨被仰出。

備後守は前田利章

御兩殿樣は前田綱紀及び吉德

長門守は前田利興

十月廿一日。江戶邸に於いて三笠附をなし、酒食を賣り又は質物を取る

上覽は將軍

を禁ず。

〔政隣記〕

十月廿一日於江戸、奥村内記殿より御横目中に被申渡、夫より諸頭に申談之趣、左之通。

頃日御屋敷中下々、三笠附と申而博奕同事賭致勝負候由、不屆之仕合候。且又下々酒食を商賣、質物をも取候躰、不縮之樣子に候。主人々々等閑致置、右等之不屆於露顯は、主人も可爲不念候間、自今相止候樣嚴重可被申渡候事。

十二月二日。琉球人來るを以て前田吉德江戸城に登る。

〔政隣記〕

十二月二日琉球人登城、吉治公御登城都而前々之通に付略之。

但、四日增上寺參詣、九日上野參詣、其節姫君樣御覽に付、南御門前に廻通行、御家中見物も同日被仰付に付、何も天澤寺与御長屋之間道に出見物。上覽所は南御門御修覆續之御長屋切拔出來、御兩殿樣にも御出御覽。從公儀御歩目付・御小人目付來警固有之。御長屋よりも御歩布上下着罷出警固す。

上覽所葵御紋紫御幕張之。近藤登之助殿屋敷には窓蓋懸之。尤人留也。

廿一日江戸發出。

十二月十一日。徳川家繼使者を以て前田綱紀及び吉德の寒中の安を問はしむ。

〔徳川實紀〕

十二月十一日、寒中により日光准后公辨法親王・新宮公寛法親王・水戸中納言綱條卿・紀伊中納言吉宗卿・尾張宰相繼友卿・增上寺大僧正詮察・松平加賀守綱紀・その子若狹守吉德に物たまはり、御尋問の御使あり。

十二月十六日。米價下直なるを以て會所銀を借用する諸士の返濟期限を緩にするを許す。

〔政隣記〕

十二月十六日米下直に相成、何茂知行米拂兼。依之會所銀借用人之內、難儀人有之に付、年寄中示談之上、諸組共及難儀候人々は、頭より御月番迄可申達候。來三月中迄御貸延有之樣、會所奉行へ御月番美作守殿今日被申渡。

十二月廿九日。兒島平兵衛を祿して加賀藩の儒者たらしむ。

〔政隣記〕

十二月廿九日於江戸左之通被召出、木下平三郎殿依願也。

新知二百石被下之、御儒者に兒嶋平兵衛被仰付候段、於御小書院年寄中列座、奥村内記殿被申渡。誘引前田權佐。卽日於御小書院御目見被仰付。

正德五年

正月十二日。越中境奉行に命じて支配所內の百姓にして長く領外に留まるものを調査召還せしむ。

御領國より江戸へ日用等に而罷越候者、居留り有之候哉、御屋敷邊にも御國之者、日用躰之所作仕罷在者大勢在之樣に相聞候。近年京都などにも同事候由に候旨、江戸より申來候。御領國之者他國に永く居留り候儀者不罷成段、先年も相觸、各承知之事に候。日用などに罷越候者、當分と申立、江戸幷京都一日過など仕罷在者無之候哉、支配所急度被遂吟味、若永く逗留仕在之族候はゞ、書記可被差越候。爲其申達候、以上。

正月十二日　　　　奥村伊豫守　判

横山七郎太夫殿

横山七郎太夫は越中新川郡境奉行なり

正月廿四日。加賀藩の專賣する食鹽の代價を引上げしむ。

〔筒井舊記〕

追而十村より直渡鹽之儀者、口錢無之筈に候間、十二匁宛取立申樣に可被申渡候、已上。

御領國所々御拂鹽、只今迄は六匁八分宛に候處、他國他領鹽直段聞合候得共、過分に高直に付、僉議言上之上、自今以後一俵十二匁二分宛に相極候條、問屋共に被申渡、右之通代銀取立候樣に、是又可被申渡候。尤十二匁二分之内に而、二分口錢引可申候、以上。

未正月廿四日　　御算用場

澤田十郎兵衞殿

山森多仲殿

正月晦日。江戸中荷持及び三度飛脚以外。別に金澤の町人木屋八兵衞等をして飛脚業を開始せしむべきことを稟請す。

是月は大盡なり

〔温故集錄〕

御當地より江戸往來之荷物幷書狀等、只今迄之中荷持・三度飛脚之者共通取次仕儀、於當町入札に申付候樣に被仰渡候に付、其段申渡入札爲取集候處、小立野土取場木屋平兵衞・同所

中屋吉兵衛・古道町黒坂屋三郎兵衛、此者共連名之入札下直段に而御座候。則只今迄相勤候中荷持・三度飛脚賃錢と見合候處、第一荷物賃銀之分、右入札下直に御座候間、彌此者共相勤候樣に可申渡候哉、左候はゞ一ヶ月六度宛出日相極、只今迄中荷持等勤方之通、諸事相勤候樣に可申付候。右入札圖り目録に、只今迄之直段与高下之品、夫々附札に爲記、且又重而彼者共ゟ申付候書付共に二通、懸御目申候。

一、只今迄は中荷持・三度飛脚兩所に而相勤候へ共、一ヶ所ゟ集勤申候へば、入用銀も減少仕候間、此分を以賃銀之内爲減候處、別紙之通に御座候。右夫々賃銀減之品、且又今般入札直段与高下之趣、兩樣付札に爲記懸御目申候。右之通減候而も、荷物等之賃銀は、入札直段より高直に御座候。乍然今般入札之者共儀、勿論以來麁抹之儀無之樣に精誠申付候得共、賃銀下直に御座候故、末々取續申儀難計奉存候間、入札之通被仰付候共、只今迄相勤候中荷持・三度飛脚も、一ヶ所に而毎月三度充出日爲相極、暫爲務置申度奉存候。尤荷物等之儀は、兩所之内人々勝手次第に相極申儀に御座候。右之趣に御座候間、御僉議被成、仰渡候樣に仕度奉存候、以上。

正月晦日

前田兵右衛門

津田織部

年寄中連名宛

保科とあるは會津侯保科正經

二月八日。前田利常の女熊姫逝去す。

〔御年表〕

正德五年二月八日仙溪院殿御卒去。利常公第八御女、武州にて御出生、生母寺尾由甫女、保科　御室也。

三月二日。能登より加賀及び越中に廻漕する鹽の運賃を増額下附することを命ず。

〔筒井舊記〕

覺

一、能州奥郡より越中高岡江廻鹽運賃銀、只今迄一俵に付五分宛、今般五分相増、一匁宛申付候。

一、同所より越中所々廻鹽運賃銀、唯今迄一俵に付四分宛、今般三分相増、七分宛に申付候。

一、同所より加州江廻鹽運賃銀、只今迄一俵に付六分宛、今般六歩相増、一匁二分宛に申付候。

一、能州四郡より加州江廻鹽運賃銀、只今迄一俵に付三分五厘宛、今般二分五厘相増、六分

宛に申付候。
一、同鹿嶋郡之内より所口ゟ廻鹽運賃銀、只今迄一俵に付一分四厘宛、今般六厘相増、二分宛に申付候。
一、同郡黒崎村より越中氷見ゟ廻鹽運賃銀、只今迄一俵に付二分宛、今般一分相増、三分宛に申付候。
右能州より所々廻鹽運賃銀、僉議之上を以増運賃銀、右之通申付候條、夫々可被申渡候、以上。

正徳五年三月二日　　御算用場

丹羽權平殿

右紙面之通、奥・口兩郡より、加州・越中所々御廻鹽御運賃増銀之儀、能州御扶持人十村共願書附出し申に付、其段相達候處、詮議有之上、願之通今年より御運賃銀相増候。右増賃銀難申付品候へ共、近年諸色高直に而船持共及迷惑申段被聞屆、莫大之御運賃相増申儀に候。然上者前々格之通、其年之六月晦日を限、急度所御廻鹽積仕廻候樣に、夫々嚴重に可申渡之旨、御算用場より申來候。尤今般増御運賃大切之儀に候間、此段船持共ゟ爲申聞、向後御廻鹽無滯、急度右日限に爲積仕廻可申候、以上。

乙未三月六日　丹羽權平

仲間當所

三月十四日、越中境奉行に金澤木屋平兵衛等の自今江戸中荷持たるべきを告ぐ。

この中荷持の業を廢せしことは本年八月廿六日の條に在り

[國事雜鈔]

小立野土取場　木屋平兵衛

同所　中屋吉兵衛

古道町　黒坂屋三郎兵衛

御荷物幷御家中荷物等、御當地より江戸ゟ取次仕儀、當町中入札に申付爲相勤候樣に、御年寄衆被仰渡候に付、則入札爲仕、右三人之者共中荷物に爲相勤申筈に御座候。依之仲間之者共、向後江戸ゟ相越候砌は、右三人之内兩人證文を以、境御關所過書播者共より調差遣可申候間、左樣御心得可被成候、以上。

三月十四日　前田兵右衛門　判

津田織部　判

横山七郎太夫様

猶々唯今迄相勤候中荷物・三度飛脚茂、暫爲勤置申等に御座候。此儀者彌追而可申進候。夫迄は過書、唯今迄之趣に調可進候間、是又其御心得可被成候、以上。

三月廿二日。江戸中荷持の毎月差立期日を定む。

〔溫故集錄〕

二日　六日　十二日　十六日　廿二日　廿六日

右新規に申付候中荷持、毎月出日如此爲相極、今日より飛脚差出し申候。博勞町に而荷物相集申候。

九日　十九日　廿九日

右最前より相勤候中荷持・三度飛脚一所に仕、毎月出日此通爲相極、當廿九日より飛脚指出候樣に申渡候。只今迄中荷持共荷物相集候御門前町一ヶ所に而荷物爲集、三度飛脚寄所は爲相止申候、以上。

三月廿二日　　前田兵右衛門

津田織部

橫山監物殿

四月朔日。能大夫諸橋權進服忌なるを以て今明日恒例の觀音院の能を廢

す。

〔國事雜鈔〕

諸橋權進寶方之伯父、今月十三日病死仕候付、來月朔日・二日權進服御座候故、觀音能難相勤御座候。元祿七年二月浪吉故左平次伯父病死仕、四月朔日・二日左平次服に付、觀音能相止、拍子五番・狂言三番宛興行仕候。今年之儀も先例之通、朔日・二日共に拍子五番狂言三番充相勤可申与奉存候、以上。

三月十九日　前田兵右衛門

津田織部

横山監物様

〔政隣記〕

四月朔日・二日長谷觀音祭禮能毎年有之候得共、大夫諸橋權進服有之、今年は囃子狂言有之。

四月十三日。今日以後金澤城內權現堂に東照權現百回忌の法會を營む。

〔政隣記〕

四月十二日より十七日迄金澤權現堂におゐて、權現樣百年御忌御法會御執行有之。

四月十七日。東照權現百回忌に當るを以て前田吉德日光山に代參せしめ

自から上野の靈廟に詣づ。

〔政隣記〕

三月十一日、來月十七日於日光山、權現樣百回御忌御執行に付、諸大名より名代使者被指上等。依之吉治公御名代御使者、御附人持組前田權佐恒長に今日被仰付、副使聞番佐藤五郎左衞門直貞十五日被仰渡。相公樣は、二月八日微妙公御女松平筑前守正經君御室仙溪院樣御卒去、廿日之御忌被爲請、未御服中に付御名代御使者無之。

〔御年表〕

四月十二日發足、權佐に白銀十枚・八丈島織・柳條絹二端、五郎左衞門に白銀五枚被下之。

〔政隣記〕

四月十七日東照宮百回御忌に付、七日より十六日迄於日光山御法會、今日上野御宮に諸大名方御參拜、吉治公にも御束帶に而御輿御社參。御供布衣・素袍・白帳、御輿舁八德着用。相公樣御服中に付御參拜御斷。

四月十八日。前田綱紀及び吉德、德川家繼に謁して日光山の法會終れることを賀す。

〔徳川實紀〕

四月十八日、日光山の御法會はてしをもて、群臣出仕し宿老に謁し、三家の方々、松平加賀守綱紀・若狹守吉徳幷に溜詰は、御座所に出て拜謁す。

四月廿一日、日光山御法會事なく行はれしを以て、三家のかた〴〵・松平加賀守綱紀はおの〳〵三種二荷、十萬石より上の人々は二種一荷、一萬石より九萬九千石迄こ、十萬石以上の長子及び致仕は、各一種一荷奉る。

五月朔日。前田綱紀右大臣二條綱平を江戸の旅館に訪ふ。

〔政隣記〕

五月朔日二條綱平公御旅邸傳奏屋敷江、今日相公樣御長袴に而御見廻御對顏。御刀御玄關前に爲御持、上下御供三人迄は不入、物頭・聞番共三人に而宜与被仰出、武藤庄兵衛・富永數馬・湯原甚左衛門相勤。四日にも御見廻御半袴・上下、御供不被召連。

五日御登城、御下直に御勤、上下御供朔日之通三人。

五月六日。前田綱紀二條綱平を江戸邸に招請す。

〔政隣記〕

五月六日二條右大臣綱平公御招請、巳刻御出、戌刻過歸御。御相客油小路大納言殿、御出迎

御断に付御色代鏡板迄御迎。吉治公御白洲ゟ御出迎。先御大書院御上段に御着座、夫より御小書院ゟ御通、於御上段四方御熨斗、初献・二献・三献御規式。御兩殿様御盃御頂戴。右畢而重而御大書院ゟ御出御。能、白髭・忠度・松風・望月・邯鄲・融・亂。狂言、末廣・靭猿・こんくはい・大般若・福の神。御能之内御餅菓子・御吸物等名酒、且木地緣高御干菓子。御中入三汁十菜御料理、後段葛切・御吸物等。夜に入於御小書院、御湯漬二汁五菜。

今日頭以上并御給仕役・諸大夫衆、御廣間上之間に而御料理被下候。給仕御大小將も長袴、其外半上下。右府様御供數百三十七人御料理被下之。右府様ゟ御目見御盃被下候人々、前田修理・玉井勘解由・成瀬内藏助・前田權佐・藤田内藏允。御能以前於御小書院被下之。御湯漬相濟、大野木舍人・成瀬内匠且永井織部も、今日參着之儀被聞届、御盃被下之。其後一人宛被召出御目見、御意有之。青地藏人も御目見御意。其後修理等五人ゟ晒布三疋・十躰和歌一通宛被下之。於御廣間上之間、御目錄御供之北小路丹羽守渡之。大野木・成瀬二疋・一通宛。奥村内記煩罷出不申候得共、三疋・一通被下之。右丹波守・西村能登守ゟ、御兩殿様御盃被下之。

一、歸御之上、追付爲御禮御使者成瀬内藏助被遣、從吉治公前田權佐被遣之。今日二條様就御招請、從松姫君様相公様ゟ、三宅忠七郎殿を以御檜重一組・鯛一折被進。御目錄於御小書院前田修理取次、於御同所御直答。夜に入重而侍衆を以御使有之。

〔政隣記〕

七日從二條樣、昨日之爲御禮使者北小路丹波守參上。於御廣間上之間、御大小將御口上取次之。於御小書院御直答。此節從右府樣、前田左京・永井織部に晒布三疋・近江八景一通宛、御目錄を以被下之。丹波守相渡之。

同日右府樣御旅館に、昨日之爲御禮被爲入御對顏、暫御間有之御退出。聞番一人外、上下御供者不被召連。

十一日二條樣江戸御立御歸京。御附使者御小將頭村半藏。御見立御出可被遊處、今日御能御見物御登城に付、御使者前田修理被遣。吉治公も御登城に付、永井織部被遣。御泊金川驛迄、御大小將山崎九郎左衞門を以御進物被遣。

六月廿五日。德川家繼使者を以て前田綱紀及び吉德の暑中の安を訪ふ。

〔德川實紀〕

六月廿五日、暑中の御尋問ありて、三家幷に松平加賀守綱紀其子若狹守吉德に御使して檜重を賜ふ。

七月廿八日。前田綱紀及び大聖寺侯前田利章就封の暇を受く。

〔政隣記〕

御年表に六月に作るものは非

二品は時服羽織

御惱云々徳川家繼の事に係る

御扶持方とは諸士の在江戸手當なり

七月廿八日御歸國御暇之上使戸田山城守殿、朝六半時前御出。即日御登城之所、御不例に付御目見不被仰付。御黒書院御緣頰に而、御老中御列座、御懇之上意御申述、御馬二疋御拜領。隨駕之臣奧村内記・内瀨内藏助、如御例二品拜領。御下り御老中方等御勤。同日備後守樣御登城之處、御在所江之御暇如御例、御時服・御馬一疋御拜領。九月六日江戸御立也。

〔徳川實紀〕

七月廿八日、御惱は減じ給へども、御保護のため外殿に出まさず。出仕の人々、宿老に謁して退く。松平加賀守綱紀・松平備後守利章就封の御いとまを給ひ、ともに御馬を下さる。

八月廿二日。物價高直なるを以て江戸詰の諸士に歸國後扶持方を增給すべきを告ぐ。

〔改作雜集錄〕

乙未正徳五年、近年段々金銀の品下り、諸物の直日々に貴く罷成、別して在江戸の輩困窮に及び、足輕・小者までも金澤の俸祿を取寄るに到る。江戸御扶持百日の當り、一人四百日に滿候をも官禁有之、二百日に過ざるを以て法とす。依之諸士艱難甚し。八月廿二日玉井勘解由貞信を以仰出さるゝは、諸物高直、諸人勝手難儀せしめ候由御聞及成され候。今般御歸國御着翌日より、御扶持方百日分被渡下候旨被仰出候。一人に付大概二百日也。

八月廿六日。越中境奉行に江戸中荷持の廢業することを告ぐ。

〔國事雜抄〕

當夏より相勤候江戸へ御當地より之六度中荷持、銀本つかへ難相勤旨及斷候に付、御當地より江戸江之儀は、當廿六日迄相勤、江戸表より之儀は、御歸城御用之分相勤候樣申渡候。依之三度中荷持之者出日増、江戸・御當地共に、毎月六度充相勤候樣申渡候。此段御聞置候樣に與存、如此御座候、以上。

六度中荷持とは三月十四日の條に見えたるものなり

八月廿六日

津田織部　判

前田兵左衞門　煩

横山七郎太夫樣

九月四日。前田綱紀江戸を發して歸國の途に就く。

〔政隣記〕

九月四日江戸御發駕、十五日戌刻前御歸城等如御例。

但、翌十六日人持頭分登城御帳に付。翌日故、御供に而歸候人々も御帳に付候也。

〔政隣記〕

同夜御着城如前記。但御腰痛に付、奥之口より被爲入。此儀御道中被仰出、美作守奥之口に

同夜は九月十五日なり

而御目見、定番頭等裏御式臺前に出、其外如御例。御歸國御禮使寺西市正、亥刻發足。

一、今夜年寄中表御居間に被爲召、御目見被仰付。

九月七日。前田吉德、德川家繼の病癒えたるを賀して物を献る。

〔德川實紀〕

九月七日、御平癒を賀して、群臣出仕し老臣に謁す。よて三家の方々より二種一荷、松平若狹守吉德より一種一荷、溜詰より二種千疋、松平右近將監清武より一種五百疋献ず。

御平癒は德川家繼の事に係る

九月十六日。前田綱紀、德川家繼の病癒えたるを賀して物を献る。

〔德川實紀〕

九月十六日、御病癒たまふをもて、松平加賀守綱紀より二種一荷、松平肥後守正容より二種千疋を献ず。

九月十九日。大聖寺侯前田利章歸封の途金澤城に登る。

〔政隣記〕

九月十九日、備後守樣御道中二日御逗留、今日御旅宿に御着、御登城御作法如前々。翌廿日も御登城、同夜御發駕御歸邑。

十月四日。領國內の物價を低下せしむべきを諭す。

〔政隣記〕

十月四日年寄中より、御算用場奉行・町奉行幷所々奉行へ被相渡候覺書、左之通。

御領國中諸色近年段々高直に罷成候。此儀諸國共同事之躰に候得共、御領國之儀者、惣而右來米直段他國より下直に付、諸物も准之他國より下直に候處、近來諸物之樣子、結句諸國より高直に候。被召上候物之直段も同事に而大分之御費、御家中之者及難儀候。町方御郡裁許之面々之儀は、其所々町人・百姓潤候儀を心懸可有之儀は勿論之事に候得共、御領國に而出來之品、他國より來候諸物共、直段を引揚賣出、或は莫大之高利を取候儀も、其所之潤与迄相心得、御費等之考も無之、其分に仕置候躰与相聞候。向後急度詮議有之、諸色下直に成候樣御沙汰可有之候。

一、從前々他國へ出候儀成不申御制禁之品々も、何とそ有之候ても密々に遣候沙汰有之候。ケ樣之儀故、尚更其品々も次第に高直に罷成候。急度吟味可有之處、油斷成儀に候。左樣之族は御仕置被仰付、見懲に罷成候樣に可被仕候。且又御停止之品々は不及申に、其外諸物も先年よりは他國へ遣候方手廻宜候故多遣し、御領內に用候分致拂底候に付、自ら高直に成候躰に候。左候得者假令御制禁之品々に而無之候共、左樣之處僉議有之、過分に他國へ出不申樣に可被仕事。

一、所々奉行之家來、又は手先小役人、或十村・肝煎等、町人・百姓と馴合、私曲ヶ間敷儀共有之様子に候。依之買置等仕、或御停止之品々等他國ゟ洩候儀も、奉行人ゟ押隱、不屆成事共不相知躰に候。家來等之内、左樣之品脇より相知候者、其主人別而越度可罷成候條、隨分吟味可有之事。

一、右小役人等、其支配有之諸物不因何品、其者之手前ゟ賣候物者格別下直に仕、或直段相極候品者、夫々分量を多遣候由。既に木呂など、極仕候内にも善惡仕置、宜棚を以引棚と名付、支配方ゟ遣候樣に積置、不宜棚をば平賣に仕候者、先年より承及儀に候。都而商賣物、善惡に因て代銀高下有之候者格別、同直段に而ヶ樣之依怙贔負仕候段、畢竟賄賂之筋に候。不依之何等之品にても、皆以ヶ樣之趣に相聞候。然共可爲其役人者、其子細を乍存、其通買求候儀は決而有之間敷儀に候處、不屆至極之儀に候。其故外へ賣出物に右損料を掛、高直に仕躰に候。左樣之族於有之者、急度吟味有之尤に候。

一、近年町人・百姓等、言外華麗に罷成、萬事に付奢之儀共多、侍中ゟ對し候而も慮外之仕形候。ヶ樣之儀も、其分に仕置制止無之段、不念成儀に候。向後急度可被申付候、以上。

十月　日

十月十七日。金澤の魚問屋等藩侯所用の魚介を支障なからしむべく越

中・能登の諸浦に令せんことを請ふ。

〔國事雜抄〕

毎朝御用之御肴

一、鯛　一、こだひ　一、きす　一、すゞき
一、伊勢鯉　一、こち　一、ほうぐ　一、石首魚
一、かれい　一、あち　一、しもあち　一、たて貝
一、あか貝　一、蠑螺　一、あわび　一、安宅辛螺
一、かも　一、小鴨　一、しき　一、鹽いわし
一、鯡

右品々、毎朝奥御臺所并下之御臺所御膳肴板に書上申候處、此内不足仕候へば、御用手間迷惑奉存候間、越中・能州被爲仰付、御用之御肴手間不申様に奉願候、以上。

正德五年十月十七日　魚問屋　野々市屋八郎右衛門
同　沖津屋吉郎兵衛

町御奉行所

〔國事雜抄〕

先達而段々以紙面申達通、此日諸浦より御當地へ脊少く差越候內、越中之儀者取分必至与差越不申候。依之御當地脊拂底に罷成候。如何之子細に候哉、難心得儀候。各被申談、跡々之通指出候樣、早速可被及沙汰候。

一、越中諸浦より取上候脊、御當地ゟ差出候途中、駄賃・人足賃高直に付、商人共脊差越候儀仕兼申由に候。尤町人之荷物は駄賃御定無之、相對之儀候得共、諸色下直に罷成上は、右相對之駄賃・人足賃にても、只今迄之通過分取可申儀に而無之候間、ヶ樣之品も減候樣に各被申談、程能罷成候はゞ、脊御當地へ差越候儀、つかへ申間敷与存候條、早速僉議可在之候。

一、高岡に者問屋茂在之儀候間。急度被遂吟味、越中筋夫々御奉行中に示談有之、兎角無滯樣に早速可在支配候。此上に茂何こぞ無據子細在之、跡々之通指出品も候はゞ、委細紙面に被相調、町下代之內幷魚問屋肝煎等、ヶ樣之儀相曖候役人、早々當場迄可被指越候、以上。

十月廿二日　　　　御算用場

十月二十日。百姓の衣服器物を質素ならしむべきことを令す。

〔司農典〕

御郡方之者共衣類之儀、前々より御定有之、紬・木綿之外は御停止に候所、近年猥に相成、絹・羽二重等着用仕者共も有之躰に候。御扶持人幷十村等も、右兩樣之外着仕間敷筈之處に、

着用仕儀相考候處、皆濟御褒美被下候時分、會所に紬無之節はふし絹抔渡申儀も有之候に付、其儀にかこつけ、絹之類着用仕躰に候。此儀何も心得違に候。ヶ樣之儀旁、近年絹之類以之外高直に罷成候。第一御定に相背申儀に候間、向後十村・御扶持人を始、紬・木綿之外一圓着仕間敷候。唯今迄有來候衣類に而も、急度相改、右兩樣之外用申間敷候。右之儀も、晒抔一切無用之事。

一、妻子等之儀も右之通相心得、絹之類爲致着用間敷候。

一、縁組仕立等之儀も、近年百姓不相應之仕形有之由候間、此段も急度可申渡候。或は長持等めつき金具打申儀、其外諸事奢たる仕立不仕樣、末々可申渡候。十村・山廻等、猶以其通り相心得可申候。

一、手代・家來等迄勿論、木綿・布之外、帯等迄も絹之類用不申樣、急度可申渡候。

右之通向後嚴重に相守可申候。宿方に罷在候者に而も、百姓分之者は、右之通相心得可申候。是以後若し相背申者於有之に者、十村等に而も可爲越度候。此等之品前々より申渡筋に候得共、猥に成候故申達候事に候、以上。

乙未十月廿日　山森多宮

澤田十郎兵衛

佐藤仲左衛門
河合右平次
中村四兵衛
堀孫左衛門
今村源太夫
高畠權太夫
大塚彌五太夫
山東武左衛門 殿
菊田逸角 殿

能州御扶持人・十村中

本文は幕府の令なり

十月廿四日。三笠附を禁ずるの幕府の令を領内に傳ふ。

〔筒井舊記〕

近年諸國在々所々に而、みかさづけと申事はやり候由相聞候。博奕同事に候に付、御領・私領においても急度御制禁あるべく候。惣而何事によらず、如此之事相催候においては、其頭取並取持候者共からめ置、早速可有注進者也。

未九月

三笠附之儀に付、松平石見守殿に而開番に御渡被成候御書付之寫、別紙指越之候條、組・支配家來末々迄嚴重に被申渡、御請可上之候。且又組・支配之内裁許有之面々は、末々申渡、是又御請指出候樣に可被申渡候、已上。

乙未十月廿四日

前田美作守
奧村伊豫守

〔政隣記〕

十二月廿一日於金澤、三笠附一卷之者共、刎首被仰付。

十一月。諸士の放鷹によりて鶴及び白鳥を捕ふへからざるを告く。

〔御定書〕

御家中之面々鷹仕候時分、惣而鶴・白鳥之交居申鳥者翕不申筈に候。若提候而も、丸などにけ申間敷儀に候。此儀御定之中に而は無之候得共、前々より右御格に候條、猶更被得其意、鷹匠等にも兼而急度可被申付候。不圖心得違も可有之哉と、爲念如此に候、以上。

十一月

十二月十二日。扶持米を受くるものに賜はる屋敷の面積に關して答申す。

この御扶持方は何人扶持と稱する作祿を受くるものをいふ

〔袖裏雜記〕

御扶持方被下候者、屋鋪當り歩數之儀、御詩奉承知候。御扶持方被下候者、御屋鋪當り歩御定は無御座候。前々より御扶持方被下候人々、御屋敷願候得者、御算用場に申遣、知行に爲相圖、其圖り高之知行に應、御定之歩數被下候。

一、廿五人扶持

右於御算用場爲相圖候へ者、百石之由申越候。百石之當り歩高百七拾歩御定に而御座候、以上。

十二月十二日

山崎主税

津田政太夫

茨木左太夫

奥村内記樣

十二月十六日。前田綱紀神道者田中左源太及び儒者中泉逸角をして書を講ぜしむ。

〔政隣記〕

十二月十六日於御前、神道者三百石田中左源太式昭に神道大意、御儒者二百石中泉逸角に小學

稽古講釋被仰付。夜に入藤澤勾當平家被物語、田中等白銀十枚宛被下之。但桐之間に於て也。

十二月十八日。前田綱紀の家臣一人を叙爵すべき命を受く。

〔政隣記〕

十二月十八日吉治公爲御名代御登城之處、家來一人諸太夫被仰渡。早飛脚を以被仰上候處、廿九日來着。則本多木工御前に被召出、叙爵安房守被仰付。翌年二月十一日改周防守に、是松平安房守通温公に同きに依て也。同月十五日叙爵御禮等御作法、都而如先規。

本多木工政置

〔徳川實紀〕

十二月十八日、三家の家司等叙爵する者四人、松平若狹守吉德が家司一人も諸大夫をゆるさる。

吉德が家司とせるは誤なり

政置は當時安房守たり

〔享保年間記〕

正德六年正月、本多周防守殿叙爵に付江戸へ被參候。其時分供廻行列夥敷事に候。供日用計に百五十人、骨柄を選雇被申、兩挾箱にて紅の打緒付申候。其跡に惣日用頭出來右衛門と申者、長き刀を指、大紋純子の羽織に、島繻子の裁付、紅の胸紐にて致供候。惣供えいや聲を上て、やつこをふり申候。跡供に家老中川內丞羅紗の羽織着し致供候。其羽織金子十兩に出來致沙汰有之候。貴賤男女の見物夥敷事に候。然處淺野川橋近所より、周防守殿駕籠の內に

この月は大盡なり

伽羅を燒被申候、風流之由申慣候。見送り道中町端迄出居申人々も多由に候。頭分には村半藏・村田縫殿右衛門も出被申候由申慣候。江戶入の時分は、惣徒者不殘長き黑羽織を着せ、紅の丸ぐけの太き帶をいたさせ、其端を二尺餘むすび下げ、かけ聲にてやつこをふり候へば、皆々目を付候由、江戶よりも申來候由之事。

十二月廿三日。德川家繼使者を以て前田綱紀及び吉德の寒中の安を訪はしむ。

〔德川實紀〕

十二月廿三日、三家並に松平若狹守吉德に寒中をとはせ給ひ、檜重たまふ。日光門跡公寬法親王・大明院公辨法親王・增上寺大僧正詮察にもおなじ。井伊右衛門督直興に砂糖漬、小笠原長重入道峰雲に檜重賜はり、松平加賀守綱紀に奉書もてとはせ賜ふ。

十二月晦日。元大聖寺藩家老神谷內膳隱居を命ぜられ子太郎助加賀藩に仕へて寄合組に加へらる。

〔政隣記〕

十二月晦日神谷內膳願之通隱居仰付儀等、左之通於御大廣間御月番奧村內記殿被申渡、せが

神谷内膳の諱は守行とせるは守應なるべし

れ太郎助儀、春に至候而大正持より呼越候樣被仰出候旨も被申渡。

隱居知五百石　神谷内膳　附記守行

備後守樣御家老

大正寺より被召寄置候處、此度御家に被召返、領知千五百石之内五百石被下、隱居仰付。

家督千石　神谷太郎助　附記守周

寄合組に被加之。一本、人持組外ヶ有、非なるべし。

享保元年

是月は小盡なり

正月晦日。犯罪者逮捕に關する從來の手續を改むることを命ず。

〔國事雜抄〕

盜賊改方賊等引揚事

盜賊改方之儀に付、跡々より御家中、又者寺社方・町方・御郡方共に、賊又は疑敷者引寄候刻、夫々頭々支配裁許之人々に申遣引寄來り候處、緩々に罷成申故、可引寄者先達而承付申候哉、申遣候内、儘欠落行衛相知不申儀毎度御座候に付、向後引寄申者之儀は、私方より直に其主人等に申遣引寄候樣に仕候はゞ、早速引寄申樣に可罷成候。且又屋敷守又者長屋等にたより

罷在候者も、直に引寄申儀承候者、立寄がたき儀茂可有之様に奉存候。御郡方之儀、首尾により直に引寄申儀も可有御座候。又者只今迄之通御奉行ゟ可申遣候間、直に引寄申儀夫々申渡置候様に、頭々ゟ被仰渡候様に仕度奉存候、以上。

正月十三日　　岡田助右衞門

右之通御用番近江守殿被仰渡旨、御横目中被申渡候間、各可被得其意候、以上。

正月廿九日　　津田織部判

前田兵右衞門　不在合

正月晦日。今年金澤大雪なるを以て乘物を用ふるを許す。

〔政隣記〕

正月廿九日、今年深雪、其上二月閏月も有之に付、來月乘物御免。

二月十八日。商品の價格を廉ならしめ其在荷を潤澤にすべきを令す。

〔菅綱記〕

二月十八日執政官、下改作奉行及遠所之町奉行郡奉行等文書、如左。

一、諸物下直に令賣買候樣に、夫々支配中急度申付樣に、去冬紙面を以一統申渡候處、且而其驗無之、結句其後肴等彌々御當地ゟ不差越、彌他國ゟ遣之、且又漁獵を指止候者茂有之、

此の文書を政隣記に寶永六年（月日不詳）に載するは誤なるべし

就中諸物之内、去冬迄之直段吟味之上、少々引下、春に至候而も其直段之通に而商賣之物茂有之候得共、善悪有之物者、中を上と成、下を中こ名付、或は、酒・酢・醤油・油等之類は手立仕、多分は難用躰に仕成候旨、去冬以來糺合沙汰候。頃日に至候而者、彌其仕形相違無之様子に候。左候得者、奉行人等吟味之上何程直段引下候与申候而茂、右之通其品を悪敷仕候而者何詮茂無之、却而最前より劣申儀に候。其意附茂無之段、重々不念至極之儀に候。早速遂吟味、其内不届之族は縮をも可申付事に候。乍然若何こぞ無據趣候はゞ、其子細御算用場奉行へ相達令僉議、何分に茂手落無之様に裁許可仕儀に候事。

一、油等を始、仕入銀高掃候所は、只今迄仕來商賣を指止、外之商賣仕者有之由に候。然時は彌其品少に罷成、手閊申儀に候故、急度承届、是又無據子細等之族有之候はゞ、別人申付候歟、兎角不經奉行所而、猥に商賣替不申様に可仕儀に候事。

一、肴等に不限、惣而商賣厚利を爲可取、買手向候而茂無之旨に而、一通之者へは不賣渡、向寄を以隱賣仕、右直段は過分高利之由に候。ヶ様之儀茂、奉行人等不承儀は無之筈に候處、其分に致置候儀難心得候。若又不承候得者、油斷之仕合候事。

一、諸物之内、前々より他國に出候儀、御制禁の品々は不及申候得共、向後猶更少茂相洩不申様に堅可申付候。其内肴之儀は、能州奥郡・新川郡之儀は、御當地に程遠故歟、前々より他

外之浦々者は外之魚者なるべし

國ゟ指遣之肴之口錢、大魚之外は御免に付、外之浦々者多出候得共、先年者鰤・鱈等茂過分に御當地ゟ指出、末々迄つかへ不申候處、近年者他國者迄ゟ賣渡、又は海上におゐて商賣仕、御當地ゟは御用之分さへ調兼候樣仕成、其外生魚之類茂、御當地ゟは直段過分に高直に無之候はねばひしと指出不申、手間候樣に仕候段、不屆成儀、第一奉行人不裁許之至に候。尤其所勝手には宜敷有之候得共、此分に而者御國用不足、沙汰之限り成儀に候。向後高利を取候儀指止、相應之利潤を以、捕上候諸魚之內三の二は當地ゟ差上、三の一は勝手次第他國ゟ可出之候。然者其聞り奉行人委細承屆、御算用場奉行ゟ茂相達候上、彌以捕上候諸魚之內、御當地ゟ向可申分不殘指上させ、鮪などの類御當地ゟ向不申分は、吟味之上他國ゟ爲出可申候。乍然頃日茂、獵師共御當地ゟ向候肴之分者網をもおろし不申、他國ゟ指出候雜魚之分迄、捕上候樣に仕候段相聞え候。ケ樣之儀奉行人其分に仕置候儀、不念之仕合に候事。

但、漁獵迄に而外產業無之所々之儀、其年之樣子により勝手及難澁候者茂可有之候哉、左樣之節御救之儀如何樣に茂可被仰付候。雖然先年鰤・鱈を始、御當地ゟ過分差出候節茂、浦方差而困窮之沙汰無之候。左候得者先規ゟ立歸候とて、今更仕樣は無之事に候。ケ樣之所下々申旨に任せ、無故御救相願候はゞ、奉行人可爲不覺悟事。

一、藥種・蠟等を始、去冬より直段下直に罷成候諸物、何方に隱置候哉、段々拂底仕來、指間

制詞は制止なるべし

させ申候。ヶ樣之儀は、兼而奉行人料簡加候はゞ、如何樣に茂締可成儀に候處、油斷故右之族成行申儀に候。畢竟諸色爲間、おのづから直段上り申候時分可賣出手立、無紛相見ゑ申候間、嚴重遂吟味、左樣之族候はゞ、急度曲事に申付、以來相締候樣に心懸可申事。

右之品々皆以不恐公儀仕形、不届至極之儀に候。其以來御算用場奉行、於彼場夫々奉行再應及僉議旨に候得共、得心無之故に候哉、追日指關候。先達而茂申渡候通、諸物高直令賣買、他國ゑ出候儀、其所潤色とも迄相心得、御國用不足之段料簡無之候。奉行人手前潔白成時者、萬端申渡候筋、末々迄聊違背無之筈候得共、或下役人等依怙賄賂之筋を以、處之者与馴合、僉議之趣怠仕、又は柔弱之族も有之指扣候故、支配者仕度儘之樣に罷成躰に候。畢竟奉行人中正鋪時者、强而不加制詞候共、可相締儀は勿論に候。惣じて奉行人としては、其身廉直を以所之風俗をも相改、末々迄專正路に候樣に仕成儀第一に候。正路成時者、諸物運送無滯、直段等迄茂有躰之通可罷成候。且又所々奉行、其支配所迄とも不相意得、互に申談、一統差閊不申候樣に可心懸所、其所々下役人等申旨に任せ、他之支配より相談に及候儀茂等閑に仕、其上私之意地を立、御用閊申樣成族も有之躰に候。其段別而奉行人々無疎略申談、何方茂宜鋪相調候樣に可申付候。此上に茂於相滯者、奉行等之手前急度御僉議可有之候條、可得其意候、以上。

豐姫は前田綱紀の女、藩臣前田孝資の室

三月十五日。前田綱紀その女豐姫を訪ふ。

〔御年表〕

三月十五日前田大炊孝資廣鋪へ御成。豐姫君より御迎として近藤傳兵衛差上らる。御相伴は備後守殿幷に長又三郎也。美作守・大炊門前へ御迎に罷出る。豐姫君へ綿百把・卷物三十端・御肴代千疋・公家衆繪讃三幅・御文臺・御硯・御香爐・手鑑を進ぜらる。美作守に卷物十端・歌書、大炊へ卷物十端・綿三十把・定家俊成家隆三筆の三幅對、前田左門・前田將監・前田求馬に各卷物三端被下之。暮過御歸城。定番頭成瀨内匠・脇田七兵衛、御表小將御番頭伊藤平太夫並表小將中御醫師南保玄隆・坂井順元・久保壽齋廣敷に相詰る。

四月十四日。金澤の刀鍛冶等藩有山林の下伐を許されんことを請ふ。

〔國事雜鈔〕

私共儀、去年も度々御歎申上通、人々困窮仕、其上御公儀樣幷御家中樣御細工ひしと不被爲仰付、彌及渴命、此間退轉仕、迷惑至極奉存候に付御歎申上候。就夫河北郡菱池村・田屋村・小竹村・北袋村・上山村・一ノ瀨村六ヶ所御林下苅之儀、今年に而十ヶ年餘に及申候間、先年之通三ヶ年之年季に而、御運上銀之儀も跡々之通無滯指上可申候間、爲御救御慈悲を以下苅私共に被爲仰付被下候樣、御算用場に被爲仰遣被下候者、難有忝可奉存候、以上。

正德六年四月十四日

國　平
家　忠
包　廣
光　平
幸　昌
勝　家
國　重
家　廣

町御奉行所

四月十六日、金澤城内にある東照宮の社僧等その祭儀に關して答申す。

〔桑華字苑〕

問者は前田綱紀

一、正德丙申四月十七日依社參の事、問近侍當日之法會、不知之。或云大般若經護摩修行歟。

又往年祇候御祭禮之歩儀日仁岸氏、亦云大般若轉讀。仍て使寺院の奉行を訪之神護寺之役僧。

其答書に云。

明十七日於御宮、何れの御經有之候哉、何時相濟可申候哉、且又何時より御參詣につかへ申儀

無之候哉、御尋之趣奉得其意候。明十七日御法會者法華懺法に而御座候。例年朝六時分に始、五時迄之內に相濟申候。且又御法會相濟、御神前掃除等仕候得者、五半時過迄かゝり申候、以上。

四月十六日　出雲寺

最勝寺

菊池大學様

一、每歲四月御祭禮之節、於御宮修行之品々、且又每月十七日に茂修行有之趣重而問之。其答書云。

一、每歲四月御宮御祭禮之節、法華懺法相勤申候。外何之品茂無御座候。

一、每月十七日には法華懺法讀誦仕候。

一、正・五・九月十七日大般若轉讀仕候。

一、每月十七日三品立御膳幷神酒備申候。

一、每日御供幷勤行仕候。

一、於御本地堂長日護摩供修行仕候。

右之通御座候、以上。

四月十八日　安住寺印

最勝寺印
出雲寺印

菊池大學殿

五月朔日、前田吉徳登營して徳川家繼の昨日薨去したることを告げらる。

［政隣記］

四月晦日阿部豐後守殿より聞番呼に來、湯原甚右衞門參出候處、將軍家繼公少々御不例、爲伺御機嫌明朔日惣出仕に候間、御登城之儀被仰渡。右に付未中刻御三家急に御登城。紀伊中納言吉宗卿には、一位尼公より御後見御賴に付、今日より二之御丸へ御入城。右等之趣金澤へ早飛脚御書を以被仰遣、割場足輕三人出足。翌五月朔日辰中刻御登城之所、御馬上御早乘に而御歸館。押付御居間書院に而、本多圖書・前田權佐・藤田內藏允・永井織部被爲召、上樣御病御指重、昨晦日夕薨御。文昭院樣依御遺言、紀伊中納言樣御相續、紀州家は松平左京大夫殿御相續被仰出候旨等、今日御城之御樣子被仰聞、御屋敷中高聲等之儀小屋觸有之。右之儀先早飛脚、且御大小將水越新次郎吉治公附也早打御使に而、金澤へ被仰上。右に付未中刻頃御出、御老中方・御側御用人・養仙院樣御勤。御步以上御先例之通月代剃不申樣本多圖書被申渡、夫々申談。同日久世大和守殿へ聞番被召呼、金澤へ之宿繼御奉書御渡、如例認發出。

附、公方家繼公御歲八、御法號有章院樣与云々。

五月二日。德川吉宗を上樣と稱すべきを告げらる。

〔政隣記〕

五月二日紀伊中納言樣御儀、今日より上樣与申由御廻狀到來。今日二御丸ゟ惣出仕、吉治公御登城。今日久世殿に而金澤ゟ之御奉書御渡如前。三日も二御丸ゟ惣出仕に付、吉治公御登城。四日も萬石以上惣出仕、吉治公御登城。

五月四日。德川家繼薨去の報金澤に達す。

〔政隣記〕

五月四日亥刻金澤ゟ御老中方御連名之宿繼奉書到來。上樣四月晦日御病指重、就夫文昭院樣御遺言有之、先紀州樣爲御後見、晦日二御丸ゟ被爲入候。右之趣尾張殿・水戶殿ゟも相達候に付、申達候由之文書也。同夜子下刻吉治公より之早打御使水越新次郞參着、追付御居間ゟ被爲召、御口上被聞召、御愍之御意有之。十九日御返答有之發出。道中常步。

五月五日。金澤に於いて諸士に德川家繼の薨去を告ぐ。

〔政隣記〕

五月五日金城端午之出仕可相止旨之處、各出懸候に付、大廣間に列居、御用番奥村内記殿左之通御演述。尤年寄中列座。

公方樣御不例被成御座候處、御勝不被遊候に付、前月晦日より文昭院樣依御遺言在之候紀伊中納言樣、御後見被仰出、同日二御丸ゟ被爲入候旨、御老中方より宿次御奉書、昨夜半致到來候。然所不被爲叶御養生、晦日晩方薨御被遊候。右之御遺言を以、紀伊中納言樣御相續被遊候。紀伊國御家之儀者、松平左京大夫殿ゟ御相續被仰付候旨、從若狹守樣以御使札被仰進候。右之趣可申聞旨御意に候。

右に付普請・鳴物等遠慮之儀、前々之通御觸有之。同夜亥前薨御之儀等、宿次御奉書到來。右兩度之宿次御奉書御請使、御馬廻頭神尾主殿・足輕頭中黑六左衛門ゟ被仰渡。

同日於江戸、水戸樣御聞合、端午に候得共御門開不申、御舘ゟ罷出、面々布上下着用。

喪制は徳川家繼の事に係る

六月六日。前田綱紀、徳川家繼の喪終れるを以て月代を剃ることを許さる。

〔徳川實紀〕

六月五日喪制すでに三十五日も過させたまふによて、明日より頂髮そらせらるべしと三家の方々に仰下さる。松平加賀守綱紀も同じ。此日三家をはじめ野蔬を献ず。

六月七日。前田吉徳老中井上河内守の第に至りて新將軍徳川吉宗に誓書を上つる。

〔嗣君年表〕

六月七日嗣君臨閣老井上河州正岑第誓書。

六月廿四日。前田綱紀・吉徳前將軍徳川家繼の遺物を受く。

〔政隣記〕

六月廿四日上使森川出羽守殿を以、有章院様御遺物正宗小脇指代三千貫、吉治公には則重御脇指代千五百貫御拜領。御作法前々之通。廿六日御代替之御禮に付、從相公様詰合御家老本多圖書登城、眞御太刀御獻上。

正宗の脇指は前田綱紀になり

〔袖裏雜記〕

今度御遺物拜領之方、御三家之大名衆には其並無之候處、手前幷若狹守迄以上使被下置候。重疊忝仕合候。若狹守書狀幷右御禮使者等之儀、井上河内守殿に相伺候書付等遣之候。此段近江守初可被申聞候。因玆差上候使者、人持之内品々書付可被差越候。今日にも可被申聞候、以上。

七月朔日

六月廿七日。前田吉徳登營して徳川吉宗に物を献る。

〔徳川實紀〕

六月廿七日拜賀の儀註正月二日におなじ。緋の御直垂にて、井上河内守正岑先導し、長澤壹岐守資親御太刀を持、贊彌次右衛門御刀をさゝげ、白木書院に出給ふ。松平越前守信清太刀目録もて拜賀す。大廣間にて松平若狹守吉徳は、備前國元重の太刀・金を献じ云々。

緋の御直垂は徳川吉宗なり

〔政隣記〕

六月廿七日吉治公御登城、眞御太刀御献上、御代替之御禮被仰上。上意有之。御下り御老中方御勤、御供御歩以上布上下着用。御舘昨今大御門開之、詰人御表不殘布上下着用也。

七月朔日。江戸に於いて改元の令を傳ふ。

〔政隣記〕

七月前日年號改元、享保与被仰出、江・金共御觸等如前々。但御兩代相續就御凶事に、改元被仰付旨、當今被仰下与云々。

この改元は六月廿二日にあり

七月朔日。前田綱紀老臣等を召して新たに誓書を上らしめ、又施政の方針を諭す。

〔袖裏雜記〕

七月朔日

一、御居間書院御下段に御着座、何茂近く寄可申旨就御意、近江守より內記まで段々御側に罷出候處、何も先年役儀之誓詞被仰付候へども、其以後者右誓詞之面々も相揃、其上御前に者何も御心安思召候付而、如何樣にも被仰付儀故、改而せいし不被仰付候へども、御代替之儀にも有之、其上近年之內若狹守樣御支配も可被遊候間、旁先年之趣を以、何も誓詞相調可申候。但先年は役儀之品迄之文言に候へ共、今般者御仕置方之御用相勤候趣の文言も相加り可然候。追付御參勤前相調可然候。但服在之面々は、服明次第相調致判形、江戶表へ差上可申候。

一、何茂に被仰付置候。瑣細成儀迄相勤候故、萬端事多、若心得違など可有之も御計難被成候。左候而も、御前之御事は無御遠慮被仰聞候故不苦候。若狹守樣之儀は、末御うひ〳〵敷も在之、旁若何茂之內、御用筋心得違御座候而も、御しめし難被成可有之候。何もにも左樣之儀は在之間敷候へ共、若至子孫如何樣之者出來可仕も、未生以前之事に候へば御計難被成儀に候。左樣之時は彌被成にくゝ可有御座候。御家老役共之儀は、心得違等有之候而も、何茂を以如何樣にも被仰付儀に候へば、つかへ申儀者無之候。就其御家老共之儀は、指當何之勤

も無御座候間、何茂勤候御用之内相省、段々相勤可然候。且又中川式部儀、兼而若狹守様に御附被成可然旨何茂申上候。此者人品もおとなしく思召候間、御家老役へ御指加可被成候、就夫左候而者御家老中も、御用品々に候得者勤兼可申候條、以前之通若年寄も可被仰付候、前田左京何茂より申上候趣も在之、此者もおとなしく、其上御筋目も有之、暨此仲間之者共最前四人被仰付候得共、三人者或病死又は病氣等に而、只今一人に罷成候間、旁此度左京若年寄可被仰付候。左候得者一人に而者如何に候間、式部も若年寄役相兼勤候様に可被仰付候ヶ様に被仰付、功も參候上に而、式部にても左京にても、若狹守様に御附可被成候。今般者御代替之儀故、御人少に被召連候付、御家老共等迄被召連候段、御内證被仰聞置候。來年御留守之御用之儀者、監物可被仰付候。重き御用之事に候へ共、唯今者功も參り、勤兼申にても有之間鋪候。乍然初而之儀にも候間、御用等示談之ため、來年五・六月頃參府可然候。重而替之儀者御家老共之内、御參勤二・三ヶ月程前被遣、爲御替可被成候。右之通何茂御用之筋、御家老共にわけ候而相勤候様に有之可然候へども、何茂御供之儀候間、今年御留守中之儀は先茂御賴被成候條、申談只今迄之通相勤可申候。

一、御刑法之儀、近年は次第にゆるく罷通候。尤宜事には候へども、餘りゆるやか過候故、立歸候者なども多有之、御しまりも難被成躰に候。ヶ様之儀急度遂僉議、嚴敷程にも沙汰

有之可然候條、兼而何茂より達御內聽置候者など之儀も、追付御沙汰可有之候。尤此段追而可被仰出候。御刑法之儀、若狹守樣に者ゆるく被仰付候而も可然候へども、只今之內者結句きびしく不被仰付候はでは、追而若狹守樣御仕置候節嚴敷罷成候而者、手あらき御仕置之由世間にも取沙汰いたすべく候。旁以只今之內嚴敷有之可然思召候。

一、備前死去以後、小松御城代不被仰付候間、此度修理可被仰付候。

一、吉田平兵衛見分如何敷候へども、見分之所迄にて武士道に障候儀は有之間敷候。武士道につかへ有之候而者、御奉公も難罷成と申ものに候。依之平兵衛・左京儀御先弓頭被仰付候。

○右之外猶御意之趣數條有之候へども爰に略之。

七月五日。大阪に於ける加賀藩の貯藏米六萬五千石燒失す。

〔政隣記〕

七月八日大阪御藏米六萬五千石、當五日燒失之由告來。依之從京都直御橫目茨木覺左衛門被遣、且改作奉行菊田逸角・河合右平次彼地に早速可罷越旨、十二日御月番美作守殿被仰渡、御目錄を以拜領物有之、白銀五枚宛被下之。

七月十四日。石川郡宮腰に災あり。

〔政隣記〕

一、享保元年七月十四日夜宮腰火事、燒失家八十軒餘。御横目横濱源藏・本書火消横山刑部・大音帶刀・本多主水被遣之。

七月十八日。前田綱紀金澤を發して參覲の途に就く。

〔政隣記〕

七月十八日曉七半時御發駕。廿八日夕七半時過江戶御中邸御着。廿九日上使久世大和守殿御出。八月九日御參府御禮。隨駕玉井勘解由・成瀨內藏助。御目見等都而如御例。但廿九日以後、御痛等に付御登城難被遊由御斷之所、御宜旨御老中迄に被仰遣候所、八日御本書來。

七月廿一日。幕府加賀藩等の巡國使を命ず。

〔德川實紀〕

七月廿一日巡國の御使に國々をわかちあてらる。中略。近江・若狹・能登・加賀・三越・佐渡の國は、使番鳥居權之助成豐・小姓組日向左京正茂・書院番小笠原八右衞門長方云々。

七月廿八日。大聖寺侯前田利章登營して參覲の禮を行ふ。

〔德川實紀〕

七月廿八日月次の朝會あり。阿部豐後守正喬先導し、岡村彌右衞門直純御刀とりて白木書院

朝會は德川吉宗のなり

に出給ふ。松平備後守利章參覲し、秋田主水正賴季ははじめて就封の暇をたまふ。

八月九日。前田綱紀登營して參覲の禮を行ふ。

〔德川實紀〕

八月九日臨時の朝會あり。久世大和守重之先導し、贄主計頭正直御刀とりて、黑木書院にいでたまふ。松平加賀守綱紀・鍋島甲斐守直稱・分部左京亮光忠參覲し、松平長門守利興就封の暇たまはり云々。

〔御年表〕

八月九日御登城、玉井勘解由貞信・成瀨內藏助當隆御供にて御目見。

八月十二日。山本源右衞門江戶に召されたるを謝するの書を前田綱紀に上つる。

〔桑華字苑〕

一、丙申秋八月十二日山本基庸呈書一箇。中有一封、今夏命竹田廣貞紙細工事也。別に一通、基庸召江都之條辱候趣を述たり。其中に有金言、仍錄于此云。

亡父瀨兵衞常々申聞しは、我身之事は善惡共に、下より奉願儀者毛頭不仕物に而候。御上次

今月は八月叄議は前田綱紀、少將は吉德

九月は八月なるべし

候は伺ふなり

第に仕御奉公申上候を、御譜代者之覺悟之旨申含置候云々。

八 月 朔 日　　　山本源右衛門

八月十三日。德川吉宗將軍宣下の事あるを以て前田吉德江戸城に登る。

〔大野木克寛日記〕

今月十三日將軍宣下、叄議公御束帶に而御登城可有御座處、跡々より之御持病御痛に依相障御斷。少將樣には御束帶に而御登城之旨從東武相達す。

八月廿一日。前田綱紀內大臣二條綱平をその邸に招請す。

〔政隣記〕

八月十三日吉宗公今日將軍宣下、都而御先例之通。依之二條內府綱平公御下向に付御勤。且廿一日御招請、御作法等茂如御先例。

〔桑華字苑〕

一、享保初元之秋、依將軍宣下二條內府公御叄向、同九月廿一日私第に渡御。邇而十八日之晚叄上、前田拾遺及水島氏豫叄。談及廿一日散樂事。余候其番組。公命水島氏令書之給。祝言有老松之命。卽水島氏筆之、而余懷之退出。及其明呼今春傳藏命之。三郎右衛門依忌中如此。傳藏等老松之祝言無例、眞序如何、報其旨於公故、易猩々定亂曲、今至十月某日讀舜舊記、慶長十八年之

所有看得云、四月五日於駿府御城有猿樂所謂。

式三番　翁　觀世　玉井　ワキ　シテ　ノク王　觀世　實盛　ワキ　シテ　春藤　少進

百萬　ワキ　進藤　少將樣　是界　春藤　少將樣　杜若　ワキ　春藤　金春

玉鬘　少進　紅葉狩　進藤　梅君　花月　春藤　金春

老松　キリ　ワキ　シテ　フク王　觀世　已上　九番

以此觀之舊例分明。傳藏等之言非也。公之仰寔有據也、可感云。

八月廿八日。座頭等その施物を受くる場合等に關し請書を提出す。

〔國事雜鈔〕

座頭共に被下候品之覺

一、御目見　一、御官位　一、若子誕生　一、袴着

一、半元服　一、本元服　一、婚禮　一、嫁娶

一、新知　一、加增　一、跡目　一、移徙

一、養子　一、聟養子　一、髮置　一、佛事作善

江戸表に而被下候品々之覺

一、女子誕生　　一、帯こき　　一、顔直し　　一、役替
一、御成御祝　　一、御疱瘡酒御祝　　一、結納　　一、鐵漿
一、着帯
〆

申六月

右書上申通相違無御座候、以上。

右正徳六年六月十日寫置可申由に而御書立出申寫。

向後町方に座頭共右之品々に罷越候者、兩人より多不參等に、撿校中に町奉行所より被仰渡候。過分錢を取可申与申候者、肝煎致相談、以指圖爲相渡可申候。此旨兼而寄合等之時分、町方に爲相心得可置旨、町年寄三郎右衛門・次郎兵衛殿を以、横目肝煎并當番肝煎に被仰渡候。尤座頭兩人より多參り候者、町年寄衆に迄可申聞由被仰渡候。

座頭御請

於町方座頭共、祝儀・作善之節取申候施物等之儀に付、不埒成仕形共御座候付、御當地町方より座頭共に申請祝儀・作善等、願之通御聞届被成被下難有、施主より施物等爲請取可申候上、

法事之儀御寺より可申候。此上隨分申渡、末々ゟ罷越候而も、不作法成儀不仕樣急度可申付候。爲其御請上之申候、以上。

享保元年八月廿八日

田村撿校印

淸水撿校印

瀧山撿校印

出野撿校印

町御奉行所

八月廿九日。狼の出沒するものあるを以て之が撲殺を命ず。

〔政隣記〕

八月廿九日、左之御觸御月番奧村伊豫守殿被仰渡由、御橫目より申談。頃日方々狼致徘徊候。此間者町方ゟも相見得申由に候。其分に致置候者、人にもあたり可申候。人家ゟ相障り人にあたり候者勿論、無左候共不遠慮打殺可申候。乍然家廻之邊を鐵炮等遠慮可然候。殺候者可及案内候事。

八月廿九日

九月二日。前田綱紀及び吉德に新將軍宣下の祝儀として刀を贈らる。

宣下は徳川吉宗將軍のなり

〔德川實紀〕

九月二日、この日宣下を賀せられ、方々に恩賜あり。水戸中納言綱條卿には土屋相模守政直御使し、時服二十・二種一荷、鶴千代の方に時服十・二種一荷、尾張中納言繼友卿に阿部豐後守正喬御使し、時服三十・二種一荷、紀伊中將宗直卿に久世大和守重之御使し、遣され物上に同じ。水戸中納言の北方に女房御使し、銀百枚・一種一荷、瑞祥院に縮緬十卷・一種、松平加賀守綱紀に少老大久保佐渡守常春御使し、時服二十・一種一荷、松平若狹守吉德に時服十・一種一荷賜る。

〔大野木克寛日記〕

九月十五日

今日從關東御飛脚到着、當月二日今度將軍宣下御慶賀、爲上使若年寄大久保佐渡守殿常春を以、相公樣に御時服二十・一種一荷、少將樣に御時服十・一種一荷被進之。佐渡守殿御饗膳御盃事之上、從相公樣御腰物代金十三枚、從少將樣御腰物代金七拾五兩御進賜之。御首尾克相濟之旨相達す。右御祝儀御拜領は、尾張樣・紀州樣・水戸樣御當家之外無之と云々。但、家宣公・家繼公將軍宣下之時分も御祝儀御拜領也。

九月十四日。山本三河、京都土御門家より加賀・能登・越中に於ける陰陽

師の小頭を命ぜらる。

〔國事雜鈔〕

掟

一、陰陽家行事之外不可修於異法事。

一、不可与他爭事。

一、雖爲相續之子、代替於本所改可預許事。

右之條々堅可相守者也。

土御門家雜掌

松井主水淸永　判

丹羽左京方之　判

正德六丙申年五月十九日

加州金澤稻荷橋　山本參河どのへ

許　狀

一、呼名可謂參河事。

一、可着烏帽子白直垂事。

一、可掛木綿手繦事。

右許狀如件。

正德六丙申年五月十九日

土御門家雜掌

松井主水清永　判

丹羽左京方之　判

加州金澤稻荷橋　山本參河どのへ

御尋に付申上候

一、私父山本淸兵衞

一、御領國之内何方に而も、陰陽師罷有申儀承候はゞ、土御門御支配之者に候哉委細相尋、若紛敷者に御座候はゞ、御國之者他國者によらず、都而御斷可申上候。私差向强而僉議仕に及不申旨被仰渡、一々奉畏候、以上。

稻荷橋番人春田彥丞借屋

享保元年八月廿日

陰陽師　山本參河　印

町御奉行所

加賀・能登・越中

右三ヶ國陰陽家輩小頭役被仰付候。紛敷者於有之者、可遂吟味者也。

享保元申年九月十四日　　　　　　　　土御門家　丹羽左京方之　判
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　松井主水清永　判

加州金澤稲荷橋　山本參河殿

九月十九日。前田綱紀新將軍德川吉宗に誓詞を上つる。

〔政隣記〕

九月十九日戸田山城守殿ゟ御出、御代替誓詞有之。

九月廿四日。河北郡の十村等郡內の鑛山に關して答申す。

〔加州郡方舊記〕

覺

一、一ヶ所　銀山

河北郡板ヶ谷村・石黑又村・古鄕寺村・町村・平下村持山順之尾

道程金澤より往來拾四里程

但此銀山初而刀利村八兵衞掘申候得共、今年迄銀弦に掘當り不申候。只今越中礪波郡福野村杉ノ尾屋文兵衞と申者、正德五年より末五ヶ年御請仕上申候。

右河北郡かね山書上申候。此外金・銀・銅・鐵・錫・鉛山無御座候、以上。

御所村　源兵衛
中橋村　久左衛門
能瀬村　彌右衛門
南森下村　金右衛門
高松　平兵衛
白尾村　理右衛門

御算用場

九月廿五日。前田綱紀使を京都に遣して女御の入内を賀せしむ。

〔御年表〕

九月廿五日女御御入内に依て、御祝儀の御使者御馬廻頭佐々木左兵衛定賢を京都へ遣さる。

十月。石川郡の十村等郡内の鑛山に關して答申す。

〔加州御郡方舊記〕

一、倉谷かな山之儀、文祿三年より掘初、萬治二年迄掘、銀出申候處、萬治三年より寛文七年迄中絶居申處に、同八年より元祿十四年迄掘、少々銀出申候。夫より唯今まで拾六ヶ年之間掘不申候。右かな山間歩迄、御道筋より道程往來拾六里程御座候。

一、後谷村領松色与申處、元祿十一年五月御斷申上、金澤笹塚屋喜兵衞銀本仕、一ヶ年程掘申候得共、かね弦見え不申に付打捨置申候。右間歩まで、金澤より道程往來十二里程御座候。

鶴來村より山越にて、往來六里程御座候。

一、奥池村かな山、元和之頃より銀掘申由承り及申候得ども、其時分之山師相知不申候。其後正保之頃より寛文之比迄、金澤町大橋屋彥三郎与申者かな山仕、少々銀出申候得ども、段々減少仕、唯今退轉仕候。此外子細之儀承及申者無御座、相知不申候。右間歩迄、御通り筋より道程往來九里程御座候。

右かな山之儀御尋に付書上申候、以上。

享保元年十月

鶴來村　又七

吉野村　甚七

山崎久兵衞殿

本保才三郎殿

十一月十日。物價高貴なるを以て諸士に勤儉を守らしむ。

〔典制彙纂〕

一、去年以來別而諸色高直之上、良も有之候得ば拂底之品も有、就中先日頃酒拂底に而、ひ

しき商賣も不仕躰に付、其段達御内聽候處、ヶ樣之節別而歷々之面々心得有之儀に候、輕き者共に而も、食物に少充酒を入候者而は、養ひに難成事も可有之候間、末々迄行屆候樣に料簡可仕候。假令向後廣く賣買候とても、歷々之輩朝暮飮酒且酒宴等堅く遠慮可有之事に候由、御内意に付、酒宴無益之費を相省候はゞ、自其品不致拂底、其隨下直にも可罷成候間、何も一統急度可申付置旨、御請にも申上候。ヶ樣之儀、人々其料簡も可有之儀に候得共、此度別而御内意も有之儀に候間、酒宴等に不限、都而無益之振舞、輕き付合抔も相省候樣有之候者而者、酒迄にも無之、食物之類、蠟・油・炭・薪等之品々迄も不費儀に候得者、末々之者迄之通用も不滯儀に候間、ヶ樣之筋急度被相心得、萬端無用之儀相省尤に候事。

別紙之趣、御月番前田近江守殿被仰渡候條、可被得其意候。且又鷹所持之面々は、書付を以可有御申聞候、以上。

十一月十日

永原左京 判

伊藤内膳 判

菊池大學 判

富永數馬殿

本文物價のことに關するを以てこゝに附載す

享保元年十大工善助話

一、近年諸色高直に成候と云に付而、自今三十年以前に、善助儀能州宇出津ゟ罷越候。其時分能州浦に而、鰤直段十懸に付銀四匁宛致し候。鰤は一尾に付一匁七分いたし候由申候。又今廿ヶ年計以前に、百目銀子請取申方、地米四石銀六匁二・三分相添請取候由咄候。錢は八十六文を以一兩に遣申候。過分年來も立不申內に、諸事大に違候。只今諸色は、畢竟米に准候由に候。近年米一石に而、其以前五石之直段に成候由咄申事。

十一月廿一日。今日以後前田綱紀、將軍宣下祝賀の爲老中等を招待す。

〔政隣記〕

十一月廿一日今度將軍宣下爲御祝儀、御老中方御招請。翁立御能、御料理三汁十菜。御作法等都而御先例之通。

廿五日右同斷、爲御祝儀松姬君樣御表ゟ出御、能有之。是又御作法如前々。且又十二月四日右同斷、御一門樣御招請、御作法前々之通。其に付前々二日左之通被仰出有之。玉井勘解由夫々申渡。

御給事等相勤候者、次第とくと呑込不申候哉、御客前に成事々仕候。爲其大勢其席々ゟ被懸置候間、一人は御料理出口ゟ出指引可仕候。一人は御膳部等見屆、引落も無之樣に、御肴尾

宜樣に可申談旨被仰出候。尤藤田內藏允・永井織部、惣樣右御用被仰付候得共、御用多、左樣に小細成指引難仕候間、何も可申聞旨被仰出候。

十二月九日。德川吉宗使者を派して前田綱紀及び吉德に寒中の安を訪ふ。

〔德川實紀〕

十二月九日寒中の御尋問ありて、方々に檜重をつかはさる。日光門跡公寬法親王には御側靑山備前守秘成、水戶中納言綱條卿・尾張中納言繼友卿には北條對馬守氏澄、紀伊中將宗直卿には相馬兵庫頭氏倫、松平加賀守綱紀には小姓組番頭稻葉下野守正能、松平若狹守吉德には使番石丸對馬定賢、增上寺大僧正詮察には大久保一郞右衞門忠義御使す。

十二月。鳳至郡甲村に疫癘流行す。

〔參議公年表〕

享保元年十二月、是月能州甲村多癘死。是故郡奉行山森多宮をして、醫師山脇元悅をゐて、藥餌を施し賜ふ。逗留廿日計、無死者。

是歲。小身の諸士鷹を飼ふことを禁ず。

〔享保錄〕

享保元・十二・二富田話

一、近年鷹多時行、小身面々迄も鷹多持申者有之に付、前々他國より鷹指越候。今年は別而多、此頃五十七居指越候。其以前より終に無之儀に候。然所此頃鷹持申事、小身之面々は勿論致遠慮候躰に御書出有之に付、右鷹を好申人々、又様々之物を致商賣候町人共、物數寄致相違候に付、今年より初而鷹を止、外之慰事に仕替可申候。左候はゞ大身・小身皆々、來年より遠近山々小鳥小屋を懸、慰可申と相談相極り申躰、其小屋へ女共往來之ため用意に、右諸事取持候町人に申付遣、頃日京都よりびろうどの袖かつぱ取寄申候。かつぱ一つに付代金七匁宛に候。二・三日以前に町人手前へ取寄申處に、早速かつぱ七つ賣申候。とかく諸事品を替申事皆如此に候。法度に成候へば、外之事に而銀子を遣捨候由咄也。

享保二年

正月朔日。前田綱紀登營して新年を賀す。

〔德川實紀〕

享保二年丁酉正月元日緋の御直垂めされ、先導は、戶田山城守忠眞、御太刀は山下總守義寧、御刀岩本能登守正房奉り、白木書院に出たまふ。ときに大友因幡守義閭御盃、前田隱岐守玄

緋の御直垂は德川吉宗なり

長御吸物、長澤壹岐守資親御捨土器持出で、御前に備へ、中條對馬守信實御酌、前田伊豆守長泰御かへしにて御祝あり。水戶中納言綱條卿・尾張中納言繼友卿・紀伊宰相宗直卿太刀目錄をさゝげ拜賀せられ、御盃時服つかはさる。次に松平加賀守綱紀・松平伊豫守吉邦中略また同じ。松平備後守利章・稻葉丹後守正知は、昇進ののちはじめてこれに列る。

正月廿二日。江戶に於いて大聖寺侯前田利章の消防夫、仙石兵庫の消防夫と爭鬪す。

〔享保錄〕

一、享保二年正月廿二日備後守樣御雇之とびの者と、御茶ノ水定火消仙石兵庫殿鳶之者と致口論、仙石殿鳶之者を半死半生之躰打ふせ申に付、兵庫殿より右相手を取可申旨付届有之候處に、喧嘩之儀に候へば、其方之者相果候はゞ、此方之者可申付旨被仰遣候御樣子、御尤之由に御座候。然處兵庫殿より、重而ケ樣之儀有之候はゞ堪忍仕間敷旨被申越へば、夫は其時分之首尾次第と又被仰遣候由に御座候。一々御尤成御返答と奉稱候。

〔德川實紀〕

正月廿二日申刻小石川馬場の側より失火し、本鄉・駿河臺小川町・神田より郭內にうつり、本町・石町・日本橋より深川に及べり。評定所・公卿の旅館・神田橋・鍛冶橋燒失す。萬石以上の

邸宅七十二、見參の士の居所三百四十九燒亡す。其他市中のごときは書するにいとまあらず。

二月十日。宿驛に立つる高札の文字不鮮明なるものを改めしむ。

〔筒井舊記〕

各支配所宿々高札、文字難見譯候はゞ、先年之通於其元何卒墨を入候樣に致度候。板抔損じ、其分に難成候はゞ、早速此方へ御案内可有之候。板抔致書直し候得者、延々に罷成如何候間、早速御僉議候而、御算用場へ添紙面を以可被指越候。先年之樣子所々之者に御尋、間違不申樣に御心得可有之候、以上。

西尾四郎左衛門

村　半　藏

澤田十郎兵衛殿

山　森　多　宮殿

右之通申來候に付、寫遣候條得其意、板損じ申分早速指越可申候、尤有無共書付を以早々可申越候、以上。

享保二年二月十日

澤田十郎兵衛

山　森　多　宮

二月十三日。金澤下近江町に災あり。

〔大野木克寛日記〕

二月十三日快晴、今曉寅の後刻、下近江町新保屋喜衛居宅より出火、辰後刻鎮る。愚拙河北御門迄罷出、組頭・番頭ゟ罷出之旨申斷之、卯ノ後刻令歸宅。

〔政隣記〕

二月十三日金澤近江町新保屋三郎兵衛家より寅刻出火。同町袋町・新町・博勞町・尾張町之内百七十軒燒失、辰刻鎮火。

二月。加賀藩領内の高辻帳を幕府に上つる。

〔鄕村高辻帳〕

本文は各郡村の田高を略し計數のみを寫せるなり

加賀國鄕村高辻帳〆高

都合三十五萬二千七百五十二石八斗九升　郡數三郡　村數六百三ヶ村

内

御判物高

三十四萬六千四百五十石四斗七合

六千三百二石四斗八升三合

享保二年丁酉二月　日

籠　高

松平加賀守内

本多周防守

奥村伊豫守

前田美作守

朽木民部少輔殿

石川近江守殿

外

加賀國　河北郡・石川郡・能美郡　三郡之内

高四萬六千四百三十八石四斗七升　新　田

右者正德元年御改之節書上之申候。

以　上

〔鄕村高辻帳〕

能登國鄕村高辻帳〆高

都合二十一萬千四百三十二石八斗四升　部數四郡　村數六百三ヶ村

内

御判物高

二十萬六千三百八十二石八斗四升

五千五十石　　　　　　　　　　　籠　高

享保二年丁酉二月　日　　　　　　　松平加賀守内

本多周防守

奥村伊豫守

前田美作守

朽木民部少輔殿

石川近江守殿

外

能登國　羽咋郡・鹿島郡・鳳至郡・珠洲郡　　　　四郡之内

高五萬九千六百四十石九斗三升　　　　　新　田

右者正徳元年御改之節書上之申候。

以　上

〔郷村高辻帳〕

越中國郷村高辻帳〆高

都合四十七萬九千八百七十九石六斗九升　郡數三郡　村數千百二拾ヶ村

內

御判物高

四十六萬九千七百五十四石七斗七升三合

一萬百二十四石九斗一升七合　籠　高

享保二年丁酉二月　日　松平加賀守內

本多周防守

奥村伊豫守

前田美作守

朽木民部少輔殿

石川近江守殿

外

越中國　新川郡・射水郡・礪波郡　三郡之內

高十五萬五千二百九十二石一斗一升　　新田

右者正德元年御改之節書上之申候。

以上

〔郷村高辻帳〕

近江國高嶋郡之内郷村高辻帳

近江國高嶋郡之内

一、高千百五十九石八斗三升九合　今津村

一、高千百石四斗四升三合　弘川村

一、高百七十一石九斗八升　海津中村町

合二千四百三十二石二斗六升二合

松平加賀守内

享保二年丁酉二月　日

本多周防守

奥村伊豫守

前田美作守

朽木民部少輔殿

二月。非人小屋の收容人數減少して千百餘人となる。

〔享保錄〕

享保二年二月横山話

一、只今非人小屋に入罷在候人高、惣數千人餘有之候。惣而非人・小屋者町會所支配に付、跡々より留帳相考見候へば、其以前は大分之人高、惣數三千人又は五千人も有之候。

一、去年非人小屋次第に減少、皆々斷申候而罷出候故、此頃も長屋小や三筋迄明申候故、こぼち取申候。近年未々宜、別而今年能作に付、御郡方宜儀無紛覺候。只今惣人高御小屋に居申分千百四十七人と云々。

三月十一日。前田吉德、綱紀に代り登營して武家法度を覽閱す。

〔政隣記〕

三月四日於殿中武家諸法度一卷、御老中ゟ被渡下、七日諸役人中拜見、九日御三家樣御拜見、其上に而御手自奇南香御拜領、御吸物・御酒被進。十一日諸大名御拜見、吉治公御登城、相公樣は御不快に付御斷。十三日御老中方ゟ御勤。

御條目は天和令に相違無之、御奥書に右條々堅可相守之、當家代々潤色之故無所改正、仍用

天和法制者、治平久敷萬事花美におよび、政事慢怠に成候。自今花美無之、政事慢怠無之様にと上意之由云々。

〔徳川實紀〕

三月十一日御法令仰出さるゝにより、熨斗目の御小袖・半袴めして、阿部豊後守正喬先導、岩木能登守正房御刀とりて黒木書院に出たまひ、上段につかせ給へば、松平加賀守綱紀、次に溜詰、次に松平右京大夫輝貞拜謁し、やがて大廣間に出給ふ。御左りかたに宿老、御右りかたに少老、下段より御次をかけ四位、其下に萬石に列る輩拜謁して、奥に入らせ給ふ。

本文徳川吉宗の事に係る
前田綱紀とあるは其名代吉徳なり

四月廿五日。幕府の巡國使鳥井權佐等金澤に着す。

〔大野木克寛日記〕

享保二年四月小。廿五日曇。同國上使鳥井權佐殿千五百石・小菅猪右衛門殿千二百石・御目付天野傳兵衛殿七百石越前路より御當地ゟ今日御到着。町口迄爲御迎前田近江守・前田美作守・奥村伊豫守・横山監物・本多圖書等被向。則當御城下御止宿、權佐殿御旅館河南町米屋次右衛門、猪右衛門殿は石浦町和泉屋與四兵衛、傳兵衛殿は坂尻や與兵衛方ゟ御着。御馳走方西尻四郎左衛門御馬廻組頭・村半藏御小將組頭其外役人夫々相詰、御饗應等之儀勤之と云々。

〔政隣記〕

四月巡見役御使番鳥井權佐殿、御小將組天野傳兵衞殿、御書院番小菅伊右衞門殿、越前國迄被到。爲迎、巡見使主付御用御馬廻組頭西尾四郎左衞門長道、十六日發足金津に越。同斷御用御大小將組頭村半藏愛淸、十九日發足小松に越。同夜巡見使小松御止宿。夫より別宮等御止宿。廿四日鶴來御止宿。廿五日金澤に到着。町端迄町奉行橫山主馬・山崎主税爲御迎出、前田近江守・前田美作守・奥村伊豫守・橫山監物、本多圖書も爲御迎町端迄被出。廿六日巡見使御逗留。御旅館邊若火事之節、猶更早速罷出防可申、御旅宿手寄に付申談旨、火消青山隼人・深美八郎兵衞に、廿三日御月番奥村內記殿被申渡。廿七日御三人共發足、津幡御止宿。大樋町端迄町奉行兩人共御見送に出。

但、右巡見使七月十五日江戶歸府。

四月。加賀藩より八丈島に於ける宇喜多氏一族に贈與する物品の種類を幕府に屆出づ。

〔續漸得雜記〕

享保二丁酉年阿部豐後守殿より、御一家之人數、幷前々より被進候物之品々、御聞被成度旨に付而、御書付被遣候。

於八丈島宇喜多一家之人々に遣物之覺

宇喜多孫助に

一、二十四　金一歩

一、二疋　絹。但小袖表二つ分。内、一つ花色小紋五所紋、一つ無地花色五所紋。

一、五つ　染帷子。内、二つゆかた染、二つ花色無地五所紋、一つ同小紋五所紋。

一、三端　表染木綿

一、三端　裏浅黄木綿

一、三端　上帯。但、地織。

一、五筋　三尺染手拭

一、五筋　布染たぐり

一、五束　中折

一、五本　扇子

一、五本　内、三本小刀、二挺剃刀。

一、一香合　牛黄圓

一、一包　西大寺
一、一包　虫薬
一、一包　腹留薬
一、三百目　すが糸
一、十把　綿。內、五把摘綿。
一、十端　木綿
一、十對　筆
一、三挺　墨
一、三百目　苧
一、三斤　煎茶

浮田小助に

一、十五　金一歩
一、一疋　絹。但、小袖表裏一つ分、花色無地五所紋裏淺黃。
一、二つ　染帷子。內、一つゆかた染、一つ無地花色。
一、二つ　表淺黃木綿

一、二端　裏淺黃木綿

一、二筋　上帶。但、地織。

一、二筋　三尺染手拭

一、二筋　布たぐり

一、三束　中折紙

浮田半平に

一、十五　金一步

一、一疋　絹。但、小袖表裏一つ分、花色無地五所紋裏淺黃。

一、二つ　染帷子。內、一つゆかた染、一つ無地花色五所紋。

一、二端　表染木綿

一、二端　裏淺黃木綿

一、二筋　上帶。但、地織。

一、二筋　三尺染手拭

一、二筋　布染たぐり

一、三束　中折紙

一、一香合　　牛黄圓。此内次郎吉にも遣申候。
一、一包　　西大寺。同斷。
一、一包　　虫　藥。同斷。
一、一包　　腹留藥。同斷。

浮田次郎吉に

一、十　　金一歩
一、一疋　　絹染物。但、小袖表裏一つ分、花色無地五所紋裏淺黄。
一、一つ　　染帷子
一、一端　　表染木綿
一、一端　　裏淺黄木綿
一、一筋　　上帶。但、地織。
一、一筋　　三尺染手拭
一、一筋　　布染たぐり
一、二束　　中折紙

浮田小平次に

一、十　金一歩
一、一疋　絹染物。但、小袖表裏一つ分。
一、一つ　染帷子
一、一端　表染木綿
一、一端　裏淺黄木綿
一、一筋　上帶。但、地織。
一、一筋　三尺染手拭
一、一筋　布染たぐり
一、二束　中折紙

浮田半六江

一、十　金一歩
一、一疋　絹染物。但、小袖表裏一つ分、花色無地五所紋裏淺黄。
一、一端　表染木綿
一、一端　裏淺黄木綿
一、一筋　上帶。但、地織。

一、一筋　三尺染手拭

一、一筋　布染たぐり

一、二束　中折紙

浮田太郎ゟ

一、右同斷

浮田故藤松娘れんゟ

一、二十　金一歩

一、二疋　絹。但、小袖表裏二つ分、花色たて染裏淺黄。

一、五　染帷子。內、二つゆかた染。三つ辻帷子。

一、三端　表染木綿

一、二端　裏淺黄木綿

一、五筋　布染たぐり

一、五本　扇子

一、五束　中折紙

一、五本　內、三本小刀、二挺はさみ。

一、一香合　牛黄圓

一、一包　西大寺

一、一包　虫薬

一、一包　腹留薬

一、三百目　すが糸

一、十把　綿。内五把摘綿

一、十端　木綿

一、三百目　苧

一、三斤　煎茶

浮田半助娘くすね

一、十　金一歩

一、一疋　絹染物。但、小袖表裏一つ分、花色無地五所紋裏淺黄。

一、一端　表染木綿

一、一端　裏淺黄木綿

一、一筒　上帶。但、地織。

一、一　筋　三尺染手拭
一、一　筋　布染たぐり
一、二　束　中　折　紙
浮田故四助娘なかに
一、右同斷
浮田先々藤松娘に
一、十　金　一　歩
一、一　疋　絹染物。但、小袖表裏一つ分。
一、一　染　帷　子
一、一　端　表　染　木　綿
一、一　端　裏淺黄木綿
一、一　筋　上帶。但、地織。
一、一　筋　三尺染手拭
一、一　筋　布染たぐり
一、二　束　中　折　紙

浮田先々藤松娘こうに

一、右品々同斷

村田助六に

一、十　　金一歩。此内弟妹共にも遣申候。

一、二十端　　染木綿。内、十端小紋、十端淺黃。

右品々先年より隔年に遣申候。此外藥種願越候に付而、遣候儀も御座候。

一、白米　　七十俵。但四斗入。

右一家之者共より願越候に付、今度右之員數遣申候。

已上

四月

五月十九日。前田綱紀初めて德川吉宗の放鷹によりて獲たる梅首鷄を受く。

〔政隣記〕

五月十九日俄に上使御使番石丸數馬殿を以、昨十八日葛西御成、御拳之梅首鷄一御拜領。於御玄關御使番武藤庄兵衛受取之。御大書院御上段前上之方に持參、上意御拜聽、御御柄御戴

之上庄兵衞御小書院之方へ持退。押付御熨斗三方等三汁九菜之御料理出、諸事御作法前之通、爲御禮御登城。

但、今月十一日より初而御鷹野御成有之、且御先代御鷹之鳥御拜領之節、御奏者番披露、此度猶更伺候處、御使番之內迄へ仰出、披露之仕方段々被仰出有之、右之通相極。御先代御鷹之鳥は度々御拜領に候得共、御拳は此度始而御拜領也。

〔政隣記〕

五月廿二日右梅首鷄御披、御一門樣幷御出入衆御招請、御料理三汁九菜、附後段御盃之內御囃子被仰付。但御大書院御本膳不殘居、畢而御前御出、上之御間落し懸之少上、御上段之方より三疊目に御着座、梅首鷄御汁迄八寸居上之。御頂戴畢而御客へ二の膳等段々出之。吉治公・備後守樣には御居間書院に而御頂戴、御料理被進之。

六月十二日。大聖寺侯前田利章江戶に於いて防火の功を賞せらる。

〔德川實紀〕

六月十二日佐竹右京大夫儀峰さきの火災に邸宅燒うせければ御弔慰あり。松平備後守利章は、おなじ火災の時よく火を防ぎしをもて褒詞せらる。

この火災は六月九日なるべし

六月。金澤に於いて家中の士の猥に夜行するを禁ず。

〔政隣記〕

頃日御屁近之面々を初、夜中涼に罷越候者多、殊更女中を誘引之者有之躰に候。ヶ様之儀者、猶前々御停止候所、不作法成儀に候條、用事も無之人々猥に夜行不仕樣、組・支配・家來末々迄急度可被申付候。且又組等之内裁許有之面々者、夫々申渡候樣急度可被申聞候事。

右紙面之趣可被得其意候、以上。

六　月　　　前田美作守

右於金澤御觸有之。

七月廿七日。前田綱紀就封の暇を受く。

〔政隣記〕

七月廿七日御歸國御暇之上使井上河内守殿を以、御例之通御時服百・白銀千枚御拜領。河州殿always御痛之由に而御料理御斷に付、葛切御吸物出。御相伴は吉治公被爲成。御盃事御請之上、御代替始而之御暇上使に付、是又御例之通御腰物志津代金三十枚被進之。御取持六郷主馬殿御持出御渡。其外如前々。上使御送迎御式臺敷附迄御出、吉治公は大御門外迄被爲出。

七月廿八日。前田綱紀登營して就封の辭見す。

〔政隣記〕

七月廿八日御登城御禮。御下、御老中方・若年寄衆御勤。同夜於御上邸は横山監物、於御中邸は玉井勘解由を以、諸頭へ御普爲聽。年寄中へ於御前御意之趣。

前日以上使御暇被仰出、御時服・白銀御拜領被成、今日御登城被遊候得者、於御座之間御懇之上意、御手自御のし御頂戴、御鷹・御馬二御拜領、御代替初而之御暇に付御腰物御拜領。備後守樣へも御暇被進、御腰物・御時服被進、勘解由・內藏助御目見、拜領物も被仰付、段々忝被思召候。此段何茂爲申聞候樣御意に候。

一、御腰物者備前正恒代金百枚、大鷹雁提鶴提二居也。以前者諸大名方各御鷹御拜領に候得共、今度者當四月尾張樣御暇之節被進候。此外御鷹御拜領者無之所、今般此方樣へ御拜領也。

〔德川實紀〕

七月廿八日月次なり。阿部豐後守正喬先導し、桑山豐前守通政御刀とりて白書院に出給ふ。松平加賀守綱紀に就封の暇給ひ、備前正恒の御刀下さる。中略。松平備後守利章も同じく暇たまはり、越中則重の御刀下さる。

七月廿八日。金澤に火災あり。

〔政隣記〕

今年七月廿八日夜九時、談議所村際町家より出火、町家迄五十軒餘燒失。翌曉七時前鎭火。

奉書火消前田左門・品川主殿・岡嶋彈正。

九月十二日。前田吉德、綱紀に代りて江戸城に上り封國の判物を受く。

〔德川實紀〕

九月十二日在封の輩に御判物・御朱印を給ふ。先導・御刀昨日に同じくて黑木書院に出給ふ。松平加賀守綱紀・松平肥後守正容、中略。みな宿老阿部豐後守正喬名代の人々に授く。

〔政隣記〕

九月十二日御判物御頂戴、御名代吉治公御登城、御作法如前規。相公樣御老中方・若年寄衆江爲御禮御勤有之。

九月廿一日。前田綱紀歸國の際木曾路より京都に赴くべきことを告ぐ。

〔袖裏雑記〕

去年參府之節、京都江立寄榮君對面之儀如願相濟候へども、氣色滯候故御斷申達、直に致參勤候。今年之儀御用番御老中迄申達候處、去年事濟申儀候間、急度不及相願候。念入之段御同役中へ可有御達旨候。因玆木曾路相越、京都江立寄、翌日發足可令歸城候。諸事其心得可有之、且又別紙之趣其々可被申渡候、以上。

九月廿一日　　　　　　　　　　　　　宰　相

前田近江守殿
前田美作守殿
奥村伊豫守殿
本多周防守殿
横山監物殿
奥村内記殿
前田修理殿

九月廿三日。前田綱紀に從ひ木曾路を經て歸國する諸士の旅費增給を出願するものを戒む。

〔政隣記〕

廿二日御家中・又家來、木曾路通御歸國を申立、增銀等主人々々ゟ相願申趣沙汰有之。依之右之品一向有之間敷旨、御家老中より御横目中ゟ被申渡、翌廿三日左之通觸出。

今般木曾路御供之面々家來共、道中入用增銀願申者共有之由沙汰有之候。此儀一向有之間敷儀に候間、此旨組・支配中ゟ申談候樣、諸頭中ゟ可申達旨、御家老衆御申聞候間、御承知被成、

御組・御支配且又裁許有之人々に、不相洩樣早速夫々御申談可被成候、以上。

九月廿三日　　　　　　　　　　　里見孫太夫

　　　　　　　　　　　　　　　　横濱源藏

九月廿三日　歸國の際具足櫃等を運搬するもの、杖を突くことを許す。

〔政隣記〕

一、御道中御具足櫃并御長持等持參人杖突申儀、御道中奉行より奉達御聽候所、左之通被仰出。

木曾路被爲入候に付、御具足櫃并御長持等持參人杖突申儀、難所山坂之分、夜中迄杖爲突申度旨達御内聽候所、爲突可申候。夜中迄にも不限、急度押立たる驛々之外者、勝手次第爲突可申旨被仰出候。

右之通に候間、城下押立候驛々之外は、杖突せ候儀可爲勝手次第候。驛々之儀は三十人頭承合、御行列押立申所之儀指除可申候、以上。

九月廿三日　　　　　　　　　　　御道中奉行等六人

九月廿四日。大聖寺侯前田利章木曾路を經て歸國す。

〔政隣記〕

九月廿四日備後守樣御發駕、木曾路通御歸邑。

九月廿四日。歸國の際家中の使用する人馬及び宿舍に關する心得を令す。

〔政隣記〕

猶以木曾路、御前後に罷越候面々に左之通に御心得可被成候、以上。

今般御道中御供之面々、通馬增銀之儀、御知行百石より以上之者には不被下筈に候。其以下幷御扶持方・御切米之者ゟ者、增賃銀被下筈に候。右增銀被下候人々者、會所に而相渡候條、請取候樣可被申渡候。

一、人足賃銀之儀、御當地に而は不相渡筈に候。通馬賃銀者、御當地に而可被相渡候。渡樣は馬形可被任勝手候。

一、人馬共逗留銀之儀、三日分は雇候人々より御當地に而可被相渡候。其餘は不殘被下筈に候。人足は一人一日に中勘三匁八分九厘七毛、通馬は一疋一日六匁宛中勘に而、日用裁許幷馬裁許人ゟ人々より可被相渡候。逗留銀之儀は未相極候條、於金澤致僉議銀高相定可申達候。

一、通人足・通人馬被雇候人々者、割場御役人ゟ面々より紙面指出、請取可被申候。

一、相渡り廿五疋・廿五人之宿馬・人足、猥に受取申儀不罷成候。宿々ゟ御步橫目罷出有之候間、急病人等有之候歟、通馬相煩候節は、拙者共迄被相斷、差圖次第に可被相心得候。

馬形は馬方

一、追分より末大聖寺御領迄は、御泊・御晝共、木賃・はたご人々勝手次第可被相極候。乍然所により、兩樣之内一方に極候所も可有之候。御宿主諸色代銀相極、宿々江申談置候筈に候間、承屆相極可申候。且又御泊・御晝休に而、宿札有之面々、何こぞ子細有之末之宿江通被申候者、其宿用意等致置申候品可及難儀候間、被承屆可及沙汰候。此趣人々家來共江急度可被申含候。

有之通に候條、被得其意、尤御組・御支配中江も夫々可有御申談候。御披見之驗御判形可有之候、以上。

九月廿四日　　御道中奉行等六人

九月廿七日。前田綱紀江戸を發し武藏桶川に着す。

〔政隣記〕

九月廿七日快天、卯刻御上邸江被爲入、御守殿御勤。御發駕御供人則御上邸江相揃有之。御見立御客江御對顏。御附使者は、於御使者之間御通懸御直答。披露、成瀬内匠。備後守樣御附使者は、於御居間書院御直答。其外御城坊主衆等、夫々御出入人御通懸御目見。巳刻過御大色代より御發駕。吉治公鏡板迄御送、年寄中御家老中等鋪附、組頭・物頭并御部屋附諸頭御白洲、御大小將御番頭等御色代列居。勿論一統布上下。御客衆等御料理、夫々於席々被下之。

相公樣御中邸ゟ御立寄、吉治公に茂爲御見送中邸ゟ被爲入。松姫君樣より御例之通、御中邸迄御見立御使三宅忠七郎殿を以、杉重一組・御茶一器・名酒一樽被進之。忠七郎殿ゟ於御小書院、御菓子・御吸物等御出し、給事御小將組、何茂常服。於御大書院御直答。玉井勘解由を以御時服二・御給羽織一被遣之。未中刻頃御發駕。吉治公鋪附近迄御送、御守殿附・御前樣方附御白洲ゟ罷出。御晝浦和ゟ暮頃御着、御膳は不被召上。御泊桶川ゟ亥刻頃御着。

九月廿八日。前田綱紀武藏桶川を發し同國本庄に着す。

〔政隣記〕

九月廿八日桶川驛辰刻頃御立、快天也。御晝熊谷。御泊本庄ゟ酉刻頃御着。

九月廿九日。前田綱紀武藏本庄を發して上野坂本に着す。

〔政隣記〕

九月廿九日本庄卯刻御立、快天。御晝板ヶ鼻。烏川水淺、御馬上に而被爲渡。御泊坂本ゟ申中刻頃御着。晩方少々細雨、不及雨具に。

一、御跡騎馬之人々ゟ、左之通申談。但御家老中幷御使番・御醫師は、從者召連出に付不申談。

御跡騎馬之御面々從者等、御供揃之刻限、不殘御旅館前ゟ相揃候樣に可被仰付候。御步橫目・

押足輕等、相しらべ候に指閊候に付申達候。朝晝共其心得候樣に支度御申渡可有之候、以上。

九月廿九日　　　　御行列奉行御横目中

堀　平　馬樣

茨木左太夫樣

水原淸左衞門樣

稻　垣　外　記樣

一、小田井より細呂木迄六十驛、御行列立可申哉。橋より野々市迄十一ヶ所御領分之儀者、御行列立中間敷哉。靑地藤太夫・山崎九郎左衞門より以紙面奉伺候所、被仰出候は、本庄・深谷之樣成驛に候者立可申候。御前にも初而御通故、御存知不被遊候。僉議次第可申渡旨被仰出候に付、御宿主佐藤甚左衞門に致僉議候所、小田井者田中より短く候相、岩村田も同斷、鹽名田も同斷、八幡・沓懸程之驛と申聞候に付、三十人頭山下源五太夫に、下通之樣子を以致僉議、右宿々幷望月驛、御行列立可申旨及言上。御先之頭々にも、夫々御行列奉行与申談。

十月朔日。前田綱紀上野坂本を發し信濃望月に着す。

〔政隣記〕

十月朔日快天。坂本驛辰刻前御立、御晝追分、御泊望月に酉刻前御着。

十月二日。前田綱紀信濃望月を發し同國下諏訪に着す。

〔政隣記〕

十月二日快天。望月驛卯刻過御立、御晝和田、御泊下諏訪江酉刻前御着。但今朝望月迄和田峠茶屋亭主御迎に出、御腰被爲懸候樣奉願、幸富士も見え申由に付御立寄可被遊旨被仰渡。依而中村典膳御先江見分に被遣候所、右茶屋は絶頂より八町計茂諏訪之方へ下り候而有之に付、其段於御道中申上候に付、右茶屋江者不被爲入。

一、明日驛之儀御宿主岩波太左衛門江尋候處、鹽尻は長窪位、洗馬は和田位、贄川は望月位、奈良井は和田位に而家數多候由申聞候に付、御行列奉行より奉伺候所、御前に茂御存知不被遊候、僉議次第与被仰出候に付、右驛々御行列立候段、夫々申談。

十月三日。前田綱紀信濃下諏訪を發して同國藪原に着す。

〔政隣記〕

十月三日快天。下諏訪辨色之頃御立。御晝本山江、信州松本城主七萬石水野出羽守殿より、以御使者御進物來。山村甚兵衛殿よりも以使者献上物來。御泊藪原江酉刻頃御着。于時御旅館江山村甚兵衛殿長袴着用、御太刀・馬代持參。其外御進献有之。御使番富永數馬金呂筋目有之に付罷出及御挨拶。其後成瀬内藏助殿挨拶。於御座之間御對顏、定番頭御近習兼成瀬内匠

御太刀披露、御挨拶有之。退去以後御茶・たばこ盆出、御通ひ當番之御近習番吉田三太夫勤之。
一、御先三品御書・御泊に而町端に入、御道具家腰に寄置之、頭による驛江入候而騎馬仕躰も有之、立樣不宜儀共有之に付、昨二日組頭並御近習中村典膳御行列奉行江申談候而、則御先頭々江申談有之候所、今日又右之樣子に而不宜。依之御書・御泊に而者、一・二町も前廉より騎馬仕、御道具も相しらべ置、三疋立御馬參候節驛入可仕候。茶等被下度者ハ、其間に茶店江參可申事に候。是迄左樣無之に付、驛入候刻も、御長柄与三尺立御馬之間江雜人等も入込候に付、此儀三手之頭々江被仰出之趣も有之、成瀨内匠夫々申談。尤御行列奉行・御横目江も、内匠申談候に付、諸頭・諸役人中江、右御長柄と御馬之間江入込不申樣、前々より御定に候條、家來末々迄急度可申渡旨。食物を調候節ハ跡江下り調、早速始之所江追付可申。騎馬御供人乘馬に沓打候刻も、道脇江除沓打可申。明日福島御關所ハ、横川之御關所同事に可心得候。右之趣組・支配・家來末々迄嚴重に可申渡旨、御行列奉行・御横目四人連名紙面を以申談候事。
一、明日ハ福島之外、宮腰・須原等何も小驛之旨、御宿主寺島甚右衛門申聞候に付、御行列立候に不及旨、夫々申談有之。

十月四日。前田綱紀信濃藪原を發し福島の關門を經て同國野尻に着す。

〔政隣記〕

前記とあるは本書後に出せる政隣記の文なり

十月四日快天。藪原卯刻過御立。御晝上ヶ松に、山村甚兵衞殿より以使者献上物二種有之。福島に而甚兵衞殿に、御使番坂井八右衞門直格御使に被遣。但八右衞門心得を以、御先筒之儀可相尋旨被仰渡。則尋候所、尾張・紀伊御兩方は御先筒之外御免筒廿五挺有之、江戸迄爲御持被成候。綱紀公には御免筒五挺出入共爲御持之筈、此外には一向無之被申聞、則右之趣申上。

一、前記に有之御持筒、福島御關所に成瀨内藏助被指出證文持參之、御使御大小將。

一、寢覺景氣爲御覽絲川寺に御駕被寄、御駕廻り少々被召連、惣御供本道に扣有之。當住徐藏主御目見、暫被爲在、御泊野尻に暮前御着之上被仰出、絲川寺に以飛脚白銀五枚被下之。

一、明日驛々三富野・馬籠・落合、當驛半分位之由御宿主古屋久左衞門申聞。御家門方其外御大名方にも、城下關所御泊之外は御行列立不申旨。併中御大名之内供廻り御吟味之方は、驛々に而立申茂有之由、久左衞門申聞。依之何茂僉議之上、御行列立不申事に相極。

一、贄川より木曾之内は驛馬廿五疋之外は、決而出不申筈に候所、今般は山村甚兵衞殿爲御馳走、外に廿疋宛被出之。

〔政隣記〕

一、今般木曾路初而御通行には、福島御關所御鐵炮六十挺相通候儀、段々御僉議、畢竟戶田山城守殿に御書を以被仰遣候所、御家來御手形を以御通可被成候。山村甚兵衞に山城守殿よ

九月なり

り可被仰渡旨御返書來。依之手形案内判印等之儀、則一昨廿五日甚兵衛殿役人江、聞番菊池甚十郎罷越致僉議、印形に相極案文相越。左之通。

覺

一、鐵炮六十挺　　玉目六匁宛

右今度加賀守歸國仕候に付、道中爲持申候。鐵炮福島御關所爲持罷通候儀、於江戸山城守樣江御屆申達候所、則福島御關所江被仰渡候間、私證文持出、御關所可罷通旨被仰渡候に付、如斯御座候、以上。

享保二酉年九月　　御名内　成瀨内藏助　印

山村甚兵衛樣

右案文之内、御家老之證文に限候儀に而は無之、御家來御手形を以与被仰渡候に付、此趣重而福島殿役人宮崎又右衛門江、甚十郎を以御僉議之所、右證文之内私之文字省候事に相成。

一、御持筒五挺之儀者不及證文に、見合印鑑内藏助殿より被指遣、是に而相通申筈に相極候事。

〔松雲公御夜話〕

一、木曾路初而御歸國の時分、福島の御關所御鐵炮の事、聞番澤田源太夫を以、小松中納言

樣以來御持筒六十挺上州阪本迄爲御持被遊候。此度木曾路御旅行に付、福島の御關所無異儀相通候樣に被遊度の旨、水野和泉守殿まで被仰入候處、重き御願の儀候間、御直の御願紙面御指出被成候樣にとの儀に付、罷歸其段達御聽候處、左樣の事を源太夫請候て罷歸候儀、沙汰の限に思召候。青山織部など御用人相勤候節は、御家の御爲第一に仕り、御入國以後爲御禮御使者被指出候御書の御草案、御厩に被爲入候處、夫へ持參いたし入御覽申候。御老中方への御書御片御名字に候故、是は如何に候由被仰出候得ば、御代々如斯御座候間、此分に被遊可然由達而申上候得共、當分は如此にても、末々當世の風俗にては被爲成間敷候。其時に至り御改被遊候ては、見苦敷可有之候。一向唯今より御改被遊候儀、目に立申間敷の旨御意被成、其時より御諸御名字に被遊候。思召のごとく、當時中々御片名字などは思召寄も無之體に成申候。箇樣に少にても御家の落目の樣に成申品は、達而も申上候處、只今の者どもは中々左樣の所まで參届不申。其上先年金銀改候節も、諸大名方何も御領分不殘引替相濟候段、御直の紙面出申候。御三家方幷此方樣には、御家老中の紙面にて事濟申候。かやうの重き品公儀御用にも、御直の御紙面など御出しの事無之候。左樣に相心得如何樣にも宜可申入御意に付、和泉守殿へ罷越申達候へ共、取次の者も中々請不申、重而和泉守へ申聞候儀難仕などと申有之候樣子にて、源太夫も致迷惑罷在候。二・三日過和泉守殿より聞番呼に參、源太夫罷

出候處、福島御關所御筒の儀、無異儀相通候樣に宿繼奉書を以被相達候間、御勝手次第御持せ可被遊候。但福島にて御家老衆より證文可被指出候、夫にて事濟候由被仰渡、悉く埒明申候。いかゞの儀にてかやうに早速事濟候哉と、何も驚罷在候。其内三年御參府被遊候處、大橋藤藏。公義の御右筆の元本多安房守家來筋の者に候處、樣子有之致浪人、先年江戸へ罷出公儀へ被召出候。御家の御右筆と違、御老中方の留書の外、此方樣にて年寄衆執筆のことく被勤、格式も至て輕候。加州よりの仁に付、御家の用萬事承被申候。山本源右衞門をひそか成所へ相招被申候は、去年御歸國の時分福島御關所御鐵炮の事承候哉と被相尋候。成程宿繼御奉書等の儀は致承知候、其外は不承由申入候得ば、其儀に付御鐵炮の事御願の節、御直の御紙面は難被指出旨に付、御老中御詮議最中の時分、或日林大學頭殿より封付狀箱參り、久世大和守殿御披見被成、何事かは不存、加賀守殿にはかやうに可有之と存候旨にて、外御老中へ御廻し被成候。何も苦々敷御顏色にて御披見被成候。其以後追付福島へは奉書可相調由にて、御鐵炮の事埒明申候。如何の子細に候哉と存罷在候處、御發駕被成十日計立候而、書付紙面等一括私共仲間へ御渡、是は加賀守殿木曾路鐵炮一卷に候、次第を見分帳面に仕立置可申旨被仰渡候。其故委細披見仕候内に、大學頭殿迄被遣候宰相樣御書有之候。此度木曾路御歸國に付、御先代より爲御持被成候六十挺の御筒、福島御關所無異儀相通候樣に被成度御願の趣、和泉守殿迄御聞番役の者を以て被仰入候處、御直の御紙面被指出候樣に被仰聞候。左樣に無之候ては御取次も難被成由に候。御先代より加樣

合渡は河渡

の儀に付御直紙面御出しの事無之候。たとへ御領國を被指上候ても、御直紙面は御出し被成間敷候。此段表向より被仰達候而はいかゞに候間、大學頭殿まで被仰入候。如何樣にも宜敷御取計候樣にと有之御書に御座候。其趣御披見候て、御老中方何も御難澁の御顏色と見え申候。何も御披見以後被達上聞候哉、早速御奉書調候樣にとの事に成申候。御手づよ成御事に御座候。藤藏儀御當家樣の御事御大切に奉存候故、追而拜見仕候てもひやあせ出申御事に候。此段源右衞門に咄申度罷越候旨、御上屋敷にて物がたり仕候の由、源右衞門咄承申候。

十月五日。前田綱紀信濃野尻を發し美濃中津川に着す。

〔政隣記〕

十月五日快天。野尻卯刻過御立、御晝妻籠、御泊中津川ゟ申刻前御着。今晝より御行列奉行山崎九郎左衞門氣滯。依之同役靑地藤太夫一人に付、御泊ゟ朝夕迄罷出、御晝ゟは不及出勤旨、內藏助殿被達御聽、藤太夫ゟ被申渡。

一、明後七日合渡御中休相止、美江寺御中休、赤坂御泊、十二日松任御泊、十三日御着城与被仰出、御通中奉行中より夫々ゟ申談有之。

十月六日。前田綱紀美濃中津川を發して同國御嵩に着す。

〔政隣記〕

十月六日快天之所曇雨。中津川寅刻御立之所、卯中刻より雨降、暫に而晴、大井宿邊に而御供人合羽着用。然所御横目黒見孫太夫家來合羽數致減少持參不足に付、御行列之内ゟ難入故、孫太夫御駕籠際迄罷出、御表小將嘉忠次迄申達、御行列之跡ゟ引下り可申哉与之旨奉伺候所、無構御供可仕旨同人を以被仰渡。御晝大湫に而御行列奉行ゟ孫太夫委曲申達、御表小將横目成田幸右衞門を以、先刻合羽有合不申、不調法之仕合に候所、無御構御供被仰付、難有奉存候旨申上。御泊御嶽ゟ申刻御着。

一、明日之驛太田は藪原位、加納は城下之旨、御宿主磯部伊左衞門申聞に付、御行列相立候樣夫々申談。

一、明日者渡場三ヶ所有之候條、御先ゟ可罷出候。乍然餘り早く罷越も惡敷可有之旨被仰出候間、子中刻より寅刻迄之內、段々罷越候樣、御行列奉行・御横目ゟ內匠申渡。

一、今御泊ゟ尾張中納言繼友卿より御使者來。爲御禮名護屋迄御持頭茨木左太夫御使被遣。

一、別所孫太夫氣滯に付成瀨內藏助等僉議之上、孫太夫代御筒押富田主稅、同人代御弓押生駒藤九郎、同人代御長柄押御近習番高畠善太夫与相極、明後日より御使番相勤候樣可仕候。明日は川場多、御使番渡場ゟ罷出候旨被相伺候所、其通与被仰出。然處善太夫儀、當驛狹く、幸明夜御泊御待受に付、末之驛伏見ゟ披候旨御道中奉行ゟ斷、當驛に不在合。依之伏見ゟ呼

に可遣旨伺に成候所、明日は非番長屋八郎右衞門儀孫太夫代勤、孫太夫は病中に而も非番之御筒可召連歟、夫も難成者、與力持添相越可申旨被仰出、則孫太夫非番之御筒召連。

一、御行列奉行山崎九郎右衞門氣分宜、今夜より出勤。

十月七日。前田綱紀美濃御嵩を發し同國赤坂に着す。

〔政隣記〕

十月七日快天。御嶽曉天御立。但御發駕前、御先手御立少前に爲押出候得共、今日は舟場三ヶ所に付、最早可爲押出哉与、寅刻過御居間方新番並森平藏を以、御行列奉行奉伺候所、昨朝抔御乘物殊之外早く舁候故、御先手は押續候。今朝とても常之通に而可宜候。乍然少は早く爲押出度候者、其通にも可仕旨被仰出。依之最早寅中刻に付、御先手押出候樣申遣候旨、同人を以達御聽。

一、今日加納城下御通之所、御先供御歩十三人之内不足人出來。依之御具足櫃裁許之非番より加之可申旨、御歩支配御使番より言上之所、其通与被仰出。

一、太田渡場之一里計此方に而、御行列奉行靑地藤太夫奉伺、御先は罷越見合候所、小船に付、兼而極有之一艘分之御人數、二切三切に相渡、藤太夫立歸言上。御晝鵜沼、御中休美江寺。但兼而者河渡御中休之所、右美江寺に相極、先達而御道中奉行より飛脚を以宿割御小將

樽井は垂井
水上は春照

駅地は陣地歟

へ申遣候所、如何間違候哉、やはり河渡に御旅館拵有之、美江寺にては拵無之段、河渡場成瀬内匠承之。然所へ御近習番高畠善太夫儀、御泊泊番に付御先へ抜、此所へ來懸り候に付、内匠右之趣申達、早速罷越、河渡驛之御宿拵ハ爲相止、美江寺に御宿拵可申旨申談。依之善太夫指急河渡へ罷越候所、御宿主ハ御迎に參在合不申、せがれ并問屋・庄屋等へ早速拵止候樣間違之趣申渡。夫より美江寺へ早打に而參、御宿申渡家致見分候處、御座之間も無之、外に猶更無之由申聞、松平薩州殿晝休札も有之故、夫々申談、直に御泊へ罷越、右等之趣御道中奉行へも申達。

一、美江寺渡、但呂久之渡共言。大船に而御支無之。河渡も大船也。

一、美江寺御中休、御泊赤坂へ晝頃御着。明日之驛々樽井驛宜、水上は藤川より宜、關ヶ原驛宜旨、御宿主原田又左衛門申聞候に付、御行列相立候樣夫々申談。且關ヶ原之儀、家康公御殿地等之御樣子又左衛門へ尋候所、半里計山手に而、本道より見え不申由に付、御行列者立、騎馬にハ不及旨、是又御行列奉行申談。

一、濃州加納安藤右京亮殿へ御使御使番丹羽武兵衛、大垣城主戸田采女正殿へ明日御使御使番北川久兵衛へ被仰渡。

一、頃日騎馬御供面々、心得不一統區々に而、御行列立候驛々に而は不殘騎馬与心得候人々

も有之、或は御行列に無構、城下に准候驛々關所前、御晝・御泊之外は不及騎馬に与心得候面々も有之、不一統に付、御行列奉行青地藤太夫より奉伺候所、中村典膳を以被仰出候者、於御國御たとへを以可被仰聞候。津幡は家も悪く、御行列立候に不及驛に候得共、御旅館有之候。然者御行列騎馬も可仕候。竹橋・泊且又松崎・二俣抔之様成所は、馬次にては候得共御行列立に不及。高岡・今石動等は城下同事と可申候。魚津は古之城地、其上只今歴々之者被指置候へ者可有騎馬候。境又は大聖寺抔は城下に准じ候と可申候。三日市・滑川等は驛大に而宜候得者、是又御行列立、騎馬も可仕候。松任は只今御旅館も無之候得者、城下に准じ候とは難申可有之旨被仰出。

右之趣に付福島・碓氷・府中に而は、何も騎馬可仕儀与申談候。猶更右に准じ申所々可有之候。明日樽井・水上等者御行列立候得共、騎馬には及不申旨、藤太夫典膳ゟ申達、夫々申談。

〔政隣記〕

一、當七日美江寺驛御泊之筈に候處、以之外狹く、御宿も無之、御泊驛に難成旨、宿割御小將より飛脚今夜到來、赤坂御泊、合渡御晝に相極、以飛脚返書有之。今夜成瀨内藏助迄被仰出候者、諏訪太祝より飛脚等に而も指出候者、御最花御上可被遊候。木下淨信寺被出候歟、使僧に而も被出候者同斷。今津曹澤寺・竹生嶋花王院・吉祥寺、若飛脚等被出候者、到于時可

今夜は前夜歟

被仰出候。多賀不動院飛脚等被出候者、御最花可被遣候。伊勢松岡大夫飛脚等被出候者、到于時可被仰出候。

一、明日御行列立申儀、御行列奉行より奉伺候所、成瀬内匠を以被仰出候者、下道に而二俣・沓懸之様成所は、たとへ馬次に而茂立申間敷候。今日小田井・鳴名等は立申に不及儀に候。八幡抔は狭く候得共、御体にも成申候、其心得に而立可申旨。

一、明日之驛芦田は小田井より狭く、長窪は望月位之旨、御宿主大森久左衛門申聞。依之御晝・御泊迄御行列立候樣夫々申談。

一、青治公・備後守樣より、當驛迄以御飛脚御機嫌御伺有之。則御返書被遣。

十月八日。前田綱紀美濃赤坂を發し近江木本に着す。

〔政隣記〕

十月八日快天。赤坂卯刻過御立、御晝藤川驛。御宿林彌左衛門庭前に、脊之端、苔付、上之平成石有、定家石と名付。古定家卿住居之舊地之由申傳候段、彌左衛門申聞。

一、今朝御發駕前、御行列奉行山崎九左衛門より中村典膳を以、御國に而泊・木船など古城地に候得共、只今在郷に候得者、御行列立にも不及候。とかく此度之御道者御存知不被遊候、僉議次第与可仕旨被仰渡。依之御宿主にも彌承合候所、樽井驛宜旨、關ヶ原は名高き所に付

騎馬可然旨申上。何茂被申談、御先三手にも足輕を以、其段九郎右衞門より申遣候事。
一、御泊木本に午中刻御着。當驛迄從榮君樣、御使者御使役長田兵左衞門を以御進物有之。
一、今津甚四郎并甚右衞門父子共、繼目之御禮始而被仰付。披露御小將頭堀平馬、旅裝束之儘勤之。
一、江州彥根城主井伊掃部頭直惟朝臣より、御使者物頭淺村理兵衞當驛迄被遣。右爲御禮旅宿に、御使番富永數馬御使者に被遣。
一、水上或春照共言木原新左衞門と言者御途中に出有之。五十三ヶ年以前御宿被仰付候時分、御殿被仰付被下、近鄉之者共加賀樣御殿与申候所、六ヶ年前燒失、去年以來井伊掃部頭殿より御殿被仰付候。今年御宿不仕殘念之旨、靑地藤太夫罷通候節申聞云々。藤太夫彼者座敷等致見分。
一、明日之驛々、柳ヶ瀨は水上より小く、椿坂は柳ヶ瀨より惡く、板取不宜旨、御宿主竹村鄕右衞門申聞候に付、御行列立に不及段申談。
一、柳ヶ瀨は京都より出候女改關、近年井伊殿預り、公儀關に相成候に付、往來笠拔候哉と御宿主に承合候所、夫には不及候、柳ヶ瀨は京都より出候女改、板取は下より登候女を改候旨、鄕右衞門申聞候に付、則達御聽、笠着用之儘御關所罷通。

十月九日。前田綱紀近江木本を發し越前今庄に着す。

〔政隣記〕

十月九日陰。木本卯刻頃御立、御晝中河内。但當八月燒失、御晝宿難仕旨及斷候得共、御入國之時分、家廿軒計有之所に而御晝休被遊候旨被仰出候に付、御晝休に相成。驛中不殘燒失、後小屋懸半故、御供人何茂外面に有之支度仕。御泊今庄江申刻前御着。夜に入雨降。

一、越前福井城主松平伊豫守吉邦朝臣より、御使者長野八太夫を以御進物有之。兼而御斷之所、格別之御挨拶に付御受納。右爲御禮、明日福井江御小將頭堀平馬江御使被仰付。

一、明日城下御通に付御行列不足無之哉、裝束等損も無之哉、夫々承届可申上旨、御行列奉行江成瀨内匠を以被仰渡に付、則夫々御旅館江相招、御行列奉行承届候所、不足人・裝束損じも無之に付、右之趣口上に而申上候所、紙面に調可申上旨。

御行列御人數不足裝束等之儀、頭・支配人申談相改候處、相違之儀無御座候旨、何茂申聞候、以上。

十月九日　　青地藤太夫

山崎九郎右衛門

一、明日驛々輕き所に付、御晝幷福井御泊之外者、御行列立に不及旨夫々申談。

本文は前掲福井侯進物のことに係る

兵部大輔は昌親なるも正徳元年卒去し今は伊豫守吉邦なり

〔享保錄〕

一、今度相公樣中仙道御通御歸城に付、御供之內御使番靑地藤太夫物語之由に而、此度御道中初而御通りに付、所々より爲御馳走、御使者・御音物有之候儀、御用捨有之樣にと國々之境ゟ御入之砌、皆々急度御斷に付、何方よりも御音物無之候。越前松平兵部大輔殿より、御使者・御音物有之候に付、取次之者其旨申上候處御返答有之、幷御音物之儀は、尾張樣幷井伊掃部殿等ゟも夫々急度御斷に而、御音物は一統御受無之候間、兵部大輔殿ゟも木ノ下より、其旨以飛脚御斷申達候へば、御音物御受納被成間敷旨御返答有之候處に、使者取次衆迄申達候は、御返答之趣兵部大輔ゟ可申達候。就夫近頃恐多候得共、私存寄之趣一往申上度筋御座候。御道中皆々樣ゟ御音物之儀御斷に付、兵部大輔音物茂御受納被成間敷旨、左樣可有之と乍恐奉存候。乍然兵部大輔方より申付使者を以申上候は、右御斷之御使相達不申以前に、私に申付罷越申儀に候。其上兵部大輔儀は外樣と違、御隣國之儀に候へば、別而此處之親み格別之儀に奉存候間、御受納被成可被下哉。此旨いか樣共宜被仰上被下間敷哉と、使者心得を以取次迄申聞候に付、其分に難成、其旨達御聽被申候へば、使者申分細に申物哉と御感被成、被仰出候は、使者申分御聞屆候處、格別之筋に候へば、御音物御受納被成候由に而、御返答有之候。皆々使者之仕形を稱申候。働申仕形之由咄有之候事。

十月十日。前田綱紀越前今庄を發し同國金津に着す。

〔政隣記〕

十月十日夜半より大雨。今庄寅刻前御立。御晝府中に松平兵部大輔昌親朝臣家臣領二萬石府中領主本多大藏より使者被差上。但在江戸留守之由云々。爲御返禮御使番丹羽武兵衞被遣、追付御發駕。但藤太夫は於御途中奉伺、白鬼女渡場に罷出。右渡場より此方に鯖江御代官久保嶋作太夫殿爲御馳走罷出被在之、御下乘御挨拶。福井御通之節、町中見物人無之、亭主々々庭に出蹲踞有之。御中休森田御泊、金津に酉刻御着。

一、明日之驛々何も小驛に付、御晝・御泊之外御行列立に不及。大聖寺御關所前、境御關所同事与被仰出、夫々申談有之。

兵部大輔昌親は伊豫守吉邦の誤

十月十一日。前田綱紀越前金津を發して加賀小松に着す。

〔政隣記〕

十月十一日陰。金津卯刻過御立。橋此方より雨降出、何も雨具仕候所、御使番稻垣外記家來合羽不足に付、御供所下り可申哉与、御行列奉行山崎九郎右衞門に相尋に付、則九郎右衞門より奉伺候所、無構旨御意に付、其趣外記に申渡。且橋茶屋迄備後守樣御迎に御出、右之趣御先に罷越候靑地藤太夫、以紙面御途中迄及言上、御使番北川久兵衞も及言上。藤太夫・久兵衞

其所に扣有之、段々罷通候者共、笠取下馬仕可罷通旨等、夫々作法申付。右茶屋に而御對顔之上、備後守樣に者御先に御立也。大聖寺御領不殘、御道筋敷砂被仰付置、町々に侍布上下着用罷に出有之。町家亭主々々布上下着庭に平伏、町々に御行列拜見人大勢出有之。御晝大聖寺に巳中刻過御着、御旅館に被爲入。利章公御家來二人熨斗目、三人服紗小袖・布上下着、相詰有之。暫御間有之、御館に被爲入。御乘輿御行列之儀昨夜伺、被仰出に而相極候通、朝御供人勤之。何も旅裝束之儘。終日御供人者御館に而三ヶ一宛相代食仕、御晝後之御供人は、宿々に而支度仕廻罷出代り可申候。御挾箱二つ・御道具者不殘御供可仕候。其外は不及御供に候。御館に而御隙入及晩景候者、直に御發駕与可被仰出候間、惣御行列御館に揃可申候。御手間も入不申、何之被仰出も無之候者、御宿に被爲入、夫より御發駕与被仰出候に付、夫々申談置有之。且御横目・御使番一人宛立付之儘歩御供被仰出、夫々御供仕候所、於御館御使番富永數馬・御横目半田安左衞門、幷歩御供之御小將中に赤飯・御酒等被下之。晝より御供之坂井八右衞門・里見孫太夫暨玉井勘解由・成瀨内藏助、幷足輕頭伊藤平太夫・物頭並松尾縫殿・御表小將横目永原彌平太御料理被下。依而各布上下着用。御饗應相濟、御館より直に未刻前御發駕与被仰出候に付、御行列御館御門前より段々相立、御泊小松に酉刻御着。御宿九津田治太夫。御城御見分無之。小松御城代前田修理知頼御旅館に出、御肴献之。御城番生駒右近

直政も罷出。

一、大聖寺御關所御通之刻は、境御關同事与夜前於金津被仰出、夫々申談有之候所、御先角新番より御駕廻り笠着用之儘罷通、其外御前後は笠取候に付、間違之趣御行列奉行より談書付、左之通中村典膳を以上之。

大聖寺御關所御通之刻、御行列之分は境御關所同事に可相心得旨、昨夜被仰出夫々申談候。然處今朝御通之刻、御先三手より御先供御歩迄、不殘笠拔罷通申候。御跡者、當日御供頭分より不殘笠拔申候。唯御駕籠際迄笠拔不申候。其樣子相詩候所、三十人組之者共は山下源五太夫申渡、何も笠拔申管に御座候處、御先角新番笠拔不申候に付、申談違申哉与心得、笠拔不申旨申候。新番に申談候儀、私共心付不申候に付不申渡、不調法之至奉洣惑候、以上。

十月十一日

青地藤太夫

山崎九郎左衛門

右紙面入御覽候所、惣而委く伺不申候而事を濟し候故、ヶ樣之儀有之候。今日より被仰出候趣、少に而も違候者、急度御咎可被遊候。左樣無之而は精も付申間敷旨、成瀨内匠を以被仰出候に付、奉畏候段御請申上候所、重而同人を以紙面を被返下、不念之儀に被思召候之旨被仰出。

一、大聖寺御館ゟ之御供立之内、御床机は相省、右之所ゟ御立傘被爲持、御先は三十人小頭兩人、御挾箱二つ、以下御召馬一疋、步御供之草履取、同若黨、鎗・挾箱・合羽五荷、押二人、步御供之御使番・御橫目乘馬二疋迄也。其外は御宿に殘不被召連、御立は直に御發駕故、前記之通不殘御館ゟ揃、夫々御供仕候事。

十月十二日。前田綱紀加賀小松を發し松任に着す。

〔政隣記〕

十月十二日晴曇。小松卯刻御立。御中休柏野。御泊松任ゟ巳刻過御着。今日手取川引舟梁之兩方に而、三十人組水練之者ゟ水練被申付。且又御先三手非番長屋八郎右衞門・吉田左近右衞門・武藤庄兵衞三人共、前格之通御先ゟ可罷越旨御家老中ゟ相達候所、被承屆、則今日致發出候。其段被達御聽候所、今年初而中仙道御越被遊候所、前格有之哉与被仰出、追付成瀨內藏を以、御橫目中ゟ被仰出有之、則諸頭中ゟ申觸如左。

今日當所ゟ御着被遊、御用無之面々、今日御先ゟ罷越候儀に無之候。於金澤御番等に而指當御用有之者、或は明曉之御發駕に御座候得者、此間御先ゟ罷越候通、或者夜半以前にも、右御用指捺不申程に相考可罷歸事に候。今日勝手々々に罷歸候而者、込合可申与被思召候。當所に御止宿被遊候に、左樣に御先ゟ罷歸候而者、御供之中に而は無之候。又明日於金澤指當

り御用も無之者は、明曉御發駕被遊候御跡に、込合不申樣に頭々申談、可罷歸之由被仰出候間、夫々可申談旨成瀨内匠被申聞候。御承知被成、御組・御支配にも可被仰談候、以上。

十月十二日　　里見孫太夫　半田安左衛門　丹羽澤右衛門

中村新平　吉田茂平　小幡宮四郎

右之被仰出以前、御横目中に被仰渡有之。頭等に相待御先に今日罷歸候者共、夫々書出候樣に御横目中申談候に付、頭々等より紙面に調、御横目に相達之。

一、御道中歩御供人樣子可書出旨、成瀨内匠を以御行列奉行に被仰出、夫々承屆、以紙面申上。

十月十三日。前田綱紀加賀松任を發して金澤に歸城す。

〔政隣記〕

十月十三日雨天。松任今曉丑中刻御發駕。御道筋才川橋・河原町・香林坊橋・石浦町坂野源七・端玄徹等門前より、前田賴母等門前通、蓮池上通石川御門より、寅の中刻過御機嫌克御着城、大御色代より被爲入。御大色代より石川御門迄は如例に罷出、紺屋坂之方柵際に御作事奉行・御普請奉行・會所奉行・改作奉行・内外御作事奉行・場附御横目中罷出蹲踞。當番御先三手之頭別所孫太夫・富田主稅・生駒藤九郎、御跡騎馬渡邊傳藏・山崎九郎右衛門・永原孫平太・伊藤平

河原町は河南町なるべし

太夫・堀平馬。

御歸國爲御禮、江戸ゟ之御使人持組津田玄蕃孟昭未刻發足、十一月十九日歸。

一、辰中刻御出、寶圓寺・天德院・如來寺ゟ御參詣。一昨夜於小松被仰出有之。

十一月六日。幕府先に德川吉宗の前田綱紀に賜ひたる鷹を交附す。

〔政隣記〕

十一月六日於江戸。一昨日久世大和守樣ゟ閒番御招、澤田孫太夫罷出候所、今日夜に入御拜領之御鷹相渡候條、若年寄大久保佐渡守殿御宅ゟ、御家來受取に可差出旨被仰渡候に付、今夜源太夫布上下着用、足輕四人・小者六人召連、御鷹匠黑田甚助・林傳右衛門爲手替竹山八丞各布上下着參出。御鷹出所一居は丸こや奧州野呂、一居は松前七組、夫々受取之。亥刻頃大御門開、御鷹入之。御色代鏡板ゟ横山監物並前田權佐・藤田內藏允布上下着罷出、諸頭・閒番布上下着敷付ゟ罷出、御大小將御番頭・御使番御横目各布上下、取次御小將者常服御色代に列居。御使者之間御緣頰より御料理之間・御大書院溜、夫より御小書院に假ほこ出來居置、御鷹匠指添。追付御居間書院ゟ吉治公御出御覽相濟、中之口より御鷹部屋ゟ入之。右中絕後、今年初而御拜領御作法粗右之通也。御鷹、同十一日御鷹匠二人・御餌指一人指添、御國ゟ被遣之。

十二月廿一日。德川吉宗、前田綱紀及び吉德の寒中の起居を存問す。

〔徳川實紀〕

十二月廿一日、寒中を御存問ありて、方々に御使して樽重をつかはさる。日門・水戸羽林には御側阿部志摩守正明、紀邸には青山備前守秘成、松平若狹守吉徳には使番寛新太郎正尹、増正寺には石丸對馬定賢御使す。又驛次もて水黄門に枝柿、尾黄門に龍眼肉、専修寺門跡國獻に菓子を遣され、松平加賀守綱紀には奉書もてこはせ給ふ。

享保三年

正月廿七日。石川・河北二郡の駒寄を命ず。

〔國事雜鈔〕

石川郡・河北郡駒帳昨日被指越、則達御聽候處、天氣次第手寄之所迄牽寄候様被仰出候間、去々年之通石川郡分は古堂形、河北郡分は新堂形迄牽參候様に可被仰渡候。日限等御極次第、御前かど御中間可被成候。其節彌可申談候、以上。

正月廿七日

石川丈右衛門

鈴木清太夫

山崎久兵衛様

石川丈右衛門等は割場奉行

山崎久兵衛等は加賀郡奉行

本保才三郎様

正月。封銀に贋銀を混じたる者あるを以て公事場に於いて吟味せしむ。

〔續漸得雜記〕

一、橫山主馬話、享保三年正月致似銀、封じ口を破り、惣銀一枚宛指替置申封有之に付、於公事場夫々吟味有之候。惣而御國之封紙は、二俣村に而のり不入紙を漉立、外之紙に一圓無類樣に拵立、聊外ゟ洩不申、封座へ右之紙數改相渡、其紙數に而封銀之數をしらべ申候。惣而一枚之紙半分宛に切、一束に而二百枚、百目封四十貫目宛付申定にいたし、紙相渡候由に而候。御當地に五百目封成不申候は、右之外に其以前より封紙無之故成不申候。江戸五百目封も、外に用不申一類之紙に而封申由也。

二月十二日。河北郡二俣村去年災に罹るを以て建築用の松材下附を出願す。

〔加州郡方舊記〕

一、四十九軒　去年九月二俣村火事に逢申家數

内　廿七軒　本百姓家

十八軒　下百姓家
四　軒　頭振家

〆

右火事家、百姓家に者松材木被下候得共、下百姓・頭振には不被下候。就夫二俣村之儀は、餘村に違紙を漉申に付、分限相應に紙漉小屋を懸、かせぎ仕候處に、折節夜中出火に付、家・小屋・紙漉道具等不殘燒失仕候に付、かせぎも可仕樣無御座候。指閊難儀仕候間、右下百姓共に茂、何卒紙漉小屋之分成共、松木被下候樣奉願候。勿論餘村之格に可仕儀に茂無御座候間、被仰付被下候者忝可奉存候、以上。

戌二月十二日

御所村　源兵衛
中橋村　久右衛門

山崎久兵衛殿
本保才三郎殿

二月十九日。家中無用の會合を行ふことを禁ず。

〔典制彙纂〕

前々より申談候通、無用之付合者遠慮有之筈之處、比日何會抔与候而、出合も繁き沙汰有之

候。尤文武之稽古迄も無用与申譯に而者無之候得共、料理も不輕、其作法不宜候得者、何會こ申はかこつけの樣に茂相聞候。近年諸色高直に而、何茂勝手難儀之段は相知申事に候得者、此節は別而無用之出合被指止、假令無據儀に而寄合被申候歟、又は文武稽古に而被出合候共、有合候品に而輕く料理迄に而、濃茶・後段等は被致無用、兎角萬端作法宜樣に被相心得可然候事。

一、親類・緣者又者由緒有之面々付合之儀は各別候。其こもに萬端かろく可被相守儉約事。

一、無用之付合等無之方ゟは、相改申達候に不及儀候得共、無其差別一統申談候事。

以上

二月十九日

この月は大盡なり

二月晦日。羽咋郡大念寺新村の百姓に鍬米を課せんことを議す。

〔袖裏雜記〕

一、二百十七軒　　羽咋郡大念寺新村家數

右新村之儀、寛永七年之頃より、若狹之者共御國浦ゟ請獵に罷越渡世仕候處、助左衞門・助五郎与申若狹者、幷御領福野村長三郎与申者、檢地之外砂濱に居住仕度旨奉願候處に、同九年勝手次第居住仕候樣に被仰出、其時分武部右馬允申渡引越居住仕、其後人數十人計も、段々

彼地より罷越由に御座候。其外は何も御領之者共年々罷出、家数右之通多罷成候。砂漬に御座候故、地子銀・諸役者御免除御座候。但、外海役・獵船役・他國四十物口銭・間役は上け來申候。御領之内、外之無高村者不殘十村方ゟ鍬米指出候故、本村並に十村裁許仕候。此村之儀、最初右之通纔に二・三軒之事に御座候故、鍬米之申儀も無御座、今以其通に御座候付、十村支配之外之様に、末々相心得罷在躰に御座候。尤宗門改人數等之儀者十村裁許仕候。地子銀出不申候故、人々勝手次第罷出家作仕由に御座候。依之御郡方百姓之せがれ・頭振等之内、何ゝ右之所へ所縁を求引込申に付、只今は商人躰之者多御座候。左候へば如何様之者引込置可申も難計御座候間、爲御縮之、向後外之無高村並に、鍬米爲出候様に仕度奉存候。左様に御座候へば、末々者も諸事十村随指圖、十村も支配之筋油斷仕間鋪与奉存候。御領國中無高村承合候處、不殘鍬米出申候。定之通一人二升或は一升、又は銀子に而出申所も御座候。此村之儀、一人一升宛出候様に被仰付可然与僉議仕候。

一、大念寺新村之村御印には、右外海役等四品之役銀迄御書記、此外諸役并屋敷地子御免除与御座候。外之無高村御印には、諸役之品々御ヶ條に記御座候付、諸役御免除与申御文言は無御座候。尤鍬米之儀役与申にては無御座候故、一統之村御印にも其子細無御座候へども、何も請取來申候。

右之通御座候。彼村之者悪銀を通用仕、於公事場に御吟味御座候。ケ様之儀も不締故与奉存候、以上。
に付申上候間、僉議仕通、外之無高村並に、鍬米被仰付候様仕度奉存候。此旨被仰上可被下

戊戌二月晦日

山森多宮
澤田十郎兵衛
佐藤仲左衛門
中村四兵衛
堀孫左衛門
今村源太夫
大塚彌五太夫
大坂御用 山東武左衛門
同 菊田逸角
河合右平次煩
高畠權太夫忌

横山中務殿

野村勘兵衛殿

右羽咋郡大念寺新村之儀、御郡奉行・改作奉行書付出候付、上之申候。私共致僉議候處、右書付之通被仰付可然奉存候、以上。

横山中務　判

野村勘兵衛　判

年寄中十人殿

二月晦日。金澤附近にて網を張り小鳥を捕ふることを禁ず。

〔御定書〕

前々より、金澤近邊三里四方に、小鳥網張候儀御停止候處、頃日者近在所々に網張、事外猥成仕形に付而、御餌指共指上候餌鳥之つかへにも罷成由に候。惣而待張網之儀者不及申、追懸網之儀も御制禁に候處、右之通猥成躰不屆之至に候事。

一、雀鷂・雀鳶・雀隼之儀茂、金澤近邊三里四方は仕不申筈に之候處、是又猥之躰に候事。

一、近年金澤近邊懸もち仕由に候事。

右品々者御停止候處、近年猥に罷成由に候。向後違背之輩於有之者、見付次第急度相とがめ申に而可有之事。

別紙之通被承知、組・支配之面々幷與力・家來末々迄、堅相守候樣に可被申渡候。組・支配之內裁許有之面々は夫々申觸候樣被申聞、尤同役中ゟ茂可有傳達事。

右之趣可被得其意候、以上。

二月晦日　　　　　　　　奥村內記

四月二日。幕府加賀・越中より望み得る隣國の高山を調査して屆出しむ。

〔温故集錄〕

享保三年四月二日幕府より、左の覺書を以て見當と成隣國の高山を書出すべき旨達しられたり。覺書寫。

加賀國より

越中

能登

飛驒

越前

右四ヶ國之內見當に可成山有之候はゞ、加賀國之內何と申所より、何國何と申山相見え候との事、書付出し可被申候。加賀國と他國と境之山は無用候。他領と地領との境山は相兼見當

地領は自領

に用可申事。尤一ヶ所より、他國二ヶ所も三ヶ所も見え候はゞ勿論之儀に候。一ヶ所宛より見候而も不苦、且又見渡之間少に而も遠き所程能候得共、無之候はゞ二・三里程に而も不苦候。

越中國より

能　登

飛　驒

越　後

右三ヶ所之内見當に可成由有之候はゞ、書付之趣右同斷。

以上

四月六日。金澤小立野に火を失し、如來寺・經王寺等類燒す。

〔政隣記〕

一、四月六日晝八時、小立野龜坂之際横山刑部下屋敷に在住之家來加藤助右衛門宅より出火。天德院無恙、併惣門・鐘樓・下馬燒失。如來寺不殘、經王寺番神堂之外不殘燒失。壽福院様等御位牌は、卯辰三寶寺へ奉退。其外與力・陪臣等百七十二軒類燒。同日如來寺和尚へ、以御使番遠藤紋太夫御檜重被下之。同七日富永數馬を以、時服三・白銀廿枚被下之。但右火事七半時頃鎭火、雨。

稍は漸く歟

光明院は浩妙院

〔政隣記〕

前記に有之四月六日小立野火事之節奉書火消

主　膳　民　部　岡嶋藏人　篠原縫殿　岡嶋彈正

品川主殿　生駒右近　奥村織部　小幡左京　奥村助六郎

仙石內匠　加藤主水

右之節如來寺・經王寺並松共燒失、火之粉多消兼、稍に防留之。

〔參議公年表〕

一、四月六日散樂、賜饗執政臣及近習頭幷近習。于八時小立野龜坂橫山刑部家來之宅出火。南風にて大火に及び、天德院の惣門・鐘樓、幷如來寺・經王寺・御持弓射場二區、凡燒失百五十餘軒。依之散樂は御中入にて相止。如來寺・經王寺所安置御位牌無異儀、寺僧共天德院の靈屋へ奉移、壽福院・光明院兩位牌は卯辰山三寶寺へ奉移。七時前雨降、火滅。卽夜如來寺和尙へ、以御使番遠藤紋太夫檜重菓子一組を賜ふ。七日以使番時服三領・白銀卅枚賜之。經王寺の一心院儀、御位牌早速奉移御喜悅に思召候。依之白銀十枚、於寺社奉行宅賜之。此度寺社奉行共早速如來寺へ不罷越、遲緩之儀に思召候。若御位牌火難に及候者、江戶表ゟ之被仰分茂無之儀故、急度可被仰付儀も可有之旨被仰渡。

四月七日。齋藤久右衛門、弟子永島長藏を殺害せんと請ひたるを許す。

〔神事雑記〕

齋藤久右衛門弟子に而、家來同事に召仕候永島長藏与申者候。當時藤田内藏允小者七助と申者、久右衛門方に當三月迄罷在候内より、男色之儀申懸候處、不任其意に付憤、前月十八日長藏町ゟ罷出候刻、谷小屋邊に而待合、切懸手爲負申候。長藏儀おくれ申仕形不屆に御座候間、成敗仕度旨久右衛門相願。内藏允儀も、久右衛門方より右之趣に候間、七助刎首仕度之旨願申候。其趣内藏允・久右衛門書付、長藏・七助口上書、永原權左衛門幷組足輕紙面都合六通、且又長藏与申分之品致相違候付而、寺西三郎平幷御横目ゟ申渡吟味仕、其趣言上書付、兩人口書相添、横山監物より指越候故、監物紙面共に入御覽申候。喧嘩同事之儀に御座候間、主人勝手次第殺害仕候樣可申遣候哉。長藏口書相違仕候段は、一往三郎平等承候迄に而、重而御吟味に者及間敷与奉存候。

一、右長藏儀別紙書付にも相見え候通、實之家來与申にては無御座、弟子之儀に候へ者、長藏兄博勞永島市郎兵衛ゟ相渡、市郎兵衛了簡次第に可仕儀に而も可有之候哉与、奥村勘左衛門久右衛門ゟ申聞候へども、とかく成敗仕度之旨申候由、勘左衛門申聞候趣、監物より之別紙も入御覽申候。

以上

四月七日　　　　　　　　　　　　　奥村伊豫守

主人願之通可爲殺害候、以上。

四月十一日。前田綱紀及び吉德、柳營に於いてその刀持を玄關式臺に上らしむることを許さる。

〔德川實紀〕

四月十一日云々、また萬石以上玄關敷臺のうへまでの持せのぼるは、三家・連枝・越前家其外品格による事なるに、近頃みだりになるもあれば、改めて其人を定めらる。松平加賀守綱紀・松平肥後守正容・松平讃岐守賴豐・松平若狹守吉德（中略）松平左京賴渡は、刀持せてのぼるべしとなり。

四月十八日。加州郡奉行等革多の爭議に關して決裁したる結果を通牒す。

〔加藤氏日記〕

拙者支配石川郡福富村・河北郡淺野村・能美郡三日市村穢多共、革剝場幷革買場之儀に付致爭論、書付出し候に付承届候處、入組候品に而難譯立候故、公事場に指出再三僉議有之、未致

落着候之内、御扶持人等下に而相緩、加州・能州革剝場之所に、淺野村・福留村・三日市村かはた共男女惣人數に、村數を致割符、境を極革剝取、且亦能州鳳至郡佐野村・珠洲郡川尻村・鹿島郡小田中村、此三ヶ所之かはたとも剝取候貢革之分も、淺野村・福富村・三日市かはた共人數に致割符、買請候様申渡候處、かはた者納得仕候旨書付出之に付、則公事場奉行中に相達致落着候間、佐野村・川尻村・小田中村かはた共に、右之趣得其意候様、各様より可被仰渡候、以上。

戊戌四月十八日

山崎久兵衛

本保才三郎

澤田十郎兵衛様

山森多宮様

右之通加州御郡奉行より申來候に付、寫遣候條得其意、かはた共被申渡請書付可指越候、以上。

四月晦日

澤田十郎兵衛

山森多宮

芹川村　兵助

山崎久兵衛等は加州郡奉行

六月廿一日。參覲に供奉する近習の士に奥納戸銀の借用を許す。

〔國事雜鈔〕

此度御參勤之時分御供被罷越候御近習之面々は、奥御納戸銀拜借被仰付候條、左之通被相心得候。

一、會所銀拜借無之面々は、被相願次第、右御貸銀相渡申筈に候間、拙者共迄御申聞可有之候。

一、知行高百石之當り五百目宛に候。

一、御發駕前月より、來年御歸國被遊十二月十五日切に返上可有之候。

一、利足一ヶ月五宛に候。

一、請人相立申に不及候。

一、證文は其頭々支配加奥書可被申候。

一、證文別紙之通御調可有之候。

一、組頭以上は、見合之判・印鑑先達而拙者共迄被指越、家來請取可被指出候。

一、會所へ奥御納戸奉行等罷出相渡申筈に候間、拜借之面々右場所に被指出、御請取可有之候。

一、頭支配無之面々は、御家老衆與書被相加筈に候。
右之通被得其意、但支配之面々にも御申談可有之候、以上。

六月廿一日

成瀬内匠
富田主膳
成田幸右衛門

六月廿二日。加賀諸郡に令し疫癘流行の村名及びその死亡せる人數を屆出でしむ。

〔加州郡方舊記〕
頃日御郡方ゑきれいはやり、村々之者共相果候に付、太鼓を打、送り申度旨相斷候に付、右之趣御月番迄御斷申上置候。就夫不斗御尋之品も可有之候條、ゑきれい相煩候村々、幷只今迄相果候人數、早速書付可指出候、以上。

六月廿二日

山崎久兵衛
本保才三郎
三郡・松任

三郡は加賀なり

六月。八丈島の宇喜多氏一族より去年合力米を受けたる謝狀及び今年更

酉は享保二年

にこの贈與を請ふの書到着す。

〔政隣記〕

六月左之紙面等到來。

覺

一、七十俵　白米四斗入

右者當嶋一昨年不作仕、拙者共難儀仕候に付、助成米之儀御願申上候所、宰相樣迄被仰上、御代官河原清兵衛殿御願被遊、去酉七月廿九日御船嶋着仕、慥に請取、如例夫々配分頂戴仕候。以御影若年之一類共助命仕、御厚恩之程難有仕合奉存候。此段何分にも、宰相樣御前可然樣御執成奉願候、以上。

村田助六　印　　浮田半六　印
浮田小平次　印　　浮田次郎吉　印
浮田半平　印　　浮田小助　印
宇喜多孫助　印

前田修理樣

八丈島渡之御船御出帆に付、一筆啓上仕候。先以其御表、宰相樣倍御機嫌能可被爲遊御座と

恐悦奉存候。次貴公様彌御勇健に可被成御勤と珍重奉存候。然者當嶋打續困窮に而、拙者渡世仕兼候趣、去申八月願上候所、宰相様江委細被仰上、七十俵白米四斗入、御代官河原清兵衛殿江御願、去酉之御船便被爲下置候所、無相違相屆、慥に請取申候。如前々夫々配分頂戴仕候。以御慈悲一類共助命仕、難有仕合奉存候。將又此度去麥作・田作共不作仕候而、難儀千萬存候に付、別紙願書一通差上申候間、何分に茂宰相様御前宜敷様御執成奉願候、恐惶謹言。

戌三月廿二日　　村田助六等連名　印

前田修理様

乍恐以書付奉願候事。

一、拙者共儀、毎度以御慈悲御合力米頂戴、存命仕罷在候。去年も御船便に御米頂戴仕、又候當年奉願候儀如何敷奉存候得共、去年田作・麥作共不宜、所及困窮候故、拙者共儀別而困窮仕、殊若年之者多、一分之渡世仕兼候。當麥作者大概に相見え候得共、打續候困窮故、拙者共儀續兼、難儀千萬奉存候間、如例年之此御船便、又候御合力米被爲下置候樣御取成奉願候、以上。

享保三年戌三月　　右七人連名　印

前田修理様

七月十六日。前田綱紀金澤を發して參覲の途に就く。

〔政隣記〕

七月十六日夜四時過御發駕、廿七日江戸發着。廿八日上使戸田山城守殿。

七月。前田綱紀參覲の途、越中新川郡泊町が海波の爲に侵さるゝを以てその位置を轉ずることを許す。

〔享保錄〕

一、享保三年八月越中新川郡奉行松田左兵衛物語に、同郡支配之內泊町、先年より海付寄せ、大半家を損申候に付、其所居住難仕候間、所替仕度旨泊町之者相願候に付、先御郡奉行高畠源藏承届、其旨言上に及候へば、近邊に所替可被仰付候間、其所見立相願候樣被仰出、源藏儀泊近邊に手寄宜所を致見分、所之者に遂僉議、五ヶ年以前に相願置候。其所堅田之地無之に付、沼田を埋立町を作り申圖に致言上候。然所其以後、沼田之儀は畢竟地震等に不宜筋も有之候間、外堅田之所無之候哉与、度々御尋等有之候へ共、宜所在合不申、或は堅田之處有之候而も、海際に遠く獵船之業難儀候由申候に付、最前之通に相願置候處、數年埒明不申內、彌海付寄、度々家も過分に及破損候に付、其度々重而願上候へ共埒明不申候。然處源藏儀は、宮腰町奉行に役替被仰付候以後、當戌二月左兵衛儀、泊町に罷越見届候へば、堅田之所有之

神谷太郎助に就いては正德五年十二月晦日の條參照

申は享保元年

候故、最前此所願上不申儀は如何之子細に候哉と致吟味候へば、所之者共申候者、此所は海へ遠く、手廻悪敷故相願不申由申候に付、能々致見分、間數相見屆候へば、指而不遠、最前願申候所は却而又波に危き所に候間、其品致詮儀候へば、左兵衛見立申堅田之所、一段と手段も宜候故、其品委曲繪圖に記、幸其所に相極候へば、過分沼埋申人力御入用も懸り不申候間、品々樣子書付を以左兵衛相願候處、一段宜筋に候由、年寄衆幷御算用場奉行も被申候へ共、願之通被仰出無之前に、戌七月御參勤之砌、境御旅泊に而右品々則左兵衛被召出、委曲御尋有之、前後之樣子委曲申上候處、畢竟左兵衛願之通に泊町所替被仰付候。依之此度罷出、年寄衆申渡幷御算用場奉行へ被仰出之品々承屆、遂詮議追付取替之儀申渡。

八月十日、神谷太郎助藩の老臣に屋敷の下附を請ひその許可を得たるを以て奉行等手續の不當を議す。

「御用雜記」

神谷太郎助

右太郎助儀、親神谷内膳一所に一柳監物殿跡屋敷之內、前田中務居屋鋪向にて拜領仕度旨、申二月十七日奥村伊豫守殿より紙面を以被仰越。右之所割屋敷等僉議之筋御座候而、相願申儀御案內不仕內、今般右之品直々相願、可被下旨被仰出候由、各樣より被仰渡候。

但惣而御屋鋪所願之儀は、夫々頭・支配方より私共方へ申來候へば、先後遲速之次第吟味仕、其上知行當り步數等僉議相極、外に指閊申儀も無御座候へば、相願申儀可爲勝手次第旨返答候。其上に而願書付上之、可被下旨被仰出由、各樣より被仰渡候へば、屋敷打渡申等に御座候。先年御算用者片山治太夫上地へ、同組之者大野惣右衞門拜領仕度旨直々に相願、可被下旨被仰出候由各樣被仰渡候へ共、場格と違申故何之案內も不仕、三・四年之內段々御僉議有之譯立、其上に而及案內屋敷相渡申候。今般太郎助願之趣も僉議仕、追而案內可仕与奉存候、以上。

八月十日

和田津右衞門

津田政太夫

成瀨內藏助
當隆
中川式部長
定

八月廿八日。前田綱紀江戶城に登りて參覲の禮を行ふ。

〔政隣記〕

八月廿八日御參勤御禮、御家老成瀨內藏助・中川式部被召連、御日見其外如御先例。但御參著後御勝れ不被遊に付、御登城御斷、御禮御延引也。

〔松雲公御夜話追加〕

一、享保三年八月廿八日御登城、御參勤の御禮被仰上候處、殿中にての御樣子例のごとく、

御座之間に而御目見。戸田山城守殿御取合、參勤仕候に付上使被成下、難有旨被申上候。其以後御のし鮑御手自被進候。いつもは二筋計に候處、今日は七つ八つ計茂活と被進候。先御代は御短刀御取被遊候得ども、當御代は御帶被遊候。是は去々年より此通に御座候。扨御退、山州の方へ御向ひ、悉旨御會釋被遊候所、今年は殘暑も御覺不被遊程之儀に候、道中可爲難儀と段々と御懇之上意にて、御國元之暑氣之儀も御尋、御請も品々事長、後は御嘲と申樣に罷成候。跡々は上意の品々も定りたる趣にて、去々年も當御代ながら其通候。嚴有公御代より以後無之事之由奉承知候。言之外御聲高に上意有之、淺野道喜も可承程の御樣子之由に候。(道喜承付而聞え不申候。)御老中四人御襖の外に祇候、戸田殿御一人御挨拶御申上候。今日は始終山城殿御一人にて御會釋有之候旨、御中屋敷に御歸館以後被仰出、右之段奉拜聽候。(富永全昌覺書之趣寫之置申候。)

十月三日。前田綱紀、徳川吉宗に陪して蹴鞠を觀る。

「徳川實紀」

十月三日飛鳥井少將雅香の蹴鞠を御覽じ給ふ。三家をはじめ、松平加賀守綱紀・溜詰・雁の間詰・奏者番・高家・諸有司みな見ることを許さる。事をはり、白木書院にて鞠道の御引物を下さる。

十月五日。前田綱紀の女豐姫逝去す。

〔御年表〕

十月五日豐姫君御卒去、前田大炊孝資室 御年三十二。御法號梅窻院殿、玉龍寺に葬る。江戸より御使者、御大小將原田又右衞門を以て御病中御尋の處、十四日金澤に到着。御悔の御使者、御使番丹羽武兵衞廣成十九日夜到着。此儀京都榮君へ仰遣さるゝ御使者、御大小將神田左太夫金澤より發足す。廿三日御使者定番頭脇田七兵衞直長を以て、御香奠白銀百枚大炊へ被下之。

閏十月廿八日。幕府新金銀の通用を令す。

〔改作雜集錄〕

一、十一月十六日寳永銀吹改、新銀三十割增の儀金澤に告來る。此御書出、閏十月廿八日御月番久世大和守殿御宅にて聞番召呼れ御渡。十一月朔日より御法の如く通用の儀仰渡さる。

〔浚新秘策〕

一、新令未御沙汰も無之處、閏十月十三日永來新左衞門与云商人あつて、潜に會所奉行笠間新左衞門・渡邊彌一右衞門・小幡平三。に告知らせ候旨。其後某にも中聞候趣不堪感稱、此所に記し置候。近日新銀通用之儀に付大替なる儀有之趣、慥成者爲知候。其子細を不申候はねば信用有之間敷候。此以前私知音之浪人、甚困窮に及一日を過し不得者有之候に付、不便に存候而少々合力をも仕、奉公人に仕立、或る役人衆之右筆に出置候。町奉行坪内能登守之旨。此者十二日夜新左衞門宅に

來り、年來之高恩可報樣も無之候處、此度存外成事に而、御自分德分を被得候儀有之候に付爲知申候。子細は此一卷可見申与て、袂より一卷を取出し爲見申候。扨申候は此書出、今月廿八日御當地幷京・大坂三ヶ所に而一時に相渡、十一月朔日より相改申候。然れば加賀守樣より只今之內に御拂代請取、其外にも前銀を申請、新銀に替置被申候はゞ、莫大之利潤与存候而、夜に入罷越爲知申候。新左衛門慈与承居候而申聞候は、扨々不存寄事、先以志之程不淺次第に候。年然それは成まじき儀与存候。公儀御用さへ萬端之御用を承る加賀守樣に候處、ヶ樣之儀を內心迄に存、出拔而銀子等申請候事は、何共成間敷候。近頃心指は過分に存候旨申聞候へば、彼者大に立腹仕候而申候は、某一身より精血をそゝぎ考按詞を調候役儀に候得共、此身之生て居候は御自分之御高恩、可報樣も無之氣毒に存候處、此度不存寄儀に而少報謝をも仕候歟与存候處、御用に無之においては何之詮もなく候、罷歸候まで、右之一卷を取而可罷出与仕候故、暫く相待候へ、少思案候。成程御申聞候趣に仕可申候。加賀守樣に御損をかけ申譯に而も無之候。宜敷相謀重而可申聞与て、又右一卷を取袂に納而、其者は返し申候。扨其夜せがれ長次郎にも不爲知、思案仕候は、此一事兎角可申上候。但廿八日迄之內、公儀御詮議相改候而、此書立出不申時には、手前之思慮も無に罷成、却而御用も不被仰付首尾に可罷成候。其時は妻子四・五人に而如何樣にも渡世可仕候。彼者申聞候通に罷成事に候得者、加

會所よりは會所へなるべし

金銀は新金銀なるべし

賀守様之御損料者莫大之儀に候。我身を顧可申儀に無之事と決定仕候而、翌朝右三人ゟ有増申聞、御書出し寫も相渡候。然處十五日因幡御前様御拂代百五十貫目、從右衛門督様會所より相渡申候。其處ゟ彼者罷越、先夜之儀者如何仕候哉と尋候故、されば此通先請取申候とて、加賀守様より請取申旨申聞候得者、殊之外悦候而、直に盃事など仕、少々銀子等贈遺申候。此右衛門督様會所より、不思議に銀子請取候儀如何と奉存候旨申候。隱德ある者は陽報ありと云事あり。其方には陽報可有之と申聞候へば、悦申候。

一、右之趣會所奉行御内聽にも達し、目立不申様に仕、惡銀を以不殘金銀に替置候旨。御家中月俸も不時に可相渡圖り仕、此儀も潜に奉伺候處、出拔候味不可然儀。其上御徒者以下は、右之趣も承出、替置候而も目立申間敷候得共、士中は左様にも仕がたく可有之候。若相替候はゞ殊外目立可申候間、旁不入儀之旨御内意有之旨。金澤會所奉行・御算用場奉行・京都御役人中ゟ、早飛脚を以、其心得仕候様に會所奉行より申遣候旨。

一、十一月中旬鳩巣先生ゟ致參會候處、先生被仰候者、頃日世間之取沙汰に、金銀大替未被仰出以前に、公儀よりは惡銀八千貫目を以金子に御替被成候。加賀守様よりは七千貫目を以、新金銀に御替被成候。公儀之不出來は兎角可申様無之候。加賀守様ゟ者、江嶋屋用藏と申而替屋内談申上、如此と取沙汰に申候。加賀守様は其役人中心得候而、左様之考仕間敷ものに

永來は前出
新左衛門

て無之候。公儀之不出來与一つ口にて難申候。扨又公儀ことたゞ千貫目違候者、さりとは御大名とて一つ咄に仕候旨御申聞候。永來事にて存知候得ども、餘儀与違、忠厚之情に而者先生与いへども難申上趣共故、此方之儀は御咄不仕候事。

一、右會所奉行早飛脚、金澤ゟ者閏月十九日到着、御算用場奉行（横山中務・野村勘兵衛）會所奉行（伊藤所左衛門・前田源兵衛・伊藤彌太夫）中ゟ潜に申遣、御領國中之金子を買上可然之旨申遣候。尤一圓沙汰不仕候様に申達候。會所奉行は翌廿日より、金子幷其外蠟等も俄に買上候。勘兵衛存寄候は、御領國とてヶ様之儀候ては、御仕置之筋立不申候。民と利を爭ひ申儀さへ有間敷儀、況諸人未存候儀を出抜候而、御徳分之付申儀に迄心附之儀不可然与存、譬ひ迷惑被仰付候共、其段は不及是非、覺悟之前に存候旨、横山ゟ示談之處、是も早速同心有之候。御仕置に候へば、執政中ゟ及内談不申候而者難成候て、幸廿二日各出座之日に付、罷出申演候得者、奥村豫州月番に付候歟、一番に、夫が成申ものに候哉、拙者共においては一圓不罷成儀与存候旨被申候而、同座一統に同事之存念に而候。會所奉行へも一往勘兵衛存寄物語仕候得共、中々不能了簡、小判以下買上申候。夫よりはや御國中さはぎ出候而、一二日之内に金子鳥目等莫大高直に罷成候のみならず、夜中は提灯を設け、市中之奔走大騷動に及申候。乍然會所に有合候少々之銀子迄代候故、さのみ町中に難儀仕候程の儀にも及不申候。其上町人も一二日之内に合点仕、會所には

家兄は青地齊賢

なしは返済の義

金子有合不申旨申候而、替不申候事。
家兄評、野村氏大臣之器有之与感入。中華に而はヶ様之事も間には承及申候。書にも顯候。此方之人はヶ様之儀を感じ不申候故、ありともなしとも答しくすたり申候。但如此に處置仕迄は成申候。其間にて年寄中にもふれ不申候、上にも忤ひ不仕候様に仕なし候事、餘程世事に練熟不仕候はねば成不申事に候。流石先生之御門弟に入被申候而、常々御ほめ被成候程有之候。

一、當地會所奉行へ御算用場より返書之趣は、委細相心得申候。乍然此金銀御新格之儀者、先達而京都御藏宿具足屋七左衛門方より爲知置候。但ヶ様之御徳分迄に心附候而者、御仕置之處立不申候。他國之金銀は何卒可成程者替置申様にも可申談候与、詮議に及候旨申來候旨。

一、右之趣に付隱密に仕候旨に候得共、人口にも入、江戸に而茂取沙汰には、勘兵衛會所に罷出急度申渡、先達而替置候金子不殘本主になし渡候旨申候。此一說は虚說にて候。前說之趣に候。中務・勘兵衛兩人申談之趣は御内聽に奉達候處、御親筆に而尤との御稱美有之候旨。

一、京都御買手役阿部三十郎・絹三左衛門よりは、會所奉行に者得其意候旨申越、御近習頭迄一往尋に罷越候。其内に新令相渡候故、會所奉行存寄与は齟齬仕候故、機轉を失ひ鈍成沙汰仕候得共、拙子存候は誤中之幸とも可申様に存候。京都に而之儀は、天下に聞え申儀に候處、一段之儀与

存候。

本文徳川吉宗の事に係る

十二月三日。徳川吉宗使者を遣して前田綱紀及び吉徳の寒候を問はしむ。

〔徳川實紀〕

十月三日寒候を御尋ありて、日門・尾水両卿・松平加賀守綱紀父子并に増上寺に御使して、各檜重を下さる。

是歳。物價貴きを以て江戸詰の近習に御納戸銀の借用を許す。

〔改作雜集錄〕

戊戌享保三年、近年諸物の價湧貴、却て米價賤しく、毎歳江戸詰の者及難儀候に付、會所銀知行當りの外、入用程御納戸銀借用仰付らる。一月五分の利息を加へ返濟の筈。但此銀御近習の輩まで也。

享保四年

正月十六日。江戸に於ける割場の規程を定む。

〔御定書〕

江戸割場御定書

一、當地に寄親無之足輕・本座長柄御小人、御供廻家中役人可致裁許事。
一、碓氷・箱根より内之御使は、前日一日、罷歸一日爲休可申候。但前日休息無之候はゞ、罷歸二日爲休可申事。
一、御國京都へ早飛脚、夏五日冬六日二時。此刻限より早參候はゞ、品により御褒美被下、遲參のものは路銀の内おさへ可申事。
一、中飛脚夏七日冬九日、此日限よりおつてく參候者、路銀之内おさへ可申事。
一、酒宴・博奕、幷傾城町見物場へ不參樣に堅可申付候。若相背者於有之は、殺害、御扶持を放、或品により過銀可申付事。
一、火事有之刻は、足輕・御小人一所に集、火消道具それ〴〵に爲持置、御使に參候者、斷次第無滯可渡遣事。
一、自然御屋敷之内火事之刻は、火消道具を爲持、風下へ參防可申事。
一、同火事之刻、自分之道具を除、火本に不出ものは、過怠可申付。火を防、自分之道具を燒候者は、致吟味代銀を以可被下事。
一、風吹之刻は、足輕人足召連罷出、所々屋根へあげ防可申事。
一、籠舍人は其日より御扶持方押可申候。御赦免被成、如前々於被召仕は、籠舍仕內之御扶

持方不殘可被下事。

一、又者之儀、主人より賄可申候。但主人御國に有之候はゞ、會所より賄可申候事。

一、籠舍人出入、民部・織部手形を以鑰可相渡事。

右御定之通相違有間敷者也。

亥正月十六日

前田對馬
奥村因幡
津田玄蕃
今枝民部

江戸制場

正月。耕稼春秋の著者土屋又三郎歿す。

〔耕稼春秋〕

此一部者、石川郡御供田村居住の十村、土屋又三郎逝世して直心といひける者の編たる物也。元祿の半頃ろ改作奉行園田左十郎と云者罪出來の時、不調法の品有て禁籠し、園田落着の刻に籠舍者一年計經て御赦免、十村役は被召放、百姓に成けるが、無程逝世しける。是を算用場の奉行共へ一應不達との咎にて、百日計遠慮してゆるされ、享保四年正月に病死、歳は七

十八歳かと覺るの由、或人語りける。當年・去年に借て寫て、直心の心意を盡して編たる物ゆへ、賞感の餘り毫を染る者也。

旹享保四年季秋仲旬　樂木

二月廿二日。金澤に於いて銀座福久屋新右衛門・紙屋又兵衛等禁牢に處せらる。

〔政隣記〕

二月廿二日於金澤、兩銀座福久屋新右衛門・同子十右衛門・紙屋又兵衛及銀見手代十人禁牢被仰付。是去冬以來金銀以好銀爲惡銀、以惡銀爲好と。依之於公事場御吟味之上、右之通被仰付。依之代銀座、平野屋半助・森下屋八左衛門・八尾屋三郎兵衛三人ゟ町奉行申渡。右に付、只今迄之銀座に而附置候封金銀、當時之銀座に而封附替に不及、其儘に而無滯致通用候樣町中ゟ申渡、御郡ゟは御算用場より申渡、侍中等一統ゟ者御月番奥村伊豫守殿より夫々頭等ゟ被仰渡。附、又兵衛二ヶ月立出牢、新右衛門は十月牢死、十右衛門翌年四月切害、銀見追放、手代出牢被仰付候事。

〔浚新秘策〕

一、今年三月銀座兩替師等禁牢之儀、野村氏工夫に而相知候樣に其元にて沙汰有之旨。銀座

一巻に、畢竟御算用場より詮議起り候。然共町奉行一圓貪着不仕了簡に付、先月御用番豫州へ御算用場より急度申達候へば、伊豫守殿嚴重御申渡、公事場吟味に罷成。其上にも町奉行心得沙汰之限に相聞え候に付、か様〳〵の申分に候へども、ヶ様之不心得にて締申事に無之候間、此處之趣を以早速吟味可仕旨被申渡候。然共公事場一圓精出不申候。其内に伊藤氏は持病指出引籠被申、當分奧村氏は御用番被請取候へども、兎角一圓手がゝり無之との儀に而、最早事濟可申躰に付、第一銀座福久屋新右衛門与申者、いやとも不被申姦曲之品々有之、先是を以御吟味可然旨、野村より伊藤・菊池兩氏へ内證、先月廿二・三日頃申談に候得ども、ふら〳〵仕候儀にて、漸當月七日始而公事場へ新右衛門罷出吟味之處、一往之申分聞届事濟可申樣子。勝より町奉行は、無念に候へども私曲は聊無之者之旨被申、公事場奉行も同事に存候旨に付、例之熊谷餘り承兼、存寄少々申達候上、左候はゞ新右衛門手前、并内匠殿へも私少々不審可申候間、御聞可被成哉与申候へば、成程共通可然之旨に付、一事不審仕候へば、ひしと言句あがり不申、たゝふかさね責付候へば、ひしと誤至極仕候旨申に付、則時に禁牢仕候。内匠にも同事に熊谷申讀候へば、ひしとよわり、不調法成儀申入候との事にて、不興にて候旨承候。兎に角も其分に而事濟申首尾に候處、熊谷が一言にて如此之躰、町奉行は不足論に、外之公事場奉行も不及是非に、奧村丈餘り成事共扱々笑止に存候。其上にも最早禁牢

仕候上に而、奥村丈申分には、先か樣にて候へども、私曲は無之躰之者に存候旨被申、同列尤同事之申分、內匠は猶更に而、元來富貴者故、ヶ樣之銀子などに目を懸、私曲仕事に而は無之候、無念迄と被申候故、熊谷申候者、一圓難心得被仰聞与存候。富貴に候程私曲有まじき、貧賤に有程私曲可有之事与申事は無事に候。若又此者決而私曲有間敷思召候はゞ、御支配之儀に候間、御請合可被成哉。左候はゞ其分に而可有之と申候へば、いや請合は難仕との事。兎角やくたいも無之樣子と相聞え、於御國者樞要之役所之衆如此に候故笑止事に存、又者奥村丈少々了簡も有之候はゞと存候故申進候。熊谷事は先生御目利にて、志と才力与難得者に候とて、拙子にも御引付被成候。誠に才力勇氣有之、學問少々有之、廉直にて、扨々御重寶成人与存感泣仕候程に候。大抵之者右之趣申候而は、中々奉行中受付候ものに而も無之候。又熊谷多言之內申損も可有之處、明辯に候故罪人も則時に屈服仕候。殊奉行を後立に持候て申事に候處、ひし〳〵と一座言句をあげ得不申程之才力勇氣、近頃奇特成人に候。

先生は室鳩巢

三月四日。前田吉德江戶の郊外平尾に放鷹す。

〔浚新秘策〕

一、三月四日嗣君平尾へ御鷹狩に被成御座、御船に被召候處、棹指候手子足輕、御直に金百匹爲御褒美被下候旨風聞有之に付、御供相勤候御徒小頭伊藤戶左衞門へ相尋候處、其趣相違

に付、委細左に記置候。前々より御船に召候得ば、平太夫・八太夫と申候兩人之足輕棹を相勤申候。四日にも如例被爲召候處、八太夫幷外一人罷出、棹遣申候。毎々今一人御見知被成候者罷出候。今日不相見は如何と御尋被成候。平太夫与申者毎々罷出候へども、去冬相公樣より御手木足輕小頭に被仰付候。今日も罷出候へども、外に御用相勤申候由申上候。重而被仰出候者、兩人共毎々宜敷相勤申候。今日八太夫能相勤候、金子とらせ候樣に御小將中迄御意に付、頭中申談、御挾箱に有合申旨にて、即刻爲致拜領可然とて、八太夫に金二百疋爲載申候。實は御挾箱に無之、御供衆之懷中より取出し申候旨。即座に被下候に付、別而難有御事に奉存候旨。

三月四日、前田綱紀、京極式部卿家仁親王の江戸下向に際し之を訪問すべきことを幕府に屆出づ。

〔政隣記〕

三月六日。京極樣只今御續は無之候得共、御由緒有之に付、彼方より御懇切に被成候に付、今般御下向御逗留中御見廻被遊候儀、御老中へ御屆に付、若御續相尋候者、八條宮樣之御簾中樣者、微妙院樣之御娘、陽廣院樣之御妹子樣に而眞照院樣与申候。右八條宮樣を天香院樣与申候。八條樣与申は御家に御ふさひ不被遊、京極に御改被遊候旨可申達旨被仰出。一昨四日御

用番戸田山城守殿へ參上相達候所、役人御續之儀心得に承度、覺書に仕可相越旨申聞候に付、其段罷歸達御聽候所、從御前御續御書出被仰出、則左之通相調入御覽、今日山城守殿へ相達。

八條智忠親王之御籏中者、加賀守祖父肥前守娘に御座候。則智忠親王を天香院樣与申候。

右之由緒に付、今以あなた樣より御懇意に被成候、以上。

三月六日　　菊池甚十郞

三月十五日。前田綱紀江戸城に登り德川吉宗の男兒を擧げたるを祝す。

〔政隣記〕

三月十五日。勅答に付惣出仕無之旨昨日申來。然所今朝若君樣御誕生に付、爲御祝儀一統御登城之旨、四時過間番湯原甚右衞門御中邸へ早馬に而參上、大御目付衆被仰渡候趣言上。于時今日中院大納言殿、於御上邸御招請に付御供揃有之候故、追付御馬上に而御急御登城。但御出前、御乘物一橋外迄遣置候樣被仰出、上下御供茂一橋外迄罷越有之、下馬迄騎馬御供仕、於芝野に被仰渡。御先乘御大小將御番頭井上勘右衞門、御跡乘御表小將横目成田幸右衞門、其外續く者一人も無之。下馬此方より御乘物に而御登城、御下り御兩殿樣御一所に御老中方御勤。

三月十五日。前田綱紀、前大納言中院通躬を本鄕邸に招請す。

今日は三月十五日なり

〔政隣記〕

一、今日於御上邸、中院前大納言通躬卿始而御招請。但通茂卿傳奏之内御參向之度々御招請、通村卿より利常公御懇意に而、當通躬卿茂御懇意也。依之此度御伺之上御招請。通躬卿未刻過御出、爲御迎御色代杉戶外迄御出、吉治公者まいら戶邊迄御出迎、御先立御大書院ゟ御通。御家老中階下。御退出之節者まいら戶邊迄御送、吉治公箱段下迄御送、御家老中敷付ゟ罷出。物頭以上御迎送共白洲ゟ罷出。御大書院・御小書院・御勝手座敷三所御餝出來。於御小書院御饗應、御料理三汁九菜、木具。御相伴前田伊豆守殿・山中丹波守殿。御勝手ゟ利倉善佐・木村玄竹・水嶋右近參上。御兩殿樣御盃御請有之。御盃之内寶生將監・同齋宮に小諷被仰付。頭分御退役いたい其外、ふくさ小袖・布上下。御料理相濟、小諷・一調・一管・仕廻・御囃子被仰付。御給事御表小將。

三月十六日。左大臣二條綱平江戶本鄕邸に臨む。

〔政隣記〕

三月六日二條左府樣御下向。七日京極樣御下向。十五日勅答、惣出仕止。同日中院大納言殿御上邸ゟ御招請。十六日二條樣御上邸ゟ御招請、御能は御斷、乘馬御所望に付、中之口前於御馬場御覽。綱平公、備後守樣御溜之間御緣頰より御輿に被爲召、御馬場ゟ御出御、近習頭六人、

御馬方奉行竹村九郎太夫・齋藤久右衛門・竹村仁右衛門・富藤龍左衛門、裏付上下着用乗馬。但右九郎太夫等ゟ（昨日御袷裏付上下被下之、御仲間。八人ゟこん木綿袷上帶等被下之）御馬廿三疋揃有之、内十九疋御覧。吉治公ゟも御所望に付三疋被爲召、酉刻御歸殿。備後守樣ゟ御仕舞御所望、羽衣・笠之段・融・千秋樂御舞。肥後守樣ゟも御所望に付、江口・加茂御舞。右爲御用意、朝より寶生大夫等相詰有之所、御用無之に付夜に入退出之所、俄に右之趣故、御歩・御算用者・御細工者之内罷出相勤、地謡等御手を合す。且午中刻御成、其節御式臺より戸之邊迄御迎、吉治公・利章君鋪付迄御迎。吉治公御先立被遊、御居間書院於御敷舞臺御慰物被仰付、小山次郎三郎勤之。御馬御覧後重而御慰物御覧。將又御長刀・御火入・御茶辨當等上置申度旨、御供人中聞に付、御廣間御縁ゟ夫々上置之。戌刻還御、其節御送如前。長袴も御斷に付、御頭・小頭以上一統熨斗目・半袴。右之外御作法如先年に付省略。還御以後爲御祝、御慰物三流被仰付、在合之人々ゟ見物被仰付。十八日京極樣御歸、十九日二條樣御歸。御逗留中御旅宿ゟ御勤等、如先年に付略す。

〔松雲公御夜話〕

一、享保四年三月十五日御上屋敷ゟ被爲入、明日二條樣御招請、御居間書院御敷舞臺にて御慰物被仰付等に付、御間之圍など御覧被遊候處、若狹守樣御居間の方より出申口に口を儲有之候得者、加樣之者共居間之方へ廻さるゝものに候哉と御意に付、松尾縫殿則時に御屏風抔

五番前文に三流とあり

立替、口をかへ入御覧相極申候。此御慰物被召寄候儀、今程二條様御心安事御座候間、若狭守様御挨拶被遊、居間へ御通被成候様にと被仰入、御居間書院御しつらひ、御慰物も若狭守様よりの御馳走と申にて被仰付候様にとの御内意に御座候。則十六日有之趣にて、御首尾よく相済、二條様夜四半時過歸御被遊候以後、御慰物五番假被仰付候。此思召は若狭守様え茂被懸御目、且又御家中の者ども、晝有之御慰物之時分は、見物仕事罷成不申候故、何茂見申度可存候旨にて被仰付、有合之者共へ爲御見被遊候。此時分は最早相公様には何の御用茂御座なく、尤御慰ものの御覧も不被遊、御溜りに被成御座候故、御早く御中屋敷え御歸可被遊御事に御座候處、不殘相濟候迄御待合せ、相濟候と追付御歸被遊候。御町嚀至極成御儀とも、何茂奉恐入候。御中屋敷え御歸は八時に候事。富永覺書之趣違成儀ゆゑ寫置候。私も相諳申候、

〔松雲公御夜話〕

一、享保四年三月の事に候。頃日二條左府様御下向、十六日には本郷御屋敷え被爲成候に付、前廉御慰物之品などひたと御詮議有之候。三年先一條様御下向の時分、松平大炊頭殿池田氏御筋目有之御招請御座候。其時分御馳走の様子不押立様に御間合有之、侍的馬・あやつりなど有之候。内證にては女中躍茂有之候旨。侍的の儀達御聽候得候者、奉射は今江戸に存候者一人も有之間敷候。歩射をも侍出で射たるものと被思召候。こなた様などにて左様の事は被爲成間

敷候。侍の足輕的と申ものに候旨御意御座候。信州小笠原には奉射の法傳來の由に候得共、後人の作意にて不慥候。京都小笠原は古來よりことの外傳受有之旨にて、御家に茂其頃之面々直判い物御座候得共、是以全は無御座候由。

三月廿一日。前田綱紀及び吉德、德川吉宗の男兒の出生七夜を祝して物を上つる。

〔德川實紀〕

三月廿一日。七夜の御祝あり。中略。同じ御祝により、日門よりは一種一荷、三家いかたぐ及び松平加賀守綱紀よりは三種一荷、若狹守吉德よりは一種一荷、中略。奉る。

三月廿一日。家中通稱を源藏といふものを改めしむ。

〔政隣記〕

一、廿一日今度御誕生之若君源三君与奉號に付、御家中源藏と申名可改旨被仰渡。

三月廿四日。前田綱紀の養女誠姫逝去す。

〔政隣記〕

三月九日三條樣御簾中壽君樣、當春以來御氣滯之所不御宜旨、六日夜告來、同夜御見廻之御

三月なり

壽君は前名誠姫

使御近習番小幡宮四郎に被仰渡、昨御夜話白銀十枚御目録被下之、今曉子刻過中仙道より發足、十五日京着。十九日夕京發、廿五日夕江戸歸着。十日御大切之由告來に付、小瀬復庵可罷越旨被仰渡、白銀十枚拜領、御内にては御紋付御羽織一・金廿兩、大野木舍人を以御目録被下之、申刻江戸發。但六月廿八日復庵江戸に歸參。

一、三條公福朝臣御簾中壽君樣、廿四日曉丑中刻御逝去、御年十九。葬廬山寺に、號春嶽院殿曉山貞照大姉与。右御逝去之儀、金澤にては廿六日申來、普請・鳴物等來月朔日迄御中陰之内遠慮之儀、御用番横山監物殿被申觸。江戸表に者、廿八日部彌三兵衞よりい言上告來、普請・鳴物三日遠慮。爲伺御機嫌頭分表向之人々御帳に付、御近習者中川式部迄奉伺御機嫌。來月四日迄御忌中也。吉治公は來月十四日迄御忌中也。三條公宰相樣に御悔之御使、御大小將淺加作左衞門に被仰渡、四月十二日江戸發足。御代香從金澤御馬廻頭河地才記被遣、御香奠白銀百枚被爲備、若狹守樣同十枚被爲備、五月十六日金澤發、同廿四日御代香勤之。

〔大野木舍人覺書〕

壽君樣御遺骸之儀、三條樣御先祖御代々御寺廬山寺に可被葬候。此段其表にも御届被成候。尤御出棺前後幷御葬送之儀等、堂上方之御作法に可被仰付候。左樣に相心得可申旨、今朝河村日向守を以被仰渡候付、其趣に奉心得候。

四月四日。羽咋・鹿島二郡の絈問屋を増し中買等の取締を嚴にせしむ。

〔元祿享保間留記〕

羽咋・鹿島兩御郡布かせ問屋、先年より子浦村彥九郎に申渡置候處、近年絈中買共一圓承知不仕、御公儀・他領に賣出、且而組寄不申由及斷候。先年より組々絈中買共に申渡置候處、違背仕段沙汰之限之仕合に候。依之彥九郎一人に而者相廻兼申に付、同村市兵衞儀爲相廻、中買共之內不屆之者有之ば、捕出候樣に申渡候間、組々絈中買共に、別紙之通急度申渡、請書付取置、其方共より書付可指越候。此紙面判形候而相廻、從落着可相返候、以上。

四月四日　山森多宮

澤田十郎兵衞

羽咋・鹿島兩御郡十村中

覺

一、御郡絈中買之者共、子浦村問屋より申渡候儀、違背仕段相聞候條、急度可申渡置候。重而左樣之族相聞候ば、越度可申付事。

一、御郡方に而出來仕布絈、御公領・他領者入込商賣仕旨、子浦村問屋より相斷候間、向後御公領・他領者に賣買不仕樣兼而縮可仕候。絈中買之者に賣買仕候樣に可申付候事。

一、納中買之者共、勝手次第賣渡族人より、口錢之儀中買之者請取置、右問屋に爲相改可申候事。

右問屋彥九郎一人に而御郡方廻り兼申に付、同村市兵衛指加候條、自今以後左樣に可相心得候、以上。

己亥四月四日

四月廿四日。侍從四辻實長使を江戸に遣はして前田綱紀の合力米を贈れるを謝せしむ。

〔政隣記〕

四月廿四日江戸へ、四辻侍從殿より御使者岡本式部を以、今度御合力米、御先代之通、大坂着米二百石宛、例年被進候爲御禮、御太刀馬代・干鯛一箱・墨蹟御掛物一幅・橋打杖一箱・御狀箱、吉治公へ御太刀馬代・干鯛一箱・十體和歌一貼・御狀一封被進、御家老玉井勘解由・成瀨內藏助・中川式部并永井織部・大野木舍人へ扇子箱一宛被下之。廿八日御直答被仰出、御料理被下之。

四月廿四日。能登の郡奉行等本年小物成の增額徵收の可能なることを上

申す。

〔筒井舊記〕

今般小物成割增取立候儀、先今年之分二拾割增・拾割增・五割增三段、其商賣人身上に應じ取立可申儀、御僉議之趣、先頃之被仰渡に付、御郡方頭振共詮議仕候處、右之趣取立申候而も、先今年之儀指支申儀無御座候。依之重而被仰渡次第、右之趣に取立可申存念に御座候。

一、三拾割增取立不足之儀、追而被仰渡次第指上可申候、以上。

己亥四月廿四日　　能州御郡奉行

御算用場

（是月は大盡なり）

四月晦日。石川・河北二郡の豆腐營業に關して上申す。

〔温故集錄〕

郡方豆腐役銀之儀御尋

石川郡・河北郡在々、役銀指上豆腐商賣仕者有之候哉之旨、御尋被爲成候。御郡方に役銀指上豆腐商賣仕者無御座候、以上。

享保四年四月晦日　　石川・河北御扶持人十村五人連名

山崎久兵衛殿

五月廿六日。江戸に於いて永井七郎右衛門等朝鮮来聘使迎人馬御用を命ぜらる。

〔政隣記〕

五月廿六日夜於御中邸、御先手三百石永井七郎右衛門正武、表御居間において被爲召、今般朝鮮人来聘に付、迎人馬被遣御用御直に被仰渡。誘引中川式部。暫有之、御使番山崎九郎右衛門由明、誘引右同人に而被爲召、御先筒被仰付、其上朝鮮人迎御用永井七郎右衛門申談可相勤旨、御直に被仰渡。御歩支配御免除。

五月廿七日。江戸に於いて山口武太夫等朝鮮来聘使迎御用を命ぜらる。

〔政隣記〕

五月廿七日朝鮮人御用割場奉行山口武太夫一信、會所奉行前田源兵衛・笠間新右衛門、聞番菊池甚十郎主付可相勤旨、御家老中を以被仰渡、宿割與力内藤勘助・渡邊五右衛門、御賄方小賄與力尾崎升右衛門・今一人於金澤夫々被仰渡。且御近習御歩横目曾田和兵衛并御横目足輕三人可被遣旨被仰渡。

但山口并輿力者、途中迄罷越候等。其外割場奉行永井仲太、且諸事御用伊藤平太夫、人數しらべ御貸衣類等之御用成瀨內匠は、今日夫々被仰渡。

五月廿九日。江戶に於いて星野九右衞門等朝鮮來聘使迎御用を命ぜらる。

〔政隣記〕

五月廿九日足輕並星野九右衞門儀、於江戶御厩方小頭並に被仰付、五俵与一人扶持御引足、都合廿五俵三人扶持に被仰付、御馬醫勤之。朝鮮人爲御用途中迄被遣旨。

六月二日。朝鮮使節來聘に付遠江及び江戶に派遣を命ぜらるゝ足輕・小者等の數を定む。

〔中川氏藏文書〕

享保四年朝鮮人御用之足輕小者日用等之數。

覺

一、八拾三人　足輕高

內五拾一人江戶より出人、內四人小頭。三十二人金澤より出人、內二人御橫目足輕。

一、七拾七人　割場附小者

内七拾四人江戸より出人、三人金澤より出人。

一、二百九拾七人　　日用高

内二人日用頭、六人杖突。

但杖突之儀、御定も有之儀に候得者、日用高には不足候得共、御近習頭中僉議の上、人高に無構六人与可申遣旨被申渡候。

四拾人　　金澤より遠州舞坂迄參候馬片口に附出向可申分。

百人　　金澤會所より御荷物持參遠州舞坂迄出向可申分。

百五拾七人　　江戸に被指越分。

右今般朝鮮人御用之足輕・小者并日用高如斯御座候、以上。

六月二日　　永原小仲太

式部様

六月四日。金澤に於いて横目里見孫太夫に遠江舞坂へ出發の準備を命ず。

〔政隣記〕

六月四日於金澤、當秋朝鮮人來聘に付御使馬、金澤よりも遠州舞坂迄就被指出候、今日御横目里見孫太夫元安に、當十日頃大坂之御左右次第發足可仕旨、御用番本多周防守被申渡、御

歩横目木田久兵衛、御横目足輕二人申渡有之。九日孫太夫へ白銀十枚被下、御目録周防守被渡之。且此間被仰渡候小拂御賄方與力岩原惣次郎へ小判三兩、久兵衛へ銀三枚、御雇町馬醫佐野十藏へ小判二兩被下。夫々支配人より渡之。十七日於江戸御横目足輕兩人、重而右御用被仰渡。廿五日於江戸永井七郎右衛門・山崎九郎右衛門へ白銀廿枚・御羽織二宛、山口武太夫へ白銀十枚被下之、御目録玉井勘解由渡之。右畢而七郎右衛門・九郎右衛門表御居間へ被召、御意有之。御内々を以越後縮二端・判金二枚宛被下之。畢而武太夫も被召出、御意有之。退出、於御次大野木舍人を以、御内々晒布二端・金十兩被下之。七月六日曉宿割與力幷御横目足輕二人出足。足輕勤方、前日於御中邸、御次大野木・成瀬・伊藤書立を以申渡。

七月廿二日。今年徴收する夫銀の増額を命ず。

〔筒井舊記〕

今年夫銀割増、一統先五割増に極可申旨被仰渡候に付、其段御郡方へ申渡候間、御家中之面々右之通に請取候様、頭・支配へ可被仰渡候。尤當春夫銀者先達而請取申候、此割増、幷秋夫銀割増共に、秋夫銀に一封仕、百姓共持參仕等に申渡候間、此段茂可被仰渡候。

一、右夫銀之内、至而少々之銀高も御座候に付、三ヶ一新銀相交申儀難仕御座候故、少々之銀子は新銀に而も、又者通用銀に而もかたづけ指出候様に申渡候間、其通に受取候様、是又

五割増は五分の一増なり

可被仰渡候、以上。

七　月

右之通御年寄衆に相達候條、御領國中村中に可被申渡候、以上。

亥七月廿二日　　御　算　用　場

改作御奉行中

七月廿七日。前田綱紀就封の暇を受く。

〔政隣記〕

七月廿七日、御歸國御暇之上使御老中水野和泉守殿御出、御拜領物御作法如前々。但御取持前田帶刀殿・六郷主馬殿。今日は備後守樣に今度御拜領之雲雀御披有之、御越被有之候に付、上使御案內次第、此方樣に御兩人共御越之筈に、昨日本多圖書御示合申置。御屋敷內乘物御乘用上使御左右相知、其儘足輕一人備後守樣御門前に附置、道御案內仕、東御門より中御門裏御式臺通、御勝手座敷に御通被成候事。

七月廿八日。大聖寺侯前田利章就封の辭見す。

〔德川實紀〕

七月廿八日、月次例のごとし。松平長門守利興・戶田伊賀守氏長參覲し、松平備後守利章就封

りいとま給ふ。

〔政隣記〕

七月廿八日、備後守樣へ昨日依御奉書御登城之所、御在所へ之御暇被仰出。御拜領物前々之通。

八月四日。朝鮮來聘使迎御用永井七郎右衛門等江戸を發す。

〔政隣記〕

八月四日永井・山崎・山口・會田、御横目足輕三人、星野、御使馬十疋出足。先年は不殘上馬之所、此度は上馬・中馬交不苦旨に付、從御國被遣分卅疋共中馬、江戸より被遣分不殘上馬、都合四十疋、外に從御國十疋病馬之建替被遣、惣合五十疋也。遠州舞坂より江戸本領寺迄之御用勤候筈之事。

八月廿五日。前田綱紀就封の暇を得たるを以て登營辭見す。

〔政隣記〕

七月廿八日、今日御暇之御禮被仰上筈之所、御痛所等御勝れ不被遊、其上强雨に付御斷。

〔德川實紀〕

八月廿五日臨時の朝會あり、松平加賀守綱紀暇給ひ云々。

前田綱紀の江戸出發は享保五年四月二日に在り

この書物は次條に見ゆる庶物類纂の事に係る

〔政隣記〕

八月廿五日、御痛御宜、御指圖次第御登城可被爲成旨、當十七日御老中方迄被仰達置候處、昨日奉書到來、今朝御登城御暇之御禮被仰上。於御座之間御懇之上意、御鷹二・御馬一御拜領等、御家老成瀨内藏助・中川式部御目見被下物等、都而御前例之通。

但、今日於御座之間、御家來仕立候書物被指上候樣被仰出、忝思召候旨井上河内守殿御挨拶之所、夫に付段々御懇之上意有之候由。

〔松雲公御夜話〕

一、享保四年己亥八月廿五日爲御暇之御禮御登城被遊候。其前方林大學頭殿より、懸御目候者御尋可申旨御内意之趣御座候間、御登城候者御知らせ候樣に申來候に付、則御案内有之候處、大學頭殿に茂御登城に候。御城にて御目見まへ、御溜り被成御座候所に大學頭殿御越、兼而申達候御尋之儀は、當時御刑法死罪・流刑或者追放等迄に候故、其輕重相わから兼申候。御國許に而者如何樣之刑法御座候哉。鞭なども被用候哉。且又いれ墨・耳鼻なと削申類も有之候哉与御尋に付、御先代より鞭を御用之儀は無御座候。いれ墨も無御座候。耳鼻なと削申事者有之候得共、當憲院樣御代之頃、左樣之儀一統相止申趣に付、其儀者當時被指止候由被仰達候處、大學頭殿奥に御越、又右之御席に被相越、唯今鞭を被用候而者如何可有之候哉と

御尋之處、先年も此儀者御僉議被遊候へ共、何とも其員數相當り兼可申候間、難被用可有御座候哉之由被仰上候。又過錢は有之候哉与御尋に付、是は其罪をあがなひ申ために過錢差出候儀は無御座候。輕き者末々には、か樣の儀おかし申者は、是程過錢出候樣にとの儀者御座候。惣而御領國御刑法之儀は、御先代より有來り候を被用、新法者曾而無御座候由被仰上候處、大學頭殿御申候は、耳鼻等の刑法者不仁成事に候、大明律に茂見へ申通鞭などに替申儀者尤の事と御申候處、相公樣に者左樣に不被思召候。古の五刑者聖賢の定置事に御座候得ば、古の五刑可然候。明朝に聖賢などの沙汰一圓無之事に候得者、明朝の刑法は如何可有之哉と被仰入候。先年より明律等の儀委細御吟味被遊置候故、此度の御請に御行當り不被遊候。大學頭殿にも、以の外明律等之儀は不案內に御座候由、右同時拜聽仕候。

〔松雲公御夜話〕

一、己亥八月廿七日井上河內守殿より、先日御暇御目見之御時分御拜領之御馬二疋爲牽被遣之。

福山靑毛　薩摩立戊年獻上　六歲　五寸

中村鹿毛　府中戊年御買上　六歲　三寸五分

右之書付平御口付の者孫太夫・齋藤久右衞門へ相渡候。則入御覽候處、薩摩立は野駒ゆゑ先

は物を見、馬けはしく有之候。其内に物見不申、静成馬者、又勝而宜敷、火事場等に而茂少も驚申儀無之候。津輕越中守殿ならびに松浦肥前守殿も御物語に候。其時御前にも御望之由被仰候得ば、肥後守殿此方にも薩摩立有之候間、可致進上由にて、松の葉と申御馬一疋爲牽被遣候得共、馬形不宜候故、御召料には成不申候。其故先年薩摩守殿へも御斷被仰達、御馬役之内薩州へ被遣、駒四・五疋求候而參り候得共、其内一疋も御用に相立候程成は出來不仕候由、右同日御意也。

九月十一日、前田綱紀、稻生宣義編する所の庶物類纂を幕府に献す。

〔又新齋日錄〕

享保四年九月十一日松平加賀守庶物類纂を献す。今年七月廿九日諸物類纂の事松平加賀守へ御尋。九月十一日戸田山城守を以て献上、同日慥成品之由及御沙汰。

〔榮康雜記〕

九月菊池甚十郎知定開番を以て、庶物類纂稻若水所編廿三帙三百六拾卷被献之。此書正編千卷續編千卷若水不終功而死。

九月廿七日。前田綱紀・吉德共に朝鮮來聘使の到着を淺草に觀る。

〔政隣記〕

九月廿七日朝鮮人着。依之登城往來等之砌、御家中見物仕度者は、頭分等を初、先年見物仕候者を省、御屋敷明不申樣代々罷越、尤目立不申樣見物爲仕可申旨、昨日被仰出候旨。今廿七日朝鮮人爲御見物、淺草日恩院御借用御假屋被仰付。但先達而御表小將横目成田幸右衞門罷越借用、御大工共罷越御假屋建之。今日卯中刻御中邸御出、御上邸内御通拔、池之端より屛風坂之末幡隨院後より淺草觀音裏門に被爲入、夫より日恩院へ被爲入。御先詰御近習番兩人、御近習頭兩人罷越。日恩院門内に而江嶋屋宗全・同斷太郎次御通懸御目見被仰付。未刻過朝鮮人東本願寺に來着、御見物相濟、申刻過東末寺前より御歸館。吉治公も右同所に被爲入御見物、御兩公御供人詰人も見物被仰付。御供人等に江嶋屋より菓子等一統出之。

但、御供數幷從者共、御平生に四十四人御減少、八十六人被召連。外に火事羽織持五人、才領足輕一人。

右到着に付、永井等之人々御役場遠州舞坂より致供歸着、上馬十疋直に御厩に入、中馬四十疋馬士共御上邸明小屋入。同日永井・山崎・里見・山口御中邸に出候所、表御居間に而一列に御目見、段々結構之御意有之。但三人一列、山口は一人御目見。

〔政隣記〕

十月十二日。前田吉德朝鮮人の曲馬を對馬侯宗義誠の邸に觀る。

十三日は十二日の誤なるべし 今日の儀とは前田利常の忌辰なるをいふ

十月十三日於宗對馬守殿、朝鮮人曲馬乘候に付、兼而被仰遣置、御見物に被爲入筈之處、今日之儀故御斷、御近習頭分五人、一役人宛に付鬮取に而罷越。武村九郎太夫・武村仁右衛門等八人、大野秋吟被遣。吉治公者被爲入御見物。御近習頭分等も十人見物に被遣。各布上下着用罷越。曲馬兩度有之。相公樣は今日廣德寺御參詣。

〔大野木克寛日記〕

十二日宗對馬守於御亭、唐人曲馬興行。依而兼ては御兩殿樣共可被成御座御沙汰に候處、日限段々相延今日に至る。於此相公樣には、徽妙院樣御祥月に付御出不被遊、少將樣に者無御構被成御座御見物、相公樣に者御近習頭御表小將等被遣見物之云々。

十月十五日。朝鮮來聘使歸途に就くを以て前田綱紀の女節姬等之を淺草に觀る。

安藝御前は節姬 英姬は未だ考へ得ず

十月十五日。今日朝鮮人宗對馬守殿被具歸國。依て兼而之如御沙汰候、爲御見物安藝御前樣・英姬樣・蓮姬樣日恩院ゟ被成御座御見物、以便宜觀音金龍山へも御參詣、入夜御歸被遊と云々。

〔大野木克寛日記〕

十月十七日。加賀藩の里子と幕府の上り者との比較に付答申す。

〔政隣記〕

十月十七日御國に里子与申儀有之候。右に准申儀公儀には上者与申儀有之由に候。外諸大名方にも右に准候儀有之哉。御急之品に而者無之候、寄々可承合旨、當二月御近習御用大野木舍人開番中ゟ申渡に付、內田玄德ゟ賴置候所、今日申來。則上之候紙面寫左之通。

公儀ゟ上り者成候と申儀、親重き御仕置、親類等無之女、上り者に成候而、御右筆衆などゟ被下候。或奥向之女中衆などゟも、望被申方ゟ被下候由。惡所抔、又者比丘尼之勤抔致候女抱置候者御仕置に成、其者行所無之者も、上り者と申に罷成候由及承申候。諸大名中之樣子は一向相知不申由申來。

上之候は前田綱紀へなりこの書面にて見れば上り者と里子とは全然同じからず

十一月四日。前田綱紀歸國の期を延ぶることを許さる。

〔浚新秘策〕

一、享保四年秋七月御歸國御暇御拜領之後、九月廿七日朝鮮使來聘之頃迄御在府被遊、聘使十月十五日歸途之後、御發駕之御沙汰御催有之、岐岨路通御上京之筈に十七日夜被仰出候。然處廿日頃より寒氣太甚、廿二日朝初雪三・四寸計積申候。若狹守樣幷姬君樣强而被仰上、向寒氣御旅行御用捨有之候樣に被遊度之趣に付、來春迄御在府御願有。十一月四日御願之通御老中戶田山城守殿開番へ被仰渡候。

姬君は前田吉德夫人

〔政隣記〕

十一月四日當御歸國御道中、最早雪中にも向候に付、從松姫君樣來春迄御發駕御延引之儀御願に而、今日戸田山城守殿に聞番被召呼被仰渡有之、爲御禮吉治公御老中方御勤也。右に付來春雪消次第御發駕与被仰出、御道中方御用油斷仕間敷旨被仰出。半太夫・主税御番等不相勤、是迄之通勤之。

〔御年表〕

四日戸田山城守殿へ聞番召され、御願の通仰出さる。依之備後守殿にも御滯府御願の處、御老中方許容なし。

備後守は大聖寺侯前田利章

十二月九日。前田吉德登營して德川吉宗より朝鮮の黃鷹を贈らる。

〔御年表〕

十二月十九日寒氣御尋の上使稻葉下野守・角南主馬を以て、檜重御菓子御兩公御拜領。吉治公御禮として御登城の處、御目見の上公の御安否御直に御尋、特に朝鮮より獻ずる處の黃鷹二聯賜之。上意曰、平尾下屋鋪地面廣平の由聞召る。他日是を以て放鷹して病を保養し慰べき由。吉治公御下城有て、公へ上意の趣仰上らる。依之十日公御禮として御老中御勤あり。

〔德川實紀〕

十二月十九日三家をはじめ、例の方々に寒氣をとはせ給ひ、檜重をつかはさる。中略。松平若狭守吉德、けふ御使賜はりしを謝してまふのぼりければ、御前にめしてねもごろに父綱紀が起居をとはせ給ひ、はた朝鮮鷹をも下されて、平尾の別邸はいと廣きよし聞しめしたり。放鷹すべしと仰下さる。

享保五年

正月朔日。前田綱紀疾むを以て使を遣はして登營新正を賀せしむ。

〔御年表〕

享保五年正月御在府。元旦御名代の御使者御馬廻頭長屋要人昌倫素襖を着す。を以て御太刀御獻上。御老中列座、御奏者番酒井修理大夫殿御請取。

正月十九日。幕府の老中を諸侯の訪ひたる際に於ける取次の慣習を前田綱紀に答申す。

〔政隣記〕

正月十九日御老中方ゟ御大名方御出之節取次之樣子、承合候樣間番ゟ被仰出、利倉善佐ゟ申談置候所、水野和泉守殿取次中ゟ善佐承合候付、札之紙面到來、間番より今日上之。

御老中方ゟ御出之節取次中、白洲中程迄罷出候御方々、大概どなた〳〵にて御座候哉。且又白洲中程迄取次中不被罷出、敷付より何程計白洲ゟ罷出候与申御面々も可有之と存候。是以大概何れいくらいの御方々と申儀承度御座候事。

付札。御三家様御出之節者、地福外ゟ取次一人罷出、御口上承之、在合之取次白洲中程ゟ罷出候。

宰相様・若狭守様御出之節は、地福之内際に而取次一人罷出、御口上承之、有合候取次白洲中ゟ罷出候。

中將之御方々様には、門之内に而御口上承、取次一人白洲ゟ罷出候。

少將幷御國持方様には、内之雨だゝきゟ罷出御口上承、外取次一人白洲中程。

拾萬石内外之侍從様方には、白洲中程迄取次罷出、下座莚際に外取次一人。

四品之御方様には、下座莚二・三尺ゟはづし罷出候。

公家衆・大納言・兩傳奏衆迄、御國持御大名様格に罷出候。

公家衆・中納言・宰相・少將共、白洲中程ゟ罷出候。

二月二日。前田綱紀使を京都に遣はして皇子の降誕を賀し奉らしむ。

〔御年表〕

是日丑﨟皇子降誕に付、右御祝儀の御使者御先筒頭茨木左太夫長基、二月二日京都に遣さる。是日は正月元旦

但此儀正月廿六日金澤にて仰付らるゝ處、廿日女御甍御の旨告来るに付、二月二日に發足也。

二月四日。十村等松の木を盗伐せし者に對する處分の慣例を答申す。

〔加州郡方舊記〕

一、寛文年中石川郡窪村市右衞門与申者、奉公人躰に而罷在候處、山より松木を盗かつぎ出候處、御足輕衆被見付候處、足輕衆によきに而疵付候故、禁籠被仰付、其以後橋爪に而御仕置に被仰付候旨、五十五・六年に罷成可申由。一歩免之儀は相知不申候得者、此時分は上免無御座樣承申候。よきは小斧

一、延寳九年七月石川郡別所村百姓久右衞門・次郎右衞門、頭振四郎右衞門、松木を盗家之内に遣置候處を、御足輕村五兵衞・石黑傳七・加藤十郎左衞門被見付候而、御吟味候上、百姓二人者町會所、頭振は公事場に而禁籠被仰付候。其暮二人之百姓者追出に被仰付候。頭振は里子に被仰付、其以後家財被下、所に歸申候。村中は一歩免上申候。

一、延寳四年河北郡夕日寺村百姓八右衞門与申者、松木盗伐、家材木に仕に付禁籠被仰付、追出被仰付候。

一、元祿二年正月石川郡窪村少兵衞・萬右衞門与申者、松木を盗、御吟味之上あらはれ、禁籠

被仰付。同九月七日御赦免に而、所ゟ罷歸り申候。赦に御赦免之由。村中一歩免は不被仰付候。
一、延寶八年石川郡窪村次郎右衛門与申者、山より枝等拾參候を、山廻泉野村市右衛門見付、禁籠被仰付。其以後御赦免被成、所ゟ罷歸申候。村中は一歩免上申候。ヶ様之類者多御座候、以上。

享保五年二月四日

田井　村井　野々市　御所村

田井以下は十村なり

御尋に付御郡奉行ゟ上る。

二月六日。家中の士、百姓より徵する夫銀を元祿九年前の額に復せしむ。

〔政隣記〕

一統夫銀、去年迄は割增迄懸爲指出候得共、今年より元祿九年以前之員數、新銀に而指出候樣、御郡方ゟ可申渡与奉存候間、左候者右之通御家中之面々請取候樣、頭・支配ゟ可被仰渡候、以上。

二月六日

野村勘兵衛

橫山中務

本多周防守樣

右御算用場奉行紙面寫に、周防守殿御添書を以御觸有之。

二月七日。前田吉德夫人、辰松八郎兵衞の操人形を見る。

〔政隣記〕

二月七日松姫君樣今年初而御表ゟ被爲成、操り被仰付。辰刻過出御、御慰物初り、御舞臺に而辰松八郎兵衞勤之。未中刻御中入、御好操幷淨瑠理三流被仰付、戌刻過相濟。御家中一統御大工迄、朝晝代合、兩御邸共人數三百十五人見物被仰付。御作法都而前々之通、役者料理一汁五菜、供之者ゟは銀子に而被下之。且姫君御表ゟ出御之内火事有之候共、前々之通板打不申樣可申渡旨、割場奉行ゟ被仰渡。

二月十日。領國内に住する刀鍛冶の人別を幕府に屆出づ。

年内とは享保四年には幕府より諸國鍛冶の調査を命じたるをいふ

〔政隣記〕

二月十日、年内久世大和守殿に而被仰渡候、御領國中刀鍛冶人別書付、從金澤到來、入御覽、則大和守殿ゟ聞番持參之寫。

加賀國金澤致居住打物仕候鍛冶

陀羅尼橘勝國　善　三　郎

二代目將監家次流に而、先祖勝家より當勝國迄六代家業致相續候。今以打物細工仕候。當時打物宜仕候。

兼若　甚太夫

志津三郎兼氏流に而、先祖兼若より當兼若迄六代家業致相續、今以打物細工仕候。當時打物宜仕候。

國平　吉兵衛

二代目將監家次流に而、先祖勝家より當國平迄五代家業致相續、打物細工仕候に付、寛永七年朝鮮人來朝之節、御太刀・御長刀仰付打上申候。近年病身罷成、當時打物難仕候。

家弘　吉左衛門

國平吉兵衛せがれ

父國平吉兵衛より致傳授、今以打物細工仕候。

家忠　四郎兵衛

二代目將監家次流に而、先祖勝家より當家忠迄五代家業致相續、今以打物細工仕候。

幸昌　藤右衛門

加州藤嶋友重流に而、祖父幸昌五郎右衛門より當幸昌迄三代家業致相續、今以打物細工仕候。

包廣　仁助

幸昌藤右衛門甥に而、藤右衛門より致傳授、打物細工仕候。

光平　忠右衛門

二代目將監家次流に而、先祖勝家より當光平迄六代家業致相續、今以打物細工仕候。

橋勝家　七　郎

二代目將監家次流に而、先祖勝家より當勝家迄七代家業致相續、今以打物細工仕候。

清　光　清右衞門

加州藤嶋友重より當清光迄八代家業致相續、打物細工仕候所、近年病身に罷成、當時打物難仕候。

清光長右衞門せがれ　清　光　長　兵　衞

父長右衞門より致傳授、打物細工仕候。

信　友　太郎右衞門

加州藤嶋流に而、父信貞太郎右衞門より家業致相續、今以打物細工仕候。

兼　卷　五郎左衞門

濃州和泉守兼定流に而、先祖兼卷五郎左衞門より當兼卷迄六代家業致相續、今以打物細工仕候。

清　光　五左衞門

越中高岡淸光流に而、先祖淸光又兵衞より當淸光迄四代家業致相續、當時打物細工不宜候。

國重　四郎三郎

兼若甚太夫甥に而、甚太夫より致傳授候。當時打物細工不仕候。

越中國今石動居住打物仕候鍛冶　茂　永　忠　兵　衞

越中國松倉鄉罷在候、則重筋目之者に而、先祖より義水迄拾二代家業致相續、打物細工仕候。但はやり申程之儀にては無御座候。

一本義水に作る

右加賀守領分に罷在候鍛冶如斯御座候。此外打物仕候鍛冶無御座候、以上。

二月十日

二月廿六日。前田綱紀、品川東海寺の住僧を江戸駒込邸に招請す。

〔政隣記〕

二月廿六日於御中邸品川東海寺御招請。但廣德寺より輪番。於御大書院御饗應、御飾被仰付。辰刻過御出、御色代より御大小將御番頭井上勘右衞門御先立、御通成瀨内匠・長屋要人罷出御挨拶仕。右御出之節御式臺鏡板に御家老中、敷付に御使番三人罷出、何も携候人々服紗小袖・布上下。御能巳刻過始、未刻前御中入、申中刻相濟、都合七番、狂言三番也。御相客德廣寺并桂香院伴僧十人、御勝手に利倉善佐・服部友益參上。右御能濟後段出、御退去。御兩殿樣御式臺迄御送。且御能番組左之通。

難波・頼政・松風・野守・祝言弓八幡。鍋八ばち・土筆・福之神。御乞、鐵輪・熊坂。

右寶生太夫・丹次郎等勤之。

三月四日。前田綱紀、萬福寺獨文和尙を本鄕邸に招請す。

〔政隣記〕

三月四日黃檗山萬福寺獨文和尙、今度入院爲御禮下向に付、御邸ゟ參上被仕度旨、尾州樣御醫師志賀快庵を以御申込に付、今日御上邸ゟ御招請、快庵も被爲召參上、兼而依御所望、兆典司十六羅漢之御屛風、御小書院に而御建置之。未刻御出之節、御兩殿樣御出迎、於御小書院三汁九菓御料理、木具。出家衆六人被召連、於同席御料理被下。御勝手ゟ横山數馬殿。右御饗應後狩野永眞・永叔・伯圓・卽譽に席繪被仰付。和尙ゟ墨跡御所望之處、御斷に而追而調來。右相濟、後段出。申刻過御退出。萬福寺供之下々迄、御料理夫々に被下之。萬福寺御給事御表小將。一統裝束服紗小袖・布上下。

三月十日。前田綱紀使を京都に遣はして女御の崩御を弔せしむ。

〔御年表〕

三月十日、女院崩御に依て、御香奠御献上の御使者、組外御番頭淺井左兵衛成正を京都へ遣さる。

女院崩御は二月十日に在り

三月廿七日。前田綱紀、江戸本郷邸附近延燒するを以て消防の事に從ふ。この日富山侯前田利興の下邸亦火く。

政隣記もと二月廿七日に作る今德川實紀によつて正す

〔政隣記〕

三月廿七日烈風、小松川邊御成有之。今日午刻過日本橋南三町目薄屋町より出火、御中邸懸板打候所、風筋不宜に付、觸拍子木被仰付、三之手御人數御上邸に被遣。中川式部押出候處、本郷口御門より御出馬に付、御跡に付、茶屋町より御先に乘出、多胡源五左衞門・長屋要人、御纏奉行御大小將村上杢左衞門、三十人頭山下源五太夫、御先手富田主税・武藤庄兵衞、御家老中川式部、水手與力罷越。御急に付騎馬之前後無構馳付。段々及大火、上野大猷院御佛殿御類燒。廣德寺幷桂香院・上野覺王院に、御持弓頭村田縫殿右衞門、御先手小堀左兵衞に御人數御渡被遣、御使番坂井八右衞門指添被遣候得共、右三ヶ寺共類燒。御上邸一・二・三之手相揃、吉治公御行列に而御邸內御乘廻御下知。夜に入段々火も遠く、御屋敷御氣遣無之に付、御人數に兵粮被下。三之手御人數戌刻過御返。戌刻前御歸殿、南御門より御出、御先騎馬御使番富永數馬、御先手伊藤平太夫、御集奉行御近習番高畠善太夫、定番頭大野木舍人、御使番渡邊傳藏、御表小將御番頭水原清左衞門、物頭並松尾縫殿、組頭並中村典膳御跡騎馬。右火事翌廿八日卯刻鎭火。

廿八日、廣德寺・桂香院・覺王院外圍可被仰付旨被仰出、御步横目等罷越。
廿九日、當御留守詰之人々到着。一昨日之火事下谷金杉一丁目迄燒拔、上野塔頭十三軒、御大名上邸・中邸等、廣德寺塔頭都合五軒、長門守樣御下屋敷も御類燒也。
廿八日、未刻前御出、上野御佛殿御類燒に付、爲御伺御機嫌戶田山城守殿御勤、上野御門主にも御勤。

四月二日。前田綱紀江戶を發し京都に向ふ。

〔政隣記〕
四月二日快天、卯刻前御上邸に被爲入、御見立之御客に御對顏。夫より御守殿に爲御暇乞被爲入、辰刻頃御大色代より御出。吉治公鏡板迄御送、御家老中敷附、諸頭御白洲に罷出、其外前々之通。大御門より御發駕、御中屋敷に被爲入候。
但御上邸一統布上下、御中邸一統常服。
松姬君樣御使者御進物、是又御作法前々之通。
御中邸未下刻御立、吉治公鏡板迄御送等、御上邸之通。御晝浦和、御泊桶川に御着。

四月三日。前田綱紀桶川驛を發し、十四日近江大津に着す。

〔政隣記〕

三日、辰刻桶川御立。御晝熊谷。御泊本庄。

四日、卯刻本庄御立。烏川水無之、歩渡に候得共、夫々御役人罷出。且上州厩橋城主酒井雅樂頭親本朝臣より、御馳走人物頭町田小助・白倉茂兵衛、所支配人芳賀七兵衛、人數百人召連出有之。御晝板鼻。御泊坂本。

五日、卯中刻坂本御立。御晝追分。御泊望月。

六日、卯中刻望月御立。御晝和田。御泊下諏訪。

七日、卯中刻下諏訪御立。御晝本山。御泊藪原。

八日、卯中刻藪原御立。御晝福島。御中休上ヶ松。御泊野尻。

九日、卯中刻野尻御立。馬籠御晝。御泊中津川。

十日、同刻中津川御立。御晝大湫。御泊御嶽。今夜御行列奉行・御横目廻狀を以、太合渡田・等渡場、一番より十二番迄舟配之覺、享保三年之趣を以申談有之。

十一日、卯中刻御嶽御立、太田舟橋役人先年之格。御晝鵜沼。御泊加納。

十二日、辰上刻加納御立、合渡舟渡役人右同斷。美江寺渡同斷。右兩舟渡之間に有之糸拔川、昨日之雨に而水出候段、加納御泊に申來候に付、富田主稅・富永數馬・高畠善太夫足輕等召連、糸拔川江罷越警固。合渡江い人々も、過半仕廻候は糸拔川江罷出、美江寺渡江も繰々に警固

足輕等可遣由示談に而、右三人先罷越候所、糸抜川幅三十四・五間有之、滿水之所、渡舟は無之所に付歩渡も難成、庄屋・問屋等に頼、自分才覺を以舟雇、人足も雇置候儀、御道中奉行より先達而足輕小頭山岡政右衛門に申渡遣候所、則夫々雇置之。但舟は十五人乘三艘之外は無之、人足は先百人雇、入用次第追々不差支樣申付置。

右富田等三人指引に而、御先御人數等相渡。夜明候而水段々落候に付、人は舟に而渡之、馬は人足指添渡之。最早三尺五・六寸に成候節、右三人より以紙面御案內申上候處、追付當番御筒・御弓等押來。于時舟小く、御乘物難入に付、一統歩渡に申談、右三艘を以川中仕切、人足百人上下に立、何も川越不指添歩渡、段々御行列相渡。御通行之節は、人足五十人相增、都合百五十人に而川中仕切、御馬上に而御越被遊候所、御鐙に少越、歩渡之者腰切有之。右舟は本田村庄屋久右衛門働雇出、人足も久右衛門才覺に付、右久右衛門幷年寄四人・船頭十郎右衛門に尤被下物有之。會所奉行支配之。御晝垂井。御泊醒井。附、富田・富永・高畠糸抜川而已に始終不罷在、伊藤・坂井合渡仕廻來引渡、富田等三人美江寺渡に罷越、足輕等も右に准じ繰越。

十三日、辰上刻醒井御立。御晝高宮。御泊武佐。

一、今日越智川・姉川御馳走人足五十六人・庄屋二人、馬渡川御馳走人足八十人・庄屋二人、右兩川歩渡、水一尺七・八寸計有之。

横關川水出候節は淵入候由。・安川水無之時は舟橋。但二艘に而橋懸置。右川共十一日之雨に而水出候段、醒井御宿主申候得共、見分足輕遣候所、歩渡心安由申に付、強而不罷出、一統歩渡。水一尺四・五寸。

但、右兩川共滿水之節者舟渡、舟二艘宛ならでは無之。爲御馳走右舟共出之有之。

一、今夜於御泊驛、左之通御横目中より觸出。

於京都旅宿、頭々幕打不申樣可申談旨被仰出候由、式部殿御申聞候事。

右之趣御承知可被成候、以上。

四月十三日

宮崎長太夫　多胡源五衞門

高畠善太夫　小幡團四郎

諸頭以上宛所

御書出有之、大野木舍人より小幡團四郎ゟ相渡紙面左之通。

宮崎長太夫　多胡源五衞門　高畠善太夫　小幡團四郎

右一人先ゟ罷越、一人は騎馬供、二人は大津に相殘可申候。其晩翌晩迄、大津より一人宛罷越相代可申候。

一、御夜詰に、大津より京都ゟ御供被仰出之次第

丹羽武兵衞　坂井八右衞門

先一人先ゟ罷越、此方到着之時分屋敷ゟ相詰、一人者騎馬供可相勤候。

青地藤太夫　富永數馬

右一人者先ゟ罷越、此方到着之時分夫々指引可仕候。一人者騎馬供。

村半藏

右騎馬供可相勤候。井上勘右衛門は大津ゟ相殘可申候。

土師清太夫

右京都迄先ゟ罷越、旅宿に罷在、勤方有之時分可罷出候。

村田縫殿右衛門　中黒六左衛門　別所孫太夫　武藤庄兵衛

右之内兩人先達而京都屋敷迄可罷越候。二組之足輕合拾人、内二人小頭相添、頭より跡に屋敷迄罷越候樣に申付、大野木舍人・成瀨内匠・伊藤平太夫・富田主稅等内申談、足輕共參次第門内之固可申付候。尤預り之弓・鐵炮は大津に指置、相殘候兩頭支配可仕候。門内之固申付候頭は罷歸、其後替々番所見廻可申候。此方到着之時分者、樣子見合、門外ゟも足輕出置可申候。翌曉兩人之内一人大津ゟ罷歸、彼所に相殘、兩人京都ゟ罷越次第、今一人も大津ゟ可罷歸候。足輕相替候儀者、頭共料簡次第候。

十四日、辰上刻武佐御立。御晝草津。御泊大津。今夜成瀨内匠、御横目中ゟ左之通申渡。

於京都御留守之内者、御近習番兩人・御近習御歩横目一人宛勤番仕外に相詰候に不及候。

各四人に而、折々御留守之内、旅宿より罷出見廻可申旨被仰出候事。

一、御道中奉行申談紙面。

一、京都御屋敷に相詰候人々、羽織袴着用之事。

一、於京都御使相勤候人々召連候家來、袴着用に不及候事。

一、於京都御勤之時分、三十人小頭・御供押、袴着用可仕事。

一、御供之者召連候若黨三人之儀者、主人勝手次第見合候者、袴着用爲致可申事。

四月十四日　伊藤平太夫等

一、御横目中より觸出紙面、并御道中奉行より觸紙面左之通。

今度京都に御供に罷越候面々召連候家來末々迄、不作法之儀無之樣に、頭・支配人等に可被申聞候事。

右之趣御家老衆御申聞候條、夫々御申談可被成候、以上。

四月十四日　宮﨑長太夫等四人

京都に罷越候者、大津に從者等相殘不申、人馬不殘指越可申候。

右之通被仰出候條、夫々御申談可有之候、以上。

四月十四日

伊藤平太夫等

御横目中

明日京都御屋敷江御着被遊、無程御勤被遊候等御座候間、随分手ばやに裝束等改御揃候樣に、御供之面々江可被仰談候、以上。

四月十四日

富永數馬　多胡源五左衞門

一、御夜詰に、於京都御使相勤候者共服紗小袖、熨斗目者着用に不及旨被仰出、伊藤平太夫申談。

同日、江戸・大坂御藏本鴻池新七方より、御道中迄以飛脚、當月朔日吉長朝臣御領國因州鳥取御城等火災、御城下一宇も不殘燒失候段及言上。依之於野尻驛、右鳥取火災に付、吉長朝臣江之御見廻御使、御大小將井上吉郎左衞門江被仰渡、御目錄白銀十枚被下之。於江戸右御使相勤、直に金澤江歸御返答可申上旨被仰渡。今日江戸到着、卽日御使相勤、夜に入御上邸江歸候所、於御居間書院吉治公御前江被召出、御口上御聞、披露矢部覺左衞門。同十八日江戸發、下通金澤江廿八日歸着、五月十一日御目見被仰付。

同日は十四日にして鴻池新七の飛脚は前田綱紀の野尻驛に着したる日にあるべし

〔政隣記〕

四月七日。金澤に於いて元祿銀等の通用は明年中を限るべき幕令を傳ふ。

四月七日於金澤左之通御觸有之。

元祿銀・寶永銀・中銀・三寶銀・四寶銀通用之事は、來丑を限、翌寅年より世上通用一切停止たるべく候。右五品之銀新銀と引替候儀者、最前相觸候通、彌寅を限可申候。

右可得其旨候、以上。

子　三　月

元祿銀等通用幷引替之儀に付、今般從公儀相渡候御書立、別紙寫差越之候條、組支配家來末々迄被申渡、御請可被上之候。且又組支配之內裁許有之面々は、夫々被申渡、御請指出候樣可被申渡候、以上。

子四月七日

前田美作守
本多周防守
奧村伊豫守

四月十五日。前田綱紀近江大津を發して京都に入り、十六日夜半退京して又大津に着す。

〔政隣記〕

十五日、寅中刻大津御立、御行列左之通。但十三日於武佐御泊被仰出。

附、江戸廻より少く被召連、大津に被殘。

押　福山　白波　足輕
押　御馬　同　御中間小頭　沓籠一荷　足輕　御長持一　御具足櫃

御步　三十人組小頭　御挾箱　手替　御鑓　手替
御步　合羽　間一丁程　三十人組小頭　御挾箱　手替　御鑓　手替　御鑓　手替

御立傘　御着笠　手替　手替　御刀筒　手替　御刀筒　手替　御刀筒　手替　御長刀　手替　御步　同　同　同　御步　同　同　同　御步　同　同　同

御步橫目　新番　御小將　新番　御持鑓　手替　三十人頭支配　坊主頭支配之内　足輕
御步小頭　新番　御乘物　御小將　新番　御床机　手替　同斷　足輕

御草履取　御挾箱　手替　御合羽箱　手替　三十人組小頭代
御草履取　御陸尺　手替　御挾箱　手替　御唐油箱　手替　三十人組小頭代

御茶辨當　手替　押者
御歩　押者
御中間小頭　御馬一疋　笄籠一籠　手替　押者
押者　歩御供之者共

草履取　當番騎馬御使番坂井八右衛門　押者
押者　若黨　鑓　挟箱　合羽　騎馬、青地

藤太夫・多胡源五左衛門・水原清左衛門・松尾縫殿・富田主税・村半藏此騎馬大津於御泊、奥取次役中村典膳殿仰付、御加候様被仰出、六騎被仰付、御近習騎馬共七騎也。大津より乗通相勤御家老中川式部・成瀬内藏助　御歩横目
御歩横目
御歩横目　以上

卯中刻京御着、河原町御邸江被爲入。巳刻御所司代松平伊賀守忠周朝臣江御勤、河原町御邸江御歸宿之所、追付伊賀守殿御見廻被仰置。未刻重而御出、二條御所并榮君様御勤、直に三條公福卿江被爲入、御立歸、又二條御所江被爲入、夜半頃河原町御邸江被爲歸御止宿。

一、河原町御邸江、御附物頭並奥村十郎左衛門直武を以、從榮君様成瀬内藏助・中村式部江、縮緬二卷宛拜領被仰付。

一、於京都御勤之御行列左之通。但十四日於大津被仰出。

御挾箱　御歩　同　同　御鑓　　　御長刀　　　兩御小將四人
御挾箱　御歩　同　同　御鑓　　　　　御先角　御駕籠
　　　　御歩　同　同　　　　　　　　御先角　　　　兩御小將四人

新番二人　　御横目（十五日小幡闘四郎）御歩横目　三十人組小頭
新番二人　　　　　（十六日永原彌平太）御歩小頭　三十人組小頭　御陸尺　手替

御傘　御草履取　　　　　　御鑓持　手替　　　押者
　　　御草履取　御合羽箱　手替　御鑓持　手替　御馬　押者　草履取　御挾箱四荷

若黨三人　惣鑓　三本　御使馬　沓籠　一荷　押者
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　押者　以上
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　押者

一、於京都觸出。

明日芳春院ゟ御參詣之御供、五時頃揃候樣被仰出候條、其御心得御支配方御申談可被成候、以上。

四月十五日　　　富永數馬　高畠善太夫

遊樂に罷出候者有之、御用之つかへに成申候間、不罷出樣可申聞旨被仰出候條、早々夫々

可被申達候、以上。

四月十五日　　　　　　　　　中川式部　成瀨内藏助

御　横　目　中

右之趣御承知被成、御組・御支配夫々不相洩候樣可被仰談候、以上。

四月十五日　　　　　　　　　御横目　四　人

右三十八頭山下源五太夫者大津に罷在候に付、三十人方御手廻等にㇵ、三十人小頭兩人呼寄、御横目中申渡。

十六日、大德寺芳春院ゟ御參詣、御歸之節大森三郎兵衞方ゟ御立寄、御長袴被爲召、二條御所ゟ被爲入。亥中刻頃御立、直に三條樣・高辻左大辨殿ゟ御勤。御歸、子刻御發駕、明六時頃大津御着。御行列御入之節御同事。

但、三條橋之邊丑上刻頃御通也。且今日於二條御所、左大臣樣より綿五把宛、内府樣より紗綾二卷、成瀨内藏助・中川式部拜領。

十七日、御用多く大津に御滯留。依之御先ゟ拔候人々ゟ、左之通守山・武佐幷高宮御泊驛迄數通に而相觸。

今晩御用繁御座候に付、大津ゟ御止宿被遊候。御用可有之人々迄呼戻候樣、式部殿を以被

仰出候。御用有之人々之儀者、舍人・主稅等に承合候而夫々申遣候。各之儀者御急用無之候間、被罷歸候に不及候。爲心得如斯御座候。明日は曉頃御發駕之筈に候、以上。

四月十七日　青地藤太夫　小幡團四郎

一、今夜於大津御泊、御右筆水野孫三郎・隱岐市郎兵衛兩人、一日御跡より御國ゟ歸候樣可申渡旨被仰出。是於京都旅宿致他行、御用之節在合不申に付、遠慮可被仰付旨に而、大津ゟ御返、御横目足輕指添遣候樣被仰出。尤兩人指添可遣旨も被仰出候得共、御横目足輕四人罷在候内三人町廻に指出し、一人有合候に付、其段多胡源五左衛門言上仕、中村九兵衛一人差遣之。

一、二條樣ゟ御土產被進物不知。

一、於同所、京都御仕廻御逗留之儀、江戶ゟ御案内、御使御近習番山崎彥右衛門知隆被仰渡。高宮御泊に而御老中方ゟ之御口上書受取、木曾路通發出之所、廿八日江戶參着、五月二日江戶發出、同十一日金澤ゟ歸着、御目見被仰付。

一、於同所奧村十郎左衛門を以、從女二宮樣色紙二通、近江八景・六歌仙公家衆筆、成瀨内藏助・中村式部拜領。

一、榮君樣より御附奧村十郎左衛門・金子平八、高宮迄御迎送被遣、度々被下物有之。

四月十八日。前田綱紀近江大津を發し、廿三日金澤に歸城す。

〔政隣記〕

十八日、朝大津御立。御中休守山。御晝武佐。御泊高宮。

　但、大津・京都御逗留中方々より之御進物不知。

十九日、辰上刻高宮御立。御晝長濱。御泊柳ヶ瀨。於同所左之通申觸有之。

　歩渡罷成候川々、舟出置候而も且而乘申間敷候。此段何も急度相心得可被申候、以上。

　　四月十九日　　伊藤平太夫　富田主稅

　　　御横目中

　右之通御道中奉行被申聞候條、其御心得可被成候、以上。

廿日、卯中刻柳ヶ瀨御立。御晝板取。御中休鯖波。御泊府中。於府中利家公御代之百姓子孫之者、先祖籠細工仕利家公江上之候所、御滿足之旨御直筆之御書被下候由持傳有之、則上之候所被留置。依之翌御發駕之砌、御通懸り之御目見被仰付、金子被下之。其員數不知。

廿一日、卯中刻府中御立、白鬼女之渡場水無之に付歩渡。依而奉行等不罷出。松平伊豆守殿より、御馳走人幷御馳走舟足輕人足等出。御晝舟橋森田。御泊金津。於此所左之通被仰出。

一、廿三日松任に御緩々被成御座、御用無御座者、段々御先に可被遣候。
一、廿三日御着之御時節者、金澤町端に而火こぼし申頃、御着城被遊候様に可被爲入候。
一、廿四日御寺御參詣可被遊候。

伊藤平太夫　富田主税

右之通今曉被仰出候間、其心得可被成候。且又松任より御用無之御先に可被參人々、頭・支配人より式部殿に御達申候樣、式部殿御申聞候間、其御心得可被成候、以上。

四月廿一日

一、今日小松御城代前田修理知頼、從金澤小松に罷越。明夜小松御泊故也。

廿二日、金津に而二條御所に之御使、御使番北川久兵衛陣矩、御歸城之上二・三日中に發足可被仰付旨、御月番前田美作守孝行被申渡。但六月六日發足、侍九人、上下卅人計召連罷越。

同日辰上刻金津御立。御晝大聖寺。御旅宿より利章君御舘に被爲入。御行列左之通於金津被仰出。

御挾箱　手替　御歩　同　同　粒子御鑓　但御好に而粒子　御先角
御歩　同　同　御長刀
御挾箱　手替　御歩　同　同　粒子御鑓　御鑓對　御先角

御　駕　　御小將三人　　新番一人　　御歩横目
　　御小將三人　番頭井上勘左衛門　新番一人　御横目永原彌平太　御歩小頭

三十人組小頭　　　　御草履取　　　御鑓持　手替　御中間
三十人組小頭　御駕昇　手替　御傘　御合羽箱
　　　　　　　　　　　　御草履取　　　御鑓持　手替　御中間

御馬沓籠持　　押者　　　　押者
　　　　　押者　御供之草履取　押者

従者合羽之儀者御旅舘に相殘し、若雨天に成候者見計指遣可申事。

右之内井上勘左衛門・永原彌平太者、不昔枝人御覽候處、御番頭井上勘左衛門・御横目者永原彌平太御供可仕候、若御供中御菓子等被下候者、勘左衛門差引可仕旨被仰出に付、御供仕候事。

一、御泊小松。於同所左之通觸、御道中奉行より御横目ゟ申渡、御横目中より夫々申談。

廿三日松任御中休に御綾与被成御座候に付、相定り晝休に而御賄被下候者共、何も御賄被下候様に御賄方與力ゟ申渡候。右之通夫々可被仰談候。

又觸

明日非番幷決而御用無之面々者、明日夜明候而勝手次第發足、金澤に罷越候樣可申談旨、

御家老衆御申聞候間、御承知被成、御組・御支配御申談可被成候、以上。

四月廿二日　　　　御行列奉行

御横目中

廿三日辰刻小松御立、手取川御通無之、湊に御廻。但手取川滿水に而者無之候得共、船橋懸候程之水高に付、湊より被爲入。湊舟渡場役人村牛藏・小幡團四郎。御中休松任に而、酉刻御着城。御道筋河原町より香林坊橋、石浦町坂野源七・端玄徹等門前より前田賴母前通、蓮池通石川御門より被爲入。御玄關に前田美作守・前田修理・玉井勘解由・前田左京罷出、御先達左京相勤。但玉井勘解由今月七日江戶發、下街道より十八日歸着。

同日夜、江戶表に之御禮使人持組今枝民部直方御目見。且如例拜領物御時服四・御羽織一、美作守被相渡。畢而發出。

一、表御居間に年寄中不殘、前田修理一所に被召出、退、次に又三郞・主膳・大炊被召出、去年御暇以來御滯府、且京都に被爲入候儀等委く御意共有之。

五月十六日。町奉行等茜染を專業とする茜屋理右衞門歿後の狀況を答申

す。

〔續漸得雜記〕

一、茜染之儀ハ御軍用に而、御當地に而茜屋理右衛門与申者、染方致傳受相勤來候得ども、病死後享保五年二月、町奉行入江八郎右衛門・金森内匠ゟ迄御尋之趣有之に付、御達方紙面左之通。

茜屋理右衛門當春致病死候に付、家業傳受等之儀に付而、段々被仰出之趣承知仕候。茜染仕御用相勤候者、理右衛門外にハ無御座候段、兼而承知仕罷在候得ども、理右衛門聟大野屋六郎右衛門与申者、理右衛門一所に罷在、養子之様に仕置候故、此者へ傳受仕可申儀与奉存罷在候。理右衛門相煩候儀も、死去可仕一兩日以前に承知仕候得共、指而重病とも不承候所、急に落命仕候に付、家業傳受仕者無之様子、早速理右衛門後家六郎右衛門等ゟ相尋候處、其砌は家内之者共取亂罷在候哉、有無之儀慥与相知不申候に付、其已後相尋候得者、理右衛門家業之書物等封印仕置候。聟六郎右衛門ゟ下染等之儀ハ傳置、畢竟此者但馬之本家ゟ罷越、致傳授候様に可仕旨、兼々理右衛門申候間、其通に仕度旨後家申聞候得共、右之品不分明之儀御座候故、承合候内六郎右衛門儀も二三日相煩病死いたし候。外にハ御當地に而傳授仕候者且而無御座候旨、後家申に付、其段先達而申上置候。乍然何とも但馬之本家ゟ、後家方より爲

申達候而成共、以後々々理右衛門家業相續仕、御用も相調候樣仕度、彌承合口上可奉達御聽与奉存罷有申候。頃日右後家手前猶又承合候處、但馬之本家と申候は、理右衛門兄に而筒井長右衛門与申候。此者儀御領主扶持人に御座候。其弟權三郎与申町人御座候由。長右衛門儀今以茜染仕候。當春も長右衛門方より書狀等も差越候旨申候。右兩人之外、故理右衛門をひども有之由後家申候。當町に而二俣屋六郎兵衛せがれ長右衛門与申者、當年二十一・二歳に罷成、聟故六郎右衛門をひに而御座候。此者理右衛門後家同道仕、右染物之書物但馬ゟ持參いたし、彼地に罷在候理右衛門をひ共之內に家業爲致傳授、其者をもらひ罷歸申度候。若理右衛門をひども難罷越首尾に候はゞ、此方より召連候六郎右衛門をひ長右衛門ゟ、茜染爲致傳授罷歸可申候。乍然彼地ゟ罷越候入用、自分には難相調旨申候。且亦於彼地、後家申達候迄に而は許容不仕儀も可有御座候哉。左候はゞ私共より筒井長右衛門方迄、紙面を相添候樣に仕度旨、里右衛門後家申候。

一、六郎右衛門儀、但馬本家へ罷越爲致傳授可申旨、故理右衛門存生之內兼々申候由。如何之儀に候哉、理右衛門より直に傳授仕儀不罷成候哉与相尋候處、後家申候は、先年理右衛門三十歳計之實子惣左衛門与申者、下染は傳授仕候得共、上染之儀は傳授不仕候故、理右衛門右染あげ仕候節、土藏又は間所ゟ取籠り染申候に付、妻子等にも爲見申さず候。惣而本家よ

り傳授不仕候者、不罷成旨申よし後家申候。

一、後家儀は御當地之者に而、故理右衛門但馬より罷越候砌より夫婦に罷成申候。但馬に罷有候權三郎儀、理右衛門御當地へ罷越候時分召連候而、二・三年御當地に罷在候に付、後家儀但馬に罷越候而も見知候由申候。且又故理右衛門先年召仕候小者八内与申者、只今永井織部方に罷在久助与申、此者度々但馬に飛脚に差越、四年以前にも相越申候。後家但馬に罷越申儀に候はゞ、織部方にはは代り人相立、久助召連候樣に可仕候。於彼地筒井長右衛門等、久助見知罷在候由、後家申聞候、以上。

五月十六日　　金森内匠判

入江八郎右衛門判

前田修理樣

玉井勘解由樣

成瀨内藏助樣

中川式部樣

五月廿八日。町奉行等雛人形の價格を制限したることを上申す。

〔加州郡方舊記〕

菖蒲甲はく置申間敷旨、從江戸申來候に付、是に准じ候物共結構不仕樣御申渡被成候故、私共手前にて相考候處、毎春致商賣候雛、近年別而結構に相見え、右に准じ候品与奉存候に付、雛商賣人手前承屆、雛道具等上中下三段之直段付仕、各江懸御目候處、下之直段に可申旨被仰渡、奉得其意候。則下之直段付左に記申候。

一、雛糸地木綿裝束　一對　代新銀五匁

一、人形糸地木綿裝束　一對　代新銀三匁

一、並粉蒔繪乘物一挺　代新銀五匁

一、並粉蒔繪長持　代新銀七匁

右下之直段ゟ高直成雛道具、自今商賣不仕、尤誂申者有之候共、此位ゟ宜品請取申間敷旨、急度可申渡と奉存候、以上。

五月廿八日　金森內匠

宮崎長太夫

本多周防守樣

右雛之儀に付、當町御奉行中ゟ御用番本多周防守殿江指出候紙面之趣、御郡方江茂可申渡旨、周防守殿被仰渡候に付、右紙面寫遣候條可得其意候、以上。

五月廿九日。幕府前田綱紀の養女箆姫を鶴岡侯世子酒井忠寄に嫁せしむることを許す。

〔政隣記〕

六月四日御養女箆姫様御儀、庄内候酒井左衛門尉忠眞朝臣御嫡主計忠寄君江御縁組、御願之通、前月廿九日於殿中吉治公江迄被仰渡旨、今日被仰進。依之江戸江御大小將番頭中村刑部、大聖寺江御大小將中村兵左衛門御使被仰渡、六日發足。但即日年寄中、次に御家老中御居間書院江被爲召、右之趣御意。六日物頭以上被爲召御弘、其座に而御祝儀申上。附、主計様は御養子、御實ハ酒井石見守殿御二男也。且御家中主計与申名、改に不及旨被仰出有之。

一、右爲御禮江戸表江被指出候御使柄、月次御機嫌御伺之御使より少重き者与、御老中御差圖之由申來、月次御伺之御使者平士に付、御僉議之上中村刑部江被仰付。

六月廿一日。淺野川出水し觀音山・愛宕山等崩壞す。

〔政隣記〕

享保五年六月廿日夜より廿一日大雨、淺野川水出、小橋落、川末家八軒流。其外所々溜水多、道橋大に損す。且又寶圓寺谷之上崩、小家五・六軒潰れ、觀音山・愛宕山崩れ、家三軒潰れ、

蓮昌寺山崩、堂突出、庫裏土下に成、死人有之。所々土塀等損じ多し。

七月九日。幕府大聖寺侯前田利章が參覲の期を延ぶることを許す。

〔袖裏雜記〕

其方儀當月中可有參府旨相達候へども、同氏加賀守不快故、八月末九月初頃致發足度由願付而、其通被仰出候。老人其上病氣之儀に候條、其方事暫之儀候間延引有之、加賀守參勤之節可致參府旨被仰出候條、可被存其趣候、恐々謹言。

七月九日　井上河内守

松平備後守殿

七月十六日。先に前田綱紀參覲の延期を請ふ爲發したる使者、許可を得て金澤に歸着す。

〔政隣記〕

七月十六日。當秋御參勤御時節之儀、當五月御馬廻組本保十郎平御使に而御伺之處、同十八日七月中予被仰出候旨之御奉書御渡。翌十九日江戶發、同廿九日歸着。然處暑氣御痛に付、冷氣に向御參勤被成度段御願之御使、山本新左衞門御馬廻組也。に被仰渡、前月廿六日江戶參着、御使相勤候所、御願之通被仰出候由之御奉書受取、今十六日金澤に歸着。依之御禮之御使御馬

廻組頭青地藏人ゟ被仰渡、十九日發出、白銀廿枚・御羽織一拜領、八月十二日歸着。

八月十六日、江戸に往復する飛脚業の沿革に關し上申す。

〔温故集録〕

覺

一、江戸中荷持之始りは寛文年中、其頭町御奉行は里見故七左衞門樣・岡田故十右衞門樣と承傳候由。町人共他國ゟ罷越候刻、刀を指申儀御停止之旨に付、御荷物幷御家中荷物廻し申儀に御座候。商人荷物之樣に仕候而は、他國路に而相滯申品御座候に付、三十年以前中荷持共、口上に而御窺申上、御聞屆に而、先年之通只今以幸領に罷越候もの、苗字を名乘、刀を指往來仕候由。町御奉行は和田故小右衞門樣・江守平左衞門樣と承傳候由、中荷持之内淺田屋勘兵衞・八田屋淸右衞門申候。先年之留帳等は無御座旨申候。慥成儀相知不申候。

一、同三度飛脚立始りは元祿六年、町奉行は和田小右衞門樣・江守平左衞門樣。荷物幸領苗字を名乘、刀を指江戸往來仕候儀は、三度飛脚相立候刻、口上に而御伺申上、中荷持之通と被仰渡候。夫より只今以右之通に御座候由、三度飛脚之内竹松屋三右衞門申候。先年之留帳等は無御座由申候。慥成儀相知不申候。

一、能役者之内御扶持人日置長左衞門・北村八兵衞、先年より江戸往來仕候に付、樣子相尋申

候處、刀を指他國往來仕儀無御座候旨申候。

子八月十六日

九月二十日。前田吉德夫人逝去す。

〔德川實紀〕

九月二十日、この夜松姬の御方（常憲院殿御養女、實尾張中納言綱誠卿女、松平若狹守吉德室）逝去し給ふ。

廿一日、きのふ松姬御方うせ給ひしにより、尾張中納言繼友卿に少老大久保佐渡守常春御使して御弔慰あり。よてけふより音樂停廢する事七日なり。

廿二日、松姬御方の御事により群臣御氣色を伺ふ。松平加賀守綱紀在封により、奉書をもて御弔慰あり。

廿三日、松平若狹守吉德がもとに、井上河內守正岑御使して、松姬御方法會の料白銀千枚を賜ふ。

廿六日、松姬御方の靈柩を傳通院におくり參らせ、光現院と謚す。よて留守居・留守居番・目付をはじめ多く扈從し、傳通院には寺社奉行・目付こくまゐりて葬事を監護せり。

〔浚新秘策〕

一、光現院様廿日夜九ッ半頃御逝去被遊候而、御城に相達候處、姫君様之儀に候故、御落命なども遅く相知可申候、御落命何時之儀に候哉可申上旨上意に候處、九ッ半に而者有之間敷候條、廿日につき可申旨に而、廿日に御忌日相究、嗣君御忌明茂十一日に相成、十一日御登城被成候。上様にも當分御素食被遊候旨。

一、右御病氣之儀、於御前御典藥中に段々御僉議有之候。最前被申上候趣とは、御請轉展仕候旨沙汰仕候。御守殿女中衆、三十五日過候得者、常々上様に御目見之女中は、御本丸に被罷歸候筈。其外は御暇被下候筈之旨。

一、御局幷梅津及若年寄女中三人、以上五人尼に成被申候旨。

一、現之字最初は顏い字に而光げん院様与讀申旨達上聞に候處、出家之上に而はヶ様に讀候而も、誤に而可有之候。現い字に而可有之旨上意之段、御導師御本丸より早打を以傳通院に申來、相改候旨。

一、廿三日井上河内守殿上使として、御香奠千枚御上屋敷迄被進候。於傳通院十月二日より四日迄千部之御法會有之候。四日御法事は、卯の刻前相濟候。五時頃爲御名代水野和泉守殿御勤被成候。則山門より內御徒頭衆・御徒目附と罷越、此方之足輕無間之分指除、御歩目附に而堅被申候。御家より山門幷本堂堅之、物頭・與力等勿論番所を離れ蹲踞、其外頭分山門之內

迄被罷出躋躡之事。右之節嗣君御出不被遊候。惣而和泉守殿筋、御成同然に留有之候。
一、死刑に可被處罪人兩人、中山出雲守殿被召連、傳通院階下に而出家十念を授、一人に鳥目一貫文宛被下、爲赦御宥免候。
一、御法會之內、上下賄被下候人數一萬三千三百餘人、尤出家は此外也。且又御一家樣方御料理木具。御役人衆は御料理御斷に付、塗膳に而御食事有之。使者には木具。惣出家中には爲御賄代金子を以被遣候。惣而御寺に相詰候御徒以上に、御菓子被下候事。御家之役人中に、方丈より面々小さき檜重被相贈候。
一、齋藤長八郎殿初、御守殿附之衆中幷御法事御奉行者、晝夜御寺に相詰候。
一、御內々上意有之旨に而、嗣君御素食者六日朝御解被遊候。相公樣御道中御素食之處、六日御着之日御解被遊候而、御待請御客衆には如當御料理出申候。
一、光現院樣御葬禮・御法事共、かろく御取さばき可然候。御靈屋も被指止、淸泰院樣御靈屋へ御位牌御納可然候。大猷院樣御靈屋燒失之後、御位牌は嚴有院樣御靈屋に御移被遊候例も有之候間、此通可然旨、井上河內守殿爲上使御出之刻、御覺書御持參に而被仰談、其通に罷成候。

已上十月

九月廿三日、前田綱紀金澤を發して參覲の途に就く。

〔政隣記〕

九月廿三日夜戌刻過御發駕、十月六日江戸御着。但御中跡ゟ。吉治公御忌中に付、御例之通蕨驛迄御迎に御出不被遊。遠田勘右衛門御使に同驛迄被遣之。翌七日上使水野和泉守殿御出、冬に至御參勤之上使此度初而に付、服之儀段々御僉議之上、一統熨斗目着候樣被仰出。

〔政隣記〕

松姫君樣九月九日御灸被遊候處、御肝氣御痛、其後不御宜、十九日就被指重候、早飛脚を以相公樣ゟ御注進、廿四日今石動御晝休之内ゟ申來。從若狹守樣其後御樣子被仰上候御使、御大小將松原善右衛門、廿日夜江戸發出、同日福岡に而御目見、御口上申上。姫君樣廿日子ノ下刻御逝去に付、御案内之御使江守角左衛門ゟ被仰渡、廿一日曉七ツ三步に江戸發出、高岡と今石動之間あらまたと申所に而御目見、御口上申上。其夜御泊小杉驛に而、兩人共御目錄を以白銀十枚宛被下、江戸表ゟ被歸。右早打御使に而御重病之儀被聞召、御見廻之御使御大小將荒木津太夫ゟ被仰渡候所、追付薨御之儀相知候に付、津太夫御使被差止。
右之趣金澤ゟ者廿五日晝相知れ、依之御守殿附杉江杢左衛門急速出府之儀、年寄中ゟ相斷、早打に而罷越、境御旅館ゟ罷出、右之趣申上相伺候所、尤に被思召候。戸田清太夫は老人之

事にも候間、相越可申談候、十月三日頃參着之圖りに而可罷越旨被仰出、御目見被仰付。

九月廿五日。前田吉德夫人逝去の報金澤に達す。

〔政隣記〕

同廿五日於金澤左之通御觸有之。廿六日頭分以上、爲伺御機嫌御用番宅に參出。

松姬君樣當廿日夜御逝去被遊候。依之普請・鳴物・諸殺生、來月二十日迄日數七日遠慮可仕候事。

但鳴物之儀者、致家業候者幷役者は格別、其外者若狹守樣御忌中之間指扣可然候。殺生之儀も、若狹守樣御忌中廿日之間遠慮可然候事。

一、頭分以上、明廿六日爲伺御機嫌、御用番宅に可有參出候事。

右之趣被得其意、組・支配にも可被申渡候。組等之内裁許有之人々者、其支配にも相達候樣可被申觸候事。

九月廿五日

十月六日。前田綱紀江戶に着す。

〔政隣記〕

十月六日夕七時前江戶御中邸に御着。同半時頃御出、吉治公に御對顏、追付御中邸に御歸館。

但前記之通吉治公御忌中故御迎等無御座。

前記は九月廿三日の條に出せり

〔御年表〕

十月六日御着府、翌七日上使水野和泉守殿參出。

十一月朔日。大聖寺侯前田利章參覲の禮を行ふ。

〔德川實紀〕

十一月朔日、月次の拜賀あり。松平備後守利章・鍋島和泉守直堅參覲す。

十二月廿八日。前田綱紀參覲後初めて登營し德川吉宗に謁す。

〔德川實紀〕

十二月廿八日歲暮の朝會あり。御感冒により外殿に出給はず、群臣みな宿老に謁す。三家・溜詰並に松平加賀守綱紀は御座所にて拜謁す。綱紀は參覲なり。

〔政隣記〕

一、御痛被爲在、御參覲御禮御斷置之所、此間御快候間、御禮可被仰上旨十二月廿日過御老中迄被仰達候處、同廿七日如御例依御奉書、翌廿八日御登城、於御座之間御目見等如御例有之。于時公方樣、此間少々御風氣に而表ゑは出御無之、家督敍爵等之御禮共有之候得共、獻上物迄上り、御目見は無御座。依而今日隨駕之御家老前田修理・中川式部登城仕候得共、右之

趣に付御目見は不被仰付、献上物は上之。今日御目見は相公様迄与云々。

〔前田貞醇藏文書〕

享保五庚子十二月卅日

一、一昨日御勤御歸被成、追付上使に付押而御勤被成候へば、御膝之御痛御指發、御下乘より御行歩難被成、爲御名代若狹守樣御登城、御老中方は御勤被成。御腰之御痛、汲湯へ御入被成候へば、餘程御快被成御座候へ共、雨天与申旁明日は御登城難被成、御斷被成候由、開番湯原甚右衞門井上河内守殿へ參上、右之趣申述候處、明朝御太刀御献上可被成候、御使柄は御國より被指出候御使者柄に而茂、又は家老役之方に而茂、思召次第可被成旨河内守殿より申來。依之被仰出候は、左京可然候得共、いまだ氣色しかと無之候間、御家老共之内可相勤候。左候者式部可相勤旨御意之趣、内匠申聞候事。

上使とは鶴を賜はりたるをいふ

十二月廿八日。前田綱紀、德川吉宗より鶴を贈らる。

〔御年表〕

十二月廿八日、上使筧新太郎を以て御鷹の鶴一御拜領。

享保六年

正月朔日。前田綱紀疾むを以て使者を登營せしめ新正を賀す。

〔御年表〕

享保六年元旦、御痛にて御登城難被成、御名代之御使者御家老中川式部長定を以て御太刀御獻上。

二月十日。本年の小物成・夫銀・地子銀等の割増上納を命ず。

〔元祿享保間留記〕

覺

一、今年小物成等割增、人々分限に應じ被致詮議、三十割・二十五割・二十割增段々取立候樣可被申渡候。

一、元祿九年以來川役幷諸運上之分、新銀半減取立候樣可被申渡候。

一、夫銀幷地子銀之分は、一統二拾割增に相極候條、其通可被得取立候。金銀定納所之分者、是又一統十五割增取立候樣に可被申渡候。

一、他國船潤改銀、三十割增取立候樣に可被申渡候。

但、各支配所之船他國浦に致入津申候時分、潤改銀割增輕く爲指出、所々舟支配所に入津仕候はゞ、役所に而割增之通可被取立候、以上。

三十割增は三十分の一增加をいふ

丑二月十日　　　　　　　　　　　　御算用場

山森多宮殿

澤田十郎兵衞殿

今年小物成等割增之儀、全割增之通爲指出可申儀候得共、一統三十割增取立候而者、今年之儀も指支可申躰に付、精誠遂詮議、別紙之通相增取立可申に而可有御座哉之旨、御年寄衆に相達候處、御詮議之上其通可申渡旨御申渡に付、別紙相越候條被得其意、紙面之通割增取立候樣可被申渡候。

一、今年割增、去年より拾割・五割宛相增候得共、右割增銀人々役高に懸申候分者少分に付、其身年中商賣物高に致割符候得者、指而直段に懸り申程之事に而も無之候。割增を申立、直段引上げ商賣いたし候はゞ可爲曲事候條、左樣之族無之樣可致裁許旨、所役人どもに急度可被申渡候、以上。

二月十日　　　　　　　　　　　　御算用場

山森多宮殿

澤田十郎兵衞殿

右之通申來候に付、別紙共寫遣候條可得其意、此書狀判形候而別紙共に可相返候、以上。

二月十二日　　　　　　山森多宮
　　　　　　　　　　澤田十郎兵衛

能州四郡十村中

二月十日。能登奥郡の十村等、公領黒島村の漁民が加賀藩領藤濱村の海境を侵すことを上申す。

〔郡方古例集〕

一、御公領黒嶋村と御領分藤濱村海境、黒嶋村七百六拾間之間黒嶋村持海に而、則此所に藤濱村との海境塚相立、先年之御繪圖之表に少茂相違無御座、分明に譯立居申候。然處に近年右境を越、黒嶋村より連々起網おろし、只今は二統迄おろし申候。然共藤濱村起網与、間六百尋程御座候に付、別而構にも罷成不申に付、御公領と出入仕申儀も如何に奉存候。其分に仕置申由藤濱村肝煎・組合頭申候得共、去年御見分被遊候通、境を越爲下置申儀、畢竟私共了簡に難及、大切之儀と奉存候に付、御内意奉窺候、以上。

享保六年二月十日

馬場村　喜右衛門
大澤村　權兵衛
中居村　三右衛門

山森多宮殿
澤田十郎兵衛殿

鹿野村恒方

如此金澤に而調上候處、先搆不申候はゞ其分に致置候樣に被仰渡候事。

二月廿七日。前田吉德夫人の御守殿撤去を命ず。

〔政隣記〕

二月廿七日、溝口七太夫・戸田靭負に、御守殿疊ませ候御用此間被仰付。明廿八日より段々伺、取懸り候樣、式部を以被仰出。

三月三日。富山侯前田利興の江戸下邸類燒す。

〔政隣記〕

三月三日今年初而御登城、今日午刻三河町より出火、風烈數千住町端迄七十町餘燒失、上野二王門・黑門、廣德寺搭頭左之方不殘、長門守樣御下邸去年之燒跡、井上筑後守殿・立花殿・佐竹殿等類燒。右火事に付御上邸に被爲入、長門守樣御上邸に兩度御見廻、廣德寺に藤田求馬・武藤庄兵衛を以御人數被遣、御使番富永數馬被指添。然所途中燒立難通候に付、本鄉に相廻候內聖堂危く、伊藤平太夫に高畠善太夫差添御人數被遣、藤田等も聖堂に參候樣被仰出候

由申來候に付、何茂被越、芽町にハ御近習火消二手合、富田主税御人數召連被越、長門守樣之方防之。暮頃御中邸江御歸舘也。

三月四日。前田綱紀の江戸駒込邸類燒す

〔德川實紀〕

三月四日、けふも又南風烈しかりしに、牛込木津屋町より火起り、若宮・築土・小日向・小石川・丸山・白山・本郷・駒込・千駄木・谷中・水川の邊燒亡す。

〔政隣記〕

三月四日御中邸御類燒。朝辰下刻市谷町より出火、南烈風、追付御上邸江可被爲入旨に而御出之所、竹早町江火移御通難被遊、護國寺前より西勝寺前、左内坂より御堀端、水戸樣前より御上邸江被爲入候。御上邸ハ追分御門まで燒、外別條無之候。

御中邸ハ八時頃燒失也。傳通院富士社・本根津等燒失す。寔姬樣ハ御下邸江御立退、九日迄被成御座候。

御兩殿樣、御中邸危由於御上邸被聞召、御急被爲入候得共、はや御類燒之跡に候。御文庫ハ無御別條、其外ハ少も不殘燒失す。七時頃御上邸江御歸。尤今夜より、御中屋敷に在住人、不殘御上邸向寄々々江同居す。御長屋早速渡候趣に被仰出、今夜より取懸り、夫々御小屋札

打渡之。

〔松雲公御夜話〕

一、享保初の頃御中屋敷御類燒之時分、初は御上屋敷危き由に付、早速御出馬被遊候處、竹町・茶屋町のかたへも火出候而、御通難被遊由に付、御使番など段々見せに被遣候處、其通りに申上候。如何被思召候哉、土井殿下屋敷の邊に御馬を立させられ、私儀御跡騎馬にて罷在候被爲召、此先御通り被遊がたき旨何茂申上候。彌其通に候哉見て可參由御意に付、竹町半迄罷越候處、大圓寺より上のかた左右ともに火移り黑煙にて、其先に何程火に成候哉相知不申躰に付、其邊に小者躰のもの唯一人罷在候故尋候得者、大かた追分邊迄火は續き申躰と申、中々眞黑に成乘ぬけ難き樣子故、早速乘返し其段申上候處、左候はゞ傳通院のかたへと被仰出被爲入候處、先々何茂燒候て、尾州樣五段長屋前御通、水戶樣御屋敷前より本鄕へ御出被遊候。暫御下知を以御防がせ、御殿の方危き事も無之に付、御居間へ被爲入御休息の所、御中屋敷以之外火急に候由注進に付、其儘御出被遊候。當宰相樣に者先達而御出被遊候處、追分御門御やねは燒落、左右の柱幷敷居に火付もへ申候。松雲院樣御跡より被爲入候故か、御馬を扣へさせられ候處へ、御乘懸被遊、敷居火の上を御とばせ被遊候。其御樣子を御覽、當宰相樣に茂御越被遊候。御中屋敷にても煙の內へ御乘込、御手强成御樣子に被成御座、何茂

奉驚候事。

三月五日。幕府使者を遣はして前田綱紀の罹災を慰問せしむ。

〔徳川實紀〕

三月五日、きのふ災にかゝりし家々に御使あり。松平加賀守綱紀には奏者番土井伊豫守利意、松平大學頭頼貞・松平播磨守頼明には使番多賀左衛門常房、佐竹右京大夫義峰には天方主馬盛展なり。

〔政隣記〕

三月五日上使御奏者番土井伊豫守殿を以、昨日御居邸御類焼に付上意有之。御書過御出、御料理等御斷、無程御退出。一統服紗小袖・布上下着用。御禮御登城は吉治公に被仰談、御前には御老中方迄御勤也。

三月五日。富山侯前田利興歸邑せしを以てその貸小屋を加賀藩の用に供す。

〔政隣記〕

三月五日長門守様御歸邑御發駕。あなた御貸小屋明候に付御借用、阿方御邸之内垣を致し仕

切、此方御邸より口を明候而、夫々御長屋相渡。但長門守様去年御暇被仰出候處、御不豫に付御發駕御延引也。

三月七日。前田綱紀疾に罹る。

〔參議公年表〕

三月七日夜公疾。不日而痊。宗仙院献藥、久保定能針治。

〔政隣記〕

三月七日夜九時過より御腹痛、堀部養碩・久保定能被爲召。御痰幷に御食滯之御容躰に付、養碩丸藥上之、定能に針治も度々被仰付。夜明方橘隆庵老御出、御藥被指上。

〔政隣記〕

三月八日定能針に而少々御快、其後段々御和ぎ、九日・十日次第に御快然。十日に御行水も被遊候所、猶更御宜、十一日夕方より御醫者詰候儀御免被仰出。

四月十一日。江戸に出張を命ぜらるゝ十村等に扶持方を給することを稟請す。

〔河合錄〕

御扶持人十村・平十村並村肝煎、爲御用江戸表江罷越候之刻御扶持方之事。

一、爲御用御扶持人等江戸表江罷越候而、御扶持方被下候儀、其始り者享保六年能州黒嶋村幷鹿礒村出入之刻、江戸表江他郡之者罷越候刻也。其節之押左之通り。

能州御公領黒嶋村之者共与出入仕候御領鹿礒村百姓共之内、今般從公儀御役人衆御指紙ニ而江戸表江罷越候に付、兼而各被仰渡候通、能州御郡奉行山森多宮・改作奉行菊田逸角相添罷越申候。且又先達而各江相達候通、其所之者共に而ハ無覺束御座候に付、能州幷越中浦方等之様子功者成御扶持人十村三人、幷檢地之儀仕付候礪波郡村肝煎一人相添指遣申候。右之者共自分之出入に而罷越申に而無御座、此方より指添遣申者之儀御座候間、御扶持方路銀・馬銀可被下儀与奉存、先例相考候得共、十村等爲御用江戸表江罷越候先例無御座候。仍之爲御用諸職人江戸へ相越候時分被下候御扶持高に准じ可申儀に而も可有御座哉与致僉議、則左に相記申候。鹿礒村より罷越候百姓共之儀ハ、尤及貪着不申候。

一、上下三人扶持、驛馬一疋宛。

御扶持人　射水郡津幡江村　宅　助

同　珠洲郡鹿野村　恒　方

一、上下二人扶持、驛馬一疋。

一、一人扶持。　十村鳳至郡　六郎右衛門

肝煎礪波郡高辻村　一人

右御指圖次第可申渡候、已上。

四月十一日　野村勘兵衛

横山中務

前田美作守樣

右本紙之通承屆候間、紙面之通可有割符候、以上。

辛丑四月十二日　前田美作守　印

横山中務殿

野村勘兵衛殿

四月十三日。能登鳳至郡の十村、再び公領黑島村と加賀藩領藤濱村の漁場爭議に關して上申す。

〔能登古文書〕

黑嶋村与藤濱村海境、先年より相立居申所に、近年段々境を越、藤濱村海に黑嶋村之網二統

下し來候得共、藤濱村網に別而構申儀茂無御座、出入等仕候茂如何に奉存指扣、互に下し來申所に、當二月藤濱村より黒嶋村へ申入候は、當年網下し被申候はゞ、藤濱村海へ入込網下し不被申候樣に申達候所に、其節成程相心得申由申越候。然處に當年も網一統藤濱村海へ越、當月十日に網下し申候。此儀如何仕候哉御窺申上候。

一、藤濱村網毎年下し申網場所に、當月十一日網下し懸り申所に、同日黒嶋村より舟に乘罷越、右之網切申に付、藤濱村組合頭市兵衛と申者、翌十二日黒嶋村へ罷越、樣子相尋申候所に、成程黒嶋村より網切申与申候に付、如何之首尾にて切被申候哉与市兵衛申候得ば、毎年網下し申時分は、藤濱村より案内仕網下し申所に、當年に限案内無之網下し懸り申に付切申候。併只今市兵衛被罷越候上は、案内同事に候間、此上は互に少茂子細無之候。毎年□網下し可申旨、黒嶋村之者共申旨、藤濱村より及斷申候。左候へば毎年之通網下し申時分に、黒嶋村へ案内不仕候故、其意□網切申と奉存候。爲御案内申上候、以上。

享保六年四月十三日　鳳至郡十村　馬場村　喜右衛門

澤田十郎兵衛殿

山森多宮殿

四月十五日。舊臘幕府より賜ふ所の鶴を調理披露す。

〔政隣記〕

四月十五日舊臘御拜領之鶴御披。御一門樣等御大書院、輕き御方々は御居間書院に而御饗應。御拍子有之。吉治公・備後守には、吉治公御居間に而御饗應。一統熨斗目着用、御作法前々之通。

四月十七日。前田綱紀上野東照宮に詣でんとせしが故ありて止む。

〔政隣記〕

四月十七日相公樣上野御宮御社參之筈。併御痛に而御裝束は難被遊候、御長袴に而茂苦かる間敷哉之旨、先達而覺王院に御示談之所、年始にも御斷之事に候間、不苦奉存候旨御答に付、御供人ふくさ袷・布上下、上下御供は熨斗目之筈に前夜相極、御供人揃有之候處、松平伊勢守殿於常州水戶當月十一日御卒去之由申來相止。但伊勢守殿は淸泰院樣之御實をひ、相公樣とは御實いとこにて、御服忌無之候得共、林大學頭殿に御尋候得ば、御祥月故御指扣可然与申來。

四月十七日。前田吉德初めて德川吉宗に隨ひ江戶城紅葉山の靈廟に豫參す。

〔政隣記〕

一、御父子様紅葉山御豫參之儀初り、是いつ頃之儀に候哉、相考申上候様被仰出、聞番中より考上之。左之通。

享保六年四月十二日御用番井上河内守殿に而御渡被成候御書付之寫。

松平加賀守

松平若狹守

來る十七日紅葉山御社參被遊候。四月十七日者格別之儀に候間、向後御社參之節豫參御目見いたし、還御以後拜禮可仕旨被仰出候。

丑 四 月

〔政隣記〕

四月十七日吉治公紅葉山御宮ゟ初而御豫參。但今日御豫參之儀、今年より相始。相公様ゟも御豫參被成候様、當十二日御老中御紙面に而被仰談候得共、御痛所御勝不被遊に付、十四日御斷被仰達。

〔徳川實紀〕

四月十七日紅葉山御宮に御參あり。戸田山城守忠眞・水野和泉守忠之・松平右京大夫輝貞・少

本文徳川吉宗の事に係る

老大久保長門守教寛等豫參にまゐる。けふはさきに仰下されし御むねあるをもて、松平若狹守吉徳・松平攝津義守孝中略。も豫參に候す。

四月廿五日。鹿島郡三階村の十村、切高する者の監督を嚴にすべきを同僚に告ぐ。

切高とは田高を賣却するをいふ

〔司農典〕

荻谷村長右衛門組上田村百姓之內、收納不足仕、致切高、假證文を以代米受取、御藏納相濟、其段十村江も申斷。翌春田畠受取置候所に、切高本證文及延引に候故、依之に切高・質入高幷預田地与申掠及出入、御詮議之上切高人六人、今般公事場借牢に而禁牢被仰付候。各御組下切高有之刻は、本證文を取置、請人十村廻り口御扶持人承屆、取人相極、翌春品々帳附札仕可申候。是以後切高相對に而仕置、及出入に候はゞ、御取上高被仰付、品により十村手前も可被遂御吟味旨被仰渡候。是以後彌切高之儀可被入御念に候。猶以村々より、各御手前江請書付御取置可被成候、以上。

丑四月廿五日　　三階村　源右衛門

仲間十村宛

六月廿五日。鳳至郡の公領黑島村、加賀藩領鹿礒と海境を爭ひて敗訴に

歸す。

〔可観小說〕

一、享保六年辛丑能州公領鳳至郡黒島村、加賀領鹿礒村同郡之内海境公事、於江戸評定所決斷、黒島非公事、鹿礒村勝に付、決斷狀末に記之。

一、黒島より江戸に出候者共。

庄屋 徳左衛門
組合頭 四郎左衛門
孫作
彌助
惣百姓代 善左衛門

此者於黒島者、番匠屋甚八与申候而、今度之公事棟梁に罷成、下に而取噯いたし、金銀を以取持仕候大富有之百姓に候由。

一、鹿礒村より出候百姓。

惣猟師代 與四右衛門
肝煎 三郎右衛門
組合頭 藤九郎
惣百姓代 彦左衛門

右之者共に差副罷越候役人。

御扶持人十村　越中津幡江村　宅　助

同　能州鹿野村　恒　方

同　鵜川村　六郎右衛門

十村役　越中礪波郡高辻村肝煎　萬右衛門

右鹿礒村肝煎三郎右衛門病氣に付代罷出候。常に檢地見立之功者に付此度罷出候。

能州松波村百姓恒方手代　喜右衛門

同州十村稻船新助手代　四郎兵衛

此兩人執筆役相勤候。

一、能州郡奉行　山森多宮

改作奉行　菊田逸角

右兩人差副江戶に罷出候處、評定所に者不及罷出候。十村以下罷出申節は、聞番役菊池甚十郎召連罷出候。落着之後御目見被仰付、御意之趣も有之、其上御目錄を以銀子五枚・白布三疋充拜領被仰付候。

一、黒島村者家四百軒計、人數二千人計之所也。
一、鹿礒村者家二百軒計、人數六百人計之所也。
一、評定所ゟ罷出候日者、五月四日・十一日・廿五日、六月十三日・廿五日に落着。
一、黒島之者は六月廿七日江戸罷立、越後能生より船に而所口ゟ上り申候。
一、賀州者者六月廿九日江戸罷出、七月十日金澤ゟ參着。但急便を以鹿島ゟ相達候は、七月四日之旨。
一、於江戸十村三人ゟ白銀三枚被下之。萬右衛門儀者三郎右衛門名代に罷出候に付、鳥目二貫文被下候。
逗留中多宮・逸角兩人月俸當之通相渡。御扶持人十村ゟ者上下三人分被下之。十村ゟ者上下兩人分被下候。鹿礒村之者共ゟ者不及月俸候。
一、御用場留書寺尾甚助罷越候。此者ゟ金二百疋被下也。
〔政隣記〕
六月廿五日、能州鹿礒村与公領黒島村与百姓共境論有之。當年四月廿八日御領之百姓江戸着、其後度々評定所ゟ罷出候所、鹿礒村之趣正道之段今日落着、御奉行中連印之紙面則入御覽。
同月廿八日右御用に付罷越候改作奉行菊田逸角・能州御郡奉行由森多宮御暇被下、御目錄晒

三疋・白銀五枚宛拜領被仰付候段、御家老中被申渡。其後於御居間御目見、御意も有之。且又左に有之十村三人にも白銀三枚宛、肝煎に二貫文、右爲御用罷越候足輕一人に三百疋被下候。御目錄に而可被下哉伺之所、御僉議之上、畢竟覺書等に而申渡候得者事濟由被仰出。于時菊田等七月十日金澤に歸着。

能州鳳至郡黑嶋村与鹿礒村海境論裁許之事

黑嶋村訴趣、延寶三年當村土方河内守領地之節、加賀守領分境、双方役人立合相改繪圖、黑嶋・道下由境塚數相極、濱中之塚鹿礒・黑嶋海境に用之。其上取替し證文間數中分割之。右海境定杭より乾に當、墨引筋違に有之所、從相手村獵場相障之由訴之。鹿礒村答候者、先年海境證文取替し置、當村持海無紛之所、相手村御料に成候以來、鹿礒持分之海相妨、從去々年猶更申募り、此方獵場も無之樣に成行及渇命候。延寶三年に相極候海境之塚、元祿年中風波に損候に付立合改、右塚之所に定杭を建、此定杭より海面を直に酉の一分見通し、兩村海境明白之由答之。遂吟味候所、延寶三年九月兩村取替證文、二子山谷の下より打初め候間數に而、濱際にて可打謂無之、黑嶋村濱際にて可打と申立候證文を、黑嶋・道下濱境之定故、鹿礒・黑嶋海境證據難立、勿論繪圖墨引筋違候儀も、黑嶋・道下村境之譯に而、是又海境可用樣無之。同年十月兩村幷千代・道下四箇村連判帳面に、黑嶋・道下境塚二十五之內、濱に築候塚

一、黒島・鹿礒海境に用之与書記、其奥書に茂右所定之海境、於以來有違犯間敷旨書載候。四ヶ村之者幷十村役人致加判、此趣其節之繪面致符合、濱中之定杭爲境處歴然也。然上は兩村海境之間數を記候證文者九月、四箇村連判帳面は十月に候得者、前月之證文不及取用。且鹿礒浦・長谷崎之間者、諸廻船入津之所に而、破船等有之節役人改之、浦證文差遣之、年々數通之書物鹿礒村致所持。殊に黒嶋之船持彌助悴太六、於鹿礒沖過難風候節之證判も有之候。今般黒嶋申通之長谷崎之先に掛り、鹿礒海沖与申は無之樣に相見え、黒嶋申所全非分也。其上近村前後之境海面眞直に見通候所、鹿礒・黒嶋海境に限り筋違に可見通之謂、旁以無之。仍僉議之上、如前々黒嶋・鹿礒兩村之海境、道下・黒嶋村境之濱に有之定杭堅相守之、海面眞直に見通、向後互無異論境限りに可致支配。尚爲後鑑裁許之趣各加印判、双方に書下之間、永不可違失者也。

享保六年辛丑六月廿五日

寛　播磨
駒　肥後
大　下野
水　伯耆
大　越前

中　出雲
土　伊豫
松　對馬
牧　因幡
酒　修理

右訴論者、去年於黑嶋、御代官日野小左衛門殿被承屆候處、則從此方多宮・逸角罷出、双方百姓對決有之、黑嶋非分に相極、其趣小左衛門殿より證文被指出事濟候所、今年黑嶋百姓等東都に直訴罷出候。依之鹿礒百姓可罷出旨江戶より申來、罷出候所、彌黑嶋非分に相極、右評定所決斷狀、鹿礒村に被渡下之。

六月廿八日。河北潟の魚類多く死することを屆出づ。

〔國事雜抄〕

一、比日しゞみ貝、或は海老・雜鱗に而、町方之者悉食傷仕由取沙汰有之候へ共、慥成儀は相知不申。しゞみ貝に而は町方之者之内にも食傷氣味之者も有之候。然處當廿六日於御算用場、八田・才田村之者共に右之趣御尋候處、先比大野・粟ヶ崎之潟に而いせごひこと〳〵く死上り、おびたゞしく浦方之者ひろひ、こえに仕由。其上大野・粟ヶ崎潟之水、烏・燕・雀たべ候へ

ば夥敷死申由申上候由、魚荷宿之者共より申聞候由。魚問屋吉郎兵衛・魚肝煎十兵衛兩人、今日町會所に罷出、御奉行所御同心方へ相達申候事。

享保六年丑六月廿八日

右町會所横目肝煎諸事留帳に有之。

六月廿八日。金澤米仲買業者の人數を上申す。

〔國事雜鈔〕

金澤米中買人數高

米中買惣高相しらべ可申旨被仰渡候に付、相しらべ申處に、百九拾五人有之、此段申上候。

享保六年六月廿八日

右會所横目肝煎諸事留帳に有之。

六月。前田利常夫人百年忌に際し赦を行ふべきを命ず。

〔御親翰寫〕

覺　書

今般者天德院殿百年御忌、其上光現院殿御追善、旁以金澤・江戶に而禁獄之者共、大罪之外者大赦可然候。金澤之儀重而不及伺之。大罪者相知申事候間、其餘者僉議を以、死罪之者は追

放、追放之者は一等輕く申付、それより輕罪者免許可申付候。此地之儀も以此趣早速僉議尤候。

一、公儀御法事に付、列國に而赦之沙汰無之躰に候。若又大赦天下之被仰出者各別、私之赦者不入事候。此度茂其沙汰に者及間敷候。

一、梅窓院等遠忌に付而赦之沙汰、公儀に無之事に候得は不入事に候。

一、遠慮・閉門・流刑・追放等之者、於公儀爲御遠忌之赦、如禁獄之者御法事之砌御赦免之御沙汰無之候。上野御門主・増上寺方丈等御願に而、追而御赦免之儀者度々有之候。但當御代には、此度宥免之沙汰有之候而茂不苦義も可有之候哉。兎角此度茂追而之沙汰可然候。百姓・町人同事之者など者、近年其御沙汰しかと覺不申候。因此遠慮・閉門・流刑等之侍分之儀、當分不及沙汰候得共、其紙面之内百姓・町人躰之者も書入有之付、先遣之申候。追而其紙面者可有返上候。

一、金澤・爰許禁獄之者共之書付、不殘遣之候得共、若取落候も可有之候哉。相殘候書付等は、被差越候月日書付、入披見可被申候。

一、爰許に而牢舍申付、吟味いまだ相濟不申とも、走り候一通りの者は、大形相知申事候間、是以赦之僉議可被致候、以上。

右下書も相調不申候間、文言等不都合之儀も可有之、兎角難心得儀は寬之可被申候、以上。

爰許は江戸

本多圖書政冬
中川式部長定

七月廿七日。前田綱紀就封の暇を受く。

〔政隣記〕

七月廿七日上使戸田山城守殿を以、御國元ぇ之御暇、御拜領物如御例。御料理御相伴者吉治公。御退出後御老中御勤。且翌廿八日御登城。七日之通御城内に而御休、御目見・御拜領等御例通。隨駕本田圖書・中川式部御目見等如例。

七月廿七日。大聖寺侯前田利章就封の暇を受く。

〔政隣記〕

七月廿七日備後守樣御在所ぇ之御暇も今日被仰出。十月十一日御發駕御歸邑。

七月廿八日。前田綱紀登營して就封の辭見す。

〔德川實紀〕

七月廿八日月次例のごとし。松平加賀守綱紀・松平備後守利章就封のいとま給はり、松平伯耆守資俊・戸田伊賀守氏長參覲す。

七月。家中の屋敷にある奉公人以外十五歲以上の男女員數を屆出でしむ。

〔國事雜鈔〕

覺

一、御家中侍中屋鋪守、或は長屋等借罷在候者に付、奉公人之外都而拾五歳以上之男女、今年之人高可書出候。何程男・何程女与可被書分事。

一、寺社奉行・町奉行等支配に罷在候侍中家來之儀者、右奉行不及貪着候間、宅を貸置候者共之儀、右之族之者には主人々々より不相洩樣可書出候。男女之差別右同事可被書分事。

右之通被得其意、組支配人等より來月廿日を限可被書出候。右之族無之候者、其段も書付可被出候事。

從公儀御尋之品有之、別紙覺書指越候條、組・支配之人々可申渡候。且又組之内裁許有之面々は、夫々申渡候樣可被相達候。尤與力・家來等にも申渡、早速可被遂吟味事。

右之趣可被得其意候、以上。

七月　　　　前田近江守

この調査は七年每に幕府に上申するものなり

九月十八日。今日より江戸傳通院に於いて前田吉德夫人の一周忌法會を執行す。

〔中川氏藏文書〕

光現院樣御一周忌、二夜三日三百部讀經御法事。

十八日　辰刻　　念佛開闔

四智讃　對鈸　鐃　導師燒香　伽陀　三部經讀誦　後唄回向念佛。

同　日　申刻

佛讃　雙鈸　鐃　導師薫香　四奉請　禮讃行道　念佛。

十九日　辰刻

四智讃　對鈸　鐃　導師燒香　伽陀　三部經讀誦　後唄回向念佛。

同　日　申刻

佛讃　合鈸　鐃　導師焚香　四奉請　禮讃行道　念佛。

二十日　寅刻

讃　鈸　鐃　導師燒香　阿彌陀經　四奉請　天親偈　念佛惣回向。

已　上

一、御香奠上使より先達持參、階下に罷在御徒請取之、階上へ上之。其所より御小將長袴着用請取之、御内陣へ向、中之間に直、夫より役僧御内陣御佛前に指置之可申事。

一、上使御刀御取被成候所に而持之、御燒香相濟御退出迄持有之、御小將長袴着用可仕事。

一、御手水御たらひに片口を載持出、本堂右之方緣頰に扣、御手拭懸も其邊に持出、御樣子次第御手水御用相勤可申候。御小將長袴着用可仕事。
一、聞番一人惣門之外迄罷出可申事。
一、年寄中惣門迄罷出可申事。
一、頭分以上本堂左之方白洲へ罷出可申事。
但、御番所に有之物頭は、御番所之前へ罷出可申事。
一、上使御出、段々爲御案內附人可申付事。

十月廿五日。幕府前田綱紀の來春まで引續き在府せんとの請を允す。

前田綱紀はこの後享保九年の薨去に至るまで歸國せず

〔政隣記〕
一、十月廿五日御用番水野和泉守殿へ、今朝六鄕主馬殿を以被仰達置候處、夕方聞番罷出候樣水野殿より申來、湯原甚右衞門罷越候所、六鄕主馬殿を以被仰聞之趣致承知候、御氣色御不快御座候に付、御保養來春迄御在府御願御養生可被成旨、御勝手次第に被成候樣に与被仰渡候旨、甚右衞門暮過罷歸申上候。吉治公へ右之趣成瀨內匠を以被仰進、且爲御名代御老中方御勤之儀も被仰入候。

十月。百姓の納租其の他に關する心得を諭す。

不情は不精

切出高は切高に同じく、高を他人に賣拂ふをいふ

〔改作方雜留〕

覺

一、諸郡百姓之内、改作不情もの在之、收納米不足仕候はゞ、其村々肝煎・組合頭并村中之者打寄遂僉議、早速十村に申斷受指圖、收納米致不足候百姓之家財は不及申、牛馬并垣根之竹木賣拂代、且又家内之男女奉公に出し、其給米等を以收納皆濟爲仕可申候。持高之分は一作下しに仕置、作德米を取、奉公も難成老人・幼少者をやしなひ置、奉公に罷出候者は、數年相立力付候刻爲引込、爲致手作可申候。如斯に而茂未不足米有之、可仕方便無之候はゞ、組合之村々に茂申談、其段十村に相達、指圖次第其年之不足米に應じ、切出高仕、永代相渡之旨證文相極可申候。十村委細吟味仕、品々帳に其段相記、印を受可申候。尤殘高は前段之通可仕候。但切出高望人無之候はゞ、十村見計勝手宜者に申渡、爲請取可申候。違背に及候はゞ可申斷候。急度可申付事。

一、切出高取候者、其村に爲引越、百姓棟を相立可申候。然共其村に爲引越候子供等も無之時分、其段十村に申斷、如先例之懸作持可仕事。

一、大高を持來候百姓、若收納米不足仕候節茂、先切出高不仕、前ヶ條に有之通夫々賣拂、家内之者爲致奉公、力付次第爲引込可申候。乍然他村に懸作高を持候はゞ、其段十村に可申

斷、吟味之上品により、懸作高之分は切出高爲仕可申候。去共無據、居在所に持來候高之內切出仕儀に候はゞ、可爲前段之通事。

一、跡々切出高取遣仕候內に、百姓を名代に仕置、支配違之者內證に而高を持罷在、至以後及書入等相知申儀有之候。向後若右之族於有之は、數十年過候而もあらはれ次第、名代に罷成候者急度曲事に申付、其上高は取揚可申事。

一、跡々より切出高請取候者、勝手宜者之筈に候所、切高に相當御貸米、急度返上不仕段沙汰之限に候。當年より年限等無構、身上に應じ急度取立指上申候。且又切高取候者にも不限、跡々より數度御貸米をかり受候者共、力付候而改作丈夫に仕、勝手宜者も有之筈に候處、世間を見合一統に相心得候儀、蟠申故に候條、諸百姓身上を見計、急度嚴重に取立指上可申候。不屆者於有之は、早速其趣可及斷候。曲事可申付候。御貸米返上目錄、別紙草案之通に調可指出事。

一、百姓致病死、男子持不申者跡目之儀、數年見合、跡高を其村中致支配、年經而跡目願申儀有之候。向後は如先例、筋目之者致僉議、死百姓跡目早速相願可申候。及三年相願候はゞ、急度遂吟味可及其沙汰事。

附、明高有之所々早速可書出事。

一、近年百姓共之子供、賣買仕者多有之由相聞候。百姓之儀は改作第一に仕、第二に者其所に應じ候併又は奉公等可仕處に、町人同事之仕形に候條、村々急度遂吟味、數年在鄉相應之あきないに仕候者は、其通に仕置、十ヶ年以後不相應之あきないに取懸候者は、夫々見計爲致奉公可申候。及異儀候はゞ、早速十村ゟ可申斷候。於在鄉奉公難仕躰之者は、金澤へ指出奉公爲致可申事。

一、村により近年土地宜罷成候所、又は石塚等をも取除、地廣く罷成候所も有之筈に候處、手上免・手上高不仕儀沙汰之限に候間、急度致僉議、手上免・手上高可仕候。如斯申渡上、歸候村有之於而は、何れ之村に不限撿地を入、且又立毛遂見分、其品相極可申候條、村々小百姓迄も急度可申聞置事。

一、古き新開、其近邊古高同免に可罷成筈に候所、手上免不仕候。年季等に無構、急度令僉議免を增可申候。且又近年之新開に而も土地宜所者、古高同事之筈に候條、手上免可申付事。

一、近年撿地願村數多有之候間、急度致吟味、願出不申樣に相心得可申候。假令川崩・山崩等に而少々不足有之とても、數年其通に成來候所は、取續可申筈に候所、末々に而はかろ〴〵敷存候儀心得違に候。向後は大川筋等に而、過分之不足高も有之所相願可申候。精誠令僉議、撿地入申儀も可有之候事。

一、川筋村々川除、自普請專一に可仕候。少破之節、村中打寄自普請仕候得者、田畠損亡も無之候所に、危所も其通に仕置候に付、及大破百姓致難儀、其上御費多有之候條、水干之刻無油斷川除可仕候。十村切々相廻り、急度可申付事。

一、別而百姓之儀は、分限を越華麗成仕方一向無之筈之者に候。然所に近年は身代宜百姓、娘など緣付候時分樣々之諸道具取調、衣類等に至迄結構成樣子に聞候。十村不心得油斷仕故に候。向後之儀、十村共を初、分限不相應成躰無之樣に急度相愼、組中之者共は猶更其旨を相守べき事勿論に候。此上にも公儀をもはゞからざる躰有之候はゞ、十村共可爲不念事。

右之趣諸百姓へ申渡、請書付取置、其方共より一紙請書付可指出候。先年より申渡置候改作御法を、急度相守候樣に支配可仕候。百姓共之內、町人之樣に相心得申者も有之、百姓不似合商賣仕者も有之躰に取沙汰相聞候條、其方共より令吟味、改作之御法に相背申者有之候はゞ、脇より相聞拙者共より及僉議候はゞ、其方共可爲越度候間、度々村廻仕嚴重に申付、若奢たる者有之候はゞ、急度縮仕置、早速可及斷候。曲事に可申付候、以上。

享保六年辛丑十月

別所忠兵衞
中村武平次
中村四兵衞

山東武左衛門
高畠權兵衛
菊田逸角
大塚彌五太夫
賀古助進

諸郡御扶持人十村中

十一月廿七日。前田綱紀その藏する府志類十三部を幕府に献ず。

〔富永數馬覺書〕

一、十一月廿六日朝六時過、山城守殿御宛所御名書有之御一封、湯原甚右衛門ゟ伊藤平太夫相渡之。御使書左之通。廿五日之夜草案典膳相伺之。

御書付　一封

右戶田山城守殿ゟ被持參、府志之類御用之由及承候。幸手前に在合候書別紙之通に御座候。若御用に御座候はゞ指上申度存候。則書物目錄幷覺書一封指進申候。何分にも御指圖被成可被下候。爲其以使者申達候。

十一月廿六日　　御使　湯原甚右衛門

〔富永數馬覺書〕

一、享保六年丑十一月廿七日府志御獻上被遊候御書物左之通。

保定府志　一箱
河間府志　一箱
大名府志　一箱
眞定府志　一箱
廬州府志　一箱
鎭江府志　一箱
松江府志　一箱
太平府志　一箱
安慶府志　一箱
福州府志　一箱
南昌府志　一箱
大原府志　一箱
開封府志　一箱

以上

〔又新齋日錄〕

一、享保七年四月九日、是より先松平加賀守綱紀献ずる所の保定幷河間等府志十三部を文庫に收めらる。

十一月。婦人の衣服を華美ならしむることなく、又會合の際の飲食を簡易にすべきを諭す。

〔典制彙纂〕

覺

一、女衣服之儀、御定之直段有之候處、近年段々華麗成申候。末々之女中にも、不應分限衣服着用之者多有之候。依之吳服物以之外高直に罷成、第一京都よりも結構成品々取寄致商賣、沙汰之限成儀に付、今般町奉行へ申渡候趣有之候間、向後結構成衣服買候儀堅く有之間敷事。

一、度々申達候通、出合等之時分料理等輕く有之筈に候得共、今以結構成出合も有之躰に候。左樣之心得に而は無用之費多、勝手取續不申候而者、自ら御奉公之障にも成可申候間、諸事儉約尤に候事。

一、諸物段々高直に成、其上來年よりは一統新銀之直段に成申候に候得者、猶以人々萬端其心得可有之事。

右之趣被得其意、組・支配之面々ゟ被申觸、且又組之内裁許有之人々者、夫々申渡候樣可被相達事。

丑十一月

是歲。淺野川の大橋を改架す。

〔加越能地誌志料〕

一、享保六年淺野川大橋掛直奉行、佐藤久右衞門・村井安右衞門。

是歲。加賀藩庶民十五歲以上のものゝ數を調査す。

〔擢萃錄〕

一、加越能三ヶ國人數高

この人數は加賀藩領のみのものにして且つ士人を除きたるなり

河北郡

一、四萬三千三百十九人　内　二萬二千八百三人　男
　　　　　　　　　　　　　　二萬五千百十六人　女

石川郡

一、九萬二千九十二人　内　四萬九千二百四人　男
　　　　　　　　　　　　　四萬二千八百八十八人　女

能美郡

一、四萬二千九百八十一人　内　二萬千五百七十八人　男
　　　　　　　　　　　　　　　二萬千四百三人　女

加州惣高

合　十七萬八千三百九十二人　十五歳以上丑ノ年改

　内　九萬三千五百八十五人　男

　　　八萬四千八百七人　女

新川郡

一、七萬八千九百五人　内　四萬千三百五十四人　男
　　　　　　　　　　　　　三萬七千五百五十一人　女

射水郡

一、七萬三千百七十九人　内　三萬七千三百三十七人　男
　　　　　　　　　　　　　　三萬五千八百四十二人　女

礪波郡

一、八萬五千五百八十三人　内　四萬四千三百十四人　男
　　　　　　　　　　　　　　四萬千二百六十九人　女

越中惣高

合　二十三萬七千六百六十七人

　内　十二萬三千五百人　男

　　十一萬四千六百六十二人　女

羽咋郡
一、三萬二千五百九十六人　內　一萬五千九百五十八人　男
一萬六千六百三十八人　女
鹿島郡
一、三萬三千一人　內　一萬六千六百八十七人　男
一萬六千三百十四人　女
鳳至郡
一、四萬七千九百七十九人　內　二萬三千六百十人　男
二萬四千三百六十九人　女
珠洲郡
一、二萬二千八百八十一人　內　一萬千三百二十七人　男
一萬千五百五十四人　女
能州惣高
合　十三萬六千四百五十七人
內　六萬七千五百八十二人　男
六萬八千八百拾五人　女
江州高嶋郡之內三ケ村
一、千八百四十人　內　九百十八人　男
九百二十二人　女
三ケ國幷江州高嶋郡內三ヶ村共惣高
合　五十五萬四千三百五十六人

内　二十八萬五千九十八人　男
　　二十六萬九千二百六十六人　女

右は享保六年辛丑三州民籍従公儀御改如此。但富山・大聖寺領并士家之類除之。寛文七年三州之民数凡五十七萬七千九百六十五人、比今年則多二萬三千六百九人也。

是歳。幕府諸國鍛冶の鍛刀を徴し、加賀藩より兼若、勝國の作を上つる。

此方は壬寅妄志の書者今枝直方

〔壬寅妄志〕

一、享保六年諸國の鍛冶共の細工を上覽有べきとて被召之。御用に付而態と造らせて上るには不及也、出來たるを上げよとの事にて、當國にても吟味の上に、兼若・勝國が打物上がる也。當時勝國が打物の中宜は、奥村内記所持の器也とて是に究り、兼若は此方に造らせ置たるが上々とて、無銘物なりしを俄に銘等を切付て出す。此刀は土段切十度の餘なし、段々とぎたる故に、中々三・四十年已來に打たる物の樣には見えざる器也。尤家傳の通に、金子をくはへ鍛て、何ヶ度鍛誤り仕損じても不苦、存分の儘にせよとの云付故に、終に公用の時も不爲鍛故、太甚出來も吉、一度ならず二ヶ度上る。二度目には瑾有ても不苦なり、丈夫なるとて、前田近江守所持・細川源左衛門等の道具も上り、已上四腰上覽に入由也。此事に付而、當々本阿彌十郎右衛門（光山が孫にて、當國より百五十石を給、御用勤也。）より紙面に申越の趣此に誌す。七月九日と十月廿二

日との書也。七日の書面は愚一人可見と書て申越たるは、先日より同名三郎兵衛・同四郎三郎・同光通・同六郎右衛門等、毎度御本丸御白書院御上段の下へ被召出、新身の御僉議有之。但鞘を紙に而張、柄をぬき申事ならず。何れの國何れの作と云事も不知。此通にて本阿彌共一人宛を被召出て、一二三の位付を被仰付に、大方同事に見分したる由。右之内黒田筑前守殿より上りたる御刀、何も最第一と申上たる旨也。光通は彼家へ出入する故見知、其餘の同名共は一人も不知と也。初而見之云々。最無類の物、刀の作りも丈夫にて、恰合も随分に能して、出來は逆亂(闕略)如此物と云々。諸大名より上りたる新身なれば數多たるべきに、漸十腰出る。是は上の御心に應じたるのみを被出たるが、此内に勝國は有て、兼若は不出と也。是は三郎兵衛も光通も不審すと也。恰合がよわくして丈夫になく、作り御意に不應の故かと也。御すきは重も能、及は弘く、丈夫に恰合宜しく、大出來を被好と也。其御風には御國物は不叶筈也。御好の中心は、先細に棟も丸く、棟先はなりを付、たとへば峯の丸きは如此、常々の丸峯と云より宍多くするが吉。兼若も各見分には上と思へど、御好の風に非ざる故に、十腰の内に外れたると存云々。此御詮議御隱密とはなけれ共、此内は御白書院より大廣間への道は御しまりに成て、表方の者は一人も其邊へ寄付事もならぬ故に、御密々の方と聞ゆる故、同名共も口外を憚の間、必他聞に不及樣にと云越也。十月の文には、兼若今は予が扶持の事

予は今枝直方

を知居る故に、同名共に類置、兩作い内別而兼若事首尾能樣にと云談すと云々。

享保七年

正月四日、大學頭林信篤、前田綱紀の八十齡を祝して物を贈る。

〔浚新秘策〕

一、當春も去年之通り、御家中一統獨禮御目見申上候。御八旬之御高齡に而、ヶ樣之御沙汰も未曾有之御事、一統に捧躍之御儀奉存候。當四日自林學士、御年寄被賀候而品々献上、祝壽文并子息方五七言之長篇各被指上候。詩文者例之ものに而御座候。御懸物一幅、武内宿禰像に松鶴龜を取合候圖に御座候。夫に學士之讃も御座候。表具之物數寄等言外殊勝に御座候。無机と目錄に有之候は、御脇息に而御座候。此仕立樣子雅に御座候。鳩杖一條綿織之袋に入參候。又目六に桑白綿襖二と有之候。御綿子に而は無之哉与奉存候處、桑染と白とのはぶたへ御小袖に候。何共桑白綿襖と申事、例之通聞かね申事に候。御肴には鯛一尾・御樽一折、是等參候。別而口上書相添、使者を以被指上候。是者漢文と違ひ、結句承候事に而尤成儀感心仕候。中々老耄之氣味無之仕形共に御座候。稀成御年賀に御座候故、御祝も可有御座事と存候得共、又此度も若狹守樣御前樣よりも、御祝詞被遣候事御停止之御樣子如何と奉存候。其

元御年寄衆よりも御斷被獻度旨、此許御家老役衆迄被相伺候得共、御指留之旨に御座候。凡慮之外に御座候。當廿六・七・八日之內、去冬御拜領之鶴之御披御座候筈に候。春來御發駕被遊候樣奉願候。江戶表相替事無御座候。春來如例騷敷火事沙汰御座候。十日之夜、不忍之池中辨才天銅之房より失火燒亡、やかましき事に御座候、以上。

正月十三日

附、大學頭殿使者家老今井平兵衛と申者罷越候。物頭山崎九郞右衛門相伴に而。二汁七菜御料理出候。御目錄之品左之通。

祝　壽　文	武內宿禰圖讃	一　箱
桑白綿襖　二	燕　机	一　脚
鳩　杖　一　株	祝　樽	一　荷
鯛　魚　一　折		

右七品到來。

一、備後守樣大正寺御領分より、御使者を以鶴被進候處、備後守樣並之御方々に、鶴之御音物御開及不被成候。依之御受納不被遊、返し被成候。此鶴者、御領分か何方に而、何と仕捕候哉、御聞被成度旨被仰遣候旨。

平野は今井の誤

島桐は々木のまゝ

〔政隣記〕

同四日御八十之賀御祝儀、林大學頭信篤殿より使者平野平兵衛を以左之通來。

桑白綿襖　二　桑染と白との御裸子也。

燕机　一脚　是机案の由、とちの木にて作り黒びろうど包。

鳩杖　一本　桑の木に作り鳩を杖の上にほる。

竹内圖讃　竹内宿禰の像新筆、讃は大學頭殿。

鯛　一折

御樽　一荷

御一封　是御賀之事を漢文にて被調。

右品々箱入。島桐にてきてうめん取、金具赤銅毛彫、淺黄羽二重紋純子にて包之。

右之御賀御祝儀物は、從大樹御内々を以被進之共云。從御先代御例都而一圓無之。依之從林殿御進贈之趣にて、實は御内々御拜領之由。

綱紀公御詠歌。

乘捨し昔の竹の駒もがな老のさかゆく杖とたのまん

此節賓生大夫作りて献ず。

長生のことぶき、天の給へる福、七十だにも稀なるに、八十の齡を御持、猶行年も榮えなむ。御子孫も繁昌に、領國も豐にて、君子萬年のほまれを永く傳へ給はんと、歡の酒を奉る。目出かりける事ぞかし〳〵。

正月十七日。前田綱紀物を林信篤父子に贈る。

〔大野木克寛日記〕

二月八日。當春御賀算之御祝儀林大學頭殿より被進獻之候に付、同十七日爲御使者、御近習番山崎彦右衞門を以、大學頭殿𨻶綿卅把・黄金五枚・鹽雁一箱・干鯛一箱・御目錄、同御息七三郎殿𨻶綿廿把・御樽代五百疋・鹽雁・御目錄、同泰介殿𨻶紗綾五卷・鮮鯛一折・御目錄被遣之候。爲御使者參上之今井平兵衞𨻶も、白銀五枚被下之。則彦右衞門共旨言達、御目錄爲致頂戴由。右之趣有增從江戸申來る。

二月八日は日記の日附にして十七日は正月なり

〔政隣記〕

正月林殿𨻶御祝儀物品々被遣之。但廿六日御父子三人𨻶夫々に被遣。

廿六日とあるもの前文と異なり

正月廿一日。伴八矢の與力向又太夫を拘束せし者等處罰せらる。

〔政隣記〕

伴八矢與力向又太夫、近年病身に付引籠居候所、一類共亂心之由申立、八矢等𨻶不及案內、

私に令禁錮候所、婢僕之輩より亂心に而無之趣、與力裁許迄訴之。此儀正月廿一日落着之命令下り、八矢に被仰出如左。

向又太夫儀御知行被召上、七人扶持被下置候。病氣之儀時々見届可申候。妻・娘儀不孝至極之者に思召候。乍然女之儀心得違共可有之候。其上一等何茂輕就被仰付。永く八矢方に御預被遊候。末之娘儀者無御貪着候。

同日於公事場被仰渡。

與力　松宮甚五兵衛

實兄之儀、其上平常樣子も段々存居候所、今般之仕形不屆之到、士之道に非候。急度可被仰付候得共、其段御免許、能州に遠嶋被仰付候。其内板閣に入之。

與力　筒井又兵衛

今般之仕形不屆至極に思召候。急度可被仰付与思召候得共、一等御用捨に付、御知行被召放候。

大嶋權太夫

今般仕形不屆至極、其上をお之儀、且手錠不有合候旨に而、自宅に取に參候而錠おろし候段、士道を失候。急度可被仰付候得共、一等御用捨、御知行被召放候。

與力　松宮小平次

今般之仕形不届思召候。乍然又太夫与續遠、始終之様子不存、品輕思召候。其上一等御用捨に付、逼塞仰付候。

横山中務　足輕　嶋田傳兵衛

長兵衛

又太夫方宿借に付、此二人追放。

正月廿四日。山本源右衛門、前田綱紀の壽を賀して和歌を上つる。

〔政隣記〕

一、正月廿四日出之町飛脚に、組外領二百五十石山本源右衛門、從金澤御賀を上る左之通。

春日詠椿樹爭齡和歌　源　基庸

老の佐賀八十路も麓八千年の花咲く春に君やこゆらん

〔大野木克寛日記〕

山本源右衛門基庸も御壽算奉祝和歌懐紙舍人方迄指越。則入高覽候處、同人奉書を以御喜色之旨申來候由。

正月廿九日。江戸に於いて火災の際家中の心得べき條項を定む。

〔前田貞醇藏文書〕

享保七年正月廿九日

一、向後火事之時分、諸手合寄場、其外火事場に而頭巾着用等之差別、御家老衆ゟ相達、詮議之趣左に記。

於御上屋敷火事之時分、一・二・三之御人數寄場ゟ罷出候定。

一、一・二・三之御人數寄場、別紙繪圖之通に候事。

一、寄場へ罷出候時分、何茂馬上勝手次第。火鎭候歟、又者御屋敷氣遣に無之、御人數退散之時分も馬上勝手次第。但中之口御門前罷通退散之時分は、下馬可仕候。御馬場之後、御殿地之方へ退散之時分者、馬上勝手次第之事。

一、寄場におゐて下立可罷在候。其儘馬上に而罷在筈にては無之事。

一、頭巾着之儀は、御近隣出火、或遠火にても風並惡敷、火粉等防申時分は各別、無左時分は、歴々末々まで頭巾着無用之事。

一、腰指提灯は御使番より外は燈不申筈候。但聞番は、腰指無之而は御用之品差支申趣、湯原甚右衞門口上之趣、御使富永數馬・生駒藤九郎・遠藤紋太夫、御横目中詮議之上承屆、向後燈申筈に申談。右之外は一向燈不申筈に付、頭々へ向寄に申談候事。

但、合紋御提灯爲持申者は、自分提灯腰指に而も燈不申筈に候。自分提灯に而罷出面々は、腰指勝手次第之事。

右之趣御家老役衆本多圖書殿・前田修理殿・中川式部殿、今日御使番富永數馬・御横目前田源兵衛罷出、僉議之上右之通相極候事。

二月五日。前田綱紀・吉德自ら江戶本鄉邸附近の防火に從ふ。

〔淩新秘策〕

一、本月五日朝江戶表富士南風甚烈敷、諸人氣遣に存候處、朝五半時分番町松平甚九郞殿宅より出火、番町より飯田町邊大火に及、水道橋迄燒拔、本鄉御邸風下に付、火粉も參候內、本鄉三町目御弓町本多帶刀殿向、米津周防守之長屋へ火移燒出候處、此方御小將火消淺賀作左衞門・脇田半五右衞門馳參消留申候。其時節俄に大雨降、風雨に移り火鎭り申候。相公樣・中將樣共御出馬爲御防被成候付、御人數は不及申、御兩公樣夥敷御濡被遊候。雨止候而又大南風に成候へ共、雨後故別條無之候。雨は本鄉湯嶋邊迄大降に而、水道橋邊も降不申候。不思議成天幸に而、御邸內無御別條候旨。右米津殿延燒之刻、帶刀殿御人數は、御願に而御小將火消石黑太右衞門御人數召連、罷越防之申候。翌六日間番菊池甚十郞儀、御老中水野和泉守殿より召に來り罷越候處、昨日之出火大火にも及候處、常々御人數被仰付樣宜敷故に、早

徳川實紀に六日を七日に作る

速掛付鎮申候段御沙汰宜敷候條、申達候旨被仰聞、則其趣達御聽候段、其段作左衛門・半五右衛門𪜈被仰渡候、以上。

二月六日

此の御沙汰書は二月八日の條に在り

二月八日。前田綱紀、近習火消淺賀佐右衛門等の功を賞す。

〔淺新秘策〕

一、御近習火消

一番　淺賀作左衛門

二番　脇田半五右衛門

右兩人、今月八日於御次成瀨内匠を以被仰出候ハ、去五日米津周防守殿宅飛火に付出火之處、早速消留申儀、人數之指引配當も宜敷故と被思召候。乍然何程指引宜敷候而も、人數不働に候而者難消事に候。足輕・小者等も御褒美可被下と御僉議被仰付候。此度無油斷消申儀、上之御沙汰も宜候。閒番菊池甚十郎儀水野和泉守殿ヘ御招、御沙汰書御渡被成候。則拜見被仰付候。依之白銀十枚・御羽織一宛被下之候。但作左衛門𪜈者紗綾三卷御添𪜈拜領被仰付候。其以後兩人共御前𪜈被召出、今般無油斷相勤候故、殿中御沙汰も宜候。向後彌以其心得可仕旨御意に候由。

御沙汰書之寫

上書之趣松平加賀守家來

去五日飯田町出火之節、本郷米津周防守屋敷ゟ飛火いたし候。右之通燒廣がり候得者、大切之場所に候處、加賀守人數早速驅付もみ消候段相達し、常々無油斷被申付候儀与相見ゟ、一段之儀に候旨御沙汰に候。

二　月

御次ゟ御小將組頭溝口七太夫被爲召、內匠を以右之趣共段々被仰聞、御番頭只今在合不申候はゞ、明日可申聞候。堀平馬罷歸候はゞ委細可申聞候。御沙汰も宜御喜悅に被思召候。乍然此以後、公儀火消・町火消等消懸り罷在候處、無理にうばひ候而、ほこり候樣成躰に而消申儀は仕間敷候。御すけ可申哉などゝ申述候而、申談消候樣に可申聞候。此儀後々も不忘候樣に可仕旨被仰出候由。

二月廿二日。幕府罪人を諸侯の領内より追放することを禁ず。

〔袖裏見聞錄〕

一、御書付一通

右昨日水野和泉守殿役人より、以紙面被仰進儀御座候間、明日中私共內罷出候樣に申來候付、則今晚罷越候處、役人赤星彌三左衛門罷出、科人追放之儀に付書付相達候由、和泉守被申候

由申聞、書付相渡候に付上之申候。

右御承知之儀、明日可被仰聞旨彌三左衞門申聞候間、私共内明日罷越、御屆之御使相勤可申候、以上。

二月廿二日　　　菊池甚十郎

科人追放之事

右科之品に依而扶持を召放候歟、或は家財闕所、又は其品輕くは過料に、それ〴〵に可被申付儀は勿論に候。件之悪事在之候もの、領内に差置候を嫌ひ、他國へ放遣候儀は在之間敷に候。近年於公儀者、追放もの先は無之樣被仰付候間、於國々所々其旨を存、猥に追放在之間鋪候。然共喧嘩抔にて双方疵付候者歟、又は侍など品により追放被申付、追而可然趣も可有之候間、其段者格別之事に候。

右之通可被相心得候、以上。

寅　二　月

二月廿二日。是日以後前田利長夫人の百回忌法會を玉泉寺に行ふ。

〔政隣記〕

二月廿四日玉泉院樣百回御忌御法事於玉泉寺御執行、廿二日より今日迄有之。御奉行横山監

物貲林、御施行等如前々。

二月廿八日。幕府の命により新國史等の書を領内に探索せしむ。

〔續漸得雜記〕

今度從公儀御尋之書籍之儀に付、於水野和泉守殿御宅、間番ゟ御渡候御書付被添、御立谷豊左衞門を以被渡下、若所持之書物有之候者可指上旨、諸頭・奉行役人、且復寺社方・町方・御郡方等に到迄、不相洩樣急度可入念旨被仰下候付、則右御書付幷豊左衞門ゟ御書立を以被仰含候趣之御紙面、且又和泉守殿重而間番ゟ御渡候書付共寫指越候條、委曲被得其意、組・支配・家來末々迄、精誠入念可被相尋候。

一、右御書立に有之通、諸頭幷支配有之諸奉行・諸役人等、何茂被致承知、組・支配之者夫々迄急度被相觸候趣、夫々同役連名之御請先可被指出候。此外御書立之通に候條、急度可被入念候。

右之通逐一可被得其意候、以上。

寅二月廿八日　　　　本多周防守　印

覺

一、目錄之書籍共御用候間、所持候はゞ可被指上候。自分所持無之候はゞ、家來又は領知之

寺社・百姓・町人等に至迄相尋、右之書於有之者、指上候樣可被致候。

一、新國史より風土記まては御藏に全部無之候。

但、風土記は豐後・出雲御藏に有之候。

一、本朝月令より類聚國史まて、書付之通卷數者御藏に有之候得共、端本にて候。此闕卷之分所持候者可被指上候。

右書物之儀に付、承合候事も候者、林大學頭父子に可被相談候、以上。

寅正月

目錄

新國史　本朝世紀　寛平御記

延喜御記　令集解　律令抄

弘仁式　貞觀式　法曹類林

爲政錄　風土記

於水野和泉守殿間番ゟ御渡候御書出之寫。

本朝月令　一卷、三卷より六卷まで。

律　二卷より六卷まで、八卷より十二卷まで。

令集解　二十五卷より二十七卷まで、三十七卷より三十九卷まで。

類聚三代格　二卷、四卷、六卷、九卷より十一卷まで。

類聚國史　六卷より八卷まで、十二卷より十五卷まで、十七卷より三十卷まで、三十三卷より三十五卷まで、三十七卷より三十九卷まで、四十一卷より四十六卷まで、四十八卷より五十三卷まで、五十五卷より七十卷まで、七十六卷、七十九卷、八十一卷より八十六卷まで、八十八卷より百卷まで、百二卷より百六卷まで、百八卷より百四十六卷まで、百四十八卷より百五十八卷まで、百六十卷より百六十四卷まで、百六十六卷より百七十卷まで、百七十二卷より百七十六卷まで、百七十八卷より百七十九卷まで、百八十一卷より百八十四卷まで、百八十六卷より二百卷まで。

以上

〔前田貞醇藏文書〕

覺

一、御目錄之書籍、御藏にさへ無之付而御尋之事に候得者、末々に而者見申たるものも稀に而、御紙面之趣會得仕かね、亦者心得違申儀も可有之候間、猶以林大學頭殿にも被聞召合、

委細之趣御書そへ被成、追付可被遣候。
一、御尋之書物若持合候はゞ、其題號冊數等書付指出之、書物は先扣置御左右相待可申候。
一、御尋之書に而も、卷數違申候故扣置候儀可有之候。乍然卷付書損候も難知候間、兎角御目錄之書籍有合候はゞ、卷付卷數等先書記指出可申候。
一、御目錄之書名に而も、近代之書物者不及其儀候。去共時代心得違申儀も可有之候間、御尋之書物与同銘之本者、是以先書付可指出候。
一、御尋之書に而も、或は別に清書など仕候歟、或は半本に而不入物と存、其裏に當用之日誌など調申儀も有之事に候。此段も入念吟味尤候。
一、寺社方などに惡敷相心得、猶豫可仕儀も可有之候。寺社奉行委細に紙面に相認遣之、亦者段々召寄、とくと致合點候樣に相含可然候。
一、自然能州には、御尋之書物不圖可有之候。在々迄入念相尋候樣に与被思召候。
一、御書中に、諸頭・奉行・役人以下一兩人充召寄、可被申渡与御座候儀者、御馬廻頭・御小將頭等以下、同役之内一人に而も召寄、委細被申渡、其段同役共に示談仕事に候。諸頭以下段々無殘罷出被申渡には及不申候。尤寺社御奉行・算用場奉行・町御奉行之内も、一人或は二人に而も召寄可被申渡候。御郡奉行にも猶更委細被申聞可然被思召候。

一、諸頭并支配之者有之諸奉行・諸役人、且又寺社御奉行・算用場奉行・町御奉行何茂致承知、組中・支配之者末々迄急度相觸候者共に、同役連名之紙面指出候樣可被相心得候。

右之趣年寄中ゟ可申達候、以上。

二月四日

今般從公儀御尋之書籍、先達而相觸候御目錄之內

一、新國史

續三代實錄或は新記と外題有之書有合候はゞ指出可申候。同書之由に候。

右之趣重而江戶より被仰下候條、御勝書之外題書物に而も所持候者可被指出候。但支配家來末々迄不相洩樣、急度被相尋候儀は、先達而申觸候通に候。

右之趣可被得其意候、以上。

寅三月四日　奧村內記

大村七郞左衞門殿

茨木覺左衞門殿

二月廿九日。鶴岡侯酒井忠寄、前田綱紀の養女䆮姬に納采す。

〔政隣記〕

二月廿九日於江戸、酒井攝津守忠寄卿より、寔姫様ゟ御結納御祝儀被進品々有。前々之御振に付留略す。御使者御家老松平内膳參上。

三月十一日、金澤町奉行宮崎長太夫、火消役大音帯刀の家臣を斬る。

〔政隣記〕

三月十一日夜半笠舞村邊火災。此時火消役大音帯刀駈付、火事場より歸る。町奉行宮崎長太夫罷越所、帯刀家來堀吉左衛門儀、長太夫ゟ對し無禮不届仕方有之に付及殺害所、手負ながら逃隱れ候。夜中に付切人も被切候者も互に相知不申。翌十二日帯刀・長太夫より、以書付年寄中ゟ相斷候上に而相知申候。然所長太夫儀自分に指扣候樣、御月番奥村内記溫良申渡、其段以早飛脚令言上候。同十五日長太夫存念之趣、同役金森内匠を以紙面差出候。依之存違に而指扣申渡候條、不及指扣旨内記申渡有之。十六日より長太夫出勤。江戸ゟ者廿二日に右言上紙面到來、入御覽候處、本多圖書・前田修理・中川式部三人ゟ被仰出候者、長太夫指扣申渡候事如何之儀に候哉、早速可爲致出勤候。其場之樣子者、御横目共言上に而御聞届被成候。長太夫於武備拙き儀無之事与思召候旨被仰出。其段早飛脚を以金澤ゟ申來。此飛脚到着以前、十九日出に長太夫不及指扣段申渡候旨之言上、廿五日到來、達御聽、爲致出勤候儀尤に思召候旨被仰出候。右長太夫指出候兩度之紙面如左。

私儀昨夜御臺所町火事に付罷出候時分、小立野筋与申候に付石引町迄罷越、新坂ゟ懸り笠舞村通罷越候所、笠舞村入口狹く、火消之面々被罷歸候に付、猶更込合、馬上に而は難行違相見候故、馬より下立、歩行に而道之左へ寄罷越候所、笠舞村中藪だゝみに而、梯子持候者之跡より、若黨躰之者火本を仕廻罷歸候樣子に而行違候節、先ゟ立候私提灯持を突除、其次に罷在候私若黨小崎喜内与申者に提灯持突當り、其次に罷在候私ゟも右喜内當り申程之躰に付、右喜内申候は、此方より道を除罷在候所、如何之儀与あなたを突除候得者、右喜内之胸を取候に付、此方よりも彼者之胸を取申内、私若黨之内草野政右衛門と申者、并町附足輕小頭岩脇太左衛門立寄、道脇之藪際ゟ押伏候得者、右若黨躰之者名を爲名乘吳候得と申に付、振放候所、其儘起揚り、藪之內通百姓家前ゟ迯申候。群集之內故遂失申与存、右私家來共は最前之所に罷在候處、脇道より私罷在候邊ゟ罷越、主人は何方に罷在候哉与、又者躰には慮外之口上に而聲を懸申に付、是に罷在候、先刻よりの樣子見屆候所、道を除罷通候者を突のけ、段々不作法之躰、何方之家來に候哉与申聞候得ば、不及返答、刀に手懸、私前ゟ間近く罷越、半拔懸申に付、拔打に仕候。藪之內に而、提灯も間を隔有之、闇候而見兼候得共、面之內ゟ切付申樣と覺申候。右之疵に而後ゟ退候所を、又切懸候得者、迯出候間追懸候得共、藪之內ゟ入、其上群集之內ゟ入交見失申候。私儀近年痛所御座候而、行步も不自由に付、追懸切留

不申段心外之仕合御座候。其邊家來にも爲相尋候得共、疵付申者相見不申候間、傍輩共抔引取申躰与相考候故、先其分に而罷歸申候。手付申之儀御座候間、願度所存之品も御座候得共、私役儀に而火事場ゟ罷出候御役人中、毎度於火事場致參會、御用等申談候儀に御座候得者、互之家來、以來とても如何樣之首尾可有之も難計儀に御座候間、其段者指扣申候。大方之儀は前々其分に仕置候得共、夜前之儀は右段々之首尾、殊に私ゟ手向申候故、無據仕合に御座候。右若黨躰之者何方之家來に御座候哉、相知不申候間、旁御斷申上候、以上。

三月十二日　　宮崎長太夫

奥村内記樣

此紙面追而内記殿就指圖、年寄中不殘宛所、判形を以指上之。

同十四日長太夫を越後屋敷ゟ被呼出、此度之樣子及言上候條、自分に指扣可罷在旨被申渡候に付、長太夫御用番に候故、卽刻同役金森内記ゟ引渡之。

十五日朝紙面指出候趣者。

私儀今般於火事場、大音帶刀家來手向申候に付殺害仕候趣、先達而以紙面申上候所、江戸表ゟ被仰上候間、自分に指扣可申旨、昨日被仰渡奉承知候。上より被仰付候指扣に御座候者、兎角不及申上候儀に御座候。自分に指扣候趣に候得者、今般之首尾先達而申上候通、帶刀家

來無法之仕形、私家來も難止仕合、私儀も手向申候上は殺害可仕外無之儀与奉存候。帶刀儀も其場に不在合、一圓不存儀に御座候得共、家來之儀に御座候者、帶刀手前ゟも何とぞ品も御座候者、何分にも可奉畏候。私迄自分に指扣仕候儀、又者輕き者相手之樣に罷成候首尾に御座候而者、向後火事場ゟ罷出候而も、御役儀に締も無之、無詮仕合奉存候。重き御役儀も被仰付置、重々御高恩之儀に御座候得者、如何樣之儀に御座候而茂、何分にも可奉畏候得共、外之儀与も違迷惑至極に奉存候。假令追而指扣御免許被遊候而も、最早難相勤首尾に奉存候。只今各樣御心得を以被仰渡候節、存念申上置度、覺書を以御斷申上候、以上。

三月十五日　宮崎長太夫

奧村內記樣

右大音帶刀補道、人持組領四千三百石、內三百石與力也。宮崎長太夫重旨八百石也。帶刀家來堀吉兵衛門は、纏裁許に而七人扶持也。金森內記信近千七百石、內二百石與力也。于時三月十五日朝於二ノ御丸、當番御橫目里見孫太夫元安ゟ、御月番內記殿より、宮崎長太夫儀此間之樣子に付、今日之出仕爲指扣候條、御帳面可得其意旨被申渡。依之出仕之面々是を聞、目と目を見合あきれたる躰也。御馬廻頭不破平左衛門方好等云、ヶ樣之事に宮崎指扣申事候得者、人々了簡も可有之物也。其上組中ゟも申談置品有之抔と云。然所金森より、宮崎之覺

書を月番江相達、猶自分之存念をも述、内記殿承知之由に而、直に越後屋敷江出府、寺社奉行伊藤内膳重澄を招、右之段被申聞候所に、伊藤云、御相談之品遅く候。長太夫所存之趣尤至極に候。只今に到り何共難申入旨云に付、内記殿越後屋敷を退出、直に奥村伊豫守殿宅江被参、示談有之。歸宅之上金森を被招候而、詮議未熟に而長太夫を為指扣候。今日之出仕は當病与御帳に可爲記候間、無異儀出勤可申談旨御申に付、其段長太夫方江内匠罷越申入候所に、一圓不致承引、ヶ樣之儀に指扣、重而役儀勤候而も輕く相聞え、末々之者下知も不用者、御奉公無詮、第一御不爲也。出仕を輕々敷當病と可被爲記との事難心得。出仕之儀は別而相改申筋、先役に而委細存罷在、旁以可承引筋に而者無之旨申切。依之内匠も段々之理に服し退出、直に御馬廻頭御算用場奉行兼帶野村勘兵衛重威宅江罷越、伊藤内膳幷御馬廻頭青地藏人斉賢を招、相談區々也。于時伊藤云、各三人共宮崎江參可申は、只今十一分之勝に候所、是を是非を非と定候て却て非に成所大切至極也。拙者儀年老人口惡敷候は不申入候。勝之所を以被勤候に、末々締之不及儀は決而無之筈候間、達而被相勤可然と内膳申旨可被申入候。此上にも承引無之候者、拙者罷越可直談候。先一往各被參可被申達旨に付、右三人同夜宮崎方江罷越、内膳口上之趣申入候所、伊藤氏初各左樣に被存事に候者、成程明日より可致出勤候旨返答有之。翌十六日より御用番引請相勤。

一、大音家來は彼場より直に帶刀宅に引取、雖加療養不相叶、同十五日暮頃死す。死骸寺に預置由、大音所存如何と沙汰す。且從江戶、帶刀家來早々殺害可申付旨を被仰出。

三月十五日。前田吉德登營して法會等諸事を節すべき命を受く。

〔政隣記〕

三月十五日、萬石以上之御大名御用御召之旨昨日申來、若狹守樣御登城之所、御書立物、戶田山城守殿御續御紙面御渡也。右大綱者。

一、御法會輕く被仰付候事。

一、諸事右に准可申事。

一、献上物被下物減少之事。

三月廿六日。紀伊侯德川宗直、前田綱紀に大明律諺解を贈る。

〔政隣記〕

三月廿六日紀州樣より以御使者、御書物一箱被進之候。是は大明律諺解、松嶋喜朴に被仰付、公方樣に茂御献上被成候。此方樣に被進候樣、從公儀御內意之旨御口上來。右爲御禮紀州樣に吉治公被爲入。

四月十九日。富山に於いて前田正甫の十七回忌法會を營むを以て香奠を贈る。

〔政隣記〕

四月十九日正甫院樣御十七回忌、於富山御法事有之。從金澤組頭を以、御香奠白銀五枚被遣之。前に者十枚に候得共、今度從公儀就仰渡に御減少。江戸於廣徳寺も御茶湯有之に付、御大小將御番頭玉井藤左衛門御使者に被遣、從吉治公者物頭御使を以、白銀二枚之御香奠御備。

四月廿四日。前田綱紀法曹類林等の書を幕府に献ず。

是月は大盡なり

〔又新齋日錄〕

一、四月廿四日法曹類林金澤本三卷・爲政錄十冊伊賀風土記一冊、松平加賀守綱紀是を献ず。此三部今御庫に現存す。加賀家記錄に云。右三部之書物從而御内々御所望に付被献之。被遂御披露候處御喜色之段、水野和泉守殿御本書御渡之事、と見えたり。

四月晦日。前田吉徳、徳川吉宗の増上寺靈廟參詣に豫參す。

御參は徳川吉宗

〔徳川實紀〕

四月晦日、三縁山靈廟に御參あり。御衣冠帶劒にて、寺の更衣所より幘をたてまつり、松平右京大夫輝貞・戸田山城守忠眞・坂職安藤對馬守信友等豫參し、松平和泉守乘邑・岡部内膳正

長敬等の五位八十八人、衣冠帶劍にて行列し、御隨身六人・使番其裝してしたがひ奉る。松平若狹守吉德・松平右衞門督吉泰中略。殊更に豫參し云々。

四月晦日。德川家繼の七回忌法會を天德院に營む。

〔政隣記〕

四月晦日有章院樣七回御忌御法事千部御執行。跡々は万部御執行に而、於本堂有之候處、此度は增上寺御靈屋に而御執行、公家衆御參向も御辭退、御老中御法事御奉行と申名目者無之。吉治公御豫參也。金澤如來寺燒失後に付、天德院に而今日一朝御法會、御奉行は本多周防守。但跡々迄は公儀御法會五ヶ日之御執行に候所、今年より御三家以下一日ゝ今度被仰渡有之。

五月朔日。幕府佳節每に前田綱紀に物を賜ふことを廢す。

〔政隣記〕

五月朔日戶田山城守殿に開番御呼、今年より端午・重陽・歲暮之御拜領物相止候。吉治公に者可被進旨御書付御渡也。且年中御献上物、今度改候に付御伺置之所、同十四日山城守殿に開番御呼、御伺公に御付紙を以御渡。依之只今迄之朔望御肴御献上、其外御精進解每度被上之候分皆々相止候。御內證女中御使は只今迄之通、御內證御献上も追而可被及御指圖旨被仰渡。

七月とあるは後文に據れば五月朔日なり

五月朔日。金澤の町人小松屋由兵衛の女孝行を以て賞せらる。

〔可觀小説〕

一、享保七年秋七月、大野木克明家奴六助之故妻名は振、孝行著聞し、褒美として金を賜ふ事。

女振、父は加州淺野中嶋町小松屋由兵衛と云者なり。享保六年五月、盗賊増内と云者官より其町内に預らる。由兵衛勤番之日増内逃去て行方不知也。盗賊奉行栗田源太兵衛、足輕をして由兵衛を捕へて禁牢せしむ。女振大に憂苦す。町の肝煎等振に敎て云ふ。増内をさへ尋出し候へば、父由兵衛禁牢は可爲御赦免也、精を勵し捜索せよといふ。是より以來心力を盡し、才川・淺野川兩橋の下に心を屬し、乞食非人の集り居候處々へ朝夕罷越承合せ、或は乞食之内一人に鳥目三錢各之を與へ、我等存知候者坊主に成、其方共之内に紛れ有之樣に承及候、年來恰好等申聞、ケ樣之者知らせ候樣に賴。且自宅近處の商賣人等へも、右之趣申聞賴置候。然處泉野に左樣之非人有之旨承出候故、閏七月十日初而朝泉野に罷越候得共見當不申候。十一日夕罷越候處則見受申候。然共其間程遠く可難捕候ゆゑ先罷歸候。十九日朝泉町瓜市之方より増内罷越候を見申に付、自ら形を見候はゞ逃走可申と存、道際之雪隱へ隱れ罷在候所、其雪隱之前へ罷越、小用を調へ罷在候ゆゑ、後より腰に取付候て、覺候やと申候得者、ゑぎ

舍人は大野・木克明

放ち可申と仕候得ども、しかと取付、大罪人を捕候、折合くれ候樣に度々呼り候處、近邊之者共折合くれ候ゆゑ捕之、桶屋へ押込候得ども、裏口より後の芦中町に逃申候。又追懸大聲を上呼り候へ者、向より百姓一人參合、其儘捕くれ候ゆゑ、又最前之桶屋へ召連れ、此者ケ樣々々之者に候、何れもへ預け置申と申聞候へば、成程預り置候間、可斷方へ罷越、早速引取可申よし申故、早々舍人宅へ罷越申達候處、舍人より段々人差遣、縮申付、公事場に引渡し、振には手柄の程賞美いたし、食事爲給候。廿一日於公事場遂吟味候上、ふり父小松屋由兵衞儀出牢申渡候。此旨六助并ふりへ可申聞旨、公事場奉行連署を以申來る。由兵衞へは舍人より鳥目等あたへ、ふり孝行故と稱美いたし、食事爲給相返し候。諸人催感涙候。

一、七年寅四月廿八日、右六助妻ふり、來月一日公事場に可指出旨大野木氏迄申來候所、六助儀當春於江戶暇遣候に付、難指出旨及返答候所、伊藤氏より內狀を以、賊增內を捕出し候趣經公聽候處、難有思召にて御褒美被下候事に候旨申來。則朔日於公事場振に被仰渡候は、父由兵衞預り置候賊を取のがし候處、去年ふり捕出し候始終、婦人之身として種々心を盡し辛勞仕候儀神妙之至、至孝之者と被思召候。依之黃金拾兩被下置候旨、奉行中申渡、父子之者罷出致頂戴候。難有御惠之程難盡言語候。直に大野木宅へ父子共罷越、右之趣申述候に付、兩人へ料理爲給候。拜領之金子は大野木家來田中與三右衞門と申者へ預け置、時々用事候時

分段々に受取申度旨相願候に付、是も尤之事に相聞候故任其願候。六助事は去年已來之儀に付、如何存寄候や、妻離別いたし候に付、此度不及貪着候事。

五月六日。幕府前田綱紀在江戸の期間を延ぶることを許す。

〔政隣記〕

五月六日戸田山城守殿より聞番依御招、菊池甚十郎罷越候所、先達而六郷主馬を以御願之趣被仰出旨演述有之。仍而翌日七日夫々御普爲聽被仰遣趣左之通。

拙子儀所勞透与無之、向暑氣旅行難儀に付、秋中迄在府願之、昨日戸田山城守迄六郷主馬殿を以指出候所、昨晩山城守殿ゟ家來之者被召寄、願之通勝手次第之旨被仰渡、難有仕合奉存候。右之趣爲可得御意、以使者申達候。

五月廿六日。徳川吉宗、室鳩巣に命じて前田綱紀の政治を問はしむ。

〔兼山麗澤秘策〕

去廿五日有馬兵庫頭殿於御城御申聞候は、御自分御存之通、近年以來御臺所入少く、御用も手痞申上、去秋御領過分之損亡に付、御藏米・御切米等被下候儀成兼申躰に候。諸侯之家々仕置等、方々御聞合被遊候處、家中跡目或は半分家督申付候も有之候。或は加増・新知之分は指除、代々取來候知行迄申付候も有之候。或は家督之節知行は不申付族も有之候。唯今公儀之

先生は室鳩巣

御樣子に而は、加增・新知可被下樣も無之候。常祿さへ差痞へ申族に候故、此通りに而は末々に罷成、御藏入拂底に及可申候。ケ樣に而は埒明不申儀に而候。加賀守殿事は大國と申、其上只今之年來に候へ共、終に家督等に相違無之躰に候。然る所加增・新知之類、不絕そこ〳〵に被申付候樣子に候。是は定而何卒心當の圖り考へ等も有之儀に而、數十年以來の格不相替儀と上にも思召候。御手前被罷越、加賀守殿の料簡之趣被承候而可被申上候。則御內意に付申聞候旨御申候。先生被仰上候は、委細奉畏候、此等之趣以紙面は難申達奉存候。取次を以申述候儀は難成筋に御座候。直に相尋候樣に可仕哉と奉存候旨被仰達候處、其儀は相伺可申旨に而候とて、暫く間有之被罷出、上意に者、成程直に承り候而可然儀に候旨被仰出候。依之翌日御屋形に御出被成、佐々木左兵衛を以被仰上候趣は、則先書に申上候通に御座候。扨相公樣御居間書院に而御逢被成、御側近く御呼被成候故、脇差を取除候處、只其儘と御意候へ共、無刀に而御側に寄候而、御仕置方之儀に付、直に御尋申上候而、思召承り候譯に而御座候旨申上候處、御用之儀に而候へば、幾度も御逢被成候而能く候。又は紙面に而も可然旨御意に付、紙面之儀も心付候得共、少難調筋も御座候。其上直に承り可宜旨上意に付、何時に而も御逢可被下候樣申上候處、早速御目見被仰付、於私忝儀に奉存候旨御挨拶申上。其上に而右御尋之趣申上候得ば、近頃不被思召寄儀に而、難有思召候。御尋に而被思召付候へば、

いづれも只今迄御家督等被下候儀、御格無相違被仰付候。但し何故に差支不申候与申御考も無之候。又此圖りとて御心當り之儀も無之候。此御時に而御當座に被思召當候には、御家に而十五・六歳迄之者には、知行之三の一を被下置候者不絶有之候。三の一被下置候得は絶与申にては無之候。且又有故候而跡目斷絶之者も間々有之候。扨新開之地出來仕候も多く有之候。此三色に而埋め合申度と思召候。此外に御考被成置候御圖りなどは無之候。差當り此外に御請は無御座候。只今は御老耄被成、御仕置之儀も思召様に難被成候。そなたの儀にて能き事心付候間、若狭守へ申含め置、若狭守代に成候はゞ、ヶ様之考へ可仕置儀に候。最早手前代之内も間は無之儀故、家中跡目等に而差支候事は有之間敷候。扨是は御請に而は無之候。御手前ぎ之物語に候。巖有院様御代に御要脚指し詰へ申儀有之、其上凶年に而何とも可被遊様無之に付、諸大名より夫々知行米御借被成可然哉との御相談有之候處、保科故肥後守殿達而其儀は不可然事と被申上、只嚴敷御儉約被遊候事に候。扨又旗本中之知行之免を御借り被成候而可然哉とて、是に而事濟申候よし、肥後守殿直に手前へ被申聞候。扨亦當上様諸事被遊様、御尤成事共多く、御代々之上様方之内にも、餘り無之程に奉存罷在候。此存寄誰も可申様も無之に付、家來共之内へは申聞候而、御噂申上る儀に候。下々に至候而は、當上様はやぶさか成様に申慣候躰に承及申候。此儀は且而無御頓着、御儉約御守被成候而可然事に存候。御

先代之内に、御役人衆之内心得惡敷、無益之新法又は筋も無き事ども取立候而、公儀之廣き事にも御難儀成事共に成來候。勿論是等之趣は、御受に而は無之候旨御意に御座候に付、折節於御前講釋等被仰付候時分、毎度御噂有之、御大老に被爲成候得共、今以御仕置等御直に被成、數年以來何之御越度も無御座候旨上意に而、私式迄も恐悦奉存候旨被仰上候處、左樣之御噂も有之、忝思召候旨御挨拶有之旨に候。御退出被成候而、翌廿七日登城之上、兵庫殿ゐ御請之趣幷に御物語之儀共被仰上候處、委細達上聞候處、入組たる御使に候處、申達樣宜候に付、加賀守存寄も委敷御聞被遊候而尤成事共に候。且又物語之趣御承知被遊候。是以尤に思召候旨、兵庫殿を以被仰出候。兵庫殿被申候は、加賀守殿何之考も無之、心當も闘りも無之旨御申候儀は、さすが老功と奉存候。闘り考の無之儀は有之間敷候与被申候而、御前ゐ可罷出旨に而、御座之間へ被召出、上意には、入込たる儀を其方申樣宜敷候而、加賀守存寄も委細御聞被遊候。外之物語も御聞被成、御滿足被成候。加賀守氣色之躰は如何見請候哉と御尋に付、私も久々にて側近く相寄、顏色も見受申候。年來故形は老衰之樣相見申候。乍然氣力口上等は指而昔に替不申候。久敷持病に而、乍憚足之裏に痛み御座候。其痛差引御座候而、惡敷時分は前々登城も斷申儀毎々御座候。昨日は朝より氣色宜敷旨。夫故か顏色も快く相見え申旨申上候得ば、氣力達者に而別而一段に思召候。今日講釋御聞可被遊處、少々御普

請被仰付候へば、其音に而紛敷候間、重而御聞可被遊旨上意に而退出仕候。此趣以紙面舍人迄申達候處、御直書被下、御親翰も加り候に付、卽刻兵庫殿迄爲持遣候へば、御書入上覽、追而兵庫殿より被相返候。其段可申上たゝ、兵庫殿紙面又舍人迄遣候へば、又御書被成下、其分に難成、兵庫殿へ遣候へ共、未其返事は不參候旨被仰聞候。右御書先生には餘り御用にも御座有間敷候歟。私事先年御親筆之紙面も戴候得共、如御存知留置申事難成候に付、所持不仕候。此御書私に可被下候哉と申上候へば、則被下候。上樣之御手迄觸申候御書、殊に一枚紙之御書に付、別而重寶仕置候。御文言左之通に御座候。

猶以老眼殊更手戰候故、年略儀以代筆申入候、以上。

芳簡令披閱候。然ば兵庫頭殿に御請之趣相達候之處、達上聞重疊難有上意、誠以過分忝仕合に御座候。且又御前に被召出、拙者所勞之儀御尋之旨、別而畏入奉存候事に候。重而兵庫頭殿迄、次手之節可然可預御心得候、以上。

五月廿八日　　加賀宰相

室新助殿

〔政隣記〕

五月廿七日室新助殿御内意之爲上使御出御對顏、是御仕置事御聞被爲成度旨也。領國之人民

前文によれば廿六日なり

安泰に罷在、尤家中無異變事、於日本無双は如何樣之仕置に候哉御尋也。御請に被仰上候者、御手前被存候通、中納言被申付置通之品々於書上に者、今年中には不埒明也。然者御請延引に相成候。指當可申上には、惣而家中跡目之節、幼少者には知行に應じ三ヶ一を宛行候。其餘分を以領國を助力致に而可有之哉、此段宜被達上聞旨御請也。

五月廿九日。郡奉行等、城鐘音響の達する距離を上申す。

〔温故集錄〕

城内時鐘之音何方迄聞え候哉之旨御尋

御城中之時鐘損、今般鑄直申に付、只今時鐘之音御郡方何方迄相聞え候哉可申上旨被仰渡候に付、委細之儀左に書記候。

一、風雨も無之天氣宜敷時分は、遠き所は何方迄相聞え申旨、且又天氣不宜遠方に聞に不申時分は、大概何方まで相聞え候旨、兩樣委細可申上候。勿論道程等可書記事。

一、天氣之善惡によらず、風次第聞え申儀に候はゞ、何風之時分能相聞え申候、則何方迄相聞え候旨可申上事。

一、時鐘損不申以前は、遠方にも相聞え候得共、鐘損候故か只今迄は遠方に相聞え不申などゝ申儀有之候者、先年は何方迄相聞え候得共、只今は何方迄聞え候旨、其品委細書上可申事。

一、時鐘之音相聞え申所々ニ、御城より東西南北之品書記可申事。

右之通ニ候條、精誠遂僉議、早速書付を以可申聞候。尤右書立之外にも、其方共心付申品茂有之候者、隨分遂僉議書上可然候、以上。

四月廿八日　　　　山崎久兵衛

　　　　　　　　　本保才三郎

能美・石川・河北郡十村中

松任地方肝煎中

覺

一、御城時鐘平生相聞ニ申所々。

御城より東之方　　河北郡清水村

但御城より指渡大概一里程御座候。

同　北之方　　　　同　郡大場村

但右同斷一里半程御座候。

同　西之方　　　　石川郡打木村

但右同斷一里廿五町程御座候。

同　南之方　　　同　郡　高　尾　村

但右同斷一里半程御座候。

一、右之外河北郡白尾村・二俣村・倶利伽羅村、石川郡熱野村・鷲ヶ原村・大野村ゟ者、天氣相宜風次第間遠に相聞ゟ申候。御城より指渡し大概二里半より四里程御座候。

右十村共ゟ申付爲相尋、承屆書上申候、以上。

寅五月廿九日　　　　本保才三郎

山崎久兵衞

奥村伊豫守樣

右は享保七年也。

按に城内時鐘は、微妙公小松御在城中承應元年に始て被命由、三州志等に云へり。藤田安勝筆記にも承應之頃与覺申候、金澤に初而時鐘被仰付候。中村久越御前に於て申候は、今程金澤にも時鐘被仰付宜事に御座候由申上候へば、何之能事有之候哉。時鐘無之候而も成々に成申物に候。世之中作法等宜成候故、時鐘も無之候へば難叶樣に何も存候。金澤には有之、小松にはいまだ不申付候へ共、何とぞ用事の欠候事も有之候哉と御意被遊候。其時久悦、御尤成儀之由御請申上候とありて、小松には御在城中も不被命と見ゆ。葛卷昌興自記に、元祿元年

七月三日甚右衛門坂の上御宮の邊鐘樓に有之鐘、當分被移越後屋敷。是頃日豐姫君御館敷、金屋屋敷御座所へ響故如此と見え、三州志來因概覽に寶暦六年正月八日越後第火災後、復權現堂門邊へ轉す、此後二ノ丸へ轉じ、後復故の權現堂門邊に轉すとあり。さて此時鐘永應の後度々鑄直したる中にも、享保の頃は不出來にて、度々鑄直さしめられたりと見えて、先件御尋に相成、享保七年鑄直ありしかど、是も其響を惡かりけれ。咄隨筆に、享保九年時鐘の鑄直し白銀前釜屋彥九郎に被仰付、向山御所村領の内の地を借て小屋を懸、鐘鞴三所に拵、鑄形出來して、翌年四月十五日鑄濟し、磨き等濟て、同廿六日越後屋敷の鐘樓へ揚る。朱書に云此鐘いかなる事にや損じけれ、三年とも過ざるに、享保十二年の夏千日町平井但馬守と云鑄物師の名人に被仰付、同冬出來して、十月十八日鐘樓へ揚るとあり。かゝる事などにて、其響の鄙村へ聞ゆる遠近をも、殊に御穿鑿ありたるものなるべし。

六月六日。前田綱紀幕府に類聚國史の內三册を献ず。

〔政隣記〕

六月六日類聚國史之內三册御献上。但林大學頭殿御父子に御示談之處、右被上之可然旨御申に付、御献上被成候旨、水野和泉守殿に被仰遣。同日被遂披露候所、御喜色之御事に候旨之御奉書來。

〔浚新秘策〕

一、伊勢や吉兵衛の話に、近年諸國ゟ被仰出、和書之遺篇段々御搜索被遊候。御國よりは法曹類林全部・類聚國史之內等被指上候。其外國々より多分上り候所、林大學頭殿父子へ被仰付、眞僞爲御正被遊候而、林家より實正之極に而被出候上に而相極まり、御文庫に納め申候。然る處林家父子正本与被極候て差上の內にも、僞作と見え申物有之、又僞書と極め候而不被指上其內に、眞書も相見え申物有之候。上みに茂御不審難明候に付、三月傳奏衆中院大納言殿參府之刻、御近習の御祐筆下田幸太夫与申人學問有之、ヶ樣之儀に心得申方に付、此人に御書物等御渡、高家中條山城守殿を指添被遣候而、眞僞之處被聞召度被仰遣候。傳奏衆雖か与難解候間、歸參候後何れも僉議仕候而、其上に而可申上との趣に而、一圓譯立不申。實は中院殿初め何れも和學無之、眞僞見定め申程之識覽も無之故と相見え申候。然る處山城守殿幸太夫へ御申聞候は、拙者心安仕候者に羽倉齋宮与申者有之、是は京都稻荷の社人に候處、神職弟に讓り、其身は隱逸仕、折節當地へ罷出、只今も參り居申候。此の者殊之外和學委敷、僉議相極め居申候者に而候。是れに御聞合候而は如何可有候哉と內談被申候。其段達上聞に候處、山城守宅に而致參會、爲致吟味候樣被仰出、毎日々々校合も有之、林家より極め被申上候內、大分相違有之、其趣申上候。法曹類林一部は眞本に相極り申候。其中三代格幷に類

聚國史之内、眞僞甚だ見やすく、一度齋宮解決仕候ヘ者、誰れも合点参り申事に候。三代格ハ全部眞本と林家申上候處、其内にも後人書加ヘ候證據にハ、三代格に云々と有之候處御座候。是に而相知れ申候儀之旨申候。御前より被仰出候ハ、能年に而申様に妄り成儀共申上置候。兼々御不審に被思召候。今之大學頭を召寄、幸太夫ヘ引合承り届候様、有馬兵庫頭殿迄被仰出、其通りに被承届候處、父子共御受不分明之事共に候。此趣に而ハ難申上旨、紙面を以申上由に罷成候。其砌兵庫頭殿幸太夫ゟ被申候ハ、拙者共不學文盲に而さヘ、能々合點参候儀に候處、大學頭父子ヶ様に迄胡亂に仕置候而極申事ハ、如何之儀と噂有之候處、幸太夫申候ハ、私共も内々之儀を不審に、如何と申儀に御座候。餘り之儀に而、是程之書も讀ミ得不申歟と申事に御座候旨申候處、今之大學頭立開仕罷在、其儘其席ヘ罷出、幸太夫推參成事を申候。拙子家柄に而相極メ置候を、指出で候而善惡を申上候而已ならず、是程之書も讀ミ申間敷とハ過言至極とて、以之外聲高に罷成申候。幸太夫申候ハ、成程御噂と申、過言に及び申儀ハ紛れ無之候。御自分父子ヶ様に僞作紛れ無之物を、眞本全き物と極メ被申候儀ハ、如何之存寄に候哉と申候ヘば、三代格全部相揃御喜悦に御思召候。是に而相濟候様に思召之旨に而御渡被成候物を、我等方に而全く無御座候旨申上候ヘば疵に罷成、御喜悦被遊候御邪魔に罷成り申候。夫故眞本全く無相違与申上置候旨申候處ヘ、御近習衆罷出、何事を聲高に口

論仕候哉との儀に付、幸太夫有增申上候へども、全部と思召旨被仰出候處、左樣に不存旨申上候へば瑕に成候との趣は、相ひかへ不申上候。追而父子へ、不念至極之儀申上候。以來證據にも相成候。此後林家之極め不被仰付、羽倉頃日迄逗留、大半眞僞相解申上候。御家より上り候法曹類林は、眞本全事無紛存候旨申候。林家眞本与申上候は、大半常々心安く贔負に存候衆より上り申す分は、僉議も無之、眞本に相極め置き申候。皆利德之方に而極め申沙汰に付、散々之樣子に御座候旨、吉兵衞申候。先生未だ御存じ御座不被成候哉と御尋申上候へば、則ち頃日幸太夫より直に御聞被成候旨被仰聞候、以上。

五月廿六日　　青地藤太夫

藏人樣

六月廿八日。幕府その能登に於ける領邑の政治を加賀藩に委託す。

〔政隣記〕

六月廿八日老中水野和泉守殿御宅〻御番御招に付、菊池甚十郎參候所、能州之內土方領一萬四千石餘、日野小左衞門御代官所、向後御預地に被仰付候條、政務之儀無遠慮被申付、刑罰に可被行者は、領國之如人民而、尤不及被達上聞に候。然ば二ヶ年物成被收納、一ヶ年分は金子を以一萬三千石之高可被上之。山川竹木小物成は都而不及被上候。此段早速能歸、宰相殿

先生は室鳩巣

に可申上旨。御禮は御家老可然旨申來。甚十郎承歸及言上。依之津田玄蕃に聞番指添、御老中方に被遣。右に付御國年寄中に之御使、御大小將石黑太郎右衛門、七月二日江戶發、同十日金澤着、翌十一日於越後屋敷、御預地之事難有被思召旨御意之趣演述之。十三日御請濟、十四日金澤を立江戶に歸。

附、慶長四・五年之頃土方勘兵衛雄久者瑞龍公御從弟に候處、從關東之御使に每々往來有之、爲御合力越中新川郡之內一萬石被遣之候。勘兵衛後任河內守、關東に被奉仕、慶長十三年御鷹野之障に相成候旨に而、能州に而替地被遣候而、土方氏代々被領候所、近年御代官所に相成、日野小左衛門殿支配に候。然所此度鄉村帳相渡、如本文御預地に被仰付、生殺共如御國法之と被仰渡。依而右御用御算用場奉行横山中務主之、下役菊田進角・山岸七郎兵衛に被仰付。

〔兼山麗澤秘策〕

一、能州之內日野小左衛門殿支配所、御預け地に被仰付儀に付、被仰聞候者、黑島村公事有之節、上樣思召に者、加賀・能登・越中三ヶ國之儀は、一圓に領知之筈に付、少しも御領は有之間敷筈に候。何故ヶ樣に御藏入有之候哉与御尋に候へ共、且而覺え申者無御座候。先生も御覺え不被成候。然る所誰に而候哉、是は前田大和守殿今之丹後守先祖に、新知一萬石被下

新助は鳩巣

候時分、能州之内に而一萬石御引替可有之旨に而、ヶ様に成來候旨申上候者有之候。夫に而埒明申候旨被仰聞候に付、左樣之首尾も御座候哉、私共不憚候得共、承り傳候は左樣に而は無御座候。是は瑞龍院樣御時分、土方勘兵衞後に河内守殿と申方、則瑞龍院樣從弟之續に御座候。關ヶ原之時分佐竹家に蟄居有之候處、關東より加州へ之御使被相勤、其節之功に而、加州領之内を以一萬石、從瑞龍院樣欸合力分に扶助有之候。初めは越中岩瀨邊に而領知之所、微妙院殿之時より、岩瀨は江戸往來等障に罷成候に付、能州之内所々を以替地に被相願、其通に罷成候旨。其の後孫河内守殿、何故に而候哉領知被召上候而、御領に罷成候旨承及申候。勘兵衞殿御直參之儀者、最初より之儀に候哉、左樣之儀私は慥に不存候。右之譯に而も候哉、近頃右御代官所は、土方領与加州に而下々も申慣候旨、御物語仕候。

此一件は聞捨に難成事に奉存達御内聽候。私申入候趣も定而相違之儀可有御座候哉与奉存候。尤相違之儀承知仕候はゞ、追而新助殿へ可申入心得に御座候と與書を以上申候。晦日の夜之事に御座候。(下略)

六月晦日　青地藤太夫

藏人樣

〔加越能御繪圖覺書〕

享保七年御預所御引渡之節村高

能州羽咋郡之内

高三百六十八石九斗六升五合　敷浪村

高三十五石八斗三升五合　針山村

高六十八石四斗九升二合　原村

高四百八石三升一合　神子原村

高二百五十七石六升七合五勺　福水村

高三百四十二石一升五合　白瀬村

高四百五十一石一斗七升六合一勺　四町村

高百二十三石六斗　千路村

高四百二十五石二斗四升　上棚村

高七十七石四升七合五勺　中山村

高百五十八石六斗四升　二所宮村

高七百二十五石三斗八升　安津見村

高百八十三石五斗　町村

各村高を正しとすれば以下の計數は凡て誤れり

高百七十二石九升六合　安部屋村
高三百二十石八斗二升五合　佛木村
高四十九石六斗　松木村
高八十三石二斗三升　豐後名村
〆四千二百五十石二斗九升一合　羽咋郡御預所

同鹿島郡之内

高九十三石九斗二升八合一勺　川田村
高四百五十石六斗七升五合　下村
高四百二十四石六斗五升五合　八幡村
高三百二十五石二斗八升三合　熊淵村
高三百四石六斗六升六合五勺　山崎村
高百五十七石三斗　花園村
高二百二十七石一斗九升二合　東濱村
高三百七十石二斗三升四合　大泊村
高二百九十六石一斗四升四合　佐々波村

高三百十三石六斗六升五合八勺　庵村
高二百四十九石五斗九升二合　江泊村
高二百八十石七斗五升一合五勺　大野木村
高百十一石一斗二升五合　祖濱村
高百二十二石一斗九升七合　石崎村
高百九十二石七斗七升七合　瀬嵐村
高三百三十二石　谷内村
高百七十八石三升九合　別所村
高五十石五斗八升二合五勺　深浦村
高二百五石九斗四升八合四勺　外村
高三十六石六升三合　田岸村
高三十七石六斗四升　横見村
〆四千七百六十石三斗九升八合八勺　鹿島郡御預所
能州鳳至郡之内
高六十九石六斗六升六合　鹿島村

鵜島村　高二百五石一斗四升五合
大町村　高五百九十三石九斗七升
川島村　高四百五十七石三斗五升九合五勺
天神谷村　高七十五石八斗五升四合
上唐川村　高二百一石六斗七升五合
下唐川村　高三百三十八石二斗五升五合
黒島村　高六十六石一斗九升四合
七海村　高二百石九斗五升
梶村　高六十四石七斗二升一合
藤巻村　高八十四石八斗八升七合五勺
岩車村　高四百四十石八斗一升九合五勺
鹿波村　高四百七十六石六斗七升三合五勺
曾良村　高百八十一石八斗一升
中谷村　高六十八石四斗八升
院内村　高三百十四石八斗五升八合五勺

高百七十六石六升　黒川村

高百二十一石九斗七升一合　河内村

高百一石三斗八合　伏戸村

高四百八十八石五斗六升三合　大野村

高百三十三石三斗　井面村

高二百十九石三斗二升　時國村

〆五千十五石四升六合五勺　鳳至郡御預所高

能州珠洲郡之内

高二百三十九石五斗四升三勺　眞脇村

〆　珠洲郡御預所高

惣高一萬四千二百六十五石七斗七升五合七勺

惣村數六十一ヶ村

〔越登賀三州志來因概覽〕

今年六月廿八日能州四郡に散在する公領御預地と命じ、渡る所の郷村帳石高一萬四千二十四石五斗四升三合八勺也。是迄の算數皆一萬石に係れども、以來能登國石高に於て四千石餘過

當となる算也。

六月。放鷹に關する從前の禁令を勵行すべきことを告ぐ。

〔御定書〕

覺

一、往還道筋鷹を据罷通候者心得違、其道際之御鷹場御留野之内ニ入候而、餌飼仕儀など無之樣、急度家來等ニ可被申付置事。

一、向後鶴捕候もの、御鷹匠小頭ニ相斷、札を取候而、其上に而隼捕候樣に可被申渡事。

一、右之通覺書を以、享保元年御留守中各ニ圖書・修理申達、御横目ニ茂相達、御家中之面々等承知仕罷在事に候。然處御鷹匠小頭等ニ不及斷、隼打候而々茂有之由。且又つなばこにて鷹捕候刻、不及斷下に而密々不宜筋之取沙汰茂有之候由。向後左樣之儀無之樣、急度頭・支配中ニ可有御申渡候事。

一、御鷹場ニ御家中の鷹入込候儀、跡々より尤御停止候處、近年者入込候者茂有之沙汰候間、前々之通彌無之樣、嚴重に諸頭・支配人等ニ可有御申渡置事。

一、地廻三里四方にはてんの網張鳥捉不申筈に候處、近年は猥に有之樣に相聞候付而、急度相改候樣、百姓共ニ御郡奉行より嚴重に申渡置候條、御家中之人々其旨相心得罷在候樣に、

組支配人ゟ可有御申渡事。

一、御停止場者勿論、御赦免場に而茂、懸もち・ながしもち等之儀者、尤前々より堅不仕筈に候處、近年猥に罷成、所々懸もちいたし候旨相聞候に付、相改候樣に百姓共ゟ御郡奉行より申付置候。此旨御家中之人々承知仕罷在候樣、組・支配人幷町御奉行等ゟ茂御申聞置可有之事。

以上

寅　六　月　　中川式部

前田左京

右御鷹場等之儀付而覺書指越、各申談、御家中之面々幷町御奉行・御郡奉行等承知有之樣に可仕旨、中川式部より申來候付而、寫進之候間、此趣各に茂御承知被成、尤夫々嚴重に相守候樣可被仰談候、以上。

寅八月九日　　本多圖書

前田修理

今枝民部

玉井勘解由

奧村伊豫守樣

〔御定書〕

御鷹場等之儀付而、御鷹方支配之面々より申來候紙面之寫、御家老中以添書被相達候付而、則寫指越之間被得其意、組・支配等急度可被申渡候。御鷹場之儀者、前々より度々相觸候得共、猥成族有之段沙汰有之候間、嚴重可被申渡候。

一、今度能州御公領御預地に成候村々之儀者、諸殺生不仕筈に候。御預地に成候故、御公領之時分とは違、殺生等不苦樣心得違、又は此方御領と入交有之儀に付而、往還道筋などの儀は、猶更猥成儀茂可有之候哉、是又急度相心得候樣に、組・支配與力・家來末々迄可被申渡候。且亦組等之內裁許有之人々者、夫々申渡候樣可被相達事。

右之趣可被得其意候、以上。

壬寅八月十五日　　奥村伊豫守

七月三日。幕府諸侯を召して米穀の上納を命じ、在府の期間を短くす。

〔浚新秘策〕

一、七月朔日諸侯朝參之處、明後三日萬石以上之衆、御用之儀候間可有登城、但御暇・病氣・幼少之輩は、名代之衆可有參出候旨、大御目付横田備中守殿被述候。三日相公樣御名代前田伊豆守殿御出有之候。嗣君には頃日御腫物御痛に付、廿八日・朔日御登城不被成故に候。前田

年々は近年歟

帯刀殿には丹後守殿名代に御出、長門守様には御自分之儀に付御出、備後守様御名代本多帯刀殿に而候。於殿中水野和泉守殿を以御渡被成候御紙面之寫如左。

御旗本に被召置候御家人御代々之數被相增候。御藏入高も先規よりは多候得共、御切米・御扶持方、其外表立候御用筋渡方に引合候而は、畢竟年々不足之事に候。然共只今迄は所々の御城米を廻され、或は御城金を以急を辨ぜられ、彼此漸御取續之事候得共、年々に至而御切米等も難相渡、御仕置之御用も御手支之事に候。夫に付御代々御沙汰も無之事に候へ共、萬石以上之面々より米指上候樣に可被仰付与思召候。左候はでは、御家人之內數百人も御扶持可被召放旨之外は無之候故、御恥辱をも不被顧被仰出候。高一萬石に付、米百石之圖可被差上候。且又此間和泉守へ被仰付、隨分遂僉議、納り方之品或は新田等取立候儀申付候樣にとの御事に候へ共、近年之內には難相調可有之候條、其內年々上げ米被仰付に而可有之候。依之在江戶半年宛に被成御免候間、緩々致休息候樣にとの被仰出候。

何茂在府之儀に付而は、江戶人多にも候故、兼而思召も有之たる事に候間、此以後在府之間も少き儀に候條可成程は人數可被相減候。

〔政隣記〕

七月三日萬石以上殿中江召、御老中列座、水野和泉守殿仰渡候趣左之通。但吉治公御痛有之、

御名代前田伊豆守殿ゟ御賴也。
近年御蔵所入言之外不足に付、新田等被仰付候。此儀成就之内、一萬石に米百石宛御藏入被仰付候。依之向後者、諸大名交代半年在府、一年半在國之樣に被仰付候。此儀御代々無之儀に候得共、兼而此通に被遊可然思召候に付、此度被仰付候。右御藏入之儀、春半分秋半分、手寄次第大坂并御當地に而も可被差上候。若不手廻之方は、御切米張紙之直段を以、代金に而可有上納候。御恥辱之儀に候得共、不被顧被仰出候。
但老中以下萬石以上之諸役人中者、御宥免被仰出候所、一統に上納之儀就被願候、然らば右之半分可指上旨被仰出。

七月七日。能美郡今江村の百姓等、御馬廻組岩田武太夫の子傳左衛門を凌辱す。

〔政隣記〕
七月十日小松御馬廻御番頭稲垣八郎左衛門年寄中迄言達之趣。
當七日御馬廻岩田武太夫子傳左衛門儀、同所一向宗本光寺住持令同道、傳左衛門儀及酔狂にも候歟、今井村に而百姓共と及口論候所、百姓大勢寄集り、傳左衛門を手込に仕、脇刺押取散々に打擲仕、其上に誤書付を爲調候而大小相渡候。傳左衛門儀失十方候仕形、兎角可申樣

今井は今江

も無之候、如何様共可被仰付候。但百姓共脅候爲躰、御吟味有之様に仕度旨相願候。傳左衞門儀父武太夫ゟ預置、本光寺住持者令遠慮候。廿一日今江村百姓共於公事場遂吟味、大勢之内最初に傳左衞門を手込に仕候者、幷誤書付爲調候者三人令禁牢。

九月十九日。今明兩日前田吉德夫人の三回忌法會を江戸傳通院に營む。

〔政隣記〕

九月十九日・廿日百部之御作善。附、去年迄者三百部御法會也。

光現院様三回御忌御法會於傳通院被行之、御代香上使安藤對馬守殿、御香奠白銀廿枚。

　但前々白銀百枚に候處、萬端御簡省に付如此御減少。

〔政隣記〕

九月廿日、前記之通傳通院に而、從吉治公御法會御執行、御奉行者成瀬内藏助也。今朝御名代安藤對馬守殿御出、尤御目付衆幷爲御固、御歩頭衆等御詰有之。于時相公様より、御目付衆迄内藏助を以、御名代御出以前よりも御詰可被成所、御行歩御不自由に而、迚も御出向難被成、乍御略儀今朝者御出不被成由被仰達、晩景御參詣。尤吉治公者昨今共御參詣也。

〔德川實紀〕

九月二十日光現院御方（常憲院殿御養女、實尾張中納言綱誠卿女、松平若狹守吉德か室）三

年周忌の法會傳通院にて行はるゝをもて、目付小笠原平兵衞常春・徒頭中山主水勝豊、寺にまかる。安藤對馬守信友代參し、香貲二十枚をすゝめらる。よて松平若狹守吉德出で謝したてまつる。

九月二十日。金澤に於ける地子町組合頭の袴摺銀徵收の方法を改めんことを稟請す。

〔國事雜鈔〕

地子町組合頭袴摺銀之儀、跡々自分に取立受取申來候處、去年より右取立銀御場ゟ爲致持參、私共承屆相渡申候。右之通相對取立に而は如何敷奉存候間、向後右袴摺銀、組合之内に而代り々々取立番相立爲取集、於御場私共請取、組合頭ゟ相渡申樣に可仕与奉存候間御伺申上候、以上。

　　　　　ヲ九月廿日　　　　　　　　　横　目　肝　煎

九月廿八日。前田綱紀去々年來引續き在府せしも、參覲の期に當るを以て物を幕府に上つる。

〔政隣記〕

九月廿六日水野和泉守殿御宅ゑ開番御招、御參勤御禮御登城之儀者御斷、御名代を以御献上物可被成哉与、兼而御老中方ゑ御相談之處、御名代には不及候、明後廿八日以御使者、御献上之品々御納戸ゑ可被納旨被仰渡。同廿八日御献上物御太刀一腰・縮紗廿卷・白銀五十枚・包熨斗、御小將頭堀平馬被指副之、且御家老成瀬内藏助・中川式部献上物、御縮廿筋宛持參す、御目見者無之筈に付、半上下着用罷出、御奏者衆御請取之也。平馬ゑに御老中可有御逢候條、長袴可着旨御奏者衆御指圖有之候所、吉治公於御黑書院御禮之上、相公様御痛之御様子段々御尋、御懇之上意就有之候、御使者ゑ御老中御逢無之、平馬退出す。右爲御禮、御城下り御直に御老中御廻勤。將又右之通御懇に御尋之上意之趣、從吉治公御注進之御使、御供之内より御部屋附御先手物頭由比五郎左衛門勝尹ゑ被仰付、一騎驅に而來言上。依之俄に爲御禮、相公様も御老中方御廻勤也。右者從去々年雖御在江戸、去秋より當秋迄は御在國之圖り故、當秋は御參勤之御格。依之御參勤之御禮可被仰上筈之處に、御老衰其上御持病之御足痛に付、御登城御延引。然るに右御老中方御回勤之事は、於殿中御老中御申聞は、宰相殿爲御禮描者共宅ゑ御出之節、御老林御下乘も可爲御難儀條、御下乘無之内に家來共門外ゑ出向、御口上可承之旨申付候間、此段可被申上旨被仰聞。依而今日御勤之節御下乘無之、御駕籠之内に而夫々御口上被仰置候也。附、今日吉治公は月次御登城、いつも御表に而御目見之所、今日は

御名代之御振に候哉、如本文於御黒書院御目見。

十月四日。前田吉德江戸平尾邸に放鷹す。

〔政隣記〕

十月四日吉治公於平尾御放鷹、御拳に而眞鴨六・小鴨一被爲獲、御献上被遊度旨御伺之所、可被差上旨に付、公方樣江同六日眞鴨雌雄被献、御奉書來。相公樣江も二被上之、兩姫君樣江一宛、寵姫樣江小鴨被進。

〔松雲公夜話〕

一、同月四日御下屋敷にて、若狹守樣御翕被遊候御拳の鳧二つ、同六日御献上、青竹に二つならべて懸る。竹の寸法繩の留樣等、池田岡右衞門に被仰付指圖也。右之竹を、木地臺の左右に柱のやうに木を立、竹の懸り候所くり、鳧の足臺に少付申ほどに御懸させ被遊候。臺の恰好等者、相公樣御好被遊候。是は先年新戸江御暇、御歸府の時分、毎度御禮御登城の節、眞雁二つ宛御献上被遊候。其時御次迄者右之通り臺に懸出候而、御前江御出之節は、御進物番衆竹ばかり左右の手に御持出伺候。御禮相濟、上意有之、御間之内江被爲入候時分、御進物番衆御勝手之方へ入被申候。其時節之御樣子、覺え申ものも有之候哉と御尋に候得共、誰も覺え不申候。御前に者右之通り歟と御覺え被遊候由にて、御認被仰付候。最初者眞雁二つ被指

御三人は尾紀水三侯

御代には徳川吉宗の代になりてなり

上候得共、御三人様よりは白雁一つ・眞雁一つ被上之、見分宜敷候故、御前より菱喰青白雁一つ・眞雁一つ宛御獻上被遊候由、同月四日御意也。

十月十三日。徳川吉宗自ら獲る所の鶴を前田綱紀に賜ふ

〔政隣記〕

十月十三日御使番寛新太郎殿を以、昨日於志村邊、御拳之鶴を御拜領、爲御名代吉治公御登城、御老中方ゟ者相公様御廻勤也。但御拳之鶴、於御玄關新太郎殿直に御使番生駒藤九郎ゟ被相渡之、御書院ゟ藤九郎持出之御頂戴。同十五日御披、御客有之。

〔松雲公夜話〕

一、享保七年十月十三日八半時過、上使寛新太郎殿御使番を以而、御拳ゝ鶴ゝ五ッ、六尺計の葉付竹に・竹同しくに竹をそぎかけ、鶴をはさみ、かうよりに而ひとへかたわなにくゝり、竹の本末にすにそぎ有之候。御拜領也。同十六日御披き被遊候。其前日御意被遊候は、御拳ゝ鶴御拜領は御代に無御座候。此度初而之御事に候。

〔松雲公夜話〕

一、同十五日本多帶刀殿御出、中川式部に物語に、今朝御城にて小栗長右衞門へ逢申候。長右衞門被申候者、一昨日加賀殿に被進候鶴ゝ懸やう、何とぞ批判も無之候哉承度と被申候に付、未何ゝ噂も承不申候。今日も參り申候。明日は披被申筈に而參り申候。何故御尋候哉と

申候得者、加賀殿にはむかしより鷹御數寄、若狹守殿に茂御數寄被遊候。金澤は鷹方何茂功者之由承及ご候。此度の鶉の付やうは、鷹方に曾而無之懸やうに候間、定而笑物にて可有之ご存尋申由被申候。帶刀申候者、未何の噂も承り不申候。それは何故左樣に被仰候哉ご尋申候へば、長右衞門被申候者、去十二日御拳の鶉中にて、鳥ぶりの宜敷を御撰に被遊、御前にて札など御付させ置被遊候。十三日の朝御近習衆に被仰付、御前にて竹に御付させ被遊候。何方へ被遣候共相知不申候。扨長右衞門初め御鷹方の衆へ御見せ被遊、此付やうは宜敷候哉ご御尋被遊候。長右衞門など申上候は、此付やうは鷹方に曾而無之候。白人の付申ご相見え候由被申上候。其外に茂誰かれ御見せ被遊候由。御前より被仰出候者、左候得者さつご濟申候。白人の付申ご相見え候得ば、御前にて御付させ被遊候事はきご相知れ申候。此通りにて可被遣旨被仰出、追付こなた樣に被進候上使等被仰付候。其迄は何方へ被遣候ご申儀、曾而相知れ不申、若淨圓院樣などへ被進事に茂候哉ご何茂申候。右之趣にて御鷹方の衆付不被申、鷹方に者曾而無之付やうに候故、笑物にて候半ご存尋申事に候由被申候旨物語也。且又先日若狹守樣より御獻上御拳の鳧認樣、何とぞ噂も御座候哉ご式部尋申候得者、此儀も承り候。長右衞門被申候者、脇々より上り申は大かた竹に懸、すかしなど有之箱の内に懸、又者籠などにかけて上り申候。こなた樣より上り申者、言ひ外手奇麗にて、上を敬はれ候御樣子とかく

何ごとも不被申、見事成御認ニに御座候由何れも申候。そいさゝにて、御前へ上り申候。其夜御料理に被仰付、御膳に茂付申由承り候旨物語之由、式部より達御聽候事。

享保八年

正月廿二日。前田綱紀・吉德父子、德川吉宗の初老を祝して物を獻る。

〔政隣記〕

正月廿二日公方樣御四十之御賀に付、爲御祝儀從相公樣二種一荷、從吉治公一種一荷御獻上。御使聞番湯原甚右衛門勤之。御三家樣・此方樣溜之間詰衆迄右御祝儀物御獻上、其外より者上り不申候事。

正月。十村等領内の高札に關して答申す。

〔加州郡方舊記〕

御領國御高札相建之儀、宿方・村方之内相建申譯御尋被成下。加州之儀、宿方には忠孝御札・毒藥御札・きりしたんの御札二枚・捨馬之御札・人賣買之御札、以上六枚相建申候。其外に五ヶ所村方、捨馬之御札一枚宛相建申候。此外浦方には浦御高札・湊御高札・異國船御高札二枚、以上四枚相建、都合十枚相建居申候。越中之儀茂宿方不殘、右之通御高札御座候。捨馬

御高札礪波郡村方に三ヶ所、新川郡村方に三ヶ所御座候。射水郡に者宿方・浦方・宿方に者、浦御高札建居不申所々茂御座候。能州之儀も右御高札、先は宿方・浦方同事に御座候得共、馬繼宿こ申所に者、六枚之御高札相建不申所々も御座候。此儀者如何之御様子に而相建不申儀相知不申候、以上。

享保八年正月

若杉　田井　南森下
田中　津幡江　天正寺
三階　相神　鹿野
中居

菊田逸角殿
山岸七郎兵衛殿

二月十三日。徳川吉宗放鷹にて獲しめたる鶴を前田綱紀に贈る。

〔政隣記〕

二月十三日上使御使番佐野與八郎殿を以、御鷹之鶴御拜領。吉治公にも御同人を以、御鷹之雁二御拜領。御名代備後守様爲御禮御登城、吉治公御登城。右上使御作法前々之通。且上使濟、御家老中に鶴爲見候様可仕旨被仰出候に付、御敷舞臺御間上之方御縁頬之方鴨居に懸置、

三人共致誘引拜見有之、悉旨被申上。或云、去年以來御拳之鶴可被進思召に而御延引、當十一日小菅ゟ御鷹野御成之筈に候處、曉より雨に付御成止。然者彌被下候儀遲く成候に付、御小納戸瀧江縫殿右衛門と申人當番之處、其方小菅ゟ罷越御鷹を以鶴を給可申候、御鷹匠共には下ハ成間鋪旨上意に而、從御城早馬にて小菅ゟ被參、則鶴給せ、又早馬にて被歸候由、則其鶴を御拜領と云々。

二月。前田綱紀眼疾を榎並玄怡に治療せしむ。

〔御年表〕

是月公久々御眼疾有之、殊に御右眼御痛に付、江戸中眼科御撰ありて是月より榎並玄怡に御療治被仰付。

三月十三日。前田綱紀就封の暇を受く。

〔政隣記〕

三月十三日上使御老中安藤對馬守重行朝臣を以、御國許ゟ之御暇被仰出、御拜領物去年被仰渡に付、此度より改り、縮緬三十卷・白銀百枚御拜領。但是迄者御時服百領・白銀千枚之處、右之通御改革有之。

右に付御暇之御禮、明十五日可有之處、御歩障御難儀に付、爲御名代吉治公御登城、御家老

兩人可被召連候、兩人之交名今晩中可被指出旨等、十四日對馬守殿・本多帶刀殿迄被仰含之上、間番御招に付、湯原甚右衞門對馬守殿御宅に參出之處、明十五日吉治公爲御名代御登城、幷御家老兩人罷出候儀、不及其儀に候段被仰渡。

〔德川實紀〕

三月十五日朝會例のごとし。松平加賀守綱紀をはじめ、就封のいとま給はるもの七十四人。

前文によればは前田綱紀は名代を以て辭見の禮を行はしめしなり

三月十六日。石川郡宮腰に災あり。

〔政隣記〕

三月十六日夜、加州宮腰火災、百三十軒燒失。火元能登屋甚左衞門家。暮六時出火八時鎭火。但火消五人、御使番・御横目一人充罷越。

是月は大盡なり

三月晦日。能登に於ける諸職人の工料を定む。

〔筒井舊記〕

覺

一、一匁二分　家　大　工

一、二　匁　舟　大　工

一、一　匁　木　挽

一、一匁　　　　　　　桶師幷やねふき共
一、八分　　　　　　　檜物屋
一、八分　　　　　　　ぬし屋
一、六分　　　　　　　かべぬり
一、一匁五分　　　　　石切

右御郡方諸職人手間料銀、唯今新銀之圖りを以書上申候間、手間料銀此通に取遣仕、賄之外何によらす取遣仕間敷旨、能州御郡方へ御紙面を以被仰觸可被下候。爲其御斷申上候、以上。

享保八年二月廿五日

相神村　藤右衛門
三階村　源右衛門

村井安左衛門殿
澤田十郎兵衛殿

御郡方に罷在候諸職人作料銀之儀、扶持人十村相神村藤右衛門・三階村源右衛門、別紙之通作料銀相圖書付出候故、委曲見屆候條、以後別紙之通作料銀相極、夫々雇候樣双方に可申渡候。此紙面判形候而、早々相廻、落着より可相返候、以上。

享保八年卯三月晦日　　　　村井安左衛門　印

羽咋・鹿嶋・鳳至・珠洲郡十村中

澤田十郎兵衛　印

四月十二日。前田綱紀隱居を請ふの意あることを豫め幕府に告ぐ。

〔御親翰帳〕

御卷日の上御押札寫

　其前安藝守殿を以御用番迄内談書付寫

御書付寫

今度拙者儀、首尾能歸國之御暇被下置、難有仕合奉存候。乍然近年別而老衰、其上舊冬より眼痛一入、行歩不自由に御座候而、右御禮にも登城不仕、迷惑至極奉存候。彌以物覺茂無御座、此躰に而者歸國仕候共、仕置等無覺束存候間、隱居之願申上度奉存候。何分にも思召之通被加御指圖可被下候。尤以參可得貴意候得共、此間者猶更不行步候故、松平安藝守を以先及御内談候、以上。

　四月十二日　　　　　　　　　　　松平加賀守

四月二十日。加賀の郡方に命じて往還筋の修繕を嚴にせしむ。

〔加州郡方舊記〕

御郡方往還道筋田地玉ぶち、百姓共切せばめ候故、並松連々立枯、根返り等に罷成沙汰之限りに候條、左樣之族無之樣にと、正德三年に紙面を以申渡置候處、玉ぶち以之外切せばめ置候所々有之候。尤往還筋に候間、其方共常々罷通候時分見屆、悪敷所は急度可申付置儀と存候處に、ゆるかせに仕置躰と相考候。彌御定之通り、並松より六尺通り玉ぶち付置、少茂切せばめ不申樣に、百姓共へ嚴重に可申渡候。勿論六尺よりせばめ有之所者、玉ぶち爲付添可申候。

一、宮腰往還道幷粟ヶ崎道之儀、以之外悪敷罷成候。畢竟道之儀者、村々より常々加修理宜可仕處に、大損じに及候而茂其分に仕申儀、沙汰之限に候。右兩所道筋、村々支配之十村中より急度申渡候。最前修覆可申付候其所迄に而手に合不申候はゞ、淵上・上野兩人之組々より助力仕、道作立候樣に可仕候、以上。

四月廿日　　山崎久兵衛

本保才三郎

能美郡・石川郡・河北郡往還筋十村中

四月廿六日、前田綱紀幕府の士六郷主馬に託して隱居の願書を提出せしむ。

〔政隣記〕

四月廿六日朝五時前、御先手六郷主馬殿御出、御書付戸田山城守殿ゟ御持參、其外御老中方ゟも御越御演達之趣有之。重而御出、御書付御受取之旨、山城守殿被仰聞候由等御申上也。此御書付者御隱居御願書之御樣子に候事。

〔親翰帳〕

御卷目之上御押札之寫

卯四月廿六日以六郷主馬殿御用番迄指出候願書付之寫。

御書付

私儀近年老衰仕、其上舊冬より眼痛一入、行步不自由候故、歸國之御暇被下候御禮に茂登城不仕、色々保養仕候得共、今以同篇に而、快氣仕可相勤躰無御座候。依之私隱居被仰付、同氏若狹守ゟ家督被仰付被下候樣に奉願候、以上。

眼痛申候に付用印判候

享保八卯四月廿六日

松平加賀守　印

戶田山城守殿

水野和泉守殿

安藤對馬守殿
松平左近將監殿

〔加藩雜記〕

一、享保八癸卯四月廿七日相公樣御隱居御願之御書付、六鄕主馬殿御出入御旗本を以て月番戸田山城守殿迄御指出候處に、御預城地被指上之旨御書加可被成由、松平陸奥守殿隱居願之書附事短く宜候間、此方樣にも御文言被指詰御調可被遣旨に而被相返候に付、六鄕殿被罷歸其段被申上候處、御意に不應、居城を御預城と被存候哉、且又事短く書付調候へとの儀難心得儀也。左候はゞ先其分と御意にて、被打捨置候御樣子故、六鄕殿より戸田殿ゟ右之趣被相達候得者、七時過戸田殿より、如何樣共思召次第に御調、早速被指上可然旨申來候により、右之御書付之儘翌廿八日の願六鄕殿を以て、重而戸田殿ゟ御指上被遊候。

本文の趣は誤傳なるべし

四月廿六日。前田綱紀隱居を出願したることを金澤の老臣に報ずる書を認めしめ、使者翌日を以て發す。

〔親翰帳〕

御卷日之上御押札寫

此儀に付金澤家老共方ゟ差遣候直書之寫。

御書付寫

猶以四・五日以來腕甚ふるひ候故用印章候、以上。

我等近年別而老衰、參勤歸國共に其時節發足も難成、去々年も例之時節御暇被下候へ共、早速難罷立候付、先達而隱居之願可申上候哉、但御暇被仰出候迄差扣可申哉之由、井上河内守殿ゟ林大内記殿を以及内談候處、先隱居之願者差扣、其内御暇被仰出候而も、早速發足難成候はゞ、在府之願申上可然候。其上にて者如何樣之願も相調可申候。御暇出不申前、隱居之願者不可然由、河内守殿自筆之紙面大内記迄來候而、即致一覽候。因此御暇以後滯留之願申上、勝手次第之由被仰渡候。其以後見合、隱居願之儀河内守殿ゟ可及御内談与存候處、河内守殿煩段々相滯、ヶ樣之内談難申入樣子に付、見合有之候内次第に差重、去年五月卒去。其後追付能州之御預地被仰渡、其格茂不相極内、隱居等之願難申出差扣候。當春に至大方其格式も相極申候故、此度隱居之願、御用番ゟ松安藝守殿を以及御内談候處、勝手次第相願候樣に御指圖有之候に付、今廿六日願書付、六鄉主馬殿を以御用番戶田山城守殿迄差出候處、一段首尾能御請取、各可有御申談旨御挨拶に付、主馬殿直に外御老中方ゟ茂被相越、其より此方ゟ被參、首尾能相達候由被申聞候。因此安藝守殿を以山城守殿迄御内談之書付、是又山城守殿ゟ主馬殿を以差出候。願書付之寫爲一覽差越之候。猶中含武藤庄兵衛口上候、以上。

卯四月廿六日

前田近江守殿
奥村伊豫守殿
本多周防守殿
横山監物殿
奥村内記殿
今枝民部殿
本多圖書殿
前田修理殿
玉井勘解由殿

武藤庄兵衛
知周

〔政隣記〕

四月廿七日御近習物頭武藤庄兵衛ゟ、金澤ゟ之御使に可被遣候。金澤に十四・五日計も罷在、歸候時分せがれ平馬同道仕候而罷越候樣、當十七日御内意、昨夜表立被仰渡。御前ゟ被召出御懇之御意、綿入御羽織一・金子廿兩於御前被下之。今朝江戶發出、五月六日金澤參着。翌七日登城、年寄中ゟ御隱居御家督御願之儀御内意之趣申述。六月十一日平馬同道江戶へ歸着。

五月朔日。前田綱紀金澤の老臣等に書を與へて出府の準備をなさしむ。

〔親翰帳〕

卷目之御押札

重而金澤家老共へ差遣候直書之寫

御書付寫

猶々紙面之趣に候へ共、萬一如何樣之儀にて被仰出相延可申も難相知儀に候間、重而使者差越候迄者相扣可被申候。假令使者到着候而十日計發足相延候分者苦ヶ間敷候、以上。

前以使札申遣候通、去廿六日願書付差出候得共、未何之御沙汰も無之候。定而近日にて可有之候。左樣に候はゞ家督御禮之節、家老之面々御目見可被仰付候。未何之御沙汰も無之內申遣候儀指扣候得共、願之通被仰出候上申遣候而者日數相延可申与、其段戶田山城守殿へ迄及內談候處、御指圖にて者無之候、其段者勝手次第之由被仰越候。然上者別紙に相載候面々、隨分輕く支度候而、用意相調次第段々可有發出候。此段爲可申聞、以早飛脚如此候、以上。

五月朔日　宰相印

前田近江守殿

奧村伊豫守殿

本多周防守殿
横山監物殿
奥村内記殿
今枝民部殿
本多圖書殿
前田修理殿
玉井勘解由殿

五月九日。徳川吉宗、前田綱紀の隱居及び吉德の家督相續を許す。

〔政隣記〕
御用之儀候間、明九日五半時、其方爲名代松平右衛門督可被指出候。且又同氏若狹守登城候樣可被致候、以上。

五月八日

松平左近將監
安藤對馬守
水野和泉守

松平加賀守殿

〔政隣記〕

九日前日之依御奉書、今朝五時過御名代右衛門督池田侯吉泰朝臣、且吉治公御登城之處、御兩公共御座之間に被爲召、相公様御願之通御隱居、吉治公に御家督之儀御直に被仰渡、其上段々御懇之上意に而御退。吉治公より先右之趣早速御部屋附物頭吉野善八郎一英を以被仰上、闘番湯原甚右衛門成門も指續罷歸、兩人共大御門より入、殿中御首尾委細に言上。吉治公者御直に御老中方・若年寄衆御勤、九時過御歸館。其以前右衛門督様從御城直に被爲入、於御居間書院相公様御對面、上意之趣被仰上。相公様爲御禮、御老中方・若年寄衆には、御名代右衛門督様今日御勤。

今日より十四日迄、表向布上下着用平詰也。

〔政隣記〕

同夜吉治公御居間書院に御出、御家老成瀨内藏助・津田玄蕃被爲召、今日之御首尾被仰聞、諸頭共に可申聞旨御意に付、其趣内藏助被申聞。依之御兩殿様に之御祝詞、右御帳に付、明後十一日御家老中御小屋に相勤申筈也。

〔德川實紀〕

五月九日加賀の國金澤の城主松平加賀守綱紀こふまゝに退休して、その子若狹守吉德に、原

封加賀・能登・越中の國百二萬五千石餘襲しむ。

五月十日。能登に於ける栗樹伐採の手續を令す。

〔加藤氏日記〕

先達而申入候、能州四郡御林山に在之栗之外、百姓持山等に有之候栗之木、向後勝手次第代取申筈に候。但目廻四尺五寸以上大木者、伐取申儀候はゞ各迄願紙面指出、當場に被相達、印合候紙面山奉行へ致持參、山廻足輕等差出、遂見分爲伐取申筈に候之條、此趣可被申渡候、以上。

癸卯五月十日　　　御算用場

澤田十郎兵衞殿

村井安左衞門殿

右之通申來候に付、寫指遣候條得其意、夫々申渡御請書付取立、其趣面々より書付可指越候。此紙面披廻以後、早々先々相廻し、落着より可相返候、以上。

卯五月十二日　　　澤田十郎兵衞

村井安左衞門

四郡十村中

五月十五日。前田吉德登營して德川吉宗に黑書院に謁す。

〔政隣記〕

五月十五日吉治公御登城。但昨十四日御用番安藤對馬守殿ゟ御尋、是迄之通御大廣間に有之候處、御登城可被成旨御指圖有之。御着座之處、御目付大久保市郎右衛門殿被罷出、今日より於御黑書院御目見之等に候間、是ゟ御出有たく旨御申述、松之御廊下ゟ御出之處、大御目付横田備中守殿・內藤日向守殿被出向、今日より宰相殿之通、於御黑書院に御禮之等に候旨御申演、御部合も相公樣御同然之旨御申聞有之。夫に付御禮所も御覽置被成候樣、備中守殿等御申上有之。追付御禮始り、御三家樣、其次吉治公御禮被仰上候。右之通於御黑書院御禮初而被仰上候に付、御勤之儀御問合之上御下り、直に御用番安藤對馬守殿等御老中方御勤、若御年寄中ゟ者御使者被遣之候。右等之趣相公樣ゟ、上下御供水越三右衛門を以、先早速被仰上候。或云、相公樣御黑書院に而御禮者、元祿二年八月以來之事に而、言之外御重き事故、吉治公今日より可爲御同然とは不存寄儀に候處、御老中迄今日より若狹守於黑書院禮之儀於御前可被仰渡与思召候得共、是式之儀に候間不被及其儀に候。先立之老中可申述旨等上意有之候由云々。

五月廿一日。金澤に於いて前田綱紀の隱居許可せられたることを披露す。

富田主税氏演

次文によれば金澤參着は二十日なり

本文以下に據れば前田綱紀も亦小松城を菟裘とするの意ありたるなり

〔政隣記〕

十日夜富田主税に、相公様於御前金澤へ之御使被仰渡、年寄中へ之御書箱御渡、御廣蓋を以綿入御羽織一つ・金子二十両拜領被仰付。吉治公より於御居間書院御前、大聖寺へ之御使被仰渡、御廣蓋を以越後縮二端・晒布一疋拜領被被仰付。翌十一日暁發出、同廿一日參着、御意之趣年寄中へ申演、廿二日大聖寺御使相勤。

〔加藩雜記〕

一、廿日富田主税足輕頭未ノ刻金城到着。廿一日主税二の御丸於御小書院御緣頰、御父子様より御意之趣申演。畢而於矢天井之御間御請也。今般御家督幷小松御隱居之事を演らる。年寄中・御家老中幷長又三郎・村井主膳・前田大炊列座して奉之。伊豫守申て曰、小松御隱居之事奉畏候。若彼地御隱居無之候はゞ、罷越可奉願存念之處、御尤至極に奉存候。小松御城之儀、數年不被加修覆に依て及大破、加様之時節御修覆不被仰付候はゞ、近年之内廢城同事と可罷成所に、別而奉恐悅旨述之。同日未之刻例式出仕之面々可登城旨伊豫守より相觸、各登城、大廣間において豫州覺書を以て演之。

人持頭分之面々へ可申聞趣

今月九日被任前日之御奉書、相公様御名代右衞門督様幷若狹守様御登城被遊候處、御座之間

に被爲召、相公様御隱居御願之通被仰出、御家督若狹守様に被仰付候由御直之上意、且重而御懇之御諚難有被思召候。右之趣何茂召寄可申聞旨、今般御使者富田主税を以從御父子様被仰下候。御書も被成下、段々結構至極之御儀、目出度恐悅之至に候。

右畢而瀧の間に出仕之人々召集め、不相替若狹守様に御奉公可申上旨御意之趣、伊豫守演之。于時不破覺丞足輕頭、御用人、御奉公之儀は御同事に奉存といへ共、私儀若年より綱紀公に被召出、御馴染之事、御隱居と申候へば、乍恐御殘多奉存旨申落涙す。其外御馴染之者共同事に及落涙と云々。此日兩御門石川河北幷三の御丸・橋爪、晝之當番人頭より申來布上下を着す。此日富田主税、右御披露畢而爲御使大正持に赴く。

一、於加陽今廿二日より廿五日・廿六日三日之内、諸頭に組之面々幷支配之人々相招、昨日之覺書を以今般之御吉事演らる。尤立歸、何茂奉恐悅之嘉儀を演らる。津田修理今廿二日江戸に赴く。此儀當十四日父玄蕃に被仰渡、卽刻家來庄太夫爲飛脚七日振來發足、來る廿八日可被參着之旨に付急速也。相公様御意之趣、於江戸玄蕃御前に被爲召、其方家柄之儀、被任御吉例、御禮御登城幷御入國之砌御供可仕儀候得共、病氣に罷在候得者其節之事難計、御心懸りに被思召候。依之修理に御供可被仰付候間、早速呼寄可申旨依命急に發足と也。

〔温故集錄〕

護國公年譜に、享保八年五月九日御願之通御隱居被遊、六月十五日林大學頭殿、十六日六郷主馬殿へ被遣候御書之上書に、小松宰相と被遊被遣候由と見え、享保十二年に撰びたる咄随筆に、於江戶綱紀公小松御隱居、被爲任肥前守、小松宰相樣と申奉る、御歲八十一歲と載せたり。

五月廿四日。領內の町人及び百姓に藩侯代替の事を告ぐ。

〔加藩雜記〕

一、廿四日前田修理小松御城中爲見分彼地に赴く。是は小松御城代故なり。今日より廿五日・廿六日三日之內、御領國中町人百姓に、今般之御吉事を其所々奉行より相觸候。依之御城下在々所々町方簾をおろし遊び、夜中にはをどりを催す。侍町へ迄町人集り躍る事夥し。依之爲締、町奉行より足輕少々指出し、輕く群集を拂候由。

五月廿八日。諸奉行及び家中一同に領內の治安を維持すべきを告ぐ。

〔加藩雜記〕

一、廿五日本多周防守朝發足今枝民部晝發足江戶に赴く。廿六日橫山監物朝發足奧村內記晝發足江戶に赴く。廿七日・廿八日與力中支配方に召寄、右之御吉事を演る。奧村伊豫守御城下幷遠所之諸奉行一人宛越後屋敷に被招之衆、公事場奉行津田帶刀・御算用場奉行橫山兵庫・町奉行金森內匠・今石動鶴川安左衛門・御持方村田縫殿右衛門・盜賊方粟田源太兵衛・當所郡奉行山崎久兵

衞・能州郡奉行澤田十郎兵衞・新川郡奉行齋藤市丞・高岡町奉行今村喜太夫等也。綱紀公御意之趣、吉治公に急度御奉公申上、役儀等猶更嚴重に可相勤候。則御意之趣申渡、覺書を以演述。

今般若狹守樣御家督之御事に付而、彌以御家中幷御領國在々迄御靜謐候樣に、萬端御仕置可入念之旨、年寄中に被仰出候。然所に今年は、所々御城下大火之儀有之候間、其心得候而、若放火之惡徒於有之は、嚴重に詮議可仕旨、此度御書之內に被仰下候間、放火人等之儀彌無油斷致吟味、町中足輕等繁く爲相廻、其外在々之者共油斷不仕樣に、急度可被申附候。

此日御家中に伊豫守より觸之趣。

今度若狹守樣御家督之御事に候間、彌御家中幷御領分在々迄も、御靜謐候樣に相心得可申候。今年は所々御城下大火之沙汰有之候間其心得、若放火之惡徒於有之は、嚴重に僉議可仕旨、此度被仰出候間、放火人等之儀彌無油斷致吟味、町中は足輕等繁く爲相廻、其外在々之者共も油斷不仕樣に急度可申渡旨、御郡方幷所々町奉行・盜賊改奉行等にも此度申渡候。且又御持方足輕も、春中之通相廻り候樣に申渡候條、彌御家中之人々も、萬端御靜謐之樣に相心得、人々火之元念を入、放火人・盜賊等之族嚴重に吟味可仕候。於然者侍町番人等も、春中之通相心得屋敷廻り、家來等も相廻、隨分油斷無之樣に可相心得候。惡事之仕

當十一日は六月

形不見屆候而は、少々疑敷樣子之者に而も、何角事六ヶ敷存じ、人により見通候儀有之樣子に相聞え候。ヶ樣之所忽に候而は、自惡徒繁多之基に罷成候條、疑敷族は召捕可及斷候。右之趣組・支配・家來末々迄、急度相心得候樣可被申聞候。組等之內裁許有之人々は、夫々申渡候樣に可被申付候。同役中にも可有傳達候事。右之趣可被得其意候、以上。

卯五月廿八日　奥村伊豫守

六月十一日。藩侯代替に付禁裏・仙洞に派すべき使者を命ず。

〔政隣記〕

一、御隱居・御家督に付、禁裏・仙洞ゟ之御使者、當十一日於金澤西尾隼人ゟ被仰付由申來。

但七月廿五日出足上京。

六月十一日。本多周防守名を安房守に復す。

〔護國公年譜〕

一、六月十一日本多周防守政質、代々安房守と申候得共、先年松平安房守（通温　尾張家）被成御座候故、周防守に罷成候。今般安房守殿御卒去に付、此度安房守御改被成度旨、御用番水野和泉守殿迄、當八日被仰達候處、一昨九日御勝手次第之旨御指圖に而、今日安房守に相改。

周防守諸大夫に被仰付候砌、暫安房守と申候處、其頃尾州樣御舍兄に安房守殿と申有之。

松姫は前田吉徳夫人

松姫君樣實御兄依之憚思召、此段其頭御老中江御達、周防・石見之內に被成度由之處、周防に被成可然由。安房守に而も不苦處、御丁寧之儀と御挨拶有之由。此等之趣も申達、代々安房守と申儀も相達候由。

六月十五日。前田綱紀は肥前守、吉德は加賀守と改む。

〔政隣記〕

六月十五日御兩殿御名御改被成度旨御願紙面、今朝六鄕主馬殿を以御用番江御達置之處、next頭御用之儀候間御家來一人被指出候樣、御用番より被仰越、聞番澤田源太夫參出之處、今朝御願之通御改名之儀、御勝手次第之段被仰渡候に付、今日より相公樣者肥前守樣、若狹守樣者加賀守樣与御改被遊候事。

附、今日林大學頭殿。十六日六鄕主馬殿江被遣候御直御上書に、小松宰相と被遊被遣之候事。

六月十六日。幕府今枝民部の乘輿を出願したるを許す。

〔政隣記〕

六月十六日

一、今枝民部乘用之儀に付、御老中方より、御身上によ り候而乘用御免之數極居申候。御家

に者數多く御座候間、御願候ても相叶申間敷候條、只今迄乘用御免人之內御指除、其代寺御願有之候者相叶申由御指圖に付、兼而乘用御免之御願相濟候前田近江守病氣に付差除、代民部御願之由に而御免有之。

六月廿八日。改宗及び寺替に關する規定を令す。

改宗幷寺替之儀に付、正德元年各ゟ、本多故安房守・前田近江守・前田美作守相達候紙面之內。

［上田舊記］

一、妻子之儀父・夫同宗同寺之筈に候處、或受法を申立、又は祈禱に事寄、他宗に仕候儀無之筈に候。若無據子細有之候者、旦方者頭々ゟ相斷候樣申渡候。寺方は寺社奉行迄相斷、可爲指圖次第事。如斯に候。女子致婚儀候而者、夫同宗同寺に被成候儀者勿論之儀に候。然共婚儀以後も、親之家之宗旨之儘に而可罷在子細有之、夫任其意候者之儀、頭等ゟ申斷、旦那寺ゟも相違、勝手次第に可仕事に候。既に婚儀以後夫同寺に罷成候而も、以後に至り親又はしうとめ等之宗旨に改申度由緒有之、斷之上者承屆申儀に候得者、婚儀以前之宗旨の儘に而可罷在子細、夫納得之上は是又可爲其儀に候。故無之、受法又は祈禱に事寄改宗仕候儀有之体に付、左樣之儀者不仕候樣との儀に候。然處致婚儀候而者、兎角夫之宗旨に改不申候而者不辨儀之樣に心得違も有之樣子に付、重而如斯に候。此段寺庵方承知有之樣に可被申聞候、以上。

一、改宗幷寺替之儀に付、正德元年大老中より寺社奉行且亦各にも申談、其外御家中にも一統申渡候書立之內、女子致婚儀、可爲同宗同寺儀者勿論に候得共、由緖相立申候者、他宗に而罷在候儀も相障り申間敷儀に候處、是非夫同宗同寺に改不申候而者不叶儀之樣に、心得違候寺庵方も有之躰に付、其段別紙之通此度右奉行に申聞候。依之各にも寫相達候條、可被得其意候。尤御家中之面々にも致承知候樣可申渡候、以上。

卯六月廿八日

奥村伊豫守

在江戶　本多安房守

別紙之通此度寺社奉行・宗門奉行へ申聞候。依之寫指越之候條、可被得其意候。組等之內裁許有之人々は、夫々申談候樣可被申渡候。且亦同役中にも可有傳達候事。

六月廿八日。前田吉德登營して家督相續を謝す。

〔德川實紀〕

六月廿八日、月次の拜賀例の如し。松平加賀守吉德襲封を謝して、銀百枚・縮緬二十卷・綿五十把・靑江直次の刀・馬二疋をたてまつる。其父肥前守綱紀は、紗綾三卷・銀三十枚を献じて致仕を謝す。

〔政隣記〕

六月廿八日、御隠居・御家督之御禮今日可被仰上旨、昨日御老中方御連名之御奉書到來、御別紙を以御家來七人可被召連旨申來に付、六半時過御登城、御家督御禮於御黒書院被仰上、御懇之上意、御手自御熨斗鮑御頂戴。相公樣御隠居之御禮御所勞に付、御名代前田伊豆守殿を以被仰上。但此度者右衞門督樣御名代者重過候間、輕き御方可宜旨依御用番御指圖也。御家老五人、於御大廣間御目見一人宛被仰付、安房守御禮所は三尺計高に而有之候由也。最初者七人之筈に候處、津田玄蕃・中川式部當病に付不罷出、依之拜謁無之。陪臣之獻物者納り不申旨に而、獻上物相返、五人之獻物御納戸に納り候由也。但獻上物共菊池甚十郎持參之、御獻上物等左之通。

作り御太刀一腰　御刀青江直次代金廿枚。御目貫幷小柄、葵之御紋金、赤銅色繪、後藤悅乘作、御鍔切羽鵐目金、御鐺緣赤銅、御柄白鮫、御柄糸茶、御下緒紫、御鞘黒塗。

銀　百　枚

縮　緬　廿　卷

綿　五　十　把

御　馬　二　疋　越中篠鵠毛三才一寸。越中下立栗毛三才四寸五步。御鞦麻取染、面掛紫麻、轡十文字、手助紅、御馬衣紺にいれき嶋、片色結上共。口取繩紫練緣。鼻革小道具共。洗轡索手繩共。

右御馬具二疋共同事。

右御馬若年寄松原能登守殿に牽罷越、夫より諏訪部文右衛門殿役屋敷に而渡之。指添人割場奉行原田三郎左衛門・御馬役絹川源右衛門・馬醫星野九右衛門等、此外略之。聞番者湯原甚右衛門指添罷越。

右從吉治公御献上、御奏者内藤丹波守殿。御刀出る時黒田豐前守殿

作り御太刀一腰・紗綾五卷・銀三十枚

右從綱紀公御獻上、御奏者内藤丹波守殿。

ちりめん五卷・御太刀銀馬代　本多安房守

さあや五卷・御太刀銀馬代　横山監物

同斷　奥村内記

さあや三卷・御太刀銀馬代　今枝民部

同斷　成瀬内藏助

同斷　津田玄蕃

同斷　但當病不罷出に付前記之通不納相返る　中川式部

一、御進物左之通。

御太刀金馬代・縮紗十卷・干鯛一箱・昆布一箱・御樽代五百疋・御目錄二通

御老中

水野和泉守殿

安藤對馬守殿

松原左近將監殿

戸田山城守殿

同斷。但昆布無之。縮紗代紗綾十卷

若御年寄

大久保佐渡守殿

石川近江守殿

松原能登守殿

水野壹岐守殿

御太刀金馬代・縮紗五卷・干鯛一箱宛

御側衆

有馬兵庫頭殿

戸田肥前守殿
加納遠江守殿

從相公樣御老中ゟ御太刀金馬代・晒布十疋・干鯛一箱宛。

若御年寄中ゟ御太刀金馬代・晒布五疋・干鯛一箱宛。

御側衆ゟ同斷、但干鯛無之、包のし。

今廿八日御城御首尾書之寫左之通。

御黑書院ゟ出御、御上段御着座、紀伊殿・水戸殿幷溜詰月次御禮相濟。

松平加賀守

右献上物、出御、太刀目錄御奏者持出、加賀守出座、御奏者番披露、御馬二疋与言上、加賀守退出、進物引之。重而献上之御刀、奏者番持出、御刀目錄披露之席に指置、老中罷在候方ゟ退く。加賀守出座、御刀指上候旨和泉守言上。加賀守御敷居之内ゟ入候時、御奏者加賀守後を通、御刀溜之間之方ゟ引之。加賀守着座之節、家督之御禮申上候段和泉守言上之。御熨斗鮑兩番頭之内持出、御手自被下之、復座、老中御取合申上、退座。

松平肥前守

名代前田伊豆守

右献上物、出御、太刀目録御奏者番披露之、隱居之御禮申上候段和泉守言上之、退座。右之通に而四時過御城相濟、御退出。御裝束御長袴之儘、直に御老中方幷若御年寄中御廻勤。四半時過御歸館之上、晝過相公樣ゟ於御居間御家督御禮被仰上、尤御長袴也。御太刀披露、成瀨内匠相勤之。御家老中被相勤筈に候得共、御老中方ゟ廻勤に而在合無之に付、内匠勤之。御馬代者御表小將中村新藏持出之。右之外に鶴一箱・干鯛一箱・縐紗十卷・御樽代千疋被上之。御袋樣ゟ者二種千疋・白銀十枚・綿二十把、寵姫樣ゟ二種千疋・紅白紗綾五卷被進之。

一、今日御禮御首尾能被爲濟候御儀、從御城御先手吉野善八郎を以、相公樣ゟ御案内被仰上。

一、今日夕方於御居間書院、今朝御城ゟ被召連候御家老五人、吉治公御前ゟ被召出、御意有之。

一、今明日一統布上下着用之。晦日者常服也。

七月七日。前田吉德登營し白書院に於いて德川吉宗に謁す。

〔政隣記〕

七月七日御登城之處、初而御白書院に而御禮被仰上候。相公樣に者跡々朔望に者於御黑書院御禮被仰上候得共、佳節に者御大廣間に而御禮被仰上、元祿二年より格別御懇之上意を以、五節句御白書院に而御禮被仰上候事に相成候。然者今日之御首尾は相公樣より者御超こ申物

に候間、御老中方ゟ御禮之御使者可被遣旨、段々從相公樣被仰出有之、御老中方若年寄衆ゟ御使者被遣、相公樣よりは御老中方迄ゟ御使者被遣之。

七月十八日。金澤の諸士に幕府に於ける藩侯代替の禮を終れることを告ぐ。

〔政隣記〕

七月十八日於金澤、前月廿八日御隱居御家督之御禮被爲濟候趣、人持・頭分ゟ二之御丸に而御普爲聽、御月番奥村伊豫守殿被演述。

七月十九日。前田綱紀使を日光に遣して物を東照宮に獻ず。

〔護國公年譜〕

一、七月十三日、御家督に付、津田刑部修敬日光ゟ御名代被仰渡、同日聞番佐久間甚八郎盛興茂可被指添旨被仰出候。同十九日發足、二十二日日光相勤、同二十五日江戶歸着。御城使御步坂井傳太夫、聞番より伺召連。

御前より御羽織一・越後縮三反、相公樣より綿入羽織一。

甚八郎ゟ御前より白銀五枚。

兩御前は吉徳の姉安藝侯夫人及び因幡侯夫人

御宮に御太刀・馬代金一枚。御靈屋に白銀三枚。

七月廿一日。前田綱紀、吉徳の招待せんとするを辭す。

〔政隣記〕

七月廿一日大野木舍人を被爲召、當廿六日御老中御招請相濟候者、御一門様方可被仰請候。夫前相公様に御膳被上度旨御意に付、其段相公様に申上候處、御膳被上候事に候へ者、御相客も可被仰遣候。只今之御様子にては、御手之御痛爾々不被遊、御指も御痛、御盃事抔難被思召候條、御延引可被成候。其共御心掛りに被思召儀も候者、御一門様方被仰請候節、御菓子・御肴にても可被指出候。御一門様方相濟候者、兩御前様をも被仰請にて可有御座旨被仰出、其段岡田伊右衛門を以奉達御聽候。

七月廿六日。前田吉徳家督相續披露の爲幕府の老中を招待す。

〔護國公年譜〕

一、七月十一日御老中御招請御日限、當二十一日より二十七日迄之内御出被下候様、六郷主馬殿公儀御先手を以被仰込候故、今日御用番松平左近將監殿より聞番被召呼、左之御書付御渡。

松平加賀守

家督祝儀爲振舞、來る二十六日晩何茂可相越候。

右爲御禮、御老中方へ御使者今枝民部御家老被遣候。若年寄中に者溝口七太夫御小將頭被遣候。

〔政隣記〕

七月廿六日御家督爲御祝儀、御老中御招請、水野和泉守殿・安藤對馬守殿、若御年寄石川近江守殿幷御奏者御留守居御大目付等御相伴十一人、九半時過御出。御能三番、御料理三汁十菜。從相公樣成瀨內匠を以、御槍重一組御老中方に被進、御口上有之。御取持六鄕主馬殿等御挨拶有之。相公樣に者御出不被遊候。御規式跡々御老中方御招請之通。組頭以上十二人に御老中御盃被下に付長袴、御給仕役御小將も長袴、物頭以下半袴着用。但御取持御先手衆者、六鄕主馬殿・蔭山數馬殿・細井佐次右衞門殿也。

七月廿九日。前田吉德家督相續披露の爲一門を招待す。

〔政隣記〕

七月廿九日、今日今般爲御祝儀御一門樣御招請、御能五番、御作法跡々之通。

八月四日。是日以後能を催し出入衆を招待す。

〔政隣記〕

八月四日・七日御出入衆御招請。御能兩日共於白洲、町人五百十一人見物被仰付。同十六日者安藝・因幡兩御前樣、三田御新造樣大膳大夫樣御室也・誠姬樣・岩松樣安藝守樣御子樣方也御招請、御能有之。

八月十八日。前田吉德左近衞權中將に陞任す。

〔政隣記〕

八月十八日御用御座候間御登城被成候樣、昨日御老中方依御奉書、今日五時過少將吉治公御登城之處、於御白書院御老中御列座中將御轉任、御位階正四位下如元之旨、御用番安藤對馬守殿御渡。御下、御老中方・若御年寄御勤御歸館、相公樣ゟ御禮被仰上、御家老中御居間書院ゟ被爲召、御轉任之儀被仰聞、頭共ゟも申聞候樣御意之旨被申渡。於金澤者、廿五日頭以上御弘有之、如跡々。

一、今日より廿日迄表向一統布上下着用。

一、今日之御祝儀物、且御平生共、是以後御一門樣初、御斷可被成旨被仰出。

一、今日之御禮、從相公樣御老中等ゟ、御名代前田伊豆守殿御勤。

〔富永數馬之覺書〕

松平加賀守事爲正四位下少將之處、今度中將位階如元被仰付候。口宣等之儀相調候樣、傳奏衆迄可被申入候、恐々謹言。

享保八卯八月十八日　　松平左近將監乘邑

安藤對馬守重行

水野和泉守忠之
戸田山城守忠眞
松平加賀守殿

八月廿二日。前田綱紀致仕を謝して徳川吉宗に刀を献る。

〔徳川實紀〕

八月廿二日致仕松平肥前守綱紀使して島津正宗の刀を奉り、長福君に正宗の刀、小次郎君に來國光のさしぞへ、小五郎君に當麻のさしぞへを奉る。

八月廿八日。前田吉德柳營に上りて陞任を謝す。

〔政隣記〕

八月廿八日今般中將御轉任御禮被仰上度旨、當廿二日御用番ゟ被爲入御願被仰込置候處、昨日依御奉書今日御登城之處、月次御禮惣樣相濟、於御白書院御任官御禮被仰上。御奏者牧野因幡守殿、御取合御老中安藤對馬守殿、御裝束御長袴。御献上御太刀馬代金一枚・縐紗十卷・御目錄、御馬一疋裸、御目錄。若御年寄石川近江守殿ゟ、聞番佐久間甚八郎・割場奉行・御馬役指添爲牽罷越等如前々。

一、右に付御老中方ゟ御太刀馬代金一枚・綿三十把・干鯛一箱宛、若御年寄中ゟ御太刀馬代金一枚・綿二十把宛・包のし、御側衆且林大内記殿ゟ御太刀等同斷・綿十把・包のし、御奏者衆幷

林大學守殿林百助殿に御太刀馬代金一枚宛被遣之。

九月朔日。前田吉德陞任を父綱紀に謝す。

〔政隣記〕

九月朔日御登城御下後、御長袴被爲召、相公樣に御轉任之御禮被仰上。急度御禮被仰上儀に候得者、於御表年寄中披露之筈に候得共、御所勞中に付、於御居間被爲受、御太刀披露御近習御先手物頭伊藤平太夫、御肴箱・御馬代金御表小將持出。三人共半袴着用勤之。

九月十一日。前田吉德使を日光に遣して物を東照宮に献ず。

〔御年表〕

九月十一日今般御轉任に付、日光へ御名代ゝ御使者御大小將頭溝口七太夫貞勝を遣され、御宮へ御太刀・馬代黃金一枚・御靈屋へ白銀三枚御献納。

九月十二日。前田吉德就封の暇を受く。

前田吉德は就封の暇を得しも享保九年七月まで歸國せず

〔政隣記〕

九月十二日中將樣初而御國許に之御暇上使、御老中松平左近將監殿御出、紗綾三十卷・白銀百枚御拜領、御料理出、御盃之節中島來御刀代金十三枚御取持六鄉主馬殿御持出被進之。頭分並御

給事役熨斗目着、其外御作法如前例。

九月十三日。前田吉德登營して就封の辭見す。

〔德川實紀〕

九月十三日臨時の朝會あり。松平加賀守吉德はじめて就封のいとまたまはり、備前の國近包の御刀・鷹・馬をたまふ。

〔政隣記〕

十三日御登城、御暇之御禮於御黑書院被仰上。御懇之上意、御手自御熨斗鮑御頂戴。御腰物備前近包代金廿枚・御馬二疋・御鷹二据被進之。被召連候御家老今枝民部・成瀨內藏助御目見被仰付、紗綾五卷宛拜領。右に付御下り、御老中方・若年寄中御勤。同夜右之趣諸頭ゟ御弘。於金澤も廿一日諸頭以上ゟ御弘有之儀如御例。

九月十三日。前田綱紀の養女峯姬、鶴岡侯の嫡子酒井忠寄に嫁す。

〔政隣記〕

九月十三日夜前迄雨天之處、今朝より晴天。今日峯姬樣酒井左衞門尉忠眞君御嫡攝津守忠寄君ゟ御嫁娶。申三歩出輿、御迎植村土佐守殿・松平備中守殿、御送稻葉丹後守殿・松平兵部少輔殿・安藝守樣御弟、御供御家老今枝民部・成瀨內藏助。御輿渡民部、請取松平內膳。御貝桶渡內藏助、

今枝民部直方
成瀨內藏助當隆

受取加藤大貳。民部・內藏助は子持筋、御供之頭分・平士かちんのしめ上下、御歩は花色服紗小袖・同上下、御館詰人頭以上かちんのしめ・上下、表向平士は無地のしめ・上下、御勝手向常之のしめ、上下淺黄返小紋之外勝手次第。御道筋御廣式御門之外に而門火燒、與力日置武右衞門勤之。兩御近習頭者中之口御門之外に罷出。御持弓頭戸田靱負爲警固與力同心召連罷出。御臺所御門前に御臺所奉行青木新八郎幷與力等罷出、中御門に被爲入、裏御式臺に御出入御目見以上之町人共、幷當番之御歩小頭・御歩中罷出、裏御式臺鏡板に狩野家・本阿彌家・後藤家御出入之町醫師等罷出。喰違より大御門に御出、表御式臺前頭分以上罷出。御出入衆は鏡板、御客衆者階上拭板に御出、御前にも同所に御出。大御門に御家老幷聞番罷出。御白洲に御附使者罷出。本鄉湯島邊に兩御隣より之警固。金助町に前田帶刀殿より之警固。大和郡山之主本多喜十郎殿より屋敷三方に侍警固。尤足輕水桶等出。夫より佐久間町・久右衞門町より、攝津守樣柳原御屋敷に被爲入、表御門より御入、尤阿方御門前等夫々警固出。惣而御道筋公儀御徒目付以下町人に至迄も水桶等出之。御通之內往來を留御馳走仕。あなた表御式臺に御一門方御出。御輿者御式臺御玄關より被爲入、御行列一町計先に、御大小將横目高畠善太夫・聞番澤田源太夫馬爲牽歩にて、御途中御馳走帳に爲記之。御乘替御輿御大小將三輪藤兵衞、御貝桶御大小將淺加作左衞門、御刀同岡島兵右衞門、御脇指同佐々木伊織、御時宜役同石野知

太夫・横田傳太夫。御途中騎馬、御貝桶之次、成瀨内藏助・今枝民部。御跡騎馬聞番頭成瀨内匠・御小將頭堀平馬。步御供之頭は御先手頭水越三右衞門・御大小將番頭玉井藤左衞門・御使番北川久兵衞、御大小將横目馬場三左衞門・御附物頭並笠間新左衞門、御附御用人小川忠四郎・同並堀作兵衞・高柳五郎左衞門、御大小將菅野甚五郎・江守角右衞門・古屋伊織、御馬廻山崎彥右衞門・佐久間吉右衞門・中川字左衞門・濱名五兵衞、組外鶴見三丞・井上宅右衞門・笹島市太夫・大橋彌藤次・永原小仲太。

御附御用人本保七左衞門は御先に罷越步、割場奉行御大小將組御供之侍中乘馬、御行列之内に爲牽之、馬不持分は皆々御貸馬爲牽候。日駄覆一統無用に被仰渡。從者數は、組頭若黨四人・仲間二人、鑓持・草履取・挾箱持・笠籠持一人宛。其外頭は若黨二人・仲間二人・鑓持・草履取一人宛。平士者若黨一人・仲間二人・鑓持・草履取一人宛。雨降候得者、人々合羽・手傘、家來合羽・笠も割場より出候等。右之雨具は、當御門より爲持遣、侍中もわらんじ懸仕儀一統不相成候。御供之人々其外前々之御格同斷に付留略。

一、御出輿後御料理出、御酒之内御囃子三番有之。

〔政隣記〕

九月十五日。酒井忠寄聟入の儀を行ふ。

日駄覆本のまゝ

九月十五日攝津守様江、五百八十之餅、御使御小將頭岡田伊右衛門を以被進、手持筋いしは・上下着、今朝六時過相勤、同刻何方よりも御使上田幸右衛門を以被進候。此餅十九日に何茂江被下之。

同日御聟入に付、御新造様も被爲入。左衛門尉様は御公用御隙入有之、七半時前攝津守様御同道に而御出。御居間江御新造様・安藝御前様・左衛門様・攝津守様御通、御一所に御祝相濟。相公様御所勞に付、御新造様迄江御對面也。左衛門尉様・攝津守様御大書院江御出、御料理御盃事有之。御拍子有之筈に候得共、左衛門尉様明日重き御日柄に付、早く相濟候様被成度旨に付、役者中罷出居候得共御拍子無之。攝津守様江御盃之節、御刀備前助包（代金十七枚五両）、御脇指來國安（代金十五枚）、御馬鹿毛仙臺春日野被進之。（御披後聞番御馬役等差添被遣、）從相公様二字國俊御刀（代金七十五枚）被進之。御家老兩人江御盃被下、松平內膳江御刀（代金五枚）、加藤大貳江同斷備前盛平被下之。

一、今日御持參之品、攝津守様より御兩殿様江御太刀馬代・卷物五、二種一荷宛、左衛門尉様より御兩殿様江御太刀馬代・二種一荷宛、御新造様より御兩殿様江卷物十・行器一荷・二種一荷宛被進之。松平內膳・加藤大貳より相公様江鰯一箱宛、中將様江御太刀馬代銀宛献上之。右之外あなた御一門より、御太刀馬代等御兩殿様江御進送有之。

九月廿一日。前田綱紀男人を辭し、祝儀の爲物を酒井忠寄等に贈る。

〔政隣記〕
九月廿一日攝津守樣ゟ御舅入相公樣者御斷、今朝御小將頭溝口七太夫を以左之通被進之。但あなたより今日不被爲入に付、御肴被進、御吸物に被仰付、在合候頭以上ゟ被下之。
御太刀金馬代・紗綾五卷・二種一荷　攝津守樣ゟ
同　斷　同　斷　左衞門尉樣ゟ
ちりめん十卷・白銀二十枚・同　斷　御新造樣ゟ
中將樣九時過御出、七時過御歸館。爲御禮攝津守樣同日御出也。且被進物左之通。
相公樣御同事前記之通り。
右之外に御刀信國代金十五枚、御脇指延壽國泰代金十三枚、中將樣御持參、攝津守樣ゟ被進之。

九月廿九日。前田吉德來春まで在府せんとの請を許さる。

〔政隣記〕
九月廿九日御用番水野和泉守殿御宅ゟ、聞番御招に付、澤田源太夫參出之處、今朝御願之趣被達上聞、御願通被仰出旨、左之通御覺書御渡。
同氏肥前守氣色不相勝候に付、爲看病來春迄滯府被在之度由、可爲勝手次第候。
右に付翌晦日晝過御老中方御勤、若年寄中ゟ者聞番、御側衆・大目付衆ゟ者御大小將御使被

遣。從相公樣爲御禮、御老中方に御家老成瀨内藏助御使に被遣候。

〔御年表〕

是月綱紀公御眼病御療治、松平讃岐守殿醫師渡部立賢に仰付らる。且御所勞に依て、通玄院瀧江松軒御藥を上らる。依之公御滯府の儀御願の處、廿九日御願の通仰出さる。

是月は九月

十月十一日。前田吉德陞位の口宣を受領す。

〔御年表〕

是月廿七日、御位記口宣受取御使者品川主殿京都に赴き、十月十一日、傳奏の宅に於て口宣等受取、御大小將荒木津太夫へ相渡、金澤へ歸る。廿二日津太夫江戶へ持參す。

是月は九月

十二月六日。德川吉宗、前田吉德に放鷹によりて獲たる鶴を贈る。

〔護國公年譜〕

一、十二月六日中將樣に、上使御使番川勝能登守殿を以、御鷹の鶴被進之。御家督後初て御拜領。爲御禮御老中方御勤。御用番水野和泉守殿には御立歸、御家來諸大夫御願書付御持參。

十二月十八日。幕府前田吉德の家臣二人をして敍爵せしむ。

〔政隣記〕

十二月十八日、昨十七日御老中方御連名之御奉書を以、今日可有御登城旨申來。然處御暇後

御登城之先例無之儀に付、若御調達にも候哉与、水野和泉守殿迄聞番伺に罷越候處、御用有之候條彌御登城候樣に御申渡。依之今朝五時過御登城之處、御白書院於御緣頰御老中御列座、御家來兩人御願之通諸太夫被仰付候旨、和泉守殿被仰述。御下り御老中方・若御年寄中御勤、從御城相公樣に右御案內之御使、上下御供之內物頭青木新兵衞被仰渡。九半時過御歸館、御家老中被爲召、御家督御間も無之處、別而忝被思召候、此旨頭共にも可申聞旨被仰渡。則今枝民部被致述之。

十二月廿六日。十村にして處罰中にあるもの、鍬手米及び代官口米の處分法を定む。

〔河合錄〕

十村之內不屆之族有之禁牢仕候者、組下より取立候鍬手米幷代官口米共に取揚、當分支配仕候者に爲請取可申候。禁牢前日迄之分、且又出牢翌日より之分は、如前々爲請取可申事。

一、十村遠慮申付候はゞ、鍬手米者無構爲請取、代官口米者前段之通、割符を以爲請取可申事。

一、十村追込申付、同郡十村等に預置、番人相添候族之者は、禁牢同事可申付候。

右之趣、跡々より不分明に付詮議仕、當年より如此相極候に付、向後此通申渡置候、以上。

癸卯十二月廿六日

別所安兵衞
中村武兵衞
中村四兵衞
山本武左衞門
高畠權太夫
大塚彌五大夫
賀古助進
稻垣傳左衞門
前田逸角

御算用場

右紙面見屆候、向後此趣に可被申付候、以上。

御算用場

癸卯十二月廿六日

改作御奉行中

是歳。金澤城外蓮池邸の庭に松を植う。

〔耳底雜記〕

一、享保八年蓮池御庭に松を植替被仰付候刻、右植替出來之日、三十人頭御次へ罷出、蓮池御庭松植芝伏せ出來仕候段言上候に付、御近習頭罷出、れんち御庭松植替仕、芝伏申段申上候處、れんちとは何れ之事に候哉、御領國には左樣之唱申所無之候。蓮池とは天子より外には成不申儀、蓮池・蓮臺とて不輕儀に候。重而より左樣之處心付、はすいけと唱候樣に被仰出候。

享保九年

正月朔日。前田綱紀所勞を以て年頭の禮を受けず。

〔護國公年譜〕

一、正月朔日相公樣江、中將樣年頭御祝儀御伺之處、御肩之御痛御勝不被遊、御上下等被爲召候得者、御世話に被爲成候間、御使者に而御指上候樣被仰出、御次迄中將樣御出、年頭御祝詞被仰上候旨、成瀨内匠江被仰聞、御口上相濟、御太刀馬代御目錄、御目通に而岡田伊右衞門内匠江相渡、奏請取上之候。

御家中之面々、今年頭御禮之儀、御家老中より相公樣江伺之處、追付御國江被爲入御禮可被仰付間、爰元に而年頭御禮之儀延引候樣被仰出、中將樣江之御禮献上物等茂、右之通に

監物は横山貴林、嘉藤次は本多政昌

而延引。

正月朔日。金澤に於いて諸士に横山監物・本多嘉藤次二人の諸大夫に任ぜられたることを告ぐ。

〔政隣記〕

正月元日

一、今朝於金澤登城之頭以上江、御年寄衆御列座、御月番奥村伊豫守殿左之通演述。依之各爲御祝儀、御年寄衆江相勤。但傳藏昨日到着、今朝登城御意申述。

御使者渡邊傳藏を以被仰下候者、去十七日依御奉書、翌十八日御登城被遊候處、御白書院において御老中方御列座、御願之通御家來兩人諸大夫被仰付候段、水野和泉守殿被仰述候。御任官御間も無之處、別而忝被思召候。此段爲可被仰聞、御使者被指越候。則監物・嘉藤次諸大夫に被仰付、監物先祖之名は當時差合申に付大和守に御改、嘉藤次義者安房守に御改被成候。右之趣可申聞旨、以御書被仰下候。相公樣より御同事に被仰下候由可申聞旨、御意に候事。

但、兩大夫位記口宣等之御使、御大小將津田五左衛門十五日江戸發上京。

〔政隣記〕

二月十八日前記元日に有之通、津田五左衛門今月七日京都發、今日歸府、位記等指上。但前

月廿七日京着御使相勤候處、位記口宣傳奏烏丸殿五左衞門に直々御渡也。是御旗本之格与云々。前例者京都詰人に御渡之由也。

二月七日。幕府加賀藩に委託せる領邑の租額增加を賞す。

〔金澤古文書〕

享保九甲辰年二月十九日公方樣より御時服頂戴之留

疊候上松平加賀守家來に与御座候。

松平加賀守

御預ヶ所御取箇之儀、段々相增候旨相達候。常々念を入、被申付茂宜故与相聞に一段儀候。御預所御用相勤候役人頭取候者支名役柄等書付可指出旨、當月四日水野和泉守役人より湯原甚右衞門に相達、横山兵庫假名等書付指出候處、同七日御城に御家來一人可被指出旨、和泉守殿より前日依御奉書、甚右衞門被指出候所、和泉守殿御出、脇々御預所有之御家來一統被召出、御預地御取箇段々相增候旨相達候、常々被入御念、被仰付茂宜敷候故与相聞、一段之儀に候由被仰演、其趣御書付御渡。其以後重而一統被召出、御預所御用相勤候者、常々情に入候故、御取箇段々相增一段之儀に候。依之拜領物被仰付由、和泉守殿被仰聞、退候上一人充被召出、於御同席御奏者番岡部内膳正殿御時服三御渡、甚右衞門致頂戴候。先以此方御預

取箇は田租收入

所に仰付宜敷段、公儀表之御沙汰別而御大慶被遊候。兵庫儀も結構成被仰聞に而、拝領物被仰付之段重疊之仕合、一段之儀被思召候。右之趣申聞拝領爲致、頂戴可申旨中將樣御意に候。右爲御禮月番に、同八日中將樣御勤被遊候。且又兵庫御禮之儀は、甚右衞門爲名代、御老中方・若年寄衆に致參上候付、重而御禮等に及不申候。

二月十日。幕府前田綱紀の献じたる清獬眼抄を文庫に納む。

〔續漸得雜記〕

同九年二月十日、是より前加賀中將獻ずる處の金澤文庫本の新寫清獬眼抄を御文庫に納らる。

二月廿六日。横山大和守・本多安房守江戸に着し、諸大夫に任ぜられたることを謝す。

〔政隣記〕

二月廿六日横山大和守貴林・本多安房守政昌諸大夫就被仰付今日參着、從御兩殿樣御近習頭一人宛爲御使御貸屋に被下、兩人共御目見御懇之御意、口宣等も頂戴被仰付。但御居間書院御目見、相公樣於御居間御目見。

同日本多安房守乘物御免之儀、御書付を以安藤對馬守殿迄御願之處、今日開番被召呼、御付

札を以、乘物御免之儀御願之通被仰渡候。此度乘用數過し候へども、故安房守より乘用御免之儀候故、此度御免に候、重而差別可有之旨被仰聞候旨也。右御免爲御禮、對馬守殿ゟ今晩聞番罷越候。

萬石以上五十歲以上は御禮御使迄に而相濟。中川式部等痛抔に而御免之砌は、御目附衆迄御禮に、御免之人々罷越候。但萬石以下五十歲以下之者は、痛有之趣三ヶ月に一度宛御目付衆ゟ越、誓詞相調候御格也。

二月廿七日大和守・安房守、今朝御太刀馬代・綿卅把御老中方ゟ、御太刀馬代・綿廿把若年寄衆ゟ、御太刀馬代・綿十把持參御側衆ゟ、爲御禮相勤。右相濟、中將樣於御小書院叙爵之御禮被爲請、御太刀馬代・縐紗二卷宛献上、披露組頭長袴に而相勤。安房守よりは、組御預加判被仰付候に付而之献上、御太刀馬代・綿十把御目錄に而指上、譯而御禮は不被仰付。出府に付献上、大和守者干鱈一箱、安房守は寒鹽雁二。相公樣ゟ御太刀銀馬代・紗綾二卷宛献上。安房守儀組御預等之爲御禮、御太刀馬代・干鯛一箱献上。出府に付献上、大和守は串海鼠一箱、安房守は寒鹽鴨、御禮者不被爲請、御目錄を以上之。

一、重而右兩人被爲召、御手自御熨斗鮑被下之。其後御居間書院於二之間御料理被下、御吸物之上、上之間ゟ中將樣御出、御盃被下。御刀大和守ゟ大和國尻掛代金七枚五兩、安房守ゟ濃州爲繼

作代金、十枚　民部内藏助持出被下之。御料理之内、爲御挨拶老中每度罷出。從相公樣、右御料理之內に御菓子塗御重一組、御近習頭伊藤平太夫御使に而、御意之趣有之被下之。

但、安房守ゟ者高代之御刀被下候儀、家柄故右之儀也。

三月朔日。前田吉德去冬幕府より賜ふ所の鶴を披露す。

〔政隣記〕

三月朔日、去冬御拜領之鶴御披。御一門樣初八十人餘御客有之、御囃子被仰付。相公樣ゟ者右鶴御取分、小御捲指渡三寸計之杉木臺居、富永數馬ゟ御手自御渡、被上之。

三月朔日。前田綱紀その持鑓を吉德に讓與す。

〔富永數馬覺書〕

一、享保九年正月十日中將樣岡田伊右衞門を以御伺被遊候は、唯今迄中將樣御持被遊候御素鑓いさや、少若輩に御座候間、不苦事に御座候者、相公樣爲御持被遊候御粒子の御さやに被遊度被思召候。幸御修覆仰付候に付御伺之旨、松尾縫殿承之、則申上候處に、其通候に可被遊候。餘方にも御父子おなじさやなるも有之候故、內々は御氣にさへ入候者、相公樣より被仰入候而御改候樣に思召候得共、相公樣御鑓も微妙院樣御鞘御同事と申にも無之、御物數寄

も替り、二・三度も御改に付不被仰進候。御氣にさへ入候者、御勝手次第被遊候樣にと思召候段申上候樣に御意に付、其段縫殿、伊右衛門迄申述候。

一、同年三月朔日相公樣唯今迄爲御持被遊候御鑓、幷御道中爲御持之丸御鳥毛之御鍵鎗、中將樣へ被進之候。今晝三十人方より取寄御改、岡田伊右衛門ゟ伊藤平太夫相渡候。尤急度被進候に而も無御座候。向後爲御持可被遊候者、則爲御持被遊候樣にとの御事に而、其段縫殿、御使伊右衛門ゟ平太夫を以申述候處に、御鎗被進忝被思召候。明日より爲御持可被遊候。御序に可申上旨伊右衛門を以被仰出。平太夫承り縫殿を以申上候。御十文字明日より爲御持者如何、いまだ相公樣御鎗出來不申旨縫殿申聞候に付、其段茂伊右衛門迄申達候。然處に同日夜に入また縫殿を以被仰出候者、御十文字之御さやは、津田道慶物數寄にて御座候。二筋共明日より爲御持被遊候儀、尤御勝手次第に可被遊候。御粒子は相公樣御物數寄に而御座候。二筋とも久敷爲御持被遊候御さやに御座候。御ゆづり被遊候旨被仰出、縫殿、庄田五左衛門迄被申達候。段々忝被思召候旨、同人を以被仰出候。

晝御機嫌御伺之御序に、先程は御鑓被進忝被思召候。御序に御禮被仰上候由平太夫へ御意に而、其段縫殿を以晝達御聽申候。

三月四日。婚禮及び養子緣組の祝儀を簡略にすべきことを令す。

〔政隣記〕

今月四日頭中僉議之上組・支配に相觸趣左之通。但二月十六日養子緣組等之願被仰出。依之婚禮・養子に遣候節簡略之儀、年寄中列座、御用番奥村内記殿以紙面被申渡。日達之趣も依有之也。

緣組・養子等願之通被仰出候分、今般申渡候。就夫御家中之人々、近年勝手指支及難儀候處、別而去冬より高知之歷々之面々を初、必至与難澁之仕合も有之躰に候。小身之者共者猶以右之通与相聞候。左候得者此度婚禮相整候人々、萬事輕く相心得尤に候。前々より之儀者、華麗無之樣にと一統及示談候得共、何角結構に成來申躰に候。とかく今般之儀者至而輕取計、身上より者各別範相与申程に致支度可然候。大概幷、只今迄之衣服綸紗・紗綾等之類を用來候品者羽二重を限、羽二重を用來候品には絹を用、絹を用來候品には紬・木綿を用候樣に有之可然候。諸道具等之儀も右に准、金具を以錺候乘物を用候者は錺を相省、輕金具範相成乘物を用、長持・挾箱其外之諸道具、蒔繪なども相止、以り迄に而用之、其上猶更以りも輕く致可申候。祝儀取遣候樽肴も、三種之處二種、二種・一種之品者相省尤に候。其品をも輕少分用可申候。双方幷一家之參會、可爲別日も一日兼、饗應料理之儀も三菜・二菜或は吸物・のし鯣迄に而相濟。未々進物等可有之分も、員數を減じ又は相止可申候。左樣に無之候而者、

此時節婚儀等必至与差閊申面々も可有之候間、頭・支配人より急度可被申談候。右之趣被申聞候而も、心得違之族も可有之候哉、とかく婚禮用意等之儀、幷前後參會之様子、頭・支配人委細被承屆、其上に而猶更事輕く可被申談候。但衣服・道具等之内紗綾・縮紗・蒔繪等之類も、有來候か、又者先達而拵置候分を、只今俄に相省申首尾に候者、却而費も可有之候。又右之分は不苦候様にと被申談候者、其所に懸り、只今拵候品も、結構成紛敷品も可有候哉。此段頭・支配人別而被承屆可然候。養子之儀も右同事に被相心得、養父・實父等に可被申聞候。惣而御家中之面々、分限不相應成儀有之段被聞召、追而者一統被仰出も可有之御様子に候得共、今般之儀先右之趣可被相心得候事。

甲辰二月

右御年寄衆御列座、御用番内記殿御渡候御紙面寫相達候。御口上に而猶更嚴重申談候様被仰聞候。依之同役中遂僉議、其品々大躰別紙書記申達候條、此趣堅可被相守候。たとへ人々在合候品に而も、今般申談候外結構成品被用候得者、所持無之面々之引附にも成候間、諸組之例に罷成、被仰渡候品もやぶれ申候條、同敷は被指止可然存候。此等之趣急度可被相守候、以上。

辰三月

覚

一、結納祝儀、輕き肴又は知行高次第樽代被用之、其節頭々可被受差圖事。

一、小袖上着・下着共、絹之外用意無用之事。

一、袴右同斷。

一、帷子縫箔等一切無用、茶屋染之類可被用事。

一、小袖・帷子着替、二つ三つより多用意無用之事。

一、夜具夜着・蒲團共、絹之外一切無用之事。

附、二通り之外客人用意等、たとへ木綿にても其用意無用之事。

一、長持千石以上計之身上之人々者五つ、夫より以下者三つ或者二つ之外、一切無用之事。

附、黒塗無用、不殘栗色被申付、ゆたん無用之事。

一、挾箱千石以上二つ、以下は一つ黒塗之事。

附、ゆたん無用之事。

一、臺子無用之事。

一、六枚屏風大小一双宛、輕繪被用之、砂子無用之事。

但、有來候屏風有之候者、斷之上可被受指圖事。

一、重箱大小一組宛之外無用、尤可爲黑塗事。
一、手道具蒔繪一切無用之事。
一、双六盤之外、碁・將棋之盤無用之事。
一、御厨子黑棚無用之事。
一、琴一挺之外三味線無用之事。
但、琴も有合不申候者無用之事。
一、貝桶無用之事。
一、長柄之銚子持參無用之事。
一、衣桁・手拭懸一つ宛、黑塗隨分輕く可被申付事。
一、乘物御座色、星金具之外一圓無用、勿論乘替無用之事。
一、黑塗行器一荷より外無用之事。
一、出料拵等隨分輕く廐相に可被申付候。舅之外せがれ等より引出物一切無用之事。
一、色直之祝儀勿論無用之事。
一、壻・舅之外者、壻之父母者格別、其外祝儀物被相贈候事堅無用に候。壻之父母にも、其砌頭々に被尋可被伺差圖候事。

一、婚禮之節雇之者多召連近年はやり候。手振等之品一切無用之事。

一、互に出合候節、服紗、雜煮一汁三菜又は二菜又者一菜、人々身上により、其節頭々ゟ可被導候。其外吸物一・肴一種之事。

一、嶋臺・おさへ作り物・木具三方共無用。塗三方可被用事。

一、婚禮之上互に持參物、頭々ゟ被導、其節可被受指圖事。

一、大文箱無用之事。

但、文箱は二つ計、少蒔繪有之候而も輕く候者不苦事。

一、硯・料紙箱、有來候分者蒔繪有之候而も不苦候間、所持方者先達而斷可有之候。所持無之方、是又黑塗等輕く可被相心得事。

一、膳部者黑塗に而夫婦之分迄用意、紋付事堅無用に候。客膳部之儀者勿論可被指止事。

一、右之外勝手道具等も、品々持參候例有之候得共、畢竟其家々に所持仕有之物に候得者、男方より指而搆候而持參に不及事に候。此段別而呼むかへ申方より示談有之、急度可被指止事。

一、召連候女中衣類道具准之、尙更輕く可被申付候。家來裝束、主人より宜筈に而一向無之儀。若左樣之者供に召連候者、主人ゟ裝束もおいづから結構に可罷成候間、其心得可有之

事。

右今般御年寄衆御申渡候趣に付、同役中詮議有増書記申候。是より輕き分者勝手次第、少も重き品又者數多く被致候儀、決而不罷成候。畢竟用意之品々一々書立、帳面に被相記、頭々ゟ被相達、指圖次第に可被相心得事。

以　上

別紙兩通相達候。先々御順達、落着より御返可有之候、以上。

辰三月四日

三月八日。横山大和守・本多安房守江戸を發して歸國の途に就く。

〔政隣記〕

三月四日御近習物頭御使を以、横山大和守・本多安房守ゟ御國許ゟ之御暇被仰出、黄金三枚・御羽織二宛被下之。右爲御禮、追付御殿ゟ罷出候處、於御居間書院御手自茶宇島二反宛被下之。相公樣者御居間ゟ兩人一同に被爲召、縞珍一卷・縞羽二重三疋宛被下之、段々御懇之御意有之。同月八日朝大和守、晝安房守發足。

三月十三日。前田綱紀の女箕姫を柳原御前と稱す。

〔政隣記〕

酒井忠寄夫人は前田綱紀養女箴姫

三月十三日酒井攝津守樣御新造樣、今日より御原御前樣と被稱候樣、左衛門尉樣より加藤大貳を以、御前樣へ被仰進。但御譜代之御家に而、御前樣と被稱儀過分に候得ども、御由緒柄を以右之通由也。

三月十八日。前田綱紀の病癒えざるを以て歸國延期を幕府に請ふ。

〔政隣記〕

三月十八日聞番菊池甚十郎を以、御用番之御老中へ左之通被仰遣。

宰相儀段々得快氣候得共、今少相見合度候。彌發途之時分御屆可申候。

相公樣より左之通被仰遣。

段々氣配、通玄院藥用宜候得共、痛今以すきと不仕候。今少見合罷歸可申と存候。自然見合すきと不仕候者、先加賀守迄發出候樣に可仕候。彌宜候者、何とぞ致歸國、諸事仕置之儀も致指引度存候。

四月廿七日。前田綱紀の病小康を呈す。

〔淺新秘策〕

四月廿八日之書、由比氏。

一、相公樣御痛所、池田玄眞御藥被召上、御差引有之内、昨日より御快通、其後御痛も御和

其御地は金澤

ぎ被遊候由に而奉恐悅候。御膳なども此間共に御快被召上候。御藥御相應共申候、或は御適中には不被及などゝ色々擬儀仕事、是は毎之事に候。御指引と申內、一段々々御德者不參御樣子に御座候。久保壽齋御鍼も上申候。先昨日より御痛御和被遊、昨今は此間に無之御快然と申御沙汰に候。有無來月は御歸國も可被遊思召に而、御醫師等にも御詮議有之よし。何とぞ左樣に被爲成候へば恐悅至極。中將樣御歸國御沙汰ひしと相止居申候。

〔浚新策〕

四月廿九日圖書殿より房州公へ被遣候御書中、藤太夫等も見申樣に被仰越、一覽仕寫置候。一玄眞御藥今以被召上、壽齋は針上申候。先日佐々伯順も相伺申候。彌玄眞申談僉議仕、御藥調合候而、尤玄眞上申樣に御直に御意之旨に御座候。御老躰樣之儀、天氣相等に付而御差引被成御座候。長き御旅行は、乍恐無御心許儀と奉存候。中將樣にも又御滯府御願も可被仰上候哉、然ば御入國彌以延々に相成可申与、乍憚氣毒千萬に奉存候。大勢此表へ參集、御費成儀に御座候。何卒其御地より、各樣之內一人御越有之、御療養の儀も御示談致度儀に奉存候。下拙共迄に而は心配仕候。尤中將樣思召、又は相公樣へ達御聽不申候は而は難成儀と奉存候。且又御醫師數人罷越候得共、於御國之棟梁は南保玄隆事、頃日は氣色も宜敷相勤申儀に候故、此者は京都に而も大醫と申儀、兼而承及申候。江戶表に而も餘り無之由申候。幸御

家來之儀に候へば被召寄、御容躰など奉伺、其内段々御快被成御座、御發駕被遊候はゞ、御道中御供仕候而可宜哉と、民部殿・內藏助殿とは申候儀に御座候へ共、存候樣にはと成兼申候。天氣も打續暖に成候而、彌御快然被成御座候儀、段々可申進候、以上。

右御來書、閏月九日に到來。

閏四月二日。前田綱紀の病篤きを以て使を伊勢神宮に遣し快癒を祈らしむ。

〔政隣記〕

閏四月二日相公樣御所勞御勝依不被成、勢州え御使、物頭中將樣御近習羽田傳左衞門正永え昨晝被仰付、今晝江戶發出。十日伊勢え參着、廿一日歸着、御直會等則被上之。神納黃金五枚。傳左衞門發出前、白銀十枚・御羽織一拜領。

〔浚新秘策〕

閏四月四日之書澤田氏より到來。

一、相公樣御容躰、頃日別而御勝不被遊、終日之內兩三度も御指引被成御座、玄眞・壽齋も種々相考候得共、御藥御相應不被遊、昨日なぞ別而御不出來之由奉承知候。當朔日於伊勢御祈禱可被仰付旨に而、羽田傳左衞門御近習物頭用意仕候樣に被仰渡、則翌二日晝九時過御當地致發出

候。此趣共に而御考可被成候。爰元之御樣子、御病躰段々御快然に被成御座候旨表向に被仰出、御客衆にも其通に御座候。彼是与申儀不罷成、何もかも推隱申が宜樣に而、如御存知の調子、逸興千萬成事のみに御座候。此通に而は中々御歸國之御沙汰も消失、眉を顰申迄に御座候。乍恐中將樣御難儀、思召寄候儀も難被遊御事どもに而、御近習之面々も、人々心々に御座候。乍然實正成御樣子承候故、此度は御輕御事与は不奉存候。御譜代之輩に候へば、別而實正成儀奉承知度奉存候へ共、例之通之樣子、爰元にてさへヶ樣に候故、其許而色々可申与存、爲御知申入候。

閏四月七日。前田吉德、綱紀の病癒えざるを以て引續き滯府することを許さる。

〔政隣記〕

閏四月六日相公樣就御所勞、中將樣來月廿日頃迄御滯府御願之儀、御月番安藤對馬守殿に今日問番を以被仰達候處、翌七日問番御招、御勝手次第之旨被仰渡、御禮對馬守殿に問番被遣。九日右御禮御機嫌御伺旁、對馬守殿に御勤被遊候。

五月朔日。前田吉德、綱紀の病惱平癒を諸寺社に祈願せしむ。

〔政隣記〕

五月朔日相公様御所勞に付、從中將樣山王觀理院・樹下民部并牛込長久寺へ御祈禱被仰遣、於御國も白山・石動山・倶利迦羅へ御祈禱之儀、二日御飛脚を以被仰遣。

五月二日。德川吉宗、前田綱紀の病篤きを以て使を遣して之を慰問せしむ。

〔德川實紀〕

五月二日松平肥前守綱紀病臥によりて、奏者丹羽式部少輔薫氏をして御訪あり。

〔政隣記〕

五月二日相公樣御所勞、前月廿九日より御指重、今日上使御奏者丹羽式部大輔殿を以御訪、

式部大輔は式部少輔の誤

五日御奏者藤堂伊豆守殿を以干鮭一箱御拜領、相公樣御名代前田伊豆守殿、中將樣御名代攝津守樣御老中方御勤。

同日御家老中幷津田刑部・今枝主水兩御近習頭、相公樣御目通へ可罷出旨、從中將樣御意に而一兩人宛罷出。

同日公方樣志村筋御成之筈に候得共、此方樣之御樣子に付御延引与沙汰有之。

一、相公樣段々御診等被仰付候御醫師橘隆庵老・澁江通玄院・曲直瀨養安院・井關玄說老、其外

數輩町醫等迄也。右玄說老・岡道溪老・隆庵老、同御藥も被召上、從金澤南保玄隆被爲召、早打に而四日發、九日朝參着御藥一帖指上。

廿九日は後文に廿七日とあるを正しとす

五月四日。藩醫南保玄隆前田綱紀を診する爲金澤を發す。

〔浚新秘策〕

一、閏月十八・九日御年寄衆御詮議有之、南保玄隆爲御診脉旁、江戶に可差遣旨に而則御申渡、廿二日當地發出仕候筈に相極候所、當七日中將樣より達而被仰上、橋隆庵老御療治に御立歸被遊候。隆庵久々に而被相寬、言外御疲も見えさせられ、何とも無御心元奉存候。常々補藥之儀は甚御嫌被遊候故、只今迄誰々も補藥指上候事無御座候。乍併此度之御樣子者、補藥可然奉存候由。乍然此儀中將樣に迄御直談有之、一向沙汰なしに仕、一帖に人參二分宛入被上候。段々御快御樣子段々申來、廿一日に到着之便には、隆庵も被致安堵、機嫌も宜敷旨申來候に付、左候はゞ玄隆事押而差上、若思召に背候而は如何敷可有之候。先廿二日發出之儀は相扣、一往中將樣思召相伺、其上之儀に可仕旨に而、則其段早飛脚を以被相伺、玄隆發出相延候。

一、同月廿九日出早飛脚五月三日晚到着、玄隆爲御診脉旁江戶表に差上申筈に申候へども、段々御快御樣子に而差扣置申候。此うへは一往御意をも相伺申候趣、中將樣より相公樣に御

伺被遊候所、尤之事共に思召候。玄隆儀近年病身に罷成、足疾も有之儀御聞及に付、不被爲召候。隆庵老御藥に而、いまだ御全快と申に而も無御座候。玄隆彌可被爲召候。道中指急ぎ罷越候はゞ、其身足疾にも惡敷、又は御用にも立兼可申候間、常路づもりに而可罷越候旨、御兩公樣より被仰出、則其段御申渡、四日晝前當地發出仕候。

右早飛脚に而閏月廿七日圖書殿より房州公迄被遣候御狀、藤太夫にも披見に仕候樣に被仰遣、則寫置候。

一、相公樣御氣色之御樣子、先頃以來段々御快方に被成御座候。隆庵老も間遠に參上被仕候而、御容躰被相伺、彌以御宜被成御座候旨被申候。御膳等も御むらなく被召上候。恐悅之至御同然奉存候。尤天氣などにより、御痛所等少宛之御差引は被成御座候由に候へ共、惣而之御樣子、今月初頃与は各別御快被成御座候間、御安堵可被思召候。御用なども被仰出、此方より申上候儀も品により言上も仕候。然共書付等は、先は可成程は扣申事に御座候。御鍼は折々壽齋被仰付候。其外御醫者共被召出候儀は無御座候。寺田勾當は度々御ひねり被仰付候。是も今朝和田玄秀迄被仰出、段々御快被思召候間、切々は被召出間敷候。其身茂病者に候間、御門外等に罷出申儀、度々相伺申にも及不申候。玄秀迄相達候而罷出可申旨、玄秀勾當に申渡候由に御座候。右之樣子に御座候へば、彼是以乍憚奉安堵候。然共永々之御滯之御事、御

老躰様之御儀に御座候に付而、右之通御快方被成御座候共、南保玄隆には御容躰相伺申樣に仕度儀と存罷在候處、今般各樣御僉議之上、玄隆儀廿二日に發出仕候樣に被仰渡候へ共、其以後之御容躰、段々隆庵老御藥に而御快方之旨、何茂樣御承知に付而、押而罷越候而は御意にも應じ間敷哉、一往中將樣へ御伺之上、發出之儀可被仰渡由。依之此度早飛脚を以被仰越候由、一段御尤成御僉議と奉存候。則御書面御兩殿樣入御覽、被仰出候趣以早飛脚を以申進候。先以玄隆儀、各樣幷爰元に而も兼而存候通罷成、珍重之御事に御座候。玄隆儀も病後之儀に付、道中も緩りと相越候樣に与御懇之被仰出に而、則委細者御連名之宛所紙面に申進候。御當地頃日俄之暑氣に罷成候。給に而は事之外あつく覺申候。中將樣彌御機嫌能、毎度御表へも御出被成、御出之御方々へも御對顏被遊候。先日頃少天氣相御痛被遊、林伯立御藥被召上御快然、恐悅御同前に奉存候。

五月五日。徳川吉宗再び使を遣して前田綱紀の病狀を問はしむ。

〔御年表〕

五月五日上使御奏者番藤堂伊豆守を以て御尋。干鱚一籠御拜領。

五月五日。前田綱紀、吉徳を招き直封の長持を讓與す。

〔政隣記〕

五月五日以來御診等、御醫師河野松庵老・澁江長怡老・栗本瑞見老・長尾文哲老・吉田信齋老・三浦峯庵等也。
同朝少御快、中將樣江被仰談、御用有之由に而、御居間江御招、御人拂に而御閑談二時計。御退出後、御直封御長持三棹被進之。其後御氣色彌御指重也。且御家傳之御腰物、號念佛孫六者、三日に御讓也。
一、在江戸御手醫師者池田玄眞・林伯立、御針醫久保壽齋晝夜相詰。泊番右之外に端玄徹・佐々伯順代々。壽齋儀故障之節者、久保定能泊番与此間被仰出。今五日より堀部養竹・高桑正悅・久保定能、代々御表に勤番被仰付。玄眞等者御近習番部屋に相詰候事。

五月六日、前田綱紀の病勢大に漸む。

〔御年表〕
五月六日醫師中何れも御療養無之段申上る。

〔政隣記〕
六日今月二日御一門樣幷御出入衆等御見廻、御前樣方も追々被爲入、御一門樣之内御近き御續者兩度御見廻。且御三家樣幷御老中方、其外御大名方よりも御使者有之。右以來連日同斷、今日より者御一門樣方等御詰、九日まで御門前成市。

南御門者、御意無之者不相通御格に候得共、此節格別之儀、御醫師等呼に被遣時分遲く候而者如何に付、御横目半田安左衞門・高畠善太夫示談之上、急御使等可相通旨、御門番人に申渡有之樣、割場奉行に申渡。

松姬は前田吉德夫人

五月九日。前田綱紀江戶に薨ず。

〔政隣記〕

一、相公樣御容躰等之大綱者、第一五ヶ年前御參勤之節、松姬君樣御逝去之段於御途中被聞召、殊之外御氣を被打、其以後御勝れ不被遊候得共、押而御勤。然處去々年より右之方御眼氣御痛被爲見兼、御左眼にも御移に付、御療治被仰付候得共御宜無御座處、榎並立怡療治に而御左目は御快、其後御右肩被爲痛、御腕もしびれ、御指も御不叶に付、前々より御服用も被遊候橘隆庵老御藥御用之處、御替無御座に付、澁江松軒老御藥久々御用之處、御右肩御痛は退候得共、方々に御痛移、今年閏四月上旬頃より、御背中御身柱之邊より御四・五節之邊迄強く御痛、御手醫師玄眞御藥、壽齋幷馬嶋勾當御針差上候處、暫御快候得共指而御替無御座、御立歸隆庵老御藥御用之處、少々御快方に候得共、御背中幷御腕御痛強、御起臥に御難儀に付、御近習之者奉抱、御食事之節も御右之手別而御不叶に付、御箸難爲被持、御側之者手を添指上、御大小用に被爲入候節者、半疊に被爲乘、御近習者奉舁。然處同月廿八日頃より、

御小水御滯、五月二日頃より御疲も被爲出御指重、昨日より御食不被召上、今二日御粥廿目計被召上、夜に入御不出來。隆庵老御指圖獨參湯指上、御庫藏より人參多出候處、古藥に成能利少き故、宗對馬守殿〻被仰遣、新渡人參御用候。三日より參附湯御用、少々御脈勢等御宜、味噌汁團子一つ之目五分八厘宛を十六、豆腐田樂二つ半被召上、前記之通御醫師中話方、且表向諸頭も朔日以來晝夜相詰有之候處、不及其儀に旨被仰出。四日御不出來、隆庵老御療治御斷、岡道溪老〻御賴之處、御療治難被成旨に候得共、中將樣達而御賴に付御藥御調合。五日朝之内少御快、前記之通中將樣御閑談後御指重、道溪老參五匁・差二匁御調合、其後御手醫師中僉議之上、十匁之獨參湯上之。六日次第に御疲被爲出、道溪老御斷、井關玄說老〻中將樣達而御賴に付御藥調合、十五匁之獨參湯御用。七日御同樣。八日玄說老御診之上、御大切至極与被申上、御藥御調合無之。依而河野松庵老等幷町醫都合六人診之處、何も御療治無之旨被申上。九日南保玄隆參着診之上、一貼調合之上之、最早御療養無之旨言上。栗本瑞見老も同樣に被申上。午刻過御大切至極、安藝・因幡兩御前樣等御對顏。御人拂に付池田玄眞・林伯立・久保壽齋御側に相詰有之處、午中刻御逝去、御年八十二、御治世七十八年。

附、玄隆指上候一貼は生脉散之由。

〔淺新秘策〕

一、相公樣少宛御宜相見え候處、七日・八日頃より段々御指重り被遊、九日午の刻終御薨逝被遊、群下一統秦絶言語候。從中將樣御使者北川久兵衞、爲御使十日未明發足、十二日申刻過到着、年寄中ゟ御意之趣申達、御享年八十二に被爲成候。

〔政隣記〕

五月九日、前記にも有之通、今日相公綱紀公午中刻御逝去之段、御老中御用番水野和泉守殿ゟ、御家老御使今枝民部を以御屆。金澤ゟ早飛脚丙上刻出足、年寄中ゟ之御使御使番北川久兵衞被仰渡、京都榮君樣ゟ之御使、御大小將永原伴五郎被仰渡。兩人共夫々御定之通拜領物被仰付。久兵衞御國に居留、御待請可相勤旨も被仰渡。今夜發足早打也。伴五郎も、御返答書者京都詰人ゟ相渡、直に金澤ゟ歸候樣被仰渡、翌十日發足。

同夜御家老成瀨内藏助ゟ、御尊體御國ゟ被爲入御供、御直に被仰渡。次大野木舍人・成瀨内匠・中村典膳・松尾縫殿ゟ御棺納御用、伊藤平太夫・富田主稅・武藤庄兵衞ゟ御道中奉行被仰渡。

前田綱紀行狀

〔松雲公御夜話〕

一、龍口御屋敷に被成御座候時分、御幼少之御時分、御城の御堀へ鴨抔御はなさせ御慰に被

遊候。毎度御門前伊東平八一人被召連御遊被成候。松平越中守殿其外御大名方御通之時分、何れも乗物より御出御時宜有之に付、後には御抱守共申上、御大名方御通り之節は御門内へ御入被遊候。大猷院様御鷹野等御成り時分も、御門内に被成御座、扉の透より御通りを御覗き被遊候。其時分迄は、何方もヶ様に御輕き御みだりに御座候由、毎度御意也。

〔松雲公夜話〕

一、相公様御幼少の御時分、龍口御屋敷に被成御座候節、微妙院様より被仰付、山本久左衛門・山森吉兵衛・半田治兵衛・森権太夫、右御屋敷に相つめ申候。いづれも大坂にて手に合申者共に候故、其時分の咄をも被聞召候様に被思召候御様子と相見え申候。久左衛門は度々御かくれ子の御相手に成申候。治兵衛は髪うすく御座候につき、御くみ付被遊、かみを御とき被成候得ば、言外いやがり申候。或時つよく御組付、かみを御とき被遊候へば、くゝり付置候かみぬけ候而、もはや髪ゆひ申儀難成、其時より御断申上致法躰候。御七つ御八つの時分、毎度御灸を御いやがり被遊候得ば、御側に伊東平八罷在候を、灸をいやがり申ものは何とやらん可仕旨森権太夫申候。御前にあて候而申様成趣に付、御脇刺にそりを打たせられ、権太夫を御しかり被遊候。また或時御廣式よりつよく御はしり被遊候時分、平八も御供にてはしり候得ば、ころび候而脇刺ぬけ、足を切り申候。其時も権太夫有合、言外宜敷介抱いたし候

同年は享保五年

同時は享保七年正月十五日

由、右同年六月廿三日御意也。

〔松雲公御夜話〕

一、右權太夫龍口御屋敷に相詰罷在候時分、相公樣御五つの御時、彼是御わるぐるひ被遊候時、御抱守抔氣毒がり、伊藤平八を相公樣へあて申氣味にて、皆々つよくしかり候得者、御推量被遊、御脇指を御ねぢまはし被遊、其しかり申者共を御いかり被遊候。其御樣子を權太夫奉見、事外感奉り候。傍輩中誰彼へ申聞せ普爲聽仕候由。御歲御長生之時分、今井・松村抔御物語申上候由。權太夫後に見雲と申旨、右同時に御意也。

〔松雲公御夜話追加〕

一、山村市十郎儀、御若年之御時分御子小將にて相勤申候。御くるひの時分、御緣より御つき落し被遊、足を痛め、終に全快無之、一生足を引相勤申候。後定番御馬廻御番頭被仰付候。

〔松雲公御夜話追加〕

一、清泰院樣御小將に、十二・三計にて殊之外きれいなる生付のもの御座候。松雲院樣御幼少之時分、花車抔を見事に被仰付、其小姓を楊貴妃に御仕立御乘せ被遊、御間之內御ひかせ被遊、御慰に被入御覽候。右御小姓或夕暮、御守殿の御緣に立候て、客の氣色を詠め申躰にて暫居申候處、ふと中へ上り申候。御年寄女中衆其外御側之衆中驚き、これはくと申內、次

第々に高くあがり、後には雲の中へ入、何方へ參り候哉見え不申候。其已後終に歸り不申候。不審成事に候由御意拜聽仕候。

〔松平公御夜話〕

一、相公樣御家督の御禮は、正保二年酉八月二十一日に御座候。御三歳の時に而、大御奥に清泰院樣御同道に而御登城御禮被仰上候。御太刀はおこわ殿御披露に候。其時分おこわどのをおひこ殿と申候。出頭の女中兩人有之候。只今のやう成事に而は無之、殊の外威勢も有之候。其已後御七つの頃迄は度々御奥へ御出被遊候。御廣敷箱段など有之、土間の所に庭鳥多く籠に入有之候。其內の黑白まだらの鳥有之候。御望に被思召候由御意被成候へば、右女中衆安き御用のよし御申候處、巖有院樣御幼少の御時分にて、御秘藏の鳥候間、右の鳥は被上がたく候、何にても外に御望の鳥可被上与被申候へば、菊いたゞきの御望与被仰候へば、うそを籠に入被上候處、是は菊いたゞきにてはなきと御意御座候へば、右女中衆舌をまき、而目うしなひ申候。此上は若君樣へ私其白鳥を拜領致、上可申旨被申候。其白鳥參り申候。則御飼置被遊、江戶大火事の時分迄居申候。羽を御つめさせ被遊被置候所、何やらんに驚、羽延び申時分にて立上り、御城の御堀に居申候。御斷被仰遣御とらせ被成、又々御飼置被遊候。巖有院樣御實母樣の御部屋へも、度々被爲入候。鳩御數寄に付御飼置被遊候內、うちかき鳩

御かいどりを御ひろげ被成、御庭の隅の方へ御自身御おひ詰、御こり被成候一番被進候事も御座候由。右同時御意也。

〔松雲公御夜話〕

一、相公樣御幼少之御時分御家督に而御座被成候へ共、御馬漸二疋ならでは無御座候。徹妙院樣御逝去之年御暇之時分、御拜領之御馬牽參り候處、何れに而も相公樣御意に入候御馬一疋可被進旨被仰出、則御望の毛付被仰上候得者、卽刻被進候。其御馬に被爲召御歸被遊候樣御意に而、追付御召候而御戾り被遊候。其時分三匹御所持被遊候。唯今与は格別の違に候由、每度御意御座候事。

〔松雲公御夜話〕

一、御若年之御時、御腰物之御拵本阿彌家之者に被仰付、御帶被遊候。或時御庭に御出被遊、あなたこなた御步行被遊、被爲入候而不斗御腰物之御柄御覽被遊候得者、御目釘何方に而ぬけ申候哉相見え不申候。くじらの御目釘に御座候。やゝもいたし候へばはしり候而、利方に言之外惡敷ものに候。夫に御こり被遊、本阿彌家之御拵は被指止、今程隨分目釘之竹御吟味被遊候。其外御柄、竹に而兩方よりおさへ申樣御卷せ、被入御念候御事与、度々御意御座候事。

〔綱利公御夜話〕

同年は享保五年

一、相公様御若年之御時分迄は、御老中ゟ被遣候御書、何れも御片名字に被遊候。然共何と致候而も、末々迄如此に而有之間敷と被思召、御改被遊候。其時分青山織部御用人相勤候節に而、御家之御格に候間、先只今迄之通御片名字にも可被遊候やと申上候得共、兎角末々ケ様に而は世之風に合申間違候。其時に到り御改被遊候而は、結局見苦候間、唯今之内御改被遊候方、目立不申可宜由被仰出、只今之如く御諸御名字に被遊候。如御推量、當時御片名字に而は何共取合兼可申旨、毎度御意御座候事。

〔松雲公御夜話〕

一、微妙院様常に御袴被爲召候御時分、相公様御有合被遊候得者、毎度御紐御結、御腰御當て被遊候御受取にて御座候。中略。右同年六月廿一日御意也。

〔松雲公御夜話〕

一、微妙院様御客衆へ御對面の節者、何時茂御後のかた御出口、御かゝかみなどの内に相公様被成御座候。若御隙入などご御座候得ば、古市左近相詰罷在候。是は御茶など御乞被遊候か、又は御居間に在之候御道具等御用の時分の爲に御座候。

〔松雲公御夜話〕

一、微妙院様は諸事の御さばき御あいよ成儀、抜群の御事に御座候。相公様など中々及ばせ

肥後守は保科正之にして前田綱紀の岳父たり但しその逝去の際には綱紀在江戸にあらざるな以て本文はその年の事にあらざるべし同年は享保五年

勝次郎は前田吉德

られ候御事にては無御座候。御まぬ被遊候而は、いづれも御ひが事にならせ候旨、毎度御意の事。

〔松雲公御夜話〕

一、故肥後守樣御逝去前御大病之時分、相公樣一日に兩度充每日御見廻被遊候。本鄕御屋鋪迄御歸被遊候而は程遠候に付、松平越中守殿其節御在所に被成御座、朝御見廻、晝は越中守殿御內證へ被爲入御休足、又晚方御見廻被遊候。此御煩は、松平隱岐守殿三田の御屋敷へ御振廻に御越之處、其御席に而御痰御指發り被成候。隱岐守殿別而御驚、肥後守樣御歸の節も跡より引つゞき御見廻被成候。夫より每日御見廻被成候旨、右同年十月二十八日之御意也。

〔袂 草〕

一、元祿十三庚辰九月相公樣御歸城後、勝次郎樣より御書被進。草案御右筆より指上、其如く御自筆にて被進、宛所玉井勘解由也。然に追て御國より葛卷新藏より、勝次郎樣附不破彥三御守㪽。御家老㪽。大橋長兵衞御小將頭矢部權之丞御徒頭・足輕頭兼る。方迄、勝次郎殿御國富五郎樣共に押立たる時は殿と可申旨亦被仰出、御旗本へ勝次郎樣御勤の格は大藏樣・飛驒樣の格に可心得由と云。未御名乘も不被進、御幼少の內は前田と御肩書にて御名月日付の下に有て、御判も不被成筈也。御判初なき內は御判無筈の由。且又御道中と有る御の字不用。玉井へ披露と有、御書中に恐惶如何、恐々也。加樣の儀、草案上申候御右筆不調法に被思召由申來る。勝次郎樣・富五郎樣共に御名字未前田と申也。

寵姫は前田綱紀の養女
仙溪院は前田利常の女熊姫
犬千代は前田綱紀

〔松雲公御夜話〕

一、寵姫様御衣服、毎度數多く御用之由駒井與兵衛抔相伺候時分、御意被遊候は、仙溪院様御幼少之節、御衣服等別而御輕き事に候。損候而も中々伺ひ申事成不申候。是非々々損じ候節は、品川左門・竹田市三郎抔へ申入置候得者、徹妙院様御機嫌能時分見合そつと相伺申候處、左様に數多く御用無之筈に候、是非無之候而は難叶候は、犬千代様ゟ御召おろしを被遣、御着用被成候様に可仕旨御意に付、則御前ゟ御古召を度々被出候。中々卒爾にか様之品伺申儀思ひもよらざる御事の由、度々御意御座候。

〔松雲公御夜話〕

一、先年森半左衛門御用人相勤候時分、金澤より到來之御用之書付与一所に、妻女より指越候書狀懐中仕罷在、与風取違御用之書付一所に指上申候。暫在之、右書狀御前に而御封じ被遊、長谷川佐雲を以被渡下候。此一封は半左衛門妻女ゟ文と相見え申候。麁相に而指上申与被思召候旨被仰出候。御前には少も御披見不被遊候。外見如何に被思召、御封させ被成候而被渡下候旨被仰出候。半左衛門以之外驚き、ケ様に被仰付被下候段、誠以難有儀に奉存候由、何茂普爲聽仕候。御綿密成被遊様、何もおそれながら奉感候。

〔松雲公御夜話〕

一、先年竹中祖右衛門与申與力江戸に相詰罷在候處、實儀迄之者にて一圓働無之に付、深川御藏米の御用相勤させ置申候。其節永井織部與力裁許仕候に付、祖右衛門儀右之趣に而押立御用相勤させがたく候間、順番には無之候得ども先達而相替申度旨以紙面相伺候處、鑓を以敵与突合候儀は成候やと御尋被遊候。成程其儀は滯無御座与申上候得者、左候得ば與力之役儀はざつと濟申候。外御用勤兼候儀は、人々賢愚無是非候。何時に而も可相替時節に向候者爲致交代可申旨被仰出候。何も御尤成思召に候哉と乍恐奉感候事。

〔松雲公御夜話〕

一、享保三年八月十七日村田縫右衛門御持弓頭組足輕三浦六郎兵衛与申者于時十七歳御中屋敷表御門之内御番所掃除仕候序に、御飾弓を引試申候處、元來虫入之御弓にて候哉、握より上を引折申候。其樣子當番之小頭大槻七郎左衛門儀見申候而驚、則頭縫殿右衛門へ及斷申候。縫殿右衛門は御上屋敷に有之に付、樣子承与追付御中屋敷へ罷出、引折申首尾、六郎兵衛並小頭七郎左衛門爲致書付御次に持參、當番伊藤平太夫迄樣子申聞、書付茂相渡、松尾縫殿を以書付即刻入御覽、引をり申御弓茂指上候處、御弓損居申儀不存、其分に仕置候而は、急切之時御用に難立候。弓を心掛引試申に付損申茂相知申候。早速取替置可申候。引折申は幸之事に候。ケ樣之御道具見分計に飾置申事に無之候。相殘候御弓共、虫入無之哉爲引見可申候。惡き分は

今の高山云々は本郷邸庭園のことなり

取替可申候。折々ヶ引爲致試指置可申候旨、同人を以被仰出、曾て御咎無之、却而御稱美之御意有之也。縫殿右衛門奉之、御咎茂有之候哉与驚奉存候處、結構に被仰出候とて、言之外難有がり申候。御意味深き被仰出之趣何茂奉感候事。

〔政隣記〕

松雲公御代割場奉行前波□、江戸に而支配人之事に付御願有之、数日懸り候得共御聞届無之、其上又候强而相願候處、御暇可被下候間何方江成共立退と被仰出。其時前波御請に、奉畏候。御聞届無御座儀を强而奉願候事之御咎に依て御暇被下、他國江成共可退旨奉畏候。併私儀御譜代者に候間、御國を退候覺悟ハ無御座候。依之何卒切腹被仰付候樣、重而奉願候段申上候處、御取次之人々、いらざる事と達而申入候得共、是非可申上旨に付、其段申上候處、先達而相願候趣委細御聞届被遊候條、其段可申渡候。切腹に者不及、已後無滞相勤候樣被仰出候由之事。

〔富永數馬覺書〕

一、今之高山ハ護國公被仰付候。松雲公御時分、さゞえ山と申高き山、富士山の邊に御座候。寶永五年閏正月九日夜、森川宿阿部對馬守殿御中屋敷之内出火、松雲公御中屋敷より御上屋敷へ被爲入、右之さゞえ山へ御登り、中村宇兵衛・松尾平九郎・富田主稅・生駒藤九郎御供仕、

頂上へ上り罷在、火事之様子御見分御意候内、鎮り寄りに罷成、御下り被遊候。富永數馬・丹羽澤右衛門は、山はいたゞきも狹く、一段下に致蹲踞罷在候處、兩人共以後之ためにに候間、上り見置候へと御直命に付、兩人共御下り之御跡に山へ上り、火見分仕候。以後之爲との御意之儀、思召之程は難奉計候得共、指當見度可存と被思召候哉。以後之ためとの御意、重疊難有難忘奉存候。毎歳金子拜領、其外も拜領物被仰付候より、はるかに難有可存候。御上には御心持可有御座御儀と、乍恐記申候。

〔松雲公御夜話追加〕

一、或年御歸城の節、如例橋爪御門之外に三代目安房守始年寄中罷出處、御駕籠の戸、五寸明居申候。御駕籠間近く成候節、安房守少し出懸、御機嫌能御歸城奉恐悅候由申上候。何卒御意に應じ不申儀も有之候哉、何之御意も無之、御駕籠の戸ひしと御たて被遊候。其節勝尾半左衛門御乘物ぎはに御供仕候。扨々御手强き御儀与奉恐候由、辛酉七月物語承知仕候。

〔松雲公御夜話追加〕

一、或時横山故山城守より牡丹の花獻上候處、其時分小塚善左衛門御算用場にて不調法之品有之、御仕置之儀未被仰出以前に御座候。山城守など退出以後、奥村丹波守御月番などに候哉相殘り有之候へば、誰哉覽御近習之頭を以、右牡丹丹波守へ被下、先刻山城守より入御覽

候。頃日御前には善左衛門儀に付御辛勞被遊、ヶ樣之品御慰にも成不申候。丹波守など慰に成候はゞ、宿所に於て詠可申よしにて被下之候。丹波守御受にこまり候旨譴彼へ物語之由。御仕置之儀別而被爲入御念、御辛勞に被遊候御事、難有御儀与何茂奉感候由。

〔松雲公御夜話追加〕

一、富田彌兵衞・大場源太夫、元祿年中大がね御奉行相勤申內、御土藏に賊入申、前封印等少しも無相違、過分に金子盜取申候。封印等無相違候へば、必定奉行の所爲に可有之与一統に申候。先閉門被仰付、色々御僉議有之候へども相知不申候。三・四年過て、稻荷橋之際に罷在候大工盜取候段相知、御仕置に被仰付、御奉行兩人は御免被遊候。其已後奧村故丹波守、村故中務に咄申候。右之賊餘り久敷相知不申候に付、ヶ樣に御座候而者御家中御締にも成申間鋪候。年月を經相知不申候へば、定て奉行の所爲に可有之候。追付御仕置も可被仰出哉与一兩度申上候得共、何之被仰出も無之內、ヶ樣に賊出申候。何共面目を失ひ申事、御前には如何可被思召候哉と恐入候旨はなし候由、故中務物語に承り申候。其後源太夫・孫三左衞門、恰好等宜とは見え不申候得共、表御小將に被仰付候。如何と何も不審仕候。江戶にて御給事等別而不調法有之候に付、右御番頭より表小將可被指除哉与達御內聽候處、祖父源太夫儀無實の事にて數年閉門被仰付置候。其內病死、せがれ儀も無程相果申候。責て三左衛門儀、何と

ぞ宜相勤候樣に被遊度思召に御座候間、隨分指南致し爲相勤候樣に可仕候。富田彌八郎儀は、當時若狹守樣御近習に相勤候內、先宜思召候由被仰出候。此儀者水原故淸左衞門、右御小將御番頭之節、或時ひそかに申聞承申候。御家中一統難有御事と乍恐奉感候。

〔松雲公御夜話追加〕

一、元祿年中生類御憐、別而犬を痛め候事難成節、永原丹七郎何と哉覽子細有之、犬を殺申候。公儀御法度之儀を相背申事沙汰の限之旨被仰渡、五ヶ山に哉覽被遣候。公儀にはは犬を殺申に付急度被仰付置候由、御老中迄御屆御座候由。其以後御參府被遊候處、秋元但馬守殿より、御示談之儀有之候間御出被遊候樣に申來。卽被爲入候處、日外御屆有之候丹七郎は、如何被仰付候哉の旨御申に付、右之樣子被仰入候得者、一往拙者共に御尋之上可被仰付儀に候處、御楚忽成御事に候。乍去もはや落着之上者、其分に可有之旨被申候由。早速ヶ樣に不被仰付候者、丹七郎命は危き事に候旨、段々御意御座候。其時分御旗本蒔田權佐殿抔は、犬の儀に付切腹被仰付候樣に覺申候。大場・富田などの儀は、寬々の御樣子にて無實の罪を遁れ、丹七郞は急に落着被仰付存命仕候。未然の儀を御考被遊候事、何茂奉感候事。

〔松雲公御夜話追加〕

一、越中へ御鷹野に被爲入、十一月頃にも御座候哉、以之外寒さの時分、鶴を御ねらひ被遊

候に付、稍にふいごゝくしつらひ、其内に夜ゝ内より被爲入、すはりを御待被遊候。今村傳兵衞御腰物を持罷在候處、晝過に成候而も能處に鶴すはり不申候。其内傳兵衞儀、小用に參度候へども隨分堪忍仕、言ゝ外やゝ申樣になり難儀仕候處、御前に御見こがゝ御尋に付、氣色に而滯不申候、乍恐小用に罷越申度、其儀を愼罷在候へば腹痛仕候由申上候處、無構外へ可罷出旨御意に御座候。傳兵衞申上候は、左候はゞ鶴あげ可申哉と申上候へば、左樣にても苦しからず候。御腰物は御前に上置可申旨被仰出、外に罷出仕廻申候。一生之迷惑難儀成事に逢申旨度々咄申由、世上に申傳。何も難有思召に御座候由感じ奉り候。

〔松雲公御夜話追加〕

一、青山織部御用人之時分、松雲院樣御壯年之御時節にて、御中屋鋪に被爲入候節、御馬上御編笠被爲召候。織部氣に入不申、或時亦御中屋鋪に被成御座候時分、御玄關之外に有合之頭分罷出有之、御馬牽立、御草履取如例御編笠を指扣罷在候。其處へ御出被遊、漸く御馬に被爲召候時分、織部其節之御手廻之樣成ものへ向ひ、御草履取心違候哉、御編笠を持罷在候。御大名之被爲召候ものにて無之候。早速取のけ候樣に、大かた達御聽候程に高聲に而申付候。勿論何之御意も無之、其已後は御あみ笠不被爲召候由、脇田夕庵咄にて承り申候。此儀は何とやらん心得難き樣に相聞え申候も有之候へども、先記置申候。夕庵極老之時分物語ゆゑ覺えちがひも可有之候哉。

若狹守は前田吉德

〔松雲公御夜話追加〕

一、御中年之御時分までは、御目見之節江戸・金澤にて後藤程乘等御前江被召出、度々御酒宴御座候由。前田駿河守對馬与申節、毎度御酒被下候。或時對馬を御つぶし可被遊御催しにて、御前江は水を御銚子に被入、對馬江度々御盃下され候。御前江上り申御銚子違申を對馬見付候而、是は御情なき御事こて、實の酒をあげ可申与いたし候躰に候ゆゑ、御よはり被遊、御座を御立被遊儀も御座候由。又或時江戸に而御目見之節、對馬江ひたと夜更候まで御酒下され、大方つぶれ申躰に而御長屋江罷歸申候。翌朝尾州様江之御使被仰付置、大かた成申間鋪と被思召、朝六時過御尋被遊候得ば、早御使に罷越候旨。五時過罷歸御返答申上候。つよき酒に候由御前にも御感じ被遊候。對馬もよはり候様に被思召候儀如何こ、隨分情を出し候由後々物語有之候。御壯年の御時分迄は、ケ様之御和し被遊候御事毎度御座候由、大野木舍人はなし承申候。對馬儀常に酒を好み申事は無之候へども、何ぞと申時は以之外の大酒、少も取亂申儀は無之由。

〔松雲公御夜話追加〕

一、津田玄蕃御家老役壯年の時此役儀被仰付置候處、先年三月十六日夜より翌十七日夜まで金澤大火の節、鷹野より在合不申候。江戸へ言上之紙面に判形漏申候。同月二十四日犀川々除之火事之時分も不有合。兩日ともに御精進日に候處、不調法に付御役儀被指除候。被仰付、若狹守様へ御附被遊候節、表御居間に而御前江被召出、玄蕃儀先年心得違之時は、江戸御老中方江、病身に付役儀被指除候段御達被遊置候間、つかへ

中事も無之候ゆゑ、此度重て右役儀被仰付候由御意被遊候。其節御近邊に罷在、直に拜聞仕候。先年不調法之節、御老中方に被仰達樣、有難き思召之由其節何茂奉感候。

〔松雲公御夜話追加〕

一、里見治左衛門御大小將ハ時分に候哉、或時御他出之節、御駕籠ハ打あげを取落申候。御歸館以後、右之打あげ御月代などに中り、御疵など付候而者、御他出難成儀に候。不調法成事に候由被仰出、暫遠慮被仰付候由。

〔松雲公御夜話追加〕

一、小瀬團四郎御近習番之節、木曾路御供之時分、假横目被仰付候。諏訪に御泊ハ所、御旅館ハ後ハ山に裏方足輕番所有之、御座之間より眞直に見え申候。不心得成番所之申付所に候。早々爲取拂候樣に被仰出、少々雨降申處、團四郎罷出有之、卽時にこぼち申候。團四郎働ハ樣子御覽被遊、仕廻候て入候得者、こごハ外ぬれ候間着用可仕旨御意にて、御召之御羽織被下候御事。

諏訪宿泊は享保二年十月二日なり

〔松雲公御夜話追加〕

一、先年御參府之時分、東岩瀨舟橋之邊に長門守樣御出被成御座候。御前御通之少御先に、奧村勘左衛門（御大小將頭之時分なり。）乘物にて罷越候處、右之御樣子可達御聽ため、其處に指扣罷在候。無程それに被爲入候に付、右之段申上候處、御下乘被遊、先へ〱と御意にて、長門守樣被成

御座候邊御立寄被遊候。著氣強節に付、勘左衞門儀立付袴・羽織等も挾箱に入先に遣し、無是非縮嶋見苦敷帷子迄にて、裾をつまげ御先立いたし候。事之外見苦敷候。惣御供中も是は苦々敷事と存候由。道中にては何之被仰出も無之、御參府以後、頭分には似合不申、不嗜成仕形之由被仰出、暫遠慮被仰付候。

〔松雲公御夜話追加〕

一、笠間又六御小將横目被仰付候節、奧村丹波守心易候哉、丹波守申聞候者、御役儀被仰出一段之儀に存候。御横目役は、今日より大事彼是馬無之候而者難成事に候。急に才覺調兼可申候。幸ひ相應之馬所持いたし候間、遣し可申由にて、早速送り申候よし。此儀御內聽にも達申候哉。御横目役之誓詞被仰付候樣に仕度旨度々願候得共、終に不被仰付候。且亦其時分、御小將横目に者御役料知無之、馬持已下之身上之者には白銀十枚充可被下候處、其儀も無御座候よし。御横目役などにて年寄中へ心安、馬など申請候事、不應御意之儀に候哉と、其時分取沙汰仕候由、古老之人に咄承り申候。

〔松雲公御夜話〕

一、大野木舍人末葛卷新藏与申節、方々に御書物之御用抔、齋藤吉左衞門与連判に而申遣候。其時分何哉覽御用に付、吉左衞門は歸宅以後之事に付、新藏一判に而申遣候儀有之所、草案

松雲公御夜話には享保八年五月三日に作る按ずるに忌日三といふは三日のみに係り利常夫人の七月三日に逝去せしをいふなるべし

に右之趣私共より可申遣旨被仰出候段相調、下書伺相濟候以後、新藏一判に候處私共よりと調候儀如何と心付申に付、此段私より与改候而　重而上之候得者、最前之通り私共より与有之成程宜敷候。其子細は心易き方へ見廻抔に罷越、妻女よりの言傳など有之候時分、女共茂宜しく抔と申事に誰々申候得者とて、妻女を幾人持申ものに候哉、一人ならで無之候。其心に候間、私共よりと調候而不苦儀に候旨、御居間方小頭長谷川佐雲を以被仰出候。是は何茂心之附不申事に候と、舎人申聞候。

〔松雲公御夜話追加〕

一、或年六月三日成瀬内匠江、長谷川佐雲を以茄子を被下、是は柳原御前様より御品の茄子に候とて被進候。ことの外御風味勝れ申候。今日は御精進日に御座候。明日にも魚肉を加へ認候て、尚更宜可有之旨被仰出候。御前に者、御家中之者共、御先祖様御忌日には何れも精進仕儀与被思召候御様子、其上三日の儀は尚更御大切に被遊候故、右之被仰出と存候よし、内匠物語承り申候。富永全昌噺に、十二日かに、御家中頭分など精進不仕ものは有之間敷旨、佐雲を以内匠まで被仰出候を承り候由噺申候。常々の御様子、成程其通りに思召候御事と乍恐奉察候。

〔松雲公御夜話〕

一、御家之諸大夫四人に被仰付時分、御老中方御口上に而被仰渡御座候。然所御當家永々迄之儀に御座候得ば、御口上迄に而は以來之證據に難成候間、御紙面に而迚之事に被仰渡候樣被遊度旨、秋元但馬守殿へ迄被仰達候。則御當家以來迄諸大夫四人に被仰付候段、但馬守殿御自筆之御紙面參り申候。別而御大切之物に御座候旨、先年御意被遊候樣奉覺候。

〔松雲公御夜話〕

一、公儀に而は御大老と申候。御家に而は大年寄与申計に候。文字は大老与調候而も、大年寄又は大老ともいづれにも調申由、度々御意御座候。

〔松雲公御夜話〕

一、年寄中每月相替御用相勤申を御月番と申候。月番与申は何とも御心得難被遊候得ども、公儀に而御用番与申候へば、同じ事にて如何に候。左候へば此方樣に而は、御月番与申も成程可然旨被思召候由、度々御意御座候。

〔松雲公御夜話追加〕

一、諸役人御撰之節、年寄中より上り申紙面は、頭々同役連名にて、とくと證に成不申候。私人別に御尋御座候得者、多分違ひ申旨御意にて、每度御親翰等を以、御直に御尋被遊候。私共儀は數年御近習に罷在、御表向之儀は一圓不奉存候得ども、度々御尋被爲遊候。

〔松雲公御夜話〕

一、惣而御用之品に寄、あからさまには難被仰出儀在之、毎度推量も仕候程に御意之事有之候得共、年寄中不合點に而御氣味を呑込不申候故、何事も被遊にくき御事に候。あからさまに被仰出候而は、事により指つかへ申儀有之候、御氣毒に被思召候旨、度々御意御座候事。

〔松雲公御夜話〕

一、先年御家老役の數御增被遊候時分、御意被成候は、七手頭之家々は、御當家御代々の重き家柄に候處、御仕置等之御用被仰付置、萬一心得違等出來之時分、いかに重き家々に候とても、公儀へ對せられ其分に難被成置、其上家柄により御刑罰の筋輕重御座候ては、御仕置の筋相立不申、ゆるかせに候ては末々締り不申事に候。左樣に候とて、斷絶等に被仰付候儀は別而大切成事候間、七手頭の家々は畢竟御仕置の品に貪着無之、公儀に而諸大名の格の樣に被成置、御大年寄之分は、唯今迄之通公儀向御用之筋迄相勤申樣に被仰付、其外御領國中惣じて御家中の御仕置・月番等は、一向御家老役相勤候樣に可被仰付、左候得ば公儀に而御譜代大名の內人品次第御老中に被仰付候同格に、人持中の內に而器量勤方次第御家老役に御えらび被仰付候得ば、惣じて人持中の勤方すゝみも成可申事に候。唯今迄の通代々年寄中家々相極有之候而は、其代々の內不相應に而、一向御仕置の儀手に合不申、勤兼申者も可有之候。

左候得ば其身も迷惑の儀、手に合ざる御用を勤、心得違等之儀有之、右之通其分に難指置事茂出來候而は、御殘念成事に候。御家老役被仰付候得者、又家柄も輕く候間、不相應に候へば何時被指除候而も不苦候。何れに而茂御撰被成被仰付候得者宜事に而、勿論代々御家老役の家々相極り申儀に而無之候。其子不相應に候得者平人持に相成候。兎角公儀の御格に而事濟申候。安藝守樣などに茂其通に而、上田主水・淺野甲斐抔の家、譜代之重き家々は大名分にて、御仕置之筋は搆ひ不申候。谷崎淸兵衞・調子鬪書抔の勤方宜もの、段々御取立、御家老被仰付候。其子不相應之時は又平組に成申候。御尤之被遊樣に候。御當家之儀も以來其格に可被遊与被思召、此度御家老役の數御增し被成候旨、其以後も度々御意御座候。其時分年寄中にも御前へ被爲召、右之通思召被仰渡も御座候樣に奉存候得ども、其儀は慥に覺不申候事。

〔松雲公御夜話追加〕

一、人持に者成安く、組頭には難成候。子細は人持には組の差引等無之、組頭は御譜代歷々の侍數多御預け被成、戰場にては采幣次第討死も仕事に候間、別而大切之役儀に候由、折節御意御座候事。

〔松雲公御夜話追加〕

一、人持中等御禮列帳、いづれの時に御座候哉、御直印に而被仰出候御事御座候樣に覺申候。

先年入江八郎右衞門御小將横目之節、家督などの御禮之次第しらべ候て相伺ひ候へば、御禮之次第は大切成ものに候。別而念を入べき事之由。其外にも度々被仰出候事。

〔松雲公御夜話〕

一、御先代より相公様御入國以後迄も、御小將頭其次御馬廻頭与次第仕候。御小將頭は組は重く候得ども、御馬の廻に相備へ申組に候故、大方御自身之御下知に而、組頭輕く候。御馬廻頭は御先手に候故、組頭之下知次第の事に候。依之御小將頭より重く候。然共急に御改難被成、漸に彼是与被遊、延寶五年の頃か只今之通に御改め被遊候旨、毎度御意に御座候事。

〔松雲公御夜話追加〕

一、公儀にては御家之組頭を番頭と申、番頭を組頭と申候。此段も如何之子細候哉、御得心難被遊候、一組之頭に候故組頭と申、又組中勤番之差引等仕候故番頭与申事に候得者、御家之名目相増申様に被思召候。太平記などに大番頭と申事有之候。夫よりおこり申儀に候哉との御意の事。

〔松雲公御夜話追加〕

一、元祿十年五月私ども初而御表小將に被仰付候。其節、御大小將等より罷出候者、相應之衣類等所持可仕候。御馬廻・組外抔より被仰付候人々は、衣類別而可致不足候間、着用可仕旨

にて曝布二疋・奥嶋一端充被下置候。細かに御心を附させられ候御儀、何茂難有がり申候。

〔松雲公御夜話〕

一、御歩之者も、御馬の前に御供いたし申に付、頭も大方歩立に而無之候へば難成事に候。御先代は人持組之内當分支配仕候。相公様御若年之時分御歩頭被仰付候節、御歩は足輕より重く候間、物頭の上に而可有之候旨、年寄中抔不詮議に而唯今之通に成申候。一向ケ様に而は無之候。物頭は足輕召連御先に相備、一手之大將に候故、往古より足輕大將とも申事に候。左候得ば御歩頭よりは各別重き事に候。公儀なども物頭よりは御歩頭輕候間、折も有之候はゞ御改め被爲遊度旨、度々御意に御座候。近年御徒頭不被仰付、御使番の支配に被仰付置候儀、右之思召に而も御座候哉与奉存候事。

〔松雲公御夜話〕

一、御歩者を御徒者与相調指上申候。御歩頭などより茂其通に候。徒者与調候而は、いたづら者与讀可申候。戰場にも歩に而御供いたし候者故、歩者与調不申候はでは埒明不申儀に候由、毎度御意御座候。

〔松雲公御夜話〕

一、惣而足輕者の作法近年別而手ぬるく成申候。都而足輕の儀は、戰場にて鍬或は手木など

を御普請方第一に相勤申事候故、常々其ならはし無之候而は、御用に相立がたく候。依之近年迄川除の石を持、又は宮腰より御材木抔をもち、幷御城中の雪抔も除申候。近年足輕數減じ、其上御姫樣方御用彼是にひけ、御人少に成候故、左樣之事に召仕可申餘分無之、おのつから相止、足輕は左樣之普請不仕物の樣に、不案内の御役人共覺罷在申躰に候。沙汰の限なる事に候。近年の內急度御改め可被遊旨、度々御意御座候。

〔松雲公御夜話〕

一、江戸・金澤共に御作事方御入用別而過分に候。御改被遊候筈に候得共、不被得御手透候に付御延引に被遊候。足輕等茂割場より日掛事請取候而は、中々不參届事に候。御作事奉行付二・三・四十人も被召抱、江戸へも相應に爲相詰、其役々等申付、勤方不宜者は、奉行心得として早速に扶持をも放申樣に不仕候而は難成事に候。ヶ樣之儀彼是御極被遊度、餘程御障入候故御延引に被爲成候由、度々御意也。

〔松雲公御夜話追加〕

一、公儀にては、諸大名方御領知御判物幷諸旗本等之御朱印、御代替の度ごとに出申候、御家にては其人々之替りに御判御印物被下置候。公儀の御樣子一圓御合點參り不申候。御家の御格相增申躰と被思召候由、每度御意御座候事。

〔松雲公御夜話追加〕

一、年寄中初諸頭・諸役人より上り候書付、箱或は封ものゝ印追々御集め被遊、印鑑仰付置れ、度々に封印御改め被遊候事。

〔松雲公御夜話〕

一、御封付御文匣・同御服紗包等、早速夫々御役人中へ可指遣旨被仰出候時分、石川・河北兩御門へ御近習頭共證文度々に遣候故、殊の外致遲々候。是以後、頭共之印有之札に而指出候はゞ、早速御用も相調可然旨頭共致僉議、其段大野木舍人より相窺候所、右兩御門御定は如何に哉与御尋に付、則御定書取寄入御覽候所、御定書には度々頭共證文を以可相通旨有之候。何も詮議通札に仕候はゞ、手廻には可宜候得ども、御城門之儀假初に茂御大切之事、殊に御印章之御定書をもどき申詮議の儀、一圓難被聞召屆候。左樣に候而は、御定書も不被改候半では埒明不申候。手廻悪鋪とも、古來之通に可仕旨被仰出候事。

〔松雲公御夜話〕

一、御中屋敷御類燒に付、何も御上屋敷に打込、以之外御長屋指つまり、南御門續・東御門續の御長屋、暑氣の時分別而何れも難儀仕候間、脇々の通に高窓被仰付候樣に御座候はゞ可然旨、何も致僉議松尾縫殿を以相伺候處、御先代より脇々と者違、外通に窓無之候。御先代の

御中屋敷は駒込邸

思召如何之事に候哉、相知不申儀候間、只今まで被仰付候儀は難被爲成候旨被仰出候。此外每度萬端之儀に付、御先代之御格を相用候樣被仰出候御事ども御座候得ども、右等仕置不申候。

〔松雲公御夜話〕

一、諸役人誓紙之儀に付、見屆申もの其人へ讀聞せ候うへ、爲致判形候段、達御聽候處、誓紙は其人々より相調指出申事に候。然共夫に而は文盲成もの抔埒明不申候に付、此方より文言は相調申事に候。左候へば見屆申者へ、其人より讀候而、如斯に御座候段相斷申事に候。何も心得不宜候旨、被仰出御座候。

〔松雲公御夜話〕

一、諸役人勤方之儀、年寄中申渡候由申立候而も一圓申譯には成間敷候。品により急度閉門可被仰付候。不依何事、年寄中申渡候而も、度々得御內意可申候。其上に而御指圖次第に可相心得候由、每度被仰出候。御役人中別而勤能儀、難有がり申候事。

〔松雲公御夜話〕

一、御家中の面々段々勝手惡鋪成申事も、何も二代三代宛相勤、御扶持を被放、或は免を御借用なごゝ申儀無之候故、何れもあまへ申候間ヶ樣に成申候。折々不被仰候而は、何とも成

不申候。結構計にては惣樣縮り不申候。他國に而は中々ヶ樣には無之候。不存寄扶持抔被放、又は所替等有之候故、人々勝手方其外萬端相つゝしみ、貯等も所持、武藝抔も相嗜、常々心懸申候。御家中之者共之儀者、何れもあまへもたれかゝり候樣に有之段、不忠之極之事に御座候由、度々御意御座候。

〔松雲公御夜話追加〕

一、侍は祿第一に候。官は重候而も、肝要の用に立難き事に候よし、折々御意御座候。

〔松雲公御夜話追加〕

一、御奧向女中の儀を御廣式女中と、御近習頭ども抔、表向之者は猶更左樣に心得申躰に候。御廣式と申は、御鎖口より外の儀に候。加樣の心得違にては、何と御いそがはしき時など、御廣式へ罷越可申御意之節、御内證へも入可申候。不都合の事に候由、度々御意御座候。

〔松雲公御夜話追加〕

一、元祿十五年御成以後、別而御用御差支に付、御勘略之儀被仰出、諸事御省略之處、年寄中幷會所御役人共より、萬端嚴重に勘辨之儀及示談候得共、御拂方等必至とつかへ申候。此上は江戸御扶持方の割を減じ中外無御座候よし相伺候處、年寄共のくせに而、良も致し候得者御扶持方減少、且又御かゝり銀と申候。輕き者共江戸へ相詰候得者、勝手の潤色に茂成申と

存候へば、同御奉公も各別進み申候。進候而勤申と、いかゞ仕勤候とは各別違申儀に候之由、度々御意御座候。

一、右之通御儉約に付、御臺所方御料理之事、一汁一菜に可仕哉之由、坂野帶刀左衞門より相伺候處、老人も有之、又人により禁食など有之ものに候。其時一菜にては給可申樣無之候。か樣之事急度可被仰付ための御勘略に候由。御料理の外の儀に付而も、御儉約は可被遊筋を急度可被仰付ための儀、無益幷人々おごり花れいを指止申を儉約と申事に御座候由、每度御意之事。

一、右のごとく段々無益を差詰候樣に被仰出候得共、末々に至まで被下物之儀勿論、御武具方は者一向御手入不申樣、其節御武具方御用相勤候面々物がたり、度々承知仕候。

〔松雲公御夜話追加〕

一、御道中御供之面々・家來等、無益の品々隨分相省可申旨、度々被仰出候。乍然武具之儀者各別に候間、手柄次第相應に持せ可申事に候由、折々御意拜聽仕候。

〔松雲公御夜話〕

一、近代女中之衣服以之外丁寧に成、光りかゞやき、菩薩のごとくに候。何より以て無益の事に候。先御代茂急度被仰出、女中衣服のぬひ金糸など堅御停止に成、人々有來候小袖の縫

前田綱紀の麻疹は寶永五年十月二日條參照 松姫入輿は同年十一月十八日

金糸何茂はござ申候得共、又立歸元の如くに成申候。如何之事に候哉、御制法相立不申儀御不審に被思召候由、度々御意被遊候。

〔松雲公御夜話追加〕

一、御麻疹御煩已後、御脱肛の御痛つよく御難儀被爲遊候。藥師寺宗仙院御藥被差上候。松姫君樣御入輿の御時節にて、御上屋敷御作事最中ゆゑ、御中屋敷に御移、當分御大書院之先御小座敷に被成御座候。御樂屋の内御疊をおこし參候樣に御意にて、古き御疊を御座の下に御しかせ被遊候。宗仙院其御樣子を被伺、御疊堅く不宜候、早速やはらか成御疊可申付旨、御側に居申者共に御申聞候。其時分私御側に罷在承り、宗仙院退出以後其段奉伺候處、其分に仕置可申旨御意被遊候。又三・四日過、御見廻未御疊改り不申樣子を見被申、何とて延引仕候哉、早速可申付由被申候。二・三度其御樣子を見被申、其以後玉井勘解由まで手紙を以、高麗緣のやはらか成疊御差越、此方にて申付候、御敷替被遊候樣に御近習の者へ可相達旨申來。入御覽候處、御座の間脇に御寄懸置、御敷不被遊候。翌日か宗仙院御見廻候得者、被入御念儀に候由御挨拶有之候處、早速御敷替候樣に被申上候。御退出之後其疊御廣式に遣し、寵姫樣御用に相立候樣に可仕旨被仰出、駒井與二兵衞等へ御渡し被遊候。其節以之外寒氣つよく御座候處、餘り御召物麁相に見え候由被申上候を、富永數馬相詰有之致承知候よし。都而常

々ハ御生質、至而御輕被成御座、末々迷惑仕候儀。民間迄でも御惠深く、今ハ非人小屋被仰付候節など、末々ハ費用を考、如何有御座哉与申上候面々も有之候へども、其御構無之被仰付候よし承及申候。難有思召に被成御座候事。

非人小屋は寛文十年六月廿二日の條參照

〔松雲公御夜話追加〕

一、太平記理盡抄之口傳小原惣左衛門家に相傳へ、微妙院様以來御代々被聞召候。陽廣院様専被聞召、其節の理盡抄于今御文庫に在之、是は右御代被仰付候御本の由御意にて、拜見仕候。松雲院様に者二代目の小原惣左衛門御前に罷出、度々口談、散木ハ様成ものハ、由形ハ様成もの數多文庫ハ蓋に入持出、備立・城構等ハ様子を仕り入御覽申候由、度々御意御座候。其以後御好にて御草案御出し被遊、重々口傳の趣幷戰場の圖等別に書立、八冊に編候而上之申候。只今小原家に扣有之候。理盡抄口傳は大切之事に候間、外傳受無用に可仕旨御親翰を以被仰出、御意之外當時一向素讀は各別、口傳之儀傳受不仕候。其節最早相殘候品無之段被聞召候上にて、御備委細に申上、大星の傳受まで不殘被聞召候。且又甲州流軍法は、關屋新兵當家之軍法とは違候由御意御座候旨承及申候。如何様之深き御意味御座候哉、御手の内相知不申、御大將之御一言御大切之御儀与何も奉感候事。

散木は算木

〔松雲公御夜話追加〕

一、松雲院樣御入國之砌、奥村伊豫宅に被爲成候節、中黑道隨・佐々木道休など相詰候由。書院二の間床に、元祖奥村助右衞門度々高名之時分着用之甲を出し置申候。其邊に御立寄御覽被遊、是はいづれの兜に候哉与御意之處、右相詰申面々の內、兼て承り置候事ゆゑ、元祖助右衞門度々高名之時着用の兜にて御座候。乍恐御覽に入申度由にて出し置候旨申上候。つくづく御覽被遊、其時之樣子只今見る樣なと御意被遊候。差當面白き御挨拶に候旨、古き人々何も咄し感じ奉ること。富永全昌咄には、御入國之年、年寄中へ段々御成被遊候。奥村故壹岐宅へ被爲成候節、御成書院の御次の床に、先祖因幡大阪之時着用之兜、鐵炮之玉跡二つ有之を飾り置申候。赤尾しやうすなどにも候哉、御相伴之者申上候へば、側に被爲入御覽被遊、其時を今見るやうなと御意之よし。小瀬氏話。

〔松雲公御夜話〕

一、御入國以後小松邊御巡見の節、九里夕庵被召連、淺井繩手御迫合の樣子、松平久兵衞鑓を合候場所等の事、委細被聞召候旨、度々御意に御座候。

〔松雲公御夜話追加〕

一、二念佛之御刀兼元之由。此御刀は御入國之砌小松邊御順見のため被爲入候處、前田三左衞門御城に其節罷在、孫四郎樣能州に初而御入國之節、道之側に道心坊主罷在候處、作法宜しからずや、駕籠の脇御供の衆にあれ切れと被仰、ぬき打に仕候處、念佛二篇となへ二つに成申候。能くきれ申に付、孫四郎樣御差料になり、二念佛と異名を申由にて、三左衞門より獻上の旨なり。に御懸被遊候御鍔は、角木瓜、厚き御鍔にて、四方にすかし有之候。至而古く見事成御鍔御座候。是は闕屋雲八御側に相勤御小將之由。刀に懸置秘藏仕候。度々差上候樣に被仰出候得共、外に相應之鍔所持不仕旨にて上不申候。或時御用相濟退出之時分、

御入國は前田利家

雲八とあるは雲八郎

部屋に龍越刀を見候得者無之、外之刀一腰有之候。不審に存御歩横目に尋候得者、如何之訳に御座候哉、先刻此御刀御前より御出し被遊、雲八刀と取替可差上由被仰出、雲八刀ハ鍔を御はづし被遊、宿へ持せ遣し可申旨被仰出、先程持せ遣し申候。左様に可相心得旨申聞候。雲八驚き、其趣支配之面々などへも申入、無是非被下置候刀を帶し罷歸候旨。右刀は百貫計の折紙有之物之由噂承及申候。

〔松雲公御夜話追加〕

一、御家中一統ゐのめ前立物は、先年冬中寒氣強時節燒火被仰付、爐邊に被成御座候節、灰のうへに御火ばしにてひたと其かたちを被遊、或時ふと宜しく出來に付、灰の上へ蠟を流しかけ、大かたにいでき申を、少々充御直しにて出來仕候由御意之事。

〔松雲公御夜話追加〕

一、或時御意に、御家中之面々武具不足のものも萬一可有之哉。毎歲頭々より差上候人馬數之帳面に、相記差上候樣に被遊度御事に候得共、俄にも被仰出難く御見合、一日々々と御延引之旨御意拜聽仕候。

〔松雲公御夜話追加〕

一、江戶廻りにて供の人數、身代相應に減少候樣に、近年度々被仰出候得共、御前に者御構

辛未は癸未即ち元祿十六年の誤なるべし

ひなく、前々之通に御座候。御前など御相應と有之候而者、萬を以御はかり不被遊候而者難成事と被仰出候よし、成瀨彈正咄承申候。

〔松雲公御夜話追加〕

一、先年吉田家村之御弓二張御献上被遊候由。其節御目錄に、一、御弓二張与有之候儀、如何可有御座哉之旨、書札之法式色々御吟味在之候得ども埒明不申候に付、御好に而御弓一張・御張替と被遊候由。俗に二張の弓を引と申儀有之候故、右之通り御目錄に御調させ被遊候御樣子、御心付之儀乍恐奉感候御事之旨、誰彼之物語承候に付記置申候。

〔松雲公御夜話追加〕

一、辛未の年御上屋鋪御類燒之時分、不殘御屋鋪御類燒。其節上野も危く候故、御人數可被指出哉之由御老中ゟ御伺ひ、其通りとの御事にて、御人數も出申候。御前にも御見廻り被遊候。夜五つ半頃出火、御庭ゟ御馬上に而御出被遊、明け方に御屋敷ゟ被爲入候節、追分口御門に火移り、御通り被遊難く候所、夫より二・三十間手前、公儀與力衆屋敷境御築地塀崩れ申所有之（其年十一月廿二日夜大地震の節くづれ、未御修復無之時分なり。）候處、其上ゟ御馬御乘あげ被遊、崩れ口の上にて又二・三間御門の方ゟ召、其上より御馬を御とばせ被遊候。危き御事に候處、奇妙成御事に候由、其時御供之御表小將中物語に而承り申候。私儀御與小將之節、騎馬御供仕候樣に被仰付、しばら

く御供仕候處、あなたこなた御乘廻し被遊、上野へ被爲入候節より御供はづれ、御先に御中屋敷へ罷越、右之節は御供に有合不申候。

〔松雲公御夜話追加〕

一、生駒右近・馬淵友之進など御相手にて、度々馬場にて御馬責させられ候。一はいの乘い中に、向より乘來り候馬に御乘移り、又御前之御馬に右近・友之進など乘移り、毎度御乘替被遊候由、折々御意御座候事。

〔松雲公御夜話追加〕

一、寶永之頃正月四日雪有之時にて、越景の御馬を玉泉院樣丸に牽立可申旨被仰出、それ迄御步行にて御出被遊、右御丸厩木坂の上にて被爲召候處、此御馬常々少乘すまい仕、其上雪中と申さへ候て、いまだ御鞍に御召居不被遊以前、御馬ふと立あがり申に付、ともの方へ御おり落被遊候。私儀能時分ともの方に罷在、私むねの上へ御落懸りに付いだき奉り候。其節御脇指、御さや共に向へ落申候。少も御痛不被遊、其儘御召上り、金谷馬場にて數遍被爲召候。其外右御馬場にて、度々御馬上にて御弓も被遊候。御老年に被爲成候而も、別而御達者成御事に被成御座候。

〔松雲公御夜話追加〕

私御奥小將の時分、同苗市郎左衞門右御番頭の節咄候は、其身御大小將にて、或時御道中歩御供仕候。其砌寢覺と申御馬、至て上かんにて、此御馬に被爲召候へば何れも迷惑仕候。板ケ端川高水にて渡りかね候處、右御馬にて御越被遊候。御供之面々何も帶の邊を越申水、石あらく瀨はやく候て中々渡りがたく、流れ可申と度々仕候處、無是非御馬之尾に取付、夫を力にいたしつゞき申候。右御馬も、誰かれ尾にとり付申故よほど流れ申候。危き事に候旨咄申候。其以後或時私ゟ御意御座候者、先年御參府之時分、右の川高水にて中々大ていの馬にては難成思召、寢覺に被爲召、大槩の川は一文字に渡り申候。去ども水つよく候故、御日當よりは二・三町餘も流され、岸ゟ御乘付候へば御上り口惡敷、又上の方ゟ御乘あげ被遊候。甚危き御事之由御意被遊候。市郎左衞門咄之通、御小將中尾に取付候段は知し召されず、水强き故と被思召候御樣子に御座候。市郎左衞門申候趣を申上候儀も如何敷、御請に迷惑仕候。

同苗は中村氏

〔松雲公御夜話追加〕

一、或時御意に、天下一統御靜謐の世に候得ども、萬一また太平記に在之、鹽谷判官を山名父子追懸申樣成事有間鋪儀にも無之候。左樣之節は馬上にて無之ては用に立不申候。一人にても馬持多く御供に被召連度事に候。不足之分は又御料簡も被成御事に候よし御意被遊候。

〔松雲公御夜話追加〕

一馬場にて御馬召され候節、何時も御草履を召申候。常に御草履に而召させられず候ては、火事幷御他出等之時分召に、久々かくなどきゝ兼申もいに候由、折々御意御座候。

〔松雲公御夜話追加〕

一、享保初之頃、國史實錄林家に而出來、本朝通鑑の拔書のよし。賣物に出申候、御書物奉行中より入御覽候處、以之外價重躰に候故、先可相返旨被仰出候。其已後一兩年間有之、私方へ持參。其節は各別輕罷成、指詰金五兩に申に付、卽奉入御覽候處、寫樣も麁抹に相見え申候、其上林家よりも御借用候得者、何時にても相調申候、御用に無之旨御意に御座候。左候はゞ私求置可申与奉存候旨申上候處、勝手次第に可仕由被仰出候。其時御側に千助・津太夫罷在申候。それに御向ひ被遊、典膳方にて右料物に求候へば、御前に而者金五千兩に當り申候。當時此員數にて御書物被召上候はゞ、家老共能とは申間敷旨御意に而、御笑ひ被遊候。私も未御側に罷在拜聽仕候。

〔松雲公御夜話追加〕

一、水戸西山黄門樣とは御書物之儀に付度々御取遣有之、御互には少々御異論などもも御座候よし。御逝去之以後東文選書寫被仰付、戸田靱負奉にて仕立被仰付、外題は佐々木萬次郎殿御次にて判木に被仰付、出來仕り、神庫に被相納候樣にとの御事にて、水戸樣々被進之候。そ

辛丑は六年

の以後御意御候は、黄門樣右の書達而御所望候得ども、何哉覽之御あぢはひ御座候て不被遣候。御存生の中御大望之儀ゆゑ、寫被仰付被遣之旨、御意之趣拜聽仕候。

〔松雲公御夜話追加〕

一、享保辛丑七月廿五日小瀨復庵新井筑後守殿ゟ罷越承候由。翌廿六日私まで申聞候者、東福寺搭頭不二菴に丹府元龜有之、見申候。大切成書に候。文昭公達上聞候處、御文庫に無之候得共、寺の什物御所望御遠慮候由と。御家に唐八一筆の元龜有之旨、天下の名物、御文庫の書數多可有御座候得共、此一部と對應可仕と被申由申に付、卽達御聽候處、元龜は陽廣院樣御代より一部有之。寫本は第一手跡も見事に候間、當御代御求置被遊候。都合二部有之候。左樣之ものとは不被思召候。御文庫にも無之候はゞ、文昭公御直々被仰出候へば可被差上ものをと、御殘念に思召候由、私迄御意之事。

〔松雲公御夜話追加〕

一、少學文仕候得者、早詩作仕候。御前にも少御心懸被遊候へども、迚も音律に叶ひ不申候ゆゑ、其以後は御心にも不被思召候由、或時御意御座候。

〔松雲公御夜話追加〕

一、或時御仕舞御稽古に付、寶生將監罷越候處、花筐之謠に、寶生流にはくんしんのゑらび

に出されてこすみて諸申候。繼體之君無之故、群臣いゑらびには如何之儀に候哉と御尋被遊候處、御意の如くに御座候。左樣之儀に者曾て心付も御座なく、前々よりすみて諸申候。無吟味の事に奉存候よし申上候。其節私有合拜聽仕候。

〔松雲公御夜話追加〕

一、右將監或時御用人まで申達候者、此方樣に而御能被仰付候節、大御門の脇に猿樂御門と申名目にて、役者ども出入仕候。私共別而迷惑仕候。何とぞ外之名目に被仰付候樣仕度願候よし申聞候に付、則達御聽候處、右願には御貪着なく、實生大夫なども公儀猿樂配當米は請取候哉与御尋に付、御用人其段相尋候處、成程右配當米頂戴仕候旨申上候。其處に而、左候得者猿樂に相極申候。御門の名目相改らるゝに不及事に候由被仰出、實生もこまり候而罷歸候旨、其節之御用人噺に而承り申候。

〔松雲公御夜話追加〕

一、度々御能・御仕舞の御稽古御座候時分、御意被遊候は、至而御數奇と申にては無之候得共、今程御鷹野抔に御出之儀不被爲成、其上御足に裏に御痛被成御座候に付、御行步等ひしと不被遊、御めぐり可被遊樣無之に付、責ての御行步に可然と御稽古被成候由。且又暑氣の節御ふさがり被遊候處、御能にて御汗御發し候得者、其跡御快被成御座候旨御意御座候。

〔松雲公御夜話追加〕

一、方々より庭之花度々入御覽候處、是は一段茶の湯に茂成可申候。又は花見事に候へども、茶の湯には生申事成間敷抔と御批判被遊候。茶湯之儀も、一向御捨は不被遊御樣子に御座被成候事。

〔松雲公御夜話追加〕

一、御中屋鋪御樂屋續き御居間之邊に、三十間計之馬場被仰付候。其邊の御庭、村上源五太夫に被仰付候處、御意に應じ不申。源五太夫不物數寄に候。徒然草に書申ごとく、木だちものふりて、わざとならぬに可仕旨被仰出候。惣而御物數寄之御樣子、右之通に被成御座候御事。

〔松雲公御夜話追加〕

一、朝夕御膳之時分、折々御飯・御汁など不出來にて難被召上由被仰出、二色三色仕立直し指上候而も御意に入不申、御臺所惣而相詰候者共へ被下之候御飯・御汁差上候樣に被仰出、御試被遊、ヶ樣之仕立惡敷ものを歷々之者共へ給させ候儀沙汰の限りに候。御料理人共手をつかね罷在、試も不仕故に候。急度申付候樣に、御臺所奉行・御膳奉行へも度々被仰出候。その上御用相勤候もの共詰延番も、御料理も給能と存候へば、勤申御用も苦に成不申、能相勤申筈

に候。不調法の儀に候由御意御座候。又時により、是程に候得者まヽ宜候由に而、被召上候御事も御座候。時により御廣式之御賄方御飯等、俄に御取寄御試被遊候事も御座候。毎度御膳方御料理の仕立御好有之儀を、不存ものは御いごり被遊候様にまで心得候者も見え申候。御近習之者どもは御家來中に被下候品、念を入候様にとの御内意、難有儀と何茂奉感候。又御近習之面々に御菓子等被下候節、御膳奉行共盛方・膳部など念を入可申候。必以麁抹い爲躰仕間鋪候由度々被仰出、時により其膳部取而參候様に坊主小頭共に被仰付、入御覽、ヶ様之つかみ入申様成盛方等に而、御近習頭共などへ何と被下候儀可被爲成候哉、一向不被下方相増申候。不調法の儀に候由、度々被仰出御座候事。

〔松雲公御夜話追加〕

一、松雲院様先年御中年の時分御國より新身の御道具御取寄、御指料にも可被仰付御様子に而、或時御覽被遊、是は殊之外見事成儀、能きれ可申などゝ御意之御道具有之、御機嫌も宜敷候處、笠間半七御側に罷在、頓而殺害人御座候時分、御慰に御試し可被遊哉与申上候處、以之外御機嫌惡御立腹被遊、其方は我等を不仁の者と存候哉、斬罪は夫々の罪に依而申付る儀に候。慰わざにては無之候。刀・脇刺を試候はヽ、人々覺の爲致す事に候。夫を慰とは如何之不仁成儀申候哉と、散々御叱被遊候。御仁徳自然与御備り被遊候故、重々御立腹被遊候事を皆々奉感候。

奥村瀨兵衛御前に罷在候由、卽瀨兵衛咄之、小瀨復庵承候由、富永全呂咄承り申候。私承候とは少々趣違候へども、此咄の方慥に付記置申候。

〔松雲公御夜話追加〕

一、先年の事なるに、淸水谷と云て、加州松任之脇の村に大罪者有。在宿之者を五・六人殺由。告之樣子追而可承合。此者籠舍之内大切に煩、既に死すべきも難計程なるに、何之被仰出も無之、其内來月は、御法事有之月に罷成候。御法事有之月には、御刑法不被行御法也。來々月迄延引ならば死すべきもしれず。此者急度罪科に不行しては不叶事と、公事場奉行中詮議極て、早速罪科に可被仰付哉之旨奉伺候處、御書出しを以被仰出候は、委細不存、咄の趣故相違も有之候哉。何茂申上候趣御合點參不申候。奉行中之内にて學問をも仕、あなたの事をも存たる者可有之与思召候。惣而漢などには、死罪に行ひ、其後機物に上て科・姓名を記札を立て、尸をさらし申事に候。今此者大切に煩申とて、死せざる内にと急申事、不仁之事、女子の心と申者なり。此者火罪・死罪に被行候ても、殺されたる者の爲に成候事にも無之候得者、今若病死いたし候はゞ鹽詰にいたし、不苦月にいたりさらし候へば事濟申候。何茂申上候趣御合點不參旨被仰出候由、小瀨復庵語也。公事場奉行慥成咄之由、富永覺書寫置申候。

〔松雲公御夜話〕

一、金澤御城にて、何やらんの事に付、一藝に達申ものは萬事にわたり申之由もの有之候。

年然かつて埒明不申儀に候。假令ば武村九郎太夫今程の世に稀成程の馬乘に候得共、手跡は山本源右衞門十ヶ一も成不申候。又源右衞門能物書に候得共、馬に乘申事九郎太夫が十ヶ一も成不申候。是にて心得可申儀之由、是又長谷川佐雲を以被仰出候事。

〔松雲公御夜話〕

一、或時私儀御前へ罷出候所、彼是御意御座候御序に、日本にて臣下の内聖賢の沙汰有之人は誰々に候哉、世上には如何申候哉不及承哉之旨御尋に付、慥成儀は不奉存候得共、聖德太子幷小松の内府、其外楠正成抔は賢人共可申哉之旨、何れも申候旨御請に申上候處、正成抔は賢人とも可申候、聖德太子の儀は、天下の政事色々式條を被相極候はさる事に候得共、佛法を信仰に而ひろめられ候に付、次第に王法おとろへ申を以御覽被遊候へば、不忠至極中々賢人の沙汰は有之間敷候哉、御前には曾而御合點參り不申旨御意也。

〔政隣記〕

松雲公御側相勤候藤田內藏介、或時御咄に、淺野內匠頭は僅に身代五萬石なり。夫さへ仇を報ずる士四十七人あり。身抔若ヶ樣の事あらば、其方共を初め國中大方は如斯なるべしと御意被成ければ、內藏助御答には、左樣に相見え申物に候得共、其事御座候後にならで者相知れ不申物と被申上ければ、御うなづき被遊けるとも也。

當御代は前田吉德

松姫は前田吉德夫人にして入輿は寶永五年十一月十八日

〔松雲公御夜話追加〕

一、鷹の鳥をゑがらと申儀は、きたなき言葉に候旨、毎度御意御座候。御家中より折々鷹の鳥獻上之時分、餌がらの鳥差上よし申候。自分飼鷹之餌にいたし、其からを上へ差上候と申儀者、猶更不都合の事に候。鷹の鳥差上候と可申事に候由御意之事。

〔松雲公御夜話追加〕

一、御當代奥村伊豫守御城代之時分、御城中猥に杖を用ひ申樣子に候。向後杖之儀、度々御城まで相達申上用ひ候樣にとの事に成申候。其時分寺西寒江申候者、松雲院樣御代より杖を用ひ申もの多く罷成候に付、寒江御横目之節奉得御内意候處、御前にも御存被遊候。輕き者共にても、杖を用ひ候ゆゑ毎度御城ゐも罷出、相勤申人々有之候。一僕をも召連不申もの共は、途中杖を用ひ、御城門に成杖を捨て申外は有間鋪候間、御門外に杖多くすたり有之、却而見苦鋪可有之候。先其分に可仕置旨御内意に御座候。乍恐御仁惠御尤之御事に御座候与咄申候。

〔松雲公御夜話追加〕

一、松姫君樣御入輿前、御守殿御作事御急之時分、御庭の内にさゞい山と申高き山有之候。明日中に崩し候やうに三十人頭ゐ被仰之候處、中々左樣には難成旨申上候。手ぬるき事を申

候、御前にも御出被遊、一日之內に御崩させ御見せ可被遊由被仰出、翌日朝五半より御馬上にて御出被遊、三十人組其外足輕・小者等千人餘り懸り候而、終日御下知にて、其日七時過にはすきと平地に成申候。其時二・三段に御人數取廻し、上より切落し、下より切崩し、植木などに構ひなくこぼれ落申候。鍬・すきなど危き事に御座候、あやまちいたさせ申間敷よし御下知御座候。私共も御供に罷出有之、終日御使等被仰付候。手ぬるき儀は、事之外度々御きらひ被遊候。

〔松雲公御夜話追加〕

一、御召下り御服・御上下等は、御近習・御步橫目・御細工人等へ被下、御小袖などは多く御居間方坊主どもへ被下之候。侍分以上之者に御召ふるしの品被下候儀、私御近習に罷出相勤申內廿八年に候處、見請不申候。御納戸拂などゝて拜領之衆は、御家中より獻上、又は御召に出來候而も、色相等御意に相叶不申、數多に成候節は被下候。是は何茂新敷品に御座候。侍分以上は何時も端もの・卷物等、仕立不申御上下等被下候事。

〔松雲公御夜話追加〕

一、池田玄眞儀、足輕以下輕き者ども療治又は藥等遣し、禮物饋候而も受納無之由前々承及、奇特成事と存罷在候に付、或夜何ぞ御物語など御座候御序に、右之趣申上候處、無欲成儀に

候。乍然また人により遠慮いたし、療治難頼差支申ものも可有之候哉。左候得者却て輕きものゝ爲に成申とも申がたき事之由御意御座候。

〔松雲公御夜話追加〕

一、度々御歸城の節、早速御行水御裝束を改られ、先御寺御參詣、次に年寄中御前に被召出、御在府中御懇之御樣子等御普爲聽被仰出候。御姬樣方には御待かね被遊、御鎖口御杉戸御たゝかせ抔被遊候へども、右之御樣子相濟不申內は、御明させ被遊候事無御座候。御行狀諸事正敷御事御座候。

〔松雲公御夜話追加〕

一、或時上野へ御參詣御歸舘被遊御意に、不忍の池蓮の浮葉出申候。去共是はくさり候て畢竟立葉に成不申、おそく出申葉するまでこたへ申候。馬なども三歲より早用に立申樣に成候故、數十年はこたへ不申候。人は廿年も立不申候半而者、用に不立候ゆゑ、其以後數十年こたへ申候。惣而之儀はやきは見事成樣に候得共、ねり申さぬ儀は跡よりほつれ候樣に成申候。蓮の浮葉にて合點可仕旨御意之事。

〔松雲公御夜話追加〕

一、先年淺野川橋懸直り申節、無用之處長く候間、跡先能程に差詰可申哉之由伺ひ有之候處、

成程尤なる心付に候へども、輕きもの伊勢參宮、また乞食躰之者、右橋之下にやどり罷在候由兼て被及聞召候。左候得者、又ヶ樣之無益之所も少は有之儀宜しくと被思召候間、先其分に可仕置旨被仰出候旨、由比五郎左衞門噺承り申候。御仁德御厚き御事と記置申候。

〔松雲公御夜話追加〕

中屋敷は駒込邸

一、先年御中屋敷に而廣德寺哉覽御招請之節、御樂屋續之御居間に被成御座候節、御勝手までで御出被遊候處、御扇子御持參不被遊候付、取て參り候樣に御側之者に被仰付候。餘程遠く候故暫間有之、まだかまだかと御尋被遊候。前田修理其邊に罷在、急御用と存候哉、自分之扇子を差上候處、御披き御覽被遊、是は御前之御扇子にて無之旨御意にて、修理ひざにもおたし申程に御投被遊候。私儀も御近習に罷在、氣の毒なる儀と汗出申候。左樣之所下より計ひ申儀、いつも御氣前に相叶不申御樣子に被成御座候御事。

〔松雲公御夜話追加〕

一、寒氣等御尋御奉書御禮に被指上候御使者、罷歸候節は早速表御居間に御出被遊、先上々樣御機嫌之御樣躰承知罷歸候哉と、委細御尋被遊候。いつも御尋有之故、何茂聞番等委敷承り罷歸、其段言上等御座候。其以後御一門樣方御安否、幷道中筋などの儀具さに被聞召、寒氣之時分遠方骨折申候、先罷歸休息可仕旨御直に御意有之。其以後御序次第、御表に而御使

歸之御禮被仰付候。頭分以上御使歸之節は、毎度右之通に御座なされ候。御丁寧成儀与何も奉感候。

〔富永數馬覺書〕

一、御櫛役、以前は辻市右衛門（七百石此外も御座候哉不奉存候。）後は稻葉宮兵衛（稻葉市郎左衛門子に而新番と哉覽。）被召出、後新知被下、寶永之頃は御表小將に而富田主税・富永數馬等、同部屋へ相詰罷在候。御櫛茂其外も、御用被仰付候儀は無御座候。毎日四時頃罷出候迄にて、晝過罷歸申候。御櫛は吉田嘉春相勤候。若は中村喜内勤申候。右は元祿之末、寶永年中より末之儀に御座候。其以前は又御樣子違御座候与承申候。

〔松雲公御夜話〕

一、二十年計以前迄は、於江戸も毎日御肩衣被爲召、四時前後より表御居間へ御出被遊、御用之品被聞召、年寄中なども毎日罷出申候。御客衆御出候得者其儘御出御對面、又は御用に御取込候得ば暫御遲き事も御座候得ども、先御使抔御出し、二・三輩御揃候而御出之事も御座候。八つ時以後も、時により御用多き節者、其儘被成御座御膳も上り申候。暮六時より五時過迄、又表御居間に御出被遊候。金澤に而もおもて御居間へ御出被遊候而は、御直に御用之品被聞召候。近年御持病御勝れ不被遊候に付、表御居間へ御出之儀次第に無御座候事。

本文は前條と嘗々同一のことをいへるなり

［松雲公御夜話追加］

一、御中年以後之御時より、御痰氣之故に御座候哉、御足之裏におひさき御出來もい有之、雨濕極寒之時分は別而御痛被遊候。最初は堀宗叔數年御藥差上、其已後強御灸治被遊、大にふたつくり、かたまり出き申候。其御跡は御快可有御樣子に奉存候處、又下より御差出被遊候。度々右之通りに候得共、御宜しからず候に付、公儀御外科栗崎道有久々御療治、其已後稻葉丹後守殿御手醫吉永竹庵、一年餘り御療治仕候得共、御替被遊儀御座候。其次は先年被召出候御外科横井元志、やはらか成御藥にて、差而強御痛者出不申候。或時極寒之節夜中八時過、以之外強御痛被遊、別而御難儀被遊候故、御湯殿に被爲入、手桶い水三桶御懸被遊候處、暫有之御いきり出候得者、少御やわらぎ、七時過より御熱睡被遊候。扨々御難儀い御事のよし御意御座候。數年相勤申内、ケ樣之御事度々被成御座候得共、終に御近習之ものい御おこし被遊候御事一度も無御座、承及申儀も無御座候。御寛仁之御儀難有奉存候御事。

［富永數馬覺書］

一、松雲公には夏とても御足袋薄かうじいろ被爲召候。是は御足の御裏に御痛御座候。御痰腫と申候。寶永元年之頃町外科吉永竹庵御療治被仰付候處、あらきいたし樣にて、別而其頃は御痛被遊候旨。町外科横井元志今の元泰養父爲御見被遊候處、強き御療治は不御宜、御痛つよき時分は和

か成御藥御附被遊候而、御當分御難儀不被遊樣被成候が宜奉存候。もとより御治し被成候樣仕候儀は不御宜と申上候旨。夫より元志御附藥御用被遊候。生薑を練つめ申御藥之旨、一段御宜、每度々々指上申候。依之元志被召出、金澤ゑも被召連候。右御痛は、ほうづきをつぶし候程、御はれ被成御座候。御他出之時分は、絹切にてそつと御足の御かうより結び、扱御足袋を召申候。御不出來之時分、御うづき被遊、ふといたし候へば、夜中も御寢成兼被遊候旨。其時元志藥御附被成候へば、御宜御樣子に御座候。御足の御裏ながら、御つちふまずに而、御能被遊御足蹈にも御つかへ無御座候事。

〔松雲公御夜話追加〕

一、七十六御時に御座候哉、御壯年より唯今迄、御寺がたへ御名代被仰付候節、一度も御失念なく被仰出候得共、もはや御老年之御事に候間、若相洩可申哉与、向後は年寄中より度々相伺候樣に被仰付候由御意御座候。

〔松雲公御夜話追加〕

一、御七十計之御時分までは、夏中每歲、年寄中を御前ゑ召、暑氣之時分每日登城、別而大儀に思召され候由御意に而、御手づからのしちゞみなどの類、或は單袴地など御取添、大かた三端程あて被下候。其外彼是御意有之事も御座候。其已後はいつとなく相止申候。

〔松雲公御夜話追加〕

一、相公様最前は河内丸に御隱居、萬端輕く可被遊旨にて、横山山城守・奥村伊豫屋鋪など被召上、且亦阪下堂形上地には、御近習之者共被差置而も可宜なとゞ御意も有之、其御催に御座候處、御逝去五・六年以前御意御座候は、最前は右之思召に御座候得共、御先代小松へ御城に御隱居被遊候。相公様御代其儀無御座致中絶候而者、御子孫に到り小松御隱居と申儀被遊にくき御事可有御座候。兎角御子孫之御爲に候間、御先格之通小松へ可被爲入旨御意に而、其御沙汰御座候事。

〔梧窓漫筆拾遺〕

近藤登之助は一代の使者にて、大小の神祇組と云へる其一人にや。其徒と河合又五郎をかくまひて、大なる騷動を起し候事世人の知る所なり。綱紀卿の御若年の時にや、登之助家僕を放打にせんとて打ち損じ、家僕は本藩邸の門内へ逃げ入りたり。兩度まで使者を以て、歸し給はるべき旨を申し入れたれども、綱紀卿の御答に、此方屋敷を憑もしく存じ候ひて、馳け込みたるものに候へば、指し出し候事は致す間敷候、御宥免候ふべしとなり。三度目に登之助自身にて來り申すは、拙者小身者の家僕を、大國の太守の左程までに御憐愍被下候は忝き御事なり。さて此小者も、大國の太守の左までに御憐愍を蒙りしは、冥加の者に候へば、

此以後は士に仕り召し仕ふべし、御歸し可被下との事なり。綱紀卿も、左樣の事に候はゞ歸し遣すべしとて歸し給へり。さて登之助右の家僕を己の家敷内にて縛り、本藩の火の見より能々見おろす處へ引き居ゑて、首を打ち落せり。綱紀卿此事を聞し召されて、以の外に怒り給ひ、惡き登之助の振舞や。小身者に欺れては一分立ちがたし。さらば登之助を打ち取るべしと下知し給ひ、在邸の諸士諸卒に命じて、甲冑を被り南の門の內に群集す。今一相圖にて、南門を開きて打ちて出でんとひしめきけり。此時光圀卿追分の御屋敷に居給ひしが、本藩邸中の騷動せるを聞き給ひて、何か加賀屋敷は騷動するぞ、見て參るべしと昵近の人に仰せ付けらる。其人馳せ歸り、何かは不存、加賀屋敷の內馬・物具の音仕り候と申し上ぐる。光圀卿されぱこそとて、鞍を置き給ふ暇なく、裸馬に打跨り、加賀の屋敷へ馳せ込み給へば、綱紀卿六具を固め、床几に腰かけ采幣を把りて指揮し給ふ體を見て、馬より飛び下り、是れは加賀守殿には物に狂ひ給ひし歟、如何なる事にてかくはし給ふぞと御尋なり。其時綱紀卿、登之助の不埒を逐一に仰せられて、此趣に候間、只今人數を差し遣し、登之助を打ち取り可申と仰せらる。光圀卿の仰せに、夫れは以の外の僻事なり。登之助は小身の事なり、御自身手を下さるべきものに非ず。縱ひ打ち取られたりとも、大國の太守の小身ものを打ち取ること、武勇にも候はず。拙者へ御所存を仰せ聞られ候はゞ、御本丸へ申し上げ、登之助事は縛り首

にも切腹にも自由に可相成事に候へば、今日の御企は強ひて思し召し止まり可然と仰せられたり。此理に屈服し給ひけん、綱紀卿頭を低れて暫時默し給ひたり。やゝありて仰せられ候は、此れは加賀守が誤りにて御座候、登之助を打ち取ることは、仰せに從ひ思ひ止まり申すべしとなり。光圀卿も大に御喜悦にて、さらば思し召すまゝを不包に御語り候へ、御本丸へ申し上げ如何様とも取り計ふべしとなり。綱紀卿の仰せに、此上は何の所存も候はず。箇様の事の出來するも、登之助の門と拙者の門と相向ひ合ひ候より事起れば、此の以後は彼が屋敷の門を此方へ不向様に御取計らひ可被下となり。光圀卿の夫れは易き御願なりとて仰せ上げられ、登之助の門は北の大通りに明けずして、南の隱居なる所に明けたり。今に登之助の表門は傘谷の方に附けたるは、此時よりの事なりと、是も吉田垣藏の物語なり。虚實は不知、面白き物語にて、今の世の孱柔なる風習とは事替りたること故、記錄して傳ふるのみ。

〔梧窓漫筆拾遺〕

本藩の本郷の屋敷と、水戸の追分の屋敷との間の垣は、右等の御趣意もあるにや早くして見越す故に、綱紀卿の毎度御願ありたれども不叶、御老年までもかくの如し。御出入の御先手など參りたる時に、御手前方御存知の通り、水戸の間の垣の事を毎度願出で候へども、今に御許容なきは、加賀守の白髮頭へ冑を被れと云ふ思召ならんなどの御戯れを仰せらる。夫等

の事の上聞に達せしにや、終には此事御免なりて勝手に高くすべしとなり。御免を蒙られたるより急に造作して、夫迄よりは數寸卑くなされたり。今に此間の垣は他所よりも卑しと、予が少かりし時本藩針醫久保定能の物語なり。

〔梧窓漫筆拾遺〕

綱紀卿は、文武の二道に達練の御方にて、一時の名士を多く召し抱えられたり。木下順庵・室鳩巣・稲生若水の類是なり。新井白石も召し抱えらるべきを、岡島忠四郎と云へるものに讓りたること、白石の折焚柴の記に詳なり。鳩巣は十四歳の時、只者ならざるを知りて召し抱えられたり。順庵は常憲院御代に江戸に辟され、鳩巣は文昭院御代に江戸へ辟さる。當代の學問文章は加賀を盛とすること見るべし。さるが故に四・五十年前までの學者、此卿の御事を加賀の綱紀・加賀の松雲院といひ、知らぬものなかりしに、近來の學者は浮華にのみ走りて、此卿の御事も知るもの多からず。

〔甲申雜書〕

一、半田正祖曰、江府湯嶋天神の社司能愛申けるは、水野日州は公儀へ御斷にて、館林の相公綱吉卿へ御心易出入せらる。正月年限失之と云々。館林殿へ水野參向の時、館林殿御申あるは、昨日月日ともに不知云々。松平加賀守と暫時語るに、坐配といひ人柄と云、年身代と云御筋目と云、上の御爲

に御後見を被仰付候はで不叶仁たるを、雅樂頭・美濃守など心得悪布、唯今は仕なし沙汰は限にくき仕合也と、事の外に御感なり。其方には彼家に心易面々可有の間、語て聞せ候へと、一兩日前に水野氏へ參候時御物語にて候旨、半田に能愛が申聞ける。是を以今存合すれば、御懸意諸事結構に被成も理りにて、館林に御座在ける時より、殊の外に能思召たる体のよし云々。愚、然に先達て記たるかと覺ゆ。或時先御代に、邦君館林殿へ御越の處に、久布御待せの後御對顏有けるを、酒井大樂忠清被聞て彼家老を呼、如此の事聞、加賀守殿には何人と各には存候や、上の近き御續きと云、家と云身上と云、館林殿などには急度御會釋なくては不叶儀を、輕き旗本の面々同事の御あひしらひ不可然候。ケ樣の儀有之時分は、急度爲可申上に各被附處に、左樣の儀をも不申上段不調法の至也。此事公方樣御聞被成候はゞ、各手前定て急度可被仰付と存る。向後急度被心得尤に候。館林殿へも御序の時分、其方へ拙子申入たる趣被申上置可然由申されたると云。實說と其當座に聞。大樂の申分流石の由申けるが、此正祖が咄とは各別也。但考見處は、其頃の館林殿故に、忠清態押へたる心得にていはれたるか、又館林殿も實は前說の通故に、態々右の通に御あひしらひかと、兩方ともに兩察なきに非る也。先達ても記置通に、天下と當家との御事心を附べき者、此正祖が話の上にても、前年聞ける沙汰の上にても心を附て可見、忽に不可思事にて、兩說ともに實事にして少の差ある處、如此記留

んと思よりしてみれば千里のたがひ見ゆる乎。能愛正祖が間にて少違、後說も面々語傳の内にて少違が大に成て、愚耳に入時に至て各別の記になるか。

〔可觀小說〕

一、松雲公常に我邦皇統の中葉以來紐を解き、其大勢を失へる事を慨嘆し給ひ、且つ南朝の正統世に暴白ならず、北朝を以て正とせる事を怨憤給ふ。南都の親王中務卿宗良の爲人を賞し、新葉集の內より歌二首を撰出し給ふ。其歌如左。

東の方に久しく侍て、ひたすらものゝふの道にたづさはりつゝ、征東將軍の宣旨など下されしも、おもひのほかなるやうにおぼえてよみ侍し。

おもひきや手もふれざりし梓弓起臥わが身なれん物とは

おなじ頃武藏國へうちこえて、こて指原といふ所にをり居て、手分などし侍りし時、いさみあるべきよし、兵どもにめし仰侍しついでに思ひつゞけ侍し。

君の爲世の爲なにかをしからんすてゝ甲斐ある命成せば

就中第二の歌、命を委ぬるの志節、所謂君爾忘身國爾忘家の語にも叶へり。是を以て第一と定め給ふ。其遺像を圖せしめられんとて、故實を尋求らるゝといへども、三公及親王等甲冑の式、其時節之故實知がたくて止給ひぬ。武臣にしては、楠公正成父子忠貞を世々にし、殊

本文は享保七年室鳩巣が徳川吉宗の諮問に應へたるなり

に湊川戰死の前、櫻井の驛にして敎戒の受授、于今人の口碑にあり。公受授の形容を圖し世子へ授け給んとて、數十年當時の模樣を考索せしめ給ふに、多く意思に不叶。多方に求て、漸にして享保九年の春に至て其形狀を得て、始て畫師狩野伯圓に命じて畫せしむ。畫しば〳〵改め摸して乃成ぬ。讃を大學頭林鱣に請給ふ。讃未成、五月九日群臣を棄給ふ。嗚呼痛哉。明年乙巳の春、津田執事敬脩爲藩邸留主官て東都に住す。畫師伯圓享年八十四歲、不料に楠公父子受授の圖を摸し、來て敬脩へ贈る。敬修甚欣び、乃某をして讃を鳩巢室先生へ請へり。先生撰著して其畫に題しぬ。于時秋八月、裝飾して執事の家に珍襲せり。

〔兼山麗澤秘策〕

一、其後宰相樣御儀御尋被遊候。年寄候へども健に而、國政等之事今以自身に承り候樣に御聞被遊候、其通りに候哉と御尋に候故、私申上候は、御意之通に御座候。生質丈夫之上に、平生養生能候故、只今の年に合候而は、並には勝れ候而達者に御座候。國政幷に家中仕置等之事、大小共に自身に不承儀は無之候由申上候處に、法律などの事、日頃定置申儀は無之哉と御尋に候故、私申上候は、前におし立定め置申儀は不承候。第一大法之儀は、江戶の御法令を守り候而、其通りに家中へも急度申渡候。其外少之儀は時により候而申出候由申上候處に、又御意被遊候。家老共之中加賀守目がねを以申付候者は無之候哉と御尋に候故、私申上

木恭靖は木下順庵

先師は木下順庵

候は、代々家老職を勤申者は相極り罷在候。其外は目がねに而申付候者も有之由申上候へ者、其等は抜群に取立候哉之旨御尋被遊候故、私申上候は、目がねに而申付候者も、大方先祖より家筋に而申付候故、厚祿之者共に御座候。抜群取立申者は承不申候由申上候。

〔白石先生手簡〕

一、加州宰相殿殊に〳〵御念頃に被成給り候。此御人はかくれもなき書物おしみにて候故、人のいやに思はれ候事を望候ても詮なき事と存じ、只今までの内只一度書物かり候事有之候き。國より取よせ召れ、二三部校合など事むづかしき事にて御借し有之候故に、家禮衆の爲にもと存じ、其後は不申入候。あなたより御申越候ものは不斷借し申事は候。況やなにの書は御藏書に候歟と尋候事は仕りがたく候。是は互に藏書を打あけ候てありなしを申さぬは、堂上より始て、諸家一同のならはしに候故の事に候。

〔白石先生手簡〕

一、加州宰相殿詩作等、昔し木恭靖存生の頃は有之候躰に候ひしが、そのゝちはいかゞ有之歟、終に見も不仕候。手跡はしほらしきやはらかなるものに候き。

〔白石先生手簡〕

一、加賀宰相殿詩文の事、先師存生之内には、いかさまさやうの事も候やと見え候事も候ひ

しかども、其後は聞も及ばず候。此老人殿は學問、また〳〵一格有之候事にて、貝姪之間に候得ども、水戸西山殿のやうなるものにも無之候。隨分々々書籍の上には功のゆきたるもの〈に〉に候へ共、かはりたる所候學問にて候。今も常に書をば手を停められず候と承候。

〔白石先生手簡〕

一、前代の御時に、日本紀の神代の二卷、とかく御心にすみ候はぬとの御事に付、舊事紀・古事紀・日本紀其外たしかに勅撰に出候實錄どもを採用、直說の類、中傳候抔と申やうの類、出所もさだかならぬ僞作の書は一部も取候はで、古史通と申ものを撰呈し候き。是は御心得候との御事に候。此事を加賀宰相殿御傳聞、種々御申の事にて草を御かし候へば、御寫とりたきよしにて、三千年來本朝に如此のものはなく、六十年の疑をすきと御はらし候とて、殊の外なる大慶と御申謝し候き。

〔德川實紀〕

綱紀わかきより學を好み、和漢の書を讀事同列には並ぶ人なかりき。領事の政務とり行ふ事も、すぐれたる事どもいと多し。そが中にも、封内の黑部四十八ヶ瀨といふは、北の國にかくれなき難所にて、急流をわたる故、やゝもすれば溺れ死するものありしに、綱紀川上の山ぞひに新道をひらき、橋をわたして諸人のゆきゝをやすくしけり。この事議せしはじめ家

臣等、さあらんには要樞の地をうしなはんとていなみしを、綱紀ひとり、國の安危は政治の得失にあり、山河の嶮岨によるべきならずとて、ながく覆溺のうれひを除きたりといへり。

〔燕臺風雅〕

松雲公諱綱利。字取益。明舜朱水先生。加賀中將菅原綱利。字取益說曰、爲人君者。上而天子以至於公侯伯子男。無非取諸人以爲國者。廟朝宮闕。犧牲粢盛無竢言矣。卽臺榭游。皆取諸人以爲材。錦衣玉食。皆取諸人以爲養。至若取諸人以爲善。則寥寥焉未有幾人。何也。是故取民之財。用民之力。逾其制焉、遂貽錙銖泥沙之誚。至於善。所謂取之無禁。用之不竭者也。何莫之取焉。昔者舜自耕稼陶漁以至爲帝、無非取諸人以爲善、與人爲善者、故曰 大舜有大焉、然而善取者取之天。善益者益夫天下萬世。卽耒耜之利。以敎天下。本取諸益。使天下獲耕稼之利、以養萬民、則天施地生。其益無方矣。無方之利、誠天下萬物之綱也。繇是而五敎曰。衛醫直振德。皆所以紀焉者也。今天下人君之所爲。取諸其民者皆損也。非益也。取人之財。蓋在帑藏。取人之善以爲益。在一身一國、若夫取天之道地之利。則益在萬世。民惟恐其取之不多也。字之曰取益。亦以道之至大者廣之爾。一字國義曰。林鵞峯國義說加越能侯菅君。諱綱利。求字於余。綱者幕府之御賜。言不容易。利者世家之通稱。可以推廣焉。乃以國義應焉。取諸大學傳所謂國以義爲利也。利者四德之一。而物之遂也。義者四端之一。而事之宜也。利與義共配秋。萬物收成之時也。易所謂利義者之和也者。事物各宜而得分之和也。君施政撫民。先齊其家。以敎國人。而物遂事宜而西成平秩。則國以義爲利也。昔晉文後侯字義和、爲北方之伯。藩于周室。克昭其祖。視其師。寧其邦。用其德。可以景慕焉。爲君所庶幾也。乙巳季冬識。更爲諱綱紀字中和。敬義。養民。顧軒。三省。香雪。梅墩。皆其別號也。公之生龍口邸也。適尊在金城。而遙聞夫人之慶育。俄然東轅。到信之古間驛。時輿睡得瑞句夢中。開與利梅者千里乃仁保飛哉。以爲英物之兆也。果然。公冲齔嗣國統。至長天骨秀朗。勵精於經濟。而起朝儀。定律令。暨樹百爾制度。遠徵治要於前烈。而永垂彝則於將來。故百姓結恩心。而三州乂安。諺云。政事一加賀二土佐。蓋斯時賞諸國中治體第一者也。此諺擧世所播言。卽龜井道齋熊本俚談亦載之。景周按。斯時土佐者。土佐侯用野中兼山。而崇朱考亭。以其所學。而施諸一國。毀佛宇。興庠校。置農兵。出新令種々。而利上下者不少云。噫雖齊東野人之諺。亦謂無徵引之一助哉。臣景周總角聞。祖神菅丞相。爲絕世國器。千古

儒宗。而未獲熟知其雅行嘉言。中歲留守小松城。官暇至讀國史暨菅家文草於梅林院。觀洪恩聖德。黼黻文章之美。未嘗不擊節喟嘖嘆焉。然保平以來。中原逐鹿。戎馬橫行於四海。一切武斷。儒業埽地。於菅氏之後。寥乎不存丞相紹鳳之片毛。五百年矣。吾松雲公乘熙朝文明昌運。以天挺敏資。社稷之暇。涉獵墳典。而剔抉奧賾。若夫摛藻馳翰。珠躍煙韮。遂再興墜緒於五百年之後矣。其功最偉矣。加之好該博。貯天下奇書。如二酉藏。乃分以經史子集。倣宋崇文院。海內爲之語曰。賀州天下之書府也。書府之稱。新井君美雨森東書牘中數見。室直清曰。北藩三州大牧伯。今菅侯。君臨大國。有河間之好。嘗搜討遺書。以致四方之志。收古今之籍。四庫所藏。汗牛充棟。縹囊緗帙。倚疊如山。縣乘之載。滿架之積。何足多乎。其所收皆四部七略之書。幸多覃奧大册。其餘金石遺文。小史稗編、亦取其爾雅近古者附焉。至於近世以來。猥瑣俚俗之書。眩燿人目。澷漶其肆者。槩皆不收錄、置之度外而已。(下略)又曰、直清想昔爲藩臣。事侯於國。竊見其用意於治之深且久。蓋侯之取人用材。必皆英偉俊傑。極一時之選。而一藝偏長之士。亦無不庸焉。豈非收之廣而擇之精者乎。其收天下之書。亦由斯道爾。 公居常以藩鎮之貴。毓德文苑。設醴候賢。吐食接士。故鉅儒接踵來。殆合德符於燕昭。蓋一州唱文雅之最殷。一變將至道之秋也。木下寅亮曰。加藩菅公好學樂善。殆有河間東平之風、遍招天下之名儒。 講書論文。元祿五年月二十七日。大府以下言大府者、皆指常憲公。自講大學。六月三日。有台命。乞列侯於講經。皆辭無應命者。公進講中庸首章於便廳。大府賞嘆之聲不已。講了。饗公於竹殿。且以牧野成貞備後守賜嘉尚言。退朝後。使其事顛末林學士暨貞幹記。貞幹所記略曰。元祿壬申季夏哉生明穀旦于差。大君親講大學綱領於便殿。賀陽菅侯。與尾府紀府常府三家及甲府親藩。同錫敬聽。德音琅琅。金聲而玉振之。群侯拜手稽首謝恩。既而特命侯。講中庸。其事本末具于林祭酒所識也。今夫三家。

此の文元祿五年六月三日の條に載せたり

磐石之宗藩。甲府棣蕚之嫡冑。天下之至貴。蔑以加焉。侯乃以異姓雄藩。而篤懿親崇班。此希世之榮也。此日大君上臨。宗藩列于左。閣老近臣侍其右。天下之至嚴也。巍巍台庭。赫赫公座。挺身進講。天下之至難也。座至嚴之地。演至難之說。而道理明暢。詞辯流麗。文不闕義。言無長語。此非志氣充於中。精華形於外者乎。孟子曰。我善養吾浩然之氣。其爲氣也大至剛。塞于天地之間。侯之篤學致知。於天下之理無所疑。集義自慊。於天下之事無所懼。不懼不疑。至嚴至難。不少動心。則其持志養氣。至大至剛。塞于天地也可知矣。宜乎義理之精。詞辯之華。如此其美也。侯旣請林祭酒。書一時事。又命幹致鄙言。恭惟志氣高明。資於充養。義理精微。由於問學。侯實學有得於思孟者深矣。雖然高明或馳於虛遠。精微若流於鑿空。亦昔人所警。敢以爲獻。貞幹之言旣然。景周索使林氏記者於本藩故家多年。拮据竭力而不得。近誕誘一良友。及江都林祭酒。友人卽就祭酒之所。探鳳岡集稿本巨卷中。而寫加賀中將講本中庸章句跋者。携歸似余。於是始得夫補闕。而事遂妥貼。何耐抃僊。其言曰。元祿五年壬申六月初三日。(中略)經筵講官大學頭整宇林戇謹記。此跋雖載鳳岡全集十五卷。草稿而未梓行。六年十月朔。一作九月二十八日。大府講論語里仁篇。且手自授大學書於公而乞講。公卽講大學知止章。講畢。手自賜八丈條紬五十端。七年七月三日。有特命朝拜。公與會津侯。謹聽大府講易乾卦。又命公講論語爲政篇。會津侯亦講爲政篇。講畢。賜御書德不孤三大字。此時以尊德性三字。賜紀伊侯光貞。以敬直內三字。賜甲府公綱豐。皆大府所自書者也。時貞幹上詩。謹頌盛

非人小屋の成りしは寛文庚戌なり文昭公は有徳公の誤

藻德云。三朶雲章筆有神。鳳翔龍躍瑞光新。聖心爲示諸侯守。敬義工夫德有隣。十五年四月二十六日。大府賁臨本鄕朱邸。自講論語君子不器章。其講聲之大。徹謹聽諸臣席末。而猶有餘云。可謂盛事矣。享保辛丑五月二十五日。大府是指文昭公使有馬某兵庫頭召室直清於棣棠殿、問公之政體及學術良否數十條。直清即對之。以國政之醇化。且敬上恤民。或其政無巨細。公自明斷之。而不出大夫。或封內賄賂既絕。師古之訓行。或公日夜孜々勤學。而該究古今掌故。有疑事引經決。當時廉諸侯之可比。某不堪感歎而以聞云。事見兼山秘策。又先是室直清賦本藩立國始末詩略。有我侯承祖烈、化下齊闡翼。驕騎居家樂、河間宿好偏。愛民憂閔閔。奉上氣拳拳。秉德偃徵草。和羹烹小鮮。檢身躬儉素。遠色退嬋嫺。御戚防淫樂。徵招禁浙濇。歲內荒政布。令下貢租蠲。[illegible]治能勤小。舉材寧誤銓之語。又宴陪游水飲詩和栢梁篇。對間承前席。講經侍細氈、落珠揮彩筆。擒藻染華箋。直道清時合。高情塵事捐之語。徵是等詩語。其代間政體之美事。可想像矣。如公仁聞。海內素所知。不俟余言者也。故不贅于此矣。寬文己酉歲飢。自是而爲吾三州鰥寡孤獨赤貧者。造此屋居之、且與衣與食。疾則與醫藥。恒使千許人[illegible]無飢寒病苦之患、至今一百四十年如一日。大府文昭嘗嘉之。物茂卿政談亦賞之。又寬文辛亥臘月。京醫向井元升以順。序庖廚本草云。金澤菅原侯。彊嗣承鴻業、長而信聖人之道。其心專在副大樹仁民之德。無他、可謂敬忠而仁也。去歲庚戌之夏五月至自武昌。未下駕令救飢急。既下駕。大行賑濟、老臣將順其美、衆臣歡赴其事。加能越三州之窮民。如新屆洪水解倒懸。其施亦博矣云。公之仁政。當此一臠、而全鼎之味可類推。近年長久保赤水著東奧紀行。其附錄。以越後藩口侯爲民之又舉至七十者有養老之賜焉。爲周漢之惠政猶不及。殊不知我公養貧民育窮老之至仁。先之既在百年前、而亦倍蓰于彼。純孝一槃。先妣清秦夫人嘗烹包鶉卵於錦囊。懐之温育發觳音。以故公終身不食鶉云。甲辰五月九日。公薨於東武高邸。享壽八十有二。公丁壯工詩。長篇短章。應手則韻。春日詩。三春天地暖。萬物育其生。仁雨花皆發。節風竹獨淸。讀書非一日。高枕是升平。政暇明窓下。靜聞黃鳥聲。何々是仁。字々是誠。眞賢君之口氣。格高體寛。又題粟崎亭子詩。百尺凌雲碧玉樓。

設詩本三字疑譌舛

蒼波涵影鏡中流。帝機屢濺江天色。織出檻前錦樹秋。氣象廓豁。字句鉅麗。足觀丞相鳳毛之遺彩。此時木下貞幹、平岩桂。澤田宗堅賜宴。各有應教七律。或云。公此後以粟崎湖。設詩本也。又寛文十一年之夏。公迎數儒於育德園詩。騷客題詩一草堂。夕蟬和雨送斜陽。人間快樂有何事。吟就此中興味長。此時侍公讌輩。林學士春常整。字林春東晋軒。人見友元竹洞。野間三竹靜軒。野間允迪。曁我儒平岩桂。澤田宗堅。五十川剛伯也。公命八儒。使育德園八景分賦。八景曰。一曰長林晨暉。林學七。賓迎出日茂林新。佳木千章紅一輪。宿露養成平旦氣。照林果々煥雲隣。二曰清地宿禽。林春常。同群知止枕清漣。夢入十洲三島邊。歛翼能占靜中樂。蒹葭深處不妨眠、三曰溪橋閒鷗。林春東。芳樹翠烟圖景微。杜鵑休道不如歸、聲々恐報堯夫感、莫向天津橋上飛。四曰平蕪游鹿。人見友元。露洗綠蕪町疃平。白敎園沼得民情。雅游開宴草如織。濯々馴來歌鹿鳴。五曰西塢花雲。野間允迪。白櫻橋上白雲低、霞際淡然千萬枝。濃露香風西塢畔、賞花探句夕陽遲。六曰竹逕涼雨。平岩桂、綠竹團欒滿徑深。新過一雨玉蕭森。不圖趙盾炎蒸盡。唯有渭川一畝陰。七曰惟巖紅楓。澤田宗堅。峩峩巖石倚林立。高閣風廻楓葉桐。爛熳照池霜後晩。想看吳水楚山秋、八曰蟠松晴雪。五十川剛伯。移栽一徑萬年松。喜氣歡聲排九冬。帶雪靈根何所似。綠盤龍化白沙龍、又使八境分賦。一曰蔦旋店。林春常、旋松旋柏總尋常、四壁天然枲々荒。百尺翠絲風度曲。携琴將問孟襄陽。）景周按。蔦寄生草也。蓋此題謂蔦者。指垂蘿或地錦也。此時文華未全開。故以蔦誤爲蘿類。二曰月到亭。林春東。欲尋仲素遺蹤陳。亭上移光玉一輪、幽處深知閑適趣、琴樽邀月當嘉賓。三曰半曲樹。人見友元。半曲清風綠樹重。良辰美景衆情鍾。立如磬折步如矩。小樹物無改禮容。四曰通達窓。野間允迪。檐外清閑林樹中。森森綠葉屋西東。世塵拂去蠻涼爽。通達窓櫺八面風。五曰標柱石。平岩桂。奇石龍從秀氣鍾。深根同帶露蹤蹤。乾坤尤物少人世、他日須成天柱峯。六曰青顧軒。澤田宗堅。四顧平蕪映戶庭。輕煙薄靄雨冥々、周家意思傳何處、三月春風一樣青。七曰望富觀。五十川剛伯。千仞士峯冠我州。觀中凝望喜同遊。斯時記得宋濂句。六月雪花洒寸眸、八曰晞驥堂。野間三竹。郭外名區傳武場。當招諸士坐華堂、一馳千里輕於鳥。駿馬欲過驚且翔。是也。弘文院學士春常作之序曰。夫萬物之發育。依天地生成之德也。加賀羽林菅君。園中廣大。所視且千。所聽萬斯。動植之美。備於其間矣。文饒之平泉。不可比焉。必大之平園。

亦可輕蔑。辛亥之夏。偶應其作招。爰遊爰息。舉其尤者。標出八景八境而定其名。然園未得其名。主君自擇育德二字。爲之韻。可謂相應之佳號也。想夫人與天地相參。則園中動植之育生。亦是主君養德之餘化所廣覃乎。豈唯一國動植而已哉。北陸三州之人民。亦被仁育之德者。所瞻仰不在玆乎。又野間三竹。作之跋曰。菅國義公。今玆述職江府、江府城下有一勝地、黃門君闢之前。國義公繼之後、一日招弘文學士林鵞峯、林晋軒。野竹洞氏。迨余父子。使學士消數子題景境之名。余預其列。景八境八。其名共成。成而后使之賦詩、抑晨暉之紅紅映長林、清池之冷冷水禽宿。鳴鹿之游芹蕪。杜宇之叫橋上　西嶋有花。竹裡有雨。巖之有紅楓。松之有晴雪。維恠維蟠、豈亦尋常之物哉。有蔦掩其店、佳月之到其亭、或亦欄半曲者　嶋有通達者。有以石標柱者。在饋軒外。則青青入望中。士嶺在雲外。堂上觀駿駘。是乃境上之所樂者也。諸儒共詩成。成朝使學士作叙引。使不佞爲跋。不能辭讓。叨題其輪末。〇景周按。三竹字子苍。號靜軒。松永昌三門人、石川丈山詩友也。城州柳谷隱士、著席上談古今逸士傳。一時席上。各和獻公尊韻者九首。尊韻卽上文所載。騷客題詩一草堂之詩也。林學士奉和云。凱風涼雨坐高堂、月纍二陰餘四陽、庭象天山恩露潤、暑塵遯去日忘長、人見友元奉和云。臺上迎涼綠野堂。葵誠當暑白傾陽、雨絲添得舞絃響、猶有南薰一曲長。此餘七首略之。先是寬文四年。招梅洞先生名懿。林春齋長子。於東邸。而令講朱考亭感興詩。又說詩經。事見梅洞集。尋而十年。十二月二十二日。十一年。二月二日。公出獵於栗崎大野。時平岩桂獻射鹿賦。公賜端歙硯一枚。羊鬚筆二枝。朱萬初墨一笏。事見大澤君山隨筆。十二年。遊獵越中。木下貞幹扈從。應教賦上五言排律。載錦里集、貞享三年中秋。芙蓉池亭使國卿大夫覲賜駿蹀躞。且至夜賜宴。各獻明月詩。毫端競珠。公舒卷及奧村庸禮父子詩。擊節嘆云。玩其文辭之盛。殆有漢魏之遺風。新井君美。爲公賞詩賞書。賞藏奇書者。見于白石手簡。白石紳書。及與小瀨夏正書中。公書道遒無俗韻、今猶多貯直清家。有扇頭題詩等。卽爲其祖先直方。手書所賜者。雅致可嘆美、

〔燕臺風雅〕

三春天地暖。萬物育其生。仁雨花皆發。節風竹獨清。讀書非一日。高枕是升平。政暇明窓下。靜聞黃鳥聲。

横山隆達謹曰。此公天才高朗。浩然養氣。蓋於此篇公然。

景周謹曰。盛德之美弸於中彪乎外。故其言優暢醇厚。暖春仁雨節風。或讀書或樂升平。一句一語。無不胚胎仁與德。眞是聖主賢君之口氣。比大風而無愧。

題粟崎亭子　松雲公

百尺凌雲碧玉樓。蒼波涵影鏡中流。帝機數濺江天色。織出檻前錦樹秋。

景周謹曰。巨麗高朗。光寸獨照。全脫凡體。卽是明公之神乎。

阪本驛逢雨　松雲公

爲客季秋萬里天。東阡西陌去年年。驚魂一片五更雨。恐是明朝馬不前。

景周謹曰。盛唐氣格。自然之妙境。神動天合。

育德園迎儒　寛文十一年　松雲公

騷客題詩一草堂。夕蟬和雨送斜陽。人間快樂有何事。吟就此中興味長。

宗良親王和歌賛辭　松雲公

我邦皇統。逮至中葉。禮樂陵遲。威福易其處。至建武之交。分崩離析。百川横流。朝宗失道。

終嘆不歸海矣。當此時宗良親王剪除荊棘。欲淸宗廟。始終忠孝。愛之有餘。乃覽新葉集撰歌二首。其小序曰。久居東方。交于武夫。事干戈矣。不計蒙征東將軍宣旨。時作歌。思（音[illegible]）手（音[illegible]）。倒（音[illegible]）。梓（音阿津左）。弓（音由美）。起（音遠[illegible]）。臥（音不志）。已（音和我）。蜜。馴（音奈禮）。物（音毛乃）。同小序曰。起于武夫。於古天左施波羅。行陣挑戰。令士卒如猛虎。時作歌。君（音[illegible]乃）。爲（音多[illegible]）。世（音[illegible]乃）。爲（音[illegible]）。何（音奈[illegible]）。惜（音[illegible]）。捨（音[illegible]）。命（音伊乃[illegible]）。也（音[illegible]）。此歌操志高潔。凜乎如霜。所謂爲君與國。忘身與家之語者也。背欲爲容窺英威之國。而普蓮求其古式。至於三公九卿諸親王家。無能知識者而止矣。惜夫。

景周謹曰。宗良親王後醍醐帝公子也。按親王甞來越中國。居三年。事詳于予越中來因槪覽。以不復贅也。予又按續本朝通鑑。曆應三年冬十月。宗良親王自駿河赴信濃。至大河原。主香坂高宗家。聞北陸猶有通志於南朝者。潛赴越中國。主石黑氏家。到處咏歌以述懷云。蓋景周今讀公賛辭。以謂公知親王操志之明廉。識千載之達識。今後來忠臣節士吐氣者。可嘆可感。

座右銘　　　　松雲公

與耀德也。使民忘德。於乎鼓腹。奚知帝力。有爲者窮。我從天則。思之不置。于夜于夙。

景周頓首謹讀之。公之志恒在民惟邦本。本固邦寧矣。誠比前古聖王而無愧。奚翅周世宗刻

木爲農夫。寘於殿庭之謂哉。意此銘與養民堂之尊號吻合。

〔前田家文書〕

寛文之有七中秋宴江東小館叙　　松雲公

夫天地之間。四序推移。歳月不止。而後景象之有同者。又有不同者。春花烟景之美。秋月晴夜之興。得勝會也尤難矣。今逢升平之世運。暫得一日之閑。時維中秋。序屬三五。於是聚侍臣於堂上。招技士於閣下。且飮且謳。在列者曰。此夜雲覆蒼穹。雨打黄土。失公遠之擲杖。乏廷碩之撤燭。頗不足賞之。予曰。吁勿恨。其四序歳月之異也。無不召我以好景。然在其中秋也。惟賞之之異他者。正依人心之偏。而月色亦如異。何其異哉。其在我賞之與不賞之而已矣。唯聞冷雨之蕭々。不見淸月之皎々。諸臣以賞此夜之勝會。何不樂乎。因而共盡樂極歡。觥籌交錯。或起或坐。謳聲互發。一揚一休。陰蛩唧々。如助宴酣之樂。旅雁喝々。以慕絲之戲。笳笛帶風。響極忍岡之濱。謳謌和雨。聲斷板橋之野。當足吹開半天之雲幕者也。予雖拙詩賦。侍臣吟咏之。予共暢叙幽懷。以冠其首云。

中秋無月

頑雲此夜妬晴月。雨灌梧桐東武秋。見說筵前多士會。詠歌相樂一高樓。

又

腐儒騒會淸筵上。一詠一吟偕醋酬。遙聽知微雲外樂。不知月色在心頭。

蠟　梅　寬文十二年作　　松　雲　公

綠蕚金英碧玉枝。風搖淸態晴香奇。春信忽從此花始。歳晩欲虚何遜詩。

五月十一日。德川吉宗使を遣して前田綱紀の薨去を弔せしむ。

〔德川實紀〕

五月十一日、致仕松平肥前守綱紀うせしかば、こい子加賀守吉德がもとに、奏者番井上河内守正之御使し、香賁い銀五十枚をたまひ弔せらる。

〔政隣記〕

五月十一日、御當番御目付衆より、追付上使之旨御小人目付を以申來、一統布上下着用之處、午中刻頃上使御奏者番井上河内守殿を以、御香奠白銀五十枚御拜領。中將樣敷付迄御出向、上意御拜聽、追付御請被仰上御退出、御茶・御たばこ盆も不出之。其外御作法御例之通。但御白洲に津田刑部・今枝主水・堀主馬、組頭・物頭列居。且上意者、肥前守死去殘念可被存候、上にも御殘多被思召旨。

一、中將樣右爲御禮、御老中方御勤。但、就御忌中、御門前に取次之者御招出し、御口上被仰置。

同日は五月十一日

五月十一日。家中總代の士前田綱紀の病を問はんが爲金澤を發す。

〔政隣記〕

同日金澤ゟ、去八日立之早飛脚到來、御容躰申來。依之今日惣代御家中より之爲伺、御馬廻組八百石大橋織江信成未刻發出、上下五人早打に而十七日江戶着、御殿ゟ出、御家老本多圖書ゟ口上を述退去。大橋彌藤次御小屋に同居之處、十九日御暇、晒布三疋被下之、發出歸。

五月十三日。前田綱紀の訃報金澤に達す。

〔政隣記〕

五月十三日金澤ゟ九日立之早飛脚曁北川久兵衞參着、申下刻越後屋鋪に而、中將樣御意之趣年寄中ゟ申述。依之石川・河北等御門々々立寄置往來候樣、奧村伊豫守被申渡、御横目廻狀有之。依之翌十四日、頭以上常服に而越後屋敷ゟ御招、年寄中列座、伊豫守殿左之通御演述。

相公樣御療養不被爲叶、去九日午中刻被遊御逝去、無御料簡御仕合に被思召候。此段爲可被仰聞、年寄共迄御使者北川久兵衞被成下候。

中將樣御機嫌御障被遊候儀無御座候。此旨人持組頭・物頭等越後屋敷ゟ召集申聞、組・支配之輩ゟも申聞候樣に可致演述旨被仰下候。

右に付各御月番御宅ゟ罷出候。且年寄中より者、各使者江戸表ゟ被指上候。人持は爲惣代使者一人指上、定番頭以下者各同役或同列等連名紙面相調、御月番より之使者に傳附上之。尤翌十五日等例月出仕相止、定服を以御用勤之、勿論平士は不及肩衣に。將亦大聖寺御關ゟ物頭郡彌三兵衛、境之御關ゟ割場奉行石川定右衛門被遣之、各足輕五人宛召連添締仕。六月廿三日金澤ゟ歸。

一、御塋域者、野端山御先塋之側に可築旨に而、生駒右近・永原左京・岡田傳左衛門・成田宇兵衛野端山ゟ罷越、御廟所見立之。

十四日於金澤、人持・物頭越後屋敷ゟ罷出候節、寺社奉行生駒右近・永原左京野田山ゟ罷越有之相洩に付、伊豫守追而前記之通御演述有之。且、平士は不及伺御機嫌。將又頭分以上は大門を建、小門より往來、町中商賣、浦方獵可相止旨。其外遠慮之品々伊豫守申渡。組頭等より相觸、今日より廿日迄は町中簾を下し、密に居住。

廿日は後文に據れば廿二日の如し

〔三百二條舊記〕

相公樣當九日御逝去被遊候旨、十三日申刻御飛脚北川久兵衛殿御越に付、御領國中有合申御扶持人十村中御算用場へ相詰、十三日夜九つ半時分迄罷在候。御扶持人之儀はさかやき仕間敷旨、伊豫守樣より奧村織部樣ゟ被仰渡。平十村之儀者被仰渡無之候得共、爲冥加遠慮仕儀

十二日には訃報未だ金澤に達せざるが故に本文は十三日のことなるべし

者格別之旨被仰渡候に付、全郡聞合候處に、十村又はせがれ・弟等に而も御用相勤申ものは、此節月代仕間敷旨申合候。

五月十三日。前田綱紀の法諡を定む。

〔政隣記〕

五月十二日御謚號松雲院殿故參議從三位右近衛權中將肥州太守德翁一齋大居士。

右天德院和尚金澤奉謚號。假に廣德寺和尚一昨十日より、松雲院殿德翁一齋と奉稱。但御在生之内御極被遊候樣に申候。兼而松雲軒德翁一齋皆御自稱与云々。

一、中將樣御母堂御髮被爲切、被號預玄院殿与、翌十三日御家中之人々樣付に可唱旨被仰出。

五月十四日。前田綱紀の靈柩を下街道經由歸國せしむること等を定む。

〔政隣記〕

五月十四日、御尊骸木曾路通小松迄被爲入、夫より金澤天德院ゟ御移之筈に候得共、道中通人馬賃銀等過分高直に付、一統難儀仕段達御聽、今日下通与被仰出、則其段聞番を以、御老中・御用番ゟ御屆有之。

一、御忌中に付、御家中之人々輕き忌御貪着無之、兩親等重忌も、日數立候者頭等承屆之上、

出勤御構無之旨被仰出候由、今枝民部ゟ申渡。附殿中抔も右之御振与云々。

一、大御門御忌中朔望等にも開不申哉与、山崎九郎右衛門奉伺候處、其通与被仰出。且又朔望等裝束之儀、殿中之御樣子御家老中より御城坊主衆へ被承合候處、常朔望之裝束之由に付、明十五日頭分布上下、平士者肩衣着用に相極。

同日。金澤ゟ御大切之段相聞、年寄中より爲伺御機嫌、惣代之使者本多安房守・使番矢嶋紋左衛門差越、昨夕參着、今日御殿ゟ罷出、御勝手座敷三之間ゟ御家老中被罷出、口上被承之。

但十七日返答濟、白銀二枚被下之。

同日。御出棺今月二十日曉天与被仰出。

五月十五日。今日以降越中境より金澤に至る通路を修理せしむ。

〔政隣記〕

五月十五日於御國、越中境より金澤迄之御通拔道筋、今日より造之、細き所廣之、兩方に玉縁を取、砂を敷、小川には橋を懸、大川に者舟橋を掛る。十六日より野田山御廟所御普請始而、人足每日三千人餘と云々。

五月十七日。奥村伊豫守に命じて葬禮の奉行たらしむ。

〔政隣記〕

五月十七日。金澤ゟ十三日江戸發之早飛脚來着、御葬禮幷御法事御奉行、奥村伊豫守有輝ゟ被仰渡。依之御月番横山大和守ゟ被引渡之、且寺奉行永原左京・生駒右近に、青地藏人相加り可勤旨被仰渡。

一、御尊骸御迎筒廿挺、坂本驛迄與力指添早速指越候樣、今便申來。今日御持方與力兩人差添發足。

一、頭分以上大門を閉小門より往來之儀、前記十四日に有之通に候處、廿日より不及其儀に、常之通可相心得旨御月番被仰渡。

五月十八日。前田綱紀の靈柩成る。

〔政隣記〕

五月十八日御棺製、幅五尺長六尺三重之御座柩也。朝夕奠三汁九菜、中將樣御配膳也。於御旅著御與小將中配膳。於金澤天德院御殯御膳部も、三汁九菜に可旨被仰出。

五月十九日。前田吉德、綱紀の靈柩に供奉すべき諸士を召して之を勞す。

〔政隣記〕

五月十九日夜、御棺御供之頭分以上、御前ゟ召出御目見、御意も有之。

一、御出棺爲御見立、暮頃より御一門樣、幷御出入衆・御城坊主衆等追々御詰、御料理・御菓

子等出、御供中にも不殘御料理等被下之。御棺追分口御門御出之御左右御聞、不殘御歸。

五月十九日。金澤に於いて頭分以上の藩侯御機嫌伺に參出すべき期日を定む。

〔政隣記〕

五月十九日於金澤、御通棺御道筋、町奉行御横目明日可致見分旨、伊豫守申渡、且爲伺御機嫌、頭分以上左之通御月番宅に參出候樣、御月番大和守より御横目に被相渡。

御機嫌伺

五月廿五日・六月十日（御葬式に付相延十一日に成、）同廿一日。

右御用番宅に參出、病氣等之面々者以使者可被申越事。

五月二十日。前田綱紀の靈柩江戶を發す。

〔政隣記〕

五月廿日曉天丑上刻御發棺、中將樣追分に御門迄御步從。御家中之人々御邸內御道筋に蹲踞、備後守樣も追分口御門迄御送御一宿。上尾迄本多圖書爲御送被遣、御泊等如左。（但今日爲伺御機嫌頭以上御帳に付。）

廿日　御晝　浦輪　御泊　上尾

廿一日　御晝　熊谷　御泊　深谷

廿二日　御晝　新町　御泊　板端
廿三日　御晝　松枝　御泊　輕井澤
廿四日　御晝　追分　御泊　田中
廿五日　御晝　榊　御泊　矢代
廿六日　御晝　善光寺　御泊　牟禮
廿七日　御晝　關山　御泊　荒井
廿八日　御晝　長濱　御泊　名立
廿九日　御晝　能生　御泊　糸魚川
六月朔日　御晝　市振　御泊　泊
二日　御晝　浦山　御泊　魚津
三日　御晝　岩瀨　御泊　小杉
四日　御晝　高岡　御泊　今石動
五日　御泊　津幡

六日金澤御着棺之筈に候處、信州犀川洪水一日御逗留、川田に御廻。依之御着日相違。
七日御着棺、辰上刻天德院書院に御移、今朝卯下刻鳴動、前月八日之如し。御道中御供人如

左。
御家老成瀨内藏助、定番頭御近習大野木舍人・成瀨内匠、足輕頭御近習伊藤平太夫・武藤庄兵衞・富田主稅、御近習並組頭・中村典膳並物頭松尾縫殿、御表小將番頭水原清左衞門、御大小將番頭村田圭水、御使番富永數馬・渡邊傳藏・遠藤紋左衞門・村上杢左衞門・生駒藤九郎、御表小將横目永原彌平太・假御横目丹羽澤右門・小幡團四郎、奥御納戸奉行成瀨十左衞門・杉江助四郎、御膳奉行宮井十郎兵衞・原宗兵衞、會所奉行小幡平三、割場奉行横地伊左衞門、御宿振御大小將二人、宿割同二人、御表小將十二人、御近習番九人、配膳役二人、御大小將六人、新番四人、御醫師等四人。

五月廿一日。今明日江戸廣德寺に於いて前田綱紀の追弔法會を行ふ。

〔政隣記〕
五月十五日、當廿一日・廿二日於廣德寺御法事御執行、惣御奉行今枝民部其外夫々被仰出。

〔護國公年譜〕
一、五月二十一日・二十二日江戸於廣德寺、松雲院樣御法事御執行。御法事相濟以後、在江戸御目見以上之人々、兩日に相分拜禮被仰付候。

五月廿二日。金澤の民家弔意を表する爲に懸けたる簾を撤す。

〔政隣記〕

五月廿三日金澤町中今日より簾を揚、商賣之魚鳥は鹽物を賣買与云々。但六月朔日より生る魚鳥商賣之。

五月廿六日。前田綱紀の靈柩金澤に入る際路傍に拜觀するを禁ず。

〔政隣記〕

五月廿六日於金澤御觸

御遺躰御通被遊候御道筋に、拜み可申ため男女罷出不申樣に、組・支配家來末々迄急度可被申聞候。組等之內裁許有之人々に者、是又夫々申渡候樣可被申聞候。且又同役中にも可有傳達事。

五　月

五月廿六日。年寄以下の士、十七日金澤より發せしめたる弔問の使者江戶に着す。

〔政隣記〕

五月廿七日、前記有之通、年寄中等より爲伺御機嫌指上候使者昨日參着。但十七日金澤出足、

前田近江守等使者八人一所に、今日御勝手座敷於三之間、御家老中列座口上被承之。披露御馬廻頭佐々木佐兵衛。畢而御家老中惣代使者津田玄蕃家來石井半兵衛呼出、右同斷、御大小將横目兩人指引之。且諸頭中傳附之紙面共、御月番奥村伊豫守使者持參、御席執筆役に相渡之。來月四日何も呼出、右同所に而夫々口上、御家老中列座被申渡、御目錄を以白銀二枚宛被下之、佐々木渡之。

五月廿八日。前田吉德江戸に於いて赦を行ふの命を發す。

〔政隣記〕

五月廿八日於江戸大赦被仰出、御家老中より以書立、御吟味方物頭幷御横目中に被相渡、夫々申渡之。

五月廿八日。御側小將及び御近習横目の職名を改む。

〔護國公年譜〕

一、五月廿八日御側小將を御奥小將と名目改、同御番頭茂同事。御近習御横目茂御奥小將横目と改。

六月六日。家中の月代を剃るべき日限を定む。

〔護國公年譜〕

六月六日さかやき剃候儀、左之通御横目中より申觸在之。

一、年寄中・御家老中五十日。

一、相公樣御近習相勤人々五十日。

但、御徒幷御居間坊主茂同事。

一、中將樣御近習之頭分・平士其外表向與力以上は三十五日。

但、中將樣御近習之御徒並御居間坊主同事。

一、御徒幷並之者共は三十日。

六月七日。前田綱紀の靈柩金澤に着す。

〔政隣記〕

六月七日寅刻津幡御出棺等爲御迎、本多安房守政質參向、天德院迄之御先乘勤之。御道筋枯木橋より尾張町・尾坂之下、於此所河北御門坂に向暫時御居棺。夫より修理谷坂・石引町より、辰の上刻天德院書院え御着棺。年寄中・御家老中は山門の外鐘樓之前に蹲踞、富山・大聖寺御使者は如來寺入口に蹲踞、頭分以上下馬先、人持中淺野川橋爪え罷出蹲踞、平士役懸り前々御着城之節罷出候御役人、尾坂之下津田玄蕃向棚際に蹲踞。十日子刻御葬式之御規式始り、

卯刻に畢、野田山ゟ被爲移。此節御先乘長又三郎高連。

六月十日。前田綱紀の遺骸を金澤城南野田山の塋域に葬る。

〔護國公年譜〕

一、六月十日寅刻於天德院御葬式相濟、野田ゟ御移。御葬式幷御中陰御法事奉行奥村伊豫守有輝。

〔政隣記〕

一、十日卯刻御靈柩野田山塋に御葬禮、役懸諸頭以上、且御供之人々、幷殯棺勤番之士、白帷子・淺黄上下着用。御行列記無之。

六月十四日。今日より天德院に於いて前田綱紀の追弔法會を營む。

〔政隣記〕

一、十四日・十五日・十六日於天德院二夜三日之御法會、拜禮與力以上。十八日・十九日於玉泉寺境内御施行。

〔政隣記〕

六月十一日桂香院幷伴僧發足、江戸ゟ被歸。是御道中御供にて參被居也。十四日・十五日・十六日御中陰御法事、御家中拜禮被仰付、與力も拜禮被仰付。跡々與力拜禮無之處、此度於江

戸拜禮被仰付候故也。且二條樣・三條樣・四辻殿・安藝守樣等御代香御使者有之。於御寺御馳走、大村牛藏勤之。西本願寺代僧有之、香奠献上。香雖奉願、親類之外及斷旨、年寄中より被及返答。右二條樣等御各今日十六日發足歸國。但使者於旅宿も精進御料理、安藝守樣御使者へ者鯛燒物出之。是吉長朝臣を被祝と云々。

六月十八日。金澤に於いて大赦を行ふ。

〔政隣記〕

十八日大赦、出牢五十三人。赤尾三太夫遠刑等之儀末々記之。

六月十八日。大阪御買手役赤尾三太夫等越中五ケ山に流さる。

〔政隣記〕

六月十八日。赤尾三太夫儀、享保二年大阪御買手役に罷越、於大阪品々不行跡有之。同六年九月廿七日被召返、御僉議之上篠原將監一輝へ被預置候處、篠原及大病、富田織部重任へ御預替。其後永原源佑孝商へ御預之處、今日於源佑宅、公事場奉行津田帶刀・奥村源左衛門、幷御大小將横目二人・公事場御横目曁御馬廻組頭原將監列座、三太夫儀死刑にも可被仰付候處、今般依被行御大赦一等御宥免、五ケ山之内大崩島村へ流刑被仰付段、源左衛門申渡之。三太夫家來大阪に而御用方爲相勤候林市郎左衛門、只今迄禁牢之處流罪、御歩横目安田孫丞儀、

三太夫同詰之處曲事之趣不及言上等に付、禁牢被仰付置候處、今日流刑、其外三太夫・頼遠慮人御赦免有之。

但七月二日右三人配所に被遣之。

六月十八日。今明日金澤玉泉寺に於いて窮民を賑救す。

〔政隣記〕

六月十八日・十九日於玉泉寺御施行。十八日男、十九日女也。足輕頭杉江杢左衛門・靑地藤太夫・茨木源左衛門奉行之、御歩足輕等從之。

〔漸得雜記〕

加州石川郡銀山之咄し

石川郡熱野村と云所に善兵衛と云者昔有。百姓にてありしが、不如意にて高にもはなれ、今は日用取をして身すぎとす。母もまた奉公ともなくやとはれあるき、其日を過しける。享保九年六月於玉泉寺前御施行米就被下、善兵衛も頂戴仕、則其米を母にも戴かせ可申ため、母がやとはれ居所へ行、件の米をあたへ、暫休し内にねぶりける夢に、いづくともなき人來て、四十萬山の奥山に銀山あり、其方山先と成て、公儀に訴掘候べし、後は必富貴の家と成て、母をもこゝろ安く養ふべし、汝親に孝有に依て告しらしむる所也。我はこれ山神なりと宣ふ。

善兵衛夢覺め、不思議におもひながら、實夢やらん虚夢やらんとおもふ所に、又其夜も同じ夢をぞ見たりける。善兵衛あまり不審はれず、鍬・斧など取持つて、夢に見たる山へ行て見れども、替りたる事もなし。扨は二度見たるは思ひ寢の夢ならんと、空敷歸ける。其夜も又夢に見けれども、いつもの虚夢ならんとさらに信せず。明れば野々市と云所へやとはれ行けるに、其夜は夢ともなくうつゝともなく、幻のごとく異人あらはれ、汝度々夢中に告るとはいへども、銀山のあり所をしらず、今日必彼山へ行べし、まさに銀の山を見べしと也。善兵衛此時信心肝に銘じ、疑心少しもなく、又鍬・斧を携て件の山にわけ入て見れども、爰にもかしこにも銀山とおもふ所ぞなかりける。又空敷歸らんとする折節、雉子の聲聞ゆ。見ればむかうにあり。たちもやらずとりよげに見えし程に、雉子なりとも取て歸らんとおもひねらひ寄る。鹿を追ふ獵師は山を見ず、躑躅かぶにつまづきうつぶしになる。臥たる所の土悉光りあり。扨は是こそ神の御告ならんと、鍬をうごかし土を取て歸り、人々に見せけるに、常の土とは違て希有い土也。金澤へ持參して、兩替座・白銀屋などに見しむるに、いかさま銀砂成べしと云。六十六部の同國人是を見て、我よく見知れり、是は銀山にてもなし、金山にてや有らんと云。又ある人の曰、我佐渡にありて、十六年にて今年當地に來れり。佐渡の金山の土に少も不違など云程に、所の与合頭・肝煎等に内談して十村高尾村六郎兵衛取次て、郡奉行・御算用場表

相済、則善兵衛古名をすて、山先金右衛門と改、まづこゝろ見に人足五・六十人程宛懸て道を作り、少々小屋掛などして掘らせける。かゝる所に旅僧五人、見物のため假小屋の邊に來る。役人ども内には不入。僧の曰、尤也、去共金山を能見覺えたる故、見物に立寄所也。見るには不及ども、口利の仕様あり。此山盛ならん山ならば、うは石とて大き成石有べし。其邊の草木に蜘の巣のごとく成物光り有て見ゆべしと云に付て、能く見れば南の方に大石あり。又蜘の圍の如く成物いくらと云數をしらず。草々も木々も有。扨こそ御出家達御入候へとて、見物させける。何國の人ともしらず、不審。亦近きあたりに村里もなきに、深更に及びては難の聲聞ゆる事も有とぞ。扨敷口多く有といへども、先夢中に告給ふ所を掘べしとて、金右衛門指圖して掘かゝる。つるといふは色青黒ければ土に、金の砂をまぜたる如く、重き事限なし。二鍬三鍬を一人持とす。外は赤き土もあり、黒き土もさまぐの土有を、近き谷へ捨るに、重きゆゑ人足多入て菓行事なく、三間四方計掘る内に、大坂より鑄物師を呼下し、四度吹せけるに、銀目五分・八分或は一匁もあり。是を大吹と云へり。鉛を多く入て吹わくると也。兎角の内に十月末になるまゝ、納所の手擬にも可成、又雪も不降先にとて、十一月四日切に仕廻、來春大普請して、人足數百人にて、敷口三ヶ所にして可掘に究りける。

右は日向喜兵衛と云もの、山先金右衛門聟なれば、十村高尾村六郎兵衛差圖にて手傳人と

なる故、委細に知て噂し候を書付申候。喜兵衞假小屋に晝夜居て、雛の聲なども度々聞しと云。愚息當昌が曰、初金右衞門が雛子を見て金山をしる。雛・雄は三十六禽之内西の正副なり。西は癸金なれば、これ誠の金山ならんと云。喜兵衞喜悦して去。

森田小兵衞

盛昌書

巳正月吉書初之日

巳は享保十年

六月十九日。前田綱紀三十五日の追弔法會を天德院に行ふ。

三十五日の法會は正當にあらず

〔政隣記〕

十九日、御三十五日御法事有之。人持之二・三男、竪頭分之嫡子拜禮。將又階下に而、十村・山廻之内、金澤等所々町年寄之内、拜禮被仰付。

六月廿四日。本願寺別院に於いて前田綱紀の追弔法會を行ふ。

末寺は本願寺別院なり東西何れとも知れず

〔政隣記〕

六月廿四日・廿五日於末寺松雲公御位牌を建、三部經執行有之。

六月廿八日。前田綱紀四十九日の追弔法會を天德院に行ひ、翌日百日の法會を豫修す。

〔政隣記〕

六月廿八日御四十九日之有御法會。此日因幡等より之御使者相詰。惣而御使者往來之道筋は、旅宿より本町通・枯木橋ゟ出、材木町通り馬坂を上り、天德院ゟ詣。廿九日御百ヶ日之御法會御取越有御執行。

七月九日。前田綱紀の位牌所及び墓所參拜に關して令す。

〔政隣記〕

七月朔日於天德院松雲院様御牌前ゟ、人持・頭分之面々、當九日より毎月勝手次第、當盆中より野田御廟ゟ勝手次第參詣。平士は不及其儀に。但御近習相勤候平士は格別に候間、勝手次第參詣候様、御月番横山大和守被申渡。但七月九日盆中は、野田御廟ゟ平士參詣勝手次第。併盆中は群集に付、廿日頃迄之内勝手次第与重而御觸有之。

七月十一日。前田吉德江戸を發し初めて入封の途に就く。

〔御年表〕

七月十一日公江戸御發駕、廿二日御歸國、始て御入國也。

〔護國公年譜〕

今枝民部直方

津田刑部敬脩
今枝主水恒明

十一日	江戸發駕	御晝	浦和	十一日	御泊 桶川	十二日	御晝 熊谷
十二日	御泊 本庄	御晝	板鼻	十三日	御泊 坂本	十四日	御晝 追分
十四日	御泊 田中	御晝	矢代	十五日	御泊 善光寺	十六日	御晝 關川
十六日	御泊 荒井	御晝	長濱	十七日	御泊 能生	十八日	御晝 青海
十八日	御泊 境	御晝	浦山	十九日	御泊 魚津	二十日	御晝 東岩瀬
二十日	御泊 高岡	御晝	今石動	廿一日	御泊 津幡	廿二日	金澤御着

七月廿二日。前田吉德金澤に着す。

〔政隣記〕

七月廿二日

一、御供御家老今枝民部、於瀧之御間御膳下、御料理二汁六菜・御肴・御菓子被下之。御馳走人御馬廻頭不破平左衛門・御小將頭黑坂左兵衛、御かよひ御大小將。但年寄中・御家老中にも、一統於檜垣之御間御膳下、右同斷御作法に而。

一、津田刑部・今枝主水於矢天井之間、御料理右同斷。御馳走人御小將頭溝口七太夫・御歩頭寺西三郎平、御かよひ御大小將。御供之組頭・物頭等不殘、御同間御屛風に而仕切、一汁五菜御料理被下之。御馳走人右同斷、御通ひ御歩。御城迄御供之士平士幷御步小頭、御廣間之後

通於御廊下、一汁三菜御料理被下之。御馳走人組外御番頭・御大小將御番頭・同御横目一人宛、給仕坊主。與力・御歩横目・御歩・御算用者・御料理人・御細工者御料理同所、裁許御歩小頭・御賄方・與力・御歩横目一人宛、給仕同心。足輕・小者に者御算用并御作事所に而、赤飯一尺四方之片木に七合五勺宛盛之、鯣二枚宛、土器一つ宛相添御酒被下之。裁許御歩横目一人宛・御歩二人宛、給事小者。

一、御祝儀として、年寄中より御肴一種宛獻上。

一、右旅裝之儘頂戴之。御着後等到着之人々に者、前記之通御料理等不被下之。

一、榮君樣并御前樣方附物頭並之人々在金澤之面々、御使者相勤申分、於矢天井之御間一汁五菜之御料理被下之。御馳走人・給仕御供之頭分同事。

一、御家老役小松御城代前田修理知頼、御着城爲御禮使、今日申下刻發出、九月二日歸着。

一、同人發足前御目見、金三枚・紗綾三卷・御羽織一拜領。

七月廿三日。今明兩日金澤の町民前田吉德の入國を祝す。

〔政隣記〕

一、今明日町中簾を下し奉賀。

七月廿四日。前田吉德來月朔日以降諸士の拜禮を受くべきを告ぐ。

〔政隣記〕

今般御入國に付、御家中之面々御禮被爲受、來月朔日より段々獨禮之等に候。獻上物等年頭之通に候。日限之儀追而御横目ゟ可相達候條、可被承合候。右御禮之儀、組・支配ゟ可被申聞候。組之内裁許有之人々、是又申聞候樣被申渡。同役中ゟも可有傳達候事。

但、頭分以上せがれも、年頭之通御禮被爲受候事。

以上

七月

今般御家中之人々御禮被爲受候に付、年頭之通鳥目、御奏者番より頭・支配人ゟ受取申答に候。年頭に者御禮錢座封を付鳥目取替候得共、今般は餘日無之候間、切手を以鳥目受取、追而座封之銀子取替可被申候。鳥目請取候儀延引候而者、御奏者方必至子指支申趣有之候間、當月廿八日を限早速受取可被申候。組等之内裁許有之面々ゟも、是又申聞候樣に可被申談候。且又同役中ゟも可有傳達事。

七月

別紙二通之趣可被其意候、以上。

七月廿四日　　横山大和守

備後守は前田利章

是月は七月

殿下は關白二條綱平　右大臣は二條吉忠

七月廿五日。大聖寺侯前田利章の使者金澤城に登りて前田吉德の入國を祝す。

〔政隣記〕

七月廿五日京・大坂町人共御目見。右獻上物品々。畢而、從備後守樣御着城御祝儀之御使者生駒源五兵衛虎之間着座、於御居間書院御目見相濟、御廣間二之間に而御料理被下。相伴御馬廻頭青地藏人、給事御歩。

七月廿六日。二條綱平の使者金澤城に登りて前田吉德の入國を祝す。

〔御年表〕

是月京都二條殿より御使者北小路丹波守來る。廿六日登城、御入國の御祝儀として、殿下より御太刀馬代・綸紗三卷・二種五百疋、右大臣殿より御太刀馬代・紗綾三卷・二種五百疋、女二宮の御方より紗綾三・二種五百疋、辰君・永君・寶樹院殿より一種三百疋宛進ぜらる。是日丹波守旅宿へ退出後、御使者御使番生駒藤九郎信行を以て、白銀二十枚・紗綾三卷被下之。追て右御禮の御使者仙石内匠を遣さる。

〔政隣記〕

廿六日今般御入國爲御祝儀、他國より之御使者御用主付、御小將頭溝口七太夫・御先手靑地藤太夫・御大小將橫目高畠善太夫江、昨日被仰渡、追々御使者來候分左之通。

二條樣御使者 北小路丹波守	昨廿五日來着、今日登城。
備後守樣御使者 生駒源五兵衛	廿四日參着、昨日登城。
攝津守樣御使者 本多治右衛門	廿六日參着、廿八日登城。
長門守樣御使者 淺野勘右衛門	同 斷 同 斷
肥後守樣御使者 三宅源右衛門	八月四日參着、八月六日登城。
彈正樣御使者 岡崎源六	同 斷 同 斷
三條殿御使者 河村日向守	八月六日參着、同七日登城。
安藝守樣御使者 三谷猪左衛門	同十四日參着、同十五日登城。
右衛門督樣御使者 羽田讃岐	同 斷 同 斷
高辻殿御使者 德田主水	八月十六日參着、同廿五日登城。
四辻殿御使者 岡本式部	同 廿 日參着、同 斷
西本願寺殿御使者 長瀨釆女	八月二日着、登城は無之、三日御使勤。

八月朔日。本日以後家中の諸士前田吉德に謁してその入國を賀す。

〔政隣記〕

八月朔日御入國御禮卯ノ刻揃、巳ノ刻過御出、於御小書院諸大夫幷年寄中・御家老役・若年寄中御禮。畢而於御大廣間人持諸頭・御與小將・御表小將・御大小將・御醫師・御射手・御異風・新番坊主頭・三十人頭獨禮被爲請。

但二日・三日・四日・七日・十一日に、御家中一統與力迄、且寺社方等、都而年頭之御格を以日柄相分、獻上物も年頭之通不殘獨禮被仰付。

但年頭長袴着用之分長袴着用。

〔政隣記〕

二日御入國御禮人卯刻揃、巳中刻御出。昨日當番之頭等、且御馬廻組・遠所馬廻御禮被爲請候事。

〔政隣記〕

三日御禮人卯刻揃、巳刻過御出、昨日當番之御馬廻組・定番御馬廻組・組外幷年寄中平士・寺社奉行支配組外・町同心・火屋御用・御廐方。

〔政隣記〕

四日御禮人卯刻揃、巳中刻御出。昨日當番之殘、且御歩小頭等、御料理頭・與力・御大工頭。井柳之御間に而、御領國町人・檢校御通掛之御禮被爲請。

〔政隣記〕

六日右同斷、人持嫡子二三男・頭分之嫡子御禮、辰中刻御出、於御小書院被爲請。畢而於御大廣間、一昨日當番殘被爲請。

〔政隣記〕

九日・十日・十一日御禮人卯刻揃に而、朔日以來病氣故障等に而相延候人々也。巳中刻御出被爲請。

八月十四日。今後故なく改名することを禁ず。

〔政隣記〕

八月十四日、向後無謂名改申間鋪旨被仰出。

八月十七日。前田吉德金澤神護寺及び野田山の廟に參詣す。

〔政隣記〕

八月十七日神護寺ゟ御參詣之節、於裏御式臺に十村等御通掛り御禮被仰付。但今日野田にも御參詣。右御用に携候人々迄布上下、御式臺當番御番頭始常服。

神護寺は城内東照宮附屬の佛寺野田山は前田利家以下の墓所

八月十八日。御次番の職名を改む。

〔護國公年譜〕

一、八月十八日只今迄御次番、御近習番と唱可申旨被仰出。

八月十九日。幕府前田吉德が本年參覲すべき時期を令す。

〔政隣記〕

八月廿三日、江戸表より當十九日出足之早飛脚到來、御參勤御時節御伺之御使者村木右衛門、十九日朝殿中に罷出之處、御格者雖爲九月、十一月上旬御參勤可被成旨被仰出候由、御奉書寫到來之事。

但、杢右衛門者廿八日御奉書携歸着。

八月廿一日。前田吉德入國の祝儀として座頭及び瞽女を賑恤す。

〔政隣記〕

八月廿一日御入國爲御祝儀、座頭・盲女に青銅二十五貫文被下之。

九月三日。石川郡の百姓等、村井村の十村與三右衛門等の家を襲ひて騷擾す。

〔袖裏雜記〕

昨三日之曉頃、石川郡御扶持人十村村井村與三右衞門、同せがれ御扶持人十村六左衞門父子宅へ、百姓七・八百人計罷越及騷動候趣、委細御算用場奉行別紙之通に御座候。いまだ百姓相騷申躰に候間、今晩より足輕共遣置可然与申故、其通に相心得候樣申渡候。御郡奉行・改作奉行被下足輕迄にては致不足候故、不足之分は割場より相渡させ申候。御縮方等之儀、油斷不仕樣に右奉行等へ申渡候、以上。

九月四日　　　　横山大和守

前田土佐守等兩人樣

右は今年八月廿日頃、一統秋縮紙面改作奉行迄指出候處、右三日曉八半時頃、與三右衞門等宅へ七・八百人罷越、石まくり仕、六左衞門家の木戸打破、與三右衞門家の木戸幷前口打破、其外戸障子等蹈破、秋縮御請爲出候儀者、與三右衞門所爲に候間捕可申と相尋、與三右衞門父子共立退候以後、夜明頃に引退。何も面を包廻し、笠を着難見分旨。與三右衞門は十村之内功者故、御用方棟取も仕候故、右之族に存候旨等、御算用場奉行紙面也。

九月十八日。前田吉德老臣本多安房守の屋敷に相對する明地の竹木を伐採すべきことを命ず。

安房守向之明地は今の第六園南部

蓮池は今の第六園西北部

九月十八日伊豫守御前へ罷出節御意等之書立之内

〔袖裏雜記〕

一、右之御序に申上候は、安房守屋敷向之明地、只今は御用にも無之儀に候哉、廻り之園中付候儀も御費成儀、其上ことい外廣き所に候故、竹木も伐取申躰不締に而、番人も指置候而無用之儀奉存候間、茂り候竹木伐爲拂、見え透候樣にもいたし、園も取放候樣にも可被仰付哉之旨達御聽候處、なる程左樣に思召候。此儀者頃日も彼是と被仰出候事に候。渡屋敷も有之候而も、ことい外晴ヶ間敷所故、いづれも望申者も有之間敷樣子に候。御近習之輕き人々などに被指置候事も難被爲成事に候。左樣に候へばとて只今伊豫守・大和守に被返下候と申儀も、却而迷惑なる儀に候。それ故此間も見分人などをも被遣、樣子をも爲御見被成候處、內には金澤など、中清水又は流も有之候由に付、鳥など附候樣にも可成哉と、三十人頭などへ御尋被成候處、茂り候木を伐拂候者、流などをも有之候故鳥も附可申由申候。此間も御氣鬱も被遊候付、蓮池之邊に御出御行步被成候へども、これは長み迄にて幅無之故、鳥などは附不申候間、右之明地左樣之御步行御慰之ためは、又は若子樣御誕生被遊候時分、御部屋屋敷などにも可遊被候哉。其上右之通只今迄有來候家者其通に候。高みに候故右明地渡屋敷にいたし、家も出來いたし候而は、火之用心も御城へ近く、東風などい時分は別而氣遣敷儀思召候故、とかく

七千石內二百石與力知は千石內二百石與力知の誤

竹木をすかし、烏之附候樣にいたし可申旨、今朝三十人頭へも被仰渡候由御意に付、左樣に御座候へば御尤に奉存段申上。

九月廿一日。人持組堀主馬恣に前田吉德の室に入り言上する所あり。後流に處せらる。

〔政隣記〕

九月廿一日暮頃、人持組七千石內二百石與力知堀主馬秀滿言上之筋有之旨に而、御座間に罷出、巷說區々雖有之、委曲之實說不相知。翌廿二日本多安房守於宅、御大小將橫目前田源兵衞・栂五左衞門指引、御步橫目長谷川釆右衞門・菅野內右衞門相詰、堀主馬いとこ青山隼人、主馬伯父永原左京相詰。主馬參出之上、安房守・奥村內記列座、左之通主馬に被仰渡。

今般直言上之品之儀に付而、御近習之者等に一往之屆も無之、御前に罷出候段、不都合千萬に候。委細者追而可被及御沙汰候得共、先一門共に被指預之旨被仰出。

右相濟、青山隼人方に引取、縮所に入置之。大小は右御步橫目受取、隼人家來に相渡。且隼人・左京に被仰渡之趣左之通。

堀主馬儀、今般直に言上之品之儀に付而、御近習之者共等に一往之屆も無之、御前に罷出候段不都合千萬に候。委細者追而可被及沙汰候得共、先一門中に被指預段被仰出候條、各

初一家之面々被申談、急度締可有之候。締所各兩人之内可然候。

右相濟、安房守登城。且主馬儀十月廿七日能州島ゟ蟄居被仰付、御知行被召放、十五人扶持被下之旨、公事場奉行生駒右近・津田帶刀、御大小將横目高畠善太夫・大河原八郎左衛門・青山隼人宅ゟ罷越、帶刀申渡。

廿二日御小將頭兼御近習青木新兵衛直康、昨廿一日堀主馬言上之品に付指留可申處、仕形不都合に被思召候由。先指扣之儀、御月番本多安房守殿被申渡。同廿四日安房守殿於御宅、御大小將横目大河原八郎左衛門・奥村長左衛門指引に而、安房守殿被申渡趣左之通。

今般堀主馬儀に付、御前ゟ罷出候儀、押留樣も可有之候處、不調法之仕合に候。急度遠慮可仕旨被仰出。

右新兵衛當番之内、主馬御次ゟ可罷出申談置候處、新兵衛歸宿不在合に付而、御座之間ゟ罷出候由風説。然共此儀不慥候事。附新兵衛遠慮、翌年九月七日御免、兼御近習頭者被指除候。

御近習番御大小將組

石野知太夫

神尾助七

佐々木太左衛門

廿一日泊番に候處、堀主馬御番所前相通候儀不念に被思召、先爲指扣置可申旨、今廿二日被仰出。同廿七日右主馬罷出候時分押留不申、不調法被思召候。依之閉門被仰付、御近習番被指除候旨重而被仰出。

右翌年九月七日御免、太左衛門は閉門之内病死跡目斷絕。

奧附御步橫目
市原平左衛門

指扣閉門等同斷。

右同日御免。

一、御表小將堀嘉忠次秀隆、堀主馬いとこに付指扣、御大小將堀萬兵衛・堀彌三左衛門もいとこに候得共、不及指扣に候。嘉忠次は御近邊故指扣候。

〔浚新秘策〕

一、九月廿二日初而粟ケ崎へ放鷹に御出可被遊旨に而、廿日頃より急に御用意有之、惣樣御用中川式部一人に而奉之、其々申談有之候。廿一日夜半俄に奧村伊豫守御用之旨に而被爲召候。伊豫御前へ罷出、御直に奉之。翌月番安房守以下御家老役に至迄、不殘召集示談有之。退出之後、安房守宅へ靑山隼人・永原左京を招き、御橫目兩人御徒橫目兩人參出候而、堀主馬

御用之旨呼寄。安房守・内記兩人にて申渡候ハ、主馬今夜御前へ罷出一封指上、並段々申上候趣御聞届被遊候。ケ樣之品申上間敷儀に而は無之候。乍然罷出樣、疎忽千萬成爲躰に思召候。依之一類共に御預候間、隼人方へ引取可申候旨被仰渡候所、主馬御請ハ、疎忽に御前へ罷出存寄等申上、御手擊に茂可被遊儀与奉覺悟候所、ケ樣に被仰付候儀奉畏候旨申述、夜ざくみへ入置、隼人方へ引取申候。主馬御前へ罷出候首尾如左に候。兼而存寄之趣有之、或時青木新兵衛宅へ罷越申聞候ハ、御入府以來御仕置之內、年寄中御相手に而被仰付候儀、不可然事共多有之候。御人持之內役奏者番五人被仰付置候而、外に五人本役被仰付候。剩拜領物迄も本役へ迄被下候儀、何とも人之納得不仕事に候。其外今般役替、御加增等許多被仰付候內、不順之儀共有之候。御近習より出申者共へ過分之御加增被下候。松雲院樣へハ御孝心之餘に而も可有之候へども、甚偏頗に相見申候。近日御放鷹之御催有之儀、不可然奉存候。隨分御孝思之樣に相見申候所、此事に而空敷罷成申候なと〻申類に付、新兵衛兼而其身も存寄候儀、左樣之御志感入存候。御取次可申旨及挨拶候處、則一封懷中仕候旨に而出之申候。內見仕候所、一々右之趣共書載申候に付、請取之、得御內意候而入御覽候所、主馬心底無殘所申上哉と思召候。其內御鷹野之儀者、江戸表へも御尋被成、不苦趣御聞合之上に御出被成候事に候。此旨可申聞旨御意有之。新兵衛主馬宅へ罷越申含候得者、感淚相催ばかり与申候由。乍然廿二

兵左衛門前に太左衛門とあり

日放鷹之儀、達而御止被遊候樣に仕度候。同敷は御前に罷出申上度旨望候所、御前に罷出候儀は相扣可然旨、再三新兵衛に迄被仰出、則廿一日暮前新兵衛紙面を以其段申遣候所、自是可申入与返答申入候而、忍而暮過罷出、取次もなく御居間迄罷出、堀主馬に而御座候旨申上候處、是へ近く罷寄候樣に御意に付、其邊にて脇指解、羽織ぬぎ候へば、下に上下着用、ねり寄申候。御前には上段に被成御座候。下段迄罷出、一々申述、一封上之申候。御横目毛利助右衛門御召被成、主馬は表に之路存知申間敷候、つれ候而罷出候樣に被仰付。新兵衛其時分は下宿仕、不存候。此趣一々伊豫守に被仰聞候。依之新兵衛も急度被仰付候。御近習番石野知太夫・神尾助七・佐々木兵左衛門、并御徒横目市原平左衛門、不念至極に而、主馬を見咎不申旨御尤、役儀取擧、閉門被仰付候。十月廿一日江戸御發駕之後、廿七日公事場奉行兩人(生駒右近・津田帶刀)。御横目兩人指副、青山隼人宅に罷越、主馬に被仰渡候趣は、今度言上之紙面等指上候節、御近習頭共を以如何樣にも相伺、被仰出候上を以、言上之首尾も可有之所、不調法千萬成仕樣に思召候。依之能州に遠島被仰付、十五人扶持被下置候。於島蟄居可仕候旨、被仰渡候。

〔菅家見聞集〕

一、堀主馬儀十一月廿七日能州に被遣に付、御歩者兩人指添可申旨、十一月廿三日御歩頭に

安房守殿御申渡候。

付札に、御歩頭江

覺

一、堀主馬儀、能州嶋之內須曾村江蟄居就被仰付、今月廿七日令發足候間、主馬居所迄指添罷越候御歩大柳權兵衞・中川嘉太夫、廿七日青山隼人宅江罷越候樣に可被申渡候。其刻公事場奉行一人・御横目一人幷御歩横目茂罷越筈に候條、此面々參出次第主馬請取、指添罷越候樣可被申渡事。

但右之節御歩横目木村金四郎指添、尤主馬居所迄罷越申筈に候事。

一、道中足輕横目一人・割場附足輕三人幷小者二人指添申筈に候事。

一、御歩横目幷御歩、且又足輕等、居所迄附罷越、山本新左衞門等へ相渡、夫より可罷歸事。

一、主馬儀駕籠に乘せ、隼人方より令發足候條、其儘指添罷越可申事。

但、主馬家來三・四人勝手次第召連罷越、尤居所に而茂召仕申筈に候事。

一、若道中一日懸に難成候者、見計致一宿候樣可相心得候。勿論夜中勤番等之儀、緖宜樣可仕事。

一、路次賄料會所より受取、足輕に申付賄いたさせ可申事。

一、主馬刀・脇指は兩人之御歩請取之、道中は小者に爲持罷越、於彼表山本新左衞門等ゟ相渡、右奉行より主馬ゟ相渡候樣に可相心得事。

一、右之外諸事跡々之格をも承合、前々之通相心得候樣に、是又可被申聞事。

右之趣大柳權兵衞・中川嘉太夫ゟ被申渡、御歩横目木村金四郎も承知有之候樣可被相心得候、以上。

十一月

私共儀前月廿七日朝四半時分、於青山隼人宅堀主馬請取之、同日暮頃高松ゟ參着一宿仕、翌廿八日朝六時高松致發出、同日七時過所口ゟ參着、御奉行山本新左衞門ゟ及案内候處、其夜新左衞門旅宿ゟ被罷越候に付樣子申達、腰物大小相渡申候。其翌廿九日四時分、所之口小代官渡邊準左衞門・渡邊市郎左衞門・并同所足輕四人指添致出張、晝九半時頃嶋之内須曾村へ着船仕、百姓之家ゟ罷越、主馬儀右小代官并島十村太間ゟ相渡、私共は同日八時過歸船仕候。諸事安房守殿被仰渡候趣に相勤申候而、昨二日歸着仕候、以上。

辰十二月三日

大柳權兵衞　判

中川嘉太夫　判

青地藤太夫殿

九月廿二日。前田吉德石川郡粟ヶ崎に放鷹す。

〔護國公御年譜〕

一、九月廿二日粟崎邊初而御放鷹。御供中川式部（御家老役若年寄兼）・奥小將御番頭・同御横目替々罷出候。御表小將・新番迄罷出、御大小將二人も不罷出候。表向組頭も不罷出、御近習頭に而相濟。

一、同廿五日中島邊に御放鷹。此時は御大小將よりも二人御供罷出候。當廿二日粟ヶ崎へ御出之時は、御供人鑓等爲持不申候得共、遠方故從者一通り召連候事。

九月。町人の婚禮を行ふ家に礫を投ずるを禁ず。

〔御定書〕

覺

一、町方に而婚禮之砌石を打、戸障子等迄打破、理不盡之仕形有之由相聞、不届候。自今右之類有之者、早速捕へ、月番之番所へ召連可來候。若其通に打捨置候て、後日相知候はゞ、名主五人組迄越度可申付候。此旨町中可觸知者也。

九月

十月十日。前田吉德、家老及び若年寄の執務規程を定む。

〔護國公年譜〕

一、十月十日、只今迄御家老役・若年寄勤方入込居申に付、向後之勤方御書立を以今日被仰渡。

〔御家老勤方〕

護國院樣御入國之上、十月十日於御前被渡下、則右寫幷其節之御樣子別紙之通也。

一、今日御用之儀御座候間、御家老中不殘、若年寄中不殘、御前に御召可被遊旨、以左門被仰出。七時過何も一所に御居間書院へ被召出、御家老中勤方只今迄得与相極不申に付、此度御書立御渡被遊候。且又若年寄中之勤方も御書立御渡被遊、此通候、玄蕃・式部儀者若年寄相兼有之候間、彌申談相勤候樣に御意被遊候。右以後式部御召被遊、猶更勤方被仰渡候。御家老共儀は御仕置方も相勤候。右御渡被遊候御書立には無之候得共、只今迄之通りに相勤可申候。但御書立御渡被成候樣に、何も存る儀に候はゞ、御別紙に成共御調可被成候哉。右御口上に而被仰聞候得ども宜候哉。何茂僉議次第与被思召候。御書立御渡に不及儀に候はゞ、彌何茂只今迄之通りと相心得候樣に可申聞由御意被遊候に付、民部初何も へ申談候。

卷目之下に　家　老　役　中

一、與　　　力

一、新　番　方

一、六組之徒方
一、臺所方
一、大組幷持筒持弓
一、奥小將方
一、表小將方
一、新番頭分之面々勝手方
一、武具方
右之通可被相勤候、以上。

十月十八日。前田吉德の生母預玄院を江戸染井の新邸に住せしむ。

十月十八日江戸染井御屋敷に御新宅被仰付、預玄院樣御移。

〔政隣記〕

十月廿一日。前田吉德金澤を發して參覲の途に上る。

〔政隣記〕

十月九日、當廿一日御發駕与被仰出。

〔政隣記〕

十月廿一日曉八半時前御發駕、十一月四日江戸御着、五日上使御老中安藤對馬守御越。

この月は大盡なり

十月晦日。御藏入代官等に命じて納租の検査を嚴にせしむ。

〔司農典〕

惣而御藏入代官納米近年惡敷、於大坂に御拂米直段過分下直に罷成、幷御切米被下候者共下行渡米、直段右同様に而及難儀に候。惣而納米惡敷儀、懸番之前日其村より米納手代へ尋罷越候時分、手入等無之而者御藏納爲及難澁に、上米持參仕候而も何癖數日受取不申。手入等仕候村々之分米不及吟味に、石砂入升目不足之惡米爲致藏納候手代も有之由。或は御米計候時分之下敷、代錢に而過分取立候由に候間、向後は村々より下敷に而取立可申候。尤右下敷百姓へ可相返候。或は日拂米与名付、過分にこぼし米いたさせ、其外彼是手代共私曲仕故、米吟味麁相いたし、御拂米直段等如此之趣与相聞、沙汰之限に候。山方・里方之内、調米いたし相納候時分、御代官幷手代共、知音之町人又者宿主より不相願候得は、埒明不申様仕成、百姓は御藏所へ不罷出候。是以後町人より調米受取不申、其村々百姓米持參いたさせ爲納可申候。此外御藏へ初納税抔与申なし、肴代を請、或者其村々在合候誂物仕、代銀をも拂不申、或は賣藥抔賴候由沙汰も有之候。是等之族は毛頭無之筈、代官共誓詞前書にも有之事に候。且亦俵拵惡敷候得ば、御米こぼれ損、其上於大坂等に見分惡敷候に付、米買共は其考を以入

札いたし候故、前々御拂米直段とは違、近年殊之外御米下直に罷成候。俵之内御代官名札も入候に付、米納方等善惡相知申事に候得ば、急度可遂吟味候得共、彌間合申品も可有之に付、先此度は如此申渡候間、向後縄・俵尤米拵有躰に吟味いたし、上米御藏納仕、假令下免薄地之村々、又は作毛善惡其所相應を相考へ、御米念に入可相納候。御代官共之内、米納手代不相應に輕く召抱候者も有之に付、私曲も仕候樣に相聞候。件之趣申渡候上、右之族少に而も有之候得ば、吟味之上急度曲事に可申付候事。

只下の文面稍異なるものあり

右之通先達而申渡、十村・御扶持人・山廻等書付取置候。此度件之趣御代官中一統嚴重申渡候、品に寄名指を以遂吟味儀も可有之候條、米納手代共ゟ急度可申渡候。尤右之趣承知候段、十村御扶持人・山廻代官共御請書付可指出候、以上。

辰十月晦日　　御算用場

諸郡御扶持人・十村・山廻御代官中

十一月十日。立圓寺の住僧醉に乘じて町廻の御小將に暴言す。

流圓寺は立圓寺

〔吉德公の記〕

十一月十日之夜、町廻御小將へ於途中流圓寺無禮の儀有之候處、酒狂の爲体に何れも見請候。出家の儀にても有之儀、先其分に仕置候所、追て彼者方より寺社奉行へ相斷候。其斷の筋相

違の儀多有之候。寺社奉行は其趣を信用仕、御小將頭迄相尋候。御小將頭堀平馬・和田采女・中村雅樂、并番頭稻垣與三右衞門・井上勘右衞門・村田主水・中村刑部等承届、相違い趣明白に申達置候。然所年寄中へ寺社奉行より書附指出申候。年寄中御小將頭の手前承合不被申、一向に御小將中理不盡の仕形に候條急度申付、向後ヶ樣の儀無之樣に可申渡の旨、月番本多安房守被申渡候。依之御小將頭眥て難致承知候旨再三申達候處、御馬廻頭中へ、此度町廻御小將中卯辰流圓寺へ對し理不盡の仕形有之候條、御馬廻來春風廻相勤候時分、ヶ樣い儀無之樣に可申談の旨、御用番戶田靱負迄被申渡候。御馬廻頭中も合點難仕候故、見合候て組中へは不申渡候。此趣に付御小將頭彌難心得存候處、十二月朔日月番横山大和守并安房守兩人、和田采女に被申聞候は、今一往御小將手前承届紙面可指出の旨に付、幾度相尋候とも此外は有間敷候。乍然御用番相代候間、紙面爲相調指上可申旨申述候處、右四人の者ども御奉公爲指扣申候て如何可有之哉と、兩人小聲にて被申候に付、是は不存寄儀、何とも可有之候儀とも不存候旨申述候へば、料簡承届候と迄にて其分に罷成候。右の趣奧村伊豫守存寄を以て如此申聞候との儀に候。右の段々一圓難心得樣子に付、平馬以下并御番頭・御横目中各江戶表へ奉達御內聽候所、段々御聞届被遊候。御小將ども手前に仕損不調法は且て無之候。寺社奉行共意得御會得難被遊候。內々出家共不法の儀御聞及被成候。御歸國の後急度可被遂御吟味候。向

後彌急度御格法相守、町廻相勤候樣に御小將どもへ可開候の旨被仰出有之候に付、同十年正月御小將頭より申談候紙面末に記有之。

一、右辰十一月十日の首尾、奉達御内聽候處、御親翰の寫左に記す。

紙面之趣并大小將共指出候紙面一々遂披見候。小將共手前不調法等申儀は難心得候。たとひ他國ものにても候へ、あやしく相見え候へばいか樣にもとがめ、其人々を棒をもって可申事に候。若あたり候節、打殺し候とても、とがめ懸り候ては、追而其人々越度罷成候とても、其筋相立候へば其所はなづみ可申事にて無之候。此處は手前致指圖候上は、此度之樣成わけか成儀は越度には不可申付事手前申渡候。夫々役人共へも寄々に咄可置候。此度之儀も、紙面之通に候得者打擲と申筋は相聞え不申候。左候へば爲指扣候儀は勿論、町廻等も指扣申には不及事に候。尤跡々より之御定書之趣は、急度相守候樣に彌可申聞候。且又晝夜に不限、慥に此方家中之者亦者領分の者と見請候もの、あやしき体に而有之候者、何者によらず上下之無構、如何樣に成とも急度召捕可申旨、何も組・支配之者に嚴重に可申渡置候。此趣において相違之儀候者、其時當番之者は勿論、其方共迄も越度に可申付候間、能々可申談候。

一、致披見相返候得ば、此兩通之紙面亦々此方へ相返可申候。

一、立圓寺儀他國者に候得共、寺號もとなへ申者、致酒狂候儀不似合仕形不届千萬に候。寺

社奉行共如何存候哉。左様の者急度不申付候而者、寺社方之締も薄く成候樣に存候。ヶ樣之事も來春歸國候はゞ嚴重に申付にて可有之候。右之儀は自筆に而可申遣事に候。此紙面之趣七太夫・內匠へも爲見置可申候、以上。

十二月廿四日　　　　中　將　御印

堀　平　馬殿

和　田　釆　女殿

中　村　雅　樂殿

〔吉德公の記〕

流圓寺書付を以被出候寫。

拙僧儀、昨十日八つ過用事御座候に付、西尾隼人殿へ參、七半頃に罷出、尾張町岡部元竹方へ立寄、暮六つ過に罷出、森下町田子の小路を通候而見請申候得者、武士方と相見、大樋の方より被參候故、東の方溝際へ寄通り申候。何者に候哉頭巾取候へと被申候故、はつと存、是はどなたに而候哉と申候へば、廻り之者を知らぬかと被申、急に左の手をねぢあげられ、何者と御尤故、立圓寺と名乘候へば、出家之作法になき取なり之樣子に御申故、雨降風も候間木綿合羽を致着候得共、御覽之通衣之袖在申候と申譯仕、大形に御聞入候樣に御座候處、

又一方より御一人御出、先是非頭巾取候得与被申、夫より下々之者共口々に申候故、其方手前頭巾之詮議は無用に候。上に御立候衆御僉議有之儀に候へば、下々之僉議者無用に候。其方共は上立候衆御僉議被成候内は、笠を取下に居可申筈に候と申入候處に、とくといはせず、たゝきふせと被申候へば、後より溝へつきたふし、棒にてさんざんに打擲に合、あたまに疵被付、ちかもはしり、腰・膝等痛、以之外難儀仕、漸おきあがり候所、又右の御方立歸、何者に候哉名を名乘候へと被申候故、最前より申通立圓寺に違無御座候と申候へ者、此分には捨被置間敷候、寺社奉行へ御斷可被成由被申候。雨天之時分合羽着用仕候儀、出家之法に無之上は御申尤、其上立圓寺とさいさん名乘候所、りふじんに打擲いたされ、疵等被付候儀難心得存候。扨廻之衆中通り被申候跡に、其邊へ町人金屋作兵衛と申者方へ立寄候處、亭主罷出、痛申所看病仕くれ候故、暫罷在候所、餘程強く痛候故、寺へ籠申遣し、籠に乘組合之内八坂靜明寺へ罷越、夫より靜明寺同道に而經王寺へ罷越、看坊義觀に委細申聞候所、夜中に候へ、共御奉行生駒右近殿へ罷越御斷申上置可然旨申聞候故、靜明寺致同道、右近殿へ罷越、委曲口上に而申上候處、口上書に相調指出候樣に被仰渡候に付、如此御座候、以上。

辰十一月十一日　　　　卯辰　立圓寺　印

寺社御奉行所

靜明寺の當時八坂に在りしこと見るべし

右之通卯辰立圓寺より書附出候所、相違無御座候條指上申候、以上。

妙成寺看坊　義　糺　印

〔青徳公の記〕

今月十日町廻之節、於森下町卯辰立圓寺參合候節之樣子、委曲可申上旨御尋に御座候。其夜神保新五左衞門殿御宿番に而、金谷町より森下町へ相廻候處、淺の川大橋の方より木綿すゝ竹色合羽頭巾着、草履取一人召連罷越候もい有之候に付、頭巾取申候樣に數度申候處、返答に不及行過候に付、何者に候や可申上候と御小將中被申候得者、立留り、坊主にて候、御家中侍中に對し頭巾取申儀に而は無之旨被申候。町廻御小將中に而御座候、御作法之儀に候間頭巾取被申候樣に私共申達候處、手前に頭巾取候樣に申儀に候はゞ、先其方共は笠を取可申事に候。鑓持体之者共推參之儀に候旨雜言に御座候。其節召連被申候草履取申候は、卯辰立圓寺に御座候、酒に給醉被申候旨申候に付、御小將中御申聞候は、酒狂と相見え申候間、其分に仕可申候、明日寺社奉行中へ相達可申旨御申候處、寺社奉行中へ可斷旨申候、右何者に候哉と御小將中之內へ入、宮井彥太郎殿合羽に取付被申候得者、被突放候節溝之內へ倒被申候上、仕形等之体酒狂と相見え候間、其通に仕可相通旨御小將中御申聞に付、何も相通申候。右之節立廻り候時分、自然棒など當申樣成儀は無之哉之旨御尋に御座候。尤御小將中指圖無之に

金谷町は金屋町

付、聊棒など當申儀無御座候。御小將中へ對暫問答之內、往來之者共立留り候に付、私共立廻り相拂申候。勿論其節棒など當申儀、且而無御座候、以上。

辰十一月廿七日

上田政右衛門判
川尻十太夫判
宮家吉右衛門判
竹内清太夫判
田中六郎左衛門判
水上織右衛門判

奥村内記溫良
成瀨內藏助當隆

十一月十一日。前田吉德登營して參覲の禮を行ふ。

〔政隣記〕

十月十一日御登城、於御黑書院御參勤御禮、奥村内記・成瀨內藏助御目見等、都而御先例之通。但上使之節一統熨斗目・布上下、且御入國後初而之御參勤御禮に付、御獻上物御太刀一腰・御馬代幷銀五十枚付臺一つ包いし・縐紗二十卷包のし御目錄。

　内記・內藏助獻上物左之通。

御太刀一腰宛・御馬代銀一枚宛・御纏甘筋宛。

〔德川實紀〕

十一月十一日臨時の朝會あり。松平加賀守吉德初而參覲四人。

十一月十五日。前田吉德江戶に於いて親交ある諸家との贈答を廢せしむ。

〔政隣記〕

十一月十五日

一、左之通於江戶御心易御出入之御面々等江申達候趣に而、御用人より申談有之。

近年勝手物入打續候に付、要脚之逕指支候。前々より御音物之儀者御斷被申事に候得共、猶亦自今內々に而御贈答之儀も、今般一統どなたにも堅御斷被申候。此段申入置候樣被申付候由。

十二月十一日。米價下直なるを以て諸士の藩に納入すべき役銀等の延期を許す。

〔政隣記〕

十二月十一日金澤於越後屋鋪御月番橫山大和守殿詰合、御馬廻頭伊藤平太夫江迄被仰聞候者、今年別而米下直、御家中之人々可爲難澁に付、役銀幷會所銀利足共、春迄延引仕度者、

勝手次第等令僉議候。此段夫々可致傳達旨被仰聞、則傳達有之候事。

十二月廿五日。馬廻組野村傳兵衛、人持組永原大學に屬する步士を斬殺す。

〔政隣記〕

十二月廿五日於金澤、定番御馬廻毛利與市當番之内宅に、人持組永原大學徒之者罷越及口論候に付、隣家御馬廻組野村傳兵衛罷越及挨拶候處、却而手向候に付切殺候事。

但右之趣段々申上、不被及御僉着。

十二月廿七日。德川吉宗、前田吉德に鶴を贈る。

〔政隣記〕

十二月廿七日上使御使番久留嶋數馬殿を以、御鷹之鶴御拜領。御玄關敷付迄御小人目付持參、御步目付指添之。御使番村上杢左衛門・岡田長太夫受取之。於御大書院御頂戴前々之通。御料理御斷、御吸物出、御盃事有之。御歸爲御禮御登城、御作法都而如御先例。

十二月廿八日。江戸に於ける加賀藩の諸場・諸手合に儉約を命ず。

〔政隣記〕

十二月廿八日於江戸、左之紙面奥村内記殿御渡。
御音物御贈答之儀、今般猶更急度御斷被仰達候。就夫諸場・諸手合にも無用之御費いたし候も有之躰に候間、御儉約之儀夫々嚴重可申渡旨被仰出候條、可被得其意候。不及申付にも、只今迄有來候品に而も、御費成儀に被存寄候儀者、以頭書可被申聞候。尤其場々ゟ付被申御役人等ゟも、右之趣申聞可有僉議候事。

十二月廿八日。與力吉田與兵衞、その妻及び密夫を殺害す。

〔政隣記〕
十二月廿八日夜於金澤、伴八矢與力吉田與兵衞妻御射手嶋田孫十郎妹也。隣家本組與力大脇伴丞弟豐右衞門十九歲与致密通候儀、與兵衞せがれ十三歲茂存居申由致露顯候に付、右伴丞弟を與兵衞切殺、尤妻をも刺殺、其上に而伴丞方ゟ與兵衞罷越、右之首尾申聞、存念有之候者相手に可相成旨申入候處、弟不義之事に候間、存念も無之旨申に付、宅ゟ歸、支配中ゟ及斷、夫々檢使相濟。且右伴丞弟を切殺候節、せがれも助太刀致候由也。
附、本文之通致密通居、與兵衞を可致毒殺之由認候密狀をせがれ見付、父與兵衞ゟ爲告知候に付、其儘に難指置、豐右衞門一本に大脇伴丞せがれ与有。を呼寄、右不屆之族申聞切懸候處、逃延候に付追懸候處組附、與兵衞下ゟ被組伏、既に危候處ゟ、與兵衞方に致同居候横山大和守與力

齋藤孫左衛門承付、走來り助を致し、與兵衛舍弟幷せがれも助太刀致し、豐右衛門を切殺、

其上に而妻も切殺。

右爲檢使、翌朝與力裁許永原・生駒・成瀨、御横目前田源兵衛・高畠善太夫罷越。

是歲、疫疾大に流行す。

〔老翁雜記〕

一、享保九年日本押なべて疫病流行之節、南部樣より護國院樣へ御相傳に而、則御醫師横井氏に被仰付、調合上之申候。尤寄々御家中に相弘可申旨被仰出候。藥名ヘキヱイタン。

降眞香　川芎　唐者　細辛　乳香　耳松

右調合、間中に燒候而家內一統かぎ可申。都而疫病憂を避候事無疑、誠に奇妙也。

享保十年

正月朔日、前田吉德登營して年頭の禮を行ふ。

〔護國公年譜〕

一、元日御登城、於御白書院御禮被仰上候由。御書出左之通。

公方樣・若君樣出御、尾張殿・水戶殿順に御禮有之候。次に松平加賀守樣御太刀目錄持參、御

敷居之内に而御禮、直に御左之方着座。尾張殿・水戸殿御盃頂戴、呉服拜領。畢而加賀守御盃頂戴、歸座之節呉服拜領之。御銚子入、何茂御禮、老中及御取合退座。右御規式相濟御下、二ノ御丸初而御勤被遊御退出。四つ時頃大御式臺より被爲入、御出入之御手役者幷に後藤・本阿彌・狩野家、金澤年寄中名代之者席々に並居、年頭御禮申上。披露奏者番兩人、組頭三人加之。御居間ゟ被爲入、重而御出。於御居間書院、奥村内記・成瀨内藏助・今枝主水・成瀨伊織獨禮。長袴着、奏者半袴。畢而於御式臺之御間、人持・頭分一統御禮。畢而聞番四人並居御禮申上候。畢而鶴庖丁御覽。（長谷川宇左衛門勤之。）御大小將御馬廻・組外等之諸士並居、一統御禮申上候。都而前々御先代御在國如御例。同日七時過重而御出、養仙院樣幷預玄院樣被爲入候御中屋敷ゟ御出、暮過御歸殿。

正月廿四日。禁牢者宥免に關する手續を定む。

〔菅家見聞集〕

一、正月廿四日禁牢者御宥免之品申渡之趣、向後心得之儀御家老中より被相伺候に付、右之趣御吟味方へ罷出候御役人半田安左衛門・山口武太夫・奥村長兵衛門ゟ御渡に付寫置、則割場奉行神田左太夫・堀庄太夫ゟ申談候事。

御當地禁牢之者共落着、舊臘被仰出之趣申渡、夫々申聞候趣、割場奉行書付共御指出候故

入御覧申候。就夫三ヶ月・五ヶ月禁牢之上御宥免之者其茂申渡候由に付、金澤公事場奉行等は其月に至り御宥免之段申渡、則出牢いたさせ申候。於爰許者三ヶ月・五ヶ月過候而御宥免之旨申聞、又牢へ入置候儀不都合成儀付而、其段相尋候處、御當地に而者前々より其通御座候。自然其月に滿不申内牢死仕候得ば、御宥免之段申聞、又牢へ入置候僉議之由御座候。乍然御宥免之者より罪重御座候故、三ヶ月・五ヶ月禁牢いたさせ置、其上に而御宥免被成候譯に御座候。左候へば、其月に滿不申内死去仕者は、其通之儀と奉存候。向後は公事場之格之通、其月數に滿候而御宥免之旨申渡、則出牢いたさせ候樣可申渡与奉存候。此段一往達御聽申候、以上。

正月十八日　　奥村内記

成瀬内藏助

向後右之格に相改候事。

正月廿八日。綱紀徳川吉宗より賜はりたる鶴を料理披露す。

〔政隣記〕

正月廿八日舊臘御拜領之鶴御披に付、御一門樣等御招請。在江戸之頭分以上、御料理御下頂戴等如御先例。

當月は二月

二月五日。金澤城越後屋敷の時鐘を改鑄するを以て鶴の丸の早鐘を代用す。

〔護國公年譜〕

一、金澤越後屋敷時鐘、今度鑄直りに付、當月五日八時より時鐘替る。鶴の丸に有之早鐘時鐘之處に懸り、早鐘之代りは天德院之鐘掛り候由。四月十五日に鐘出來掛り候事。

二月。領内の十村に命じ小作の入上を怠る諸村を調査せしむ。

〔司農典〕

御領分惣御郡小作入上之儀、何之庄村々者入上何程、何之鄉村々者入上何程与、古來之引付を以春中に卸し附、其員數秋中に高主江入上相違無之筈之儀、勿論之事に候。但旱水風損等に而、押渡損毛有之時節は格別也。旱水風難等之沙汰無之年者、小作之者共入上及無沙汰に、又は高主立毛見屆候得ば、上田・中田・下田共其土目令相違、出來劣候に付入上致不足候所々も有之由相聞え候。尤風難等無之平常躰之年も、少々之違は可有之筈之事に候得共、極而毎年致不足候御郡も有之由に候。是は小作之者共、鍬初より草仕廻迄之耕作、不精不沙汰候故、上田所も中田之物成程も無之樣に罷成候段無紛候。十村共村廻等も不仕、手遠成所は耕

作方麁略に致支配候故、古例に致相違如此成行候与相開得候。高多致所持候者も、次第手弱に成、果切高之及沙汰に、又は小作之者共、請高は我物に而無之、不出來之所は高主ゟ打懸申与心得候に付、土目相應之三ヶ二・半分なりで者出來不仕樣に罷成、入上高主ゟ致不足候得者、自分之取手も令不足、必及困窮に候。此儀は小作之者共心立正道無之、却而自詰りに罷成、不了簡至極之儀に候。急度向後入上不足無之樣精に入、土目相應に立毛爲致出來、高主小作共に潤色有之樣、鍬初より草仕廻迄、手入無斷爲相心得可申候。辨惡敷罷成小作共有之所には、十村自分之儀は不及申に、悴・手代等も指出、先今年之分は田地に附居申程に心得不申候而は、成申間敷事に候。御郡々之内に而も、就中小作入上年々致不足候所々致詮議、有躰可申聞候。御用之儀指止、必至与右一方に打懸り候樣可申談候條、早速相調理尤に候、以上。

乙巳二月

別所忠兵衞
菊田逸角
中村武兵次
山東武左衞門
高畠權太夫

大塚彌五太夫
賀古助進
稻垣傳左衛門
坂井知右衞門

加州・能州・越中御扶持人・平十村中

三月十日。江戸留守詰の家老津田玄蕃、府內の乘輿を許さる。

〔政隣記〕

三月六日津田玄蕃敬脩、當爲御留守詰參着。翌七日御邸中駕籠乘用御免被仰出。同十日御門外乘用御願之通、水野和泉守殿被仰渡。

三月十日。金澤町の市場札に關して答申す。

〔國事雜鈔〕

上今町　袋町

市場札、元祿三年燒失仕候。其以後札渡不申候。先年札何方より御渡候哉、相知不申候。

堅町

市場札、承應二年當御場より御渡に付、町內に懸置申候處、元祿三年火事之砌札取除、肝煎

方に只今以預り置申候。

下今町

市場札、延寶五年當御場より御渡に付、町內古金屋左兵衞前に懸置申所、元祿三年火事之砌取除、左兵衞方に只今以預り置申候。

新町

延寶八年市場札奉願、札御渡之處、只今以町內水溜所前に懸置申候。札之儀者御寄合所より御渡之樣に承及申候。

享保十年三月十日

三月十一日。前田吉德就封の暇を受く。

〔政隣記〕

三月十一日上使松平左近將監殿を以、御國許江之御暇被仰出、白銀百枚・卷物三十御拜領。於御小書院御料理出、頭分以上熨斗目、御小將以下服紗小袖・上下、都而御作法如御先例。

三月十二日。前田吉德登營して就封の辭見す。

〔德川實紀〕

三月十二日臨時きのふに同じ。松平加賀守吉德はじめ就封四十四人。

臨時は臨時の朝會

〔政隣記〕

翌十二日御登城、於御黑書院御暇之御禮被仰上、御懇之上意、御鷹二・御馬二拜領。奥村内記・成瀨内藏助御目見、卷物拜領。同日諸頭ゟ御弘等、是又都而御先例之通。於金澤、同二十六日物頭以上ゟ御弘。

奥村内記溫頁
成瀨内藏助當隆

三月十八日。前田吉德江戸を發す。

〔護國公年譜〕

一、三月十八日江戸御發駕、御供年寄中奥村内記、若年寄今枝主水、一宿御跡御家老成瀨内藏助。二十三日夜矢代御泊、二十四日善光寺御晝休之筈に候處、才川洪水に而川田ゟ御廻、則御逗留。翌二十五日段々水落、巳刻川田御出、御放鷹茂被遊、同日牟禮御着也。御前後罷越人々者、福嶋之渡り指支、一兩日茂御跡かけて罷越候。

三月廿二日。奉公人裁許場所を廢せられたるも尙奉公人たるものを減ぜしむべからざるを告ぐ。

〔加州郡方舊記〕

今般奉公人裁許場所相止申候趣に付、惣而前々より當國御郡方より奉公に罷出居申者共、相

渡不申樣に當春之人高帳面相記、此方ゟ指出置可申候。勿論奉公人裁許場所相止候ニても、無故引込不申樣に急度可申渡候。無據筋に而引込候旨相斷候はゞ、承屆爲引込可申候間、書付に而可及斷候。とかく向後出入之儀なづみ不申、勝手次第奉公に茂罷出、又ハ引込申候共、人高減不申樣に相心得可申候。尤三月五日より廿五日限り有付不申者ハ、夫々急度相斷、樣子承屆可申候。當町方に居宅求、或借宅仕、小商・日用等仕候者有之哉、此段ハ別而心付改可申候。此儀ハ拙者より寄々町奉行衆ゟも可申談置候、以上。

巳三月廿二日　山崎久兵衛　印

本保才三郎　煩

能州・石川・河北郡十村中

松任町方地方役人中

三月廿六日。大聖寺侯前田利章その從臣七人を金澤に還附す。

〔御年表〕

三月廿六日備後守殿へ御附人の士七人金澤へ御還。七人の人々は田邊五左衛門・中村九左衛門・竹村新左衛門・多田善太夫・安武進角・中吉右衛門・粟田源右衛門也。五左衛門は大正持にて頭役相勤罷在に付、金澤にても役儀御免の頭同事、年寄中支配仰付られ。御知行高の通被

下之。九左衞門等六人も御知行御扶持等無相違被下、組外に仰付らるゝ也。

四月四日。前田吉德金澤に着す。

〔護國公年譜〕

一、四月四日午の下刻御着城。御歸國御禮人持寺西市正正月二十一日被仰渡、同十四日江戸參着、同日御用番ゟ相勤。同二十八日御目見、御献上者八講布二十疋・二種一荷、大納言樣ゟは二種一荷之事。市正自分献上物前々之通。五月六日江戸發足。

四月十七日。十村等山伏の所持する燒印札を人目に觸れ易く携行せしめんことを要求す。

〔筒井舊記〕

御郡方御縮嚴重に被仰付、流浪者躰茂ゟ可申樣且而無御座候。就夫山伏燒印札致所持勧進仕候處に、見合燒印札相渡置候者之方ゟ山伏參り候得ども、札見合申に付紛敷者無御座候。然共山伏所持仕候札、風呂敷之内ゟ入又者懷中仕候に付、紛敷御座候間、山伏所持之札、繩を付首に懸申歟又者帶に付、誰にも燒印札見申樣に仕度奉存候。此段山伏頭ゟ被仰渡被下候樣に奉願候、以上。

巳四月十七日

澤田十郎兵衛殿

村井安左衛門殿

〔筒井舊記〕

私共觸下山伏燒印札相渡置、御領國在々勸進仕候。右見合札村々肝煎等請取置、見合申候故紛敷儀無御座筈之處、右勸進札風呂敷之內又者懷中仕候に付、紛敷御座候旨、能州十村より御郡御奉行所に申上候旨。向後右之札相見え候樣に仕、山伏与相知紛敷無之、札をも早速爲見合候樣に可仕旨被仰渡之趣奉畏候。夫々急度申渡、向後紛敷儀無御座候樣に可仕候。爲其御請上之申候、以上。

享保十年巳四月廿九日

山伏頭　乾貞寺

同　醫王寺

同　願行寺

同　天道寺

同　實久寺 無住

寺社御奉行所

四月廿一日。高野山天徳院前田綱紀の石塔を建立せんことを請ふ。

〔袖裏雜記〕

奉願口上之覺

天徳院者小松中納言樣御創造、御先祖御代々之御菩提所之寺院に而御座候。依之今般松雲院樣御位牌御石塔御建立之儀、前々之通御造立被成下候樣奉願候。尤先格之趣別紙相認入御覽候、以上。

己卯月廿一日　　高野山　天徳院　印

金澤寺社御奉行所

〔袖裏雜記〕

御代々御石塔御建立之覺

一、天徳院殿御玉屋

右天徳院境内に御建立。

一、微妙院殿御石塔

一、陽廣院殿御石塔

一、清泰院殿御石塔

一、松嶺院殿御石塔

右四基奥院に御安置に而御座候。御位牌は御四殿共に天德院に御座候。其外御一家樣方御尊牌御位牌御座候、以上。

己卯月　　　　高野山　天德院

四月廿五日。前田吉德の子宗辰生る。

〔政隣記〕

四月廿五日快天暮六つ二歩、金谷於御廣式若子樣御誕生。御生母上坂平兵衛妹。穩婆本附御名右松樣。翌廿六日御家老中川式部長定を以御守脇指眞景一腰、御近習定番頭岡田掃部長貞を以鐘馗御掛物一幅被進。是中將樣御幼少之節御用之由也。眞景極代金二枚五兩。

〔大應公年表〕

一、享保十乙巳四月二十五日於加州城内生、御幼名奉稱勝丸、生母は侍女名は伊與、武江之住人上坂氏平兵衛初名爾左衛門猛元妹也。後平兵衛仕於本藩、給百人扶持、無役に而馬廻組与成、元文五年五月賜新知千石、百人扶持召上、同日入持組に被命、延享二乙丑正月加扶千石都合二千石被下置候。吉德公御誕生被成候節、御老中へ御屆之通は勝次郎殿与奉稱候處、宗辰公御誕生之節より樣付に奉稱る。

〔政隣記〕

四月廿七日頭分以上依召登城。於竹之御間年寄中御列座、御用番本多安房守殿左之通御演述。
當廿五日於金谷御廣式、若子樣御誕生被遊、倍御安泰被成御座、目出度御儀恐悅至極之御事に候。
右之趣何茂江も申聞候樣にとの御意に候。右畢而奧村伊豫守有輝、隨分御機嫌成御小兒樣に而、恐悅成儀に奉存候旨御申聞。次に右御祝儀明廿八日五時より八時迄之內可致登城旨、安房守被申渡各退出。
但、廿八日・廿九日之內、右爲御祝儀年寄中不殘可相勤旨、御横目中申談候事。
廿八日頭分以上服紗袷・布上下に而登城、廻勤同斷。
但、平侍等も其頭等迄右御祝儀罷出候事。尤從頭々等依申觸に也。

四月廿六日。徳川家重の元服を賀せしむる爲使者を金澤より發せしむ。

〔政隣記〕
四月九日若君長福樣御元服、被任從二位大納言に。勅使中院前大納言殿・中山前大納言殿、法皇使坊城前大納言殿。御理髮肥後守樣、御加冠伊井掃部守殿。右に付十八日諸侯御禮被爲請。依之御祝儀御使御小將頭和田采女孟貞江十九日夜被仰渡、廿六日金澤發、五月六日江戶着、御兩公江御太刀馬代宛被獻、采女御目見者無之。同月十二日登城、御奏者衆へ相達、同廿一

日江戸發足。

四月廿六日。釜屋彦九郎時鐘を改鑄して金澤城内に納る。

〔加州郡方舊記〕

河北郡大衆免村領之内に而時鐘鑄場相立候處、頃日見物人多、鑄場近邊之畑物踏荒申由に候。右時鐘立申時分は、猶更可爲群集候。只今植物有之境、輕繩張等仕置申筈に候條、右繩張に取拂畑物之内に入込不申樣仕度旨、改作奉行申聞候條、家來等男女末々迄、右繩張之内へ入込不申樣可被申付事。

右之趣御用番大和守殿被仰渡候條、御承知被成、同役中幷御組・御支配等可被仰談候、以上。

三月十五日　　御横目

御城時鐘享保九年十二月鑄直し被仰渡、釜屋彦九郎鑄立、享保十年四月出來、同廿六日に御城へ上申事。

覺

一、御城より東方に相當り申候。　河北郡　清水村

但、最前之御城時鐘此村迄相聞え申候。今般御鑄直之時鐘能く相聞え申候。御城より指渡道程大概一里程御座候。

一、御城より北方に相當り申候。　同郡大場村

但、最前之御城時鐘此村迄相聞申候。御鑄直し時鐘能く相聞申候。御城より指渡道程大概

一里半程御座候。

一、御城より西方に相當り申候。　石川郡相木村

但、最前之御城時鐘此村迄相聞申候。御鑄直之時鐘能く相聞申候。御城より指渡道程大概

一里廿五丁程御座候。

一、御城より南方に相當り申候。　村名を缺く

但、最前之御城時鐘此村迄相聞申候。御鑄直之時鐘能く相聞申候。御城より指渡道程大概

一里半程御座候。

一、御城より石川郡倉部村・橋爪村・柴木村之儀は、西南に相當り申候。最前之時鐘聞え不申候。御鑄直之時鐘、北風幷山瀬風之時分聞え申候。御城より道程指渡大概二里より二里半程御座候。

一、御城より石川郡國見村之儀は、辰巳に相當り申候。最前之時鐘聞え不申、御鑄直之時鐘北風之時分聞え申候。御城より道程大概三里程御座候。

一、河北郡白尾村・二俣村・倶利伽羅村、石川郡熱野村・鶖ケ原村・大野村之儀者、天氣相宜風

次第最前之時鐘幽に相聞申處、御鑄直之時鐘は風次第慥に相聞申候。御城指渡道程大概二里半より四里程御座候。

一、高松之儀は、最前之時鐘に聞え不申、御鑄直之時鐘者南風之時分聞え申候。御城より道程大概五里程御座候。

右私共組下村々之内時鐘聞候樣書上申候、以上。

享保十年六月　　石川郡・河北郡
　　　　　　　　御扶持人・十村　連名

山崎久兵衞殿
本保才三郎殿

五月朔日。前田宗辰の幼名を勝丸と稱す。

〔政隣記〕

五月朔日例月出仕之面々に、御名被稱勝丸樣与候旨御弘有之。岡田掃部上之。

一、今日御七夜に付、□一刀代金七枚五兩、三池御脇指代金三枚、干鯛一箱、御廣式迄中川式部持參、中將樣御直に被進之。

一、奥村伊豫守墓目御用等相勤候に付、於御前裝刀一腰盛景（代金十枚）今枝民部持出之、時服五領御

表小將持出被下之。且御内々以白銀五十枚被下之。并伊豫守内存之養子奥村内記弟隼人有定
故丹波守悳輝末子也 墓目御用致手傳候に付、吉廣御脇指代金二枚五兩成瀬内藏助持出被下之、伊豫守頂戴之。
一、御篦佐々木左兵衞上之候に付、代銀二枚・御肴一種。
一、從伊豫守御守并御時服献上之使者高山文内に、白銀二枚被下之。墓目御弓矢・御時服二・御甲・御肴献上之使者三上庄左衞門に、給一領被下之。
一、五百八十之御餅・鯉二岡田掃部上之。
一、右爲御祝儀、年寄中・御家老中より御肴獻上。

〔政隣記〕

一、今朔日より七十間御門内に、御旗・御のぼり大一本小五本、吹貫一本、御馬印一本、都合七本、御兜十二頭等被餝之。御家中十三歳以下之男子并女之分は、勝手次第見物被仰付。

五月七日。能美郡小松に地震あり。

当七日は五月なり

〔護國公年譜〕

一、小松當七日、一日に五十三度計、夜中十六度地震ゆる。御城石垣・御藏・御貸屋茂少々損候由。其日金澤茂四・五度輕き地震ゆり候。

五月八日。今明日前田綱紀の一周忌法會を天德院に執行す。

出雲守は富山侯、備後守は大聖寺侯

〔護國公年譜〕

一、五月九日松雲院樣御一周忌に付、昨今金澤於天德院御法事御執行。御法事奉行本多安房守政昌。

八日四半時御參詣被遊御燒香、追付御歸。九日午の刻水陸勝會御法事前御參詣、聽聞被遊、御時御法會相濟、御燒香被遊、御座之間に被爲入、御簾上り、和尚安房守誘引、於御前白銀御服被下之候。退、御簾下り、出雲守樣御使者瀧川玄蕃御家老、備後守樣御使者山崎權丞御家老安房守誘引、御前に被召出候。右相濟、追付御歸り。其以後御兩方樣御使者御代香相勤之。御前樣方御代香茂、御附人之人々勤。二條樣より御使者河部織部、三條樣よりも御使者河村要人、安藝守樣より御使者丹羽源兵衞を以、御香典被遣、今日御代香勤之。御家老之面々不殘、八日・九日・十日刻限相替り拜禮被仰付。於江戶廣德寺讀經有之、十日・十一日御目見以上之面々拜禮罷出候事。

二條樣・三條樣御使者、十一日登城御返答被仰聞候。安藝守樣御使者も同日登城、御返答被仰渡。

五月十一日。前田吉德その子宗辰の出生を幕府に屆出づ。

〔政隣記〕

一、同十一日於江戸、若子樣今度御誕生之儀、御先手六鄕主馬殿を以、御用番御老中松平左近將監殿に御屆御座候處、御承知之旨被仰聞候由、翌十二日主馬殿御越申述に付、御一門樣方に同十三日御案內之御使、御家老津田玄蕃相勤之。

六月朔日。前田宗辰松平氏を冒すことを幕府に屆出づ。

〔御年表〕

六月朔日勝丸君松平と稱せらるゝ旨、聞番を以て松平左近將監殿まで御達有之。

六月朔日。家中諸士困窮するを以て借銀等の額を錄上せしむ。

〔政隣記〕

六月朔日御家中諸士依困窮、元祿十四年以來之借銀・買掛銀可書出候。借銀等無之者も、勝手之樣子可書出旨、御用番村井主膳殿覺書を以頭々に被仰渡。但百石三百目當り御貸銀被仰付。

三百目は後に二百目とあるをよしとす

十三日御禮勤。

〔政隣記〕

同六月朔日記に有之御貸銀所越後屋敷續建。奉行御小將組半田兵衛・御馬廻奧村半兵衛、幷與力・御算用者二人充懸り居、頭々より受取、於宅々渡之。都而輕き組柄より最初に渡初之。

六月朔日。諸頭・諸役人より漫に直接藩侯の內意を伺ふことを禁ず。

〔吉徳公之記〕

御先代より、諸頭・諸役人より御用之品々により奉得御内意候儀共有之、至御當代候而者、猶更奉得御内意候事により、被遊にくき儀茂有之候。向後從御前直に御好等之儀、又者御近習之面々奉得御内意來候品、或は御算用場奉行等御入用方々之儀抔に付直に申上いたし來候儀者格別、諸頭・諸役人組之儀、其外手前之御用に付直々申上候儀者、追而被仰出等有之迄者指扣、不依何事年寄中等迄相達可申候。若又表向へも難及御沙汰品に而、直に致言上可然儀者、年寄中等迄先及内談、指圖次第に可仕候。心任に御内意等伺候儀者、一向可爲無用候。

右之趣夫々申聞置候樣に御内意候事。

付札。組等之内役儀有之人々は茂、右之趣可申聞候事。

別紙之趣可被得其意候。畢竟直に御内意相伺候儀指扣、年寄中等迄書付差出可申候。左候得者御格式を相考、先例等詮議之上年寄中より相窺、御下知之趣申渡儀に候間、都而伺之儀者年寄中迄可申出候。相伺之儀には無之、直に達御聽來候儀者、前々之通に相心得可然候。去共秘し可申儀に而無之品に而茂、箱に認或封じ候而直に上候故、御用に御取込被遊候御時分に而茂、何等之儀に候哉御計難被遊、早速御覽被遊候樣に有之、毎度御邪魔に成候間、輕儀者御近習頭中迄口上に而申達、入組候儀紙面に而無之候はで難成儀者、披き候而右頭中迄相

達可申候。御横目方等御用に而も、其差別可有之儀に候。

一、年寄中等へ及相談、直に奉得御內意候樣に指圖候品者、其趣右頭中迄申演、指出可申候。

右兩通六月朔日月番前田大炊、諸頭・諸奉行等へ被相渡候。

六月廿九日。故石黑源右衞門の借銀皆濟せられたるを以て、老臣等その子彥太夫に遺知を相續せしめんことを請ふ。

〔袖裏雜記〕

石黑故源右衞門儀、知行七百五十石被下置、新川御郡奉行被仰付置候處、勤方不宜行跡惡敷、高借銀、旁以跡目之時分御知行被召上、其內を以嫡子彥太夫幷弟源八兩人ゟ三十人扶持被下候。相殘知行分は組頭ゟ御預け被成、右借銀等不殘返濟仕候。其後源八致病死、彥太夫一人ゟ右御扶持方被下置候。彥太夫實躰に相勤、右之通亡父借銀皆濟仕候。依之先御代右兄弟ゟ被仰出候趣御座候間、故源右衞門遺知七百五十石之內、少々成共被仰付被下候樣奉願由、支配人伊藤平太夫書付、幷兄弟之者先年指上候御請之扣一緖に仕書付、上之申候。先年之樣子相考候處、被仰出之趣別紙寫之通御座候。先年長谷川三左衞門親內匠儀、高借銀故御知行被召上、在鄕被仰付置候處、其已後借銀も皆濟仕候故、如元千石被下之候。乍然內匠儀者高借銀一通り之儀、源右衞門儀は常々行狀等も不宜儀に候へば、內匠とはわけも違候間、無相違可

被仰付儀とは不奉存候間、七百五十石之内五百石計被仰付候にて結構成儀と僉議仕候、以上。

六月廿九日　　村井主膳　　前田大炊
　　　　　　　奥村内記　　本多安房守
　　　　　　　横山大和守　奥村伊豫守

六月。御歩横目の火事裝束を定む。

〔御年譜〕

一、此年六月御歩横目火事羽織之裾印、水玉附候樣被命。

七月朔日。德川家重西丸に移るを以て祝賀の爲に使者を金澤より發せしむ。

〔政隣記〕

六月十九日大納言樣是迄二之御丸に被成御座候處、西御丸に御移徙之旨申來、御祝儀御使定番御番頭江守角右衛門今月廿七日被仰渡に被仰渡。七月朔日金澤發足、十一日江戶參著、翌十二日西丸に開番同道に而罷出。右爲御祝儀二種・一荷御獻上之御使勤之。同十九日江戶發歸。

七月十一日。家計困窮の諸士に貸銀を許す。

〔政隣記〕

七月十一日諸頭依召登城之處、於松之間御年寄御列座、御用番奥村内記殿勝手取續方之儀被仰渡、當分爲續百石二百目當り御貸銀被仰付候旨。上納銀幷借銀等除知を以返濟可仕候。委細者追而可被仰渡旨被仰聞。

廿一日御家中御貸銀奉行御大小將半田平兵衞・御馬廻組奥村半兵衞江被仰付。右兩人之爲加人、御馬廻組改作奉行中村武平次・定檢地奉行小原津左衞門被仰付。但右御貸銀奉行御普請役引、三百石引之事。

〔中川氏藏文書〕

御家中之面々、人持頭中を初末々御歩並之者共迄、一統連々致困窮、會所銀等借用之人々者利息さへ相滯、脇借銀・買懸等猶更返濟難仕候。ケ樣に成行候而者、上納之期茂無之、脇借銀等は彌不埒に罷成、風俗も惡敷罷成候に付而、上納相滯候分者、役銀・出銀・或會所銀等茂一所に合、御貸銀に被仰付、除知を以連々に上納有之可然候。脇借銀・買懸等も、都而只今之通相對に而者埒明申間敷候に付、一統爲書出申儀に候條、人々銀高次第、返濟之筋も追付相極、是又除知等を以沙汰仕首尾に可罷成候。其趣者追而可申渡候。然者借銀かた、向後之所者譯立可申候得共、差當飯米並日用差つかへ候に付其分に難被成候。尤當分之儀者、何こそ御救

無之候半而者、ひしと及難澁申様子達御聽候。然共御要脚差つかへ候に付、御家中ゟ可被相救御有餘無之、江戸・京・大坂等において才覺被仰付候得共調兼申候。尤追而者銀高茂調申筈に候得共、只今御家中之急難をば救被成候御点に合不申候故、御納戸銀之内を以、右調候迄之内當分御取替候而、知行高百石に銀二百目宛之圖に先御借し、御歩等御切米取之分者、知行五十石に准百目當御借し可被成候。尤當時之飯米幷入用所持之者は不及御沙汰候。入用等不足之分者、人持頭中を初末々迄右之趣に候條、組・自分共に被得其意、夫々可被申聞候。此返上之儀も上納銀同事、追而可申渡事。

乙巳七月

「中川氏藏文書」

口上に而申渡。

各幷組・支配之人々、品々上納銀相滯之分は、一所に合し御貸銀に被仰付、除知を以連々に上納仕筈候。脇借銀等も一統爲書出申儀候條、人々銀高次第、返濟之筋も追付相極可申候條、其趣は追而可申渡候。指當飯米幷日用指つかへ之者共ゟは、當分之爲續、百石に二百目宛之圖を以、御貸銀被仰付候。委細者別紙之通候事。

百石二百目當に而ひしと指つかへ、當分之續も難成、至而困窮之者は、重而少々御貸被成

儀も可有之候間、相しらべ重而可被申聞候事。

一、今日一統申渡候趣、忌中幷病氣等之者は、同役又は向寄より傳達可仕事。

一、組・支配之人々ゟ申渡候はゞ、爲御禮頭・支配人之宅ゟ罷出可申候。年寄中支配之頭分は、御用番宅ゟ爲御禮罷出可申事。

但、夫々申渡相濟候はゞ、自分幷組・支配之交名知行高書記、當十三日切御請指出可申事。

八月十六日。前田宗辰色直の儀を行ふ。

〔御年表〕

八月十六日勝丸君御色直御祝儀、御近習頭野村七兵衛因信を以て御時服三重・御樽代五百疋・干鯛一箱を進せらる。勝丸君より御抱守富野嘉藤次正慶を以て、鯛一器・御樽代五百疋御獻上、御生母へ白銀十枚・嘉肴を進せらる。

八月廿六日。前田吉德諸士の家計困難なるを以て儉約を命ず。

〔政隣記〕

今年八月廿六日被仰出之趣左之通。

今度御家中之面々勝手困窮之由に付、納戸銀之内を以續銀貸渡候。尤是以後勝手取續相勤候儀、專一之事に候。就其勘略之筋第一に可被申渡候。先規より松雲院殿段々被定置通、無相違

可相守事肝要に候。其故此度改而不申聞候條、萬端右之趣に相心得、人持幷組頭・支配人等、自今以後彌嚴重に相心得、急度相愼候者、其組中も可致信用事に候間、右被得其意、何茂可被申渡候、以上。

享保十年八月廿六日　　　　御　朱　印

御家中儉約之儀、從御先代御定置被成候通、彌嚴重に相愼可申趣、今般御印章之以御書付被仰出候條、各可有拜見候。就夫先規より勘略之御定者、衣食家財を初品々雖御制禁有之、いつとなく猥に罷成、花麗之風俗に押移、頭・支配人もしめしがたき樣に相成、時節柄彌勝手も及困窮候段、不覺悟千萬之事に候。今度如被仰出、御貸銀も被仰付儀に候得者、急度勝手取續可申儀候。然者御先代より之御定に相違いたし候儀多候間、其品々は此度嚴敷相改可申候。組・支配之人々致信服、自今漫に不罷成趣申渡樣可有之儀に候。此旨を被承知、御定に當時相違有之、各見聞之趣を以一々ケ條書に被記、或御定者如此に候處、只今者ケ樣に成來不宜候。或何之品者最前には無之儀に候處、近年出來費之筋に而不宜候間、御停止に被仰付可然候などゝ、とかく組々之人々心服いたし、綿密に儉約を可用申渡樣之趣、組切に被了簡、下書を以可被申聞候。假令御定書に相背可申品に而も、武役に相障不申、當時簡略之便に可罷成儀者相背可然候。其上年寄中猶更僉議、相伺候上可申渡候。此旨をも何茂可申談旨御内意候事。

ともはとして歟
領米は領末歟

八月。一歩苅の法を示す。

〔御郡方舊記〕

一、一歩苅法之儀、前々より上中下三歩宛九歩苅、此籾を煎候而勘定仕立候に付はかどり不申、村數見分難成候。向後は上中下共に一歩宛苅、此籾煎候に不及、生籾之半分有米とも可遂勘定、此儀大法也。且又前々下稲之分は、百姓願次第之場所刈之由に而、領米・石原等本作所に而も無之、纔有之地面之所下分に立之候。向後ヶ様之場所竿を入打拔皆無引にして、下稲相應之所刈立可申候。是又大法也。但十村共一歩刈之法承知いたし有之事に候得共、末々百姓共存るため、具に書付可指出之候。

右之趣其方中三人より、御郡々御扶持人・十村共等に申談、末々百姓共にも爲申聞、一村限爲致合点候様可相心得候。猶更難心得品は伺之可被申事。

享保十巳八月　九　人

田井村　次郎吉方

津幡江村　宅助方

村井村　與三右衛門方

覺

一、二升四合　　上中下三步籾

米にして一升二合

是を三割一歩之當り。

四　合

右を越中之一反步三百六十步に懸。

一石四斗四升

内

一斗三升九合二勺　　口　米

五升八合　　夫銀代

〆一斗九升七合二勺　　但右に付三十目圖り

殘一石二斗四升二合八勺　　是を斗代十五に割

八ッ二分八厘五毛

内

四ッ一步四厘二毛五　　御收納

四ッ一歩四厘二毛五　作　徳

右越中分。

一、二升四合

米にして一升二合

是を三ッ割一歩之當り。

四　合

右を加州三百歩一反歩に懸一石二斗。

内

一斗一升六合　口　米

四升八合三勺二才　夫銀代

〆一斗六升四合三勺二才

殘一石三升五合六勺八才　是を年代十五に割

六ッ九歩四厘

内

三ッ四歩五厘二毛　御收納

三ッ四歩五厘二毛　作　德

右加州・能州分。

一石三升五合六勺八才　是を年代十七に割

六ッ九厘二毛

内

三ッ四厘六毛　御收納

三ッ四厘六毛　作　德

右能美郡分。

以　上

右者一歩苅之古法如此。但向後風損・水損等に而諸人存る所之不作に候者、前々御格之通、立毛見立可及其沙汰事勿論に候。近年は風損・水損等之沙汰無之、改作所不作之僉議無之年も、十村共色々申立、過分之御貸米等相願、以之外御郡之風俗悪敷、御法も猥に罷成申様に而、大切至極之儀に候。此段は、全十村共心得悪敷所より事起申儀与相見え申候。前々与違、功者成十村共も少く罷成、改作之御法は勿論、農業之儀等も不案内に候故、虫指・寒立・天氣相不順抔と、少之儀をも夥敷様に下より申立候得者、あやぶみ候而其儘致内見分抔、其内見分と

ても、作善悪見屆候儀的中仕る見分に而も有之間敷所に、此村も難見捨、彼村も難見捨なごゝ申樣に罷成、莫大之村數に成上り申段、下々邪正を糺候事は不得仕、上に之歎は申能樣に相心得候儀、不功故如在も無之、如此成行と相見え申候。向後者諸人不作之儀不存年、見立・御貸米等願可申と存候十村有之候者、其組御扶持人を相見に取、十村手作之分を一步苅いたし委曲見屆、不足に紛無之においては、不作与申程之申立に罷成候年に而無御座候處、ヶ樣々々に組中相難候故、廻口御扶持人相見を以、手作之分一步苅に仕見屆候得者如此に御座候。當一步苅之類作と相見候は何村々々之分、夫より高下之村々は何方々々分と、內見分を遂申候。此上御見分之上、一步苅等を以免切御沙汰におよばれ候樣に仕度奉存候。御大切成儀に候得者、私共潔白に吟味之處相違無御座候与、右一步苅算用目錄に如斯書附を相添可致注進候。無左候而取縮も無之申立仕分は、一向貪着に及間敷候。但如此申渡候所になづみ申儀に而者無之、下々難儀紛無之候者、假令不作之沙汰諸人は不存候共、免切・御貸米指支申儀は有之間敷候。申立に仕程之事に而も無事を、連日御當地に相詰罷在、終には申おふせ、過分之御貸米等借請申樣に罷成候得ば、諸百姓之心立全躰蟠申筋成、御法猥に罷成候而者、取返候儀成兼申事故、僉議之趣申聞事に候。猶更其方中存寄有之候者、幾重にも可承候條、不及申無遠慮可被申聞事。

享保十年巳八月　　　　　　　　　　　　改作奉行印

田井村　次郎吉方

津幡江村　宅助方

村井村　與三右衛門方

御兩通御書立を以被仰渡候趣、私共存寄御座候はゞ可申上候旨奉承知、十村共心得豐作毛吉悪吟味方之取扱、御書立之意味精誠遂詮議候處、無殘所御尤成御書立与奉存候に付、當所御當地に有合候左之御扶持人十村中ゟ、猶更僉議仕候處、聊替る存寄無御座、私共同事御尤成御吟味と奉存候。右御書附寫取、御郡々十村中ゟ順達仕、一組限村々肝煎・組合頭、大小之百姓中にも右御書立爲讀聞、能々爲致合点、御法猥に罷成不申候樣に、急度爲相心得可申旨申聞候。仍御請紙面上之申候、以上。

八月十日　　　　　田井村　次郎吉

　　　　　　　　　津幡江村　宅助

　　　　　　　　　村井村　與三右衛門

御改作御奉行所

九月二日。石川郡の百姓等村井村に在る十村與三右衛門の家を破壊す。

〔浚新秘策〕

一、同年九月二日夜半過、石川郡村井村に罷在候十村與三右衛門宅ㇸ、百姓共八百人計押寄、村中呼はり候は、與三右衛門を打殺候間、一人も出合申間鋪候、出合候者は打殺可申与相觸、三方より與三右衛門家ㇸ押込、門戸不殘打潰し候處、與三右衛門は一方明申方より、妻子引連れ逃出候。村之百姓一人、與三右衛門家より逃出候を、與三右衛門と見請、鎌を以引掛可殺樣子之處に、終に逃隱候。與三右衛門者其間に遁申候。家不殘戸障子打破り、大竈四ッ有之候をも打潰、長持・椀・家具等迄散々仕候。其内夜明方成候處、明晩は田井村十村喜兵衛方ㇸ可押寄と、口々に呼はり退散仕候。人々頰かぶりいたし候。押寄候節時之聲を擧、太鼓も打候。松任之近邊に候故、松任町中大きに驚き、門戸を閉罷在候由。御城下より三里計有之候。右之趣金澤ㇸ相聞え候は三日八つ時過、與三右衛門儀改作奉行寺西半右衛門宅ㇸ罷越申聞候。同時に御横目久田清左衛門承り出し、取刀に而先奥村内記殿宅ㇸ罷越候て、右之趣直に申達候。其砌使を以御算用場御用番奥村彈正ㇸ、ヶ樣之趣候條早々御算用場ㇸ可被罷出候、私は内記殿ㇸ相達、直に罷越可申由遣候。扨内記殿御指圖も無之、何とぞ心當りは無之哉と被申候故、今年之儀は豐熟之事故、秋仕廻之儀せつきも不仕候。但秋仕廻之案内申聞候所、石川郡までおそく、當二日に申聞候。ヶ樣之趣に候故心當りは無御座候得共、心當無之内少

越後屋敷は城内にあり

し存寄申事も御座候。兎角片時も早く承り屆、彼是御手當も可有之儀候旨申候得者、左様に可仕旨被申候故罷出、彈正にはやく被罷出候哉と御尋申候處、いまだ出宅無之旨に候故、則宅に參り申談候處に、半右衛門に申含遣候、半右衛門等より紙面を以申聞候様に示談仕候由申聞候。中々紙面等にて事調可申儀にては無御座候、横山兵庫・松原善右衛門にも案内有之、何茂被罷出可然与申置、淸左衛門は場に罷出候得者、與三右衛門罷出有之に付、昨夜之様子荒增承り、是は野々市の十村少左衛門組下之者どもとは心付不申候哉、我等は此者共心元なく候旨申聞候得者、私儀も其心附御座候、不思議に思召と合申旨申候。左候はゞ先少左衛門組之誰々、急に呼寄候様に申遣候。扱者奉行中三人共罷出候は、漸七つ半時に罷成候。田井村喜兵衛方に警固に罷越及案内候。扱者御郡奉行關屋左衛門にも承り出し、彈正宅に迄足輕遣置、右押懸申趣に候はゞ注進可仕候、少しの儀にては相防可申旨申付、御郡奉行・改作奉行其外足輕七人宛小遣相添、村井と兩所に遣申候。提灯請取夜中ともし申度旨、足輕共申聞候得共、夜中提灯等立置候事は却而不可然存候、僅罷越候人々候得者、見透あしく可有之と不差遣候。兎角棟取と相知れ申者不召捕候はでは譯立不申儀故、棟取之知れ申工夫第一に心懸、其夜より十村・肝煎等にも申聞置候。四日者越後屋鋪式日に付、年寄衆不殘出座之事、江戸表に言上之筋も可有之事と存候。二日夜中之様子、三日に詮議仕候趣等數ヶ條覺書にい

たし、一昨夜夜中之儀は定而御聞可被成候旨、口上に申述候得者、何事に候哉不承候旨被申聞候故、內記殿より卽刻御案內有之候はんと奉存罷在候、則此紙面之趣に御座候旨申候處、大和守殿一覽大に被驚、是は不興成儀に候、內記より何とも不申越候、奉行中も不被申聞候、早々彈正に被罷出被申聞候樣にとの事に付、則役所へ罷歸、其趣奉行中江申達候。其所江、三人之奉行中不殘急速被罷出候樣にと、大和守殿紙面參り候而、三人とも罷出候。其跡にて今夜も田井村・村井村兩所江足輕可遣旨、改作奉行中江も申候。昨夜は俄成儀に付、先七人宛程遣置候得ども、惡黨ども夜明候はゞ犬も付置候筈に候得者、七人之足輕等を見請申筈に候。其上三日夜半頃にも、遠々に時之聲を擧候樣子、村井邊江者相聞候樣子、田井邊に者無之候得ども、用心油斷仕間敷候。割場足輕受取、夫々昨夜之足輕も相添遣可然事と存候旨、各申談候。此儀大和守殿迄可申達とて、越後屋敷江罷出相伺候得者、一段可然心附とて、足輕十五人宛相渡り申候。此時三人之奉行中は、齋藤善助へ申付紙面爲調居被申候。何にて候哉と相尋候へば、魚津まで早飛脚被遣候哉、言上紙面上之被申候。淸左衞門も言上仕度ものに御座候得ども、相調可申隙無之御座候、如何可仕哉と思案仕、大和守殿江罷出申候は、魚津まで早飛脚を以言上被遊候旨承知仕候。私役儀之筋に御座候はゞ言上仕度奉存候得ども、其謂無御座候。就夫先刻留書を以各樣江申上置候紙面を被返下候樣に仕度、則其紙面に添書も仕

指上申度旨申候處、成程尤候條可相渡候由にて、其座にて返被下候に付、添紙面仕上之申候。五日朝より兼て心當り有之もの有之、其者を召出し樣々相尋候得共、二日夜中之儀者聊不存候旨申陳、終日かゝり候得共不申顯候。夜に入、たとひ心ならず同道など仕候事にても、棟取をさへ申顯候はゞ、其方拔群之御奉公にも可成候、其所を能々工夫いたし申顯候へと、神妙に申聞候得者、漸々合点仕、三人有之、木津村（八九十軒計之村）百姓ども其外を申合候もの誰々と三人名を指申出候。其儘夜中に呼びに遣、罷越候。三人ども中々白狀不仕、且而不存樣子に申候。其時最前之者呼出し爲致對決候處、甚屈伏いたし候て白狀候。則口上相調、判形も爲致、公事場の牢に入置候。外一人、是は十村下役も仕候ものに候處、其夜太皷を打候て人衆を集め候ものにて、棟取に極候とも白狀不仕候。依之手鎖をおろし、村々に預置候。五日朝より夜通し、六日八時過に仕舞申候。御奉行中は、彈正以下三人とも終に其席に不罷出候。平生同事に退出候。扨六日に其趣相認、御途中御出合申所にて差上候樣に、清左衛門自分之飛脚兩人差上候處に、七日晝以後津幡御發駕以下に差上、森下にて御中休被遊御覽候よし。先づ是程にて事濟候、十八ヶ村より人衆罷出候間、其村々をも遂吟味可然哉との事に候得共、先是切にて事鎮まり候得者宜敷候間、見合申意得にて相止候由。

拙子申候者、近年内記殿御儉約方に主付とて、一かまへ御勤候故、御儉約に付候事は、内

記殿ゟ被申達候儀者、其分にも相聞申候。此度郡村之非常出來仕候儀を、月番御年寄衆ゟ者不申達、内記殿ゟ迄申達候儀、何とも聞え不申、筋違ひ申樣に存候旨詰候處、近年分而被仰出候趣有之、御郡方之儀者、何事によらす先内記殿ゟ申達し、追而御用番ゟも申上候例に罷成候。其上今度之儀者、御用番彈正殿より被申達候筈、又ハ内記殿より大和守殿ゟ被仰遣候筈と相心得候旨、淸左衞門申聞候。

九月十八日。前田宗辰金澤城二丸の廣式に移徙し、父吉德に謁す。

〔政隣記〕

九月十八日勝丸樣從金谷御廣式二之御丸御廣式ゟ四半時頃御移。追付御表ゟ御出、御居間御上段に而御對顏。右御上下被爲召、御手自御熨斗鮑被進之、御三方遠田傳六郞持出之。右御移之爲御祝儀鯛一折、御近習頭(服紗小袖布上下。)鷹栖左衞門御使に而被進。從勝丸樣も鯛一折、御抱守石野吉平を以被上之。右御對顏相濟、御居間書院ゟ女中幷高田彌右衞門御供に而御出、年寄衆・御家老衆・若年寄衆御目見被仰付。伊豫守御挨拶に而、女中御のしを取、右何茂ゟ被下之。於御廣式赤飯・御吸物・御酒一統被下之。於御表者御色直之節同事に、年寄中等右御目見之人々、幷御近習頭・御用人・御臺所奉行ゟ、從勝丸樣被上候御肴御吸物に而御酒被下之。

九月廿八日。是日以後前田吉德の入國祝賀の爲に能を催す。

〔御年表〕

九月廿五日諸頭以上召に依て登城。人持以上へ奥村内記温良、組頭以上へは村井主膳申渡候は、來廿八日御入國御祝儀御能被興行、何れも見物仰付られ御料理可被下候。且又人持以上嫡子何れも見物、頭分の嫡子、人持の二・三男、來月朔日見物可被仰付、諸役掛の平士は二日目、此外平士代番相勤る忰、御歩並の者共、三日より五日まで分れ候て見物可被仰付旨也。白洲見物も被仰付。

廿八日御能、開口風流有之。開口文句は伊豫守等示談にて、田中左源太へ仰付らる。御能初の御使は伊豫守也。要脚廣蓋の式有之。此の鶴の庖丁御覽。十月朔日・四日・六日・十五日・廿一日御能あり。廿一日には出家中御招請也。

〔御年譜〕

一、今般御入國御祝儀御能日數五日有之、御料理被下候。開口田中左源太作。

諸侯に三の寶有、土地人民政事とこそ。請けつぐ代々は久かたの、天滿神の末として、萬代を猶松梅に、折しも菊の折なれば、越の白根の本かたく、惠も深き國とかや。

十月廿五日。前田宗辰の誕生を祝して能を催す。

〔護國公年譜〕

一、十月二十五日勝丸樣御誕生之御祝御能有之。依之御肴一折勝丸樣江被進候。御使遠田勘右衛門御持弓頭。從勝丸樣鳧一折被上之。御使武田彌平次。御近習御抱守・頭分以上御料理被下、御能見物。

十一月廿七日。家中諸士の河北郡森下川以北にて放鷹することを許す。

〔政隣記〕

猶以御鷹場御免被成候右御禮、頭分之面々は御用番宅迄一兩日中勝手次第可有參出候。病氣等に而難罷出人々者、以使者可被申聞候。且又遠所罷在候面々者、以紙面其段可申越候、以上。

御鷹場之內、森下川を境、下之方者俱利伽羅を限、能州迄、向後御家中之人々、人持中以下鷹つかひ候儀御免被成候。乍然耕作之時分者障り申儀も可有之候間、十月朔日より三月晦日迄之內は罷出可申候。指竿・雉子突申儀も御免被成候。此外之諸殺生・唐網者堅御停止に候事。但、年寄中には、かなくさり川を境下之方も御免被成候。森下川より下之儀者勝手次第に候。御預鷹有之人々之儀者、尤只今迄之通に候。

右之通今般被仰出候條、被得其意、組・支配之人々に可被申聞候。且又組之內裁許有之人々も申聞候樣可被相心得候、以上。

十一月廿七日　　横山大和守　印

諸　頭　殿

十二月廿八日。徳川吉宗の前田吉徳に贈れる鶴金澤に着す。

〔護國公年譜〕

一、十二月二十八日宿次御奉書到來、御鷹之鶴御拜領。（當二十三日御用番水野和泉守殿聞番相渡）御禮之御使村中務（御馬廻頭）被仰渡、翌年正月朔日金澤發足、同十二日江戸參着。同十三日御用番相勤、同二十八日登城、於御白書院御目見被仰付。御披露御奏者番小出信濃守殿、御老中者松平伊賀守殿御取合被仰上候。御獻上物は鰍筋。二月二日江戸發足。右鶴到來之節、於御白書院御頂戴被遊候。鶴御近習頭津田平次右衛門・三宅平太左衛門持出。

是歲　能登島の流人五十川當三郎を赦免す。

（當三郎は五十川剛伯の子）

〔袖裏雜記〕

一、能州嶋之内曲村に被差置候五十川當三郎儀、流刑御免除被成、其段申渡候處、老母京都に罷在、未存命に候はゞ彼地へ可罷越候。母致死去候はゞ、立寄可申方無之候間、曲村に居住仕度由申旨、支配人申聞候。其己後便を以相尋候處、母相州に罷越、生死も相知不申候。一類も末々罷成候間、立寄申方無之候間、自今御扶持方被下之、曲村に被差置候樣本願候由

書付之寫、幷山本新左衞門添紙面。

前々流刑御免以後、其儘配所に罷在度段願者も無之、ヶ様之者は重而之例にも罷成申間敷候間、願之通曲村に罷在候樣申渡、只今迄被下候通、御扶持方相渡候樣有之候はゞ、結構成被仰付にて可有御座と僉議仕候。

御代筆付札。各僉議之通可然候。

本文の事その月日を詳かにせざるも入國翌年とあるを以て是歲に係く

是歲。前田吉德河北潟附近に放鷹す。

〔謙德公御年表〕

護國公御入國翌年、太田村領潟に而鵜御鷹野被遊候節、御袴御羽織御馬上、下口本道通森下村迄被爲入、十村金右衞門方江被爲入、御裝束被召替、御殺生御裝束なり。本道者御先供徒行兩人、其外御近習御供之年寄若年寄、幷御鷹方之者、山形御鎗・御挾箱一・御蓑箱・御茶辨當・御火繩迄に而、太田不湖へ被爲入、御放鷹被遊候。外御供人等者、御鷹野相濟、潟通り粟ヶ崎へ御船に而被爲入候を見計ひ、粟ヶ崎之方江向なり。扨御鷹野舟より黑船に被爲召候節、御座之間之外に、御近習頭分・御近習衆・同御横目、御挾箱等・御茶辨當、御鑓御船之へさきに立之、御火繩は御鷹方御徒横目山瀨専右衞門持之。但御徒以上之外は、御座船に乘候事難成御格之由に候而、三十八小頭より御火繩相渡候。小坊主は御座之左右に罷在候。御船手足輕、

船之左右に二十六人、へさきに水道之淺深を探見者一人、棊長六尺四歩有男ともの方に揖取、音頭取小頭共都合三十人參、御紋之幕左右にしぼり上、鈴繩を以揖取ども取かぢ・おもかぢ之通路す。歌同音にうたひ、拍子を蹈押行。潟筋御供之者は、夫々太田より舟に乘、御座船之左右御跡に漕行。稽古船に者嵜交幕打、年寄中等侍中乘之候。黑津船社頭御見物之節、各御供船より陸へ上り、又御船に召候と人々船に乘り申候。神主束帶に而罷出有之候得共、御會釋も無之、御鷹方御徒者等浦方獵舟、かい一挺櫓一丁に而漕行候所、二十六挺立之御船、粟ヶ崎御亭近に而歌を止、拍子を蹈、ゑい〳〵聲を揚、御亭下に漕寄候時分は、小船共は陸路歩行にしては四・五町程遲く着候事。

享保十一年

正月十六日。大槻朝元扶持米を加增せらる。

〔護國公年譜〕

一、正月十六日長谷川長雲・山本詠雪・長谷川孤舟・山岸又哲、御切米五十俵充被下之、定番御歩被仰付。御加增十五俵、都合三十俵三人扶持如元。山村閑悅、御加增二十俵、都合三十俵、三人扶持如元。大槻朝元、御加增十五俵、都合三十五俵、三人扶持如元。山本晴雪、御加增

十俵都合二十五俵三人扶持。杉本清順、御加増五俵都合十五俵三人扶持。兒玉順悦、御加増五俵宛、北村秋伯・山本嘉林・小木順嘉・中西舟水・橋本長順・橋本琴水、新知百二十石。井上傳五左衞門。只今迄之御切米被指除、定番御徒小頭被仰付。

二月十五日。曩に德川吉宗より贈られたる鶴を披露す。

〔護國公年譜〕

一、二月十五日舊臘御拜領之鶴御披に付登城、二汁五菜御料理被下候。御拜領之鶴者、御本汁に成申候。御能初前幷相濟御目見被仰付。頭分一統のしめ着用。此時檜垣御能有之。

二月廿二日。算用場に出頭する扶持人・十村・山廻の作法を正さしむ。

〔司農典〕

覺

一、御郡方より御算用場へ、御用之品有之罷出候百姓等、御門罷通候時分、ぼうし・頭巾をかむり、げた・あしたをはき出入仕、殊之外無沙汰に有之候。向後御用之品に付罷出候者共は、ぼうし・頭巾・あした等はき不申出入可仕候。此赴御門番へ被仰渡、不沙汰有之者は打擲可仕旨被仰渡置候。

一、向後番代幷手代中、毎度御算用場御門出入仕候時分、ぼうし・頭巾・笠かぶり不申樣、急

度御申付可有之由被仰渡候。

一、御算用場へ召連候草履取共、腰懸に相詰候由不沙汰に相見得、小歌抔うたひ[illegible]申者共有之候間、急度御申付可有之由被仰渡候。

右今日御改作御奉行様御列座に而被仰渡、播子方より御扶持人十村・山廻中へ急度申渡、御請書取置可申旨に候間、各御承知之上、一ト御郡切に御請紙面、早速御出可被成候、以上。

午二月廿二日　　田井村　次郎吉

津幡江村　宅助

村井村　與三右衛門

諸郡御扶持人・十村・山廻衆中

二月廿六日。大聖寺侯前田利章金澤城に登る。

〔御年表〕

是月廿五日備後守殿御參勤の路次金澤御止宿。廿六日御登城御饗應あり。御供の御家老生駒修理、頭分菅谷平太夫・中川萬右衛門・阿部左兵衛・堀江志摩、大廣間御勝手の方二之間に於て御料理被下之。二汁五菜 與書院に於て御目見仰付らる。

二月。幕府、今後七年目毎に男女の人數を調査して屆出でしむ。

〔政隣記〕

二月、今年より子・午年七年目々に、奉公人之外男女人數帳、郡分けに而可書出旨、公儀仰有。

二月。高田兵左衞門の子善左衞門白鳥を捕へしも罪を免さる。

〔政隣記〕

二月高田兵左衞門せがれ善左衞門、白鳥を捕來候に付達御聞候所、不案內者之儀に候間其通与被仰出候得共、兵左衞門儀者先自分に爲指扣置候由、年寄中より被申上、自分に指扣罷在候處、四月六日兵左衞門罷出相勤候樣被仰渡。

三月三日。御小將組頭松尾縫殿に對し不滿を抱く者を諭す。

〔淩新秘策〕

一、享保十年十二月廿五日御小將組頭闕有之に付、松尾縫殿被命候。縫殿本士列之子孫に而も無之候。幼少時分は又八と申候而、小坊主に而駒井與兵衞召使申候。親は足輕に而、與兵衞に出入も仕候故、相公樣小坊主之時より被召出、御意に應じ、段々御取立被成候。元祿年中御步並より新番徒組に被成、其後御奧小將に御加、終に御使番に被成、御加增段々被下、八百石迄に被成候。物頭並与申迄に御取立被成候。但組御預けと手代足輕は不被下候。享保

相公は前田綱紀

中將は前田吉德

家兄は榮山青地齊賢、來書は金澤より江戸へなり

中村久左衛門は御馬廻組頭

九年五月九日御遠行被遊候頃、達而剃髪之儀奉願候處、中將樣御許容無之、江戸より御國へ罷歸申候。同八月新番徒頭に被命候。高德院樣以來御代々、足輕より武功有之、御徒又は御知行被下士列に罷成候者は有之候へ共、縫殿ごとく坊主より新番頭之列に至り候者は無之候。此度御小將頭被命候處、御小將之內多は心服不仕候。在江戸之者も、過半は祝儀之書狀も遣不申候。御番頭・御橫目へ迄、其組に被仰付候者、如何樣に被仰付候共御請は難成奉存候旨申達候者も有之、御橫目も尤と存候故、其趣達御內聽、年寄中へも爲心得申達候由。依之先組分無之、御馬廻・御小將・御徒頭共に御用番支配に可仕旨、月番被申渡候。右之趣之儀に付家兄來書。

元來御小將之內より存念之者有之、たとひ如何樣に被仰付候而も、組に罷成候儀は難仕候与申候間、組分等之儀者先御見合可然旨、御橫目中より年寄中へ及內意被申躰に承候。其故与相見え、御馬廻・御小將共組分いまだに無之候。然處今三日拙者共同役中村久左衛門・御小將頭金森內匠兩人御用番に付、御奧書院の奧御用部屋へ御入拂に而、御年寄衆列座、段々御內意之趣有之、則御覺書を以被仰聞候。內匠先達而御請には、小身之家中などには、ケ樣之儀とやかく申事も有之樣に承申候。御家などにて御普代之面々、たとひ新參者に而も、古參同事に相心得罷在事に候得ば、聊存寄可有之樣も無之儀。萬一左樣之者有之候而も、爲申立候儀

到來は江戸へなり

に而も無之旨被申候旨。久左は、兎角同役共へ申聞、追而御請可申上旨被申上旨。御小將頭は幸何茂御城に在合、則時に被申上候而事濟候旨。何茂如何被申上候哉、其段は不承候。定而同樣奉存候。御番頭・御橫目も有之、以後同席へ御呼、是ゟも何哉覽被仰渡候旨、委細不承候。久左ゟは、同役中御城ゟ相招、又者宅ゟ寄合等も目立可申哉、御請少延引は不苦候間、寄々申談、御用番一人罷出御請可申上との事之旨に而、私宅ゟ被罷越相談に而候。右之通之御隱密に候間、態与筆談は指ひかへ申候。兎角縫殿身に仕候而は、とかう可申上候樣も無之、難有仕合に而候。拙者共御請には、萬一組中なと存念之者有之候而も、此被仰出爲申聞候上は、聊存寄可有之樣は無之筈与奉存候段、御請口上若者覺書に而も指出可然之旨久左ゟ申談、口上書相調、同役中段々被相傳候筈に而被罷歸候。此被仰出不承候而は、存念之者有之間敷与は難申事奉存候。內匠殊に御小將中、既に此度之首尾も有之候處、御請之趣難心得拙者は存候。但此方同役中にも如何被存候哉、久左殿最初に拙宅ゟ被參候故、拙者不存候。此被仰出、最前より少計も添候へは、誰も何とも可申樣無之事。御覽後早々可有火中候。

三月三日　　　　　　　　　　　　　　　　　兼山

本紙は令投火候。同月十七日此飛脚到來、御小將番頭村田主水・三輪藤兵衞、御橫目高畠菖太夫ゟ同役中より御書出到來。依之十八日・十九日兩日、御書院之次に而三人列座御書出令讀爲

二月は三月なるべし

聞被申候。

〔政隣記〕

二月二十日於金澤、御大小將御番頭中・同御横目不殘御用有之旨、御月番前田大炊殿前日依御紙面、今日登城之處、伺之御間御廊下に御年寄衆御列座有之、御内意之趣被仰渡、御請書御渡、各拜見之上封印を以認置之。

〔袖裏雜記〕

松尾縫殿御小將頭に被仰付候儀、組之人々等不心服之趣、御横目より内々年寄中へ相達、其段達御聽、伺之上御馬廻頭御用番中村久左衞門・御小將頭金森内匠、御大小將御番頭・御横目は不殘召寄、御居間書院御勝手に而各列座、左之通御内意申聞。

松尾縫殿儀、今般御大小將頭被仰付候。各存知之通、縫殿儀は素姓之所も有之候故、急度組頭役など被仰付候儀者、如何可有之哉与思召候。然共松雲院樣御近習被召仕候与申内にも、中村典膳・縫殿、此兩人者並も無之程御意に應候。御末期迄も御懇に御心安御つかひ被遊候。夫故段々御取立、縫殿儀御先代物頭にも被仰付置候。惣而之樣子、典膳・縫殿指而差別無之内、少階級者有之候。去々年典膳御馬廻頭に被仰付候砌、縫殿も組頭にも被仰付度思召候へ共、右之鹽梅も有之候故、先去々年は御延引被成、新番頭被仰付候。新番之儀は、歴々之子

弟等有之、其指引も仕事故、典膳より縫殿儀者、去々年差別有之候而も縫殿も忝奉存候。是以後とても御取立可被成思召候故、此度御大小將頭に被仰付候。不及申儀ながら、たとへ素姓輕き者に而も、被對御先代段々御取立之上に而、組頭等に被仰付御下知之上者、御譜代之御家來など何角存念ヶ間敷儀有之間敷事に候。萬一左樣之族有之候共、御孝心を以右之通被仰付候儀に候得者、所存も有之間敷儀に候。此段潜に申聞置候樣にとの御內意に候。

三月四日。百姓恣に垣根の竹木を伐採するを禁ず。

〔加藤氏日記〕

今般村々百姓共、垣根廻之竹木密々に伐取、商人え賣渡、宮腰等え相廻候旨粗沙汰有之候。惣而百姓居屋敷垣根廻り竹木之儀、拜領仕度旨帳面に記指出候得者、其品遂披見、御算用場え相達、願之通申渡筋に候處、右之族我儘之仕形沙汰之限に候。早々村々肝煎・与合頭呼寄、急度遂吟味、有無之儀書付爲致、面々加奧書可差出候。披見以後、早々先に相廻、落着より可相返候、以上。

午三月四日　　村井安左衛門

　　　　　　　澤田十郎兵衛

御郡十村中

三月七日。江戸邸に勤務する諸士の心得を諭す。

〔典制彙纂〕

家中之人々致困窮候付、取續之儀去年申付候。今般江戸に相詰申者共、旅行從者隨分致減少、從者衣類等茂相改申間敷候。老人之外頭分たりといふとも、無謂駕籠乘用仕間敷候。尤乘懸馬美麗之飾等、堅可爲無用事。

一、江戸在・留守中、於長屋同役用事等爲申談寄合申外、出會遠慮候而尤に候。假令遣酒出合候共、聊華麗之儀有之間敷事。

一、門外行歩遠慮可仕候。無據子細有之候者、其品頭・支配に相達可受指圖候。尤用事相仕廻候者、早速可罷歸候。若及遲參候者、頭・支配人より年寄中に可申達事。

右之趣急度致心得、勝手取續、奉公專一に可相心得候。尙委細之儀、年寄共より茂可申渡候條、一統致承知嚴重相守可申候。

以　上

享保十一年三月七日　　御　　印

〔典制彙纂〕

覺

習親はなじみと訓むか

樂舞は亂舞

一、歴々頭分之儀者、諸士・諸役人之手本にも罷成事に候得者、萬端相愼、內外作法宜敷、不及迄も風俗相嗜可申事に候處、心得違取亂したる族も有之樣被聞召候。何茂御家久敷面々に候處、御爲惡敷儀者不奉存筈に候得共、頭分初風俗惡敷候時者、自ら其風俗に習親、畢竟御爲に宜からず被思召候事。

一、江戶表之儀者、人々小屋々々に雖有之、外邊同樣之事に候得者、人々穩便に相慕可申處、小歌・淨瑠璃等、或其町中にも相聞候程に亂がはしき躰、尾籠之仕形粗其聞有之、侍之正儀をも取失ひ申樣に見聞之者も可有之候。左樣に候而は第一御爲に不可然候。人々急度相愼、相互に無禮不作法無之樣可相心得事。

附、下々博奕其外尾籠之仕形共有之儀、其主人々々不覺悟に准じ可申事。

一、近年御旗本衆參會之儀は、堅御停止に候。左候得者、御出入之御坊主衆等或聞番抔は、承合之爲御用於御長屋參會茂可仕處、已前聞番等相勤候面々其外も、御屋形に而度々參會之好を以無謂相親、且出入之御役者共にも、樂舞稽古に事よせ猥に馴親、不愼之行狀も有之樣相聞候。向後者聞番に候共、於御殿參會之外は、一向付合可爲無用事。

一、音物之品表立候而贈答無之向にも、內々之付屆有之躰に候。向後餞別之送り物幷土產之品、親子兄弟之外は堅可爲無用事。

一、人々參會之時分美食を好、無謂諸道具を翫び、剰武藝には細々敷躰之族も多有之樣相聞候。一向參會不仕儀も、若き人々難成事歟。折節者湯漬飯輕く、一汁一菜に而穩便に參會、勤仕等之儀申談者各別に候。夜中に至候而は、歷々を初無僕躰之族も有之樣に相聞候。武士之道は晝夜之差別無之事候。ケ樣に候而者、其以下猶以亂行見習不可然候事。

一、御門外ゟ行歩等に罷越候とても、其身代相應に人馬召連可申處、近き頃者人々勝手次第之樣子、其先々に而不作法尾籠之仕形有之段、具に被聞召置候。ケ樣之族者、武士道取失ひ申樣に被思召候。急度被仰付候樣も有之候得共、先此度者被思召候御旨有之、御用捨被遊候。以來右體之族於有之者、御家中御見せしめのため、急度曲事可被仰付候事。

附、跡々如御定、傾城町・舟遊其外見物場、惣而群集之場所ゟ立越候儀御停止候條、彌其心得可有之候事。

一、惣而御家中之面々儉約を不用、自分之榮耀宴樂遊興を所行とし、無用之費多、故なく勝手を取失ひ、其而已ならず他國往返度々、御普代にあまへ何廉難澁仕候。是等之趣、頭其心得なく、平生油斷之仕形与被思召候事。

附、近年は美服を着し、無御免に紅裏を着用之者も有之樣に被聞召候。萬端手ぬるき樣子に被思召候事。

右之趣得意、以來嚴重に可相守旨被仰出者也。

享保十一年三月七日

右御書立、當十五日於御城被仰渡云々。

三月。無組十村等羽咋・鹿島兩郡を巡回するに先だちその趣旨を告ぐ。

〔司農典〕

今般羽咋・鹿嶋兩御郡へ拙者共被遣候儀、先達而御扶持人・十村中より可被申渡与存候。就夫指當り候趣左に相調候。

一、近年百姓中定免に而全皆済仕儀無之、御見立・御貸米等に而御償罷成候處、去年羽咋・鹿嶋兩御郡村々之内損毛之程、十村中毛見いたし置候得ば、畢竟其申渡相守罷在可申處、御法を相背、稲かづき金澤へ罷出候儀不屆に付、其節御詮議之上先禁牢被仰付候者も有之候。此等之趣は百姓に不限、脇より添をこひ、右之族に仕成候徒者有之様御聞及被成候間、連々を以ヶ様之類可被遂御吟味思召、段々被仰渡之筋有之候。第一耕作之儀、鍬初より中切・植付・草修理・手入・養等不精に候故、出來劣り候儀も申立いたし候族、百姓癖悪敷、毎年御償を受不申候而は不叶様相心得候儀、御法も猥に罷成、大切至極之御儀に候。仍而段々御詮議之上、當春より拙者共村廻いたし、耕作仕立より惣而取入に至迄遂吟味、御納所方急度御藏納仕候

添をこひ本のまゝ

樣、嚴重可申渡旨被仰渡候間、晝夜共無油斷耕作方に精を入、諸事不埒之儀無之樣、百姓幷小作之者共迄被仰渡候。ヶ樣に申渡候上にも、萬一百姓者不及申に、下人等に至迄不心得成者有之候はゞ、拙者共迄早速案内可有之候。右之通末々之者迄得心いたし、猥之儀無之樣嚴重可被申渡候。尙更十村幷御扶持人より可被仰渡候間、急度相守可申候。此外被仰渡之趣共、追々可申渡候、以上。

丙午三月

大白石村　三郎右衛門
鹿野村　恒方
戸出村　又右衛門
野々市村　吉兵衛
天正寺村　十右衛門
鵜川村　六郎右衛門
中橋村　久左衛門

羽咋・鹿嶋兩郡村々肝煎・組合頭中

三月。十村等の貸米を乞ふ爲城下に來るを禁じ耕作の督勵に努めしむ。

〔司農典一〕

精子は勢子

去年永日旱損村々有之に付、御貸米可奉願由に而、能美郡・礪波郡・射水郡・新川郡御扶持人幷十村共、此節不殘御當地へ罷出有之候に付、先達而田井村次郎吉・津幡江村宅助・村井村與三右衛門を以詮議之趣申渡、十村共之分者不殘相歸申候。近年御貸米相願候時分者、御郡々御扶持人・十村共罷出相願申儀に候得共、近年一統改作之御法猥に罷成、第一農業不精にいたし候故、上田・中田・下田所共に土地不相應取劣り、無益之費無際限相開候に付而、三ヶ年以來古法に立歸、則役人も被仰付、諸事相調理申儀各存候處に候。其上能州口郡之儀、別而耕作方不精に相開候故、此度役人共茂相遣候時節に候得ば、外御郡々十村共、一組切農業仕入・田地請卸し、指當り荒起等之儀、無寸暇村々相廻精子入可申處、其考も無之、支配之村々は打捨置、願事之爲計に御當地へ不殘罷出有之儀、如何相心得罷在申事に候哉。地味相應之産物不劣樣取上可申与申所存は致忘却、御上之費さへ有之候得者、産物多少吟味にも不及与相心得申事に候哉。又は三ヶ年以來之改方うるさく候に付、打破り可申与申心底に候哉。右改方之儀者、御法守り候得者、十村共者無心懸致裁許、末々百姓共其下知を守候時は、農業一方に片付、畢竟妻子以下をも安心仕ため之儀に而候處、何れも心得違仕罷在候与相見得申候。願之儀は、爲其之御扶持人に候故、一郡切御扶持人共承屆、吟味之趣潔白に指詰り、無據儀に決候而者、右御扶持人共迄罷出、相斷候而事濟申事に候。當正月十七日も是等之趣委細申渡

候處、思慮を廻し候事も無之、兎角十村共之心得、一圓合点不參儀に候。向後ヶ樣之不違慮成仕形有之候得ば、急度可申附候外者無之候間、得与了簡いたし支配可仕候。最早雪消申事に候間、在宿仕儀無之、早速組々村廻に罷出、田地方仕入・荒起等嚴重精子入、何日に罷出何日に罷歸候段及注進、又五七日宛間無之村廻罷出、出日歸日度々に可致注進候。當年之儀は、田方實乘申迄は如此相心得、田方實入候はゞ、右度々村廻之節支配之趣、帳面に記置指出之、可受指圖候。右之趣書付可指出之候、以上。

午　三　月

別所忠兵衛
菊　田　逸　角
山東武左衛門
大塚彌五太夫
賀古助之進
稲垣傳左衛門
坂井知左衛門
高畠權太夫
御貸銀御用　中村武平次

能美郡・礪波郡・射水郡・新川郡御扶持人・平十村中

右書面田井村次郎吉・津幡江村宅助・村井村與三右衛門より、加州・能州十村共へも一統傳達いたし、急度請書付取揃可指出候、以上。

四月二十日。役人等の書類取扱手續に關して令す。

〔政隣記〕

四月廿日御用番安房守殿御渡之由に而、御横目中傳達紙面左之通。

只今迄役人中より奉伺候儀に付紙面、又は一通り入御覽候紙面に、御添書・御附札等を以被返下候類、御覽届迄に而被返下候紙面等之内、御扣にも成、或者重而御用に而御留置も可被遊与思召候紙面に者、向後御印御押可被返下候間、御添書・御付札等之有無に無構、御印有之候者、其紙面者少も藏切申儀抔無之、其儘に而返上可仕候。尤本紙に相添候品々者、取揃候而上之可申事。

四　月

追而同役中可有傳達候。且又組・支配之内御用懸之人々にも、可被申聞事。

四月廿五日。御居間方の者の野外にて御歩横目に用務を命ずるを免す。

〔文化雜記〕

大槻朝元の名見ゆ

一、今日鷹橋左門申聞候者、先日御鷹野先に而、小坊主道惡敷所やゝこれを通り懸り、危相見え候に付、御鷹方御歩横目渡邊七郎左衛門、手を引候而介抱仕候儀被聞召、小坊主は勿論之儀、大槻長元并其外御居間方之者、野間に而何ぞ用事有之候者、御歩横目には役儀有之事に候間、申達不苦儀与被思召候旨御噂之由、伊藤習悦申聞候條、野間等にて御居間方之者用事頼候とも、承候樣御歩横目江急度不仕樣に可申聞置旨、左門私江申聞候間、彌此趣に相心得、内證可申聞置候哉、爲念奉伺候、以上。

四月廿五日　　奥村七左衛門

御端書、此儀は先達而成程左樣に相心得可申聞候、以上。

五月八日、使を京都に遣して二條吉忠夫人の痘瘡を見舞はしむ。

榮君は前田綱紀の女前名直姫

〔政隣記〕

五月七日榮君樣御疱瘡之由、昨日從京都申來、御見廻之御使御馬廻組本保三郎兵衛今日發足。十七日歸着。御酒湯御祝儀之御使、御先手水越三右衛門江被仰渡、十九日發足、六月二日歸着。

五月八日、今明兩日前田綱紀の三回忌法會を天德院に行ふ。

〔護國公年譜〕

一、五月九日、松雲院樣三回御忌に付、昨今金澤於天德院御法事御執行。尤兩日共御參詣。

八日御參詣九つ時前、九日四半時御參詣被遊候。御法事奉行前田大炊。諸事御同格。御家中面々拜禮茂去年之通。

於玉泉寺、前々之通御施行有之。奉行高山藤右衛門・佐久間甚八郎・渡邊左兵衛・青木隼人、四人共物頭。

五月廿八日。前田宗辰初めて玄關前に出遊す。

〔政隣記〕

五月廿八日勝丸樣御玄關前ゟ今日初而御出。依之御白洲ゟ、御大小將御番頭初御大小將中罷出。但翌廿九日奉伺候處、今年は其通に而も候得共、一兩年過候者度々御出、一ヶ所に久く御遊び可被遊候。左候者罷出候者、立申時節無之樣に可罷成候間、御白洲ゟ出に及間敷候。乍然如斯被仰出候者、向後格之樣に可相成候間、急度被仰出に而無之わけ、又罷出候樣にとの譯にても無之候。先罷出に不及、詰所に作法宜可罷在候。寄々御步横目御玄關邊等相廻之、作法宜可申付旨被仰出候。此段承知候樣にと、高畠善太夫々申談候事。

六月十三日。算用場奉行に命じて改作法を守らざる十村・百姓の取締を厳にせしむ。

〔司農典〕

今月十三日於二ノ御丸に、御年寄衆御列座、御月番横山大和守殿被仰渡者、近年改作方御法取失候十村・百姓等多有之段相聞候に付、急度相改候樣御算用場御奉行中へ被仰付置候。就夫に菊田遜角儀、今年江戶へ相越候巡番に候得共、此節之儀故遜角も罷在可申哉由に而、於江戶に之儀は被指留候。改作方御格式之儀は大切成事に候條、十村・百姓等急度相愼申樣精誠に致覺悟、朝暮油斷仕間敷候。十村等御法を忘却仕候儀も、何茂油斷之躰相聞申旨、大和守殿被仰渡候。件之趣遜角に者別段に被仰渡有之候事。

右之通被仰渡候條、御當國幷能州・越中御扶持人・平十村等急度奉承知、組中末々之者共迄能々可申聞候。大和守殿被仰渡候通、近年改作方御法猥に罷成、第一十村共之内にも御法忘却仕躰に付、去々辰年より遂詮議奉達御聽に候上、田井村次郎吉、村井村與三右衛門・津幡江村宅助重き御用棟取申渡、幷古格致相違候儀共調理方御用、御扶持人等之内夫々役人相立爲調理申談、何れも承知仕通に候。然共百姓共成癖、驕之儀に親み、御年貢方作善惡之差別、其年之土地產物・稼物等を以皆濟仕候儀者稀成樣に罷成、兎角御貸米等無之候得は、皆濟は不仕物之樣に相心得、全く御法を取失、年來御恩澤を忘却仕候仕形、沙汰之限に候。此段者十村共御格式を取失、兼而組々之締仕儀は無之、上には相歎候儀を前に立申覺悟より事起り申儀に

善惡之差別本のまゝ

候。去々辰年より御法を改懸、其上此度右之通り御年寄衆御列座之上被仰渡儀に候條、向後不心得成十村共者、詮議之上可及其沙汰に候條、此段致覺悟、自今以後之儀嚴重相愼、組々一村々々百姓共、一人も不殘右之趣書立を以爲觸知、人々承知之印形を取置可申候。此上にも蟠、御年貢等及難澁に申百姓共於有之に者、即時に可致注進候。吟味之上御法之通曲事に可申付候條、其罪を請不申樣、兼々十村々々より申含、得与爲致合点申儀肝要に候事。

享保十一年六月

別所忠兵衛
菊田逸角
中村武平次
山東武左衛門
高畠權太夫
大塚彌五大夫
賀古助之進
稲垣傳左衛門
坂井知右衛門

加州・能州・越中御扶持人十村・平十村中

六月十六日。徳川吉宗の生母逝去するの報金澤に達す。

〔政隣記〕

六月九日夜將軍吉宗公御母公淨圓院様御逝去。江戸御邸には普請は十六日迄、鳴物は廿二日迄遠慮候様、御邸中小屋觸有之。金澤へは右十六日に告來、普請者同日より三日、鳴物等も遠慮可仕旨御觸有之。右に付御悔使新番頭水原淸左衞門へ被仰渡、十九日發足、廿七日江戸到着。

一、右に付在國之御方々よりも、以使者御精進物一度可被指上旨御書付渡る。依之品人を以御獻上之事。

六月廿二日。諸士の借銀を整理する爲除知を命ず。

〔政隣記〕

六月廿二日御家中之人々、去年惣様書上置候、上納相滯候に付御納戸銀を以御土藏へ納候分、幷去年御貸銀、且又町方借銀・買掛銀爲上納返濟、今年より知行高千石に草高五十石宛之圖、御切米五十俵は知行高に直し六十石、御扶持方十人扶持者四十五石計之圖を以除知仕、此定納・口米を以連々返濟仕候様被仰出候趣、御用番横山大和守殿御申觸也。但御貸銀奉行受取之。

六月廿八日。京都に於ける加賀藩邸の一部燒失す。

〔政隣記〕

七月朔日、去廿八日之夜京都御屋敷南御長屋片頰過半燒失。九時出火、翌朝卯刻鎮候由告來。

七月十八日。大槻朝元扶持を增し步並に班せらる。

〔護國公年譜〕

一、七月十八日五十俵山村閑悅（名改善左衛門）、五十俵大槻朝元（名改傳藏）兩人御步並に被仰付、奥小將御番頭支配被仰付候。石九文太夫・武藤多次右衛門茂、二貫目充衣服料可被下旨被仰渡候。此兩人も奥小將御番頭支配也。

八月十日。御大工・穴生等の帶刀を許す。

〔政隣記〕

八月十日御大工・穴生・御扶持人石切・川除見圖人、右之類其々支配より願に付、向後刀爲帶候樣被仰出。

穴生は藩に仕ふる石工の家柄なり

八月十五日。前田吉德用銀の供給を命じたる金澤の町人に謁見を許す。

〔政隣記〕

八月十五日金澤町人紙屋武兵衛・越前屋豐右衛門、於矢天井之御間、御通懸初而御目見被仰

付。御銀御用依勤に也。

八月十五日。前代より定められたる儉約の條目を嚴守せしむ。

〔政隣記〕

八月十五日於松之御間御年寄衆御列座、被仰渡之趣左之通。

御家中之人々儉約之筋、御先代御定之趣急度相守候樣、去秋以來以御印章被仰出候、當春ニ

段々被仰出候。猶更委細に者追而年寄中より可申渡候得共、先左之分、先規より御定之通、

且近年年寄中より申渡候趣を以、嚴重相守可申候。

一、衣服之事。

一、音信贈答之事。

一、鷹之事。

一、婚禮之節之事。

一、葬送・法事等之事。

一、饗應又は公私之儀に付參會之節料理等之事。

右品々者儉約之基に候條、隨分省略可仕候。

一、前々より被仰出候御制禁之筋、且又内外行狀之儀、是又綿密相愼、文武之道不怠樣心得

可申候。

右之趣先申渡候樣被仰出候條、頭々其身を始、組・支配之人々ゟ無油斷可有指引事。

八　月

御家中儉約之儀別紙覺書之通候條、婚禮・家作又者祝儀等之儀も、其樣子時々頭々委細被屆候上、急度可被及差圖事。

八　月

八月廿一日。家中の士にして狂氣により自他を傷つけし者等の知行を沒收すべきことを定む。

〔本多氏古文書〕

覺

一、家中之諸士、亂心に而自害いたし損じ存命之者、又は亂心に而家來等致及傷候者、向後知行取上、輕き扶持其人之樣子次第に遣可申候。此一條は松雲院殿御存命之時分、每度御直談被仰聞趣に候。

一、長病人跡目之儀、病氣之品により知行減少可申付候。

右之趣に向後可申付与存候。何茂其心得に而、跡目之節其沙汰可有之候。

八月廿二日。前田吉德金澤を發して參覲す。

〔政隣記〕

八月廿二日金澤御發駕。

八月廿九日。大小將組古屋八郎兵衞を能登島に流すことを宣告す。

〔政隣記〕

七月廿二日公事場江御年寄衆御出座、去年以來前田中務江御預人二百石御大小將組古屋八郎兵衞重堅、當春より一類御預人組外臼井平左衞門忠長・同養子權五郎忠明被罷出、決斷御聞屆。八月廿九日八郎兵衞者御知行被召放能州江流刑、九月十一日右嶋江被遣、十人扶持被下之。翌晦日一類遠慮不及旨被仰出。八月廿九日平左衞門父子者閉門被仰付。但平左衞門儀、最前小松定番御馬廻に而、居屋敷之外惣構竹數伐取申故と之說也。

前記七月廿二日に有之、古屋八郎兵衞江八月廿九日被仰出之趣、則前田中務宅江、公事場奉行中御小將頭丹羽武兵衞、御橫目も罷越申渡有之。

重々不屆之至に付能州島之內江流刑被仰付候旨被仰出。

右之趣公事場奉行富田織部申渡之。但九月十一日能州閨村江被遣之。其節中務宅江頭武兵衞

惰子は勢子

罷越申渡、且家來一兩人召仕候儀勝手次第与被仰渡候。其段も武兵衛申渡。前記之通十人扶持被下置候段も同人申渡。

但配所居所出來迄中務方に被指置。附、三四度於公事場御吟味有之、其筋不知。

八月。田租の皆濟方法に關して令す。

〔司農典〕

今年年御領國十郡共、作毛雖豐饒之年と相聞候、第一去々辰年より改作方に隨ひ、御郡々十村共今年惰子を入、荒起より精を爲出、植付手後れ無之故、如此滿作之樣子に相聞、十村共一段之存入に候。向後者今年之格式無相違、荒起より養仕廻・植付等・草修理等後れ不申樣、綿密勢子入可申儀專用之事に候。就夫に、御領國一統皆濟注進日切、古來より十二月廿日限りに候得共、三十ヶ年以前迄、改作方之御格、皆濟日切者其儘十二月廿日切与申觸候段、十村承屆置、越中筋等組に寄、十月五日を限每年爲致皆濟候十村も有之。依之に其筋之十村共は、極而十月晦日限爲致皆濟候御郡も有之儀、歴然當時存る十村共も可有之候。ヶ樣之仕方、全御年貢方大切与存、御法を急度相守候心服より事起り申儀に候條、今年年御郡々皆濟之儀、十村共手前に而は十一月晦日切、急度御藏納等爲致皆濟、十二月十五日切皆濟狀印形を取仕廻候樣相心得可申候。此日切を延候事は決而不罷成候條、可致其心得候。但秋縮注進之儀者、

如例之土用に入候日を限、急度可指出候。件之趣に仕儀成不成は、御領國中三十一人之御扶持人十村、五十一人之平十村心底次第之儀、古來より其例無紛候條、急度此段承知可仕候。此上は情を出候十村共、其段御算用場御奉行衆へ迄相達、又は不情成十村共、急度越度に被仰付候樣、右奉行衆迄可相達候條、嚴重相心得申儀肝要に候。陸村々肝煎・組合頭之儀は、一村々々之吟味明白に相改、其組十村へ有躰に訴へ申において、古來より村々に被立置候儀に候處、近年肝煎・組合頭、小百姓与同事に罷成、樣々之申立仕、村中之者も引そこなひ申者共も多有之由。向後耕作御年貢方之儀は不及申に、不依何に肝煎・組合頭役に懸候儀、不情又は不存之筋之者有之候はゞ、卽時に可致注進候。若隱置、脇より相知候はゞ、其組之十村可爲越度候條、此段別而綿密相心得可申候事。

附り、右之通日切皆濟爲致候時は、畢竟百姓安心之節に而、御郡之豐に罷成大根に候條、能々可致合点候。如此日切皆濟爲仕候時御定之歩入、八月五石、九月七石、十月四十石、十一月三十石、十二月十八石納申筈に候得共、此通に而は末後れ可申候條、右歩入之員數無搆、本文に有之三十ヶ年計以前迄射水郡取立之通、當八月より成次第取立、代官向々迄待合候而は、納方及延引申儀も可有之候間、中出藏に入置、代官向次第爲斗可申候。右之納方者、當時能美郡御扶持人十村、先達而如此仕度段相願、尤之心付与相聞候に付、願之

通可申付候間、御郡々一統に申渡、納方右之趣に相心得可然候事。

以上

午八月　　　　　　　　別所忠兵衛等九人

十郡御扶持人・十村中

八月。給人の收納米を藏宿に納入する方法に關して令す。

〔御郡典〕

覺

一、御家中諸人知行米、所々藏宿納方之儀、古格致相違、近年猥に罷成、百姓之費無際限、全藏宿共私曲之筋より事起り申儀与相聞候。右百姓之費不相止候而者、御改作御法にも背、大切至極之儀に候條、古格之通向後納方致明白、百姓費無之樣於不仕に者、越度に可申付候條、此段嚴重被申渡、毛頭違犯無之樣、左之趣に爲相心得可被申候事。

一、藏宿共米見屆候時分、態と米を指こぼし、目拂米と名目、藏宿共手前へ引取申由相聞候。此儀は一向無之筈之事に候。目拂米与申候は、斗立候米致俵拵候時分、自然に少々宛俵之目をくゞり候米、一石に五勺・七勺宛有之物之由に候處、右目拂に事寄、藏宿共米見屆候時分、折敷之内より簸こぼし、又者百姓共俵をならべ置候處、折敷を持廻り候而、一俵々々之所に

而數ヶ所指を入簸こぼし、殘米箕ゟ入候時分も態々こぼし、自ら敷筵之外ゟ落こぼれ候樣仕成候。此米莫大之由に候得共、其段百姓申立候得者、宜敷米も惡敷樣に申立、又は米可受取時節も及遲々に、兎角百姓ゟ難澁を申懸候故、無是非右損失之儀申立候儀も不得仕、藏宿共存分之通に爲致候由相聞候。此趣者私曲不輕仕方に候條、向後ヶ樣之儀有之候はゞ、急度吟味之上曲事に可申付候事。

一、米善惡見屆候時分、折敷へ米一升程宛入、簸出し候時分前に箕を當て置、箕之內に而簸立、こぼれ米も箕の內へこぼれ候樣に致し、善惡見屆候以後、折敷之內殘米箕之內簸出し米共、百姓へ相返し可申事。

一、二枚ござ斗筵之儀、前々より藏宿共方より相渡上筵を以、二枚ござにいたし、聊米筵之目を通不申樣に仕筈に候處、近年者至極麁相成筵を以繼立、態与米通り候樣仕立申由に候。向後如古例上筵指出、少しも米ぬけ不申樣可仕事。

一、斗り米俵ゟ入候時分、箕に而入候に付、米こぼれ申由相聞候間、御藏納米も、向後は籠に而じやうごを拵、斗米俵に詰候樣に御藏納御代官中ゟ申渡候。右籠は御代官中より指出申筈に候間、藏宿共之儀も、右之通相心得候樣可被申渡候事。

一、今年皆濟之儀、十一月晦日切に申渡候間、納米之儀は勿論無遲滯、早速受取候樣可被申

渡候事。

一、諸給人より米納候時分、相見人罷越候儀有之様に相聞候。御改作御法始り候以後、諸給人より御郡方ゟ下代等遣し不申樣に被仰出有之候間、向後相見を請申儀抔堅無之樣可被申渡候。藏宿締方之儀は、各手前御定も有之儀に候得ば、相見人入可申樣も無之候。第一右之通に候條、急度此段可被申渡候。若其上にも相見人等請申首尾有之候はゞ、藏宿共越度に可申付候事。

一、百姓共所々藏宿々々ゟ米持出候而も、何角相滯、數日町宿に大分之米積置申由に候。此儀御藏納米之儀に付、寬文年中之定書にも、數日町宿に米を積置、若火事等に逢候はゞ、品に寄六ヶ敷儀も可有之由、當場より定書を以申渡置候。諸藏宿共手前も准之に申儀に候間、兎角百姓米持出次第、早速受取候樣可被申渡候。右請取方及遲滯候子細者、米預り候町宿之者与藏宿共申談、數日宿々に米を指置、宿賃銀其外百姓に物入を懸、藏宿幷宿主之德分に仕圖之由沙汰有之候。此段實正に候得者、御改作御法に懸り、罪科之筋に候間、向後ヶ樣之族無之樣可被申渡候事。

一、寬文年中之定書之內にも、古來より斗桝に手立を仕事之由、其手立之樣子も相知有之儀に候條、藏宿共手前に而、古斗桝之分は新斗桝に取替候樣可被申渡候事。

右之通急度可被申渡候。若件之趣相違之儀有之候はゝ、直に百姓より及注進候樣申付候條、所々藏宿共手前此段可被申渡候。且亦各より被申付置候米納方改人にも、藏宿米善惡見届候時分、態と指こほし簸こほし、惣而百姓に難儀を懸申儀毛頭無之樣、右改人より藏宿に嚴重申談候樣可被申渡候。此上米指こほし等仕候はゝ、右改人も藏宿同事越度に可申付候間、急度其段可被申渡候、以上。

享保十一年八月　　御算用場

小堀左内殿

山崎久兵衛殿

河地勘五右衛門殿

村井安左衛門殿

澤田十郎兵衛殿

山本新左衛門殿

諸給人知行米、藏宿共方に而納方之儀に付、今般御算用場より御定書出申に付、則寫指遣候條、得其意、藏宿共に急度申渡、尤御定書之趣を以、藏宿共御請書印形見届、面々加與書可指越候。披見已後判形候而、別紙共早々先々相廻、落着より可相返候、以上。

午九月六日

村井安左衞門

澤田十郎兵衞　殿

奥・口藏宿有之十村中

奥口は能登奥郡口郡

〔御郡典〕

藏宿共諸給人收納米納候時分、年寄衆幷高知之人持衆より、米納候相見人罷越由に候。此儀は御改作御法に而、右相見人不罷越筈之處、何之頃より相見人罷越由に候。然處今般御算用場より、御書立を以被仰渡候通、右相見人不罷越候樣、藏宿共方より相斷可申候。若其上にも、何とぞ子細有之由に而相見人罷越候はゞ、早速藏宿共方より、其委細書付を以可及案内候。

右之通面々得其意、藏宿共へ急度可申渡候。尤承知之趣書付に加奥書可指出候。披見以後判形候而先々早々相廻、落着より可相返候、以上。

午九月十八日

澤田十郎兵衞

御郡廻　村井安左衞門

口兩郡藏宿有之十村中

口兩郡は羽咋鹿島

九月四日。前田吉德江戶に着す。

〔政隣記〕

九月四日晝過本郷御邸ぇ御着。六日上使松平左近將監殿御老中。但跡々御參府翌日上使之處、昨日吹上御成に而難達上聞に付、今日上使之旨、御出入坊主衆被申聞候。

九月十一日。前田吉德登營して參觀の禮を行ふ。

〔德川實紀〕

九月十一日臨時の朝會あり。松平加賀守吉德はじめ參覲三十人。

〔政隣記〕

十一日御參府御禮、御懇之上意。前田大炊・前田修理御目見等、都而御先例之通。

九月、盛岡侯南部大膳大夫前田氏の知を得んことを望む。

〔大野木克寛日記〕

一、享保十一年九月松平佐渡守殿因幡少將吉泰朝臣御舍弟、本名池田氏。本郷之御屋形ぇ御入來被仰述候は、南部修理大夫奧州森岡之城主御知行十萬石。事、中將殿ゟく〳〵御見覺被成間敷候、何とぞ得其意度旨申候。南部氏は御家ぇ、先祖以來御懇切之趣有之候。則修理大夫紙面を以申聞候旨被仰、御覺書御持參被成候。利家公ぇ先祖南部大膳大夫信直、天正年中以來通路いたし、段々預御懇意、公邊是者太閤秀吉公御代事也。得御引回、其節御深切なる御判形之御書附被遣候。因之嫡子信濃守御名乘字を懇望いた

し、利直と改稱し、代々御心安被成被下候。右信濃守利直事者、大膳大夫重信實父に候。右衞門督殿御婚禮之節、大膳亮儀爲御迎罷越、双方御參會之節、兩度共被召加候。其外將軍宣下御祝儀等にも、參り候樣被仰下候へ共、其節は不快に付御斷申候。加樣候事、皆右之由緒を以如此に候旨也。佐渡守殿平田外記を以被仰述候に付、其後御招請被成候。利家公奥州御在陣之節、長柄之鑓百本爲御持之內、十本信直所望に付被遣之、今以南部家に致傳來候。加樣之事は却而御家中には不知事も可有之与、佐渡守被仰由に候也。

十月廿九日。能大夫諸橋權進舞臺を建てたるを以て今日より四日間に亙り興行す。

〔護國公年譜〕

一、諸橋權進屋敷拜領仕、舞臺を建、十月二十九日より四日續能仕。道成寺・亂茂仕候故、諸組頭・支配人より、家來末々迄見物遠慮候樣觸出る由。

十二月廿一日。大槻朝元新番組の士に列す。

朝元この後の知行加増は延享五年九月十二日の條に記す

〔前田直躬覺書〕

大槻傳藏、新知百三十石、新番組、享保十一年十二月廿一日。

十二月廿三日。徳川吉宗使者を派して前田吉徳の寒候を問はしむ。

〔徳川實紀〕

十二月廿三日寒候を御尋ありて、尾張・水戸の兩卿及び松平加賀守吉徳、幷に增上寺に御使せられ檜重を賜はり、紀伊黄門は在封により、驛使もて龍眼肉を贈らせ給ふ。

十二月廿八日。聞番の待遇を物頭並に列す。

〔御年譜〕

一、十二月二十八日新命左之通。

聞番向後物頭並に被仰付、銀子二貫宛被下、組足輕十五人、外手替二人・小頭二人宛御預被成候旨被仰渡。

中村助右衛門・半田權左衛門・後藤瀬兵衛。

享保十二年

〔護國公年譜〕

正月朔日。前田吉徳登營して年頭の禮を行ふ。

一、去秋より御在府、元日御登城、西の御丸にも御登城、御様子去々年之通。御下、御家中

幷御出入之者御目見等去々年之通。鶴庖丁山崎武右衛門〈御料理人頭〉勤之、御覽被遊候。〈武右衛門に御目六を以、御紋付御小袖一被下之。〉

正月四日。前田吉德生母預玄院の六十歳に達したるを賀す。

〔政隣記〕

正月預玄院樣御六十之賀爲御祝儀、左之通御近習頭遠田勘右衛門を以被進之、幷女中にも被下物有之。

紗綾十卷・綿三十把・鹽鴨一箱・干鯛一箱・御樽一荷。

正月廿四日。頭分の士の旅行に駕籠を用ふるを許す。

〔政隣記〕

正月廿四日、去年三月十六日頭分に而茂無謂駕籠乘用仕間敷旨被仰出候處、今年御歸國御供、幷御前後罷歸候頭分、道中駕籠乘用可爲勝手次第旨、今日被仰出、前田大炊殿頭々に被申渡、其後於金澤も右被仰出之趣、頭々に御年寄衆御申渡有之。

二月十六日。本鄉邸の舞臺に芝居を演ぜしむ。

〔政隣記〕

御前様方は櫻田御前御原御前三田御前攝津守は酒井忠寄

修理は知頼

廿二日とするもの前文と異なり

二月十六日御上邸に、御前樣方等・預玄院樣にも被爲入、表御舞臺に而御慰物被仰付、攝津守樣にも御押懸被爲入、巳刻より始之、翌曉寅下刻濟。朝より參候役者菊川圓之助・市川源之助・松本勘太郎・四宮次郎八・暮頃より堺町中村座・市村座より大勢被召寄、御舞臺之内爲較白挺如白書。御家人見物被仰付、頭分以上布上下着用。

二月廿一日。前田修理梅鉢の紋章を用ふるを許さる。

〔大野木克寛日記〕

三月七日。

前月廿一日前田修理、於御前梅鉢御紋御免許、子孫に至り嫡子一人は御免許之由被仰渡候旨、自東都相達。

〔政隣記〕

廿二日於江戸、前田修理に御紋拜領、嫡子迄付候樣被仰出。

二月廿六日。村肝煎に小百姓を採用すること勿らしむ。

〔上田舊記〕

諸郡村々肝煎之儀は、其一村之百姓納得證文指出候得者、任其旨、持高等之儀遂吟味候に茂不及、肝煎役申付來候。惣而肝煎役之儀者、村御年貢取立候儀を始、諸事取捌候役儀に候故、

爲縮其村之長たる百姓相勤不申候牢而は、御年貢取捌等不調に在之筈に候。然所村處により、長百姓之分肝煎役務候儀を事六ヶ敷存、小百姓之内肝煎役相預候處も有之躰に相聞得候。向後肝煎・組合頭代役相立候時分者、其村之長百姓之内、人柄相撰伺之可申候。且又只今迄在來候肝煎・組合頭共も、小百姓相勤有之、物每不調成處も有之候はゞ、其組廻り口御扶持人、又は田井村次郞吉を初、五人之者共にも及熟談、長百姓与取代候樣相心得可然候。此段御郡々御扶持人十村等に早速申談、猶又伺之候樣に可被申談候。尤難心得品有之候はゞ、改作所に罷出相尋可申候事。

丁未二月　　改作奉行印

田井村次郞吉
津幡江村宅助
村井村與三右衛門
大白石村三郞右衛門
鹿野村恒方

右御紙面御寫、早速御順達尤に候。

二月廿六日　　五人衆判

二月。新開の免合等に關して令す。

〔司農典〕

諸郡享保九年より十ヶ年以前新開免附之儀、享保九辰年相調理候免相、去年迄に而三ヶ年之年季明申に付、當春遂詮議、享保九年より一免下り之分は、元免之通を以、當未年より亥年迄五ヶ年季可申付候。一免下り迄に不行屆村々之分は、新田方役人遂吟味、免相上り可申哉、いまだ上り申間敷候哉吟味之趣、追而可申聞候。享保九年より十五ヶ年に滿不申分は、先二三ヶ年其分に仕置、二三ヶ年過候はゞ可致注進候。其節可及沙汰候事。

一、惣而圖免新開所之儀は、秋土用免相極不申候而は指支可申候條、向後秋土用前、見圖免相願候樣可申聞候事。

一、御郡々村々之內、年季用捨申付置候所々、去暮迄に而年季明申分、立歸之請書付當月切書出可申事。

一、惣而御收納方へ懸り申儀、暮に至り相斷り申に付押詰に罷成、百姓も十村も其儀に懸り、御收納方之儀指閊申候條、御收納方へ懸り申願之儀は、向後九月十五日切相願可申候。右日限迄に相斷不申分は、貪着無之候條、可得其意候。

一、高持百姓共召仕候下人共之儀、朝者未明より罷出、夕者手元之見得候迄農業仕儀、天下御一統百姓之格に候之所、近年は右下人共風俗悪敷罷成、主百姓申儀をも承引不仕、申度儘を申樣に罷成候旨相聞、沙汰之限に候。向後古例を急度爲相守、慢怠いたさず、若申度儘申下人有之候はゞ、主百姓より急度こらしめのため、縮を仕候樣相心得、農業不精無之樣に嚴重可申付候。

右之通可得其意候、以上。

未二月　　　　　　　　改作奉行

諸郡御扶持人・十村中

三月十三日。前田吉德就封の暇を受く。

〔政隣記〕

三月十三日上使御老中水野和泉守殿を以、御歸國御暇被仰出、御拜領物御例之通、白銀百枚・紗綾三十卷。從大納言樣縮緬二十卷今年初而御拜領。上使別に有之筈に候得共、西御老中御指合に付、御一集に被進候也。

三月十五日。前田吉德登營して就封の辭見す。

〔政隣記〕

三月十五日御禮御登城。御懸之上意、御鷹・御馬御拜領。前田大炊・前田修理御目見、拜領物等都而御例之通。

三月十七日。鹿島郡所口町に火災あり。

〔政隣記〕

三月十七日能州所口町三百五軒餘燒失。

〔故新錄〕

所口町之内府中拜東地子町、去月十七日未ノ刻致出火、家數三百軒燒失仕候。

三月廿五日。前田吉德江戸を發して歸國の途に上る。

〔政隣記〕

三月廿五日江戸御發駕。

〔政隣記〕

一、今度御道中境に而、駒共御覽被召上候。駒若年寄中ゟ一疋宛、物頭並御近習中村伊織・御用人平田外記ゟ一疋宛御預被遊候。外記儀馬數寄候間、厩餘計所持仕候者御預可被遊旨に而、御預。篠原權五郎御馬奉行ゟも二疋御預可被遊旨被仰出。

三月。江戸に於ける諸頭・諸役人勤方の舊例を記帳上申すべきを命ず。

可被遣は可被止歟

〔典制彙纂〕

在江戸諸頭・諸役人ゟ可申聞趣

惣而諸頭・諸場諸役人、當時勤方之樣子御先格有之儀茂、近年は新役又は年若成者共抔者、舊例もとくと存知不申、當座之僉議迄に而相伺申候。指急候品に而、古格を御糺被成候間も無之儀者、其通に被仰付儀も有之候。無謂候而御先例を可被遣樣は無之候。畢竟諸頭・役人も、舊例相考候儀未熟故と被思召候。とかく頭々幷諸役人、於江戸之勤方御先格帳面へ記、年寄中ゟ取集、御前ゟ指上可申旨被仰出。

但、右帳面早速は出來仕間敷候條、今年中に指出候樣可相心得候。

一、近年當座之僉議、又は混亂いたし候格を例に用ひ、書記候儀に而者無之候。

一、於金澤組・支配之儀に付勤方格式、幷金澤諸場役人勤方之儀者、於金澤申談筈候之故、江戸勤方帳面書載候に及不申候。

以上

三月

別紙之通被得其意、組・支配役儀有之人々ゟも可被申渡候。帳面は役人より直に年寄中迄差出候樣、是又可被申渡候、以上。

四月三日。金澤にて新番及び御歩の華美なる服裝を禁ずることを令す。

〔政隣記〕

四月三日。於江戸御下邸江御鷹野に被爲入候節、御堀江御勢子に入候樣新番中江被仰出候處、入兼申候。依之被仰出候者、惣而新番裝束結構に候。親・兄之役儀・組柄等同事に心得候儀不宜候。惣而手ぬるく被思召候由御意に付、金澤に而も頭より申渡、うき紋有之小袖等・柴宇袴も、向後所持仕候共着用仕間鋪旨、今三日申渡有之。御歩中江も被仰出有之、裝束等之儀御歩頭中より申渡有之。御番等にも綿衣不苦旨、御歩は新番をまねび申候。歴々江對し作法慮外、年寄中江之時宜も不宜旨等、夫々申渡有之旨に候事。

四月三日。江戸に於いて能脇師竹中市郎右衛門に賞賜す。

〔政隣記〕

一、三日金澤町人脇仕候竹中市郎右衛門、御發駕前御殿江被召、藝稽古に罷越、傳授事等に久々御當地江罷越、家之者方に罷在執行仕候段、奇特被思召候。御國にも脇方御用に立程に仕候者も無之候處、常々心懸候故与被思召候由被仰出、金子廿兩被下之。

四月七日。前田吉德金澤に着す。

〔政隣記〕

四月七日御歸城。但六日御着之筈に候處、姫川水出、一日御逗留に而、昨夜高岡御泊より直に夕七時御着也。御作法前々之通、御先立中村式部、竹之間迄勝丸樣御出迎。御歸國爲御禮、公儀御使人持組前田多宮、於御居間書院御目見、於年寄中席御羽織一・卷物二拜領、同日發足。附、御旅中御鷹之鳥、若年寄以上に被下之。

四月十二日。体軀偉大なる牝馬を錄上せしむ。

〔元祿享保間留記〕

越中・能州近年大長成女馬無之由に而、惣而駒之内より大長成女馬有之候而も、他國に賣出候樣被爲聞召候。御領國大長成女馬有之候はゞ被召上候而、越中・能州御郡方に被下置候間、右之馬相撰、時々書出可申旨被仰出候由、今枝主水殿御申渡に候。當時大長成駒、又は年行に而も大長成女馬有之候はゞ、先書出可申候。當國も右之趣同事之御申聞候事。

當國は加賀

一、毛附・歲附・長附之事。

一、當歲に而も大形成馬之事。

但、毛附・歲附・長附前條之通之事。

一、二歳ニは長ケ尺一寸計より書出可申事。

一、三歳より長け三寸計より之事。

一、此しらべ相濟不申內者、尤他國に賣出申間鋪候。但書出可申候間永々指置候而、致難儀品も可有之候間、急速しらべ可指越候。尤右書無相違小形成馬ニは、勝手次第賣出可申事。

右若年寄衆に相尋候處、此趣之馬書出可申旨御申渡之事。

丁未四月

今般大長成女馬之儀に付、若年寄衆より御申聞之趣、別紙二通指遣候間、早速相調理可被書出候。尤以後之儀、大長成女馬有之次第、其時々被書出候樣に可被相心得候、以上。

丁未四月十二日　　　　御算用場

澤田十郎兵衛殿

村井安左衛門殿

右之通御算用場より申來候に付、別紙兩通共に三通寫指遣候條、得其意、夫々急速申渡、大長成女馬書出可申候。尤毛附・歳附・長附等之儀、右御算用場より之紙面得与致熟覽、一組切帳面に記、扣帳相添可出之候。披見以後、判形に而先々相廻、落着より可相返候、以上。

未四月十六日　　　　村井安左衛門

四月十七日。前田吉德、金澤兩大橋内に火災ある時は自から出動すべき意を傳ふ。

〔政隣記〕

四月十七日向後火事之節、御城外に御出被遊候儀も可有之旨に而、御供御行列被仰出。兩橋之内火之手見え候火事に者、御供揃申等之事。

但、此儀前々無之、此度新命也。

四月廿五日。前田宗辰髮置の祝儀を行ふ。

〔政隣記〕

四月廿五日勝丸樣御髮置、御白髮定番頭原將監元昭上之。御廣式於御奥書院、平安城長吉代金一枚之御腰物御手自被下之。同人妻に白銀十枚被下之。從中將樣爲御祝儀、御時服三重・干鯛一箱、御近習物頭以羽田傳左衞門被進之。御廣式向役人・御醫師・女中等にも被下物有之。

一、勝丸樣に右御祝之御膳二汁五菜、於御廣式上之。年寄中初幷御廣式之役人、赤飯・御吸物・御酒等被下之。

六月十三日。茜染の工人茜屋雪齋に扶持を給す。

〔政隣記〕

六月十三日あかね屋雪齋、但州より來、十人扶持被召出。

六月十五日。能登の海中にて獲たる笹魚を献る。

〔政隣記〕

六月十五日。能州浦に笹魚上り申候。半分は魚、半分は笹の葉之由。所口町奉行長屋八太夫出府之序に言上、則笹魚上之。

七月。與力杉江治右衛門老臣に對し禮を失するを以て罰せらる。

〔政隣記〕

七月與力杉江治右衛門儀、於途中伊豫守殿・長九郎左衛門殿に時宜仕樣不宜に付、遠慮被申付。

七月。藏米の減量甚だしき者は代官をして辨償せしむべきを令す。

〔日　曆〕

享保十年所々御藏御詰米、當春出船之時分斗立に申付候所、過分之減少有之候。前にも斗立

之時分減少米有之、石八升圖り引、其餘爲辨申先格も有之候得共、其已後は石八升又は其餘も減少有之候而も、作毛之樣子相考、相辨申不及沙汰に、見通成來候。然所近年不作之沙汰無之候所、欠米多、就中今年などは一斗四・五升迄も欠米相立候。ヶ樣之欠相立候は、納方等不吟味之故に候。然其先當春欠米之儀は、一斗一升迄には致用捨、其餘之分は急度爲相辨候條、可有其心得候。但前々年々作毛之樣子により、八升之餘も欠米承届候儀は、其時々可及詮議事。

一、來春斗立之時分は、一石に付八升迄は可致用捨候、其餘之欠米之分は、急度相辨候樣に、此度彌詮議相極候條、各其心得可有之候。第一ヶ樣に欠米有之候儀は、納方不吟味にて、手代共仕形不宜樣に相聞候。此暮御收納之時分より、隨分米致吟味相納可申候。去共百姓手前より升目相斂申儀にては無之候間、百姓共難澁不及樣相斗可申候。若手代共心得惡敷儀有之、百姓共より訴出候はゞ、急度可遂詮議候。米納方の儀は、去年も申渡候得共、尚更嚴重に可相心得候、以上。

享保十二年七月　　　　御算用場

能美・石川・河北郡十村・御扶持人幷諸代官中

八月二十日。時鐘を再び改鑄することを布告す。

同は八月なり

響は撞の誤り

前回時鐘改鑄のことは享保十年にあり

〔護國公年譜〕

一、同廿日時鐘又響出來候に付、此度者野町鍋屋與三兵衛ニ申者鑄直申筈に付、今日九ツ撞候而、右越後屋敷之時鐘おろし、三ノ御丸に有之候早鐘を時鐘ニ釣替、八時より右釣替之鐘爲撞申由、割場奉行より言上之。右鐘出來、十月十九日八時より新鐘撞申候事。

九月六日。前田宗辰金澤卯辰觀音院に宮參を行ふ。

〔政隣記〕

六日勝丸樣卯辰觀音院ゟ御宮參、御先ゟ御家老本多圖書、定番頭富田織人、御留守居物頭茂田內膳、御抱守二人、御側小將二人、御醫師本科・針治一人宛、年寄女中・御雇乳持一人宛罷越。伊豫守新宅ゟ定番頭庄田兵庫、御抱守二人、御側小將罷越。朝五半時御出、觀音院ゟ御參詣、暫御座候而、伊豫守新邸ゟ被爲成。伊豫守儀御太刀馬代献上、御禮申上、御雜煮御吸物等上之。內々を以、外に獻上物も有之。御供中於本宅、赤飯・吸物・取肴被出之。晝前御歸。御供人、頭分は竹ノ間後屏風圍、侍中は右續に而赤飯・御酒・御吸物被下。御廣式且御供侍以上ゟしま、御表壁御次向も一統ふくさ袷・布上下。翌日右御供御家老前田修理ゟ卷物、其外夫々御先例を以拜領物被仰付。

一、勝丸樣ゟ今日之爲御祝儀、御時服三重・御樽代五百疋・干鯛・昆布一箱宛、御使御近習頭野

村七兵衛を以被進之。熨斗目に而勤之。

一、中將樣ゟ鯛一折・御樽代五百疋・御行器一荷、御抱守伊藤源左衛門を以被上之。

一、伊豫守宅に而御盃、御腰物吉岡一文字代金五枚・御時服五領・綿二十把被下之、內匠ゟ御時服

三、織部ゟ同二被下之。

一、伊豫守宅に而、前記之通御禮申上候節、御太刀馬代之外、干鯛・昆布一箱宛、御樽・五百疋獻上之。

一、息內匠・弟織部も、御太刀馬代・一種一荷獻上、御禮仕。

一、中將樣ゟ伊豫守より紗綾二卷・鯣一箱、內匠干鯛一箱上之。

一、觀音院ゟ御最花白銀二十枚・昆布一折・御樽一荷御目錄被備之、紗綾二卷・包昆布・御目錄觀音院ゟ被下之。附、岩倉寺ゟ白銀二枚御奉納有之。

一、御行列少間置、御供騎馬前田修理知賴。步御供、御供頭分御留守居物頭宮川久左衛門・御大小將御番頭村田主水・同御橫目長瀨五郎右衛門、御大小將十四人、御抱守四人、御醫師二人。御供裝束、前記御步橫目より御手廻頭迄布上下着用。

一、御供人ゟ伊豫守宅に而被出候儀、前記御步橫目以下ゟ者、赤飯・酒肴迄被出之。

一、勝丸樣御歸之上、御鎖口より御出、御居間ゟ御出。其節御熨斗三方、御與小將服紗袷・布

上下に而持出上之。

一、勝丸様ゟ伊豫守御内々を以獻上物之内、御茶一箱・鴨一羽爲御土産被上之。但、御前鷹に而翁候鴨也。

一、伊豫守・内匠登城之處、於御居間書院御熨斗出、御意之趣前田圖書演述、御廣蓋を以縮緬五卷、内匠ゟ同三卷被下之。披露等御表小將勤之。且又今日御宮參相濟恐悦之儀、且拜領之新屋鋪ゟ御立寄、兩人ゟ拜領物、其上御盃被下之、伊豫守は御腰物頂戴、同苗織部ゟも御目見拜領物被仰付、并家來之者御目見、其上拜領物、重疊難有旨御禮、御近習頭を以被申上。内匠も右御禮共、同人を以申上、織部儀者御次迄罷出申上候事。

〔漸得雜記〕

享保十二年九月六日勝丸様御宮參り。

十二年は十一年の誤

勝丸様より伊豫守ゟ被下。

御時服五・綿二十把・御腰物吉岡一文字。

同　　内匠ゟ被下。

御時服三。

同　　織部ゟ被下。

御時服二。
中將樣ゟ伊豫守上る。
紗綾二卷・干鯛一箱。
中將樣より伊豫守ゟ被下。
縮緬五卷・白銀百枚。
同　　内匠へ被下。
紗綾三卷。
於新屋敷勝丸樣ゟ伊豫守より上る。
御太刀馬代・御樽代五百疋・御肴一箱。
右同、御内々より上る。
御小刀柄二本・ふき繪五百枚。
同、内匠より上る。
御太刀馬代・御樽代三百疋・御肴鰹一箱。
御内々より。
御印籠二。

以　上

觀音に。
御最花銀三百兩・御樽一荷・昆布一折。
法印へ被下。
紗綾二卷。
岩倉寺に被下。
白銀二枚・綿二把。
勝丸樣より伊豫守家老四人に被下。
絹二疋宛。
同　　用人に被下。
染絹二端宛。
勝丸樣に織部より上る。
箱肴一種・御樽二百疋。
以　上

前文に白銀二十枚とあるを是とすべし

九月。諸浦にて捕獲する鰤に付き十分一稅を脫すること勿らしむ。

〔眞館留帳拔書〕

諸浦に而取揚候鰤之儀は、他國他領出、金澤江差出候分共、十分一差上候御格に候。然處前々ゟ違、近年右十分一相洩候由相聞え候。向後十分一相洩不申樣、鰤網師本締之者共江急度御申渡、請合證文取、當場江可被指越候。但御定之鰤十分一取立候場所は、氷見放生津におゐて前々より取立來候處、右十分一出申間敷ため、所々灘筋に而取揚候鰤、御預地大泊・庵・大乃木・江泊等に而賣拂、幷磯江付不申、沖に而賣拂など仕候者有之躰に相聞得候。向後左樣之仕形無之樣、急度被遂吟味、若左樣之者有之候はゞ縮御申付、當場江可被及斷候。則今年之儀は、十分一等取立吟味申付候者、浦々江別紙之通指遣見届申答に候間、其御心得可有之候。

一、浦々に而取揚候鰤、大概三ヶ一御當地江差出、殘分他國他領、又は取拂等勝手次第に相心得可申候。尤十分一は、指出候先規より之御格に候條、急度相洩不申樣可有御申渡候。右御定之十分一等差出候者、何之滯申儀も無之商賣仕安儀に候處、繞之十分一指出間敷ために、色々奸曲之仕形有之、却而賣買之支にも罷成申樣子。下賤之者之儀に候條、此段能々致合点候樣可被申渡尤に候、以上。

未九月　　　　　　御算用場

山崎九郎衞門殿
今村喜太夫殿
山村五平殿
水原清大夫殿
中孫之丞殿
石黑彦大夫殿
齋藤市直殿
岡田谷右衞門殿

十月十一日。加賀藩の年寄以下蓮池庭にて紅葉を觀賞す。

〔政隣記〕

十月十一日蓮池御庭に、年寄中等・御家老中・若年寄中、紅葉見物依願、可罷出旨被仰出、御菓子・御茶被下之。急度被下に而は無之故、給仕坊主。右に付中川式部一人御城に相詰。

十月。金澤に送荷すべき魚類の量及び稅率に關して令す。

〔眞館留帳拔書〕

珠洲・鳳至郡・新川郡

先達諸浦方に而取揚候鰤等、金澤幷他國他領ゟ指遣候分共に、十分一銀高等取立候儀に付、役人指遣候節、浦々に而取揚候鰤等、大概御當地三ヶ一指出候様に申達候得共、享保元年肴之儀に付御年寄衆より一統被仰渡有之由に而、小杉御郡奉行より被申越候趣、能州奥郡・越中新川郡は御當地ゟ程遠き故歟、前々より諸魚之内三ヶ二者御當地ゟ指出、三ヶ一は勝手次第他國ゟ指出申筈に候間、右兩郡より程近き浦々之分は、尙以取揚候諸魚之内、御當地ゟ向可申分不殘爲指出可申旨、御年寄衆各ゟ一統御書立を以被仰渡置候由に而、右御郡奉行より寫被指越候。二ヶ年鰤取揚高之様子に而は、大概三の一指出候はゞ、金澤用事も相辨、相殘分他國他領ゟ遣之候はゞ、浦々鰤網師共潤色も有之、鰤網退轉仕儀有之間敷与遂詮議、右之通先達而申觸候得ども、件之趣御年寄衆御書立有之事に候條、先其通与相心得、新川郡・奥郡は三の二、夫より近浦々之分は、不殘金澤ゟ指出候様に可被申渡候。鰤・鱈之儀、二・三ヶ年已來御當地ゟ諸方より集高程、近年之儀諸方より指出候はゞ、最早金澤ゟ指出候儀者勝手次第に可被致旨、重而相觸可申候。夫迄之内者右御年寄衆御書立之通に可被相心得候。則十分一等取、兩人共ゟも其段申渡候、以上。

未十月　　　　　　　　　　　　御算用場

山崎九郞左衞門殿　今村喜太夫殿

山村五郎兵衛殿　中　孫之丞殿
岡田善右衛門殿　長屋八兵衛殿
澤田十兵衛殿　村井安左衛門殿

〔元祿享保間留記〕

浦々に而取揚候鰤幷諸魚、御當地に指出候譯之儀、重而詮議之儀所々奉行中に相觸候處、別紙指遣候間、右紙面之趣得与合点仕、間違無之様に可相心得候。

一、浦々に而捕候諸魚之内、地拂仕候分ハ、大魚夫々に而口錢取立申儀、此度改正申渡、則六歩・八歩口錢之譯別紙書記遣候間、其所々肝煎共取立、帳面に記、其方共致印形、鰤十分一銀取立、一ヶ月切に御當地に指出、此段支配之十村共にも申渡、猶更其方共より茂嚴重に申渡、聊紛敷儀無之様に為取立可申候、以上。

未十月　御算用場

能州口郡・礪波・射水所々魚改相見人中

六歩口錢取立候品々覺

鰤・鮪・鯨・魴・鮭・鯛・鱸・あら・大はかれい・鮫・鯉　大鮒・鱣・はも・あなご・鰆・さわら、大鰍・しほはまち・あんこ・大蛸・鳥類・串海鼠・刺鯖・いるか・わに・川うた・まんたう・鰹節・串貝・かます・

大まな鰹・車鯛。干物同認申分。

右之外にも此書立に有之魚類に准じ、いづれも口錢六歩取立可申候。

八歩口錢取立候品々覺

大小鯛・小あら・はね・小鱣・小しいら・八目鱣・きぢ鰐・きす・こち・はちめ・ほうぐ〳〵・かながしら・しかれい・こしかれい・ふくらぎ・小ふぐ・いせごい・生貝類・かつうそ・かます・さより・うぐひ・鮎・鰯・海老・たりは・小鮒・さわら子・小はかれい。

右の外とも此書立に有之魚に准候分、何茂口錢八歩取立可申候、以上。

未十月

十一月二日。新たに鑄造せる時鐘を聞き得る距離を錄上す。

〔加州郡方舊記〕

覺

御城より西方に相當申候。

一、石川郡　打木村　道程指渡大概一里廿五町程。

同　南の方に相當申候。

一、同　郡　高尾村　道程指渡大概一里半程。

同　　東ノ方に相當申候。

一、河北郡　清水村　　道程指渡大概二里程。

同　　北ノ方に相當申候。

一、同　郡　大場村　　道程指渡大概一里半程。

一、石川郡竹松村・田中村・吉原村等之者、北風・山瀬風之時分聞え申候。御城より道程、指渡二里半より三里程御座候。

一、河北郡松根村・木津村・高松村等へは、南風之時分今般御時鐘相聞え申候。御城より道程、指渡二里半より五里程御座候。

右石川・河北郡村々え、今般御鑄直之御時鐘聞え樣相尋、書上申候、以上。

享保十二年十一月二日　　石川郡不殘
　　　　　　　　　　　　河北郡不殘

河地・山崎殿

十一月廿一日。大槻朝元の弟長右衛門御歩となる。

〔護國公年譜〕

一、十一月廿一日宮川安右衛門新知百五十石外五十石役料被下、新番小頭被仰付。大槻傳藏弟御持弓

郡彌三兵衞組足輕大槻長右衞門五十石被下、御徒被仰付、六組數之外に而御鷹方御用に仰付。右傳藏姉聟由比五郎左衞門組御持筒足輕小頭遠田理左衞門四十俵三人扶持被下、御小人頭被仰付。

十二月七日。德川吉宗使者を派して前田吉德の寒候を問はしむ。

〔德川實紀〕

十二月七日寒氣を候して、日門・增上寺に檜重をつかはさる。松平加賀守吉德には驛使にて御たづねあり。

十二月廿九日。前田吉德、明年以降每月三次日を期してその居室に老臣等を相會せしむ。

〔政隣記〕

戊申正月より每月十日・十七日、廿四日。

右三日御居間書院に御出可被遊候間、年寄中・御家老中不殘御前に可被罷出候。御用番は勿論、其外之面々も可申上品有之候者、相揃可申上候。但正月十日者、十一日与可被相心得候。外之月者右之通に候。御先代にも每度御直談之趣御聞及被遊。左樣に無之而、何と仕候而も

事延々に成申方に有之候故、一ヶ月三ヶ日御定置被遊。
一、右三日之外にも、急に可被申上儀有之時者、御近習頭を以其旨可被申上候。尤於御居間書院被召出、御聞可被遊候、以上。

丁未十二月廿九日

享保十三年

二月十九日。大聖寺侯前田利章柳營に登り參覲の禮を行ふ。

〔大野木克寛日記〕

二月十九日、備後守様昨十八日大聖寺より御出府、今日御登城、御饗應御能御興行。御饗應御相伴大和守貴林。且又御供御家老山崎權丞、御小將頭奥御用人菅谷平太夫、物頭吉田郡司・笠間主稅・阿部左兵衞・堀江志摩、物頭並松見主馬。

主馬儀御登城御供者不仕候由。元來金澤町人之忰に而、指物屋新次と申候而、諸橋權進ツレ役仕候。然處大聖寺へ被召出、御ツレ等相勤候處、段々御取立被遊、知行百五十石被下、稱號御改させ被成、物頭並に被仰付候由。如此之者に候故、今日不被召連かと。
右之輩於御廣間御料理頂戴、尤御目見被仰付と云々。

二月二十日。前田吉德命じて鶴を捕ふる爲め隨時放鷹を行ひ得るの準備を爲さしむ。

〔政隣記〕

二月二十日鶴居次第御鷹野に御出可被遊候間、明廿日より御精進日之外は、毎日御供爲揃候樣被仰出候旨、本多頼母殿御横目中に被申渡。

三月朔日。前田吉德諸士に判物印物を附與す。

〔御年表〕

三月朔日御先代及當御代御判物・御印物、元祿六年以來不被下置處、今日可被下旨に依て頭分以上服紗小袖、布上下着用。辰刻登城。午刻御小書院に御着座、大老・御年寄・御家老・若年寄頂戴。畢て午刻御廣間へ御出御着座、御廣蓋に御判物・御印物載之、御大小將兩人持參、兩方御繪圖の所に差置退く。御奏者番繪圖の所に罷出、夫より頂戴人罷出、御奏者番の前に中座、交名御奏者番唱候と、御廣蓋の傍へ寄一・二足立寄。六日以後平士は間近き故膝行也。御左は御緣頰の方横山大和守貴林、御右の方本多安房守政昌御判物・御印物相渡、受取御前へ向頂戴して退く。人持相濟、中川左門・富田織人重貞・庄田兵庫孝薄此人々年頭の御禮は、諸頭の次畢て初り候へ共、今日は御座列格なり。其次定番頭・諸組頭、畢て新番組より隱居まで段々

出る。御小將横目も座列の格にて御使番の次、御臺所奉行は御小將横目の次に出る。進退何れも右の通。奏者、頂戴十人宛にて代る也。六日御隱居書院にて、奥小將御番頭支配の人々御印物被下、御家老役津田玄蕃敬脩相渡す。御奏者番勤る所、富田織人重貞（人持御近習）勤之。勝丸君御側小將も右の席にて頂戴。畢て重て御出、大廣間に御着座。朔日御門當番の物頭、其次表小將・大小將六組御印物頂戴。御作法朔日の通。四月四日大廣間御前に於て、先頭忠中等にて相殘候頭分幷に御馬廻五組御印物頂戴、御作法前段の通。同十六日於同所、定番御馬廻五組・小松御廻・魚津御馬廻・組外三組御印物頂戴。十九日於同所、組外年寄中支配・永原左京等支配・御射手・御異風より坊主頭まで相濟。重て御出、御歩小頭以下本組與力まで御印物頂戴す。

三月七日。徳川家重疱瘡を患ふとの報金澤に達し、次いで慰問の使者を發遣す。

〔政隣記〕

三月七日江戸より早飛脚來着。

大納言樣御疱瘡之旨に付、寄合神谷兵庫（此御改藏人。）御使被仰付、九日發足、御酒湯爲御祝儀、御使御小將頭中村雅樂（江戸表に而雅樂与申名御遠慮之依御噂に、改五兵衛与。）被仰付、十九日發足、廿九日江戸着。但此使に而者獻上物無之。

十一日御酒湯相濟、翌十二日惣出仕、十三日爲御祝儀二種一荷、聞番御使に而御献上。西丸にも御献上物等、右同斷之由江戸より申來。

三月廿二日。前田吉徳石川郡粟ケ崎附近に狩獵す。

〔續漸得雜記〕

一、享保十三年三月廿二日粟崎に被爲入、大野にて池田清六郎与御提灯頭園田理右衛門（元理右衛門大組足輕也。）兩人に、鵜を御打せ被遊候へ者、清六は鵜二皆頭打申候。御感被成候へ共、仕合与皆頭を打候由申上候首尾一段宜、理右衛門も二之內、一は胴を打一つは股を打候へば、立上り潟之内に入申候。投あみにて御打せ候へ共、鵜くゞり候而これ不申候。御舟足輕助丞（名字失念。）投網上手候由被聞召、被仰付候へば、小舟に而鵜を淺みへ廻し、舟より飛下り立上る處を打、一段手際よしと御感被遊、各拜領物有之候。

〔政隣記〕

三月廿二日粟ケ崎御放鷹之節、御異風御近習番池田清六郎に、梢に居候鳥被仰付候處、二羽打申候。二羽共斷り同所を打留候。依之翌日染物二端被下之。右同日最前御持方足輕小頭、當時御小人頭園田理左衛門にも被仰付候處、鳥二羽・鴫一羽打申候に付、金三百疋被下之。

本文は前掲の異傳なり

四月六日。前田吉徳、奧村伊豫守の新邸に臨む。

伊豫守名は有輝

〔政隣記〕
四月六日奥村伊豫守拜領之新屋鋪ゟ被爲入。御城内御庭ゟ御出、夫より御立寄之中趣に而、御平生御城中御供立之通被召連、九半時頃御庭通被爲入、七時過御立、又御庭通被指歸、蓮池之上に而御馬御覽、七半時頃御還城。御供中ゟ奥村平馬宅に而、從伊豫守殿夫々に料理被出之候。後日右爲御祝儀、伊豫守殿宅ゟ頭並以上各相勤候事。但伊豫守殿御迎登城、幷於彼宅之首尾、拜領物・獻上物品之儀無記錄、不及書記之。翌七日從勝丸樣、伊豫守ゟ御樽代五百疋・生肴一折・御目錄、御使御大小將御抱守吉田淸右衞門を以被下之。

四月廿二日。紫野芳春院の住僧金澤城に登り前田吉德に謁す。

〔護國公年譜〕
一、四月廿二日紫野芳春院今般紫衣に成被罷下候に付、今日登城御對顏。竹之間屛風圍之内に最初は罷溜、御小書院に而御對顏、伴僧一人御目見。御料理二汁六菜同小書院に而出、伴僧も同席御敷居之外にて御料理出。右御饗應方御用主付村上傳右衞門御馬廻頭・宮崎長太夫御小將頭、披露・御給事共御大小將勤、獻上物は十帖一本也。退出之時分御緣頰迄御送。芳春院退出後、押付旅宿ゟ御使者御大小將津田五郎兵衞を以白銀二十枚包昆布・御目錄、伴僧秀首座・在首座白銀三枚宛被下候。芳春院爲御禮、重而登城。

四月廿八日。前田吉德河北郡太田に放鷹し湖水を渡りて石川郡粟ケ崎邸に入る。

〔政隣記〕

四月廿八日太田邊鷂爲御鷹野、六半時御出、横山大和守・奥村内記・中川式部・津田玄蕃・玉井市正・本多頼母・今枝主水御供。且御勢子爲御用、太田邊迄、御歩之内達者成若者共相撰、廿人召連。頭も可罷出旨被仰出候に付、御歩頭富永數馬罷出候。尤所々之百姓共も御勢子に罷出候。右主水之外名前之人々等、何も太田邊御用相濟候而、金澤へ歸。太田より小早御舟に被爲召、黒津舟へ被爲入、社御巡見、粟ケ崎御亭に而御膳被召上候。今日御供舟は稽古舟一艘、并御郡方之舟四十艘に而、從者迄不殘舟に而御供被仰付。御供數常御鷹野之通、御鷹數は多く有之、御餌柄數鷂五十六・鷺三。暮時前御歸。

四月。御扶持人十村・平十村及び十村並の服務心得を諭す。

〔司農典〕

覺

一、十村相談所へ罷出候儀、先達而日限觸候はゞ、右前日何も罷出、御郡方之儀諸事承合、翌日相談所に而夫々裁許可仕所、其儀心得違之者共も有之樣子に相聞候。向後急度相心得可

申事。

一、相談所へは御扶持人・平十村自身罷出、諸事相談可仕先格に候所、近年外御用に懸り申者共、其儀申立、名代又は手代等指出候旨相聞候。此儀は何れも心得違に候。向後は外御用は指間、相談所へ難罷出者共は、其時々改作所へ相窺可受指圖候。然上は、御郡中出人等之簡、延引不仕早速取噯可申事。

一、御收納方之時節、近年は十村中等金澤に罷在候故、御收納に不限、物毎手代者調理候様に罷成候。就夫に不心得成手代共は、百姓等氣詰、末々以之外難儀仕躰相聞候。御收納吟味等閑に仕候儀は、御法有之事に候條、十村・廻口等吟味之儀は、如何様共嚴敷可仕儀に候得共、手代共其旨を心得違、品に寄おの〳〵之私曲に拘り、打擲等仕族も有之躰に候間、向後は右吟味方自身相捌可申候。去共外重き御用に相懸り居、在所に有合不申者は、手代調理方等精誠綿密に、不任我意に樣可申付候。其上にも惡事等候はゞ、其主人可爲越度候。

一、村肝煎之儀、村中害に罷成候者有之候はゞ、役儀取放可申候。且又持高等、吟味之上指替可申旨、先達申渡候通、猶又嚴重可相心得候。

一、御貸米割符之儀、嚴重可仕候處、不心得成仕方も有之樣相聞候。向後急度此旨可相心得候。若外より仕方不宜候段相聞候はゞ、可爲曲事候。

一、十村並廻口村廻仕儀、不心得成者も有之、ゆるかせに有之段相聞、沙汰之限候。向後無油斷相廻、夫々裁許可仕候。

一、中橋村久左衞門儀、能州口郡千代町組・能登部組・荻谷組耕作方廻口申渡候。然者田畠之儀出入、村肝煎代り願人等之儀者、詮議之上久左衞門承届可申儀に候處、肝煎代願人者、右三組之者共願紙面に、其御郡御扶持人・平十村奥書仕候迄に而候。且又田方は、荒起より刈取申迄之善惡、畠作之樣子等廻口承届、於相談所に詮議之上、書付に相調申先格に候處、右三組之者共、當三月相談所等へ、或者外御用又は當病申立不罷出候に付、三組之出入田畠之樣子相知不申段相聞候。向後は久左衞門儀、口郡相談所等へ罷出、三組之耕作方村肝煎代願人紙面、奥書等仕候樣相心得可申候。

右之通夫々相心得、向後御締方嚴重相啄可申旨也。

申四月　　　改作奉行

諸郡御扶持人・十村中

五月五日。江守角右衞門、多田善太夫と爭鬪して之を殺害す。

〔政隣記〕

五月五日申刻過、定番御馬廻御番頭江守角右衞門宅に而、組外多田善太夫与致喧嘩、善太夫

日附前書と異なり

は即死、角右衛門は少々手疵に付、致自害候處仕損、翌六日落命。

但、前々より喧嘩には檢使無之候得共、如何之首尾に候哉と被仰出に付、爲檢使御大小將横目大河原八郎左衛門・中村與左衛門罷越、角右衛門落命後、長瀨五郎右衛門・與左衛門爲見屆罷越候。善太夫死骸は、寺西九兵衛方に引取。

〔政隣記〕

前條五月五日江守角右衛門・多田善太夫喧嘩之趣意、善太夫甥幼少代判す。角右衛門先組に而用事有之、善太夫を呼寄紙面遣候處來る。暫對談之内及刀爭、委細不知。角右衛門家來口上之趣は、呼に遣候紙面直筆、内文言不存、多田參暫對談之趣不承候。其内音高く候故罷越候處、唐紙建有之に付覗合候處、切合候故早速隣家助丞方に罷越及案内候由云々。追而江守家來兩人、於公事場御吟味之上禁牢。

〔浚新秘策〕

一、戊申五月六日、江守角右衛門（享保九年定番御番頭被仰付相勤候へども、常々病氣不都合之儀多有之、去年十一月青地藏人定番頭被仰付候砌、一家及内談、御役儀御斷申上、御免除被成、其後は年寄中月番支配に罷成。知行高六百石。）組外四組支配之内多田善太夫儀、用事之旨にて手紙を以呼に遣候。善太夫夕飯後罷越、少々及問答候處切付候。互に切結候所、善太夫脇刺いはゞきも落、目釘拔候に付、次之間に有之候刀を取候所、右之手深手にて刀難持候歟、組合候體にて式臺・座敷二間

を始悉血に成、畢竟料理之間にて角右衛門上に成、善太夫首を半程切掛、側へ家來罷出候へば能仕廻申候旨申候而、奥へ入致自害候得共、仕損息絶不申候。善太夫は六日夜五時頃相果、角右衛門は翌七日七時頃相果申候。組外番頭之内、河野半丞・馬場三左衛門・庄田武兵衛・細井藤太夫四人罷在遂見聞候。外四人堀次郎八・大橋又兵衛・奥村半兵衛・岡田太郎右衛門には、何方よりも案内無之、不承に付不罷越候。喧嘩にて打果し、善太夫其夜息絶申候旨、四人連判之書付指上候。喧嘩と有之に付、御横目中罷越候得共、不及檢使罷歸候。角右衛門實兄原田又太夫會所奉行也。同姓にて隣家に罷在、則小男江守助丞御普請奉行也。姉聟伊崎所左衛門定番御番頭也。遂見聞、喧嘩之旨にて忌引等書付出之候。六日夜御横目大河原八郎左衛門・齋藤忠太夫兩人、爲檢使從御前被遣、委細見屆致言上候。翌七日角右衛門息絶候旨達御聽候所、重而爲檢使御横目長瀬五郎右衛門・中村與左衛門兩人、是以從御前被遣候事。

五月十五日。前田吉徳、徳川吉宗の日光社參を終りたるを祝し能を演せしむ。

〔政隣記〕

五月十五日今度日光御社參相濟、大納言樣御疱瘡御平癒爲御祝儀、御能被仰付。諸橋權進に石橋被仰付、脇は竹中市郎右衛門、大土屋六郎兵衛、小糟谷宇左衛門、鼓小寺金七、笛山本市左衛門、其外御番組略之。若年寄以上御料理被下、御城に在合候人々見物被仰付。一統布上

下着用。右に付今日出仕相止。

五月十七日。御鹽裁許川副十郎右衛門等非行あるを以て捕へらる。

〔菅家見聞集〕

一、五月十七日快晴、今日宮腰引越御詰鹽裁許定番御歩川添十郎右衛門、御用之旨に而宮腰へ呼に参候而、夕方當地に罷越、定番頭御用番杉江兵助宅に参着、御尋之品有之旨に而、其夜は兵助に御預、假に縮所出來入置。尤刀脇指も預り、番人附置申候。青地藏人・村中務・御横目等も罷越。翌十八日十郎右衛門儀公事場に相渡り致禁牢候旨に候。

一、右十郎右衛門一卷には、年々御詰鹽に私曲有之由に候。宮腰御材木并御詰鹽奉行小塚甚五左衛門、當役去年被仰付、御鹽之勘定承可申与申儀より事おこり申候。依之甚五左衛門を、十郎右衛門相手之樣に存候旨に候樣子により、甚五左衛門と討果し可申躰に付、御算用場奉行中心付にて、兼而年寄衆に内談も有之候哉、御用有之昨十七日朝より、甚五左衛門は松田權太夫宅に罷越、致對談申候而可罷歸旨申に付、彼是申談候事も有之、其上唯今相返し候而者根済不仕儀も有之候間、權太夫宅に致滯留罷在候樣に申聞候得共、不罷歸候而者、十郎右衛門果し申を承、はづし申候樣に御座候段、一圓以埒明不申儀故、決而難成旨再三及斷候へ共、御月番にも相達置候間、夫を承候而者騒動之本、尚更相返し申事成不申旨權太夫申聞、

無理に留置申候。依之尚更急に十郎右衛門當地に罷出候様に、御用有之旨頭より宮腰に申遣候得共、氣色悪敷候間見合、連々可罷出旨返事仕、晝之内不罷出候。宮腰に而甚五左衛門御貸家へ、度々十郎右衛門より人遣、いまだ不罷歸候哉と相尋申旨に候。然共甚五左衛門不罷歸候に付、もはや金澤に罷出候時刻に移り申と存候哉、夕方十郎右衛門罷越、右之通兵助宅に而御預けに罷成申候。十郎右衛門小屋もすきと仕廻、言之外きれい成仕形、其上兵助方に罷越候而之様子等、隨分作法宜見事成仕形共に御座候由。十郎右衛門は深甚流劒術言之外上手故、若こだはり宮腰より不罷出候者、捕手被遣筈と、御月番内記より割場奉行に内意有之候。依之俄に足輕大勢割場に召集め撰申旨に而、八時已後より退出し、年寄衆を七時より早々登城候様に、御月番内記殿より急に呼に參候故、伊豫守殿・大炊殿等も急々に被罷出、九郎左衛門殿は遲參故又呼に參申に付、途中より早馬に而被罷出候。大和守殿は行歩に被罷越、石引町之末より歩立に而急々登城之由に候。安房殿は乘物に而、供之者不揃被罷出候。是は一段尤成仕様と致沙汰候。右之趣共に而、何とも子細は不相知、年寄中急々登城。七半時過之事に候、御城中に喧嘩有之との沙汰に而、段々おくればせに承付次第、諸頭早馬に而致登城候故、言之外騒敷候。惣而小立野は騒ぎ不申候。伊藤平太夫儀者、左傳次晝番にて七半過御城より罷歸、喧嘩に而も無之、急御用に而騒ぎ申迄之趣承届候故不罷出候。割場足輕急に

觸廻り、割場に寄集申に付、喧嘩と申追々呼廻り申者も有之由に候。其内十郎右衛門と申處、捕手にも及不申、夜に入段々事靜り申候事。

但、小塚甚五左衛門は組外に而、岡田七郎右衛門・奥村半兵衛組に候。尤相手に而者無之故、甚五左衛門には何之子細も無之、此度之様子一段出來之由致沙汰候。去共若十郎右衛門、甚五左衛門借宅小塚雲平方に而観音町邊之由、此所に甚五左衛門を尋可參との評議有之、奥村半兵衛早馬に而右之宅に見廻り候。是にも騒ぎ申由に候。太郎右衛門は忌中に而不能出候。半兵衛は此一巻に而、晝より御城に相詰罷在候。御月番内記殿は、朝より夜に、迄御城に御座候由に候。年寄衆など、加様に火急に登城有之品に而も無御座由に候處入申如何間違に候哉と世上致沙汰候。

［政隣記］

五月十九日御月番奥村内記殿、諸頭・諸役人に御渡之紙面左之通。

一昨夜御用有之、年寄中等指急致登城候に付、雑説等有之、御近習之面々始諸頭罷出、殊之外騒ヶ敷有之候。右之御用などは、晝より相知居申事故、前方手配りも可有之儀に候。於御城中若喧嘩口論、其外急切成儀有之候而も、罷出候人々之儀者、兼而従御城代申渡置候張紙之趣に候處、猥に罷出候故、今般之通騒ヶ敷儀有之候間、右御用番より諸頭幷御横目等にも

中聞置可然候。此段伊豫守より可申談置由被仰出候事。

右騷者、川副十郎右衞門呼に遣候得共遲參に付、又紙面等遣候得共參出及延引候。其上色々之雜說も有之候故、御月番內記殿被申渡候由に而、割場より足輕六十人計、急々二之丸迄爲相揃候樣、割場下役人に直に申渡有之、足輕共之組屋敷を呼集申候。其上示談之儀有之候條、急に登城候樣御同席中に通達有之、長九郎左衞門殿など一騎駈に而登城。依之於御城中喧嘩有之由取沙汰有之、諸頭段々登城。又一說に者、御上御滯故年寄中急登城之由に而、夜半迄金澤中致騷動候に依而也。

〔菅家見聞集〕

一、川添十郎右衞門一卷に付、京都榮君樣御賄頭木村彌五丞、同御附之御步杉山淺右衞門儀、御用有之呼に參、京都より罷歸、公事場牢之揚り屋に入有之、先頃よりひたと御吟味有之旨に候。十郎右衞門引負之御詰鹽茂、元來右彌五丞相勤罷在候時分より之事に而、此段相知申內、於京都も彌五丞・淺右衞門不宜儀共有之、御吟味之由申慣候。表向之吟味にては難成品共有之に付、公事場奉行之內より成瀨內匠、御近習頭より羽田傳左衞門・三宅平太左衞門・坂井甚右衞門、此人々に被仰付、公事場に罷出、不時に御吟味有之、川添茂同事之由に候。落着仕候而、川添は七月廿七日五ヶ山に流刑被仰付候。彌五丞等・淺右衞門も五ヶ山へ被遣、十郎

後文には九月廿五日とあり

右衛門・彌五丞・淺右衛門子供は能州に被遣候由。

〔政隣記〕

五月十六日定番御歩宮腰御鹽裁許川副十郎右衛門儀、定番頭杉江兵助に御預。翌十七日於公事場御吟味之上、牢揚屋に被入置段々御吟味處、當時京都に相詰候榮君樣附御臺所頭木村彌五丞儀、先年御歩に而宮腰御鹽裁許相勤候内私曲有之、十郎右衛門に引渡候砌、十郎右衛門与申談、年々不足之分及沙汰申由。依而從京都被召下、公事場牢揚屋に被入、せがれ御歩横目木村半左衛門も御吟味之上、三人とも九月廿五日能州嶋幷越中五ケ山に流刑。右一卷に付御歩杉山淺右衛門茂流刑。十郎右衛門せがれ半太夫、淺右衛門嫡子善左衛門、二男彦太夫、三男辰之助、何も遠嶋。彦太夫は不被遣以前病身、淺右衛門四男又次郎は幼少に付、十五歳迄一門に御預也。

十六日は前文に十七日とするなよしとす

病身の次死亡の誤あるべし

五月廿一日。町人の子供にして狂言を演ずる者を召し前田宗辰の觀覽に供せしむ。

この狂言は能い狂言なり

〔護國公年譜〕

一、五月二十一日勝丸樣御慰、町人子供狂言仕候者被爲召。當十六日之通松之間御圍縮り所御翠簾掛之、御前御見物所も出來。竹田作次郎・諸橋權進・波吉宮門、其外京都御役者被爲召、

一調一管等も被仰付候。

五月廿五日。前田吉德放鷹の歸途大槻傳藏の邸を訪ふ。

〔政隣記〕

五月二十五日泉野邊御鷹野御歸之節、大槻傳藏宅に御立寄。但、傳藏新番御步並百三十石、御近習勤。

五月廿六日。法規を恪守するが爲士人等各自定書の文を謄寫し置くべきを命ず。

〔典制彙纂〕

從前々被仰出候御法度之品々、幷御定書之趣彌堅可相守旨、每歲組・支配に被申聞候樣子に者候得共、右相守与申趣意に而、御定書等熟覽仕儀は無之躰に候故、差當り候御格之儀さへ、心得違申面々も有之樣子に候。畢竟御定書之寫帳などは、人々手前に寫置可申事に候。尤其內に者當時に合不申者も多可有之候得ども、其餘之分は猥に無之樣、急度可相心得儀に候。寫所持不仕者者、連々を以扣いたし候樣有之可然候。跡目新知被召出候者は、其節猶更念入嚴重申含置尤候條、被得其意、頭・支配人に有之御定書寫、時々傳達可有之事。

右之趣可得其意候。且又組之内裁許有之人々は、其支配之儀も、是又右之通相心得候樣可被申聞候、以上。

五月廿六日　　　　　　　　　　　　奥村内記

六月朔日。前田吉德今秋參覲の途中日光に社參すべきを告ぐ。

〔松雲公等御參府留〕

一、當秋御參勤之刻、倉ヶ野より日光御參詣可被遊旨被仰出候段、横山大和守殿・津田玄蕃殿

六月朔日何茂に披露。

但、諸大名日光に參詣之儀御書付、三月廿八日相渡、此方樣に茂、右同日松平左近將監殿

に問番御招、御書付御渡。

〔御參府留〕

一、當秋御參詣之儀、六月十一日問番參上、御直名之御書付を以御屆有之、追而問番罷出候

序に、右御書付に勝手次第可被致旨、御付札候而相渡。

一、御獻納物之儀、萬治二年十月綱紀公初而日光御參詣之節、御獻納之御先例書を以御窺之

處、御宮に御太刀金馬代、御靈屋に白銀十枚致獻之候樣、御付札を以被仰渡。

六月二日。若年寄今枝主水役儀を免ぜらる。

〔浚新秘策〕

一、六月二日朝於奥村内記殿宅、長九郎左衛門殿列座、御近習之御横目毛利助右衛門罷出、若御年寄役今枝主水ゟ被仰渡候趣、不行状に而御役儀不相應に付、御役御取上被成候。父子指扣申には不及候旨被仰出候。御家老民部殿卽日より無構勤仕有之候。主水不行状之儀品々多有之候由。就中養父民部殿へ不孝近年段々超過し、去冬家老兩人（小川作左衛門・小川彌右衛門）異見を申候所、兩人共追込置申候。女色之儀に付非常之仕形共多有之。第一去年八月以來、於御城中每日民部殿へ逢被申候而無言之爲体、ヶ樣之儀共にて深く御憎しみに被思召候よし。

〔浚新秘策〕

主水最初八郎左衛門と申時より、藤澤多仲太夫と申者近習小將奉公仕、此者姦佞至極之者にて、主水ゟ酒色を勸め、家老以下宜敷者をば惡敷申なし、殊外致出頭候。此度も側に罷在、色々惡事巧出し候者に候。今度も主水御役儀御指除之段、從中將樣有澤森右衛門を以主水方へ御使者に被下、御書も被成下候。其趣は今般其方儀如此被仰付候は、御本意にては無之候。乍然一旦ヶ樣に不被仰付候而は事濟不申故、御料簡も無之候。追而又如元に可被仰付候間、必々心を古く仕間敷候由にて、主水致落涙忝がり候。此儀は主水近習之者語に而、無紛事之由、一家中取はやし、是又他所へもひゞき候て、外より參候者も咄し申候。然處重て主水御知行

被召上候後、此説は止申候。其後又申候は、備前日置猪右衛門へ、民部より主水御役儀御指除之儀及案内候所、近き頃返書到來候而、民部仕方難心得旨にて鬱憤之紙面に候。依之民部も致立腹、其紙面を取て投申候。且又其節猪右衛門より、此元御年寄衆迄捧一書、主水事を願申趣有之。如何成趣に候哉、中將樣にも先きは他國者之事と申、殊之外御難儀被遊、兎角主水儀如元被仰付筈に罷成候由を専申慣候。正説は近き頃日置氏より民部への返書に、主水御役儀御指除之事致承知候。主水樣子とくより見届置候。加樣之儀出來候事覺悟之前にて、只今迄中將樣思召に不背事不思議に存候。此上は家續之事大切に候間、早速に願替可然存候。願上申候而、備前へ引取申度存候得ども、其段は御自分樣被成御座候へば、御油斷も有之間敷候。其上御家風も難計候故指扣罷在候由申來候而、民部も同意之趣に候。

六月十七日。曩に中絶せる儉約奉行を復舊しその五人を任命す。

〔政隣記〕

六月十七日御儉約方御用、左之人々に被仰付。

御馬廻頭より　由比五郎左衛門　　御歩頭より　前田源兵衛

御先手御用人より　松原善右衛門　　稲垣與三右衛門

組外御番頭より　大橋又兵衛

前揭の文には十七日に作れり

右御居間書院於御前被仰渡。誘引伊豫守。

〔加州郡方舊記〕

六月十六日御儉約奉行五人被仰付。

由比五郎右衞門・稻垣與三右衞門・前田源兵衞・松原善右衞門・大橋又兵衞。但、元祿之後中絕に而、此度改而被仰付歟。可尋。

〔袖裏雜記〕

六月十四日今九つ時過於御居間、伊豫守御直に相伺候品左之通。

一、御儉約奉行之書立一通、幷御儉約之儀、御老中方等に御內々御屆之趣、覺書、畢竟御老中方へ御屆は無之。右御老中方に之覺書者御參勤之上之儀候へば、未間も有之候、とくと御了簡被遊、追而可被仰聞旨御意。御儉約奉行之儀者、段々思召をも被仰聞、畢竟江戶・御當地に罷在不申候は難成可有之候條、由比五郎左衞門・松原善右衞門・前田源兵衞・稻垣與三右衞門・大橋又兵衞五人可被仰付旨御意。

右御儉約奉行被仰付候初發と見ゆ。

〔袖裏雜記〕

由比五郎左衞門等へ年寄中可申聞趣。

各之儀今般御儉約方御用被仰付候。御算用場奉行被申談可被相勤候。善右衛門儀者、同役示談之大概相濟候はゞ、當秋江戸へ被遣、彼地御儉約方御用可被相勤候。各下に付相勤候役人之儀は、如何躰之者被仰付可然候半哉、人數之不依多少、被遂僉議可被申聞候。猶更後御前へも召候而、可被仰含にて可有之候。

由比五郎左衛門等へ於御前可被仰含品々

一、何れも御儉約方御用被仰付候。申談相勤可申候。尤御算用場奉行へも遂示談可申事。

一、善右衛門儀は、同役示談之趣相濟候はゞ、秋中江戸へ相越、於彼表會所奉行等申談、御儉約方御用相勤可申候。

一、御近邊并御廣式方等之御用之品も、存寄之儀は無遠慮相寬可申候。猶更委細之儀者、伊豫守可及演述事。

右相濟候はゞ、御算用場奉行三人共に被召出、可被仰含事。

〔袖裏雜記〕

伊豫守より可申聞趣。

各今般御儉約方御用被仰付候付、御入用方僉議之大綱者、年寄中・御家老中へも可被申聞候。御次廻・御廣式方等之儀に付、品により人多に被申聞候儀者如何と被存候。御内々へ懸り候

樣成儀も有之候者、其品者伊豫守・式部ゟ可被申聞候。此兩人に而難事濟儀者、富田織人・庄田兵庫・遠田勘右衛門等ゟ被申聞可然候。

一、各之儀、御用之品により、御前ゟ直にも被罷出被申上候而可然事。

右何も宜旨御加筆あり。

〔政隣記〕

七月二日より御儉約方役人一人宛、御算用場ゟ隔日に出候等。御儉約方役所は、去月廿日二之御丸萩之間に相極。

六月廿三日。能登島に流されたる堀主馬を縮所に監禁すべきを命ず。

〔護國公年譜〕

一、六月二十三日、堀主馬能州嶋縮所ゟ罷入候に付、御用番被仰渡、御歩横目兩人罷越、所口奉行長屋八太夫主馬に可申渡趣。主馬儀御先年首尾有之候付、御尤ゟ之上能州へ罷遣蟄居被仰付置候上者、何分にも御下知可在所、御免無之候間切腹可仕旨、度々所口奉行迄申越候得共、指留置候處、いまだ得心不仕、右之所存相止不申躰。其上存念之趣を御内聽にも達度趣、上をも不憚仕形、重々不屆に被思召候。依之嶋において縮所へ入置候樣被仰出候。向後右縮所へ割場附足輕五人宛、三十日代に仕致勤番候等之事。

長屋八太夫は此の時金澤に在りしなり

日附前書と抵觸す

當摩は能登島の十村

役所は所口町奉行役所

〔浚新秘策〕

一、享保十三年六月廿四・五日頃、所口御奉行長屋八太夫御用有之金澤ゟ罷出候留守ニ而、嶋に致蟄居候堀主馬儀、嶋之當摩を呼申聞候。兼々八太夫ゟも申達置候通、我等儀御咎被遊候歟、無左候ハヾ切腹被仰付候様にと存候。明日彌切腹可仕候間、見届候様に可仕旨申候。當摩大に驚き、急使を以其段八太夫迄申越、八太夫儀不取敢罷歸承屆可申間、先役所迄可被参申遣、役所へ呼寄、則縮所へ入置申候。御徒横目渡部惣左衞門・渡部彌次右衞門兩人、足輕十人罷越申候。扮嶋にて召使申候譜代之家來河毛加左衞門・伊藤傳右衞門兩人ハ、兄弟なり。八太夫より、主馬一家に付青山隼人・永原左京迄相返し申。兩人ゟ年寄中より申渡候は、此兩人急度御預けと申にては無之候。徘徊は不仕候様に相心得可然旨被申渡候。隼人・左京徘徊不仕様に仕候儀ハ、縮も仕候はねば埒明不申ものに御座候。如何相心得可申哉と重而申達候所、追而譯立可申旨候間、如何様共仕置可被申旨に付、則縮所へ入置申候。七月二日公事場へ致借牢入置申度、則大和守殿へも相達候條、入置申度旨左京に申達候。御用番富田織部、難承屆候、如此ものハ借牢可有之様無之段再三申達、終に公事場には請取不申候。左京公事場奉行に而も古役にて、近頃難心得趣相違候事と、承候者段々申候。

六月。大槻傳藏邸の便宜を謀り新道を開く。

〔政隣記〕

六月大槻傳藏居屋敷際堂形前より仙石町之方に新道付。

七月四日。各郡毎一段歩に於ける米の産額を答申す。

〔加州郡方舊記〕

覺

能美郡

一、早稻一反三百歩　上一石六斗五升、中一石二斗、下一石一斗五升。

一、中稻一反三百歩　上二石一斗、中一石八斗、下一石五斗。

一、晩稻一反三百歩　上一石九斗五升、中一石八斗、下一石五斗。

石川郡

一、早稻一反三百歩　上一石九斗五升、中一石五斗、下一石三斗五升。

一、中稻一反三百歩　上二石、中一石九斗五升、下一石三斗五升。

一、晩稻一反三百歩　上一石九斗五升、中一石八斗、下一石六斗五升。

河北郡

一、早稻一反三百歩　上二石一斗、中一石六斗五升、下一石五斗。

一、中稲一反三百歩　上二石一斗、中一石九斗五升、下一石九斗五升。
一、晩稲一反三百歩　上二石三斗五升、中一石九斗五升、下一石七斗五升。
右稲出來現米、村により土地により高下御座候得共、上田所大図出來書上申候、以上。

申七月四日　田井村　二郎吉
御所村　長次郎
若松村　八郎兵衛

右御前より御尋之由に而、書上可申旨、御算用場小頭所より被仰渡候に付、此通相調、齋藤辰右衛門殿に上る。

七月六日、前田吉徳倹約の實行に關して諭示す。

〔政隣記〕

六月六日御倹約方之儀に付被仰出之趣、別紙之通に候條、得其意、組・支配之人々に可申渡候。重き被仰出之筋に候間、思召に相叶候樣可相心得旨、長九郎右衛門殿二之御丸に諸頭御招御申渡、則左之御紙面御渡。

今般御倹約奉行由比五郎左衛門・前田源兵衛・稲垣與三右衛門・松原善右衛門・大橋又兵衛被仰付候。御入用方御縮方等之儀に付、右人々及僉議候儀、不存疎意可得其意候。且又御尋之品

有之候はゞ、早に可申達候。樣子次第只今迄之致方を替、向後はヶ樣に仕可然と申談儀も可有之候間、任其意可申事。

但、御用之品により、樣子難申聞と存儀も可有之候間、左樣之品者奉得御内意候上、早速可申達事。

一、御儉約之筋諸奉行・諸役人致了簡、存寄之趣右之人々に及内談可申事。

但、御仕置に懸候筋を、貪着仕候儀に而者無之候間、此段急度相心得可申事。

一、近年別而御要脚指つかへ、御勝手御はこび御難澁に付、今般御儉約之儀被仰出候儀に候。然上者諸頭・諸奉行・諸役人者不及申に、御家中末々之輕役人迄も大切に奉存、無用之御費一圓無之樣に心服いたし、御簡略之筋嚴重相立候樣に心得可申事。

右之趣夫々申聞、綿密に相守候樣に可申渡旨被仰出候事。

申七月

別紙被仰出之趣被得其意、組・支配之人々も一統承知仕、役儀有之面々者猶以急度相心得候樣可被申聞候。且又組・支配之内裁許有之者共之儀者、其支配にも申渡候樣可申聞事。

諸奉行・諸役人に者、當月三日一役一人宛御招、右紙面御渡候事。

七月八日。大槻傳藏の養父足輕長太夫を御步に陞進せしむ。

〔政隣記〕

七月八日左之通被仰付。

五十俵被下定番御歩　大槻傳藏養父割場附
足輕小頭より　大槻長太夫

八月朔日。今枝民部の家士多和田彌四郎、黑田次郞左衞門を殺害す。

〔淩新秘策〕

一、八朔五時頃今枝民部家老黑田次郞左衞門石二百を同役多和田庄右衞門子彌四郎と申者及殺仕事。庄左衞門六十歲餘、百八十石。彌四郎二十三歲、民部近習。八朔卯刻彌四郎罷出候。次郞左衞門は六半時罷出、常家老共詰申席に罷越居申候所、彌四郎參り呼立候に付、次郞左衞門奧之方へ二間計致誘引參候へば、常々申達候趣は御失念有之間敷と存候。乍然只今まで且而何之挨拶も無之候。覺悟可有之旨申候而、脇刺拔かけ候。次郞左衞門も一旦拔合候所、如何存候哉遁出、臺所之方へ參候。追懸參候處に、二階へ之梯子有之候、其陰へ隱れ候。此所に而少々切合候よし。彌四郎父庄左衞門も其處に相見え候付、次郞左衞門又かけ出、最前之所へ罷越、中敷居に躓き倒申所を切懸、二刀めに右之腕を打落し申候旨。とゞめを指申時分申聞候は、其方覺可有之候。全く自分之遺恨は無之候。民部樣御爲を惡敷仕候儀年來之事に候。夫故御爲と存如此に候旨申述、

とゞめ指候而自殺可仕と仕候所を、父庄左衛門指寄自殺を留置候。民部は食事之内にて、何事に候哉と罷出候所、右之爲体に付脇刺拔持、彌四郎不屆之仕形に候、次郎左衛門ゟは何之意趣にヶ樣に仕候哉とて、脇指之むねを以二・三度打被申候。彌四郎儀脇刺を打捨、謹而申候は、御手打にも被遊候ば本望之儀に御座候。次郎左衛門は私の遺恨は無御座候。內々申上置候趣も御座候。御爲と存殺害仕候。御吟味之上如何樣とも御法之通被仰付可被下候。委細は書置に相見え申旨にて一封指出候。庄左衛門儀、彌四郎自殺を留申時、手疵を得申歟、指を半切申候。

一、彌四郎は先其分に仕、給人田丸彥左衛門宅へ被預候。父庄左衛門儀如何之首尾に候哉、是又給人阿岸惣次郎宅へ被預候。彌四郎此儀存立候は、七月廿一・二日之頃より之儀に候所、其節をば相果忌中に罷成、八朔忌明に付罷出申候由。

一、八朔出仕日に付、五時より諸頭登城、年寄中も五半時頃迄に皆々登城有之候。民部は登城無之、血に穢候故遠慮に存登城不仕旨、紙面を以斷有之由。民部宅へ參會相談之人は、前田伊織・宮崎長太夫・小堀左兵衛也。

一、彌四郎父庄左衛門、助太刀仕旨之風說有之候。其趣不分明に候。但庄左衛門手に指に疵附あるも、所々に有之に付、前田修理被相尋候所、庄左衛門申候は、せがれ彌四郎儀次郎左

衞門を追懸申時分、助可仕与存抜申時分、自身疵附申かと覺申候旨申候。依之助太刀も仕事と僉議にも及申候。乍然八朔其邊に在合申者共吟味之口上書に、庄左衞門其場にて脇刺抜候を見申旨相調候者は一人も無之候。此儀不審晴不申一事に候。密に承合候所、其砌民部被罷出、彌四郎儀不屆之至とて、脇指のむねにて一・二度も打被申、手打之様に相見え候故、庄左衞門是は匆體なき儀に奉存候。私共に可被仰付とて脇指を押へ申時、民部脇刺にて指を切申候。此儀を申顯し候へば不宜候故、態と助太刀も仕候様申罷在候。

一、庄左衞門儀、次郎左衞門へ意趣有之、彌四郎与申談右之仕合に候哉と吟味有之候所、成ほど彌四郎同然にかねべ\存寄罷在候。彌四郎右之通に不仕候はゞ、私手に掛可申心底に御座候旨申罷在候。依之被預候由。

一、右之趣を以彌四郎へも吟味有之候所、彌四郎申候は、一向庄左衞門は不申談候。庄左衞門へ申聞候儀も且而無御座候。其證據には懐中に庄左衞門宛所之書置仕置候。私死後に此趣承知仕候爲に調置申候。是に而御察可被下候旨申候。

一、家老三人之内次郎左衞門相果、庄左衞門は被預候。今一人多和田藤左衞門と申者、是も庄左衞門同姓に候へども、續き遠く罷成候故、無遠慮用事相勤申候。

一、次郎左衞門儀、父又右衞門共に、平生家中一同に憎み申者に候。便侫にて並々より様子

宜敷相見、父子共民部ことの外氣に入、懇意に被召使、居宅も過分之居なし建而贈候由。八朔右之趣に取結候節、與力以下數十人有合候者共、一人もたすけ可申こ心附候者も無之候。折節如何之儀に候哉、家內霧の込入申樣におぐらく罷成、見付不申者も數多有之由。

一、子息主水一卷落着間もなき事に付、主水へ對しケ樣之首尾も仕出し候かと疑敷候所、主水一卷には預不申。元來家中納得不仕此者故に、民部も入口に入被申儀居多有之由にて、彌四郎存立候由。

民部子息主水のことは本年六月二日の條に在り

一、二日に民部登城、同列之中にて、彌四郎儀其身申所は一往聞え申樣成所も有之候へども、畢竟分も無之事共に候旨被申候。其樣子彌四郎は亂心之体に被申候樣子之由。

一、六日迄は彌四郎殺害又は切腹之沙汰も無之候。六日に前田伊織へ見廻承申者申聞候は、庄左衞門父子不屆至極之趣に伊織・長太夫も被存候由に付、右之趣共は表裏之樣子に候間、其心得可仕旨申聞候。

右は世上之風說にて、目擊も仕候樣に申者有之候付、信用仕者多有之候事。

〔浚新秘策〕

一、民部頭は奥村內記也。彌四郎父子之仕形、庄左衞門を殺害仕候首尾闇打同事にて、喧嘩

之沙汰にはは及間敷ほどの內記存寄、殊に庄左衞門儀、其身乍相預せかれ彌四郎所爲之樣に仕成候爲體、別而不屆に候故、本人同罪たるべき事也とのおもわくに候。乍然民部存寄有之、庄左衞門は一等罪輕く申付度所存に候由段々達御聽、當十二日迄に譯立、十三日に落着申付候事如左。

一、多和田庄左衞門は一生板さくみへ入禁錮。

一、多和田彌四郎儀切腹申付候。庄左衞門次男有之、是も民部召使候處此度扶持放申候。

一、黑田次郞左衞門子ども有之候へども、跡目斷絕申渡。

以　上

八月以來民部重病不起之病にて、十二月十六日病死、七十四歲。

八月八日。前田宗辰生母の兄上坂平兵衞新に祿せらる。

〔御年譜〕

一、八月八日勝丸樣御母公兄上坂平兵衞、百人扶持に被召出、妻は二十人扶持被下。

八月十八日。前田吉德參覲の爲に金澤を發す。

〔政隣記〕

八月十八日朝五時前御發駕。御供御家老津田玄蕃、一日御跡より發足。倉ヶ野より日光御供

奥村内記。

〔政隣記〕

一、今般御參勤之節日光ゟ御參詣に付、御道中日數も相増候。尤百日分中勘御扶持方代受取有之事に候得者、指支申儀有間敷候得共、日光御道筋之儀者、諸物も高直に相聞候。其上萬一御逗留等も有之候而者、指間申譯も可有之候哉。然者末一ヶ月分之中勘御扶持方代、重而相渡可然旨遂僉議、其段達御聽候間、致割符候樣御算用場奉行ゟ、御供之年寄中被申渡。

但、兼而御供横山大和守・津田玄蕃ゟ被仰渡置候處、四・五日以前より癪疾、御供難勤躰に付、當十五日俄に奥村内記ゟ御供被仰付、前記之通一日御跡發足、倉ヶ野より日光御供被相勤。九月十六日御前ゟ被爲召、御國ゟ之御暇被下、御手自被下物も有之、發出。同廿七日金澤歸着。大和守者氣色快、八月廿四日金澤發出、直に在江戸也。

一、御發駕之節御作法御例之通。十九日大雨境川水出、境に一日御逗留。御泊所等左之通。

十八日　御晝　今石動　　御泊　高　岡

十九日　御晝　東岩瀬　　御泊　魚　津

廿　日　御晝　浦　山　　御泊　境

廿一日　御逗留

廿二日　御晝　糸魚川　　　　　　　　　御泊　能生
廿三日　御晝　長濱　御中休　名立　　　御泊　荒井
廿四日　御晝　野尻　御中休　關山　　　御泊　善光寺
廿五日　御晝　矢代　御中休　榊　　　　御泊　田中
廿六日　御晝　追分　　　　　　　　　　御泊　坂本
廿七日　御晝　板端　　　　　　　　　　御泊　倉ヶ野
廿八日　御晝　柴　　　　　　　　　　　御泊　太田
廿九日　御晝　佐野　　　　　　　　　　御泊　柄本
九月朔日　御晝　鹿沼　御中休　金ヶ崎　御泊　今市
二　日　御晝　鉢石　　　　　　　　　　御泊　大澤
三　日　御晝　雀宮　　　　　　　　　　御泊　小山
四　日　御晝　中田町　　　　　　　　　御泊　幸手
五　日　御晝　粕壁　　　　　　　　　　御泊　草賀
六　日　江戸御着　御晝休・御中休無之。

九月六日。前田吉德江戸に着す。

〔政隣記〕

九月六日江戸御着。翌七日上使。十五日御禮。

九月十五日。前田吉德登營して參覲の禮を行ふ。

〔德川實紀〕

九月十五日臨時の朝會あり。松平加賀守吉德をはじめ、參覲三十一人。

〔政隣記〕

九月廿八日金城に依召、頭並以上登城之處、御年寄中・御家老中御大廣間に御列座、御用番長九郎左衞門殿左之通御演述。

中將樣御途中無異儀、當二日於日光山御宮御靈屋御拜禮相濟、同六日御着府。翌七日上使松平左近將監殿を以被蒙上意、且又十五日於御黑書院御參勤之御禮被仰上、殊御懇之上意、橫山大和守・奧村內記御目見仕、重疊難有被思召候。右何も可申聞旨、御書を以被仰下候。

今般者別而長途、殊に洪水にも候處、無御障御參府、右之通段、結構成御樣子共、誠に恐悅之儀奉存候。御祝詞御用番宅迄、今明日中罷出可申事。

一、幼少・病氣等に而、今日登城無之人々者、今般之御樣子、夫々向寄より傳達、爲御祝詞御用番宅迄、以使者可申越候事。

右之趣可被申談候、以上。

九月廿八日　　長　九郎左衞門

御横目中

九月廿二日。金澤材木町に火災あり。

〔御年譜〕

一、九月廿二日戌刻、材木町四十三軒燒失、火元田上屋。

十一月十一日。遊行上人金澤に着す。

〔御年表〕

十一月十一日遊行上人金澤來著、玉泉寺に宿す。如先例米百五十俵・銀五貫を遣さる。廿一日御使者御使番窪田七郎太夫秀貞を以、昆布一箱・椎茸一箱御贈。

十一月十五日。金澤東本願寺末寺の遷佛式を行ふ。

〔聞書〕

一、享保十三年十一月十五日金澤東末寺移徙。先年火事後小屋懸、今般出來今日成就。廿一間四面なり。

末寺は別院なり

十一月二十日。前田吉德幕府より領國の產馬を進獻すべき命を受く。

〔德川實紀〕

十一月二十日。三家をはじめ、前田吉德等十五人に、先に仰下されし領國の產馬、明後戌年より四・五年に一たびづゝ、參覲のついでを以て獻ずべしと仰下さる。

十一月。郡中諸村に勸進の徒を徘徊せしむること勿らしむ。

〔司農典〕

前々より御改作如御法、諸百姓共之儀は、諸勸進入申儀堅く御停止之儀に候處、末々之者共心得違も有之哉、勸進等に入申族有之樣令沙汰候。近年夥敷御貸米も被仰付候上、勸進等を入候儀一圓有之間敷儀に候。若亦心得違之者も有之候哉、以陰聞承屆、左樣之族候はゞ、十村共可爲越度候。尤是以後御貸米等有之時節、急度其組可指除候條、此段彌以嚴重可申渡候、以上。

戌申十一月　　改作奉行

諸郡御扶持人・十村中

十二月八日。家中の士等更にその生活を質素にすべきを命ず。

〔政隣記〕

十二月八日左之通、於金澤者御月番、於江戸者大和守殿、諸頭・諸支配人〻被仰渡有之。但東・北御文段相違、趣意同斷也。左ハ江戸也。

御勝手方御要脚連々指つかへ、指當候御拂方も無之候に付而、御儉約奉行をも被仰付、諸場・諸役人手前、御國・江戸共絲密に及僉議候處、段々減少有之儀故、今更可被減少品もさして無之躰に候。江戸詰人御扶持方代之儀者、大坂御拂米代を以指越候處、御拂米下直に付過分之御かり銀に罷成、此利別而調兼申由に候。就夫來春御歸城之節、去春之通、末二ヶ月分御扶持方相渡候樣御僉議有之候而も、御かり銀相調不申候得者、相渡候儀難成可有之候。然者不定成事に候間、人々其心得候而、御長屋に而も隨分質素に相暮可申候。勤方等之儀に付、同役等出合候ことても、料理ヶ間敷儀は一向無之筈に候。若心得違申族も有之候者、段々被仰出之趣をも忘却、萬端御儉約之御時節と申了簡も無之、思召をも不顧筋に罷成可申候。右之趣被得其意、組・支配〻も可被申聞候事。

十　二　月

十二月十二日。代官等前に納入したる米の缺損補償の用捨を請願す。

〔日　曆〕

はへ出し本のまゝ

御堂形御奉行被仰渡候。

享保十二年御收納堂形御藏古米、當十月斗立就被仰付、欠米石に付四升迄は御用捨、其餘之欠米御極直段を以御代官相辨、御土藏に上納可仕旨、御米所より御申渡被成候。享保十二年御收納米之儀、當五月堂形御奉行并御相見人御出、御代官罷出升廻し被仰付候。尤欠米有之候得者、御代官相辨申候。則御米積並右御奉行并御相見人御出御見屆、御米相渡り申候。惣而御藏米之儀は、前々より每歲五月つゆ中御米損じ、欠米相立申に付、先年より五月中御詰米升廻被仰付候。御拂殘米之儀は、秋に至堂形御奉行并御相見人御出、御藏之外にはへ出し、俵數御改被成候刻、大くつろぎ俵・大鼠喰俵有之候得ば、貫目爲御懸、減米は御代官足米被仰付候。先年より六月・七月・八月欠米之內、御用捨米之御定、御出船に被仰付候御米之儀にて御座候。出船米は堂形御藏升廻被仰付刻指除置、升廻し請不申、宮腰浦濱にて升廻被仰付。然所に出船被仰付候升廻欠米御用捨之御鬮りを以古米斗立、欠米御用捨、其餘は欠米御代官相辨じ候樣に被仰付候得共、斗立被仰付御米之儀は、先達て升廻し相極、堂形御奉行へ相渡申候。乍然八升より上過分に欠米有之分は、其年作毛之樣子により、御僉議之上御代官辨に被仰付儀は御尤に奉存候。尤御收納今年斗立に被仰付、八升より上之欠米、御代官辨に被仰渡候儀迷惑仕申候。御相談被遊御用捨可被下候、以上。

十二月十六日。前田吉德その生母預玄院等を饗應し能を演ぜしむ。

〔政隣記〕

十二月十六日御前樣方・預玄院樣、御上邸御表に而御饗應、御囃子被仰付。御前にも御鼓被遊、津田玄蕃仕舞、奥村織部脇、大組頭茨木源五左衛門・御預地方御用菊田邊角小鼓、其外奥力等之内にも小鼓・大鼓・太鼓被仰付。翌年二月六日にも御能有之、右之面々等にも被仰付。

享保十四年

正月十八日。前田吉德その初老の祝儀を生母預玄院に贈る。

〔護國公年譜〕

一、正月十八日預玄院樣へ、御使御近習頭羽田傳右衛門を以、中將樣御初賀之御祝儀綿二十把・包のし鮑一箱・昆布一箱・御樽代千疋・包のし御目錄被進候。從預玄院樣も、御附物頭並を以て被進物有之由。傳左衛門へ白銀二枚被下候。

正月廿七日。德川吉宗、前田吉德に放鷹によりて獲たる鶴を贈る。

〔護國公年譜〕

一、正月廿七日上使御使番大嶋久左衞門殿を以、御鷹之鶴御拜領。

〔政隣記〕

正月廿七日以上使、御鷹之鶴御拜領。二月廿一日御披、御一門様等御招請。

二月四日。御步水野彌五兵衞先に江戶に於いて作法を誤りたるを以て遠慮を命ぜらる。

〔政隣記〕

二月四日里見孫太夫組御步水野彌五兵衞、於江戶當元日御登城之節、御持太刀持參仕候處、御登城を見損、御太刀指上不申。重き御作法闕候儀不調法至極に付、同夜より孫太夫爲指扣置候。然處同月十八日御國ゟ相返候樣被仰出、今月二日金澤着之處、今日右之趣不調法至極に付、急度可被仰付候得共、私曲之筋無之に付遠慮被仰出候旨、御步頭ゟ御家老御申渡也。

附、翌年七月二日遠慮御免許。

二月四日。江戶に隨從したる諸士に特に二ケ月間の扶持方を增給すべきを告ぐ。

〔政隣記〕

御着城より末云々は今年歸藩以後の意なり

二月四日於江戸。去秋より御供に而罷越候面々、御着城より末二ヶ月分御扶持方代可被下候ヘ御勝手御難澁に付、ヶ樣之御沙汰者有之間敷旨兼而申渡置候。別而難有奉存、萬端相慎倹約を用候樣、大和守殿被仰渡。

二月十日。郡奉行等牛馬賣買に關する從來の弊風を改むべきことを令す

〔元祿享保間留記〕

覺

一、御郡方牛馬取捌候博勞共、跡々者牛馬賣買之取持仕、代銀取遣之儀、賣主・買主手前當座に指引相極埒明申候處、近年札賣・札買与申儀を仕、牛馬賣申者に代銀相渡不申、賤牛馬望候へば脇より又札買に仕望人江牛馬相渡。右牛馬之内他國他領江賣出候時分、代銀當座に請取候得共、牛馬賣主江相渡不申。毎年二・三月頃より八・九月頃までゝ内は、假令宜敷馬を賣拂、替馬望候得者、悪馬に而も無是非買請させ候樣に、畢竟冬に至、他國他領江牛馬賣買も無之時節に罷成候得者、替馬も口入不仕候事。

一、諸百姓所持仕候牛馬、脇之者望候へば、博勞共右牛馬所持仕候百姓之方江罷越、賣拂候樣に申談候共、牛馬主拂候儀不能成由申候得者、其者方江二・三日も致逗留、無理に所望仕に付、無是非賣渡、替馬無之候而手間申に付、悪馬に而も買請申候事。

一、牛馬賣買仕候儀、向後代銀當座に取渡仕、且又難賣放牛馬無理に所望不仕、相對を以牛馬賣拂候而、替馬望申時早速爲相求、手支無之樣に不仕候得者、御收納方稼茂手づかへに罷成候事。

右之通に御座候間、此旨御郡奉行等ゟ被仰渡、御領國中博勞共ゟ急度申渡、百姓共手支不申樣に仕度奉存候、以上。

酉二月

別所忠兵衛　木梨九右衛門
高畠權兵衛　大塚彌五太夫
賀古助之進　坂井知右衛門
前波知兵衛　山岸七兵衛
菊田逸角　稻垣傳右衛門

御算用場

右改作奉行紙面之通に候條、各支配博勞共ゟ急度被申付、向後牛馬札賣買不仕、且又無理に牛馬爲賣拂不申、惣而百姓之費不仕樣に被申渡、尤諸百姓共も可被申聞置候、以上。

酉二月　御算用場

右之通御算用場より申來候に付、寫指遣候條得其意、牛馬札賣買不仕樣に、博勞共ゟ急度可

申渡候。尤百姓共にも可申渡置候。披見已後判形に而、先々相廻、從落着可相返候、以上。

酉二月十日　村井安左衞門

澤田十郎兵衞

能州口郡御扶持人・十村中

二月十三日。江戸深川に在る加賀藩の土藏燒失す。

〔政隣記〕二月十三日江戸淺草茅町より出火、北風烈敷く、越中島迄燒通、十四日巳刻鎭。深川御屋鋪にも火入、廿間之御土藏一筋燒失、殘御藏者防留之。深川奉行御大小將伊東牛右衞門殊之外働候に付白銀五枚、指添候御步横目渡邊健右衞門に同一枚被下之。其外足輕・小者にも夫々に被下之。

二月十九日。遊行上人金澤を發す。

〔御年表〕享保十四年二月十九日遊行上人金澤發出に付、十六日御使番を以て絹を御贈、十八日御茶を贈らる。

二月。用水・地境等の訴訟に關する幕府の令を領內に傳達す。

〔司農典〕

覺

一、在々用水懸引井路之儀、川中に井堰を立水を引分け候處、堰仕方に寄、川下之井水令不足候も無構、勝手宜數樣に而已仕候故及爭論、或は兩類に井口有之場所、片類之井口附替候時、双方不申合、一方之任自由に仕替候故、令出訴候類有之候。自今右躰之儀に付、致相對普請仕候節は、立會無障樣可致候。若滯儀有之歟、又は不法之事仕候時は、其節より十二月を限於訴に者可有裁許、期月過令出訴は不取上候事。

一、郡境・村境・山野論又は質田地等之儀、其外奉行所へ訴出候事に付、證據無之非分之儀も何角申紛し、又證據有之儀も、年經候得ば其事を申掠及出訴、相手村方爲及難儀に、其上双方村々困窮之基に成不屆に候條、向後如此之筋不訴出、此類之事訴出、詮議之上巧之譯相知においては、其旨可申付候事。

以上

右之通、六年以前辰閏四月相觸候得共、いまだ不行屆所も有之樣相聞候に付、猶更此度相觸候間、被存其旨、御料は御代官、私領者地頭・村々名主・百姓江、右之趣相心得候樣可被申付候、以上。

酉正月

右從公儀御觸之趣寫指越候條、組・支配、百姓に至迄不相洩樣申渡、請書付取置、其方共より御請可出候、以上。

酉二月　　改作奉行

諸郡御扶持人・十村中

三月十日。算用場奉行、百姓をして改作法を勵行せしむべきを命ず。

〔司農典〕

御改作之御法急度相守候樣、兼々度々申渡候得共、御郡々御扶持人并平十村心懸不宜者有之、末々支配不行屆に付、肝煎・組合頭・小百姓に至迄、右御法を取失候者も有之躰に候條、向後嚴重相心得可申候。爲其有增左に記候事。

一、御扶持人并平十村、衣類木綿・紬・八講布、此外一切着用不仕、諸事右に可准事。

附り、右之者共兄弟・妻・忰・娘等衣類、向後模樣等一切相止可申候。其方共仕方により、末々御締方も相立候條、此段急度可相心得候事。

一、惣而華麗成仕形無之、儉約を相守、末々爲見習候樣心懸候事專一に候。勿論不相應之買物不仕、諸事奢たる儀無之樣相愼可申候。於御當地に家を買、或は借宅に而も遊樂之族有之段、取沙汰相聞得候條、實正に候はゞ承屆次第曲事に可申付候。若御當地之者家名を出、借

改作奉公は農業に從事の意

宅はかり主を拵へ置候故、十村等之名を不顯候哉、若借名を以右躰之儀も有之候はゞ、相知次第急度曲事に可申付候。畢竟不埒之族有之者は、同役之者より加異見、承引不仕候はゞ無遠慮可申聞候。乍存其分に仕置候はゞ同類に候條、樣子見聞次第右之趣に相心得、不隱置可申聞候事。

一、十村等之手代末々に至迄、不相應之仕形無之樣嚴重可申渡候。尙更於御藏所に、御米納方之儀急度可申付候事。

一、肝煎・組合頭幷村々長百姓、其外藏宿等相勤候者之外、木綿合羽幷紙合羽堅可爲無用、蓑・菅笠或は竹子笠着用爲仕可申候。此外衣類之儀は、兼而申付置候通爲相守可申候事。

附り、傘並髮に髮附之事、右に準じ末々無用之事。

一、百姓之子共等幷頭振共、於御郡方に無用之品々致商賣、百姓之費有之候條、向後往還筋宿方等に而、十五ヶ年以前より有來候商賣人は其分に仕置、十五ヶ年以來之右商賣人は爲指止、改作奉公爲仕可申候。此段急度申付、若心得不仕申者於有之は致縮置、早速可申斷候。ゆるかせに仕置、脇より相聞候はゞ、其村肝煎・組合頭不及申に、支配之十村曲事に可申付候條、無油斷可遂吟味事。

右大概古來より御法之趣を以申渡事に候。此外萬端右に准じ急度相守、末々嚴重可申渡候。

惣而御改作御法之儀者、兼而申渡通に候條、尙更委細申渡、小百姓等に至迄請書付取置、尤其方共より拙者共請書付可指出候。右之趣山廻并新田裁許之人々にも可申達者也。

享保十四年三月

別所忠兵衛
木梨九右衛門
高畠權太夫
大塚彌五太夫
賀古助之進
稻垣傳左衛門
坂井知右衛門
前波和兵衛
山岸七郎兵衛
在大阪 菊田逸角

諸郡御扶持人・十村中

右紙面之趣見屆、御年寄衆にも相達候處、右之通急度可申觸旨御申聞に候條、末々可被相觸候、以上。

三月十三日。前田吉德就封の暇を受く。

〔政隣記〕

三月十三日御暇之上使松平左近將監殿、從大納言樣上使安藤對馬守殿、御拜領物去々年御例之通。

三月十五日。前田吉德登營して就封の辭見す。

〔德川實紀〕

三月十五日、松平加賀守吉德はじめ、就封の暇給ふもの四十人。

〔政隣記〕

三月十五日御登城御禮、御拜領物、上意、且又大和守・玄蕃御目見・御拜領等、都而御例之通。

〔政隣記〕

四月朔日例月出仕之面々江、御年寄衆等被謁候節、前月十三日兩御丸上使等、十五日御禮等之儀此間御書を以被仰下、恐悅奉存候、各江申聞候樣にとは不被仰下候得共、從大納言樣上使始而之儀に候故申入候段、伊豫守殿被仰聞、此儀に付當座之恐悅に而相濟。

但、去々年御暇之節、従大納言様御拝領物者有之候得共、御老中御煩に付、従公方様之上使に而、御一所に御拝領有之。

三月廿八日。前田吉德江戸を發して歸國の途に就く。

〔政隣記〕

三月廿八日江戸御發駕、御供大和守若年寄奥村織部、一宿御跡より津田玄蕃。四月七日晝より糸魚川御逗留。八日姫川減水に付境迄被爲入。

四月十日。家老玉井市正の自分指扣を免さる。

〔政隣記〕

四月十四御家老役玉井市正、當二月廿五日心付無之、鷹居させ泉野口へ罷出、其所に而心付罷歸、大炊殿へ相達候處、自分に被扣可然旨、御年寄衆御僉議之上御申談、被指扣居候處、従御道中御免被仰出今日より出勤。

二月廿五日とあるは廿四日にして前田利長夫人の忌日にあらざるか

四月十一日。前田吉德金澤に着す。

〔政隣記〕

四月十一日高岡御立、御放鷹有之、申中刻御歸城。勝丸様御式臺迄御迎、御歸國御禮使山崎

庄兵衞。其外前々之通。

四月二十日。與力宮井彦兵衞若黨の無禮を咎めて斬殺す。

〔政隣記〕

六月廿日暮頃、味噌藏町九人橋下金森助右衞門屋敷際に而、御持筒頭渡邊左兵衞組附與力宮井彦兵衞（御異風小頭宮井清兵衞せがれに而、當時組附與力也。）儀、御使番水野次郎太夫若黨慮外之仕形有之殺害之。彦兵衞も少々手疵負、平癒之後も指一本右之手に無之。水野より、右若黨常々慮外者に付、急度可申付与存居候段御達申、其分に而相濟。

四月廿二日。大槻朝元の邸に通ずる水道の改修を命ず。

〔護國公年譜〕

一、四月二十二日千石町御用地之內、方々水溜被仰付候得共、烏付申躰も無之に付、御用無之候。大槻傳藏居屋敷之內へかけ申水道計付直し、はき水は千石町往還之道際最前之通相通、其外水溜掘・土取穴等寄々埋させ可申候。金谷御門之外より才川大橋へ御通道之ため、右御用地之內筋違道付させ可申、右之趣若年寄共へ可申聞旨被仰出。

四月廿五日。前田宗辰著袴の儀を行ふ。

「政隣記」

四月廿五日勝丸様御着袴、御表向御規式無之、御奥向迄有之。

廿六日勝丸様御着袴御祝之趣を以、御能被仰付。御表向今日在合候者、御歩並以上布上下、御廣式向者熨斗目。於御居間書院年寄衆等御料理被下之、頭分者檜垣之間、御横目・御抱守・御医師・上坂平兵衛於御柳之御間御料理被下之候。且又今日玉井市正を以、御腰物勝丸様へ被進之、但右御料理被下候頭分之中也、御廣式懸り之五人迄也。給仕御歩。御柳之御間は坊主給事。

一、右為御祝詞、明後廿八日・廿九日之内御用番宅并奥村伊豫守宅へ可参出旨、九郎左衛門殿諸頭へ御申觸也。

廿六日は廿五日なるへし

「御年表」

四月廿六日勝丸君御着袴、御抱守中村庄蔵を以て、干鯛一箱・御樽代五百疋上らる。公より御近習頭野村七兵衛を以て、御時服三重・御上下二具・二種・御樽代五百疋を進ぜらる。勝丸君より七兵衛へ白銀二枚被下之。且玉井市正貞衛を以て御刀三池・御脇刺延壽国資を進ぜらる。巳刻御居間書院、勝丸君御禮を仰上られ、奥村伊豫守有輝披露、御熨斗進ぜらる。

且玉井市正云々以下廿六日の事に係るへし

四月廿九日。大聖寺大に火く。

〔政隣記〕

四月廿九日夜大聖寺大火之旨御案内有之、御見廻御使御大小將吉田權佐ゟ晦日申刻被仰渡、同中刻前發出、御使相勤。但早打に而罷越には不及旨被仰出候。指急候樣被仰渡。翌朔日申刻歸着。御館幷保壽院殿備後守樣御實母也。居宅無御別條、且中新道と申所より出火、家數四百軒餘燒失之旨申上。大聖寺ゟ者曉寅刻頃參着之由也。

五月四日。引免を請ふ村の願書を提出すべき期限を定む。

〔三百三條舊記〕

諸郡年季引免可相願村々之書付、六月廿五日切に指出可申候。詮議之上可申付候。日切相延指出村々、不及貪着候條、可得其意候、以上。

己酉五月四日　　御改作奉行御連名

諸郡御扶持人・十村中

五月八日。德川家綱の五十回忌法會を金澤神護寺に執行す。

〔護國公年譜〕

一、五月八日嚴有院樣五十回御忌に付、於金澤神護寺今日一日御法事御執行。御法事奉行横山大和守。於江戶五月四日より八日迄東叡山に而御法事有之、普請・鳴物不及遠慮候。酒井讃

岐守殿御主付。御目付衆より火之本之儀彌嚴重心得候樣觸有。八日には御成、諸御大名樣參 供奉如例。九日御香奠御獻上、御使御大小將頭丹羽武兵衛勤之。

五月十八日。各村にその高免帳を提出すべきことを命ず。

〔郡方古例集〕

享保六年に指出候高免帳相改、一ヶ村切に田畠書分、來る六月中に指出申候、以上。

享保十四酉五月十八日　改作奉行

諸郡御扶持人・十村中

六月六日。百姓の悴幼少にして親を喪ひたるもの、遺産管理に關して命す。

〔郡方古例集〕

諸郡百姓之せがれ幼少に而親病死いたし候者、後見を立置、二十歳に罷成候而家・高等相渡候趣、跡々及案内候得共、斷相洩候者も有之候間、向後書付を以可及案内候。此旨一統可致承知者也。

享保十四年己酉六月六日　改作奉行

六月廿五日。藩の財政困難なるを以て諸役人に費用を節すべきを命ず。

〔政隣記〕

六月廿五日御勝手御難澁御要脚御指支に候間、諸役人御費無之樣嚴重可相心得旨被仰出候段、今日諸頭・諸奉行等之御用番江、於松之御間御年寄衆御列座、月番大炊殿御覺書を以被仰渡候事。

一、聞番幷御表小將等も、跡々より拜領金銀、於御國は是以後被下間敷候。御近習番・御膳奉行は、地・他國共被下間敷旨被仰渡有之。

一、御奏者番向後江戸御供被召連間鋪旨被仰出。依之役銀、知行當り之通被指出候等に相成。

七月三日。德川吉德奉書を前田吉德に遣して暑中の安を問ふ。

〔德川實紀〕

七月三日、日門、增上寺に御使して檜重をつかはされ、暑中の御尋あり。松平加賀守吉德には奉書を給ふ。

七月七日。能登に地震あり。

晝時とあるは晝職なるべし

收納藏なるべし

〔政隣記〕

今年七月七日晝後、強地震申刻迄に五度、能州大に強、稲舟・粟崎・鹿野・飯田・鵜川に家一百五十軒潰、五百八軒半毀、八筋御收納藏、四筋中士藏、一筋御武具土藏、六筋御鹽藏、一筋鹽士自分藏、一筋改番所、三十一ヶ所山、（但竹藪御林山）以上潰崩候事。

〔眞偽一統誌〕

享保十四己酉年加・能地震別而能州損所之覺

當月七日地震に而、私支配所損所有之旨、十村方より及注進申候に付、其段各に相達申候處、早速罷越候樣被仰渡、同十一日發出、同十三日輪島村に致參着、損所有之御郡方相廻、委細相しらべ、左に記上之申候。

一、鳳至郡稲舟村助八組輪島村、惣家數五百九十三軒之内百十四軒、内二十八軒潰家、（内一軒百姓、廿七軒頭振）八十六軒半潰家。（内廿二軒百姓、六十四軒頭振）

一、同八組輪島村、四間十四間御收納藏、但所々損申候。

一、同村四間二十間、但所々損申候。

一、同村二間三間、但所々損申候。

一、同村四間七間、但所々損申候。

間改の間はまと訓み港灣の義なり

一、同村長四十八間幅二間大橋、但橋桁はなれ傾、所々損申候。

一、同人組輪島崎村、三間四間間改御番所、但所々損申候。

一、同人組谷内村、惣家數九十八軒之内三軒潰家、但百姓。同村領一ヶ所山崩。

一、同人組白米村、惣家數二十二軒之內九軒半潰家、內八軒百姓、同一軒頭振。同村領一ヶ所御林山崩。

一、同組野田村、惣家數六軒之內三軒半潰家。但百姓。

一、同組名舟村、惣家數百九軒之內十七軒、內六軒潰家、內三軒百姓、三軒頭振。十一軒半潰家、內五軒百姓、六軒頭振。

一、同村二人女、山崩に而山下に成相果申候。同村領六ヶ所山崩。

一、同組尊利地村、惣家數三十軒之內十七軒、內二軒潰家、內一軒百姓、一軒頭振。十五軒半潰家、內拾一軒百姓、四軒頭振。

一、同組尊利地村領一ヶ所山崩、篭竹藪共。

一、同組小田屋村、惣家數五十一軒之內四十九軒、內九軒潰家、內六軒百姓、三軒頭振。四十軒半潰家。卅七軒百姓、三軒頭振。

一、三人山崩に而家埋相果申候。內一人男、二人女。

一、小田屋村四間十三間御收納中出藏、但所々損申候。

一、同村四間八間御鹽藏、同村領一ヶ所篭竹藪崩、同村領三ヶ所山崩。

一、同組里村、惣家數不殘四十四軒、內二軒潰家、但百姓。四十二軒半潰家。內卅六軒百姓、六軒頭振

一、里村領一ヶ所篭竹藪崩、同村領二ヶ所山崩。

一、同組澁田村、惣家數三十九軒之內三十七軒、內九軒潰家。但百姓。二十八軒半潰家。內廿六軒百姓、二軒頭振

一、同村三間六間御鹽入鹽土自分藏、但山崩に而藏埋申候。

一、同村領九ヶ所山崩、同村領二枚鹽濱、但山崩に而埋申候。

一、鳳至郡鵜川村故六郎左衛門組跡鵜川村、惣家數百七十一軒之內十六軒、內二軒潰家、內一軒百姓、一軒頭振。十四軒半潰家。內十三軒百姓、三軒頭振。

一、同村四間二十間御收納藏中出藏、但傾申候。

一、同村四間十間御收納中出藏、但傾所々損申候。

一、同組跡矢波村、長十二間三尺幅九尺寺田川橋、但橋爪橋臺損申候。

一、鳳至郡宇出津村源五組柳田村、長十一間幅二間さしけ橋、但橋臺崩、橋所々損申候。

一、同組宇出津村、三間十四間御收納藏、但傾所々損申候。

一、同郡粟藏村彥丞組川西村、惣家數七十九軒之內二十六軒、內八軒潰家、但百姓。十八軒半潰家。

但百姓、

一、同郡粟藏村彥丞組桶戶村、惣家數十七軒之內四軒半潰家。但百姓。

同組の次に村名を脱す

一、同組鈴屋村惣家數四十一軒之内二十軒、内八軒潰家、但百姓。十二軒半潰家。但百姓、

一、同村領四ヶ所山崩。

一、同組惣數十八軒之内十軒、三軒潰家、但百姓。七軒半潰家。内四軒百姓、三軒頭振。

一、同組大川村、惣家數三十三間之内十四軒、内六軒潰家、百姓八軒半潰家。百姓。

一、同組大川村、三間八間御鹽藏、但傾所々損申候。

一、同組時國村、惣家數二十五軒之内二軒半潰家。但百姓。

一、同村四間十二間御收納藏、但山より石落、藏い内へ打込、所々損申候。

一、同村四間十間御鹽藏、但損申候。

一、同組麥生野村、惣家數二十二軒之内十軒、内二軒潰家、百姓八軒半潰家。百姓。

一、同組德成谷内村、惣家數二十四軒之内十二軒、内三軒潰家、百姓九軒半潰家。内八軒百姓、一軒頭振、

一、同組東村、惣家數二十四軒之内十軒、内三軒潰家、百姓七軒半潰家。百姓。

一、同組德成村、惣家數二十三軒之内八軒、内二軒潰家、百姓六軒半潰家。百姓。

一、同組佐野村、惣家數二十三軒之内十四軒、内四軒潰家、百姓十軒半潰家。百姓。

一、同組眞久村、惣家數五軒之内一軒半潰家。百姓。

一、同組東山村、惣家數二十一軒之内八軒半潰家。百姓。

一、同組西院内村、惣家數十八軒之内九軒、内三軒潰家但百姓。六軒半潰家。百姓。

一、同組東印内村、惣家數十五軒之内七軒半潰家。百姓。

一、粟藏村彦丞組西山村、惣家數五十五軒之内二十三軒、内十軒潰家、内九軒百姓、一軒頭振、十三軒半潰家、十二軒百姓、一軒頭振、

一、同組金藏村、惣家五十九軒之内十二軒、内七軒潰家、百姓 五軒半潰家。百姓。

一、同組牛尾村、惣家數六軒之内二軒、半潰家。但百姓。

一、同組寺山村、惣家數八十四軒之内二十六軒、内九軒潰家、八軒百姓、一軒頭振。十七軒半潰家。十五軒百姓、二軒頭振。

一、同組淸水村惣家數三十九軒之内七軒半潰家。但百姓。

一、彦丞組寺地村、惣家數二十八軒之内十三軒、内五軒潰家、内三軒百姓、二軒頭振。八軒半潰家。内六軒百姓、二軒頭振。

一、同組敷戸村、惣家數二十五軒之内七軒、内四軒潰家、但百姓。三軒半潰家。百姓。

一、同組長尾村、惣家數三十五軒之内十六軒、内四軒潰家、百姓 十二軒半潰家。百姓。

一、同組雞谷村、惣家數七軒之内二軒半潰家。但頭振。

一、同組靑ヶ池村、惣家數廿四軒之内二軒、内一軒潰家、百姓 一軒半潰家。百姓。

一、同組北山村、惣家數十九軒之内十四軒、内六軒潰家、内四軒百姓、二軒頭振。八軒半潰家。百姓。

一、同組上山村、惣家數二十一軒之內六軒、內一軒潰家、百姓五軒半潰家。百姓。

一、同組南山村、惣家數三十二軒之內十一軒、內三軒潰家、但百姓八軒半潰家。百姓。

一、同組宗末村惣家數十五軒之內五軒、內三軒潰家、但百姓。二軒半潰家。百姓。

一、同組上正力村、惣家數二十二軒之內二軒、內一軒潰家、但百姓。一軒半潰家。百姓。

一、粟藏村彥丞組、二子村、惣家數十五軒之內三軒潰家。但百姓。

一、同組眞浦村、惣家數二十二軒之內十一軒、內三軒潰家、但百姓。八軒半潰家。內七軒百姓、一軒頭振。

一、惣家數五十六軒之內十五軒、內二軒潰家、但百姓。十三軒半潰家。內拾一軒百姓、二軒頭振。

一、同組仁江村、惣家數十七軒之內四軒半潰。內三軒百姓、一軒頭振。

一、同組長橋村、惣家數五十六軒之內九軒、內四軒潰家、內三軒百姓、一軒頭振、五軒半潰家。但百姓。

一、同組洲卷村、惣家數八軒之內一軒半潰。但百姓。

一、同組白瀧村、惣家數六軒之內二軒半潰家。但百姓。

一、珠洲郡狩野村恒方組堂ヶ谷村、惣家數七十七軒之內十一軒、內四軒潰家、內三軒百姓、一軒頭振。七軒半潰家。內六軒百姓、一軒頭振。

一、同組下烏越村、惣家數四十五軒之內三軒潰家。內二軒百姓、一軒頭振。

一、珠洲郡飯田村七郎右衞門組鵜飼村、惣家數百六軒之內六十四軒、內六十一軒潰家。內四十三軒百

姓、十八軒頭損。三軒半潰家。但百姓。

一、同組鶉飼村、四間二十間御收納中出藏、但所々損申候。

一、同村四間二十間御收納中出藏、但傾所々損申候。

一、同所村二ヶ所、見月嶋山崩。

一、同組金峰寺村、惣家數十四軒之內二軒潰家。但百姓。

右之內に御座候。山崩所繪圖に記、別紙三枚指添上之申候。此外支配之御郡方異變之儀無御座候、以上。

酉七月　　　　村井安左衛門

前田近江守殿

奧村伊豫守殿

橫山大和守殿

本多安房守殿

前田大炊殿

奧村內記殿

村井主膳殿

長九郎左衛門殿
津田玄蕃殿
前田修理殿
前田勘解由殿
中川式部殿
玉井市正殿

右之通帳面記、御年寄衆に指出申候。繪圖共に寫出之申候、以上。

村井安左衛門

御算用場

五組損所持寄

二百五十軒　潰家、内百八十八軒百姓、六十二軒頭振。
五百七軒　半潰家、内四百一軒百姓、百六軒頭振。
八筋　御收納藏。内四筋中出藏。
一筋　御武具土藏。
六筋　御鹽藏。内一筋鹽士自分藏。

一　　軒　　　間改御番所。
三十一ヶ所　　山崩。但篭竹藪・御林共。
三　ヶ所　　　橋。
二　　枚　　　鹽濱。
五　　人　　　死人。一人男。四人女。

〔護國公年譜〕

一、能州先頃之地震に付損所等、公儀へ御屆之趣左に記。
領分能登國珠洲郡・鳳至郡之内、當七月七日地震に而損失之覺。
一、潰家・損家　　七百九十一軒　　一、潰　藏　　十六
一、山崩此町間三十三間千七百三十一ヶ所　　一、死人同男一女四五人
一、橋　　　　三ヶ所　　一、牛馬損無御座候
右之通に御座候、以上。
酉八月　　　　　　　松平加賀守

七月十日。家中の諸士に儉約を守り、行狀を愼むべきことを令す。

〔本多氏舊記〕

享保十四年己酉七月八日年寄中幷御家老役、伊豫守誘引に而、於御居間書院、御前に召候而被渡下候御覺書寫。

年寄中幷家老役被申聞趣。

家中儉約之儀、何茂詮議之趣覺書令一覽候。此通可然候條、一統可被申渡候。畢竟ヶ様之儀者、年寄中より急度相守、内外之行狀等相愼可被申候。ゆるかせに候而は、勿論家中縮不申事に候。少之儀に而も、年寄中等之手前に、猥成儀又は心得違之品有之候得者、夫を申立、とかく一統不愼之基に候間、此段は何茂別而嚴重に心得可被申候。

以上

七月八日

右之趣御口上に而被仰聞、御覺書御渡被遊候に付、大和守奉請取、先達而御上御儉約之儀被仰出候に付、御家中之儉約之儀も僉議可仕旨被仰出候故、相伺候處、紙面之通可申渡由奉承知候。夫々可申渡候。且又年寄共手前之儀に付被仰出候趣奉承知、御尤之御儀奉存候。私共儀に御座候得者、御意無御座而も萬端相愼可申覺悟に御座候。猥成儀も御座候而は、一統之縮には罷成不申儀に御座候。尙更被仰渡之趣畏候。御紙上は何茂爲見仕、追而返上可仕旨御請申上候處、伊豫守御取合申上候者、何茂被仰渡候趣奉承知候。何茂儀者家柄等に而、高知

なとも被下候儀に候得者、何分相愼可申儀に候得共、壯年之者共なとは、内外に付不圖心得違候儀も有之間敷事に而も無御座候處、結構成被仰渡に而忝儀に奉存候。御挨拶申上退出、右御覺書何茂拜見仕以後、大和守より何茂拜見仕候趣御沙汰、伊豫守迄申達候處、其段以織人達御聽。

一、右之趣に付、近江守江は十日主税相招、大和守より御覺書之寫相渡、主税儀も奉承知候樣申談、内匠へ之寫相渡申達。

一、主膳江者大炊より相達。

一、式部江者十一日大炊より相達。

〔政隣記〕

享保十四年七月十日被仰出之趣左之通。

御家中面々儉約之事。

一、衣服之儀、先年より御定有之儀に候處、近年猥に罷成候間、急度相守、別而夫よりは輕く相心得、絹・紬より宜敷品は、用申間敷候。歷々之面々を初、御小將・御馬廻等も、御番所・役所抔へ木綿着用之儀可爲尤候。袴・羽織等も准之、麁服を用候儀勿論之儀に候。御徒並以下不及申に、猶以其心得可仕事。

但、有來候衣服を指止、俄に綿衣等之支度仕候ては、却而費之筋も候者、當分は只今迄之品を用申儀不苦候。連々を以、本文之通相心得可申候。當時綿衣相應之品所持仕候者、彌以今より用ひ可申候事。

一、於江戸御供・御使・御給仕等相勤候御徒並以上、綿衣着用者難成儀に候。乍然絹・紬之外は、羽二重等も一向無用に可仕事。

一、近年男向は麁服着用之人々少々相見え候得共、女中之衣類相改り不申、華麗之至に候。畢竟父・夫等不覺悟之儀に候間、男向に准じ麁服を着用爲仕可申候。召仕之女共は、猶更急度可申付事。但内證方に而は、妻女・娘等衣類に不限、惣而之爲躰殊之外分限を越、重々敷仕形共も有之様子に候。作法は宜敷様に有之候得共、左様に而は無之、僭上餘情之爲にて、おのづから召仕之女も相増申様に罷成候。一向ヶ様之緩怠は有之間敷儀に候條、家内之者共に嚴重に可申付候事。

一、町人・百姓は、奉行・支配人より嚴重申渡候躰には候得共、妻女娘等衣類を初、華麗之躰有之様子に候間、彌嚴重可申渡候事。

一、饗應之菜數之儀、雖爲歴々之面々、押立候振廻は一汁・三菜・吸物一・肴一色、其外者輕き一汁二菜、或は御用に付寄合候節、又は稽古事にて參會之節は、一汁一菜又は湯漬飯に可仕

候。惣而魚鳥も輕き品を用ひ可申候。酒は三篇を不可過候。押立候振廻にても、後段は出し申間鋪事。

但、菜數多は無用之段、從先年就被仰出候、膳部に者省之、肴ニ名付、長座之內品々出し候族も有之候。假令用事有之及長座候共、本文之外馳走ヶ間敷儀、一向爲無用事。

附、常之出合には、重引其外酒之肴類は一向無用之事。

一、歷々急度仕たる振廻之外は、濃茶出し申間鋪候事。

一、小身幷輕き人々は、假令家督・婚禮等之重き祝事にても、一汁二菜又一菜に可仕事。

但、右祝事にて參會之節、小謡などうたひ候儀は、左樣にも可有之處、長座亂酒之上、尾籠之仕形高聲に罷成、及深更候迄退出不仕族も有之躰に候。一向侍之風俗に而者有之間敷候間、ヶ樣之儀は急度相愼可申事。

一、押立たる茶之湯之參會、可有遠慮候事。

一、家作之儀も前々御定有之儀に候。新宅は勿論、修覆等も輕々可仕候。新宅又は目立候修理仕儀者、頭・支配人共樣子承屆可申事。

一、一通り之音信贈答一向無用、祝儀等取遣不仕候はで不叶儀者、輕き干肴類用可申候事。

但、親子兄弟等身近き親類に、樹木又は殺生之品などは格別に候事。

一、婚禮之支度、去辰之年年寄中申談候趣も候得共、猥に罷成候。猶以其節より者萬端輕く相心得、同身代之者等外之例を承合に不及、人々勝手次第可成程輕く可仕候。且又今以妻女を指置候家作料等遣し候約諾仕ものも有之躰に候。一向左樣之風俗に而者有之間舖事。

一、三月之雛、破魔弓、五月之菖蒲冑、飾相成を用ひ可申事。

但、雛等結構成品商賣爲仕不申樣に、町奉行江申渡候事。

一、年頭之規式を初、五節句等之祝儀、家により先祖より之舊例を用來り、無用之費有之躰に候。畢竟勝手を取續可申儀專要之儀に候間、不拘舊例儀聊不及遠慮事に候間、自分之規式等萬端無用之品は相省尤に候。且又佳節祝儀物も、親子兄弟等は各別、只今迄謂有之遣來候所にも、一向相省可申事。

一、葬送・法事等も、至而輕く執行可仕事。

但、親子兄弟身近き親類之外は、香奠或は菓子類等に而も送り候儀、堅無用之事。

附、諸勸進に入候儀堅無用之事。

一、群集之邊、其外爲遊興寺社方・町屋等をかり相越候儀、堅無用に候。費而已ならず不作法之儀に候事。

一、人馬者身代相應に所持可仕儀に候得共、勝手不如意之人々者、可成程者相減申儀、御用

捨可被成候。然者御當地召連候供廻りも、隨分人少に可仕候。御城中召連候人數者、御定も有之儀に候得共、勝手取續候迄は、是又御用捨被成候間、可成程者御定より致減少召連可申事。

但、他國御供・御使等之節、夫々御定之人數より相增候儀者勿論仕間敷候。然共當り之人數に而難相越品も候者、一往年寄中ゟ相達候上相增可申事。

一、鷹所持仕度存候者は、八百石以上兒鷂・鷂・隼之内一居、三千石以上右之内一居、或者二居、五千石以上三居、一萬石以上四居、大鷹は五千石以上之外可爲無用候。八百石以下者から鷹も無用之事。

但、山構之儀、小屋懸置候儀堅無用に候。且又假令費無之殺生にても、數度罷出候儀者不可然儀に候。若き者共などい内に者、殺生に打懸り罷在候者も有之候。一向左樣之筋にては有之間鋪候間、可有其心得事。

一、陪臣は、假令高知遣置候者に而も、鷹所持仕儀一向無用之事。

一、他國往來之節爲餞別參會、又は發足前音物、且又土產之品堅く無用に候。親子兄弟等、至而事輕く取計候儀者各別に候事。

一、人持を初高知之面々、近習に召仕候輕き並之者、並一季居若黨・小者等も、主人無用之條情を好、器量等撰候故、左樣之者は高給銀を取不申候ては難成樣子に相聞候。一圓不可然

事に候。給銀之儀は、追而相極可申候條、其內は隨分可成程輕く召抱候樣に可相心得事。

附、近年女奉公人高給銀に而召置候ものも有之躰に候。一向無用之費候間可有遠慮事。

右儉約之儀大綱如斯候。其品々數多有之儀に候間、右之趣に準、嚴重に相守可申候。收納米下直、一統時節柄人々困窮仕儀に候得ば、別而儉約を用不申候はで者不叶儀に候處、近年は御定も猥に罷成候。儉約之儀者去子之年も被仰出候得共、此砌御上にも御勝手御難澁に而、嚴敷御儉約之儀も被仰出事に候得者、御家中之者共當分は右之通急度相守、勝手取續御奉公仕候樣に相心得可申旨、頭・支配人に可申渡由被仰出候條、思召之趣各初奉承知、組・支配之人々に急度可被申合候。組等之內裁許有之人々者、其支配にも申渡候樣、是又可被申聞候。

附、陪臣は猶以右之趣嚴重に相守候樣に可申渡事。

以上

己酉七月

御家中之人々行跡不宜者も有之、第一侍に不似合、博奕に似寄候儀俶申族も有之段相聞、沙汰之限に思召候。强而御糺も被成候者、其人々も相知可申候得共、先御猶豫被成候。末々之者に而さへ、博奕仕候得者急度曲事に被仰付候。增而侍に不都合之儀に候得ば、不屆至極に被思召候。相愼不申者も候者、此上は嚴重に御沙汰可有之候間、兼而此旨を存、急度相嗜候

様に、頭共指引可仕儀之旨被仰出候條、可被得其意候事。

右被仰出之趣、并別紙儉約之一件、一統被申聞候儀者、組・支配之人々、頭之宅に召寄、急度可被申渡候。且又組等之人々、内外華麗之仕形有之、此度被仰出之筋に違候歟、又者行状等不愼之者も有之候者加制詞、其上にも相嗜不申候者、聊不及用捨、速に言上可有之候。

以上

己酉七月

七月十二日　郡方の風俗を革正すべきを命ず。

〔司農典〕

惣而御郡方之儀は、改作之御法を以被申付候躰に候得共、風俗不宜儀も有之、十村・百姓等之内には、彼等に不似合無用之學文・歌學・茶の湯、其外遊樂之儀も翫候族有之躰に候。左候はゞ諸事准之、作業之心懸は忽に罷成基与相見え候。ヶ様之儀は急度被申付、華麗者勿論之儀、百姓躰に者不都合之品有之者も見聞有之候はゞ、無用捨早速相咎可申儀尤に候。且又御當地町續、御郡方支配之地に有之候町人共風俗も、奢たる儀無之様嚴重申付、端之外無用之所々茶屋を掛、酒肴相貯、又は神事開帳之節も茶屋を掛候而、食物等賣買仕候者も多者無之様申付、群集邊に座敷等を貸申儀不仕様、御郡奉行に可申談候。惣而御郡之儀、右之趣に准じ相

心得可被申候事。

以上

己酉七月

右今般被仰出之趣、御書立之寫相達、當春書面を以申渡置候通に候。御書立之趣等不依何事に、諸事奢ヶ間敷仕形無之樣、小百姓に至迄嚴重申渡、請書付取置、其方共より拙者共へ請書付可指出候、以上。

己酉七月十二日　　木梨九右衛門等十一人

諸郡御扶持人・新田裁許・山廻中

七月二十日。百姓の收納米を藏納するに際し藏雀と稱するもの、手數料を徵するを禁ず。

〔司農典〕

諸郡代官幷藏宿之内、御收納米御藏納之節、又町藏米納候砌、藏すゞめ或は手傳人与名付、代官より人を指出、爲手間料与百姓共より米等爲相渡候者有之旨沙汰相聞候。米幷俵拵等吟味之筋に候はゞ、右之者手間料共代官・藏宿より可指出處、百姓共より手間料爲出候儀、一向有之間敷事に候。前々より申渡置候通、納米幷繩・俵等は隨分念に入請取、其外百姓之費無之

樣可仕旨申渡置候處、違背於有之に者可爲曲事候。右之族無之樣急度可相心得候。若向後件之類有之候はゞ、百姓共より其趣相斷候樣申渡置候事。

一、代官中御米納申付候者、隨分自身罷出納可申候。自身難出子細有之時は、其わけ又書付成一家等に、手代相添指出可申候。代官所遠方に而自身難出所々、納方手代精誠致吟味、當聞等仕、無沙汰之儀無之樣急度可相心得候。猥之儀於有之に者、代官可爲越度事。

右之趣得其意、嚴重可相心得候、以上。

己酉七月廿日　　御算用場

諸郡御扶持人・十村・新田裁許・山廻中

七月廿四日、前田重熙江戸に生る。

〔謙德公年表〕

一、享保十四年己酉年七月廿四日生東武本鄕邸內、幼少稱龜次郎、生母東武芝神明神職鏑木大進政幸女と云々。（或曰政幸は花下有大宗給人也。）享保十五庚戌五月廿六日卒、號心鏡院殿、葬東都駒込日蓮宗長源寺。（或曰政幸女姉妹共に奉仕と云云。妹女は於多見と云、姉女は眞如院也、於貞と云。但眞如院は鏑木氏に非ず、本姓不詳。）寬保三癸亥十二月廿一日拜但馬守、於殿中執謁賜松平氏、（于時前田龜次郎利安十五歲也。）是より持鑓二本と成、登城之刻者持鑓一本也。

〔政隣記〕

花下は江戸府内の義なるへく、有は歟なり

一、七月廿五日月次御獻上有之筈之處、御產穢七日に付、開番御用番御老中ゟ廿四日罷越。尤御出生之儀御屆に而者無之、御獻上物御扣之趣申達。

〔護國公年譜〕

若子樣御七夜御祝、八月朔日有之。御名之儀兼而安藝守樣へ御賴置候由に而、今日櫻田御前樣御名書御持參之由。龜次郎樣と唱旨、御用人中諸役頭へ傳達。

安藝守は淺野吉長、櫻田御前はその夫人

七月廿七日。金澤町奉行等儉約に關し町人に令せしことを上申す。

〔坂井氏藏文書〕

今般儉約等之儀に付、町方ゟ相觸可申趣、御渡之御紙面寫、私共致添書、右之趣町中ゟ急度申渡候樣に町同心中ゟ相渡、夫々相觸申候。猶又左之趣私共より申渡候事。

一、町人共行狀之儀、前々より申渡事に候得共、博奕幷不行跡之品有之樣子に候。沙汰之限成儀に候間、向後猶更相愼可申候。是以後少に而も右之族有之候はゞ、急度御仕置に可被仰付事。

一、惣而商賣物之儀、結構成品一向商賣不仕、上方より取寄申儀無用に候。呉服物等者御定直段も有之候所、近年高直成を商申候。向後者御定直段より高直なるを商申儀、決而仕間敷候。成次第麁相成を取寄商可申事。

一、町人ハ衣服を初、萬端前々より御定有之儀に候處、近年猥に罷成、內外奢ヶ間敷仕形に相聞候。向後急度相愼、前々御定之通相違無之樣に相心得、一二日讀に委細有之儀に候間、每月格之通爲讀聞、急度相守可申候事。

一、町人共綿衣着用可仕候。但紬・紬者前々より御用捨之儀に候間、亭主分之者幷妻子ハ有來候分ハ用可申候。其外手代・下女等に至迄、木綿・布之外堅着用爲仕間敷事。

一、町人共相談事或ハ賴母子會などと申立、寺庵幷町方等から、奢ヶ間敷仕形も有之候。向後左樣之儀一向有之間敷候。家所持不仕もの、借座敷に而寄合不申候ハて不叶節、一家共方抔に而寄合候節も、湯漬之外一向可爲無用事。

一、醫師中之儀者、服之品御定無之事に候間、前々之通相心得可申候。是以後新に拵申物ハ、麁服を用可然候。座頭共も可爲右之通旨申渡候事。

一、儒者・浪人等、町並に家持罷在候ものハ、町人同事に肝煎申渡候事。

一、役者共之儀、藝相勤候節ハ格別之事に候間、有來り候服もちひ可申事。

右今般町方ゟ申渡候趣如此御座候。畢竟先年より被仰渡候御定之通、相違無之樣に相心得、奢ヶ間敷品無之樣に与申渡候。其外段々存寄僉議之趣者、先達而口上に而申上候通に御座候、以上。

享保十四年七月廿七日　　小堀左兵衛

伊藤彦兵衛

本多安房守様

右紙面、御用番左兵衛二之丸ヘ持參、安房守殿ヘ達す。

七月。町人百姓の貸借に關する前令を勵行せしむ。

〔司農典〕

一、町人・百姓によらず、近一門貸物いたし置、其以後貸主手前衰へ、家に離れ申子細御座候はゞ、他人与者違、借物無之候而も身繼可申事に候間、譬御改作之百姓に候とも、返辨可仕儀に奉存候。左樣御座候得者、かじけ申百姓に而も、一門寄合取立可申儀も可有御座候と奉存候御事。(以下各條略)

寛文二年十二月廿四日

（以下は寛文二年に出せり）

右先年年寄衆ヘ相達、御聞置之上申觸置候に付、相守可申之處、近年猥に罷成、心得違罷在候十村・御扶持人等も有之、諸百姓難澁罷成候處、此趣を以嚴重相愼可申候。右先規より相觸置候儀に候故、此度別段に者不申渡候。然る處是等之儀致違背、內證に而金銀米錢等高利に取遣候者相聞候。向後右之族有之候はゞ、本人は不及申、村々肝煎・組合頭、尤支配之十村

に至迄急度曲事に可申付候條、夫々申觸請書付指出可申候、以上。

享保十四年七月

別所忠兵衛
木梨九右衛門
高畠權太夫
大塚彌五太夫
賀古助之進
稻垣傳左衛門
坂井知右衛門
前波和兵衛
山岸七郎兵衛
菊田逸角
粟田源右衛門

諸郡御扶持人・十村・新田裁許・山廻中

八月二日。奥村伊豫守、先に出生したる前田重凞の爲に蟇目の式を行ふ。

〔遠田日記〕

一、二日今般江戸表若子樣御誕生に付、奥村伊豫守蟇目相勤、御矢被差上之候。昨日より今晝迄之内に規式被相勤、今日七時過持參被上之。御居間書院ゟ被召、伊豫守へ有久御刀代金百貫於御前被下、息内匠ゟ平安城小脇差被下之。式部・玄蕃披露退去。松之御間に而御吸物・御酒被下之、御用番大和守被罷在、御吸物御相伴也。御酒被祝候樣に、織人罷出御意之趣申述候。相濟被罷歸、玄蕃・式部ゟも御吸物被下之候。尤御用に而罷出候玄蕃・式部等初、織人・兵庫・拙者布上下着用。今日中飛脚罷出候に付、幸相認、河内山等へ拙者共より指遣す。箱上認等も伊豫殿より拵被上之候。内認仕、其儘出す。

八月なり
伊豫守は有輝
蟇目の式は金澤にて勤めたるなり

八月三日。前田利常の女龜鶴姬の百回忌法會を金澤經王寺に執行す。

〔護國公年譜〕

一、八月三日浩妙院樣百回御忌に付、於經王寺御法事御執行、御名代玉井市正御家老役勤之。

八月十四日。家中の諸士に儉約を勵行し行狀を愼ましむる爲め横目足輕を巡行せしむ。

〔典制彙纂〕

今般御家中儉約、且又行狀愼等之儀被仰出、先達而一統申渡候付、町中ゟ御横目足輕相廻、

家來等猥成品者相こがゐ、様子により主人ゟも付届いたし申筈に候。侍中幷妻子等手前、此度被仰出に背候様成品者、御横目心を付見聞仕儀に候故、爲心得申聞置候條、同役中ゟも可有傳達事。

今般御横目足輕金澤町廻申渡候付覺書

八月十四日

一、侍屋敷長屋幷寺庵等に、出合宿仕、博奕之類幷女色事等猥ヶ間敷儀有之候者、見分仕、其品具に拙者共ゟ迄可申聞候事。

一、御家中之面々妻娘等、華美之衣類着用仕有之、未相止不申躰たらく見請候者、其様子拙者共ゟ迄可申聞候。男女共奉公人に候者、其主人之交名相尋、幷町方・御郡方之者も、男女共不相應成風躰之者見請候者、夫々家名等承之、女に候者其先々ゟ罷越、有之妻子下女に相違無之候哉、承届而可申聞之事。

一、祭・開帳等之時分、町屋幷寺庵方を借、歴々を初輕き者男女共遊興之族有之候哉、心を付相廻、其躰見請候者、其邊に而交名等承合候様に可仕事。

一、御家中侍中婦人寺社方へ遊參、幷神事・開帳等に而群集之場所、又者談義・說法聽聞に事寄せ、都而不愼之様子有之候間、寺庵方も相廻り、ヶ様之躰たらくをも致見聞候様可仕事。

但、寺庵方ゟ參詣人之内にも、僧俗男女打交、食餌等品々取拔ゟ及酒宴、不作法之儀共多有之躰に候間、相廻り候節左樣之族見請候者、江戸町廻之心得を以相考、致見聞可申事。

一、夜中往來仕候者も、右等之品々に准、疑敷存候者は、付したい候而も罷越、承合候樣仕可申事。

一、近年祭・開帳有之時分、出茶屋賣物、前々之趣にちがひ、或者菓子・酒等自由に調候樣に仕候故、おいづから不作法に罷成候間、是以後茶屋賣物等相改、賣主名をも承候樣に可仕事。

一、近年町方商賣物直段、何によらず所々に而高下御座候。町會所に而相改候得者、肝煎共ゟ手入仕、大概平均直段一統之趣に相違候樣取沙汰有之候間、所々に而是等之儀も承合候樣可仕事。

一、御家中一統善惡共何によらず取沙汰在之候はゞ、此以後別而心を付承、其趣拙者共ゟ可申聞事。

右之外にも、惣而今般御書立之品々に相違之族有之候哉、心を付見分いたし、夫々交名をも承合、委細拙者共ゟ可申聞候。但相廻り候人々、其先に而作法宜、がさつ成儀無之樣、急度相愼相廻候心得可致候。見分之品指急申儀は、二之御丸ゟ罷出、當番拙者共ゟ可申聞候。又者拙者共手寄之自宅ゟ罷越候而も可申聞候。不指急品に候者、翌日二御丸ゟ罷出可申聞候事。

右之通可被得其意候、以上。

酉八月　大河原八郎左衞門
　　　　長瀬五郎右衞門
　　　　樋口次郎右衞門

御横目足輕中

八月廿七日。有栖川宮の簾中男子を生むを以て賀使を發せしむ。

簾中は前田綱紀の孫に當る

〔政隣記〕

八月十五日有栖川親王御簾中御平產（二條吉忠公御女長君樣。則榮君樣御子也。）當十一日に有之、御男子御出生之由飛脚到來。右に付翌日新番頭青地藤太夫ゟ、右御使被仰渡、御七夜御左右之上發出候樣被仰渡。

廿七日金澤發足。

八月。家中諸士の婦女子遊興の爲猥に外出するを禁ず。

〔典制彙纂〕

覺

一、御家中侍中之母・妻・娘等、行步之ためにと候て寺社方ゟ每度遊參いたし候。往古者ヶ樣之風俗に而者無之候處、近年猥なる事に罷成り、神事・開帳等之群集之場ゟ者、男子さへ至而

遠慮仕等に候處、婦人之相越候儀は一向在之間敷儀に候。先々に而不慮之儀出來候時者、其首尾により父・夫・子弟、不得止事身上果候基にも可相成儀に候。左樣之所にも不相辨、無益之行步遊參仕候儀抑留不申段者、父・夫等之不覺悟に而、一圓不可然事に候條、急度愼候樣に、家内之者共相しめし可申候事。

附、親族之方江對面之ため相越候儀、且又下屋敷・請地等江相越候儀は尤格別に候。又者山野江茸狩などに、邂逅に相越申間敷儀に而者無之候。乍然食餌等も輕く相認、休息候場所に而も目立候儀無之、行粧等隨分穩便に仕可申候事。

一、女中病氣爲保養行步仕儀も候はゞ、其病婦に限り行步爲仕候儀者格別に候事。

一、談義・說法聽聞之儀者格別之儀にも候得共、是以若き女中などは、強而眞實聽聞之ために而者無之、多分物詣に事寄候而之遊興こ相聞江候間、御步並以上之者妻子等者、老母之外遠慮いたし可然候事。

右風俗不作法に相見え、又者費之筋にも罷成候間、急度相心得候樣、組・支配之人々江被申談可然候。組之内裁許有之人々者、其支配江も申合候樣、是又可被申聞候事。

右之趣可被得其意候、以上。

八　月　　　　　　　　　　　　　　橫山大和守

且又爲好色云々以下は前掲の觸状と別通のものなるべきも今之を得ず

〔遠田日記〕

御家中侍中母・妻・娘等、爲行歩罷出、祭・開帳場等へ罷出候儀、往古に無之處、不可然候旨。且又爲好色、扶持給銀をとらせ預け置候儀、遊女同事之者召置候儀、相愼可申事之由。將又稽古事講釋之場所、輕き師匠を上座に指置、兄弟子とて上座に差置等之儀不可在之作法之旨、紙面兩通に相調、年寄中被申渡候事。

八月。郡奉行等百姓に儉約を命ず。

〔筒井舊記〕

御家中儉約之儀被仰出候に付、御郡方男女衣服其外品々儉約之筋申渡覺。

一、前々より被仰渡置候通、御扶持人・十村・山廻人之妻子共、布・木綿・紬を着用可仕候。右之外宜敷品之物着用仕間敷事。

一、百姓・頭振共之儀、前々より御定之通、布・木綿着用可仕候。右之外宜敷品之物一切仕間敷事。

一、木綿・布ふり切合羽幷唐油合羽等、男女共に着用仕間敷候。御扶持人・十村・山廻之儀者格別之事。

一、婚禮幷養子且又元服等仕候時分、組合中一家之者共ゟ披露之酒肴等取遣候之儀、成程輕

仕、諸事奢たる仕形仕間敷候事。

一、座頭其外之者共、婚禮・法事等之節指遣候鳥目等、輕く遣候樣に可仕事。

一、笠之儀、下直成菅笠或は檜笠・竹之子笠等着用可申候。勿論妻・娘・下女等迄、笠ふて・笠紐に絹之類一切用申間敷事。

一、葬禮拵之儀、布・木綿之外一切用不申、成程輕く可仕事。

一、菓子之類、酒肴抔に而も、惣而榮耀之品買調申間敷事。

一、祭禮・開帳惣而群集之場所へ、遊參之ため男女一人も罷越申間敷候。但祭禮之節、氏子之分參候儀者格別之事。

一、前々より御法度之博奕之儀者不及申、惣而懸之諸勝負一切仕間敷候事。

一、諸勸進百姓・頭振等罷出、家業に不構取持仕儀、一切無用に候事。

一、百姓・頭振等之家へ坊主等呼、法儀等かたらひ大勢集り申旨候。向後右之族無之樣に、急度末々可申渡候。

右今般御家中儉約之儀被仰出候に付申渡候條、ヶ條之趣彌無違背相守候樣、百姓・頭振・嬬等に到迄、急度可申渡候、以上。

十四年酉八月　　村井安左衛門　印

澤田十郎兵衛　印

鳳至・珠洲兩御郡御扶持人・十村中

九月四日。變死せる百姓の跡高は之を藩に沒收すべきことを令す。

〔司農典〕

百姓致變死候跡高之儀、往古より其者悴等不申付儀も候條、享保五年に附札を以申渡候趣有之、指出候得共、今般詮議之趣有之、以後變死者は、先々之通跡高取揚申儀に候。併變死も品に寄可申事に候條、可得其意候、以上。

酉九月四日　　改作奉行

諸郡御扶持人・十村中

閏九月九日。能美郡小松町に火災あり。

〔御年譜〕

一、閏九月九日朝より小松出火、家數百四十餘燒失、晝頃鎮。

〔政隣記〕

閏九月八日夜四時小松八日市町より出火、類燒家百五十軒、内四軒毀家。但從金澤見分等不參候事。

閏九月廿四日。領内に於ける今秋の風損・水損を幕府に上申す。

〔政隣記〕

閏九月廿四日當秋風損・水損三ヶ國に而四十五萬二千石餘、倒木二千本餘、崩家二百軒餘、川除損も多候由、今日公邊に御屆有之。

護國公年譜十月に作る

閏九月廿四日。大槻朝元等に特に百石の加増知を命ず。

〔袖裏雜記〕

閏九月廿四日

一、先日より以織人段々被仰出之趣奉承知。就夫山村善左衞門・大槻傳藏・福嶋兵衞三人者、彌百石充御加增被仰付可然奉存候。平侍之御加增、先は五十石充に御座候得共、併御先代・御當代にも、百石或は七・八十石充被仰付候も有之段申上候處、成程其儀者御部屋住之御時分、松雲院樣御意にも、百五十石より以上之御加增者平侍には有之間鋪事候。百五十石迄は御勝手次第と御心得被成可然由御意に候。旁三人百石充可然候。

〔政隣記〕

廿四日左之通被仰付。

百石御加增都合　　組外に被仰付　大槻傳藏

都合とある次に二百三十石を脱せるなり

閏九月。家中奉公人の給銀標準を示す。

〔筒井舊記〕

御家中奉公人給銀之儀、大抵者古來御定も有之候處、其以來猥に罷成、近年者別而分限不相應之高給銀を望、下々申度儘之樣に罷成候得共、先其分に而嚴重之沙汰にも及不申候、畢竟頃年收納米下直、主人之入用銀格別取劣申上に、下人而已成來之通之給銀に而者有之間敷儀候。第一下々も衣類等を初、華麗之爲躰に罷成候故、おのづから給銀をも貪不申而者難成候、今般御家中儉約之儀も急度被仰出、歴々を初先年之御定より者萬端猶以事輕く相心得申儀、下々給銀萬治四年之御定も有之候得ども、其頃者收納米押ならし大概四十五・六匁之直段に候。當時者格別下直に候故、此度別紙之通給銀相極候條、家來共に嚴重に申渡、若違背之族有之候者、公事場において可遂吟味候間、組・支配之人々に可被申渡候。組之内裁許有之面々、其支配にも申渡候樣に是又可被申聞候事。

同十四年閏九月十八日　　前田大炊

一季居奉公人男女給銀之事。

役小者

一、九十日より七十日迄。上中下見計、此内を以可相立。

但、江戸ゟ相詰候共、先年与違、御扶持方茂割場小者等同事に被下儀に付、不及増銀、江戸ゟ當座歸に候者五匁、京・大阪者三匁之増銀可爲事。

鑓持

一、八十目より七十目迄、上中下右同斷。

但、江戸其外他國詰仕候はゞ十匁、江戸ゟ當座歸りに候はゞ五匁、京・大阪ゟは三匁之増銀たるべき事。附り、他國詰一ヶ年に滿不申候者、半年に五匁計之圖りを以可相渡事。

馬捕

一、八十目より六十目迄。是より以下上中下、幷他國詰増銀右同斷。

一、乘物舁小者之儀、鑓持・馬捕に可准。

草履取

一、七十目より四十五匁迄。

平小者

一、六十五匁より四十五匁迄。

あらしこ

一、四十五匁より三十目迄。

繕は品と訓む

若黨或先供等之者

一、百二十目より百目迄。上中下見計此内を以可相立。

但、江戸其外他國へ年詰仕候者二十目、當座歸并京・大阪ゟ者十匁之增銀に限べき事。附り、他國詰一ヶ年に滿不申候はゞ、半年に十匁計之圖りを以可相渡事。

右若黨躰より級宜敷中小將抔之類

一、百五十目より百三十目迄。

但、他國詰增銀等之儀、前段之趣相應に可相渡事。

一、はした者等之儀給銀は、當時近例出來之通爲べき事。但、是以彼等に者不相應程之給銀は遣申間敷候。

しんめう或物縫等之類

一、七十目より五十目迄。

右者男女一季居奉公人に渡候給銀之儀に候條、當暮者右半銀之圖候を以相渡可申候。

一、當春給銀、又者其以來召置候者之内最早給銀相渡候者は、此度之定より過候共不及指引、今般申渡之半給銀相渡可申事。

一、高知之面々家來之譜代之者、又者何こ歟舊功之筋に依給銀相增遣度存候者は、尤格別に

候事。

一、役方之用事等申付候者抔、强而給分減少之沙汰に者及間敷儀に候得共、是以主人之分限に茂應じ申事に候條、猶更其心得仕、畢竟高祿之家來は召仕不申覺悟尤に候事。

一、惣而此度之定より、相對を以給銀少分に召抱申儀は、尤勝手次第たるべき事。

一、出替之時節過に而、半年又者五・三ヶ月以後召抱候者も、近年者大形年中之給銀を取申候。一向ヶ樣之筋に而者無之譯に候間、向後者半給銀、或日割等を以召抱可申事。

一、暇を出候家來請合狀、請人判形消候とも證文者相返不申、先主人之方に指置可申候。不埒之儀致出來候節、吟味之手懸も無之、毎度支申事有之候條、向後可爲右之通事。

以上

閏九月

十月六日。舟山喜三兵衛先に江戶に於いて頭役成瀨十左衛門を害せんとしたるを以て能登島に在鄕を命ぜらる。

〔護國公年譜〕

一、四月十一日柳原御前樣附御臺所頭舟山喜三兵衛、子細有之、縮乘物に而足輕指添、今日御國へ歸。御關所通手形は、如例御留守居衆等より取遣之。右御吟味方御用、御先手物頭高

柳原御前は前田綱紀の養女寃姬

高畠善太夫・御大小將横目青木彦太夫相勤候に付、此度右之者相返候一卷之御用も、右兩人より致支配候由。

〔政隣記〕

四月廿四日、柳原御前樣附物頭並成瀨十左衛門貞政支配、御臺所頭八十石外二十石役料舟山喜三兵衛、御用筋に而異論之品有之、舟山之御貸小屋とも仕廻、成瀨方に罷越、打果可申覺悟之躰に付、成瀨取捌に縮いたし候上、御横目足輕指添昨日到着、直に宅に召連、一類共に渡之、今日支配頭空間新右衛門高英（柳原附物頭並成瀨十左衛門同役に而在金澤也。）宅に而、一類共に御預之段、一類出合助兵衛に則新右衛門申渡之。

附、成瀨右之節取捌之首尾記錄無之、成瀨取噯不首尾こ迄記有之。不詳。

右於江戸御吟味方御用、御先手高畠善太夫・御大小將横目青木彦太夫相勤候に付、此度右舟山御國に相返候一卷之御用も、善太夫等より支配す。

一、舟山喜三兵衛於公事場、段々御吟味有之上、十月六日御知行被召放、五人扶持被下、能州嶋之内に在鄉被仰付候旨、於公事場申渡有之。同日於越後屋敷、成瀨十左衛門儀、役儀被召放、組外に被加之、急度遠慮可仕旨被仰出候由、安房守殿・内記殿御列座被仰渡。御横目兩人罷出、組外御番頭河野半丞御呼出、右之趣被仰渡、且十左衛門肩衣於越後屋敷こにせ候

事。

附、十左衞門遠慮は、享保十六年十一月十八日御免、組外之御番相勤之。

十一月十三日。郡奉行石黑彥太夫役儀取放の上遠慮を命ぜらる。

〔政隣記〕

七月廿七日新川御郡奉行御馬廻組石黑彥太夫、於公事場御吟味之筋有之、於宅一類に御預。同年十一月十三日、御郡方御用も被仰付候處、不念至極に被思召候。依之役儀御取放遠慮被仰付旨、於公事場被仰渡。

附、翌年七月二日遠慮御免許。

十一月二十日。越中にある鳥見を每月一次金澤に來らしめ、農民及び領境の事情を報告せしむ。

〔文化雜記〕

一、越中御鳥見等之儀に付、玄蕃殿御渡候覺書之寫。

越中に罷在候鳥見共、一ヶ月一度程宛御當地に罷出、鳥之樣子等申上候樣申渡候。右之者共罷出候者、各潜地御郡方之樣子、十村等支配之趣、且又富山御領御境目之儀、猥成儀茂無之

哉否之趣被相尋、尤言上之儀、又者御算用場奉行ゟ被申達儀、且品に寄、拙者共被申聞儀も可有之候。地廻之鳥見共ゟも折節可被承合候事。

附、越中ゟ御鷹に指添罷越候御歩横目共、有御境目之所心付致、其より十村・鳥見等ゟ茂、油斷不仕様可申渡旨可被申付候事。

右之紙面享保十四年十一月廿日玄蕃殿御渡し。

十一月廿四日。轉切支丹類族矢田萬六郎自殺す。

〔御家人舊條記〕

轉切支丹樋口忠兵衛悴、本人同前樋口與五左衛門同娘さく悴、矢田萬六郎儀、當十一月廿四日四十四歳にて、萬六郎於宅致自害候に付、堀平馬・河地勘五右衛門被見屆、自害紛無之故、當寺旦那に付死骸御渡被成、則於寺內土葬に取置申所、相違無御座候、以上。

淨土宗金澤泉野寺町

大圓寺　印判

享保十四年十一月廿五日

富永數馬殿

十一月廿九日。德川吉宗奉書を前田吉德に遣して寒中の安を問ふ。

〔德川實紀〕

十一月廿九日、日門・增上寺に御使もて檜重つかはされ、寒中をとはせ給ふ。松平加賀守吉德には奉書もてとはせらる。

十一月晦日。雲雀を賣買又は捕獲し、及び放鷹禁制の地域に於て唐網を用ひ漁撈することを禁ず。

〔政隣記〕

十一月晦日雲雀商賣御停止。天之網に而捕候儀同斷。御留場之內、堀々・俣川・不湖唐網打候事御停止觸有。

是月は大盡なり

十二月十三日。多賀信濃、前田綱紀の世以來三十年に亙りて蟄居せしを赦免せらる。

〔政隣記〕

十二月十三日多賀信濃直方、從御先代三十ヶ年以來蟄居之處、今日於前田大炊殿宅、奧村內記殿御列座、御赦免之段被仰渡、十五日御目見被仰付。

十二月廿五日。先に老臣中の諸大夫を補缺すべき許可を得たるを以て長九郎左衞門を甲斐守と稱せしむ。

出雲守は富山侯前田利隆

御居間書院は金澤城のなり

〔政隣記〕

十二月廿五日、今日江戸より左之通申來。

前日依御奉書、當十六日御名代出雲守様御登城之處、御家中之内諸大夫御願之通被仰出、右に付御居間書院に御出、長九郎左衛門儀伊豫守手引に而被召出、前田故近江守代叙爵被仰渡、稱甲斐守。廿八日歳暮登城之面々に御弘、爲御祝儀年寄中不殘勤之。右御禮江戸に之御使、御大小將番頭佐々木兵庫、翌正月四日發足。

十二月廿七日。米價下直なるを以て諸士に會所銀辨濟の期限を延ぶるを許す。

〔政隣記〕

十二月廿七日今年米至而下直に付、會所銀返上之儀、今年計之事に各別之旨に而、返上延引勝手次第之段、御月番大炊殿被仰渡。

但當形米廿八匁、高岡米廿三匁餘、岩瀨廿五匁餘。十一月廿日より今月廿日迄平均御拂米直段如斯也。

十二月廿七日。馬廻組堀彌三左衛門、人持組三田村監物と爭ひて之を傷

つく。

公家は前田吉徳

〔浚新秘策〕

一、享保十四年極月廿七日三田村監物宅に（監物は預玄院夫人の弟、公家の外戚にて其禄四千石也。）御馬廻堀彌三左衛門罷越、舊怨有之旨申立、打果可申旨紙面にも相調罷越候。監物三ヶ所手疵を蒙り候。怨之覺無之に付相手に不罷成候旨にて、彌三左衛門は家老・用人等數輩手込に仕、大小をも被支取、専亂心之爲体に仕置候而、隣家には先前田中務へ案内に及、被罷越候。其外案内にて罷越候衆中には、舊緣に付本多安房守殿・同主水・寺西市正、其外預玄院樣附足輕頭小幡平三、幷關屋佐左衛門・戸田與一郎等罷越候。組頭村井主膳殿は病中に付、正月之御用番奥村内記殿へ案内有之候而被罷越候。彌三左衛門頭は黒坂吉左衛門に付、是へ案内は關屋佐左衛門より夜四時頃申達候。吉左衛門相頭戸田靱負へは、黒坂より申達罷越候。御横目は小寺市郎右衛門・津田五左衛門罷出申候。世上風說には喧嘩之沙汰に不及、彌三左衛門亂心之体に申慣し、眞僞難決存候に付、頭吉左衛門へ承合候所、見聞之趣幷存寄之品共に申聞、證據明白成事共にて、亂心之体にて聊無之趣、則左に記之候（彌三左衛門は監物妻兄にて、其腹に嫡子も有之、新助と申候所、去年六歳にて病死、女子も有之候。彌三左衛門知行三百石、父は平丞と申候。）

一、吉左衛門へ案内は、關屋佐左衛門紙面にて、御組之內急切之品有之候、得御意可申筋候間、早々三田村監物宅へ迄御出可被成旨、夜四時頃申來候に付、尤其儘拵候內に、組方御用

相勤候もの逸足を出し監物宅へ罷越、佐左衛門を式臺へ呼出し、如何樣之急用に候哉有増承度候。樣子次第相頭戸田靱負申談、兩人にて承可申候、又は一人にても、兎角樣子承度旨申遣候。其内彼宅門前へ迄罷越候所、内より右使者罷出、監物手疵蒙被申候趣を申候に付、即刻靱負へ案内仕候。靱負被罷出候而、可申談彌三左衛門へ逢申候。其時迄彌三左衛門をは取手に仕置、六・七人も打寄、足に兩人手に兩人、腹之上に乘かゝり居申者も有之、尾籠千萬之体に付、先いづれも家來中支不可申候旨申聞、不殘立退け申候。彌三左衛門大小は勿論無之、鼻紙袋・印籠等之品までも一色も其邊には相見え不申。暫しづめ置、口上承届申候處、口狀にて申述候趣紙面に相調、書は箱へ入之、上をふくさに包、先刻可打果と打掛候時迄懷中に有之、大勢とりこに仕候後如何罷成候哉不存候。家來中へ相尋候樣申候。監物家來共は左樣之儀も無之旨申候。扨口上之趣は、監物へ對し遺恨一朝一夕之儀にて無御座候。但只今存立候は、去年嫡子新助病死之後は、内所へ對し疎略之仕形多有之候。妻に男子出生之後は、別而樣子も違不宜候。是一つ。今年何月何日三歳之女子宮參之節、姪之儀に候へば拙宅にも可被立寄之所、何之筋目も無之關屋佐左衛門宅へ立寄申候。是二つ。近年勝手困窮に及難澁仕候節、無心之儀申入候得共、一向頓着無之候。是三つ。且又年來人を慢り、過言緩怠之儀多有之候。是四つ。此等を以堪忍難仕候に付、今日は決して打果申所存に付、右之趣紙面に調致懷中候。

監物承り、一々其申開き有之。其節家老・御用人多詰掛有之、中々存分可成體に無之に付、左樣に申開きも有之上は、堪忍仕可罷歸之旨申述致退出候。使者之間迄監物も送被申候。玄關に迄罷出、用人に申聞、內所へ罷越妹に逢申度用事有之旨申、立歸內所へ參り申体に仕成、居間へかけ入候所、監物は火燵にあたり臥有之候。刀を拔掛候所、火燵之臺へ切付、肩先へ僅當申候。其內にはや後よりいだき申候。二の刀にて切かけ候へば、監物之指三少々切れ、切先股に當り、此疵少々重き方に候。家來共大勢にて組留、大小も被支取、其座を退け申候。監物は脇指拔合候へども、はやく家來共引退申候。其上一圓覺も無之儀、切殺候ては相手にも仕樣に相見え可申と存、拔ながら切掛不申候と被申候旨、又は右之料簡故態と脇刺をも不拔合旨被申候とも、兩說に承申候。內記殿御申渡候は、委細之首尾言上之上御下知も可有之候。其間は彌三左衛門儀自宅に引取、兄弟堀萬兵衛（御小將土肥庄左衛門組。）・堀嘉忠次（組外大橋又兵衛組。）指添可罷在候旨に付、其段吉左衛門・靱負申渡候。大小を相尋候所、何方へ參候哉相知不申候。時刻言外移り候に付、先丸腰にて式臺へ迄誘引仕罷在、佐左衛門を以大小被相渡候樣に申達候所、良久敷候て佐左衛門指出相渡候に付、則萬兵衛・嘉忠次へ相渡、彌三左衛門爲指可申とも、又は駕籠之內入置可申とも、其段料簡次第之儀と申含候。彌三左衛門せがれ藤馬十七・八歲に罷成旨、此門前へ迄詰掛有之候。內記殿指圖候旨にて相返し申候。彌三左衛門供之若黨は、家來を召連罷

越有之候。各退出ハ夜明頃に罷成候。御次ニ一番に及御案内候者、小幡平三申上候。泊番長御小將番頭關屋長太夫被遣、監物手疵之樣子無御心元思召候條、見分仕可罷越旨被仰付候。長太夫罷越候處、內記殿いまた御在合に候。長太夫監物に逢、手疵之樣子致見分候處に、彌三左衞門とハ樣子物語可有之と仕候に付、長太夫斷申入候ハ、手疵樣子無心元思召被遣候御使之儀に御座候、首尾之儀ハ夫々御役人中承可申儀に御座候。私可承儀とハ不存旨申述罷歸候。

〔政隣記〕

十二月廿七日夜、人持組三田村監物方ニ、小頭御馬廻組定檢地奉行堀彌三左衞門儀、監物宅に而及口論、監物少々手ニ負候得共、双方共存命。右に付監物宅ニ本多安房守・奧村內記、御橫目小寺市郎右衞門・津田五左衞門罷越、且御表小將・御番頭關屋長太夫泊番に候處、監物方ニ以前心易參候由に而、見分に被遣之候。彌三左衞門頭黑坂吉左衞門・戶田權負も罷越、彌三左衞門儀宅ニ相返、右兩頭・御橫目同夜罷出言上仕候。彌三左衞門にハ、堀嘉忠次・堀萬兵衞御番を引指添、久々在之。右監物、彌三左衞門繼者之處、利慾之事に付及口論候由也。案來大勢出合彌三

左衞門を致手詰

前記二十七日夜一件に付、彌三左衞門者弟萬兵衞に御預置、監物者指扣被仰付。

十二月廿八日。空中に紅氣を現ず。

〔可觀小說〕

一、己酉十二月廿八日夜、西北より東北まで横に紅氣現す。其色常の火色には非ず、焦色にして、初更には薄く、半夜には濃く、五更に及で漸く滅す。翌夜西北の方天鳴二・三度ありつて、雷聲の微なるが如し。金澤よりは能州に當るが故に、大火ありと想ふ。然共東北の闊甚長く、且紅色の中に星耀けるが故に、火災に非ざることを知る。正月三日の曉天雷一聲す。是も雷に非ず、光物と云星變なるべし。四日に能州の百姓を算用場へ召て問之。答曰、口郡より望見に奥郡の火事と見たり。因て奥郡の人に問へば、答て曰、猶海を隔て北に當て見たりと云。氷見海邊の老人云、海火事と云て古來も有之たる事と云。猶他國よりの見分重而可記。

有澤總藏勘如左。

是歳立春十二月十八日にして、二十八日は立春第三候、魚上氷の時也。發生之氣餘寒に追て欝積する所、天上之燥氣吸之者也。凡陰陽之偏激するものは嚴にして、水火其象をなす時は雷電となる。是雷は土氣を挾む故に象を成也。陰陽相勉する、其氣盛大にして不成象時は、夜間に紅白の光を現す。是不帶土氣之故也。翌夜天鳴する者は陰陽之氣不和之所致也。雷電に比すれば其災重く、彗孛に比すれば其災輕し。古書に或天開門、或天裂と稱する是也。

裝束は朝服

正月朔日、前田宗辰初めて年頭の禮に與る。

〔政隣記〕

元日年頭御規式御例之通、諸大夫衆裝束に而御禮。勝丸樣御年六、始而年頭御禮於御居間書院御上、御太刀目錄披露、津田玄蕃勤之。御馬代は銀に付披露無之。御兩方樣共熨斗目・御半袴被爲召。諸事御指引奥村伊豫守相勤、御太刀引御長小將。且伊豫守初伺公之面々一統、此時半袴に而勤之。

正月十二日。本鄕邸類燒の難に罹る。

〔政隣記〕

十二月未下刻根津裏門通七軒町明石屋半右衞門家より出火。北風、半より東風强、御上邸不殘御類燒等之儀、十八日夜從江戸之早飛脚來着、申來候趣左之通。但在江戸諸頭等一統、十四日迄火事裝束に而相詰、十五日より常日之服に相改候趣等追々申來。

根津七軒町三町計兩頰、湯嶋天神切通、新御徒町二町四方計、金助町一町計、春木町不殘二町半四方計、本鄕一町目迄不殘兩頰共、夫より丸山菊坂之臺四町四方計、同本妙寺坂下より

備後守は大聖寺侯前田利章・出雲守は富山侯前田利隆

龜次郎は前田重凞

菊坂田町迄三町四方計。

八十軒侍屋敷、十七軒寺。

備後守樣御上邸下小屋共不殘御燒失、表御門幷靈臺院樣御門者殘る。御同人樣御中邸之內、同御長屋半分程燒失。出雲守樣御上邸之內、下御長屋者不殘燒失。

此方樣御上邸御殿者不殘御燒失。南御門續き幷會所外御長屋、御居宅續八筋御長屋之內二筋、御步小屋續幷谷小屋西小屋、六町目御物見、南會所之向御長屋一筋、南御通町南御門之方十四・五軒計相殘。御土藏者、中之口向之新御土藏一つ燒。其外は殘る。暮六時過鎭火。龜次郞殿幷御廣式女中末々迄一所に、御中邸江御供に而立退、御用人澤田源太夫御供仕。御馬共も御中邸江牽退、火鎭後御上邸江牽戾し、御居宅御長屋に繫之。

一、南御門西之方續御長屋を假御式臺に仕立、同夜より御客御使者取次候に付、組頭・物頭・御番頭・取次役・御給事役茂、御殿之通其夜より相詰。御門之內に御紋之幕を打、御長柄十筋餝之。十四日切に右御餝相止。

御用所者會所之內を圍相勤、十六日より御居宅に而勤候處、從御國御居宅江龜次郞殿御入被成候樣被仰出候に付、廿五日より又御用所會所之內に相成、龜次郞殿二月廿一日より御居宅江御移。

十九日今度御類燒に付御尋之宿次御奉書、十五日相渡今日到着。右御殿之御使御小將頭青木新兵衛ゟ被仰渡、拜領物被仰渡、廿三日金澤發。

一、御類燒に付御作事御用、御先手御用人松原善右衛門・御近習物頭並丹羽澤右衛門ゟ被仰渡、二月二日金澤發。同作事奉行中村治兵衛・宮崎長太夫、右爲御用同日發足。

一、今日御用番御宅ゟ、就御類燒爲伺御機嫌、頭以上罷出。

廿二日此度御上邸就御類燒、今年御上納米一萬石、現米に而御用捨之儀、當十四日御用番御老中御宅ゟ、聞番被召呼被仰渡候由、今日申來。

二月八御上邸南に頃日御厩出來、今日より御馬繋。

〔聞　書〕

一、同年正月十二日晝八時過、於江戸下谷七軒町より出火、及大火本郷御上屋敷御殿向不殘御類燒。其外八筋御族宅幷前通二筋殘り、其外不殘。幷東二筋・足輕小屋・割場・作事會所・東御門續南御小屋不殘、但南御門御長屋は瓦屋根に付殘る、其外は不殘。但し西御徒町より山之方小屋々々は都而相殘る。今年御在國之内なり。

〔又新齋日錄〕

一、享保十五年正月十八日夜五半時過江戸より早飛脚到來、今月十二日御上屋敷御類燒之旨

中來。

〔政隣記〕

一、今年正月十二日御上邸御殿御類焼に付、御造營方爲御入用、三ヶ國町方・御郡方より、御借銀都合六百貫目被仰付。御作事坪數前記之通五千坪計に而、惣御入用金高二萬四千五百兩計与云々。

一、右就御類燒、今石動等支配中黑六左衞門心得を以、支配所ゟ銀子之儀申遣。則正月廿日に五十貫目相調上之候處、其趣達御聽、常々心懸宜數支配仕候故、早速に銀子相調候段可申聞由被仰出。

正月十五日。德川吉宗奉書を以て本鄕邸の罹災に關し慰問せしむ。

〔德川實紀〕

正月十五日、月次例の如し。（中略）松平加賀守吉德か邸宅燒亡せしにより奉書もて御尋あり。

正月廿四日。十村手代の郡中に出張するもの丶宿賃等支給方を改めんと請ふ。

〔司農典〕

一、十村等手代御用に付御郡へ罷出候節、宿賃等御用拂致候也。其始者享保十五年也。

私共手代、御郡之内御用に罷出候先々止宿仕刻、一飯五分宛相渡、切手を取主人へ相渡可申旨、則於相談所爲致誓詞、其通相守來申候。手代共之儀は、方々遠所懸廻り申に付、一日三飯一匁五分相拂申に付、私共御定より過分に罷成、手代に而者不相應之儀に而迷惑仕候間、是以後御定宿賃二分相拂、外飯米代之儀其所米相場を以相拂、切手を取主人へ相渡候樣に仕度奉存候。此外買物有之候はゞ代銀相拂、右切手に爲書入申樣に仕度奉存候に付伺之申候、以上。

享保十五年和月廿四日　　戸出村　又右衛門　　和泉村　彦三郎

田中村　三右衛門等十四人

御改作御奉行所

表書之通承屆候條、諸郡へも申談、手代誓詞前書相改置可申者也。

改作奉行　印

二月十五日。長甲斐守先に叙爵せられしことを前田吉德に謝す。

〔政隣記〕

二月十五日長甲斐守官位之御禮、於御居間書院被爲請、熨斗目被爲召、御太刀馬代・縮緬二卷

獻上、奏者幷披露之御表小將長袴着用。於御奥書院御料理被下、相伴定番頭。於御居間書院御盃・御刀被下之。廿五日御馬廻頭村上傳右衞門を以、白銀三十枚・御羽織二被下之。爲御禮登城之處、御手自八丈嶋被下之、且御馬水靑毛被下。翌廿六日發足江戸に被參、三月八日江戸着。駕籠乘用、鑓も先に爲持候儀御屆先達而濟。同廿六日江戸發、四月八日金澤歸着之處、御使御使番津田平次右衞門被下、追付爲御禮登城。

二月十六日。本鄕邸の興造に着手す。

〔政隣記〕

二月十六日江戸御上邸御普請始。

大御門・左右御長屋・內外番所・猿樂御門外柵共、富田屋六兵衞。

御式臺・御屋敷且御臺所邊、惣而御表向裏御式臺迄、和泉屋五郎兵衞。

御居間邊より御次廻御膳所等、其外御次邊部屋々々、蔦之間邊より中の口迄、和泉屋五郎兵衞。

御居間書院三の間・御年寄衆席・御用所等、江戸町棟梁權十郎・勘左衞門。

御廣式、富田屋六兵衞。

東御門續御長屋、北八筋御長屋、割場南侍小屋、和泉屋五郎兵衞。

北御厩、相屋長兵衛。

南火之見櫓幷火消役所、江戸町棟梁傳次郎・仁左衛門。

御作事道具置所、江戸町棟梁權十郎・勘兵衛。

南御厩、江戸町棟梁嘉右衛門・源八。

內御長屋幷御廣式御門・中之口御門・裏御式臺前御門・養鷹所等、富田屋六兵衛。

右人々ゟ請負入札に而極被仰付、惣坪數五千坪計、御入用金二萬四千九百兩計与云々。右御普請奉行前記正月十九日に有之四人、幷外作事奉行より池田十郎左衛門・藤田三太夫、在江戸之內作事奉行國澤喜內・白江七兵衛、此兩人は御平生方御用も兼勤之、詰合之御大小將横目河地勘五右衛門、御普請半より御横目小寺市郎右衛門出府に而、勘五右衛門与代々相廻、御歩横目・御横目・足輕數人懸り相勤之。

〔寬永數馬覺書〕

一、享保十五年正月十二日本鄉御屋敷御類燒。同年二月末より、御式臺・御使者之間・御廣間・上之御間より、今い御勝手座敷・竹之御間邊迄先出來。其秋御出府上使、其以後三條樣御招請など迄、右之御間に而相濟申候。

二月廿一日。儉約及び行狀に關する去秋の令を恪守すべきを命ず。

〔典制彙纂〕

御家中之面々儉約幷行狀等之儀に付被仰出候趣、去秋書立を以申渡候。然處不愼成面々も有之沙汰に候。嚴重可相心得儀に候條、左樣之族は不屆之至に候。急度相守候樣頭・支配人より每度可被申聞候。且又組等之內裁許――右之趣――以上。

二月廿一日　　本多安房守　印

二月廿一日。大聖寺侯前田利章參覲の途次金澤に着す。

〔護國公年譜〕

一、二月廿一日備後守樣御參勤に付、今朝大正寺御發駕、同夜五時前金澤淺野屋次郞兵衞方へ御着、爲御見廻御近習頭御使被遣候。爲御禮同夜九半時前、生駒修理爲御使者登城。

一、同二十二日備後守樣九時前御登城、御前・勝丸樣於御居間書院御對顏。御裝束布上下、御服紗小袖。御のし三方出、追付御料理。二汁六菜 御相伴本多安房守、御引菓勝丸樣御持參。御前にも御酒之上、御肴御持參被遊候。御盃事之內諸橋權進・地謠四五人罷出、小謠被仰付候。御給事御表小將。御退出以後、御旅宿迄御使者羽田傳左衞門御近習頭を以、御樽三十筋・雁皃一箱被進候。右御禮使生駒修理登城。

二月。藩の御鷹餌鳥指等十村屋敷內に入りて捕鳥することを禁ず。

〔上田源助舊記〕

御鷹餌鳥指爲御用、十村中居屋敷之内軒打可申付旨、御鷹匠小頭より申來候に付、十村中之儀者御様子茂有之、右居屋敷𛀁入込候而ハ指支申品有之候に付、御年寄中𛀁相達候所、御聞届被成、以來御餌指共軒打に罷越候而茂、十村中居屋敷之内𛀁入申間敷旨被仰渡候間、此段申達候、以上。

享保十五年二月　　闘屋佐左衞門

林　源太左衞門

能美・石川・河北郡十村中

三月六日。前田利常生母壽福院の百回忌法會を金澤經王寺に執行す。

〔護國公年譜〕

一、三月六日壽福院様百回御忌御法事、於經王寺御執行。無御滯御代番相勤候由。本多安房守御法事奉行言上。

三月七日。前田宗辰初めて放鷹を蓮池庭に行ふ。

〔政隣記〕

三月七日勝丸様蓮池之上に而、始而御拳を以、セツカ四、アトリ一御羽合被遊。十六日始而

十一屋邊に爲御放鷹四時過御出、七半時前御歸也。御歸先に從中將樣御菓子・交肴、御使御奥小將御番頭中村次右衛門を以被進之。御御柄雁有之。十八日御吸物に被仰付、御近習頭等・御次廻平士頂戴被仰付。十九日にも十一屋御放鷹、御拳に而鸞御羽合。廿一日御吸物に被仰付、年寄中等・若年寄中迄、於松之御間に頂戴被仰付候。先達而御意之趣、御近習頭中村次右衛門罷出申述、御酒之内御使同頭野村七兵衛勤之。於舟之間前田將監・富田織人・庄田兵庫初、御近習頭幷御用人・御臺所奉行頂戴之。横山監物在合に付頂戴。將又御吸物、奥・表共平士以上當番切一統頂戴被仰付、何も布上下着用。御七等相勤候御醫師幷御針醫、都合四人頂戴被仰付候。年寄中等給仕新番。舟之間かよひ坊主。

三月廿四日。前田宗辰放鷹を行ひ、歸路老臣等の邸に臨む。

三月廿二日勝丸樣上野邊に爲御鷹野四時過御出、横山大和守下屋敷に被爲入、夫より奥村伊豫守下屋敷にも御立寄、七時前御歸。但大和守於下邸御菓子上之、御供中に吸物・酒被出之。

上野は金澤郊外

三月晦日。前田吉德本鄕邸の建築を必要の部分のみに止むべきことを命ず。

是月は大盡なり

〔政隣記〕

一、今月廿四日大御目付衆より御觸來。去月十二日燒失之所々、本郷より湯島切通ニ懸、小屋懸ハ格別、普請ハ見合候樣、酒井讃岐守殿被仰渡候旨御書付到來に付、御普請も先相止候。是者一統瓦葺に仕候樣にと可被仰渡哉と之由に付、三月二日御用番御老中ニ聞番罷越、門・長屋者瓦に申付越候間建可申哉と相伺候處、御勝手次第之御指圖有之に付取懸る。其以後御本家ら瓦可被仰付旨御指圖有之、其通に被仰付。依之御普請、最初者御假屋之趣に候處、今般不殘瓦葺に被仰付事に候得者、御假屋之名目にては如何敷候。先指當入用之所迄、先輕く普請被申付由に可申旨、三月晦日被仰出之趣伊豫守殿より江戸ニ申來。

四月十三日。淺野川大橋の工事成る。

〔護國公年譜〕

一、四月十三日金澤淺野川大橋修覆出來に付、今日より往來有之。

四月十五日。幕府明年以後諸侯の上米を免除し、參覲は舊の如く一年詰とすべきを命ず。

〔政隣記〕

四月廿日江戸より今日早飛脚到來。當十三日鈴木飛驒守殿より御書付到來に付、同十五日爲

御名代前田伊豆守殿御登城之處、御上米來年より御免被遊候。依之御參勤御交替も、來年より前々之通与被仰出候旨、御老中御列座、御用番水野和泉守殿被仰渡候由。則御渡之別紙到來、左之通。

但、萬石以下之面々殿中ゐ召之、右之趣被仰渡候旨也。

覺

一、當三月御暇被下候面々、當秋九月中參勤之時節可被相伺候。

一、當三月參勤之面々、當九月可被下御暇候間、參勤時節之事者來年九月中可被相伺候。

一、當九月參勤之輩、來年四月・六月可被下御暇候。

一、來春參勤之輩者、當九月中參勤可被相伺候。

以上

戌四月

四月十七日。本鄕邸の南火之見番所を開く。

〔政隣記〕

四月廿九日。御上邸南火之見番所、幷火消御人數詰所出來。今月十七日晩方より御櫓開、火消御小將も南邊御貸小屋ゐ移候由、今日金澤ゐ申來。但當春御類燒之後は、西之御櫓迄に付、

火消役御小將も西小屋邊に罷在故如本文。
附、南御小屋五筋、是以後御大將方定小屋に相成、他組入交不申等に相極。

四月十八日。本郷邸斧初の儀を行ふ。

〔政隣記〕
四月十八日江戶御上邸斧初に付、頭分假御臺所に而赤飯・御吸物・御酒・御肴蒸鯣被下之。かよひ坊主。

五月八日。今明日金澤天德院に前田綱紀の七回忌法會を行ふ。

〔政隣記〕
五月八日・九日松雲院樣七回御忌、兩日於天德院御法事。御奉行奥村内記。兩日共御參詣。其外諸事如御三回忌之。

御參詣は前田吉德

五月十日。前田宗辰初めて天德院に詣づ。

〔政隣記〕
五月十日勝丸樣初天德院に御參詣。御往來共岩倉寺に御立寄。御供御步六人・新番二人、御先角御大小將代共三人、御駕籠際御抱守二人・御側小將二人、御跡御廣式御横目・本御横目、

御鎗二本。

五月十八日。前田綱紀の法會終れるを以て菩提寺の住僧を招き能を觀覽せしむ。

〔御年表〕

五月十八日天德院及寶圓寺・瑞龍寺・國泰寺・如來寺・玉泉寺・妙成寺・桃雲寺・芳春院・勝興寺御饗應御能あり。當九日御法事相濟に依て也。

五月廿三日。前田吉德使者を金澤より發して水戶侯の家督相續を賀せしむ。

〔政隣記〕

五月十二日水戶樣御跡御相續、今日鶴千代樣御三歲に被仰出、六月朔日御禮就被仰上候、惣出仕止。

右爲御祝儀江戶に之御使、御馬廻頭中村典膳に五月廿日被仰渡。廿三日金澤發、六月三日江戶着。四日水戶樣に御使勤、五日御返答有之、御料理被下。八日發、十九日金澤に歸。

五月廿八日。本鄕邸の上棟式を行ふ。

〔政隣記〕

五月廿八日御上邸御上棟御祝有之、會所續假御臺所に而、頭分强飯被下之。

六月十三日。徳川吉宗奉書を前田吉徳に與へて暑中の安を問ふ。

〔徳川實紀〕

六月十三日、日門・増上寺に檜重おくらせ給ひ、松平加賀守吉徳にはゝ奉書もて暑氣を御存問あり。

七月六日。今江・木場潟に於ける能美郡今江村等の漁場を侵害することを禁ず。

〔埴生氏覺書〕

能美郡今江潟・木場潟、梯川筋は佐々木伊藤之渡り限り、下者安宅水戸口に而川筋不殘、幷水戸先海之内八拾間三方はゝ、今江村・向本折村・下牧村獵場に被仰付置、先規より運上銀指上、耕作爲稼致獵業候に付、三ヶ村於獵場他所之者魚殺生不仕御格に在之候處、近年殺生猥に罷成、獵業指排難儀候趣、今江村・向本折村・下牧村肝煎・組合頭斷書付に、其方共致奥書指出候に付、右獵場において諸魚捕不申様、御家中一統被仰渡候様仕度旨、御月番奥村内記殿迄申

一巻はいちまきと訓む
一件といふに同じ

上候處、右一卷被達御聽、願之通被仰出候。依之右之趣御家中一統被仰渡候由、內記殿被仰渡候條、得其意、此段向本折村・今江村・下牧村之者共江申渡、如先規猶又川番人等相立置、水戸口に而網打不申、惣而右三ヶ村獵場於所々、他所之者魚殺生不仕候樣、急度締り可申付候。尤向後他所之者に被賴、獵師共相對を以、川より獵場江爲入込魚捕不申樣、是又嚴重締り可申仕置候、以上。

庚戌七月六日

關屋佐左衛門

林源太左衛門

若杉村　八郎兵衛

今江村　源　助

犬丸村　太右衛門

追而右獵場之內、獵師共相對を以他所之者江川を下し、魚爲捕候而は、御締方紛敷、後々獵場猥に罷成、宜有間敷与存候條、向後右下し不仕候樣、是又獵師ごもへ急度可申渡置候。

七月十八日。水戸藩の答禮使金澤城に登りて前田吉德に謁す。

〔政隣記〕

七月十八日從水戸鶴千代樣、今度御家督爲御祝儀、御使者就被進候爲御返禮、御使御供番頭

山森彌三左衛門昨夕到着、今晝登城。途中同道聞番後藤瀨兵衛・御横目津田五左衛門。實檢間・矢天井之間暨御式臺都而目通り之御番人、且御馳走方等懸り之人々御歩並以上、布上下着用。御式臺江御馳走方主付御馬廻頭和田采女・御小將頭青木新兵衛、且御奏者番葛卷藏人、併町奉行伊藤彦兵衛出向。御大廣間二之間江藏人誘引、御茶たばこ盆出之、給事御大小將。夫より年寄中・御家老中罷出挨拶。御口上御奏者番本多主水罷出承之、御太刀目錄受取り、其外御進物者先達而參、御小書院右之方御下段に御大小將並置之。長松院樣より之御進物者直に御次江上之、御進物左之通。

長松院樣より二種・千疋・御目六。

御小書院江御使者誘引。御奏者番成瀨主稅。中將樣御着座之上、御馬代金臺居、御大小將持出、御太刀奏者主水持出、御着座より一尺程置御馬代与並へ置、中座。其處江御月番安房守誘引に而、御使者彌三左衛門出、鶴千代樣御使者与主水唱之。于時御側江召御意有之、退出。御太刀主水引之、御馬代御大小將引之。御大廣間下段江安房守誘引に而、御使者着座、御料理二汁六菜出之、相伴定番頭村中務。御料理之内御使、津田玄蕃・年寄中・御家老中・御奏者・主付組頭、段々挨拶相濟。重而於御小書院御直答。又御大廣間江復座御茶出、退出。御式臺上御使者之間之末板之間迄、年寄中・御家老中被送。御奏者・主付組頭・町奉行幷相伴之村中

務は、鏡板迄詮之。

右御使者往來之節、虎之間に御大小將番頭一人・御橫目一人・御使番二人、瀧之間御奏者、芙蓉之間江戶御留守居并御用人、鷲之御杉戶外定番頭・御馬廻頭・御小將頭・新番頭・御步頭相詰。御門警固者、河北大組頭、石川御持筒頭、橋爪御持弓頭。御步番頭御持弓頭羽田傳左衞門勤之。御使者退出後、旅宿に御使御使番を以、白銀二十枚・縮緬二卷御使者山森彌三左衞門に被下之。足輕小者にも鳥目等夫々被下之。

但、旅宿は下堤町紙屋九郎右衞門。同所相詰候人々者、御馳走方御大小將兩人・町奉行・聞番・御橫目・御醫師・御賄方與力三人・かよひ御步三人・御料理人二人・足輕坊主也。昨日旅宿に爲御使、御使番進士齋宮被遣之。

七月十九日。犀川・淺野川出水す。

〔政隣記〕

七月十九日・廿日才川・淺野川高水。廿五日風雨强、淺野川小橋中程ほ、橋上二尺五寸程上に水上る。才川は少々出水。

八月十日。幕府先に罪人を領外に追放することを禁じたるを以てその代用刑を定む。

幕府の罪人追放を禁じたるは享保七年二月に在り

〔袖裏見聞錄〕

御領國追放之刑之代左之通。

二ヶ年禁牢之上出牢。但二十四ヶ月。

右申渡候節、左之通可申聞置事。

不屆至極之者、如此被仰付上は、重而惡事仕候はゞ、其罪之輕重に無御構、急度可被仰付事。

右刑之者赦之節は左之通。

二ヶ年禁牢たるべき者に候得共、爲赦御宥免。

右御領國追放之刑之者は、輕罪之事に付、赦被仰付候節は、爲赦御宥免被成候。左候へば御當地に而御宥免之筋有之儀に候間、右之通に被仰付にても可有御座候哉。

江戶・京・大坂御構追放之刑之代、左之通。

三ヶ年禁牢之上出牢。但三十六ヶ月。

右申渡候節、左之通可申聞置事。

重罪之者、如此被仰付候上は、重而惡事仕候はゞ、其罪之輕重に無御構、急度可被仰付事。

右之刑之者赦之節は左之通。

三ヶ年可爲禁牢者に候へども、爲赦二ヶ年禁牢之上出牢。二十四ヶ月。

右申渡候節前段之趣可申聞置事。

右江戸・京・大坂御構追放之刑之者は、赦被仰付候節も、爲赦御領國追放之刑に先被仰付候。然共其内に品も輕き者は、段を越御宥免之事も御座候。尤稀成儀には御座候得共、決而御宥免之道無之与申に而も無御座候間、右之通被仰付にても可有御座候哉。

一、只今迄斬罪之者赦之節は、命御助、三ヶ所御構追放之刑に就被仰付候。今般茂右之趣に而命御助、前段に記候三ヶ所御構追放之代り之刑に可被仰付儀に御座候。乍然右罪之者は至而重罪之者故、前々大赦被仰付候節に而も、死刑一等御宥免、三ヶ所御構追放被仰付、とかく御當地には不被差置候處、只今本刑三ヶ所御構追放代り之刑之通に被仰付候而者、年限立候へば御當地に勝手次第に徘徊仕儀に御座候故、前々之趣よりゆるみ申候。其上元死刑に被仰付程之いたづら者共之儀に御座候得者、後々又惡事も可仕儀に候。旁以此分は三ヶ年禁牢之上出牢、五ヶ山等之内に被遣置候樣にも僉議仕候得共、外之流刑者などゝは違ひ、縮り等も不申付候而者成不申候。左候へば牢屋に罷在候同事之儀故、右之所之百姓共下人に仕、尤扶持は御上より被下趣被仰付可然哉とも遂僉議候付、猶更御算用場奉行にも示談仕候處、此

儀者百姓共難儀仕事も可有御座候故、差つかへ申旨申聞候。左候へば外に可被仰付様無御座候間、死刑与申所を爲赦御宥免之趣に而、先牢屋に被指置にて可有御座候哉と奉存候。

一、先牢屋に被指置候者之内にも、たとへば苗字も有之者死刑に被仰付候時は、其せがれ罪は無之候而も、父同事死刑に被仰付候。然共父儀落着不相濟内、於牢屋病死仕候時は、せがれ死刑御宥免、三ヶ所御構追放之刑に被仰付候者抔御座候。ヶ樣之類之者、其外死刑に當り候罪と申迄に而、後々指而害にも成申間鋪族之者は、尤本刑三ヶ所御構追放代りと之刑之通に可被仰付儀と奉存候。

先牢屋に被差置候者は、左之通可申渡候。

大罪至極之者に付、尤斬罪に可仰付儀に候へ共、赦被仰付御時節故、命は御助、先牢屋に被差置。

卷目之上に享保十五庚戌年とあり。

〔袖裏見聞錄〕

一、八月十日御用日、大和守御前ゟ罷出候處、追放之刑之儀に付相伺候紙面等、先刻被渡下候通にて、公事場奉行紙面之趣に候へば、只今迄之通に被成置候事も如何敷被思召候。書立之通とくと宜敷共不被思召候得共、先日伊豫守ゟ被仰聞候通、外に可被遊樣も無御座候間、

先書立之通と思召候。御參勤之上、猶更腸々之御樣子も御聞合、追而何こそ被仰付儀も可有之哉と被思召候旨御意に付、委曲奉承知候、此儀者去年以來再往遂僉議候得共、書立之通より外に可被仰付樣無御座候。尤後々障り申事も無御座候間、右之通被仰付候段、公事場奉行へ申渡にて可有御座段申上候處、其通可申渡旨御意之事。

八月十六日。本鄕邸竣工し、前田重熙等之に移る。

〔政隣記〕

八月十六日御上邸御普請出來、御廣式へ龜次郎殿御移徙也。御表向も諸役所之分は今日引移。今日之御祝、斧初・御上棟御規式之通、夫々於御臺所頂戴之。江戶御留守居品川主殿初頭分は、於御料理間頂戴、かよひ坊主。平士には頭分御賄之席、かよひ同心。御步小頭等は平士御賄之席に而同心かよひ。一統白粥・御吸物・御酒・御取肴被下之。

八月廿四日。前田吉德金澤を發して參覲の途に就く。

〔政隣記〕

八月廿四日五時金澤御發駕、勝丸樣御玄關迄御送、御作法前々之通。九月十日晝過江戶御着。但六日御着府之筈に候處、信州犀川・千曲川滿水御逗留、其上少々御風氣被成御座、十日御着に相成。

九月朔日。本郷邸の大門を開き、來客を大式臺より通行せしむ。

〔政隣記〕

九月朔日卯刻より御上邸大御門被開、御出之御方等御大式臺に而取次、裏御式臺御步番所勤番等も有之。御勝手座敷上之間ゟ者、跡々御小書院等・御大書院溜ゟ御通之御方々樣御通ゟ、御廣間上之間ゟ者、跡々御大書院ゟ御通り之方御通り、御廣間上之分者同二之間、御勝手座敷二之間も、跡々御通之御出入衆者御廣間溜御通、如此段々繰々に成。御給事人勤格者、御書院有之時分之趣を以、右席に相勤之。

九月十日。前田吉德江戸に着す。

〔政隣記〕

十日御着に相成。此節以之外風邪流行、御供人多分不殘風邪相煩。尤輕重有之。十一日上使御老中酒井讃岐守。

九月十五日。前田吉德登營して參覲の禮を行ふ。

〔德川實紀〕

九月十五日、臨時の朝會あり。松平加賀守吉德はじめ參覲廿七人。風の心地により表に出給

はず。大納言殿朝會にのぞみ給ふ。

九月十五日御禮。御供御家老前田勘解由・玉井市正御目見初而御例之通。

〔政隣記〕

九月廿九日。前田綱紀の女節姫逝去す。

〔政隣記〕

九月廿九日櫻田御前樣御所勞之處、今曉より御差重に付、朝六半時御供呼、御早馬に而被爲入。遠田勘右衞門伺之上常服之儘御先乘仕。同日御逝去、御法號源光殿。愛宕下青松寺に而十月五日御葬送。御中陰御法事於青松寺、六日より二夜三日御執行。八日御四十九日、御百ケ日御代香御家老役。御七日々々御代香組頭勤之。

櫻田御前とは安藝御前ともいふ淺野安藝守吉長の妻

〔續漸得雜記〕

一、松平安藝守殿吉長の御内室は、加賀宰相綱紀卿の御息女也。生得武勇の心ある女性にて、乘馬・打物に達し、殊に長刀鍛鍊の聞えあり。被召仕女まで皆々勇氣たくましく、誠に一騎當千の女ともいふべし。御弟中將吉治公、器量健に、顴骨高く色黑く、是も馬上の達者也。武勇第一の大名にぞありし。されば仁慈あつて姉弟睦じく、毎日の見廻誠に孝弟也と思はぬ人もなかりし。此御内室、安藝の御前と申ては、日本に隱れなき勇氣第一の女性也。吉長朝臣

吉治は前田吉德の初名

と御中よく、御子兩かたおはしける。嫡女は松平肥後守の嫡男正甫の室と成給ふ。次男若松とて、いづれも器量よく成長し給ふ。然るに吉長は、いか成所爲にや新吉原へ通ひ給ふ由。晝夜酒色におぼれ給ふ故、しかじか異見し給ひ、しばしば止め給へども止む事を得ず、終に遊女花紫・歌野といふ兩人を請出し玉ひける。又いか成ものゝ進めにや有けん、野郎陰間に心を動し、是又同じく身を忘れ給ふ。又々御内室吉長朝臣に向ひ、か樣に申上る事全く嫉妬と思召玉はんなれども、弓矢神かけ奉りさらさら左樣に御座なく、世上の聞え、其上彼場所は賤しき者も入込申由。若不法のもの御座候て、御名を出し申事にやと、樣々異見し玉ひけるに、吉長朝臣更に用ひ玉はず。剩へ芝神明前いかばまを兩人まで請出し、夫のみならず歸國の砌、國許へ遊女・かげまを召つれ玉はんとの事也。御内室又吉長朝臣へ對面して、尤大名の遊興の餘り、遊び者を請出し玉ふ事は有まじき事ならねど、國元まで御供とは餘り成事、第一上樣へ聞え參らせて宜からぬ御事也と、樣々異見し給ひけるに、吉長大きに立腹ありて、國元へ立玉ふ時暇乞もなく發足し給ひければ、御内室は物見より恨めしく見給へば、遊女・陰間は美々敷、歷々の諸士より我儘にきんざめきて立にけり。御内室は局に向ひ、是程成事を諫る事、家中に一人もあらざるはいか成事ぞや。又みづからを踏付にし給ふ殿の仕方と宣へば、局を始女中共、皆々御尤の御道理やと申上るに、其後御内室は一間に立入玉ひ、御弟加賀中將吉

治卿へ細々被書置、をしむべし五十一歳を一期として腹一文字にかき切伏し給ふ。有合女中を初て、驚きうろたへまはる折からに、局に外山・澤井、中老豐田はだきかゝえ、醫師に氣付と申ける。御内室開給ひ、そち達は日頃の程もなき有樣や。切腹をする程にて生べき程に切べきか。兼て覺悟の事ぞかし、必さわぐ事なかれ。いかに豐田介錯と有しに、外山・澤井・豐田三人、外山・澤井・豐田追腹切らんといひければ、御内室是を聞玉ひ、追腹は天下一統の法度也、其上また岩松が行衞見屆くれよかしと、返すぐも宣ひける。三人の女詞を揃へて、たとへ御勘氣を蒙とも、御供まうさで有べきか、是非々々御免下さるべしと、思ひこみて申ける故、御内室息の下より、日頃みづからが目がね違ひなし。嬉しくも今の志かな。然ば外山・澤井は供いたせ、豐田は殘らず介錯して、三十五日過ての後は勝手次第と宣へば、三人の女難有次第とて、同じく外山・澤井は切腹すれば、豐田介錯申、甲斐々々敷執行ふ。哀と云ふもおろかなり。此由を急に告げゝれば、加賀中將吉治卿も早馬にて只一人駈付給ひ、是は々々と宣ひ、急ぎ吉長朝臣呼戻せ、事の理非を糺さんと大きにいきどほり玉へば、家中は上を下へと返し、急ぎ道中へ注進す。其夜は戸塚の泊にて、此驛に吉長朝臣は宿する所へ、早打の注進到來して、吉長朝臣大きに驚き給ひ、先非を悔給へども返らず。かくて豐田は三十五日過て、菩提所において見事に自害して果たりける。誠に一人の心より不慮の大變起りて、い

たまらしき事とはなれり。男女ともに愼べきは色欲ぞかし。殊に人の上に立つものは、萬に心懸て愼べき事ぞ。

九月。藩の鷹匠等郡方に於いて放縱の行爲あるを戒む。

〔國事雜抄〕

御鷹匠・御鷹役御歩・同足輕・御餌指・御獵犬牽寄小者・御鳥見共に至迄、御郡方においておごりたる仕形、幷不締之儀無之樣に、急度夫々頭・支配等より爲申渡候。若猥成族有之候はゞ、其人々役名等承合、各より拙者共まで被申達可然候條、夫々被申渡、右之品承立候樣に可被相心得事。

附、馳走ヶ間敷儀堅無之樣、夫々所々御奉行幷御郡奉行より可被申談候。御郡方に而馳走ヶ間敷儀有之候はゞ、拙者共迄可申聞旨、御鷹方之者共にも申渡置候。

右之趣御年寄衆被仰渡候に付、寫相越候條、被得其意、各支配切急度可被申渡候。當場においても途僉議、大概別紙書立相渡候條、末々嚴重に相心得、若おごりたる仕形之者於有之者、被承屆、各より當場可被及斷候、以上。

庚戌九月　　　　御算用場　印

金森助右衞門殿

十月二日。曩に幕府の上使本鄕邸に臨みし際、朝倉武太夫・豐島權左衞門不作法なりしを以て譴責せらる。

上使の事は九月十一日に在り

〔政隣記〕

十月二日御參勤上使之節、御馬廻組表御納戸奉行朝倉武太夫・豐島權左衞門、御香爐に御香次不申、段々不調法之仕方有之候。武太夫儀、御前上使御先立被遊、御間之内御通り之節相扣候樣御意之處、承付不申、御前こすり遠罷通、其節之樣子御前にも御難儀被遊候。不調法至極に被思召候。急度被仰付樣も有之候得共、御新宅初而之上使之儀に付、其段は御用捨被遊候。御目通は相扣、役儀は無構可相勤候。權左衞門も同事之趣こ被仰出。權左衞門は致交代罷歸候處、御暇之御目見は不被仰付。

十月三日。星、月輪中を貫く。

〔護國公年表〕

一、今茲十月三日より五日迄之月に星貫候。一夕は月輪之內に兩星入候。諸人見者多有之候。

十月五日。前田綱紀の女節姬逝去の報金澤に至る。

〔護國公年譜〕

一、安藝御前樣御卒去之儀、十月五日夜金澤へ告來、六日年寄中不時に越後屋敷へ御寄合、右に付爲伺御機嫌、頭分以上七日・八日之内御用番宅へ可相勤候。不押立普請は三日、鳴物は五日より七日之日數十一日迄、諸殺生は十九日迄遠慮可仕旨、御家中へ觸出る。

十一月十二日。前田宗辰金澤に於いて麻疹に罹る。

〔政隣記〕

十一月十八日、勝丸樣當十二日より御麻疹之由申來。御近習頭野村七兵衞御使被仰渡、今日江戸發、白銀十枚・御羽織一、御内々金十兩被下之。廿七日金澤着。

十一月十五日。本鄕邸建築に關して盡力したる諸吏に賞賜す。

〔護國公年譜〕

一、十一月十五日御居間書院三之間御着座。今般當御屋敷御普請方御用相勤松原善右衞門御先手物頭・丹羽澤右衞門物頭並・小寺市郎右衞門本御横目御目見、御意有之。右被召出候前、善右衞門・澤右衞門、於御家老中席白銀十枚并御羽織一充、御廣蓋に而被下候。市郎右衞門は染物五端右同事被下候。御大小將御横目河地勘右衞門も、御普請中骨折候由、染物五端追而被下候。其外御歩横目以下、夫々被下物有之由。

十一月十六日。徳川吉宗放鷹によりて獲たる鶴を前田吉德に贈る。

〔政隣記〕

十一月十六日御鷹之鶴、上使御使番高木酒之丞殿を以御拜領。翌年二月廿一日御披、御客有之。

十一月十八日。耕作損耗等の見分は御扶持人十村・平十村・新田裁許相共に之を行ふべきことを命ず。

〔司農典〕

御郡中耕作損毛并檢地等相願候刻、內見分仕候はゞ、御扶持人并十村・新田裁許申談、罷出遂見分可申候。御扶持人迄罷出候御郡も有之由に付、改而申渡候條、向後一統右之通相心得可申候也。

戌十一月十八日　　改作奉行

諸郡御扶持人・十村・新田裁許中

十一月十九日。前田宗辰の痲疹癒ゆ。

〔政隣記〕

十一月十九日勝丸樣御順快、御酒湯被爲召候に付、爲御祝儀廿一日・廿二日之內、御月番并伊豫守宅に頭以上參出。

十一月廿八日。前田重熈江戸に於いて痲疹に罹る。

〔政隣記〕

十一月廿八日より(重)次郎殿御痲疹、十二月八日御酒湯、爲御祝儀干鯛一箱・御樽代五百疋、御使丹羽澤右衛門御近習頭也。を以被進之。

十二月二日。徳川吉宗使者を前田吉徳に遣して姉節姫の死を弔せしむ。

〔徳川實紀〕

十月二日、松平安藝守吉長が室うせしに、吉長封地にあるにより、宿老い書翰もて御弔慰ありし。其子岩松に、奏者番松平備中守正貞してとはせらる。松平加賀守吉徳には姉なるをもて、奏者番松平玄蕃頭忠曉して御弔慰あり。

十二月五日。老臣奥村伊豫守痲疹に罹り金澤に卒す。

〔政隣記〕

十二月十二日奥村伊豫守有輝痲疹に而當五日卒去之旨告來。十四日迄御邸中鳴物遠慮。右に付御使御大小將村田三郎左衛門被下、廿七日金澤參着、晦日金澤發足。

十二月十五日。大槻朝元知行を加增せらる。

〔護國公年譜〕

一、十二月十五日御加增百五十石丹羽澤右衞門、百五十石坂井甚右衞門、百石大槻傳藏、百石山村善右衞門被下候。

大村傳藏名は長好、御先弓頭

享保十六年

正月十三日。中御門天皇の痲疹治癒し給ひしを以て使を遣して天機を奉伺せしむ。

〔政隣記〕

一、禁裏御痲疹御酒湯御祝儀之御使御先手大村傳藏、正月十三日金澤出足、二月十五日歸着。

正月十六日。十村等疱瘡・痲疹の妙藥として牛糞を用ふべきことを告ぐ。

〔元祿享保間留記〕

牛糞、疱瘡・痲疹可用。

右何毛之牛に而も、糞を黑燒にし、粉にして用ふべし。兼而拵置には、芥を食せて其糞をこり、干粉にして用ゆるなり。白牛・黑き牛・あめ牛は猶よし。

一、疱瘡・痲疹出かぬるに用ひ、おもき病躰には度々用ゆべし。惣じて疱瘡・痲疹に而なやむ

今は今日なり

に用てよし。

一、疱瘡・麻疹之後、腹中下り、又ハ熱さめ兼而氣色おもく、痰咳止かぬる樣子ニ用てよし。

一、疱瘡・麻疹之餘毒、又ハかさ被りたるにハ、黒燒にして付ればよし。

右用ひ樣者、五・六分程宛さゆにかき立用ゆ。或ハ口にさわりのみにくき時分、布切れに包振出して用ゆべし。おもき病には、濁たる酒にて用てよし。

疱瘡・麻疹に用る妙藥、公方樣より一統被爲仰出候に付、御年寄樣方より御紙面御渡に付寫取、末々迄可申聞旨、今御場に而御改作所より被仰渡候に付、相達之申候間御承知被成、落着より御返可被成候、以上。

正月十六日　田井村　二郎吉
　　　　　　村井村　與三右衞門

諸郡御扶持人・十村・新田裁許・山廻衆中

正月廿六日。前田重凞髮置の儀を行ふ。

〔政隣記〕

正月廿二日龜次郎殿今晝初而御獨立、二三御足御運之由言上。廿六日御髮置、御白髮鷹栖左門差上候に付御時服二、妻に白銀五枚被下之。龜次郎殿に御時服二重・干鯛一箱、御使御近

習頭坂井甚右衛門を以被進之。從龜次郎殿も干鯛一箱・御樽代三百疋、御抱守明石源兵衛を以被上之。

〔遠田日記〕

一、廿六日天氣好。今日龜次郎樣御髮置、御白髮鷹栖左門上之。晝頃御廣式に被爲入、富田織人・拙者・左門誘引、織人御取合等申上る。御白髮御廣蓋に入、勘右衛門持出、左門御白髮奉爲召退出。追付又罷出、御時服被下之。御次に而左門妻へ御目錄銀五枚被下。御廣式惣樣熨斗目着用。

二月十日。今江潟御臺所島の葭を苅り運上を納めんことを請ふ。

〔今江組主細掌記〕

私共主附今江潟廻り新開所御臺所嶋与申候者、惣廻り水付之所に、運上之葭出來仕候。其餘り草・茅原等之所々、田地開立申候。夫に付運上之葭造用に仕候故、殊に請負人御座候而者指支申趣、去々年新開方御しらべ之時分御聞屆被下、重而年季明申節者、御詮議之上運上葭、私共より指上候樣可被仰付旨被仰渡、則御付札に茂御書記被下候。右年季今年切相濟申候間、今年より運上葭私共に可被下候。此所濱下故、近年砂吹込、葭出來之場所茂相減申候得共、私共より指上申儀に御座候間、去年迄之通九百十八貫上納可仕候。願之通被仰付可被下候、

以上。

享保十六年二月十日　　若杉村　八郎兵衛

今江村　源　助

御改作御奉行所

右付札

本文運上葭九百十八貫、今年より其方共請負相願候に付、令詮議候所、新開出來之たゝくにも罷成趣に相聞え候に付、願之通申付候條、猶更無油斷開所情に入可申者也。

辛亥二月　　改作奉行

覺

一、九百十八貫　　葭上納高

但、長さ穗先懸て八尺以上之葭、根元より二尺上三尺繩を以〆候而指上申筈。

右臺所嶋上納葭、今年より私共指上申度趣奉願候處、御付札を以被仰渡、新開たゝくに茂罷成、難有被存候。然上者前々御定之通、右書上申員數、毎年十月よりすぐり立、翌年三月迄之內御用御手支なき樣上納可仕候。且又年により葭出劣、右之尺に合不申候はゞ、百貫に付十貫宛相增、穗先懸て七尺以上之葭上納可仕候。爲其御付札書付寫繼立、御請上之申候、以上。

享保十六年二月

若杉村　八郎兵衞
今江村　源　　助

御改作御奉行所

三月朔日。金澤小立野に火災あり。

〔政隣記〕

三月朔日金澤小立野大火事、巳の刻一本松かけ下た前田大炊家來宅より出火。天德院下馬左右、如來寺幷番所、經王寺門番所・鐘堂、波着寺御預之八幡宮共、寺院十一ヶ所、山伏等二十一軒、土藏廿一六軒、頭以上九軒、平士八十一軒、與力十四軒、御歩二百三十六軒、足輕・坊主・小者、外陪臣・町家等都合千參百十一軒餘。土藏前記之通。百々女鬼橋燒失申。中刻鎭火。

一、右頭分以上ニ有之內、人持組永原式部・永原大學、頭分者永原勘左衞門・永原治左衞門・永原權左衞門・松尾縫殿也。右火事に而死人男二人・女二人。

一、同月廿九日、佐藤久右衞門今度類燒に付假小屋建有之處、今日出火燒失。四月廿二日與力上條彌次右衞門假小屋よりも出火燒失。

一、五月朔日右類燒之與力士に七石宛、坊主・小頭等に五石宛、足輕に三石宛、小者に一石宛依願御貸米被仰付、町方之內にも御貸米被仰付。且類燒人役・出銀御延上納。永原式部家造出

役出銀は役銀と出銀

來迄、火消役御免許之事。

〔御年表〕

一、三月朔日金澤小立野一本松が辻下より出火。

一、天德院下馬左右腰懸。　一、如來寺辻番所。

一、經王寺門番所・鐘堂。　一、波着寺御預之八幡宮共。

一、寺十一、內三ヶ寺禪、二ヶ寺眞言、六ヶ寺一向。

棟岳寺　眞行寺　慶恩寺　波着寺

岩倉寺　等願寺　永順寺　仰西寺

寶成坊　長周寺　獻珠寺

山伏二十軒

一、門前家二百六十七軒、內百三十七軒支配違。

一、地子町家數六百四十軒、內二百九十二軒支配違。

一、土藏五つ。　一、ごゝめき橋一つ。

一、町番小屋十。　一、頭分六軒。

一、九軒平士。　一、與力八十一軒。

一、御歩並十四軒。　　一、坊主八軒。
一、足輕二百十六軒。　　一、小者十二軒。
一、又家中二十軒。
〆千三百十一軒燒。町番所一ヶ所、廿一土藏、四人死人男二人・女二人。
一、當朔日類燒之與力士へ七石充、外松木廿三本。御歩並ゟ五石宛、外於御林山。松木廿本坊主小頭等ゟ五石宛、足輕ゟ三石宛、小者ゟ一石充、願之通御貸米被仰付。町奉行支配ゟも御貸渡被仰付。
〔聞　書〕
一、享保十六年辛亥三月朔日朝四時過、小立野一本松に而前田大炊家來足輕平田十兵衞宅より出火。折節風强、段々燒募り小立野へ出、七・八町四方燒失、家數千三百七十三軒、同日七半時鎭る。天德院惣門迄、如來寺表門迄、此外寺御坊略之。松尾縫殿・永原左京・與力町不殘、永原大學・永原權左衞門此外侍家略之。山崎庄兵衞は不思議に殘る。割場支配、足輕小頭共人數九十四人、同小者・小頭共九十六人、都合百九十人。
三月。米價大に下落す。
〔聞　書〕
一、同年春三月下行米御召米直段左に記。

廿二匁二分六厘五毛　小松藏

廿一匁七分五厘　寺井藏

廿三匁　金澤堂形

但右動は右十九匁と云。

右にて如此也。三月九日より同十一日迄之直段大下りく。

右之通に付而、知行被下人々は勿論、下行取不興なり。

三月。家中諸士に命じて儉約を勵行せしむ。

〔典制彙纂〕

今般從公儀、別紙寫之通萬石以下御旗本江儉約之儀被仰渡候。就夫御家中之面々儉約之儀者、去々年被仰出之趣委細書立を以申渡置候。公儀表さへ右之趣候得者、御家中之人々猶更先達而申渡候通嚴重相守可申候。衣服之儀は、歷々之面々たりとも島類又は綿布勝手次第着用可仕候。輕きものどもは、佳節朔望に而茂、島類・綿布勝手次第着用尤候。向後江戸表に而も御國之通相心得、麁服を用可申候。惣而之儀、歷々之人々急度相愼候者、末々者おのづから相綺可申候條、頭・支配人得其意、夫々指引可仕旨被仰出候事。

亥　三月

右前田勘解由・玉井市正より到來之紙面寫指越被申候條、被得其意、組・支配可被申渡候事。

公儀より出申御書付には、三ヶ年可相守旨在之候得共、御家中之儀者、其所に無差別申渡候様にと被仰出候旨、右兩人より申來候。

一、於江戸被仰出候通、去々年委細以書立申渡候處、次第忽せに罷成候條、急度可被申渡事。

右之趣被得其意、組・支配之人々に可申渡候。且復組等之内裁許有之面々にも、是又可被申聞候、以上。

四月六日　　本多安房守　印

四月朔日。幕府諸侯に命じ江戸・大阪に於いて買米を實行せしむ。

〔政隣記〕

四月朔日松平左近將監殿より間番被召呼、左之御書立御渡。

米穀下直に付、公儀に而買上米多被仰付候。廿萬石以上之面々も、於江戸・大阪買米被申付候様可有用意候。時節之事者追而可相達候。買米致方之儀者、大岡越前守・駒木根肥後守・稻生下野守内に可被承合候。

四月

〔政隣記〕

近年米至而卑し、國主以下諸士及難儀、御旗本方困窮也。是者江戸參勤、享保七年より半年詰に相成、東國ゟ廻米少く、自分諸國に米多ゆゑ共云へり。依之軟、去年被仰出御大名方、跡々之通一ヶ年詰、御上米にも不及段被仰出候得共、今年春も米下直に付、三月末に江戸町々米賣買之者共藏に封を付点檢被仰付、四月初米以之外高貴に相成。

四月十八日。前田重熈江戸駒込の富士社に參詣す。

〔政隣記〕

四月十八日、龜次郎殿茶屋町富士ゟ御宮參、四時過御出、直に御中邸ゟ被爲入、八半時頃御歸。於御中邸從預玄院樣、御供中ゟ御雜煮・御酒、其上御料理被下、御祝儀物も被下之。騎馬御供御近習頭中村治右衛門、御用人湯原甚右衛門、御宮御待請御近習頭野村七兵衛。右に付龜次郎殿ゟ御時服二重・干鯛一箱、御近習頭坂井甚右衛門御使に而被進之。右御祝赤飯等、年寄中新番通ひ、御近習頭等坊主かよひ、御次向平士も頂戴被仰付。

茶屋町は江戸駒込

五月廿六日。前田吉德の側室某歿す。

〔政隣記〕

五月廿六日御産婦之方御臨月之處、今日御流産之上死去。龜次郎殿御母公に而、御産婦之方と稱し申候。依之御前三日御遠慮、御登城者五日御扣之筈。龜次郎殿御母儀方御屆有之候。

夫に付人々心得も可有之儀、急度觸申譯に而者無之由、前田勘解由殿御申候由、頭々ゟ御横目より申來。六月二日駒込於長光寺葬之。朔日・二日於同寺、從龜次郎殿中陰御茶湯有之。心鏡院殿与被號。右兩日幷四十九日・百ヶ日、御近習頭幷奥御横目一人宛代々相詰。三日より謠抃諷申心得之由、勘解由殿御横目迄御申聞之由頭々ゟ申來。

〔遠田日記〕

一、廿六日龜次郎樣御袋之方懷孕、來月臨月之處、先日も腹痛在之候而被催樣に在之處、追付宜、又夜前より痛氣之樣に服痛在之、晝頃より彌催之躰之由。八時少過御生產之所、御胎死与申に而は無之候へ共、いまだ御形躰も全く無御座候故、早御死去被遊候。御產婦崩血之症、無程死去在之候。

一、右御流產御穢五日に而も、其上御產婦死去、御子樣御出生之御產婦に付、三日御遠慮之趣に付、其段御用番ゟ明日御屆在之筈也。

一、廿七日御產婦宗旨親元に被居候時分淨土宗に在之候處、近年日蓮宗に改宗在之、いまだ寺も不被相極候。依而最初之寺、親元鏑木內膳方へ、河內山半左衞門等より紙面を以此段申達、寺へ屆有之、構無之哉之旨申遣候處、寺より返書構無之旨申來候。夫故長元寺へ相移可申旨に達御聽に候事。

一、廿八日御産婦之方今夕葬送、寺長元寺、暮六時被相移。尤御代香と申にては無之候へ共、到而御内々に而河内由平左衛門御香持參燒香す。自分之燒香候様に相勤候様に申談す。

五月廿七日、本多安房守の用人大津重郎左衛門、足輕木村久平の爲に害せらる。

〔浚新秘策〕

一、辛亥五月廿七日晝前、安房守殿用人大津重郎左衛門、（本役徒頭並帶刀用人二百五十石。）上屋敷用人之詰所當番に付一人相詰、諸場より之書付等見屆罷在候處に、茶堂附相勤候足輕木村久平与申者、刀を密に携へ罷越、入口之戸を閉候て、入口に立置候屏風之陰にて刀を拔ならひ寄、常々之儀覺候哉与聲をかけ、重郎左衛門右之手を切候。脈所半分計切候。重郎左衛門脇指半程拔かけ候所に、二の刀にて首を打落し、戸に向ひ段々存寄を高聲に申候。右用人詰所奥へ近く候故、近邊に人無之候。近習横目役平野幸左衛門与申者承付罷越候所、戸閉有之。引あけ見候へば、右之通戸に向ひ存寄申述候に付、如何之儀仕候哉与相尋候處、拙子儀亂心にては無之候。御爲に仕事に候間、踈忽不仕様に申候。先座を引立、外へ召連罷越候所、御酒一つ可被下旨呼はり候。人を害し御酒給可申とは如何之儀申哉与叱候所に、御爲に不可然ものと存切殺し、御家中一統に可喜候。然れば御酒可被下事与申候由。其所へ家老以下役人共立合、段々遂吟味、

拙子は青地藤太夫

口狀書爲致候。書置等ハ無之候。扨口狀書之趣ハ、私儀大津重郎左衞門ヘ、代々意趣遺恨ハ無御座候。第一御爲又ハ御家中之爲与存打果申候。其子細者、去暮御勝手御不如意之旨にて、中小將以下末々ヘ給銀不相渡候に付、飢に臨申者も有之、私も已に今朝一飯も不被下候。ケ樣之事皆重郎左衞門一人之所爲与存候。御家老其外役人中も有之候所に、重郎左衞門一人迄ケ樣之事存寄、御前ヘも直に申上候事与奉存候。依之如此仕候旨に候。其外横目共ヘ申聞候而書附置候趣にて、大樣此趣に候。本多主水・同伊織、且又溝口太左衞門及拙子も其當座に罷越候處、安房守殿右口狀書幷横目中書附、いづれも一覽仕候樣に被申聞候。其上にて被仰聞候ハヽ、足輕式殊役所ヘ忍入、ねらひ切に仕候事不屆至極に候故、卽時に殺害も可申付儀に候へ共、此者老母有之、妻子も有之者に候所、ケ樣之大儀を存立、しかも拙子爲与存仕候旨申立候へば、とくと詮議も極め、吟味之上に如何樣共落着可申付儀与存候故、先其頭佐藤甚太夫ヘ預け置可申与存候。牢舍も可申付者に候得共、假初ながら忠節之樣に申立候者には、實否不相極内ハ牢舍も如何敷候。旁如此可申付哉与存候。亂心同事仕形も有之候得ども、實ハ亂心に而も無之候。扨重郎左衞門儀は、各御存知之趣、其節示談にも及申候。終に無之儀ながら不及是非申付候。其外儉約等之儀、不殘家老共・用人・算用奉行等へ申渡、一々詮議之上に申渡候。第一拙子家督之砌より、詰役所等役人共申渡置候者、近習心安召使候者共にても、

都て押立候用事を口上にて申渡候事は有之間敷候。すきに自筆を以可申渡候間、其心得可仕旨申聞、今以其格違不申。ケ様之仕合故、重郎左衞門一人之料簡を以取計申儀は罷成不申候。扱又内々を以重郎左衞門を迄信用仕諸用申付儀、且又傍輩中いきゝへなど申儀は一向無之もの、其段は誓言を以主水殿へ申上候。却而此者給銀延引仕候儀を事外苦に仕、借用之道も可有之候、何とぞ才覺も相調候樣に仕度候旨は兩度申聞候。如此には御座候得共、雙方共に吟味仕、決定之上に落着之儀御示談可及旨被仰聞候。御年寄衆へは、廿七日晩景太左衞門を以有增被仰達候。翌日より段々久平手前被相尋、日附・大目附幷其頭、終には家老ども直に承屆候處、申所何之證跡も無之、只不料簡にて一圖に重郎左衞門一人にて仕候儀といみ存寄候。一味同心之者有之候にても無之、被賴候て存立候儀にても無之候。若勝手困窮無爲形存立候哉与、老母・妻・子等へも相尋候所、不勝手にて少々借銀は候得共、今日難過仕形にては無之、家財等相應よりも宜敷所持仕、衣類等は舅方へ預け置候。廿七日食も不仕罷出候と申儀は僞と相聞え候。依之家老以下重立候役人共存寄は、久平幷重郎左衞門手前之儀、人々存寄人別に書付を取立、摑子共へも不殘爲御見被成候。早速殺害も可有之儀に候所、五月廿六日於江戶、中將樣御召使之女中小產御胎死之後、其女中病死に付、龜次郎殿御忌中同事之儀に付遠慮可然旨にて延引。依之久平預り人手前より揚屋へ入置、八月六日殺害被申付候事。

六月六日。能美郡吉原釜屋村の荷物改役人の勤務に關して令す。

〔日　曆〕

吉原釜屋村荷物改役人勤方覺

一、一人宛毎日晝之内番所へ相詰可申事。

一、船積荷物津出津人之砌、早速罷出荷物改可申候。右荷物改に罷出候跡、番所明き申儀不苦事。

一、何品によらず荷物指通り候者、改所へ不相越、直に相廻り候躰程遠く見付候はゞ、則刻罷出見屆可申候。右見屆罷越、跡明き申儀不苦事。

一、夜中は前々之通り、改人宅より罷出、濱筋相廻り縮り可仕事。

一、當番之者食事之儀、爲持給候歟、又は人々宅へ給に罷越し、其代り人相立置可罷越事。

右之趣遂詮議、今般相改申候條、令承知、改番所明き不申、急度相守候樣に夫々可申渡候、以上。

亥六月六日

林源太左衛門　印

關屋佐左衛門　印

犬丸村　太右衛門

此御紙面、享保十六年亥十月吉原釜屋村荷物改人共に御渡被成候處、今般盗賊改方御奉行坂野帶刀左衛門殿より、所々荷物改所先年より相渡り居申定書寫指出可申旨、一統被仰渡に付、改所有之御定書相しらべ候處、右吉原釜屋村に相渡り居申御定書、外之改所には相渡り不申候哉相見に不申候。

未十一月十八日　　　　改　作　所

諸　郡

六月晦日。家中の諸士に各自の由緒一類附帳を上る。

〔政隣記〕

六月晦日、御家中面々由緒一類附帳御用候間、增減改之、御步並に而も遣書指上候者に、人別一冊宛之帳面、今日之日付に而可差出旨、五月廿九日御用番奥村内記殿被仰渡、一統今日切に上之。

六月。藏宿の取締方に付改善の方法を議す。

〔郡方古例集〕

所々藏宿共聊に利欲に迷ひ、手廻給人預り米拂方相濟候切手を質入致、米切手又者銀子等借り請、七月に至濟證文取申時節に者外より銀子借り替、右質屋手前相濟切手受出し、濟證文

長に寶暦元年なり

是月に大臺なり

切手直段の次下直脱か

當前之家風以下本のまゝ

取、不埒之品不相知樣に仕、翌年に至及拂米、切手を質入にいたし、銀子借り出、前年借り替置候銀主に返濟いたし候。ヶ樣にくり／＼にいたし候內、米直段上り下り之くるひにて浮沈有之、畢竟不仕合相續き、借銀高に罷成、取揃成兼候得ば、藏拂指つかへ、渡り方も暮々敷無之、又者渡り方之間を合申ため、密々平米買替相渡申品も有之樣子に而、旁以米買人相泥、おのづから右之族成所々は、切手直段に罷成、曾而給人のために不罷成候。其上ヶ樣に成行、必至与藏拂指支、又質入之切手請出し兼、無了簡手を開及騷動に、大勢之難儀に成候。尤當時身上宜敷ものにても、賣買之家業に付、身上之浮沈不珍儀に候得者、當前之家風曾而賴に罷成棒を以手薄く成候得者、結句ヶ樣成厚き身上柄之者は、脇より常々心を不付候に付、手を開申節は都而莫大之及銀高に申品可有之候。然者當時身上之厚薄に限申事に而無之、都而藏宿手前縮方嚴重に申付、難澁之品出來不申候得者、給人之爲にも宜敷、且又大勢難儀之筋も相止可申候。此上たとへ萬一不埒成儀出來候而も、左之通縮方申付候はゞ、其年限及露顯申に付、一端之輕き儀に而、過分之引負等出來仕間敷候。依之存寄之趣左に書記候。

一、米買人藏宿方に切手致持參候はゞ、給人預り米高幷判印見合、相違無之候者、其趣支配之十村に充所に藏宿致副書付、切手与一所に相渡可申候。左候はゞ買人取、十村方へ持參可申、則十村方に而右添書付取置、拂方相濟与申文字を印に彫、十村方に致所持罷在、其印を

易本のまゝ
手度本のまゝ

右持參仕切手之裏に押可相渡候。其上に而藏宿切手請取、米藏出いたし候樣に可申付候。

一、濟證文毎年八月十五日切に取揃可指出候。自然其節藏拂相濟不申、殘米在之候者、何十何石何之誰、何十何石何之誰、〆何百何十石、右誰組藏宿何村誰預り米之內、米藏拂相濟不申候に付、誰々罷出有米員數相違無御座与、十村添書付相認取揃申、濟證文と一所に可指出候。

一、十村右之通殘り米相改申上者、麁抹儀在之間敷候得共、今般締方易嚴重に可申付候。依之兩御郡之內に而役人兩人相立、誓詞申付置、濟證文指出候以後、右役人手度、藏宿何村誰・何村誰方に米拂方相濟不申、殘り米可有之候間、其方共罷出、有無員數見屆、一藏切に米高書記可指出旨申付、畢竟役人共書出候表と、先達而十村指出置候添書付米高与見合可申候。且又役人折々相廻、右殘り米拂方承屆、在米与渡り方切手引合、藏勘定可仕候。

一、右役人所々相廻り候造用失脚、是又爲骨折、藏宿預り米一石に付二厘宛之圖りを以、應米高藏宿共より相渡可申候。

一、藏宿共只今迄毎春給人中へ年禮相勤來候得共、右之通少々失脚も有之筋に候條、向後年禮に罷出候儀相止可申候。尤音信物等茂指止、書狀を以年禮可申通候。

右之通拙者共心付候趣に候條、面々遂熟覽、若指揮申品有之候はゞ、關紙面名書之所、指揮

申趣有之段相記、追而書付を以可申聞事。

亥 六 月

藏宿縮方之儀に付別紙書立指遣候條、面々致熟覽、指擬申品無之候者、右書立之趣を以連判紙面早速可指出候。羽咋・鹿島兩御郡之儀者、向後改役人相立申趣に候得共、奥郡之儀者藏宿數茂少、其上少米之儀、旁以別に改役人相立申に不及、其所々之肝煎爲加役相勤させ可申候。尤骨折銀等之儀、藏宿手前より及貪着申間敷候。當收納前最早間茂無之候間、遲々無之樣に可相心得候。披見以後判形候而、早く先々相廻、落着より可相返候、以上。

享保十六年亥六月十六日　　村井安左衞門　印

不破忠太夫　印

鳳至・珠洲兩御郡御扶持人・十村中

右御書立請左之通。

私共組下藏宿共御米請拂之儀に付、縮方之筋左に記奉願候。

一、御給人米買人、藏宿方御米切手致持參候はゞ、御給人預り米高幷御判印見合、相違無御座候はゞ、其趣支配之十村宛所に而藏宿添書付いたし、右御米切手与一集に買人に相渡可申候。左候はゞ買人、十村方に右御米切手幷藏宿添書付共持參仕、則十村方に而右藏宿添書付

を受取置、御米切手に者拂方相濟ミ申文字を印に彫、十村方に所持仕罷在、其印を右御米切手之裏に押可相渡候。其上に而藏宿方へ右之裏印仕、御米切手請取、御米藏出仕候樣に仕度奉存候。

一、濟證文毎年八月十五日切に取揃可指上候。自然其節御米拂相濟不申、殘り米在之候にて、何十何石何の誰樣、何十何石何之誰樣、〆何百何十石、何村誰組藏宿何村誰預り米之內、未藏拂相濟不申候に付、肝煎誰罷出、有米員數見屆、相違無御座候旨、十村添書付相認取揃申、濟御證文と一集に指上申度奉存候。

一、十村方に而右之通殘り米相改候得者、藏宿手前麁抹成儀御座有間敷と奉存候。尤今般改方役人之儀者、其村々肝煎加役に被仰付、誓詞御申付可被下候。勿論濟御證文指上候以後殘り米之儀、右役人罷出、藏宿何村誰方に未拂方相濟不申、殘り米有之候間、其方罷出有米員數見屆、一藏切に米高書記可指上候旨、御紙面を以被仰渡、畢竟役人共書出之表与、十村指出置申添書付之米高与、御見合被下候得ば、藏宿手前紛敷儀御座有間敷与奉存候。尤右役人折々相廻、藏宿手前殘り米拂方承屆、在米ミ渡り方切手引合、藏勘定仕候樣に仕度奉存候。
右之通被仰付被下候得者、藏宿共手前締方宜敷可有御座与奉存候に付、書付を以奉願候、以上。

享保十六年七月

粟藏村　彦　丞

飯田村　七郎右衛門

馬場村　喜右衛門

宇出津村　源　五

稲舟村　新　七

村井安左衛門殿

不破忠太夫殿

先達而相願候所々藏宿縮方之儀可申渡候條、左樣に可相心得候。給人拂米買留人、藏宿方に切手致持參、藏宿添書付を以、支配十村裏印取候趣に而者、米主及難澁、畢竟米直段等不宜、給人之爲に不罷成候條、右之節藏宿有之所々肝煎・組合頭之内一人罷出、致相見米相渡、右拂切手を藏宿封じ候而、肝煎・組合頭に相渡、十村裏印取候樣可申渡候。前々より之縮方、彌以入念麁抹之儀出來無之樣可相心得候。藏拂相見人、藏宿有之所々之肝煎に申付、麁抹之儀在之候得者、相斷候樣に誓詞申付候之間、得其意可申渡候。右肝煎邪欲之筋、又は改方致油斷候はゞ、早速可相斷候。右之縮方嚴重に夫々可申渡候。唯今迄申付置候趣、尤相違之儀無之候。披見以後判形候而、早々先々に相廻、落着より可相返候、以上。

享保十六亥十一月　　　村井安左衛門　印

不破忠太夫　印

粟藏村　彦　丞

飯田村　七郎右衛門

宇出津村　源　五

稲舟村　新　七

馬場村　喜右衛門

七月七日。前田吉徳幕府の用金借上の命を奉ず。

〔政隣記〕

七月七日御用御頼之細井佐次右衛門殿、昨今御出、御内用与云々。是者米下直に付、御召米被仰付候得共、御入用指支候故、金十五萬兩御借被遊、來年・來々年兩度に御返濟可被遊との御儀。御受之御首尾も宜旨に而、今日當り御登城、御下に松平左近將監殿ゟ御勤被遊候。八月廿八日右御用に付、京・大阪ゟ御かね被遣候御用主付、組外御番頭長瀬五郎右衛門・御横目津田五左衛門ゟ被仰付。右御かね九月より十月迄に、十九駄宛九度に被遣候筈に付、御馬廻・組外・定番御馬廻より二人宛指添、足輕都合三百廿人宰領之筈也。

今月は七月なり

七月二十日。羽咋郡一宮村に火災あり。

〔政隣記〕

今月廿日能州一宮、雷火に而三十六軒燒失之由告來。

七月廿七日。前田吉德就封の暇を受く。

〔政隣記〕

七月廿七日上使御老中松平伊豆守殿を以御歸國御暇。從大納言樣も上使安藤對馬守殿を以上意。從兩上樣御拜領如御例。

七月廿八日。前田吉德登營して就封の辭見す。

〔德川實紀〕

七月廿八日月次なり。松平加賀守吉德就封の暇給ふ。

〔政隣記〕

翌廿八日御登城御禮上意・御拜領、前田勘解由・玉井市正御目見拜領物等、都而前々之通。

八月五日。前田吉德本鄕邸に象を觀る。

〔御年表〕

市正は玉井氏

八月五日本郷御屋形へ象を引寄せられ御覽。是は文昭院殿御代より異國へ仰遣され、二・三年以來江戸へ到着、只今濱の御殿に居ると云。諸侯望の方に引寄見物とも也。御徒並以上望者へは見物仰付らる。象の寸法高さ七尺四寸、胴太さ一丈三寸四歩餘、前足三尺七寸餘、長さ一丈一尺。右今年七月廿一日改取尺。此以後次第に大に成由。

八月十六日。前田吉德江戸を發して歸國の途に就く。

〔政隣記〕

八月十六日江戸御發駕、廿七日御歸城。御供市正并若年寄西尾隼人、一宿御跡前田勘解由也。御歸國御禮御使者青山將監、同日發足前々之通。

八月十八日。石川郡泉野村の刑場を米泉村に移さんことを請ひて許さる。

〔前田貞直筆記〕

一、石川郡泉野村領町端に、先規より之磔場有之候得共、新家願之通被仰付候に付、ひまん堂橋いなた米泉村領に被仰付候樣に仕度旨、林源太左衛門・關屋佐左衛門亥の八月十八日之紙面、算用場よりもつかへ申儀無之趣に付、願之通可申付旨、御用番御列押札に而之紙面入御覽、其通被仰付趣也。

九月。百姓の上納する米穀の仕上及び包裝を完全にすべきを令す。

〔司農典〕

享保十五年御收納米、今年大阪爲御登米に罷成候處、去年納方不宜、薄實米・粉米・粃・籾等有之、御拂直段過分下直に有之由、大阪御役より申越候。米納方之儀、前々當場より定有之、則藏所々々に御定之趣委細看板に書記懸置、其段相違無之筈に候處、近年猥に罷成、御收納米悪敷、剩百姓にも過分之費有之由に候。ヶ様之儀、米納下代共之内私之筋より事起り申儀与相聞候に付、享保十一年別紙之通相觸置候處、于今不埒成儀有之躰故、御代官中にも油斷成儀に相聞候。右別紙之趣於不相守者、御改作御法にも背、其上件之通大阪表御拂直段、以之外下直に有之候而は、莫大之御損失に罷成、大切之儀に候條、今年より米撰方念を入、尤薄實米・粉米・粃・籾等無之樣納可被申候。薄實米・粉米有之候得者、御詰米に罷成候而、薄實米より損早く、御廻米に罷成候而も減米多、旁以無際限御損失に罷成候事。

一、繩・俵等之拵も近年不宜内、去年者別而不宜旨、是亦大阪御役人より申越候。此儀も度々申觸候儀有之候故、不念之至に候事。

一、新川郡去御收納米、諸郡よりは別而納方不宜、薄實米・粉米・粃・籾等多有之、米撰悪敷、繩・俵等迄も不宜旨、右役人より是又申越候。前にも申觸候通、新川米之儀於大阪表に御拂直段格別高直之所、近年加州米幷川西米同事之直段に罷成候所に、又候哉去年格別下直之旨申

來候。左候得ば右之通米撰惡敷、納方等不宜故に候。畢竟下代共不心得に候條、嚴重可被申渡候事。

一、今年より代官中、御收納藏初より皆濟迄、御藏所へ罷出見屆可被申候。相代官有之面々は、仲間代りに所々藏所ゟ罷出、右之趣嚴重可被相心得候事。

一、本役有之、兼役に御代官相勤被申面々は、數度相廻、納方見屆、嚴重可被申付候事。

一、本役御代官に而、加役無之面々は、御收納藏初より皆濟迄、所々御藏所ゟ罷出、納方見屆、紙面之通嚴重可被申付候。申入に不及候得共、御代官所々何日に罷越何日に罷歸候段、其度々以紙面當場へ可被及案內に候事。

一、御收納藏初前、繩・俵見本を見屆相極置、皆濟迄違無之樣可被申付候事。

一、御代官中一統年口米殘置、藏仕廻に組合代官相封附候而、右年口米見屆候樣可被致候。

但相代官面々は、右之趣嚴重可被相心得候事。

右之趣被得其意、納方之儀嚴重下代共ゟ可被申渡候。尤米撰樣幷繩・俵拵之儀、今年より別而念を入可申旨、百姓中へ急度可申付旨、諸郡十村共ゟ申渡候條、被致承知、油斷無之樣可有支配候。猶更此度右之趣に相心得可被申候。若違背之下代共有之、御爲にも不罷成儀に百姓費之筋於有之に者、百姓共より直に夫々相斷候樣申渡置候條、可被得其意候、以上。

辛亥九月　　　　　　　　　　御算用場

諸代官中

右之趣諸代官中へ申渡候條、其方共尚更急度相守、尤手代共へも嚴重可申付者也。

辛亥九月　　　　　　　　　　御算用場

諸郡御扶持人・平十村・新田裁許・山廻り共江

〔司農典〕

覺

一、百姓御米斗り樣之次第、斗桝之上米盛上、斗桝かたげ不申、其外斗樣方便無之樣に爲致候儀、古格之通有躰に爲斗可申事。

附り、升取之者人々米主に爲斗可申候。若米主斗候儀不得仕者有之候はゞ、其村之百姓に爲斗可申候。米斗抔与申立外之者を雇、藏所へ入申儀有之間敷候。此外老若男女共無用之者、一切藏所へ入申間敷旨堅可申渡候。

一、下代共米見屆候時分、態与米をこぼし、目拂米与名付、下代共手前へ引受申儀相聞候。此儀は一向無之筈之事に候。目拂米と申ものは、斗立候米俵拵候時分、自然に少々充俵之目をくゞり候、米一石に付五勺歟七勺有之物之由に候。終日米爲斗、仕廻に集候得者、千石斗候前

に而は五斗數日拂米有之候。くだり中米に付、元來斗り米俵へ詰候内よりぬけ候分中筋に付、百姓人々へ返可申様も無之、於其藏所に右日拂米は拂立、代銀は諸方御士衆へ上申儀、前々より之格に候、是に事寄せ、下代共米見屆候時分に、折敷之内より餘こぼし、又は百姓共俵を並置候處、折敷持廻り候而、一俵々々之處に而指を入籤こぼし、殘も米箕に入候時分も態与こぼし、自ら敷筵之外にもこぼれ候様に仕成候。此米莫大有之由に候得共、其段百姓申立候得ば、宜米も悪敷様に申立、又は米可受取時節も、兎角百姓へ難澁を申達候故、無是非右損失之儀申立候儀も不仕、下代共存分之通に爲致候段無紛相聞。右存分之通關に仕上ば、右例より之格式に違候異數米に而も受取候段、是又無紛儀に候。向後米請取候時分改様之次第、左之通可被申渡候。

一、米善悪見屆候時分、折敷へ米一升程宛入、籤出候時分下代共前に箕をすて置、箕之内に而籤たて、こぼれ米も箕之内へこぼれ候様にいたし、善悪遂吟味候以後、折敷之内殘米箕之内籤出米共、百姓へ返可申事。

一、二枚ござ斗筵之儀、前々より下代共方より相渡上筵を以、二枚ござにいたし、聊米筵之目を通し不申様仕筈に候處、近年は至極之麁相成筵を以繕立、態与米通り候様仕立申由に候。向後如右例上筵指出、少も米ぬけ不申様可仕事。

一、斗り米俵へ入候時分、箕に而入候に付米こぼれ申由相聞候條、向後者籠に而じやうごを拵、斗り米俵へ詰候様十村代官共へ申渡、於右籠に者、代官共より指出候様に申渡候間、十村手前被聞合、各手前に而も右之通可被相心得候事。

一、別紙に相見候懸番之次第、彼是不埒に相聞候條、綿密に相心得候様可被申渡候事。

一、百姓共藏所々々へ米指出候而も、下代共請取申儀相滯候故、數日町宿に大分之米積置申由に候。此儀者寛文年中之定書にも有之通、若火事等逢候はゞ、品六ヶ敷儀与相見申候。第一宿主之者与下代共申談、數日宿々に米を指置、宿賃銀其外百姓物入を懸、下代共宿主之德分に仕間之由沙汰有之候。此段實正に候へ者、御改作御法に懸、急度曲事に可申付筋に候。彌向後聊無遲滯早速米納候様、下代共に嚴重可被申渡候事。

右之通急度可被申渡候。前條にも相記候通、相違之儀有之候はゞ、百姓より及注進に候様申付候。左候得者各不念に罷成儀に候間、嚴重被申渡尤に候、以上。

亥　九　月　　　　御　算　用　場

右之通侍・代官中へ申渡候條、其方共急度相守、手代共へも嚴重可申付者也。

亥　九　月

諸郡御扶持人・平十村・山廻り・新田裁許・代官共に

十月二日。能美郡辰口村に温泉を開かんことを請ふ。

〔加州郡方舊記〕

乍恐申上候。

一、能美郡辰口村領に温泉御座候に付、先年御當地町人奉願被爲仰付候所に、指水多出候而、水はき方便不得仕、成就不仕候由承及申候。今般私罷越見分仕、水はき工夫仕候に付、温泉に仕立申度奉願候。

一、温泉に仕立候はゞ、私儀彼地へ出村に罷出申度奉存候間、温泉之通り幅三十五間・長百間計、辰口村・湯屋村領之内御田地御渡可被下候。此内に而水はき取を掘、湯さやを建申度奉存候。右御田地御年貢米之儀、御格之通差上可申候。右温泉奉願之通被爲仰付被下候はゞ、御運上銀毎年銀三枚宛差上可申、尤湯入人も多御座候はゞ、御運上銀相增指上可申候、以上。

享保十六年十月二日　河北郡淺野村　十兵衛

御所村　長次郎殿

右淺野村十兵衛書付出候に付上之申候、以上。

御所村　長次郎

林・闘　屋殿

能美郡辰口村領温泉仕立申度旨、淺野村十兵衛願候に付、御年寄衆ゟ相達候所、被達御聽、願候通被仰出候旨被仰渡候條、此段可申渡候。湯運上之儀、來子の年より毎年三枚宛指上、尤湯入人等多有之候はゞ、運上銀相增爲差上可申候、以上。

亥十月　　　　　　　　　　　林・關屋

御所村　長次郎

十月二十日。河北郡小坂村に於ける刑場の由來を上申す。

〔加州郡方舊記〕

就御尋申上候。

一、下口はりつけ場、五十ヶ年計以前は、百坂村領往還道際東の山手に御座候處、往還並松之脇往來に程近く御座候故、御家中御侍樣方御難儀被爲成候。且又往來人も殊之外難儀仕由に而、金くさり橋之下河原に暫く被仰付候。然共此所者場所惡敷由に而、小坂村領山之根只今の所ゟ御替被爲成候。年數五十ヶ年計由、小坂村年罷寄候者共申候、以上。

亥十月廿日　　　　　　　　　御所村　長次郎

林・關屋殿

下口は金澤のなり

十月二十日。毛利助右衛門その兄太兵衛の爲に斬殺せらる。

〔政隣記〕
十月廿日定番御馬廻御番頭毛利助右衛門儀、致厄介置候兄太兵衛、昨夜助右衛門を切殺候旨、定番頭村上傳右衛門及御斷候に付、御横目檢使小寺市郎右衛門・樋口次郎右衛門被遣見屆、太兵衛者一類に御預、廿四日より岡島内膳ぇ御預。廿五日定番頭・御横目内膳宅ぇ罷越御吟味有之、廿六日太兵衛親類遠慮被仰付。翌年二月廿七日より横山圖書ぇ御預、同年閏五月廿一日於圖書宅切腹被仰付、定番頭二人・御横目二人出座見屆之。遠慮之一類六月八日御免。

十一月十二日。大槻傳藏初めて能の仕舞を學ぶ。

〔政隣記〕
十一月十二日大槻傳藏、今日より諸橋權進に仕舞稽古初る。其外御居間方亂舞稽古、於御次被仰付。

是月は大盡なり

十一月晦日。浪人梅村宗榮希有の高齢を以て歿す。

前月は十一月なり

〔政隣記〕
前月晦日金澤荒町に居住する梅村宗榮与云者、百三十歳にて病死仕候。元和元年出生也。竹田市三郎殉死之時、介錯之手傳仕候者に付、竹田掃部より茂扶持とらする。去十三年以來從御上も御扶持米を被下置。附、元和元年出生に候得者百十七歳也。然れ共右宗榮は予政隣家

に代々召仕候、當時文化三年也。梅村小十郎先祖也。外療を心得、應需施療、百三十一に而死与小十郎家之傳有。同人菩提寺卯辰日蓮宗蓮昌寺に左之通懸物、予一見之處、能筆壯强之筆勢也。

鶯

あらたまの年たちかへるあしたよりまたるゝものはうぐひすのこゑ

百十七歲梅村宗榮翁書之 在印

〔國事雜鈔〕

私共支配浪人梅村宗榮与申者、享保十三年九十歲に罷成候之旨肝煎及斷、同年より御扶持被下候事。

一、右宗榮儀、今年百十七歲に罷成候旨取沙汰在之に付難心得、肝煎を以樣子爲承候處、成程今年百十七歲に罷成候。浪人に而手跡致指南罷在候故、極老与申候而は渡世に障り申儀共御座候故、數年歲を隱し罷在、享保四年本新保新町に家を持罷在候時分、組合より歲を改、百四歲之時八十歲与披露仕候。夫故今年九十三歲之圖りに候へ共、實は其節百四歲に而、今年百十七歲に罷成候由申候事。

一、宗榮儀竹田故市三郎家來に而、知行百二十石取罷在候。竹田五郎左衞門代迄相勤、其後致浪人候由之事。

一、宗榮儀私共宅ゟ茂呼寄、様子見申候處、指而老衰仕躰も無御座、今以手跡等相調申候事。

一、右之趣其身申分迄に而、外慥成證據無御座候。尤一家等茂無御座候。獨身に而相暮申候。竹田掃部方ゟ茂内々に而承合候得ども、様子相知不申。市三郎以來五郎左衛門代迄相勤、延寶年中に暇出し候儀は、承傳候由に御座候事。

右紙面享保十六年九月朔日、町奉行御用番長屋將監二の御丸ゟ持參、遠田勘右衛門迄相達す。

但右宗榮儀、今年十一月晦日病死いたし候事。

〔温知齋漫錄〕

梅村宗榮与申老人は、初作平と申候。作平父忠右衛門は、竹田市三郎殿家臣に而、知行百十石給、家老役相勤、慶長十九年大阪御陣之節市三郎殿に従ひ出陣仕。其後忠右衛門死去、遺知百十石作平相續、後に十石加増、百二十石給相勤候。市三郎殿追腹被成、二代目五郎左衛門殿代に所存之趣申立、一生浪人仕、有髮之法躰に罷成、名宗榮与改る。死去年號等、古き帳に享保十三年百十七歳に而死去与申候得共不詳。小堀殿日記拔書に而は、享保十六年百十七歳と有之。是本文ならば元和元年出生之人也。

一、荒井仙左衛門渡邊多宮殿給人、荒井作平の父也、先々代より荒町に久敷居住之家之由に而、先々代より承傳は、大阪御陣之節宗榮二十歳に而出陣之旨、夫に付色々咄之儀共聞傳候儀を、仙左衛門より十太

夫に被呼候。慶長十九年二十歳なれば文祿四年出生之人、享保十六年は百三十七歳也。廿歳の相違也。萬治元年六十四歲、彼是不審多し。

一、調筆之一幅、蓮昌寺に先代より納置分は、

新玉の年立かへるあしたよりまたるゝものは鶯の聲

百六歳　梅村宗榮翁書

一、十太夫致所持候二幅共百十七歳齡付。

一、荒井仙左衛門所持之一幅は、老梅逢春開と云題に而和歌之由。菊池公御家臣田中和左衛門所持之一幅は、壽之字。荒町居住之町人室屋善兵衛も一幅所持、右何茂直に承る年齡不覺。

右作平子梅村長兵衛、後改十郎左衛門、明暦二年津田先々故玄蕃殿に被呼出、近習相勤居。萬治三年津田故半丞殿別家被仰付候節、給知に被申付、右半丞殿附人に罷越、享保八年十一月致死去候。右長兵衛以來は、代々蓮昌寺に墓所致連續候。往古は蓮昌寺旦那に而は無之、致改葬候墓所之由承傳仕候。右宗榮牌名等無之は、合葬之内に而も有之哉、傳來不委。

一、宗榮より七代之孫當梅村十太夫幼名小十郎迄、代々知行四十石給附人に罷在候處、當主家先々代寺西故九左衛門秀一後改宗山より、同苗故七兵衛殿を以預所望故、玄蕃殿左近右衛門殿承知之上、文化九年七月被呼出、知行六十石給相勤候。右宗榮より當時迄荒々調上申候。小堀殿日

記拔書は、到來之儘懸御目申候間、御一覽之上早々御戻可被下候、以上。

五月十三日

十二月廿四日。深雪なるを以て道路の往來を安全にせしむ。

〔護國公年譜〕

一、十二月二十四日金澤深雪に而往來指閊候間、道廣仕候樣一統觸有之。且又來年頭禮二月へ掛可相勤旨、是又一統觸有之。

享保十七年

正月朔日。前田吉德金澤城に元日の儀を行ふ。

〔護國公年譜〕

一、元日御規式御例之通。勝丸樣當春初而御長袴被爲召、御禮被仰上。御居間書院。御太刀披露前田修理御家老役。

一、當年禮、御年寄中を初、頭・支配に茂、十五日以前は一向相勤申間敷旨、於御式臺諸頭御帳に付候時分、御横目申談有之。是は深雪故也。

正月四日。前田直躬金澤に於いて叙爵を命ぜらる。

〔政隣記〕

正月四日奥村故伊豫代諸大夫、御願之通舊臘廿三日被仰出候旨御飛脚今晝着。依之前田主稅直躬叙爵被仰付、改土佐守に。江戸ゟ之御禮使番氏家内藏允八日に發足。七日出仕之面々ゟ御弘有之。右御祝儀、來月御用番奥村内匠ゟは同日、外年寄中ゟは深雪に付□□迄之内勤候樣　御横目を以被仰聞。

正月九日。追儺の儀を行ふ。

〔護國公年譜〕

一、正月九日追儺之御規式、會所奉行津田林左衛門のしめ、長袴。暮合前御本丸相仕廻、御次ゟ罷出、遠田勘右衛門御定番頭御近習達御聽、同人誘引に而、暮六時頃御居間・同二の間・御居間書院・御膳所、夫より御表向御規式有之。御居間御規式之内、當番御近習頭等常服。御祝指上候時分、御給事人服紗小袖・布上下着。右御規式之内、御前御のしめ・御半上下被爲召候。御城方本多安房守・定番頭・同御番頭・御留守居物頭等、如例罷出、林左衛門御紋付御小袖一被下。於江戸も會所奉行此御規式勤。

正月十六日。大槻傳藏知行を加増せらる。

〔護國公年譜〕

一、正月十六日御加增百石大槻傳藏御小將組被仰付。奥小將御番頭支配御加增百石兒玉彌次組外被仰付。支配同上御加增五十石石丸文太夫、御近邊數年全相勤候に付御加增被仰付、御小將組與御納戸奉行被仰付。三浦二郎兵衛只今迄奥御納戸奉行にて組外。御大小將組被仰付候。

正月十六日。年寄奥村内記等に儉約方御用を命ず。

〔護國公年譜〕

一、正月十六日近年御勝手御指支に付、御儉約方御用、年寄奥村内記・前田修理御家老役・玉井市正同上。

正月廿五日。徳川吉宗の前田吉德に贈與したる鶴金澤に着す。

〔政隣記〕

正月廿五日御鷹之鶴、十九日宿次を以發、今日到來。御禮使御馬廻頭伊藤彦兵衛廿九日發足、二月十四日江戸着、廿八日登城御目見、拜領物有之。三月十九日歸着。右御披三月七日有之、出仕以上御料理被下、御能見物被仰付。御作法前々之通。

〔護國公年譜〕

一、三月七日當春御拜領之御鶴、今日御披に付、例月出仕以上之面々、於竹之間二汁五菜御料理被下之。御大小將・新番御能見物被仰付、御能始前弁相濟御目見被仰付候。熨斗目・半上下着用、六

時登城、暮前御能相濟。右御禮後登城幷年寄中不殘勤之候。年寄中等は御居間書院に而御料理被下之、御前御出御挨拶被遊候。御近習頭前後勤無之、御用勤之、御席へ出御禮申上候。

正月。領內九十六歲以上の長壽者七人を算す。

〔田中氏雜記〕

享保十七年正月、本藩九十歲已上御扶持米被下候內、別而長壽之者如左。

九十九歲	能州珠洲郡笹島村百姓與十郎母	つる
九十七歲	同國鳳至郡總又百姓九右衞門母	いわ
九十六歲	同國鹿島郡四柳村百姓與三郎母	こら
同	同國羽咋郡古江村百姓仁助母	いわ
同	同國鳳至郡堀越村百姓權兵衞母	いわ
同	同國珠洲郡熊谷村百姓仁助母	ふく
同	加州河北郡南森下村百姓頭振	吉兵衞

二月廿五日。越中境奉行を命じ今後食祿八百石以上のもの五ケ年交代たることを定む。

〔政隣記〕

二月廿五日越中境奉行、生駒八郎右衛門御馬廻組頭被仰付。但向後は、八百石以上之者五ヶ年代に相極候由。境奉行者先奉行金森助右衛門六百石、御普請奉行ゟ轉役被仰付。年頭御禮之節境奉行は、小知にても長袴着用、鳥目百疋獻上仕候。御普請奉行者知行當り之御禮錢に而、長袴不相成。此儀に付僉議有之、助右衛門者一生長袴着用、鳥目百疋に而御禮申上候。依之右之通、向後八百石以上五年代与相成候由也。

三月。收納藏の米穀拂切となる後も尙代官の封印を施し置くべきを命ず。

〔司農典〕

所々御收納藏、御米拂切明藏に而も、戸前に代官切封附可申旨、先年申渡候處、今以其通仕者も有之、又鎖迄おろし置、封付不申者も有之候。一向鎖おろし不申、其儘に仕置候者も有之由に候。不締成事不念千萬に候條、向後者御米出切、明申藏に而も、御代官中請取切に早速罷出、戸前に鎖おろし封付置可申候。尤藏人ゟも申渡、是又爲封付置、戸前に代官誰封明藏与名札に記置可申候。且又人々裁許米段々御拂切に成、明藏に成候共、右之趣に封付置可申候。若是以後不締成儀有之候はゞ、可爲不念候事。

請取切に本い傳

一、御收納之砌、藏廻申付置十村共、是以後御藏所へ折々相廻、明藏封付候儀見屆、若封無

之明藏有之候はゞ、急度御藏番人相改、樣子委敷可有注進候、以上。

享和十七子年三月　　　　　　改作奉行

諸郡御扶持人・十村等御代官中

四月八日。十村等石川郡泉村の刑場移轉に伴ふ納租に關し意見を上る。

享保十七年八月十八日參照

上口は金澤の上口なり

泉村は米泉村歟

〔加州郡方舊記〕

石川郡泉村領上口御仕置場近邊、家出來仕候處程近く罷成、人家之者共迷惑仕候故、場所を末に迻り、米泉村領に被仰付候樣、先達而泉村より奉願上置候。然者替地之趣如何可被仰付候哉、僉議仕可申上旨被仰渡候。末に迻り、泉村領に付替地之所引地に被仰付、只今迄之場所者、家出來次第、所免を以御納所相勤可申儀与、私共僉議仕候。引高之儀難被仰付候はゞ、地迻りに可被仰付候哉与奉存候、以上。

子四月八日　　　　　田井父子　村井　野々市

四　人　連　名

御改作御奉行所

四月十二日。前田吉德の女喜代姬江戶に生る。

〔政隣記〕

四月十二日於江戸御廣式御姫樣御出生、御名喜代姫樣与預玄院樣より被進。産婦之方翌十三日死去、於廣徳寺葬、被號清月院殿与。鳴物等之遠慮、急度相觸儀に而は無之、人々心得可有之事之御横目所より通達有之。同月廿日より不及其儀旨、前田將監被申候由、是又同所より申談。

四月廿一日。喜代姫生れしを以て奧村溫良に命じて蟇目の儀を行はしむ。

〔政隣記〕

四月廿一日御姫樣御誕生に付、蟇目之御規式奧村内匠溫良に被仰付。今日於私宅相勤、七時登城、御矢三本箱入被上之。追付御居間書院に御上下に而御出、御意有之。御腰物御家老役持出被下之。御次に退、帶之罷出御禮、御取合御家老。畢而御奧書院下段に而御吸物・御酒、御家老役相伴に而被下之。御給事新番。御意之趣、遠田勘右衛門布上下着用罷出申述。右席に懸候人々迄布上下、御刀持且御近習頭常服。

四月廿九日。德川家繼の十七回忌に當るを以て法會を金澤如來寺に行はしむ。

〔護國公年譜〕

一、四月二十九日有章院樣十七回御忌に付、於如來寺今日一日御法事御執行。奉行奥村内匠。於江戶は增上寺に而、四月二十五日より二十八日迄御法事有之。爲伺御機嫌、同二十五日公方樣へ胡麻餠一箱御獻上。二十九日には增上寺へ御成被遊。供奉豫參諸大名、前々之通御香奠御獻上、御使組頭。五月朔日月次出仕之時、御法事相濟候儀一統被仰述。分而惣出仕は無之御事。

四月。前田吉德命じて前侯の發布したる法規命令等一切の書類を提出せしむ。

〔政隣記〕

一、今月於金澤、御先代御定書等、其外被仰出之品、御親翰又は相伺候品、被仰出等之趣、惣而御心得にも被爲成候品、委細相しらべ、御親翰は封之可上之候。其外留帳等之內、自分覺書に致置候儀にても、御扣も御座候間、御見合可被返下候間、不苦品之分者、其儘差上可申候。御軍役等之品は、猶更御用に候間、同役中申談、追而可差上旨、諸頭江遠田勘右衞門申渡有之。追々帳面に仕立上之候事。

今月は四月

五月廿八日。金澤附近の道橋方の處務規程を上申す。

〔金澤廻道橋方每日罷出勤方帳〕

竹卷とは雪害を防ぐ爲數十竿を繩にて結束するをいふ

淵は緣なり

一、御參勤被遊候御往來御道筋御用、兩人共罷出相勤申候。御寺方に御參詣被遊候節者、一人罷出相勤申候。

一、備後守樣御往來被遊候節、幷御寺方に御參詣被遊候節、御道筋に一人罷出相勤申候。他國衆往來之節茂罷出相勤申候。

一、惣構御堀之內水指揮申候節、草取そうじ仕候。水指揮不申樣、度々大工棟梁・杖突相廻申候。御普請仕候時分、私共罷出相勤申候。

一、惣構竹卷仕候節、町夫請取、竹卷秋中に仕候。御徒中又者與力にて茂、加人に罷出申候。町足輕四人請取申候。春ほどき申候節者、町足輕出申候。

一、惣構土居屋敷相渡申候節者、御普請御奉行衆被罷出候時分、惣構境相見に私共罷出申候。御堀淵境土居境之儀茂、見分に罷出申候。

一、惣構枯竹幷人家にあやうき木御座候得者、爲伐申候。道橋破損修理御用に相立申候。御用に無御座分御普請會所、ひごより竹御作事所・非人小屋に相渡申候。

一、惣構幷道橋破損修理仕候節、私共兩人罷出御普請申付候。少之繕、幷役所迄に而大工・木挽・人足召仕申候節者、一人宛罷出相勤申候。惣構道橋、常々棟梁大工・杖突相廻申候。

一、大水・火事之節、不依晝夜兩人共に役所に罷出申候。往來難成所承付次第早速罷越、往來

先格よりの次に町字脱歟

指揮不申様に申付候。下役人不殘指出申候。

一、惣構竹御作事所爲御用受取可申旨申來候節、御作事所より切手次第に何時に而茂爲伐相渡申候。見分に私共罷出申候。

一、公儀御普請橋幷橋臺、往來惣水樋、所々御堀淵惣水樋、江溝橋、用水川筋川除修理仕候。才川・淺野川々除幷橋指除、往來先行拔之所道橋共修理仕候。二町・三町先行留之所者、御材木被下、人足幷外入用分共町より出、自分自分に仕候。所により往來行拔之所に而茂、先格より普請に仕來候所茂御座候。其所より願之品有之候而、御僉議之上公儀御普請に相極候得者、町御奉行衆より押紙而請申候。

一、割場小者一人請取置、役所幷御普請所小遣に召仕申候。小者無御座候時分者、役人又者日用に而茂、割場より相渡次第請取置、誓詞役所に而申付候。

一、町足輕一人、町會所より請取置申候。

一、町夫三人割場より請取、役所・御普請所杖突、御道具番人、釘遣申付候。町會所に而誓詞仕候。私共役所に而茂申付候。

一、御材木幷鐵物・荒物品々、御作事所より私共切手に、町御奉行衆裏書取、御添印申請、御用次第に渡奉行より請取申候。

一、御普請御道具品々、割場御道具渡所ゟ、私共切手に御添印申請候。普請中請取召仕申候。御用相済次第返上仕候。

一、持籠、割場御道具渡所ゟ、私共切手に町奉行衆裏書御添印申請、御用次第請取申候。

一、土・砂利・栗石、爲御用買上申候節者、毎年町會所に而御定直段買上申候。代銀壹上人切手に私共奥書仕、町御奉行衆裏書御添印申請、壹上人、過料銀に而爲請取申候。過料銀無御座候節者、小拂に而爲請取申候。

一、棟梁大工一人、町御奉行衆ゟ相達、御作事所より請取置申候。普請御作事所に而仕候。私共役所に而茂申付置候。役所幷御普請所々に御座候時分ハ、御作事所ゟ申遣、大工・木挽御用次第に請取召仕申候。手間料銀之儀者、御作事所如御定、棟梁大工・同肝煎・木挽肝煎幷大鋸肝煎請取、切手に私共奥書仕、町御奉行衆裏書御添印申請、過料銀無御座候節者、小拂銀に而爲請取申候。

一、道橋破損修理仕候取分、割場小者幷役人受取御普請申付候。小者役人無御座候得者、日用人足請取御普請仕候。日用賃銀、日用頭切手に私共奥書仕、町御奉行衆裏書御添印申請、過料銀に而爲請取申候。過料銀無御座候節者、小拂銀に而爲請取申候。

一、金澤廻道橋往來、侍町幷町屋之外、所により病人・死人等有之節、私共早速罷出見屆、町

奉行衆ゟ相達、公事場檢使請、先々承屆相渡申候。病人之儀者住所承屆、先ゟ相渡申候。非人躰之者に御座候得者、非人小屋ゟ申遣相渡申候。

一、新道橋出來に付、私共ゟ相渡申候節、町御奉行衆より押紙面請取申候。新出來橋掛直之橋之節者、御作事所ゟ相達、見圖請、御普請仕候。繕之橋者見圖請不申候。

一、料紙・筆墨・緣取、道橋方御用之時分、町會所より請取申候。

一、道橋方御入用帳、一年切に御儉約御奉行衆ゟ指出申候。

一、道橋方御入用御算用帳、一年切に帳面に仕立、町奉行衆ゟ奥書會所入帳、御作事所判帳、其外所々渡奉行より入切手請取、算用仕候。

一、御鷹野御行歩御出被遊候節者、棟梁大工・杖突指出申候。

一、道橋修理仕候節、古鐵御用に相立不申分、町會所に而入札に仕、拂代銀町會所ゟ爲上之置、私共役所修理御用相立申候。

右金澤廻道橋方、私共勤方如此御座候、以上。

子五月廿八日

山田喜八郎　印判

三嶋伊太夫　印判

小堀左兵衛殿

稲垣與三右衛門殿

五月。火消番の處務規程を修正す。

〔火消番勤方覺書〕

一、火消役被仰付卽日、同役中江持案内廻狀遣候事。

但、組合之儀中江及示談候事。

一、役人之儀用意出來次第、同役中江廻狀遣候事。

但、組合之儀極、右廻狀に相認候事。

一、役人幷組合之儀一紙に相認、御用番江使者を以紙面指出候事。

一、纏幷長柄・持柄等之模樣書記、役人以前紙面を以相達候歟、出仕之序有之節者致持參、御横目所江相達可申事。

一、同役中江案内使には、出馬時分相廻可申事。

一、火事場江罷出候節、於途中同役之先江乘拔候儀、先は可令遠慮候。併先江乘候者何ぞ故障有之、遲々の樣子に見請候者無遠慮乘拔可申候。但先非番・跡當番に候者、相互に及斷、時分の可爲首尾次第事。

一、先達而同役之纏揚申家江は、追而罷越候纏等、家大小によらず致遠慮揚申間敷候。併其

時分の首尾次第、双方纒奉行申談、纒等揚候儀は格別之事。

但、先達而纒揚置候而も、主人不罷越内人數不足之內、人數召連罷出候主人指圖有之候はゞ、尤無違背任其旨、申談防可申事。

一、火事之節非番にて遲く罷出候歟、亦は取懸り可申處も無之候はゞ、先達而防居申同役之後に相加罷在候節、防居申家に火移り手に合不申引候はゞ、其時之樣子次第、次之家に罷在候者と申談防候而も可然事。

一、町續在鄕出火之節、防可申候。町外れより少間有之在鄕に而も、風筋惡敷町之方危候はゞ、主人は町端に相扣、人數迄にて茂遣打消可申事。

一、非番之內行步に罷越候節、非番より罷出候程之火事有之候者、尤人數指出、近邊に相見え候同役中に申達、行步に罷出候に付人數迄指出候、御指圖請申度旨可申達候。尤御横目中に茂、行步に罷出候段可申達候事。

但、上下屋敷危火事に者、火本に人數不及指出候事。

一、御横目・御徒横目等無構階子に揚可申事。

但、雖爲同役之家來、主人より之使者格別、無左者相斷揚申間敷候。若不承分上り懸り候者、致其儘置、揚候上に而承屆、主人又者役人等指圖致、相おろし可申事。

一、於御寺方御法事有之節は、春にも不限、御法事中、非番茂當番も同事に相心得可申事。

但、櫓開きに不及事。

一、遠近に不限、御使に罷越候節、前後共に同役中不殘以廻狀案內之事。

一、煩指合等にて致役引候砌、助番入不申候時節は、引人より以紙面御用番幷頭に及斷、且同役致廻狀候。助番入申時分は、助先之者より御用番に助番相勤候段、以紙面御案內申入候に付、引人より御用番に之不及案內候事。

但、助先之者兼而相知居申、致役引候者より廻狀其方に先達而相廻、名之下に助番勤候段相調候得者、追而助人より之不及廻狀候事。

一、忌引之時分、何日迄忌中、何日より可相勤旨、初度之廻狀に相調候得者、重而不及廻狀候。將又助番之廻狀者、助を勤候者より可致廻狀候事。

一、助番之儀は、輕重共に助先之者相勤可申事。

一、御寺方請取番之節、請取本役幷御寺に可及案內、尤御用番に以紙面及相斷、同役可致廻狀候事。

一、持病者又は輕き痛等にて難致出仕候而も、役儀押而相勤候節は、其段同役中に可相達候事。

一、先祖遠忌且又婚禮等に而助番相頼申候節、御用番ゟ不及案內候。同役可致廻狀事。

右勤方帳面、元祿年中以來之覺書之趣を以致拔萃、今般同役九人示談之上加今案、大概如此相極候也。

享保十七五月

寺西市正
成瀨內藏助
前田兵部
山崎庄兵衞
篠原縫殿
松平大膳
生駒監物
多賀典膳

閏五月十四日。大聖寺侯前田利章江戸城虎之門の修築を命ぜらる。

〔政隣記〕

閏五月十四日前日依御奉書、備後守樣御登城之處、虎之御門御普請御手傳被仰付。廿二日より御普請始、十二月朔御引渡。但十一月朔日出來切。但御材木本庄御藏ゟ御納、小屋不殘御

届有之御引拂。

右に付同月御時服十御拜領、御家人六人も殿中に被召出、白銀三十枚・御時服三・羽織一野口兵部、白銀二十枚・御時服等同斷宛菅谷平太夫・稻垣輿右衛門、白銀十枚・御時服等同斷宛寺西甚左衛門・杉山勘右衛門・和田甚五右衛門に被下之。

但十月十四日增上寺に御成之節、御普請場虎御門に備後守樣御出被成御座候處、每々罷出大儀之旨上意有之。御家來五人御目通に罷出候由、爲御吹聽御邸に御出。

閏五月廿一日、毛利太兵衛その弟を殺害したるを以て切腹を命ぜらる。

[浚新秘策]

毛利太兵衛儀、享保十七年閏五月廿一日御預人横山圖書宅にて切腹被仰付。檢使は定番頭村上傳右衛門・黑坂吉左衛門、御横目樋口次郎右衛門・板野藏人罷越候。太兵衛に被仰渡候趣左之通。

毛利太兵衛に可申渡趣

毛利太兵衛

太兵衛儀、弟助右衛門に異見を加へ候處、承引難仕旨にて、うしろに有之脇刺を帶し手向申體に付、切殺之段、先以助右衛門儀は御知行をも被下置、重き役儀をも被仰付置所、太兵衛

儀先年之首尾も有之、御勘氣之身として、殊助右衛門厄介に罷成居申儀に候へば、左様之處を存付候者、假令助右衛門切懸候とも、如何様にも仕押留可申所、理不盡に切殺候段、御上をも不憚、其上弟之儀に候得ば、不慈之至不届至極に被思召候。依之急度可被仰付候へ共、助右衛門仕形も不宜候に付、一等御宥免之趣を以切腹被仰付。

右御書立之寫

圖書宅庭上に假屋二間四方を設け、白緣之疊敷之、白布之蒲團淺黃緣取之。太兵衛は下着白帷子、淺黃無紋之帷子、淺黃上下着用仕候。三方に天目水入之、又三方に小脇指、數珠相添出之候。介錯は給人大脇彌三丞相勤候。右介錯幷給仕人共に、白帷子・淺黃上下着用勤之候。介錯人之側へ杉桶に水入出置候。其水を刀に灑ぎ候て首を打候よし。三方に數珠を添候事、刀に水を灑ぎ候事不承及儀に付記し置候。

辛亥は享保十六年

辛亥十月十九日暮過、定番御番頭毛利助右衛門を其兄太兵衛令殺害候。其首尾は、助右衛門儀妻へ對し立腹之筋有之、叱有之聲高に相聞候。太兵衛部屋にて承付、罷越候而制し留候。如何様之譯にて候哉、助右衛門を切殺し、近所之面々幷不通もの共へ、急用有之條可罷越旨、太兵衛より呼に差越候。助右衛門同役三宅平太左衛門、隣家に付早速罷越候。太兵衛致對面申聞候趣は、助右衛門儀拙子へ手向候故、致殺害候旨申候。其前家來共へ、弟として兄へ手

取もは捕もなるべし

向候故打切候。指而替品にては無之候。暫申間敷候。食事可仕旨申聞、湯漬ニ椀給申候旨。扨其頭村上傳右衛門・村中務罷越承屆候所に、申聞候は、助右衛門儀妻を叱申聲高候故、鎮めに罷出、色々申聞候へ共止不申候。女童故左樣に申候哉、男に向候ては左樣には成申間敷と申聞候へば、夫にて憤候哉、脇刺を拔懸手向候故、其儘に打切申候。取も可仕事と存候へ共、火違・行燈等も有之、油斷仕候はゞ妻子共に障可申歟と存、有之仕合にて候旨申候。爲檢使、御横目小寺市郎右衛門・樋口次郎右衛門罷出候。手疵改候へば十ヶ所有之候。二間之内、こゝかしこと仕切倒候體に候。扨脇刺を改見候所、太兵衛申ごとは違、且而拔候樣子無之、つゐ木迄ニ其儘有之候。側には妻罷在、次に老女一人罷在、此外に人は無之候。妻は組外御番頭長瀬五郎右衛門娘に候。其夜中五郎右衛門宅へ引取申候。何方へも相屆申趣は無之旨也。妻申趣も有同斷。但助右衛門脇刺拔懸候儀は見請不申候。側に有之候脇刺を取候てさし候儀は見申候。老女は肥太成もの、氣息喘れ、申譯も不相聞候旨也。太兵衛儀、二十年計前其兒毛利半太夫へ對し存念有之由、御當地を致出奔候て江戸へ罷越、淺草寺院之内へ入出家之望有之旨也。主僧より御屋敷へ及案內候。松雲院樣御聽屆被遊、助右衛門并毛利伊平太等被遣、御屋敷へ引取、助右衛門ゐ差副御國へ御返し、一家中へ御預置被成候。亂心同前之仕形に付、世間も不爲致候。然所助右衛門近年自宅ゐ引請、急度致養育之、實に亂心も不仕候故、願に

懷婦は妊婦なるべし

て公界も仕候樣に罷成、僕一人相添、乾度兒あしらひに仕置候。然所此度之仕合に候。追而太兵衞は岡嶋内膳へ御預け被遊候。若助右衞門妻与密通之不義も候哉と、御吟味之中にては無之、内々を以詰問有之体に候得共、其体も無之由。拙子承及候趣は右之通りに候事。

六月三日。徳川吉宗驛使を以て前田吉德の暑中の安を問ふ。

〔徳川實紀〕

六月三日、東叡・三緣兩山に御使して、檜重をつかはされ、暑中の御尋あり。松平加賀守吉德には驛使もて尋させ給ふ。

六月廿四日。石川郡笠舞村にある非人小屋裁許與力の處務規程を上申す。

〔非人小屋裁許與力格帳〕

一、御小屋願罷越候者、病人・極老之者・懷婦・幼少者等者、樣子見分仕、早速入申候。左樣に茂無之、年若成者、達者相見え候へ者四五日見合、御小屋入人に申付候事。

一、非人小屋入人之儀、以前者毎日町中に足輕幷非人之内相廻、非人・大病・飢人等吟味仕、入人に申付候。毎春御郡方者十村に申付、高持之親類有之者爲引取申候。町方之者は町會所に而吟味之上、ゆかり有之者は引取申候。但只今者足輕相渡不申に付、非人迄相廻申候事。

一、非人小屋數最前者四十五筋御座候。只今者二十七筋御座候。小屋幷詰所・足輕番所等、都

而御修覆之儀、御作事所𛀁申遣被修理候事。
一、惣構下苅竹請取、小屋廻垣爲結申候。竹不足之時分者、御作事所𛀁申遣致修理候事。
一、古着物、毎年十一月太布帷子、毎年五月御算用場より請取相渡申候。近年者太布帷子者、役儀爲相勤候者迄𛀁被下候事。
一、非人小屋に罷在候もの共、飯米男者一日二合半、女者一合八勺宛被下候。幼少之者年来に應高下御座候。且又於非人小屋役掛り之者共之儀者、飯米段々高下御座候。普請等に召仕候節者、晝飯たべさせ申候事。
一、他國者病人等入置候節は、男一日五合、女一日二合五勺被下候事。右飯米堂形御藏より、私共通を以請取、町人に相渡爲搗申候。先年は非人小屋にて爲搗申候得共、搗減多御座候に付、其段先御奉行𛀁及御斷、近年町人に爲搗申候。明俵者小屋入用に仕候處、近年御詮議之上搗減米減候に付、明俵・繩共に搗屋𛀁相渡申候事。
一、鹽、宮腰御藏より請取、一人に一日一勺五才宛相渡申候事。
一、五斗味噌、一人に一日二勺五才宛相渡申候。右味噌町人請負賣上申候。産婦或者大病人有之刻者、本味噌少々宛被下候事。
一、薪、町人之内請負賣上申候。一人に一日柴二百目宛、十一月より二月迄者二百五十目宛

相渡申候事。
一、私共相詰候處、燒炭爐一つ分、油行燈一つ分、如御定御薪所より請取申候事。
一、非人之內、御家中之面々被下人に願申者御座候得者、幾人に而茂遣申候。去共病氣に罷成、先より相返候得者小屋江入置申候。惣而達者に相見え候非人者、出入申付候事。
一、小屋に而亂氣に罷成候非人者、小屋屋敷に板柵仕置入置申候。御郡方幷町方共に、亂心躰之ゆかり無之者茂、各御指圖を以右柵へ入置申候事。
一、非人之內小屋より晝罷出、及暮申迄不罷歸者者、欠落帳面に記置申候。一兩日過候而罷歸候者有之節者、樣子見屆、入人申附候儀茂御座候。出人・欠落人共に、病氣に罷成、先に而及飢行倒有之者は、尤吟味仕、入人に申付候事。
一、捨子之儀、非人小屋廻又者介抱可仕者無之所江捨置申分者、小屋江入置申候。
一、非人之內職人有之、外より誂物等有之候得者、爲致細工候。畢竟出人に罷成候樣申付候事。
一、惣非人共宗門之儀相改置候。去共言語不叶者、幼少之非人者、宗旨相知不申者茂御座候。非人之內死去仕候はゞ、旦那寺江遣候樣に仕度旨、常々相斷候者は、死去仕節寺より書付を取、死骸相渡申候事。

相の次渡字脱歟

一、切支丹類族之者、非人躰に而ゆかり無之者、一團に入置申候。且又江戸より参候流浪者は、惣非人並に入置申候事。

一、非人共小屋之門出入之儀、先年者其品吟味仕出候得共、近年者草履なと賣に罷出候に付、小屋一筋に札二十枚相置、門出入爲仕候事。

一、非人小屋夜中火を爲燒不申候。去共病人には火爲燒申候事。

一、他國他領之非人送遣申時分、冬者着物一つ、夏者帷子一つ、簑・笠相渡遣申候品に候。踏銀幷新敷木綿着物・帯・股引・脚半・簑・笠相渡遣申儀茂御座候事。

一、先年非人共繩幷すさ・苧かせ等所作仕候付、爲本銀御納戸銀十貫目請取、御郡打銀所御土藏に預置、年中少宛私共請取所作爲仕候。一年切に利潤之銀子指引、算用相極、本銀不殘右御土藏に預け置候。年々之利潤銀二十一貫五十二匁六分御座候に付、延寳九年其段御算用場御奉行・町御奉行へ相達、右本銀十貫目者御納戸に返上仕、利潤銀二十一貫五十二匁六分之内、十貫目本銀に除置、右御土藏に預置、殘銀は非人小屋入用拂方に仕、天和元年迄に拂切申候。右御土藏に預置候銀子、今以御郡方に御算用場より被貸渡、右利足銀之内に而、非人小屋入用之品々相調申候。於御算用場遂勘定申候事。

一、右之所作、足輕等之御費有之に付、其以後すさ迄所作仕候。右本銀之内を以、宮腰より

附寄申候駄賃銀等に、すき代銀を以本銀ヘ相返申候。すき賣𥁕申年者、右駄賃銀等不足之分者、小拂所より代銀相渡申候。すきㇾ之儀茂、二十ヶ年計以前より相止申候。鹽駄賃之儀、當時小拂所より出申、右利足銀之内に而相渡申候事。

一、元祿十三年三月より、非人共自分仕苧かせ、松任町人買請申度旨相斷、爲運上銀二十枚年中兩度に出申に付、すき拂代銀共非人小屋入用に仕、殘銀一貫九百七十九匁九厘、右御土藏ヘ預置申候得共、段々非人小屋入用に取遣申候。且又只今苧かせ買請申者無御座候故、運上無之候事。

一、會所・町會所・御作事所より請取申候品々御座候得共、品多御座候に付書顯不申候事。

一、年中非人小屋御入用之儀、帳面に記、毎年御算用場ヘ出之、逐勘定申候事。

一、非人相煩候節、町醫師之内被仰渡、療治申付候年數相改書上申候。御醫師之内罷出申儀茂御座候事。

年數とあるは人數歟

一、毎度小屋々々相廻、非人數相改、毎月三度宛人高增減之趣書記、御算用場幷町會所ヘ出之申候事。

一、制場足輕先年者三十人請取、夫々役儀申付候得共、近年者二人に而相勤申候。非人之内書算茂仕者有之に付、見計役儀申付候事。

一、小遣小者先年者七人請取、夫々召仕候得共、近年者一人茂請取不申、非人之内に而相勤申候事。

右於非人小屋、前々より格に立申品々書上申候、以上。

壬子六月廿四日

小田傳太夫

松原新五右衛門

加藤七郎左衛門

土田孫左衛門

榊原市郎左衛門

横山兵庫殿

奥村彈正殿

松原善右衛門殿

小堀左兵衛殿

稻垣與三右衛門殿

右非人小屋裁許與力中、格に相立勤申品如斯御座候、以上。

稻垣與三右衛門

小堀左兵衛
松原善右衛門
奥村彈正
横山兵庫

七月二日。前田利政の百回忌法會を京都に行ふ。

〔護國公年譜〕

一、七月二日福昌院樣百回御忌御法事、於京都執行に付、今日前田土佐守宅に御使者御馬廻頭和田釆女、御香奠白銀五枚被遣之。

七月六日。前田吉德金澤を發して參覲の途に就く。

〔政隣記〕

七月六日辰刻金澤御發駕、十四日上州松井田御泊之處、申之刻より大風雨、安中川・高崎川洪水。十五日松井田御逗留、同夜より水落、十六日朝御立、十八日未刻江戸御着。

但暑氣御尋之御奉書御禮使、御馬廻頭入江八郎右衛門七月五日江戸發、十日夜信州荒井御泊に罷出、御奉書等指上候處、卽刻御目見、御懇之御意有之。

附、羽織・立付に而御前に罷出候先例御尋に候得共知れ兼、今度之儀者先布上下に不及旨

被仰出。
右御參勤御供奥村内匠・若年寄本多頼母、一宿御跡より御家老前田修理也。十九日上使松平右京大夫殿御出。

七月廿一日。前田吉德登營して參覲の禮を行ふ。

〔德川實紀〕
七月廿一日臨時の朝會あり。松平加賀守吉德はじめ參覲五人。

〔政隣記〕
廿一日御禮。西丸にも御登城。内匠・修理御目見等如御例。

八月十日。靈元法皇崩御の報江戶に達す。

〔政隣記〕
八月十日夜法皇御名識仁、御法名素淨、年號靈元院り、御寶算七十九。御所崩御之由當六日なり。江戶に申來。十一日惣御登城。十日より十四日迄普請鳴物遠慮。京都に御使大組頭氏家主馬、女二宮樣に之御使御馬廻渡邊五太夫、九月二日從金澤被遣。

八月二十日。前田光高夫人の忌日に自今精進を廢し遊獵を行ひ得べきこ

とを告ぐ。

〔護國公年譜〕

一、八月二十日左之通御横目中より觸有。

每月二十三日御家中之面々、向後諸殺生不及遠慮候。御鷹は御祥月迄出不申候事。

但御家中之面々は、御祥月共不及遠慮に候。

但當七月二十三日淸泰院樣御忌日表向御精進之儀、最早輕め候而可然旨被思召候。內匠・修理僉議仕可申上旨御意に候。依之月次二十三日は朝計、御忌日は終日御精進可申談由、右兩人衆被申上候處、先其通申談置、追而又詮議次第輕め候樣被仰出、重而御近習頭より申達候。

但此儀今日申渡し候はゞ、拵置候事仕立直申樣に成可申候間、明日に而も申渡可然旨御意に付、翌日申談。

八月廿四日。前田吉德丹頂の鶴を飼ひ老臣以下に之を觀覽せしむ。

〔政隣記〕

八月二十四日丹頂之鶴御取寄、御用所前於空地、年寄中始御殿在合之人々に爲御見被遊候。

八月廿八日。幕府加賀藩より先に借上げたる金子の半額を返濟すべきを

この金額は三萬五千兩なり

告ぐ。

[改作雜集錄]

壬子享保十七年八月二十八日細井佐次右衞門殿御內用にて昨今參出。是は去年御指上の金子の內七萬五千兩、先追付御返し、殘りは來年御返之旨、御請等殘る所なき御首尾と云々。廿九日右の御禮として、御用番松平伊豆守殿、且御用掛りの御老中松平左近將監殿へ御勤らる。

一、九月廿二日御國へ金子四萬兩、今日遣さる。御馬廻組中村源兵衞・河合淸次郎差添らる。

一、十一月十九日御返濟金の殘、御國へ今日遣さる。與力永井源左衞門・久世傳三郎差添らる。

九月十四日。代官手代等非行多きを以てその採用を嚴にすべきを命ず。

[司農典]

一、御扶持人・平十村・山廻り・新田裁許等御代官手代共勤方、近年惡而不宜、殊更所々御收納米納方にも、色々方便之儀有之不宜、取掠仕躰に相聞え、別而堂形に罷出候手代共勤方惡敷、御藏米之內升目も不宜俵有之由に候。此儀は年久敷右抱置候手代共之內、納方不宜手立を仕者有之に付、其躰を見習申故に候。勿論御米納手代之儀者、人柄別而念を入相撰可申筈に而候。御米納方之儀、品に寄御上之御損失に成候儀者、御算用場より其方共へ紙面に而申渡有之通に候。近年勤方惡敷手代共之儀、外に而取沙汰も有之趣に候得者、召仕候者猶更可承知

在事に候。然る處其儘に而召仕候儀、內證子細も有之故に候。其上手代共身持分限を忘れ、不相應之仕形、畢竟奢たる儀に候事。

一、手代共召抱候時分、米銀等才覺之手筋有之者を先づ召抱申躰に候。此儀を申立に而召抱申躰に相聞候。左候得者人柄等相撰申儀者、彌等閑に可相成儀に候。或者急切に置替申首尾出來候而も、暇出候儀成兼申由に候。無據品に而押而置替申首尾に成候得者、又其不屆者之手筋より外之者は、召抱申儀不罷成樣に仕成置、剩借銀等附送仕故、外より召置候儀は一向難成趣に候。是等之儀沙汰之限に候。又召置候節、米銀之才覺を申付、借受召置、其者暇出候へ者、次に召置候手代之方より、米銀之跡指引抔爲相濟申儀も有之故、米銀之才覺第一に而、表立人柄之撰者自ら不屆に罷成、何与こやらん手代奉公者賣買之樣に成行申儀相聞候條、當時勤方惡敷手代共急度遂吟味、早速暇出可申候。此儀不吟味に仕置候はゞ、此方より人指に而可申付候。然る時は其方共越度に成る儀も出來申筋に候間、嚴重遂吟味置替可申事。

一、近年手代置替之儀有之候得ば、竊に無據方より賴越申に付、人柄之善惡に不構召置候旨、是又有間敷候。前段に書記趣共に候得者、右相願申越候者之方に子細有之候。向後者何方より賴申越候而も、其處に無遠慮、人柄等相撰召抱可申候。假令人々筋目有之者に而も、不宜儀相聞候はゞ、人指を以其差別可申付候。此旨可相心得候。諸郡惣番代抔は、改作所へ每度

罷出可申儀に候得者、向後指替申節は、人柄等相撰、前廉に手前共へ及斷に、指圖之上相極可申事。

右之趣共得其意、向後は勿論、當時召置候手代共、嚴重に相改可申候、以上。

享保十七年九月十四日

木梨九右衛門
中村勘太夫
大塚彌五太夫
栗田源右衛門
寺西半右衛門
坂井知右衛門
吉田宅左衛門
柴山三郎左衛門
稲垣傳左衛門

諸部御扶持人・平十村・新田裁許・山廻り中

九月十八日。江戸に於いて藩侯の供先より歸邸せしむる使者の通門に關して規定す。

〔護國公年譜〕

一、九月十八日向後御供先より御屋敷へ、御歩以下押足輕迄之内御使指越候節、御意と有之候はゞ、南御門より可相通旨被仰出候。侍分は御意と申候へば、只今迄も南御門、外より内へは相通候。御徒以下は、御横目足輕を外に指添不申候は而は、通不申候へ共、今般之趣に而は相通申筈に候。此儀は尤急切之時分之事に候。前々相知申時は、御横目より先達而不申遣候而は、相通不申御格之事。

九月二十日。前田吉德夫人の十三回忌法會を江戸傳通院に行ふ。

〔德川實紀〕

九月二十日、けふ光現院の御かた（常憲院殿御養女松姫君、松平若狹守吉德室、）十三年周忌の法會、傳通院にて行はるゝにより、奏者番西尾隱岐守忠尙代參し、また松平加賀守吉德がもとには、御使もて香賓銀二十枚をたまふ。

〔政隣記〕

九月廿日光現院樣十三回御忌に付、昨今於傳通院御法事有之、御名代御奏者西尾隱岐守殿を以、御香奠白銀二十枚御備、尤其節御參詣被成御座、御法事濟、御禮御登城。御法事御奉行奧村内匠、御法事御用御小將頭里見孫太夫・御用人澤田源太夫。但御名代西尾殿御出之節、

御目付・御納戸御徒目付兩人、竝御拂方組頭御詰有之。

一、廿四日御時服三内匠、紗綾二卷宛孫太夫・源太夫、絹二疋御臺所奉行原宗兵衛、染物三反宛割場會所・御作事御飾方金一兩御料理頭、金三百疋御臺所與力、二百疋御料理人江、夫々拜領被仰付。

九月。前田吉德使を上りて靈元法皇の崩御を弔す。

〔御年表〕

八月六日法皇・御所(御名識仁)崩御、御法名素淨靈源院殿と號す。御寶算七十九。依之九月、御使者大組頭氏家主馬貞清を京都へ差上らる。御馬廻頭渡邊五太夫を女二宮に遣さる。

秋。米作に蟲害多し。

〔御年表〕

一、今年西國筋四・五月頃より雨天がちにて、秋に至り作毛に虫付事甚敷、其形いなごに似たり。考ふるに負蝗かと云。仍之西國筋米以之外高直、御領分も秋中一石銀三四十星内外。

〔田中氏雜記〕

儀偉加越能三州往古より有之事なし。西國・中國・四國等は享保十七年壬子秋蝗災甚事也。其由いはれし、七月八日迄は何事も無之處、九日より蝗虫涌出候樣に出生、虛空迄も黒く成候程

に飛廻候。此虫蝗蛾とも、又負蝥とも云由。右に付田一反に鯨油四合充灑ぎ入候得者、虫は悉く致散落候。其所ゟ水堰入候て、水落之所に布嚢を當置候得者、一反の田に虫平均三斗餘充取集めて捨申候。其跡稍は一夜の中に枯候ゆゑ、皆不農に成候。尤公儀ゟ御届有之諸侯十七家也。依之家老をはじめ、知行皆無故、千石に十人扶持之圖を以て米相渡候よし。肥前佐賀領計にも、馬七千六百疋餘・牛六百餘頭斃死候よし。右之外風雨等に而損毛、幷虫も入、損毛之諸侯等二十七家、就中肥前の大村領ゟは、こがらと申虫出、人を刺事蜂よりも甚しく、百千計充群をなし人を刺候故、死に至る者夥し。日中は門戸を鎖し、往來を止め、夜中人々用を辨じ候旨。形狀は蜂に似て甚だ大きく候者也。前に記し候虫災の國々、牛馬數多斃れ死候子細は、虫の付候草を給候故と云々。伊豫松山領に麥を才覺有之、百姓一人に五勺充被充行候處、是を以て善政と申位に候由。右損亡之諸侯方へ、從公儀、一萬石より一萬九千石まで金二千兩充、十萬石より十四萬九千石迄金一萬兩充、三十萬石以上金二萬兩充御貸渡、萬石以下ゟも九千九百石以下千兩充、夫より以下夫々割合御貸渡返納之儀者、來々寅年より五ケ年賦上納被仰渡。

十月十日。前田吉德上野に於ける德川綱吉の二十五回忌豫修法會に參詣す。

〔護國公年譜〕

一、十月十日、來年正月十日常憲院樣二十五回御忌に付、御取越當月六日より八日迄、於上野御法事有之。十日御成、諸大名供奉、豫參如前々。中將樣御豫參之筈に而、曉七つ半時過御出、御宿坊常照院迄被爲入、御裝束御衣冠に而、五時御佛殿へ御越被成御座候處、大雨に而御成御延引、御自分御拜禮被遊、午の刻御宿坊え被爲入、御裝束御直し御歸館也。布衣御供御馬廻頭溝口舍人、御使番永原治左衛門、御表小將由比三左衛門、聞番中村助右衛門。素袍御供御大小將御番頭三輪藤兵衛、御表小將和田兵左衛門。

金澤に而右御法事、十月十日於神護寺御執行有之。御法事奉行前田大炊孝貴。

十月十八日。羽咋郡神子原村の土地に龜裂を生ず。

〔擢萃錄〕

一、十月十八日・十九日能州羽咋郡神子原村近邊土地に割目出來、こゝかしこ高下も出來候。人馬に死傷無之、村屋も倒不申候。時として有之儀之由にて、土人是を蛇ばみ・蛇ぐへ・蛇持・貝割などゝ稱候。地陷の類にても候歟。同日射水郡角間村にて、木戸山幅六十間餘、高さ二十餘丈崩候。其東南に猶裂口見え候よし、石動山之方へより候由。神子ヶ原村は公領御預地の方にもかゝり、此方にもかゝり候。御領分之分千五百六十步計、御預地之方百間四方計之

內、右之趣に候事。

〔御年表〕

十一月十九日・廿日能州羽咋郡神子ヶ原村御領・私領共、蛇持いたし候由、公儀へ御屆。蛇沈候所こ浮上り候所こ有之。

本文十一月とするもの前書と異なり

十一月十六日。前田重煕の遊び相手を選定す。

〔政隣記〕

十一月十六日龜次郎殿御遊び爲御相手、備後守樣御家來志村平左衞門二男九十郎十歲、和田甚五右衞門二男猪之助九歲、三十俵五人扶持新番並に被召出、御步横目竹内源六二男巨六九歲、二人扶持に小判二兩被下、小坊主に被召出。

十二月九日。幕府前田吉德の意を容れ、先に借上げたる金子の殘額返濟の期を延ぶべきを告ぐ。

〔政隣記〕

一、同年十二月九日細井佐次右衞門殿御出、御對顏、當暮御返濟金子七萬五千兩之儀、今年西國邊虫付損毛等多有之、御貸金も有之に付、御返濟之儀御延引被成候樣被遊度旨、先頃佐

左近將監松平氏

次右衞門殿を以、左近將監殿迄被仰達候處、則達上聞、早速心付申上候段、御機嫌に被思召候、左候者來夏中迄御延引可被遊旨被仰出由、今日左近將監殿被仰渡旨、佐次右衞門殿被申上候。依之同日夕方爲御禮左近將監殿に御出、御口上書御持參被遊候。

十二月十六日。前田吉德幕府より唐犬を受く。

〔護國公年譜〕

一、十二月十六日御城坊主組頭吉田長佐拜領分に而、松平專助殿より而、唐犬黑女犬一疋來る。右は公方樣御飼犬之所、とつぎ不申候。こなた樣には犬御數寄之由に候。御家來之内に懸樣存候者も可有之候間、被遣候間、子出生候はゞ可指上旨上意之由に而如此也。今日御作事方御門より引而參り、裏御式臺前に而、三十人頭手合之者に聞番立合爲請取候。尤吉田長佐ゝ罷越被居申候事。

十二月十九日。德川吉宗放鷹によつて獲たる鶴を前田吉德に贈る。

〔政隣記〕

十二月十九日上使御使番米澤十太夫殿を以、御鷹之鶴御拜領。翌年三月廿二日御披、御客有之。

十二月廿八日。大聖寺侯前田利章江戸城虎の門の助役竣成の功を賞せら

る。

〔徳川實紀〕

十二月廿八日歳暮の拜賀例のごとし。中略。松平備後守利章に時服十たまはり、虎の門の修理助役を賞せらる。

〔護國公年譜〕

一、十二月二十八日備後守様利章公今日御登城之所、今度虎ノ御門御普請御手傳相濟候に付、御懇之上意を以御時服十御拜領。右御用相勤候御家來、於殿中左之通被下候。

白銀三十枚・御時服三・御羽織一　野口兵部。

白銀二十枚・御時服三・御羽織一宛　菅谷平太夫・稻垣與右衛門。

白銀十枚・御時服三・御羽織一充　寺西勘左衛門・松山勘左衛門・和田勘五右衛門。

十二月。家中諸士に儉約の勵行を命ず。

〔典制彙纂〕

近年時節柄に而御上に茂御要脚御指つかへに付、御儉約專に被仰付事に候。御上にさへ右之通に候へば、御家中之人々は、尚更急度儉約不仕而は難取續可有之候。表向者儉約を用ひ候樣に仕成候而も、內證に左程に無之時は、其筋も難立候。左樣之所者面々覺悟に有之儀に

候。相省候而可成儀は致省略、勝手取續候儀肝要に候。此等之儀者當秋御參勤前、拙者共迄御意之趣ニ有之候。儉約之儀は先達而相觸、一統承知之事に候へども、右之思召故猶更申達候。今年は存之外米直段も宜罷成候。ヶ樣之節諸事心付可申儀、自然不申候而ニ相知申事に候。何これらは忽之躰に相聞え候面々も有之候。右思召之通に候へば、萬端相愼可申儀に候。此段何茂相招可申談候へども、左候而者事立候故不能其儀候間、御手前より相組中内々可被申談候事。

壬子十二月

是歳。雪大に降る。

〔政隣記〕

今年金澤深雪、十月廿八日・九日比より雪降、終に不消、段々降積、十二月頃之雪、去年より一尺餘も深雪。

享保十八年

正月朔日。前田吉德江戸に於いて初て大聖寺侯前田利章の年禮を受く。

〔護國公年譜〕

一、正月朔日如例御登城、御下被遊、年寄中等初御禮等御規式如前々。備後守樣も御登城相濟、被爲入、御太刀御目錄披露御家老役前田修理御馬代持參、御表小將年頭御禮被仰上候。此儀中將樣に初而之儀也。

正月十五日。前田吉德登營してその政績に對する賞詞を受く。

〔政隣記〕

正月十五日例之通御登城之處、於御座之間、御國許御仕置跡々より宜儀被聞召候、次に去年御返金之事、虫付に付米可被召上哉之儀、早速御心付被上、御滿悦との段々、御懇之上意被爲蒙仰。依之御禮西御丸幷御老中・若年寄衆不殘御勤、御歸館之上御普爲聽、頭共にも申聞候樣御意之旨、內匠殿御演述有之。同日廣德寺に御名代奧村內匠被遣候。是御仕置之儀、偏に御先代之御餘光とい思召之旨と、一統奉感稱候。右御弘、於金澤も同月廿九日人持諸頭に、左之通御月番橫山大和守殿御演述。依之爲恐悅、同日御月番御宅に一統參出。

今月十五日御例之通御登城被成候處、於御座之間段々御懇之上意、御領國御仕置も跡々宜段被聞召及、一段之儀被思召候旨、被爲蒙上意、思召掛も無御座御仕合、重疊有難思召候。此段何茂可申聞旨被仰下候。

〔可觀小說〕

一、中將樣當十五日御登城被遊候處、於御座之間、去々年御手傳金之儀早速御許容、其後西國邊損亡に付、早速被御心附被仰上候趣、御滿足被遊候旨上意にて、御時相濟御退座之處、又被爲召候而、御領國御仕置宜敷段被聞召、御喜悦被思召候（一說に猶又無油斷可申付段も上意之由との事也）段、無比類御首尾、恐悦至極之御儀御同意奉存候。依之西御丸にも御登城、御老中并石川近江守殿・若御年寄迄御勤被遊。且又御歸館以後、廣德寺江爲御名代奧村內匠被遣候。今般之御首尾、曾而中將樣御手柄には不被思召候、偏に松雲院樣御蔭与被思召候由御意之旨、潜に奉承知候。此儀別而奉恭喜候御事に御座候。於殿中細井佐次右衞門殿江右上意之旨御咄被遊候に付、御手柄可申上樣無之旨被申上候得ば、聊以此方に而は無之候、先祖以來之家法を守申迄之儀与御挨拶に付、御家法をよく〳〵御守被遊之儀、則御手柄と奉存候旨被申上候段、右上意之趣并此一件も、皆細井殿即日被參候而、組頭衆・聞番衆江物語之趣に御座候。頭分江於此元被仰渡候趣は、御懇之上意と迄に御座候。此外にも段々御懇之儀共御座候旨申候得共、是は相知可申樣も無之儀、附會之妄說共と奉存候。中飛脚罷越候間、尤各樣御拜聽と奉存候へども、猶更申上度如此御座候。

正月十九日。米價騰貴したるを以て貧民に廉價販賣を開始す。

〔改作雜集錄〕

癸丑享保十八年正月十八日被仰渡候趣、御領國米價段々高直に罷成、金澤米七十三匁、能登・越中米六十四・五匁に成、末々困窮に及、餓孚も出來可仕躰の由。依之明十九日より、御城下に四ヶ所、能登・越中に五ヶ所賣場相極り、時々直段半分に圖り、買向候人々毎に三升宛相渡中等と云々。

加越能小賣場所

金澤四ヶ所 一日八石宛三十二石　地廻御郡方 一日八石宛　松任 一日五石宛

鶴來 一日五石宛　小松 一日十石宛　宮腰 一日十石宛

本吉 一日三石宛　津幡 一日五石宛

都合加州分七十八石

飯山 一日五石宛　富木 一日五石宛　所口 一日十石宛

道下 一日五石宛　輪島 一日五石宛　飯田 一日五石宛

宇出津 一日五石宛

都合能州分四十石

今石動 一日十石宛　氷見 一日十石宛　高岡 一日十石宛

城端 一日五石宛　岩瀬 一日五石宛　滑川 一日五石宛

魚津　一日五石宛　泊　一日五石宛　小杉　一日五石宛

都合越中分六十石

惣高百七十八石

右の通、享保十五年米・十六年米之内を以て小賣仰付ける。

正月廿一日。前田重熙着袴の儀を行ふ。

〔政隣記〕

正月廿一日亀次郎殿御着袴。御年五。依之御時服五・御布上下二具・干鯛一箱、御近習頭羽田傳左衛門を以被進之。傳左衛門に御手自御熨斗被下之。右被進候御熨斗目御上下御着用、追付御出、御居間於二之間御禮被仰上。御太刀披露・引共遠田勘右衛門、追付御いし三方配膳役福島左兵衛御前に上之、御手自被進之。御前御熨斗目御半袴、勘右衛門・左兵衛熨斗目、其外はふくさ小袖・布上下。

是月は大盡なり

正月晦日。鹽川安左衛門の家に於いて伎藝を觀覧する爲集れるものを檢擧す。

〔淺新秘策〕

一、享保十七年冬、他國より伎藝者多呼來し興行仕者有之沙汰取々有之候。町人幷寺方に別て宿致置、士家にも間々有之旨に而、乾度相愼み、其儀無之樣にと年寄衆も諸頭示談有之、組々申渡候。寺者大蓮寺・三法寺・養智院、此三ヶ所別して宿本茂仕、見物人手前より銀三匁宛取候て、助成に仕候旨沙汰有之候。寺社より乾度被置候旨候。然處冬中者一端相止候事にて、春になり、人持之内にも其外士家にも、興行有之候樣子に候。依之正月晦日夜、鹽川安左衞門宅御馬廻組六百石休安嫡子なり。にて興行之儀、盗賊改奉行茨木覺左衞門承り出し、宵より組之足輕數十人代々付置、退出仕候節召捕候樣に申付置候。但刀を帶し候者もいゝ分者、見遁し遣候樣に申含候。夜明前に成り段々罷出候處、段々召取候。十人計取候て役所まで連行候。伎藝之者一人茂不罷出候。見物之男女其樣子に驚き、數日鹽川宅に隱れ居候も有之、或者形を替、赤合羽を着し酒樽を持、小者に似せ罷出候茂有之旨。二月二日迄は晝夜門前等に付置候。組頭溝口舍人在江戸に付、組頭伊藤彦兵衞承り屆、最早左樣之興行者不仕筈之儀に候、足輕共爲引候樣に仕度由申達し、其上にて引擧申候。伎藝之者共者、十一・二日頃まで罷在、本國に歸度旨願候由。乍然安左衞門宅よりかへし申儀、何とも難成事ども有之に付、十二日夜、伴時之進御馬廻組・五百石。里見彌四郎御小將組紋太夫嫡子。宅へまで遣之、兩人宅にて旅拵仕、夜中に發出爲仕候旨。扨町人共は夫々樣子承り屆、覺左衞門より兩奉行まで相達候。奉行手前に而も承り屆候。今月十日

笹川休安享保十八年五月死年八十八

頃、且又廿日兩度、押込等急度申付候町人如左。安左衛門事は、内々沙汰まてに而、此度之御詮議も無之候。當月頃老父休安八十六歳にて病死に候。

追込　道具屋　市右衛門

爲差扣八人

島屋　與三兵衛
備前屋　孫兵衛
福久屋　六右衛門
森下屋　十兵衛
二口屋　安兵衛
升屋　源右衛門
京屋　宇右衛門
野々市屋　與左衛門

二月二日。幕府加賀・能登の農民の食料として雜穀を作るべきことを命ず。

〔徳川實紀〕

二月二日云々、また近江・伊賀・伊勢・志摩・飛驒・美濃・尾張・三河・遠江・駿河・信濃・若狹・陸

奥・出羽・加賀・越中の國々御料私領、新穀熟さば山陽・西海・四國等へつかはされ、賑救せしめらるべければ、各國の農民おのが食料に事かゝざるため、雜穀をつくるべしとなり。越後・越前・能登の國は、私領にのみその趣を令せらる。

二月。改作奉行等勸農に努力すべきことを十村に諭す。

〔司農典〕

去年閏月も有之に付、當春は野早成年に候間、農業相勵可申儀一統油斷無之等に付、其趣年初より申談候處、例年与は違、何も御用手早く相仕廻罷歸候段、尤至極之儀に候。依之猶更拙者共存寄之趣申渡候條、夫々小百姓迄可申渡候。且亦今年改作方之了簡、一々左に相記候趣共得其意、嚴重相心得可申候。去年西國不作等之趣聞及候而は、別而勢子を入可申心得は、十村中深く存念に可有之事に候。何分に相勸候而も、大變に出合申儀者格別、不情に而不作に仕成候儀者、皆役人之心立厚薄に可寄儀に候。畢竟人別に可令詮議候間、今年は尙更組々小百姓共嚴重に相勸可申、手捌人々工夫可有之事に候。去年他國不作に付、御領分町方諸商人共手廻惡敷、困窮之申立も有之、沙汰之限に候。右之取沙汰に拘り、又者稼取入組申村々者、其日切に取請候小錢之方へ先ヅ打懸り申に付、自ら毎年手後れに罷成申趣に相聞候。惣而小百姓・頭振抔、商人同意に心得申心底無之樣に可相心得候。近年相續米下直に候處、當春

僞に高直に相成申儀に候得者、當分困窮之儀は一統之趣に候。隨分心底を打碎、仲間及示談、彌間作丈夫に可申渡事。

一、村廻り之儀近年不精之趣に付、去春より毎度申渡候得共、中々行屆不申、且而不廻もい有之候。今年は人々支配之村々、自身・悴代り〳〵相廻り、一村々々毎日荒起之躰書帳記、時々改作所へ可指出候。人々支配村數之內、百姓之心得一統には無之筈に候間、例之不心得成村々、當々役人共存る所可有之品に候得者、左樣之村々每日東西を分け、附添居申程に心得可申候。惣而荒起深く耕し候得ば、苗根好株生付、實乘慥に成立、水旱之難事多分は遁申事、昔存所之通に候。下人共農仕事惰りたる躰、其方共不絕野廻り令見分候はゞ、自ら精に入可申事。

附り、拙者共植付并に草拂見分に廻り候節者、田形自然与手入宜敷致置候。此趣を以相考候得ば、其方共又者悴等度々相廻り候はゞ、其益も格別に可有之事に候。

一、今年大變も無之、支配之村々不精に而不作いたし候はゞ、十村不心得之趣嚴重に顯れ可申候條、兼而此旨可有心得事。

一、荒起相濟植付に及候而は、水懸り草修理、何方より何方迄相廻候見分之趣、紙面に而可及注進に候。彼是勤方烈敷可令難儀候得共、安心難成、唯今迄之通心得候而は、御奉公大切

に志之譯も相立不申候條、晝夜心懸、諸百姓作德無益之品に取失ひ費不申樣、役人中一統心を合候はゞ、末々迄心得不仕筈は無之候。一兩年其方共勤方段々念を入申躰、人別相聞候間、尙更是等之品々嚴重可得其意候、以上。

丑二月

中村勘太夫
大塚彌五太夫
粟田源右衞門
寺西半右衞門
坂井知右衞門
吉田宅左衞門
芝山三郞左衞門

諸郡御扶持人・十村中

三月四日。窮民に米穀を貸與することを許す。

〔袖裏雜記〕

一、御領國御救之御貸米被仰付、惣御米高四萬二千七百九石五斗也。御算用場奉行等へ申渡左之通、此外之委曲爰に略す。

御算用場行へ、三月四日三人共相扣渡之。

近來米直段下直に候處、去暮以來俄に高直に成、町方・御郡方及困窮候樣子に付、爲御救小賣米被仰付候へ共、未々至而難儀仕者共も有之躰に相聞え候故、右族之者へは町方・御郡方等御貸米被仰付候條、被得其意、夫々支配綿密に遂吟味、貸渡候樣に可被申渡候。前々十村・肝煎等手前に而いたし方不宜、末々行屆不申所も有之樣に取沙汰も候條、廉直に仕候樣に可被申渡候。尤此趣所々奉行等へ可被申談候。百姓之儀者、去年作も爲指難事無之に付、御貸米可被仰付譯に而ハ無之候へども、時節柄に而困窮之樣子に付、今年之儀は各別之趣を以、一統御貸米被仰付事候。若十村共心得悪敷、申渡忽に候はゞ、ケ樣に結構に被仰付候處、末々おろそかに存、稼に怠り困窮仕、御上へ靠れ候願之仕形も有之候はゞ、十村共可爲曲事條、是以後一辧付不申樣急度被申付、作方も丈夫に仕候樣に可被申渡候。

右之通御貸米被仰付候儀故、小賣米は相止事。

癸丑三月

寺社奉行三月四日成瀬彈正へ相渡。

町奉行へ 一通宛 同日小堀左兵衛へ渡。

近年米直段下直に候處、去暮以來俄高直に成、町方御郡方等及困窮候樣子に付、爲御救小

賣米被仰付候へども、町方等末々至而難儀仕者共も有之躰に相聞候故、右族之者ゑは御貸米被仰付候條、被得其意、夫々支配絹密に遂吟味、貸渡候樣可被申渡候。

右之通御貸米被仰付儀故、小賣米は相止候事。

癸丑三月

三月十一日。前田吉德、三條西公福を傳奏屋敷に訪ふ。

〔政隣記〕

三月十一日、三條西前大納言公福公、御當職傳奏爲勅使、今日御下向御着府。御旅館傳奏屋敷ゑ御見廻、御長袴被爲召、御供人羽織、御玄關御供組頭・御使番・御表小將熨斗目上下、先達而御大小將御太刀馬代持參。十九日にも被爲入。十八日には公福公本鄕御邸ゑ被爲入。いまだ御作事不全に付、御斷被仰入候得共、於京都御屆も被成候間、御見舞可被成との御事に而、午刻御出、申下刻御歸、御饗應・御拍子一調物等被仰付、組頭以上三條樣ゑ御目見被仰付候。頭以上幷御給事人者熨斗目・半上下着用、其外御式臺取次等はふくさ小袖・布上下着用。委細御作法前々之通。

三月十一日。金澤に木の實降る。

〔聞書〕

しいた木の儀

一、同年三月十一日金澤大西風、同夜所々木の實降る。形ちあづきの如き物、并にへばなしの實の如きの物と入交り降。此節江戸在住之者には、宅々より爲見物江戸へ來る。但大豆ふると申ならす也。

〔續漸得雜記〕

一、享保十八年癸丑三月十一日御國廻りに五穀降申候。雷雨霰に交ふり申候。大豆と申はしいた如く、喫て試候者有之候所、しば／＼いたし噛しあがたく、味苦く候由。小豆と申は椇子の實のごとく、又角小豆のごとく成も有之候。伊勢より段々上方筋より北國降り申候事。

此年加藤氏大坂御屋敷相詰居申候。三月十一日具足屋七左衛門作吉へ參詣いたし、途中にて降り候五穀を拾ひ候をば、致持參見せ申候。成程大豆・小豆の形には相見え候得共、多くはわれひしげ候体にて、全く大豆・小豆とは見え不申物に候。同日に諸國如此降候は不審成事に候。何とぞ外國等に大風有之、其所の穀物を吹上候にやと申事に候。

四月十三日。前田吉徳側室清月院の一周忌法會に大槻朝元藩侯の代參を行ふ。

〔政隣記〕

四月十三日清月院殿一周忌に付、於廣德寺御茶湯有之、御横目御用人も相詰、御焼香大槻傳

藏長袴着用相勤。

四月十七日。前田吉德、德川吉宗に隨ひて江戸城紅葉山の靈廟に豫參す。

〔德川實紀〕

四月十七日紅葉山御宮に御參あり。大納言殿にも同じ。豫參は松平左近將監乘邑・松平伊豆守信祝・松平右京大夫輝倫・黑田豐前守直邦・少老水野壹岐守忠定・御側有馬兵庫頭氏倫。行列は土屋但馬守陳直・井上河內守正之はじめ三十五人。松平加賀守吉德はじめ四位以上八人さらに豫參し、陪拜は紀伊中納言宗直卿なり。

四月廿四日。大聖寺侯前田利章の子利道江戸に生る。

〔政隣記〕

四月廿四日備後守樣江戸本鄕御邸に而御男子樣御出生。五月朔日御七夜に付、御小將頭里見孫太夫を以、御產衣三重・二種・千疋・御刀信國、御脇指相州行光被進之。御名被進候樣就御願、同十九日御用人澤田源太夫御使に而、松平造酒丞樣与被仰進。

四月廿六日。金澤傳馬町より出火す。

〔大野木克寬日記〕

四月廿六日。今日午刻才川傳馬町より出火之處、俄風起殆及大火。當番に付將監・隼人早速金谷御文庫に人數召具出馬。其外兼而如御定、組外番頭・同組衆・足輕頭・組足輕召連參出、本組明組之與力參出。監物・左京・長太夫越後丸に罷出候。左京・長太夫增火消之儀老中申渡、火事場へ馳向、餘燼次第に他へ推移、才川橋甚危相聞得候に付、將監彼所に馳向防候。將監代は、監物金谷に可相詰旨、月番土佐守申渡之。將監には則監物申傳候にとて是又言達に付、監物金谷へ馳來り、將監へ右之趣傳之。依而將監直に橋へ罷向、監物は金谷に相詰、追々增火消之面々馳向、夫々消口之働有之候云々。申下刻鎮、金谷退散各歸宿訖。

〔政隣記〕

四月廿六日金澤才川川除町伊藤内膳小者黒助宅より、午刻出火、申刻鎮。御歩並以上類焼六十軒、寺院三ヶ所、惣高七百九十五軒、類焼七軒、壞家六ヶ所、木戸番小屋十五、橋二、土藏五ヶ、死人男五人。右之趣五月二日江戸に申來、公儀に御屆有之。

〔御年表〕

一、五月二日子ノ刻金澤より早飛脚到來、前月廿六日午後刻傳馬町伊藤内膳小者九郎助与申者家より出火、及大火、同廿七日未刻金澤罷立、只今參着仕候。右火事は、廿六日申刻鎮り申由。

四月廿六日晝九時迄、才川川除町伊藤内膳小者より出火、同七時過鎭火。類燒左之通。

一、四十二軒　才川川除町
一、三十軒　同町支配違
一、八十七軒　後傳馬町
一、四十一軒　後傳馬町支配違
一、二十六軒　横傳馬町
一、五十七軒　傳馬町
一、四軒　傳馬町支配違
一、二十七軒　下傳馬町
一、五軒　下傳馬町支配違
一、十七軒　五枚町
一、一軒　五枚町支配違
一、十九軒　長門町
一、十二軒　長門町支配違
一、四軒　相撲町
一、六軒　相撲町支配違
一、三十二軒　河南町
一、廿三軒　片町
一、八十三軒　河原町
一、一軒　河原町支配違
一、十六軒　竪町裏丁
一、四十五軒　大工町
一、十一軒　大工町支配違
一、五十三軒　大工町
一、五十八軒　十九間町
一、十八軒　十三間町
一、七軒　十三間町
一、二軒　立町裏丁

右火事公儀に御屆之趣左之通。

惣高七百九十五軒

内　百二軒　侍幷足輕　　六百八十一軒　町家

五軒　寺社　　七軒　壞家

六ヶ町　木戸　　十五ヶ所　番小屋

二ヶ所　番小屋　　五つ　土藏

一人　死人男

〔加能越故事問答〕

享保十八年四月廿六日傳馬町後養知院前より出火、風烈く、木倉町・傳馬町・出大工町・古寺町・河原町・十三軒町より、五枚町・橋場町等悉く燒失。

四月廿七日。幕府、諸侯以下の妾を正妻とすることを禁ず。

〔護國公年表〕

一、近年士太夫之家、妾を以妻とする事風俗之樣に成來、至賤女にても男子等產候得者、多分は妻と稱候。松雲公御嫌にて、御在世之内其願仕者殊之外に稀に候。夫さへも保科肥後守樣、御召使之女中を御內樣と申に被成候而以後、御大名にも如此に候得者不苦儀、末々迄も

卯法院は雨寶院失火の時刻前文と異なり

彌其趣許多に成来候。當四月廿七日御老中酒井讃岐守殿御宅に而、諸大名以下へ御渡被成候御書出之趣如左。

緣組願申上、婚儀相調候外者、妻に仕候儀、向後可爲無用旨被仰出。先年申達候以後屆置候而、妾を妻に仕候者其通にて、以來之儀此度被仰出候通可相意得候、以上。

丑四月　日

四月廿九日。金澤犀川雨寶院火を失す。

〔大野木克寛日記〕

廿九日今曉丑後刻才川雨寶院より出火、神明社頭に火移、折節風强甚及大火。依之將監・隼人金谷に早々參出、其餘之輩段々參出、追々增火消馳向消之候。卯後刻鎭、各金谷退散令歸宿。打續大火近年稀有之事也。

〔政隣記〕

四月廿八日夜子刻才川卯法院より出火、北東風に而及大火、神明之方に燒出、野町邊類火。廿九日卯下刻鎭。五月四日告來、公儀に御屆、惣家數五百三十七軒、内御歩並以上十軒、寺社七軒等也。

〔御年表〕

一、五月四日金澤より早飛脚到來、先月廿八日夜九時過才川雨寶院より出火、北東風に而及大火、神明之方江燒出、夫より野町二丁目迄兩側、足輕町餘程燒失、千日町中程迄、翌廿九日朝六半時鎮火。

惣高五百三十七軒

内	五十一軒	侍并足輕家	四百五十二軒 町家
	七軒	寺社	二十一軒 百姓
	七軒	壞家	一人死人男
	八ヶ所	番所	四ヶ所木戸
	二つ	土藏	五つ髮結床
	二ヶ所	橋	

五月七日。前田吉德の女喜代姫江戸富士權現に參詣す。

〔政隣記〕

五月七日喜代姫樣茶屋町富士權現江御宮參、去々年龜次郎殿御宮參御振合御同事。但去々年無之趣等左之通。

步御供御大小將橫目兩人共服有之難罷出に付、御表小將橫目武田判太夫富士御待請、御近習

頭羽田傳左衛門騎馬御供、御近習御馬廻頭松尾縫殿、御用人澤田源太夫。

一、御神納白銀十枚・行器一荷赤飯・御湯立料白銀五枚、瑞泉院ゟ縮緬二卷、先達而御大小將使を以被遣之。從中將樣喜代姬樣ゟ、今朝御近習頭野村七兵衛御使に而、御時服五つ・御箱肴被進之。從喜代姬樣中將樣ゟ、御廣式御用達河內山半左衛門を以、干鯛一箱・御樽代三百疋被上之。

五月十九日。富山侯前田利興卒す。

長門守は前田富山侯前田利興

出雲守は前田利隆

中將は前田吉德

〔政隣記〕

五月十六日長門守樣近年依御病氣、江戶御邸に御隱居被成御座候處、當月初より御指重、此間御大切に付、今日御使御使番永原治左衛門を以、御夜着二・御蒲團一・串海鼠一籠被進之。右に付出雲守樣爲御着病御出府被成候樣被遊度旨、從中將樣前田信濃守殿・細井佐次右衛門殿御兩方を以、十七日に御用番松平伊豆守殿迄被仰込候處、十八日御願之通与被仰渡、出雲守樣ゟ御奉書相渡。此御禮從中將樣も御使者被指出候樣御指圖に付、御小將頭富永數馬伊豆守殿ゟ被遣候。然處十九日午刻御卒去、御年五十六。御邸中普請鳴物等三日遠慮。金澤に而も日數同斷。但普請は一日。御法號安祥院殿。廿二日御舊宅ゟ上使御奏者井上河內守殿を以、御香奠白銀三十枚御拜領。從此方樣も聞番御使を以御用番迄御禮被仰上候。御遺骸富山へ御移に付、

六月四日御出棺、御附使者富永數馬。あなた御門前爲警固御先手村田半助足輕小者召連、并御横目割場奉行も罷越。

一、出雲守様御看病御出府之儀、五月廿一日御承知、同日御發駕之處、御卒去之儀越中府見に而御承知。夫より御歸邑、於富山日蓮宗大法寺、廿二日・廿三日御法事有之。御代香之御使人持組富田次太夫、兩日共大法寺へ相詰。廿三日御代香相勤、御法事差定、御逮夜誦經典法華懺法大施餓鬼、御當日法華頓寫諷誦法則散花供養。江戸於廣德寺も六月十日御茶湯有之。御代香御家老前田修理、御香奠持參御大小將。

五月廿九日。石川郡の曳舟業者騒擾す。

〔後新秘策〕

一、五月廿九日曉天に、宮腰島田屋平兵衛宅へ、近郷川引いたし候者共二百餘人（八百人計とも申候、）押懸及騒動候。其譯承り合候處、宮腰奉行本保當右衛門迄、馬持十九人之者共願候は、驛馬にて金澤へ付出す外、兩川尻より兩橋下まで川引仕候者數多に付、馬釋難儀仕候間、向後は川引之者より、一駄に鳥目十文宛指出候様に仕度由願候。川引之分は、大野・粟崎其外當右衛門支配達ゝ多候處、不承合候而願之通申渡候。依之川引之者どもより、馬一駄分に錢十文宛可指出旨、問屋手前より申觸候。此儀に付川引之者ども、新格之儀、殊に一駄に十文与は過分

馬釋は馬借

之儀、決而有るまじく事に候。此儀今日中に常右衞門ゟ申直し、如本に可仕旨申候。馬持は、誤り候間明日まで相待可申候由申聞候得共、中々合点不仕旨申候。家を茂潰し可申抔とひしめき候に付、無是非最前之願人共早速常右衞門宅ゟ罷越、右之段申達候。左候はゞ如本と申合遣候。依之川引之者何れも退散いたし候。御郡方之者は一人も相加り不申候由。依之常右衞門を御算用場ゟ相招、改作奉行兩人寺西半右衞門吉田宅右衞門密々樣子相尋候。常右衞門申候は、川曳之者共にくき仕形候間、頭取之者二・三人も爲捕、牢舍可申付歟と申候。兩人申候は、川曳之者方には申處道理も有之候。願間敷事を願候は馬持ごもに候得ば、先馬持共之内も急度申付、其上には川曳之者も、乍道理大勢徒黨仕候處に候得ば、縮も可有之事候。夫とも頭取難知旨承り候。二・三人召捕候とは如何に候哉与尋候得ば、頭取は不相知候得ども、此度連名之書付出候其筆頭之者二・三人も、急度可申付哉与存候旨申候に付、兩人申候は川引之者共をさ樣に被申付候はゞ、彌如何樣之儀可相計も難知候。先新格願候者之内をも、急度被申付候はゞ可然与申聞候處に、此度之儀馬持共より願候儀は無之候。此方よりケ樣に申付候儀に候由申候。此處何とも首尾難心得事に付、兩人先其分仕置候由。

〔浚新秘策〕

六月。金澤に於いて夜中提燈を齎さずして往來することを禁ず。

一、昨六日夜新堅町にて、亭主番徳松屋八兵衛前を、挑燈無之者罷通候に付、火をともし候樣に申聞候處、無構通ぬけ候故、此間別て被仰渡有之候。一向難通候。無提灯候はゞ、先へ送り申儀は格別之旨申聞候處に、我等は安房守家來にて左樣之儀は能存候。辻送りにては不罷成候。石坂邊へ用事候て罷越候。石坂迄可送由申に付、石坂へ送り候事は難成候。御宿迄送り候法に候。左樣に仕候はねば、安房守樣御家來に候哉實正難知候由申聞候處、左樣には難成とて猶通ぬけ可申と仕候に付、八兵衛罷出候處に、むなぐらを取かため打擲可仕躰に付、荻野屋平助と申者も罷出おさへ置、其内に町下代森川政右衛門へ迄及案内候。政右衛門足輕ども相催し可罷越と仕候内に、茨木覺左衛門手合い廻足輕五人參り掛り承屆、畢竟右之者申分譯立不申故、法い通り送り候樣に申談候に付爲送候由にて、政右衛門半途にて出合此方へ及斷置候上、覺左衛門手合の足輕共指圖にて爲送候譯に而無之候。騷動にも及候處い譯立不申候。亭主番仕樣不宜候へば、其段町奉行中へ相達可申候。若御手前不都合に候へば、是以其分に難仕候間、本い處八兵衛宅へ迄可罷越候。八兵衛宅にて承屆可申と申候處、揖子は安房守家來森村長兵衛と申者にて、唯今之首尾は了簡違にて候間、何分にも可然可仕旨申候處へ、長兵衛傍輩御小將組い由藤江圓助、御徒組之由野口岡右衛門と申者兩人出合、右長兵衛酒に給醉候躰に候。傍輩に紛無之候。其段兩人請合候由申に付、それを贐合に致渡遣候。餘程い

騷動に及、町にも釣挑灯迄出し候程の儀にも御座候へ共、右之首尾にて渡し遣候上い儀に付、表向より押立御付届には不及候。此間被仰渡候御縮方に候へば、不埒なる樣にも後日に御聞被遊候ては如何しく候故、私へ迄爲知置候間、其内內證に申上置可然旨、稻垣與三右衞門今日私宅へ罷越申聞候、已上。

六月七日　　　青地藤太夫

安房守樣

四月以來每度火付盜賊之取沙汰有之候。今月安房守殿御用番に成、急度御廻狀有之体。町も夜番人い外增番指出し、町々夜中火をともし不申者は通し不申樣に被仰渡候事。

七月四日。石川郡笠舞村にある非人小屋の增築を命ず。

〔袖裏雜記〕

七月四日

一、橫山兵庫罷出何もへ申聞候は、御郡方困窮之躰に付、夫に付先日申聞置候非人小屋入人、元祿年中に多有之時分は、年寄中等より申渡など有之人高多入申候哉、無左候而も、困窮故おのづから相增申趣に候哉否之儀、非人小屋懸り與力共江相尋候へ共、元祿年中之留帳共、寶永年中に紙漉返しに申付候故、其時之樣子相知不申候。人數附之帳面一冊有之候付而、其

趣與力共書付出候故、別紙一通差出候に付、各僉議之上當時ゐ有人高七百人計に候故、今
二・三百計入人申付、大概二千を限に入、猶更様子をも見候而可然与、則兵庫へ申渡、右二千
人計を限なごゝ申儀には、與力共心當之事に候へば、外人承不申様に可相心得旨申聞候處、非
人小屋當時事之外狭く御座候、先年小屋九筋御こぼさせ被成候間、右之内二筋程今般出來被仰
付候様に仕度旨申聞候に付、其通申付可然与僉議之上、御作事奉行金森多門ゟ申渡候處、先
年こぼさせ候材木御園にたゝみ置申候間、右之材木を以可申付之由申候付、成程其通早速可申
付候。右九筋之内、只今二筋建申儀に候へば、尤新出來と申譯にてはなく無之段も申聞る。

[袖吏雑記]

覺

一、四千四百五十五人　元禄十一年十二月晦日在人高

一、三千六百八十五人　同十二年正月朔日より同十二月晦日迄新入人高

内

八百六十九人　石川郡

四百三十一人　河北郡

二百八十七人　能美郡

七十二人　　　　羽喰郡
七人　　　　鹿嶋郡
三人　　　　鳳至郡
一人　　　　珠洲郡
九百二十三人　　　　礪波郡
五十三人　　　　射水郡
四十三人　　　　新川郡
九百九十六人　　　　金澤
〆此内
三千六百十五人　　　　元祿十二年正月より同十二月迄出人死去人引
殘而
四千五百二十五人　　　　元祿十二年十二月晦日在人高
十三年より段々減申候。
右先年非人多入申儀相考書上申候、以上。
七月　　　　加藤七郎左衞門

小田傳太夫
松原新五右衛門
土田孫左衛門
榊原市郎左衛門

横山兵庫殿
奥村彈正殿
松原善右衛門殿
小堀左衛門殿
稻垣與三右衛門殿

又與力紙面之内に、元祿年中以後ニは別而多入申儀無御座候。元祿十三年以後には、享保十七年十月頃迄には、大概千四百人より多入候儀無御座候處、去年十一月頃より少々宛多相成、當時千七百人計に罷成申旨有之。

七月十八日。前田吉德の女喜代姫髮置の儀を行ふ。

〔政隣記〕
七月十八日喜代姫樣御髮置。白髮御用人澤田源太夫上之。御時服二、妻に白銀五枚被下之。

其外御規式等先例之通。

七月十八日。大槻傳藏知行を加增せらる。

〔護國公年譜〕

一、七月十八日百石御加增大槻傳藏御近習都合五百八十石に成。

七月廿七日。前田吉德就封の暇を受く。

〔政隣記〕

七月廿七日、上使松平伊豆守殿を以御暇。御拜領物如御例。從大納言樣も、黑田豐前守殿を以、如御例御拜領。

七月廿八日。前田吉德就封の爲德川吉宗に辭見す。

〔德川實紀〕

七月廿八日月次例のごとし。松平加賀守吉德就封の暇たまふ。

〔政隣記〕

廿八日御登城、上意御拜領等如御例。奥村内匠・前田修理御目見等、其外御弘等前々之通。

七月。風邪大に流行す。

〔政隣記〕

今月上旬より下旬迄風邪江戸中流行、諸國共同斷に候得共、江戸・金澤中旬別而多流行、尤少宛之輕重は有之候得共、都而熱强、或は咳出或は絶食、輕き傷寒之如く、老人又は長病等之者は是に而死する者も多く候。大体千人之内二・三人ならでは風邪遁れ候者無之躰、西國より東國迄右之通夥く、其外不至國は無之与云々。右に付在江戸之頭共病人多有之、御使等相勤候者一兩人ならでは無御座候。是以來相煩可召連從者無人に付、頭分ゟ御貸人相渡候御格は無之候得共、此節は相渡可申与奉存候。併御表小將・御大小將二百石以下ゟは御貸人相渡、三百石以上ゟは相渡不申候得共、是ゟも相渡可申と奉存候旨、内匠殿より言上之處、伺之通ヲ被仰出。依之右人々より願次第御貸人渡候事。

八月七日、幕府加賀藩よりの借銀殘額を返濟す。

〔政隣記〕

一、同年八月七日、御老中酒井讃岐守殿より、直々御邸ゟ細井佐次右衛門殿御越、御借銀御返濟相殘候分御返被成候旨之御覺書、讃岐守殿御渡之由に而、御持參御對顏有之。

但、御喜悅之趣上意も有之に付、御用番并松平左近將監殿ゟ御勤被遊候。

八月十九日、前田吉德江戸を發して歸國の途に就く。

〔政隣記〕

八月十九日江戶御發駕、廿九日御着之筈に候處、關東に而雨天路次惡く、九月朔日御歸城。

但、御供御家老等去秋之通。

九月朔日。前田吉德金澤城に歸る。

〔政隣記〕

九月朔日辰刻御着城、御待請等之御作法は御例之通。同日四時過御大廣間ゟ御出、例月出仕之面々御目見。同日江戶ゟ之御禮使横山圖書發足、御目見等如御例。

九月十八日。前田綱紀の外孫永君、東宮御息所たるの勅許を得たるの報金澤に達す。

〔年　表〕

九月十八日永君東宮御息所成勅許の旨申來るに依て、二條殿へ御祝儀の御使者御步頭北川久兵衞暉矩、十月廿四日京都に赴く。

〔政隣記〕

九月廿八日永君樣春宮樣御息所成勅許之旨、十月二日申來。爲御祝儀御使御步頭北川久兵衞ゟ同十六日被仰渡、廿四日發上京、十一月十一日歸。

永君は前田綱紀の女直姫が二條吉忠に嫁して生む所

本文廿八日とするは非なるべし

十月四日。新川郡の山林盗伐に關する處刑を定む。

〔改作方雜留〕

持山有之七木盜伐仕候節は、禁牢之上一村一作一歩過怠免之格に候。持林之儀茂、新川郡は持山同事過怠免之格に候。當國之儀は、持山・持林差別有之旨に候得共、新川郡之儀右格之通、持林共に過怠免可有之儀と、丑十月四日於御算用場杉浦權佐罷出、御奉行幷御横目僉議之上相極候事。

享保十八年十一月四日

七木御定之事

松・栗・杉・槻・樫・桐・栂。

是則能州之分。加州能美、越中同事栂之代り槙、槻之代り楞。

右七木之儀、田井村喜兵衛に尋候得者、石川郡も栗・栂は無之、殘る五木之由。栗は、正徳四年五月八日御算用場より小杉郡奉行古屋六丞・加藤九郎太郎に之紙面寫、喜兵衛持參す。其紙面之趣は栗は元來御締と申儀無之候處、心得違にて如斯に候。向後惣御郡幷百姓持山に有之木、勝手次第伐取候樣に可申渡候。則先年御定書之寫二通指越申由相見え候。二通之寫は無之候。

樗の字、何こ唱へ候哉存不申と喜兵衞申候。石佛村平七郎へ尋候得ば、新川も五木に候。其後松はたゞ五葉・ひめこ御留木に被仰渡旨申候。

右小杉郡奉行へ相渡る。

十月十一日。德川吉宗夫人逝去したるの報金澤に達す。

〔政隣記〕

十月十一日御簾中樣御流產後御滯に而、今月三日御逝去之旨、今日金澤に告來。依之殺生は今日一日、鳴物等は十三日迄遠慮御觸有之。於江戶は、普請は三日より七日迄、鳴物は十二日迄遠慮。四日惣登城。十二日上野に御移、奉號證明院殿与。右に付江戶に之御使、御先手生駒藤九郎十四日發足、改名大貳と。十一月十三日歸着。

十月。能美郡粟津村の大王寺を帳內の寺院たらしめんと請ふ。

〔今江組互細掌記〕

口上書を以奉願申候。

一、私共居住所之內、先記より大王寺与申寺御座候處、其末々漸小庵御座候而、湯之本尊藥師御前之点燈を、出世僧相願、朝暮被相勤候。尤大王寺与申傳候得共、帳外之寺に而御座候に付、乍御苦惱御公儀樣に御願被遊、帳內に被仰付被下候はゞ難有奉存候。爲其乍恐書付を

先記は先規

以本願候、以上。

享保十八年十月

能美郡粟津村肝煎

次郎兵衛

組合頭

三郎兵衛

九左衛門

源右衛門

徳兵衛

善五郎

久三郎

太郎兵衛

里兵衛

七左衛門

平右衛門

口上書を以申上候。

能美郡粟津村大王寺開基泰澄大師、養老元年に當所大王寺・龍谷寺二ヶ寺共、瑠璃光山与號御建立に御座候所、天正年中越後謙信入亂之節燒失仕候。其後龍谷寺者金澤へ引越被申候。然所大王寺本尊藥師如來之尊像者、無相違相殘り、則湯之本尊に而御座候。中古萬治二年に自生山那谷寺定憲法印小庵被建、右尊像被致安置、往古之通大王寺与號來候。延寶年中に一統御帳面御改之砌、大王寺無住之折柄に而御帳面に相洩申候。右由來等之儀相違無御座候間、何卒御帳外之御帳入に御願被成候者、湯之本尊寺之儀に御座候間、彌麁末に不仕候樣致度奉存候、以上。

享保十八年十一月廿九日

粟津村

太郎兵衛

次郎兵衛

里兵衛

三郎兵衛

七左衛門

九左衛門

平左衛門

源右衛門

文兵衛

徳兵衛

伊兵衛

善五郎

七郎右衛門

久三郎　八兵衛
又八　傳右衛門
粟津村　大王寺
右御帳外之御帳入奉願候に付、村中より拙僧迄指出候由來書上之申候、以上。
大王寺
寶幢寺

今月は十一月

十一月九日。前田吉德の女總姫江戸に生る。

〔政隣記〕

十一月九日曉、江戸本鄕於御邸御姫樣御出生、十五日從預玄院樣御名總姫樣与被進之。蟇目奥村内匠勤之。享保十七年四月喜代姫樣御蟇目御用之節同斷。

十一月。領内收穫の減損額を幕府に屆出づ。

〔政隣記〕

今月□日、今年御領國不作に付、御損毛三州に而六十八萬九千五百石餘之旨、公邊に御屆。御家中引免過半に候處、御藏米を以御引足被下、御算用場に印物十二月中旬相渡。其後越・能米半分計御召米被仰付。然共脇賣勝手次第との事に而、人々望次第に仕候。右代銀十二月十

七日より、右四十日平均に而中勘頭々ゟ相渡り、頭々より組中ゟ相渡、翌年本勘相極渡。

十二月十一日。德川吉宗驛使を遣して前田吉德の寒中の安を問ふ。

〔德川實紀〕

十二月十一日、寒中を御たづねあつて、東叡・三緣兩寺に御使もて檜重をつかはさる。松平加賀守吉德には、驛使をはせて奉書を下さる。

十二月十二日。盜賊奉行配下の足輕等伎藝の道具を携行する前田伊織の家來を捕ふ。

〔吉德公之記〕

今年も他國より伎藝の者ども、商賣人に相交罷越有之体に候。宿等不仕樣に急度可申談旨、十一月御用番安房守殿より廻狀を以被仰渡候。盜賊奉行茨木覺右衞門へも、無油斷御縮にも罷成候樣に可心懸旨御申渡有之事。十二月八日夜大河原助進宅へ、何者に候哉、四・五人罷越、臺所へ上り、所用も有之体にて罷在候。家來ども相尋候所、子ども衆の迎に罷越候旨申候。助進長病人にて、息は近所へ咄に御越候。何とも合点不參樣子の事故、息の方迄及案內候所、早速罷歸、先門戶を鎖、何方より罷越候やと相尋候へば、長甲斐守方より參候旨申候。

甲斐守殿より何故夜中に御人被遣候哉と不審仕候。爰元に子ども罷在候、同道仕候様にと申付罷越候由申候に付、若人達にも候や、爰元は何と存罷越候哉と尋候へば、大河原助進殿御宅と承罷越候旨申候。依之助進方より甲斐守殿用人どもへ迄右の様子を以尋に遣候所に、右の人々甲斐守殿家來に無紛候。進藤助進と申人の方へ迄遣候所、存違罷越候旨申來候。依之承届相返し申候、進藤は御馬廻組中村典膳組にて、伎藝者宿仕置候由。

同年十二月十二日夜、茨木覺左衞門手合足輕ども、伎藝の者と相見え申者一人、無刀にて綟羅紗合羽着用仕、手にふくさ包を引さげ、同道兩人、是は大小兩腰指申者、前田伊織門內へ入可申体に付、伎藝人と見え申者を後より捕引出候。同道兩人申候は、是は狼藉成事を仕候、放申様にと申候。各には少も無頓着候。此者に用事候旨にて引合候內、村中務門際迄參候處に、不破右京せがれ兵庫に候、ゆるし候様に申聞候。足輕ども一圓合点不參候に付、兵庫殿にて可有之様は無之候、彌合点不參候与申候內に、跡より又足輕一人罷越、頭巾を引取候所に、近年迄右京所に奉公仕候者にて見覺罷在。是は兵庫殿に紛無之候、後日證據に立可申候。先放ち可遣旨申候に付、各放し遣申候。手に持候ふくさ包は道路にすたり有之候。見申候所夜中の食物と相見え、品々給物入有之候。扨伎藝の者どもは、六・七人も歷々鑓・若黨召連候者ども引纏、伊織門へ向候と其儘門を開き打入申候。其跡に長持・葛籠様の者爲持候に付、其

品々は足輕ども見咎、覺左衛門宅ゟ召連罷越候。覺左衛門宅にて相尋候へば、前田伊織家來どもに候。櫃等相改候へば悉く伎藝之者の道具に而候。覺左衛門方より伊織へ迄紙面遣、此人々は家來に候や、怪敷品々致持參候故召捕申候、彌家來に紛無之候や承置申度旨申遣候所、伊織返書に、今般娘緣組被仰出候祝儀として內外に得客候。表向にては囃子興行、內所にてはをどり抔申付候。其跳裝束等入置候條、家來幷道具とも相返し候樣に仕度旨申來候。覺左衛門又申遣候は、御家來どもに紛無之旨致承知候。道具の儀は心得迄にては難相返候。委敷は明日可得御意候旨申遣候。扨翌十三日兵庫一卷は內聽迄に相達申候。伊織家來の樣子は御用番長甲斐守殿へ相達、吟味の儀は如何可相心得候哉、伎藝道具の儀も御指圖の上と存、其儘に仕置候旨申述候。甲斐守殿此一事被承、甚驚被申、神色も變、良久挨拶も無之、無言の体にて候由。扨御前よりは、伊織手前の儀は御聞屆被遊候。年寄ども指圖次第に可仕旨被仰渡候。

同十四日に甲斐守殿御申渡候は、伊織家來ども不及吟味候。道具も無構伊織方へ可相渡旨に付、尤其趣に仕、十四日暮前道具相渡候。伊織家來は放ち遣候。十三日伊織事覺左衛門宅へ被參、昨夜拙子家來どもを足輕ども打擲仕、其上縮等も仕候。長持等に封印仕置候を無斷切解申候儀、沙汰の限に候。組頭迄被斷可申哉と存候旨被申候。覺左衛門申候は、御家來にも不限、吟味の筋有之召捕候に付て、こだはり候へば萬力又は繩懸にも申付候。年寄衆の家來

にても其通に候。御扶持人にても同事に候。封之儀も同格にて、先達て相尋には不及候。其上只今被御聞候は、兩様ともに相違に御座候。足輕どもへ手向こだはり申趣も無之に付、縮にも不及召連罷越候。封印も足輕どもは手も添不申候。賊にても仕候者は格別、無左者は縮は不申付候。たとひ手鎖等申付候ても、其筋譯立候へば且て無構候由申聞候へ共、左候へば能候。一家ども相尋候にも、不僉議之様に可存哉と存相尋候由にて、被罷歸候。

一、兵庫事にて、御聞屆被遊候由の御親翰は、拜見仕候後年寄中へ相達、猶更様子可申聞候旨被御出候に付、覺左衛門年寄中列座の前にて申述、御親翰をも爲致拜見候。此節大和守殿・安房守殿・内匠殿へは内記殿御越候由。御意の趣を以示談有之旨。伊織は甲斐守組、兵庫父右京は大和守殿組にて候事。

兵庫儀病氣の体に候條、爲養生旁世間徘徊不仕様に仕度旨、廿日は右京より大和守殿迄書付を以被相頼候て、其通と被申渡候。妻は津田玄蕃妹にて、娘一人有之。則廿日に玄蕃方へ内證申達、引取被申候。相智は本多主水・佐々木左兵衛、其外一家は前田伊織・不破源太兵衛・不破權丞・横山兵庫・吉田平兵衛・吉田忠左衛門・千福久太夫等なり。十九日に各右京宅へ寄合致示談候。

一、十九日伊織儀、組頭甲斐守殿迄紙面を以、此度私家來どもを茨木覺左衛門手合足輕とも

打擲仕候。持參の長持等無斷封印を明申候。ヶ樣の儀ども其分に難仕置候。家來どもは切害申付度候。足輕ども御法の通被仰付候樣に仕度抔と申趣に候。甲斐守殿より被達御聽候由。

廿日に年寄中不時に御前へ罷出、此儀御僉議有之候由。

一、道具は村上右源太と申者所持にて借用仕候由。追て承候へば此道具は本伊織方に有之候を、兼て左源太方へ借用仕置候。十二日夜に入伊織方より取に遣候。其夜左源太も罷越有之候。

一、十二日夜兵庫刀・脇剌は何方に差置候哉相尋候所に、淺野の廣誓寺納所坊主罷越、今夕伊織宅にて伎藝相催候。其見物に罷越候はゞ供可仕旨申に付、同道仕候。其節右坊主指罷越候由に候。右坊主へ寺社奉行より申聞候へば、致追放候由。用人の內にも同心仕候者有之、此者も追込置候由。

十二月廿二日。人持組前田伊織等伎藝の者を聘したるを以て罰せらる。

〔吉德公之記〕

一、十二月廿二日夕、甲斐守宅へ前田土佐守御横目渡邊善左衞門罷出、前田伊織へ被仰渡之趣は、伎藝者は前々より御停止、今般も年寄中より急度申渡置候所、似候者ども召集、不愼成仕形に候。依之蟄居被仰付候。急度指扣可罷在候。定番頭遠田勘左衞門宅へ、番頭伊崎所左

衞門・本保儀兵衞罷出、定番御馬廻村上左源太へ被仰渡ゝ趣ハ、伎藝ゝ者ハ前々御停止、今般も年寄中より急度申渡置候所に、十二日夜前田伊織方へ罷越、其上似候品々伊織方へ遣之、不愼ゝ至に候。依之逼塞被仰付候。急度指扣可罷在候。御馬廻頭伊藤彦兵衞宅へ溝口舍人立合、御馬廻鹽川安左衞門罷出被仰渡候趣、安左衞門常々不行狀ゝ事ども被爲聞召候、依之遠慮被仰付候。急度指扣可罷在候。

安左衞門伎藝ゝ者召集候事は、當春ゝ儀に候。此度覺左衞門へ迄御親翰ゝ内に、舊冬幷當春ゝ樣子も兼て御承知被遊候。其節手ぬるく仕置候故、此度又ヶ樣ゝ仕形と思召候。其御親翰年寄中へも爲致拜見候由被仰出候。依之安左衞門手前右ゝ趣に罷成候。

乙卯十二月二日前田大炊宅にて奥村内匠殿立合、前田伊織召之、蟄居御免被仰渡候。村上左源太も同事に御免被遊候。鹽川安左衞門は不被及御沙汰候。

〔政隣記〕

十二月廿二日左之通甲斐守殿於御宅、前田土佐守殿御列座、幷御横目渡邊喜左衞門出座、甲斐守殿被仰渡。

逼塞　　人持組　前田伊織

遠慮　　御馬廻　鹽川安左衞門

同断　　　　　　　　定番御馬廻　村上左源太
父右京願候而押込　　右京嫡子　不破兵庫
右伎藝之者を伊織宅に呼、三人之者も罷越候處、兵庫を盜賊改方茨木覺左衛門手先之足輕尤め還り候てより事起、是同月十二日夜之事也。

十二月廿四日。御醫師赤佐玄入似切手を行使したること發覺し自殺す。

〔吉德公の記〕

十二月廿四日、御醫師赤佐玄入町人どもに相計、今般御算用場より相渡候印物をにせ、切手數通拵之、富有の者どもより過分に銀子請取候樣子。町會所にて相知れ申候中買五人、其外一人禁牢申付候。玄入儀御吟味可有之趣にて、其內證御年寄中より寺社奉行へ示談有之候。寺社奉行附與力どもの內玄先多賀宇兵衞へ御預け者に仰付られ、其上にて御吟味の等に候。玄入宅へ參り、少々の樣子も洩し候哉、明日本多主水宅へ召寄申含も有之前夜、自宅に於て自殺を遂候。書置と見え申者二卷も有之、上書に赤佐玄入白狀一卷と調置候。檢使として御横目津田五右衞門・井口五郎左衞門罷越、右書置は尤其儘上之申候。右之趣正月四日公事場奉行へ被仰渡、四日より段々玄入妻子・家來等も吟味有之候。先達て御馬廻組菊池市左衞門儀、此一卷へ相加り候に付、組頭入江八郎右衞門・青木新兵衞を以て御吟味有之、一門どもへ御預

正月は享保十九年

置、いさこ以上の者ども晝夜相濟罷在候。市左衛門は甚十郎子にて知行三百石、十六郎同姓にて未期内存にも仕置候。翌年六月市左衛門無御構着候旨被仰渡、御番入仕候。數度御吟味の上譯立候旨、

十二月廿六日。御馬廻組佐々喜太夫の若黨、不明の人物より落書を手交せらる。

〔吉徳公之記〕

十二月二十六日御馬廻和田采女組佐々喜太夫若黨何某へ、何者に候哉以書狀、門前へ落有之候、御上け可然存候旨にて一封相渡候。其若黨無筆に付、喜太夫方への書狀と存請取置候。喜太夫他所より罷歸候故相達候へば、宛所は津田五左衛門にて、下には岡嶋喜内と有之候に付、五左衛門町内の儀に付爲持遣候。五左衛門より申越候は、岡嶋喜内と申者御國中には無之候。左候へば落文と相見え申候。右若黨追て御吟味の筋も可有之候條、其心得可仕旨申越候。右一封は五左衛門も不及一覽、指上申候。尤何事に候哉不相知候。風說は定番御馬廻組多羅尾清八と申者、召使の妾有之候。其妾衣類・貯金有之候を、段々不殘借取候て終に不相返候。段々相積り二貫目餘に成候。何程申達候ても返濟無之に付、或時清八代々御一行・御判物等入置候箱を取出し、下宿いたし不罷歸候。質物と存候間、銀子償候樣に申候得共、無之儀に候。依之其妾方よりの落文と申慣候。清八弟も定番組にて清太夫と申候。是は舊冬町人ど

もと致博奕、かち候得共、かけ物出し不申に付、町人の妻こやらんを人質に取來候。町奉行より其段頭へ迄相達、人質に及候はゞ露顯に可及旨申候所、相返し候由。

十二月。米價高直なるを以て藩内要樞の地にその廉賣を行はしむ。

〔御年譜〕

一、十二月、去秋西國筋不作に付、米直段高直、地米七・八十目位に而、末々及難儀候人有之。依而早飛脚を以御助米左之通。

金澤四ヶ所・松任・小松・本吉・宮腰・石動・魚津・高岡・氷見・城ヶ端。

但一人三升より三合迄。

此外にも所々米商家に御拂米有之、直段下落。

十二月。鷹の飼料として犬を殺すことを禁ずる幕令を傳ふ。

〔政隣記〕

近年鷹に土餌飼候儀不苦筋に相成候得共、思召之趣御座候に付、向後土餌之ために犬捕申儀指止候樣被仰出候條、御家中之人々一統承知有之樣に御申渡可被成候、以上。

十　二　月

右若年寄中致申聞候由に而、御月番甲斐守殿御觸有之。

四月廿八日の火災は同廿九日の條に出せり

是歳。金澤蛤坂の道路を開鑿す。

〔政隣記〕

今年迄数十年、才川妙慶寺坂崩損後往來止に候處、四月廿八日夜火災後往來之儀依命修覆、如以前往來に成、俗に蛤坂と云々。

享保十九年

正月朔日。前田吉德金澤に於いて年頭の儀式を行ふ。

〔護國公年譜〕

一、年頭御規式如御例。但寺社奉行山崎庄兵衛正月二日迄三日忌。明四日出御小書院、息方御禮の前に獨禮被仰付、尤長袴着。

勝丸樣元日於御居間書院御禮、御太刀披露前田勘解由御家老、御太刀御表小將寺嶋左太夫。御いし出不申、銀御馬代故御披露無之。

一、元日鶴之御下、横山監物・前田與十郎・奥村數馬、奥之溜りに而坊主給事に而被下、御雜煮茂右之通に候。當時奥詰故也。

一、元日鶴之御下、前田將監・品川主殿兩人人持組、江戸御留守居勝丸樣御用。去年之通り御居間書院三之間下屛風圍に而、御給事表小將。御料理之内、御意之趣御近習頭中村次右衛

御紋は劔梅鉢

近江守は前田土佐守直躬の父直堅

出雲守は富山侯、備後守は大聖寺侯

大炊以下皆前田氏

門罷出申述。右之外頂戴人、年寄中を初如例年。

一　同夜追儺御規式、會所奉行前田伴四郎相勤候。御作法如前々。

正月朔日。前田土佐守大紋素袍に劔梅鉢の紋章を用ひ爲に物議を釀す。

〔浚新秘策〕

一、今年元旦土佐守殿御目見之節、着用の大紋之紋、御紋同事に相見え申候。安房守殿御心附御尋被成候所、大紋迄には御紋同事に附來候。近江守も同事に候旨御答候。大紋迄との儀ながら、是は如何と御申入置候。是は正月之儀に付其分にて相濟候。四月半頃に成、土佐守殿武具、扨は道中着類・火事羽織迄も、只今之紋被相改、御紋同事に被成候由、諸職人共手前より粗相知申候。御免無之候而は難成筋に付、不審に被存候衆中密に被相尋候へば、去暮御直に被相願候所、家柄格別之儀に候間、勝手次第と被仰出候而、夫故被改候由御申候。何とも此分にては難被指置ものに候。御免と申も思召違にて候はん歟。出雲守様・備後守様御願にても御免難被遊候。出雲守様には――、備後守様には――、其外御家來之内大炊・備前・修理、此三人之紋御免被遊候も――如此にて、御前同事に劔梅鉢と申儀は無之候。然れば早速与被相止可然之由、御家老中示談有之候。一度勝手次第との御意有之うへは、無味に不可然とも難被仰渡ものに候。御前之御誤りと申趣にて被仰渡候はゞ可然歟など申趣に被伺候由。

相公は前田綱紀

前田中務へ内談も仕、土佐守願も有之樣に御推察被遊候由にて、中務へ御尋候所、一向中務も不存候。中務を以被仰渡も有之候はゞ可然哉との趣も有之歟。中務存寄は、若申聞候ても承知無之においては、緣者之儀は斷可申覺悟之旨に候。是迄之樣子、十六・七日頃迄に風說にて承及候。餘り難心得風聞候故、十七日は安房守殿江迄、ヶ樣之雜說有之候。尤御書談之事共にて可有御座候へ共、乍疎忽承及候事故御物語仕候由申候處、頃日之樣子は聊不承候。彌其趣に候へば不興千萬成事共に候。大紋之紋之儀は 成程其趣之事にて候。近江守以來大紋迄には附來候旨被申聞候。何とも合点不參候故、不審に存罷在候。彌御聞合可被成候由被仰聞候。廿二日に被仰聞候は、先日之儀、此間土州拙者迄呼立被申聞候は、自分紋之儀に付申聞置度事候。元來相公樣より近江守江迄御免有之候得共、先見合附不申候。今年江戶江も御供仕候儀故、御紋同事に仕附申意得に候。御序有之達御聽候へば、家柄にも候間、勝手次第に可仕旨御意被成候。承置候樣にとの儀に候。相公樣より御免被遊と有之儀、一段之御仕合に候。乍然此事は大切成儀に候へば、同役中へ不殘御示談も有之候而可然存候由申入置候。扨々驚入申。相公樣御免との儀、何之證據も無之、承及申人も無之候。當殿樣勝次郎殿と稱申候內も御免無之、富五郎殿同事に候。御子樣にてさへ如此に候。近江守江御免と申事一圓合点不參候由被仰聞候。廿三日に土佐守御用候間相殘可被申旨被仰出候而、同列退出

唯今迄之通は角切梅鉢

之後御前ゟ召、其方紋之儀先頃申上候節之趣に候へ共、其儀は無用に仕可然候旨御意被遊候所に、先祖已來御免之儀に候へば何共御請難仕趣に被申上候所、重而左樣には有之間敷儀に候由、乾度御意有之候へば、左樣に御座候ば、被下置候御紋は差上可申候。三左衞門以來釘拔并三盖松を附申候。此兩樣之內に可仕申上候處、夫は何こ申心得に候哉、紋は只今迄之通にて可然儀に候旨、再往御立被遊、御不興成御樣子に候。然共此儀於御前御請は難申上よし直に申上、退出有之候。御次に津田玄蕃ひかへ罷在候。玄蕃を召思召寄共を段々御意有之、明日安房守・大炊を以土佐守へ可被仰渡候由御意有之候。甚御立腹之体に御見え被遊候由。扨翌廿四日安房守・大炊兩人御前へ可被爲召候御樣子に候所、土佐守儀房州へ逢申度旨にて呼立被申候。安房守殿、御前へ不被罷出前に御逢ひ申間敷料簡に候へども、頻に呼立被申候に付、逢被申候所、土佐守被申候は、昨日於御前紋之儀可相改趣に御意御座候得共、御請難申上存寄にて退出仕候。退出之後得与料簡仕候へば、私之不料簡に御座候。只今迄之通に仕罷在可申与奉存、則其趣口狀書認罷出候旨にて、一通被差出候。於御前御請不被申上儀言語道斷に候得共、せめて只今重而之御意無之內ヶ樣之趣、先一段に存候。何分にも取計、宜可申上由にて、右之段々被申上候。事外御立腹之体にて、土佐守仕形近頃御安堵難被遊、御氣遣敷候。向後之儀急度心附相勤候樣に可申含由御意に付、大炊精誠申聞候。何共前後不都合

最前云々は青地藤太夫に係る

三左衞門は土佐守の組直之にして前田利家の孫

劍梅鉢に云々は藩侯の紋所をいふ

不興千萬、此意得にて江戸へ罷越申儀無心許存候。最前爲知申筋も候故、秘密之儀ながら申聞置候由、廿七日に安房守殿被仰聞候。

三左衞門殿には御紋附不被申、釘抜并三階松を附被申候。此儀に付兩説有之。彼家に申候は、劍梅鉢御紋之通に附申儀に候はゞ其通りに候得共、無左候而は面白無之旨にて、御免有之候へ共右兩樣を附被申候旨に候。一説には、謙退にて御紋をばさけ被申候とも申。此方事實にて候はん歟。劍梅鉢に御極め被遊候事は、相公樣御代貞享年中以後之儀にて、其前は劍なきも劍ありも御通用に御附被成候。左候へば三左衞門殿在世之時分には、左樣之僉議迄には及申間敷事に候歟。

一、土佐守殿着類之分は、京都大森三郎兵衞方ゟ御紋同事に染可申旨申遣、其外道中物或は武具馬具、御當地にて御申付候分は、大半出來寄に成候由。三郎兵衞方より申越候者、亡父三郎兵衞時分松雲院樣御定書有之、御紋之通に染候事は、御年寄衆中不殘御連判之御紙面不被遣候はねば難爲染候由申越候由。

正月十三日。中黑六左衞門實子を廢嫡し養子に家督を相續さしむ。

〔浚新秘策〕

一、正月十三日石動郡代中黑六左衞門、今年七十三歲、病身に付御役御免、隱居知三百石

妻の自殺は寶永四年

被下之、養子助右衞門に家督千五百石被仰付候。助右衞門實は六左衞門弟八右衞門次男に候。兄庄右衞門は養子之儀、兼而堅令斷申入候に付、助右衞門を養子に仕候。六左衞門父太左衞門は知行二千石に候、八右衞門へ御配分知五百石被下候。八右衞門死後庄右衞門に三百五十石、助右衞門に百五十石被下置候。今般百五十石は被指除候。六左衞門本妻に男子三人・女子二人有之候。惣領は忠次郎、次男は傳十郎、三男は三之助と稱、三人共成長仕候。妻横山氏は故隼人が女にて候。次男傳十郎は前田故淸八方へ養子に遣、知行六百石被下、御小將組相勤罷在候。六左衞門御先手足輕頭相勤、在江戶之內、妻密夫を求不義之樣子、罷歸相知候。然共其密夫爲誰事未相知候。六左衞門種々工夫を廻し、窺見申候。或時妻方より傳十郎方へ遣し候密狀を拾申候て、密夫は傳十郞なる事相知申候。乍然人道に可有之樣は無之儀、態と僞りに仕置候哉彌難心得候に付、傳十郎を招、兄弟共も並置遂吟味候所に、實正相知れ候。江戶留守之內母之方より申かけ、段々罷越候儀決定仕候。妻へも承屆候へば白狀仕候。依之妻を密に爲致自殺候。傳十郎は手擊に仕候歟、自滅爲仕候歟と及示談所に、六左衞門存寄は、前田御姓氏を冐し罷在候者を、手擊に仕候事は何とも難仕ものに候。自殺仕候ては、淸八家滅亡に及候儀、是以何とも致迷惑候。此上は自滅と相見え申樣にいたし、相果候樣に工夫可仕候旨申渡候に付、或日强き落馬を仕候而相果候樣に拵、遂落馬候所に大に疵を得、

拙子は青地藤太夫

兩刀も拔け、刀傷もつよく候へども、死には至り不申、一生のかたわと申位に罷成、御小將組も難相勤、御斷申上引籠候。尤相公樣御代之事に候。此上は一生子など出生仕候ては、彌不屆に可存候間、一生女色に不近候樣にかたく申含、傳十郎末期養子は、淸八本家前田伊織次男市左衞門を爲願置候。然處二・三年も過、傳十郎妾召置、女子致出生候。六左衞門承出し、不屆至極之事に候、最早傳十郎家へとては參間敷候よし申遣、彌以義絕に及申候。扨は忠次郎兄弟へ申聞候は、其方共母之不義者人道にはづれ候。ヶ樣之ものとは不存寄、夫婦に成、多く子供も出來仕候。此者之產育仕候ものを以、家名を爲酌候事は、第一先祖へ對し難成候。君へ奉對候而も、御奉公爲仕候儀難成ものに候。乍然忠次郎・三之助共、傳十郎と不屆前に出生之事に候間、家督は相願可申候。血脈殘り不申樣に、一生無妻に而相暮し、末々養子仕尤に候。幸弟八右衞門せがれ兩人有之候へば、是に男子も出生可仕候旨申含置候。忠次郎は先年極暑之內、淺野川之上へ川狩に參り、淵に沈致溺死候。三之助を惣領に願、御目見迄も相濟候所、右之趣得与合点不仕候。左樣に候而者、家督相續之儀は難申付候旨申切、近年西養寺弟子に仕、爲致出家、他國へ行脚に罷越候節、出家にても一生知行百石宛行之趣、紙面に相調渡遣候。此事之始末六左衞門口外不仕候。其以後同役岡田喜六郎・原田又右衞門、且又前田伊織へ申聞置候由。尤御先代・當御代ともに、御內聽には不達候事。拙子儀は少子

一人は三人歟

細之儀有之、委曲承知候。此儀不存人は、六左衞門妻相果候後愛妾有之、其妾之讒言を信じ、實子三之助を爲致出家候。夫故をひの庄右衞門も見限り、養子之儀も斷に及候などゝ申慣候。是は實說を不知人々推察之說に候。妻に女子一人有之、其婿成瀨彈正・富田主稅（主稅妻は實は八右衞門娘に候所、養女に仕遣候。）・青木彥太夫にて候。妾にも一男一女有之候所、男は六歲之時致夭死候。女子は別所彌之進方へ遣候。此度隱居被仰付候所、暫無と自稱仕候。

正月十七日。十村等に勸農の職務を怠るべからざるを告ぐ。

〔司農典〕

甲寅正月十七日諸郡役人中へ申渡趣

各當春も不相替御目通に被召出、且亦昨日御目錄夫々拜領被仰付難有仕合、當年別而豐年に而可目出度候。扨春切先づ荒起之儀、沼田・堅田又者堅田たりとも雁土之所、或者深く或者淺く耕作し、且彼岸中日に必種播き仕事等、其方共淵底存不珍事に候。畢竟組中勵怠り候儀於有之に者、其十村曲事に可被行段、御改作之御法に候得共、近年御仁政にあまへ申形に相見候。當年より耕作之手入不心懸に爲仕置候十村者、嚴敷迷惑申付、或者奉願重き曲事に取捌申儀も可有之候。此段不及申聞に儀に候得共、去年迄之に心得に候はゞ行當り申儀も可有之、其上罪人出來仕儀、御上に御慈悲深き故、諸役人も不好儀に候。因之先達而申聞置、此

上にも不愼之者、急度右之通不申付候而は、御改作之御法難立儀に候。田方之儀は勿論荒起より念を入、植付は其所々之土地に應じ、繁く共間遠成共並を揃正植渡、物跡たりとも時節を不失植付、草をも度々心を用取拂、如此に段々十村共每度見廻、精誠心を盡し可申付儀者、手前共より一々申聞に不及、其方共功者之儀に候。今般申聞る趣意は、其仕形怠り候組々有之、十村共は輕重に隨ひ可被處罪科に旨を、行當り不申樣申聞置儀に候。就中其方共之內、御上之御恩をも等閑に奉存、身持惡敷、組中に對し愼を忘れ介抱に怠り、却而末々費之品等を申懸候故、組之百姓成立不申、耕作之手入無是非怠り、或者勝手宜敷百姓共、十村に手入いたし候得ば、贔負之取捌を仕廻、亦山方等を支配仕る十村之內、其身行狀不宜に付、組中迄も御法度を忘れ、自分之物他へとられ申族有之。畢竟者困窮を申立御上へ葉候。其罪其人を顯し申聞候儀者、今日御算用場御奉行幷御横目出座之席に而暫く指扣候。早速蘇し愼不申躰之者は、舊惡迄も引出曲事に可申付事。

附り、養之儀は、其代銀として貸渡銀子外事に不用、隨分養念に入候樣十村共精誠申付、夫に而も弱き組下者、十村共力を加へ手入爲仕可申處、近年別而干鰯澤山之事に候得共、不心懸爲仕置候十村共有之、或養多入間敷心得に而深耕し、宜敷土地之田をも淺く耕し置申村々有之躰、不屆至極之裁許に候事。

寄初め本のまゝ

一、御貸米去年迄返上至而少分に候得共、去年一統作徳去々年迄よりは取劣り候。年々相聞候故、春以後取續丈夫に可仕ため、其分に見通し置候。今年之儀作之樣子に隨ひ申渡す儀に候得者、唯今より申付るに不及候。但去年之風俗に習ひ、作得宜敷年も取立樣怠り候十村於有之に者、是又可爲曲事候條、兼而申聞置候事。

一、御上之御勝手當時御指支与申儀を、根ゟ入候而は其方共奉存間敷候。御收納御拂代之外なる御かり銀等を以、御不足之所被爲償、指當り支候道不相見候間、如斯々に而不被爲支物之樣可奉存儀無餘儀候。然共全以左樣に而無之、御收納之外成金銀者、其限り有之物に候故、元來之御收納、其方共不精に而御年貢之餘計無之時者、御要脚御不足与申而已にあらず、夫々困窮御恩ゟ被成下候御儀も、被爲思召候程に者被爲成間敷所へ可至哉之御儀、恐多御事之至極に候。左候得ば諸事願之品々寄初め、御入用方今年者去年より過分損毛之翌年に候得者、別而省略を用ひ、御入用懸り候儀を可奉恐、逐一不及申聞事。

一、山廻り共は御締第一之役、其中に隱聞役は猶以委敷心を不附候而者不叶役に候處、指而御用に不立樣相見え候者も有之候。不心懸之者は、是又本役共に取放可申候條、行當ら不申樣に可心懸候。且亦新田裁許者、十村ゟ申渡し同事之趣に候。何れも十村に可被成下者之働をも、爲可見知申付置候事に候條、隨分可心懸儀は勿論に候事。

一、十村共を始、此方より御用無之者、早々在所へ可罷歸候。輕き願事に而も、此度罷出候序願出候儀、決而無用に候。早速罷歸、組中介抱仕、雪不消内者農業之貯斷置候所業共、定り候品有之事に候條、申付爲相勵、雪消次第野仕事爲急可申事。

右之趣御扶持人以下夫々畏承知可仕者也。

正　月

今日於御算用場に申渡候趣、別紙覺書相渡候條、委細令熟覽、急度可相守者也。

甲寅正月十七日

中村勘太夫
大塚彌五太夫
粟田源右衛門
寺西半右衛門
坂井知右衛門
吉田宅左衛門
芝山三郎左衛門

諸郡御扶持人・十村・新田裁許・山廻中

三月十一日。前田吉德祝儀の內意を以て能を催す。

本文の祝儀といふものは去年十一月九日前田吉德の女總姬江戸に生れたるに因れるものなるが如し

〔護國公年譜〕

一、三月十一日御能有之。御祝儀之御内意に而勝丸様へも御膳被進、其外年寄中等・御近習頭へも御料理被下候。津田玄蕃子內藏助・中川式部子八郎右衞門・前田中務子外記・前田土佐守弟彈正・同典膳御能見物、御料理被下。其外御近習頭子供、平士之子共、御近習邊之者には御能見物被仰付候。表向に而玄蕃願に而、實玄蕃次男津田政太夫養子求馬も御能見物被仰付候。御近習頭野村七兵衞・鷹栖左門・伊藤三郎左衞門、御表小將御番頭三輪藤兵衞、同御横目服部五郎左衞門せがれ五人共、幼少に而未御禮御目見不仕候得共、御能見物人々願候而被仰付候。御目見不被仰付子供御能見物、此時初而也。此後右之格に而見物願候事。御能初與村數馬保命、十五歲被仰付、急度御祝儀と申に而も無之候へ共、翁も被仰付候故、數馬に御能初被仰付候由被仰出候と也。竹田權兵衞十七歲、去暮京都より被下候。當正月殘知御引足三百石被下候。翁・亂・道成寺等御前に而相勤不申候へば、外に而も難仕由願候に付、願之通被仰付候。拍子方金澤に而は難調に付、京都へ呼に參候。

翁　　道成寺權兵衞　熊之助孫兵衞彥二郎　金七市左衞門　間幸助・長左衞門

右之外御番組略之。權兵衞弟甚三郎も初而罷勤之。

三月廿六日。切支丹類族松井温庵の娘さわ自殺す。

〔御家人舊條記〕

轉切支丹松井慶雲曾孫、能州所口町醫師松井温庵娘、御自分妾され儀、一昨廿六日御自分於宅、令縊死候旨、縮人淺井織江より以紙面申越候。依之爲檢使、御徒横目早速可指遣候間、其御心得可有之候、以上。

三月廿八日　　　　　　　　伊藤彦兵衞

毛利與市殿

四月十三日。前田宗辰初めて乘馬を試む。

〔御年表〕

四月十三日勝丸君堂形御馬場にて初めて御乘馬。

四月廿五日。前田宗辰能を演じ、吉德は鼓を囃す。

〔政隣記〕

四月廿五日・廿八日・御慰御能被仰付、表御舞臺に而勝丸樣始而御能右近・橋辨慶、廿八日大佛供養・殺生石被遊候に付、御城附之頭分拜見仕度奉存候者は、拜見勝手次第に被仰出、幷御用に而罷出候頭分も同樣に被仰出。中將樣廿五日は小督、廿八日は羽衣・經政御鼓被遊候。若殿樣御能御達者成御儀、無比類御事と何も奉恐感候。今年御十歲也。御近習之人々にも、

シテ・囃子方等被仰付。十一日御使御近習頭松尾縫殿を以、勝丸様に今度御能被遊、被入御覧候に付、八講布廿疋・鯛一折御目録被進之。

五月十三日。大槻朝元物頭並に列せらる。

〔政隣記〕

五月十三日左之通被仰付。

御大小將組御近習勤より
物頭並御役料百五十石、但此度相願改名內藏允与。大槻傳藏朝元

于時享保十一年十二月廿二日新知百五十石被下、新番組に被仰付、同十七年正月十六日百石御加增、御大小將組。其後百石宛兩度御加增都合五百五十石也。此後度々御加增都合千五百五十石、元文二年八月朔日組頭並に被仰付、同五年正月廿一日五百石御加增、合二千五十石被下、御馬廻組頭並に被仰付。寬保元二月廿日御加增五百石、合二千五百五十石被下、人持組に被仰付。

〔若老方覺書〕

一、大槻傳藏物頭並被仰付候に付、若老支配被仰付。

〔袖裏雜記〕

大槻傳藏寄合又は頭並に被仰付度旨被仰出、寄合は家柄に而被仰付候旨申上候處、物頭並に被仰付。此被仰渡方、勤柄故御奥小將御番頭へ、傳藏儀後刻御用可有之候間、其心得候樣申達、被仰渡は中村典膳・松尾縫殿ゟ被仰渡候節之振を以、於奥被仰渡、其段勘右衛門を以被仰出。

大和守は横山貴林

五月廿一日。前田宗辰金澤田井口に放鷹す。

〔政隣記〕

五月廿一日勝丸樣田井口御放鷹、御歸に大和守上野下邸ゟ御立寄、始而御膳上之、品々拜領被仰付、父子共御盃頂戴。依之大和守より中將樣ゟ御肴一折献上仕。是は勝丸樣今日始而雲雀御羽合被遊に付被上之其云。

六月十六日。前田宗辰金谷殿の廣式に移轉す。

〔政隣記〕

六月十六日今般金谷御廣式御普請出來、今日勝丸樣御移、御袋樣にも御座所同所に出來御移。依而金澤御留守居物頭初、御廣式向御役人、今日より金谷ゟ出勤。二之御丸之御廣式は御仕へませ被遊。

一、今日御移徙之御案内有之、御使定番頭御近習遠田勘右衛門を以、御屏風二双・御文臺・御

硯箱・晒布廿疋・二種・千疋被進之。右爲御禮、九時過二之御丸に勝丸樣御出、御奥式臺より被爲入、桐之御間に暫御扣、御持參之鹽鯛一箱・御目錄、御近習頭鷹栖左門上之。御箱肴は配膳役福島左兵衞御前に持出。勝丸樣追付御居間に御出御禮被仰上候處、御のし塗御三方左兵衞持出上之。無程御退出。御前も布御上下被爲召御對顏。御移徙に付御近習頭布上下着用。今十六日七時過御供揃に而、金谷御殿に可被爲入旨被仰出。御供數何之處、蓮池等に御出之通与被仰出。御布上下に而被爲入、御先請御奥小將御番頭伊藤六郎左衞門罷出候。勝丸樣御出迎、御先立被遊候。御刀は御側小將馬場杢左衞門持之上之、御間御床之上に直之。御熨斗三方勝丸樣御持參被上之。畢而前田將監・品川主殿・遠藤紋太夫・佐々木左兵衞被爲召、御意有之。誘引六郎左衞門。

六月廿七日。德川吉宗驛使を以て前田吉德の暑中の安を問ふ。

〔德川實紀〕

六月廿七日、寛永・增上兩寺に檜重つかはされ、暑中の御尋あり。松平加賀守吉德には驛使もて存問せらる。

七月四日。前田吉德江戶邸の御表に出づる時の法式を定む。

〔護國公年譜〕

一、七月四日、江戸において御表ゐ御出被遊候時分、中頃より若年寄御先立相勤候得共、去々年本多頼母御供に罷越候時分相伺候處、中の口より被爲入候時分迄若年寄相勤、其外御表へ御出被遊候時分は、御近習頭御先立相勤申候。今年も右之通相心得可申哉、度々奉伺ニ如何候間、向後右之通相心得可申哉之旨頼母被伺。三浦八郎左衛門を以達御聽候處、向後右之通相心得候樣被仰出、則同人より御近習頭丹羽澤右衛門被申達候。

七月六日　前田吉徳參觀の途に上り、年寄前田土佐守破格を以て之に隨行す。

〔政隣記〕

七月六日辰上刻御發駕。御供前田土佐守廿一歳初而御供・若年寄前田大學、一宿御跡より津田玄蕃被召連。十八日辰刻御着府。但當御參勤前御居間書院一二之間等御作事出來

十九日上使本多中務大輔殿御越、廿八日御參府御禮。土佐守・玄蕃御目見等都而御例之通。

公方樣御痛有之、大納言樣爲御名代御禮等被爲請。

〔淺新秘策〕

一、近比土佐守殿被成樣に難心得品々有之趣承置候。尤密々に承候事に付、此處へ書入置候。

前田土佐守妹を多賀宇兵衞の請に嫁せしめたるをいふ

多賀宇兵衛を緣者に相願候事も、一向御同列の内へも少も御内談無之、多賀家へも御内證無

外兄弟は從兄弟

之、或時於御前相願候處、御前には內證相濟候儀と思召、一段可然緣者之旨御挨拶も有之候。守兵衛は願不申儀ながら、片願にて相濟候。春宵存生の內にて、御意を以緣者相究、別して忝奉存候旨被申候由。元來春宵には、奧村故丹後守殿とは外兄弟の續有之に付、橫山大和殿御息女を緣組と有之候へ共、大和守殿は丹波守實子に付奧村內記殿弟也。五・六年も緣者難申談旨返答有之候處へ、土佐守殿よりも魚住道徹を以內證御申入候。大和守殿へ先達て斷申入候間、御免可被下候旨被申達候て、其分に成有之候。然處右の通御直に被相願事濟申候。此儀を內記殿は言の外憤り被申、惣て加樣の儀に同列示談も仕、指支不申趣に治定候而、僧取次を以伺申筋に候處、直に相願候ては不都合なる趣にも罷成候。事濟之儀ながら以來御心得にも可罷成候由、遠田勘右衛門を以被申上候由。是一つ。又能州涌浦へ湯治之儀、年寄中にても月番之方迄書付を以被願、其儀達御聽、其通りと被仰渡候て入湯の格に候處、是又內證も無之、江戶表遠田勘右衛門へ迄書狀を以湯治の儀願被申上候處、遠田返狀には一統の御格も御座候處、直に御願被成候。加樣に被成候ては、御前にも御難儀被遊候筋に候間、御同列御舊格の通に被成可然旨申越。其上にて同列の御方へ示談、御格の通に相願候て被仰渡候。是二つ。又今年江戶御供の儀も、去暮直に被相願候。元來本多・長、僧は前田土佐守殿家、此三家は御代々江戶御供には不被召連候。安房守・九郎左衛門・近江守共に江戶表御留主詰は相勤候。或は御成・御家督・御婚禮等

にて臨時に被爲召候儀は有之候。乍然此等之御樣子等有之にては無之候。依之御前にも暫く御思案被遊候由に候へ共、願に付御聞届、御供の儀被仰渡候。是以內證無之候。是二つも借被仰渡候上、勝手入用一圓心當無之、會所銀借用位にては中々行屆不申候、甚しく難澁せん方なく、大和守殿・安房守殿を以拜借銀被相願候て、願の通被仰出、それを以旅裝も心當出來仕候由。ヶ樣の不都合數ヶ條有之內、先右件々押立候事故記置候。

七月廿五日。金澤百姓町より火を失す。

同日は七月廿五日

〔政隣記〕

同日亥下刻金澤百姓町之家より出火、寅刻鎭。町家まで八十四軒類燒。

八月十二日。舊藩臣室直淸江戶に歿す。

〔燕臺風雅〕

室直淸。通名新助新井君美曰。直淸字師禮。一字汝玉。東武人。號滄浪。又號鳩巢。伊藤貞日命齋曰靜庵。其先出自山陽丹治氏。蓋因地爲氏。以分其族也。師禮幼而聰悟。北藩菅公以爲奇、令就學京師。學成竟爲恭靖先生之門高弟。最精經義。所著大學新疏既行于世。文廟初以儒雅徵擢焉。大地昌言曰。先生年十五始仕加藩。以侯命往學于京師。遊於順菴木先生之門。稍長慨然以道自任。於世之功名富貴。無一動其心泊如也、自元祿十年常在賀州、我先侯引見使講說。侯嘉嘆焉。嘗

上書論事。語甚切至。侯手書答之。寶永五年君夫人氏入邸。有寄新井先生深嘆賞。以爲昭代盛事也。先生在州。誘進後學孳々不倦。其愛君憂時之誠。動見于色。州之人士化其德。而向學者頗衆矣。正德元年辛卯先生年五十四。有東都之召。朝鮮使臣來聘。奉命有與學士李礥等唱和詩文若干篇。及叙三韓事蹟二百二十韵之作。享保四年以大家命。與二三同職開講高倉書院。六年命撰六諭衍義大意。七年特召先生於內殿。始講尙書。從此迄九年秋。屢引見者無數。講貞觀政要及進五倫五常和解等。皆在於此間。其佗凡所論諫。退而不出于口。故其將順之美。人不得而知之也。當是之時。先生之志將有以大發於天下。而與當時用事大臣不合。議輙不行。十年遷西城侍講。當俸外別歲賜二百俵。十二年得支疾。十三年春因疾乞解職。優命不允。居久之疾逾劇。復表請辭職如初。終不聽。先生雖以老病廢。而日夜研究典籍。未嘗休止。疾痛之甚人所不能堪。而處之裕然。略無戚容。患伊藤維禎・荻生茂卿之徒。妄非毀程朱。敢肆其邪誕而無忌憚也。嘗曰大厦之傾。非一木所支。然而辨別邪正。明章眞僞。使學者莫迷於所歸向。此吾志也。其不信於今。必有傳於後乎。於是著太極圖述・駿臺雜話等書。嘗力疾教誨生徒。至卒之前七日。尙臨講席如平生。四方學者翕然以先生爲歸。惟大家亦深知先生而重之。不聽其請。蓋惜先生之賢也。十九年甲寅八月終于正寢。享年七十七矣。(中略)。門人不可勝計。於本藩稱其上足者。有二奥(奥村脩運・奥村忠順)・二青(青地齊賢・青地禮幹)・二小(小寺遵路・小谷繼成)・一

山根。山敬心。謂之室門七子也。

〔又新齋日錄〕

鳩巢文集前編叙略。

先生諱直清。字師禮。號鳩巢。稱新助。幼名順祥。命齋曰靜倹。其先熊谷直實之裔。出備中國英賀郡。考諱玄樸。號草庵。妣平野氏。萬治戊戌元年產先生于州之谷中邑。生有異質。穎敏絕人。入加賀藩。一日在公前講大學章句。公嘆曰眞其物也。豈使夫是待使成其材。以爲天下之益不亦可乎。卽命之受業於順庵先生之門。客於京師。以神童稱云々。及至藩。藩之士夫皆矜式焉。正德元年應東臺之徵。來就江府。適韓人來聘。奉台命束帶。往而接之云々。有德廟繼之後。特擢先生授殿中侍講。此職之設蓋自先生始云々。享保甲寅十九年八月十二日卒于駿臺賜第。年七十七。葬州之豐嶋郡大塚里。生二子。男洪讓字孔彰。稱忠三郎。卒。女歸高階氏云。

〔室新助由緒書〕

一、二十八扶持　生國武藏　歳十四　室　順　祥

私儀寛文十二年二月十八日に被召出、御扶持方拜領仕候。

一、曾祖父　室　孫　三　郎

尼子晴久に少知取罷在候處、永祿十年五月十日美作之內高田与申處に而討死仕候。

一、祖父　　室　孫三郎

尼子晴久に少知取罷在、晴久より之感状御座候。其後宇喜多中納言殿に少知取罷在、濃州關原之一亂之時節より浪人仕候而、寛永七年十月廿八日に備中に而病死仕候。中納言殿之家老小倉伊賀久隆より墨付兩通御座候。其外之證文、伯父室權左衞門手前に所持仕候。

一、外祖父　　平野又右衞門

蜂須賀阿波守殿に少知取罷在、四十二年以前病死仕候。

一、親　　室　玄卜

浪人に而大坂に十八年罷在、江戸に十七年以前に罷下、醫者仕罷有候。終に主取不仕候。

一、母　茂　　御座候。

一、妹　　二人御座候。

一、伯父　　室　權左衞門

備中に浪人仕罷在候。終に主取不仕候。

一、叔父　　平野又右衞門子　小川權兵衞

藤堂和泉守殿に少知取罷在候。母方之名字小川に而御座候故、右之通に御座候。

一、同　　同人子　平野與兵衞

松平伊豫守殿に無足に而大小姓仕罷在候。

一、父方從弟　　田代十右衛門

黒田千之助殿に少知取罷在候。母聟之忰に而御座候故、名字違申候。

一、同　　室平右衛門

有馬伊豫守殿に少知取罷在候。

一、母方從弟　　平野小十郎

松平豊前守殿に少知取罷在候。

右之外御國・他國共に、近き親類・緣者無御座候。

已上

寛文十二年三月四日　　室順祥判

水原清左衛門殿

長瀬新九郎殿

小野木治兵衛殿

〔桑華字苑〕

室孫三郎
　├玄朴　寶永八三廿五爲幕下儒士賜月俸二百俵
　├直清　稱英賀室直清。英賀者備中州郡名。七世祖備中英賀郡中井住居。玄朴生于此處。
　　├某　七十郎　丙申十一歲　名謨。字孔彰（ヒロアキ）。以字爲名乘。辛丑之臘去前髮。改忠三郎。今寅年十七歲。
　　└女子　丙申十四歲

九月十九日。幕府領に騷擾する者ある時は、隣接萬石以上の諸侯其の鎭撫に從ふべきの令金澤に達す。

〔浚新秘策〕

享保十九年寅九月十九日江戸より早飛脚を以申來候者、萬一御公領之内に惡黨人等相群り、御代官之手に合不申時は、隣國一萬石以上之大名方に申越、人數差出候樣被仰渡候。左候得者夫に應じ御人數可被指出候、其心得可有之旨。江戸に而指當御聞合有之候處、前年奥州之内惡黨相群騷動仕候節、陸奥守殿より先手足輕頭兩人被出候由。出雲守樣・備後守樣に御聞合之處、物頭一手に而も可被出候由に候。然者御先手足輕二手計、其心得可仕旨被仰下候旨。

依之御年寄衆臨時寄合有之候事。

一、廿七日有澤森右衞門より紙面差越候如左。

出雲守は富山侯
備後守は大聖寺侯

世中ひそ〳〵とつぶやき申候。若御公領に悪黨人等立群り、御代官之手に合不申時は、一萬石以上之御大名方ゟ申越し、御人數出申譯に江戸より申來候之由。依之御年寄衆思召之筋も可有御座候儀。ヶ様之事昔より前例も多く有之事。當時百有餘年之泰平にて武備はすたれ申時節、いかう味に心得も有之、致し様に意得可有之事に候。承り候よりは私并惣意儀は、大方寢食も不安候。百姓式は如何与可被思召候へども、御代官の手に餘り賴申來候程にては、千や二千・五千・六千集る事はござる儀にては有之間敷候。左候へば大き成事と存候。夫に付此程段々私料簡仕置候事ども多御座候。せめて貴公などへ潜に御物語申上度奉存候。來月五日久田氏に而可得御意候へども、ヶ様之事不圖したる事候へ者、人々毀譽にかゝり申筋も可有之、只潜に得御意度候。尤も被承候御役人中も可有之候。私者苦に成申候。第一御在江戸御留守ゆゑ、何かに御しらべの品々は、私はよく奉存ながら、さばき可申様も無之、面倒成ることにて候故、いとゞ苦に成申候。御年寄衆などは猶更御心苦身に可被思召事と奉存候處に、さすが御大身故か外見には見え不申候。不入世話、正眞の緣の下の力持ながら、心に有之事故一筆申上候、以上。

九月廿七日　　有澤森右衞門

青地藤太夫様

十月九日。諸士の知行及び役料知を併せ八百石以上を受くるものに鷂を飼ふを許す。

〔護國公年譜〕

一、十月九日、三浦八郎左衛門儀氣色爲養生御國へ罷歸、行歩も仕候に付、鷹所持仕度候得共、知行高御定茂有之候故所持不仕候。借り鷹仕、年寄中御免場へ罷出申度旨相願候に付、經御内意候處、役料知懸八百石之高に候へば、鷂等所持之儀は不苦候。人持中も、與力知高に結、大鷹所持仕候へば、頭分も役料知懸候へば不苦儀に相極有之候間、勝手次第所持仕儀に候。養生之儀に候間、年寄中御免場へも可罷出候御内意に付、前田大學ゟ右之趣大槻內藏允より相達候旨に候。鷹屋召連罷出候儀は、先年被仰出候而、町人鷹拵候儀難成趣に相極有之、今日町飛脚へ右之趣委細申遣候。且又雉子突・指竿も御免被遊候事。

但見合札等金澤若年寄中より受取候樣、御近習頭坂井甚右衛門申談候事。

十月十五日。日雇人夫の雇銀を定む。

〔國事雜鈔〕

覺

一、六分八厘　　日用銀一人當り

右寅十月十五日より御定日用銀如斯御座候、以上。

享保十九年十月　　日用裁許　櫻屋　吉右衛門　印

右定直段如斯候、以上。

寅十月廿八日　　御算用場　印

澤田伊佐右衛門殿

十一月十二日。前田吉德他行の際その着笠を持參せしむる小者の服裝を改めしむ。

〔護國公年譜〕

一、十一月十二日御出之時分、御行列之外に御着笠持罷越候。右着用物、只今迄は別色之物致着用、目立不宜候間、一統紺物爲致着用、御行列之内へ建候樣被仰出。

十二月二日　加賀藩の小者越前府中にて殺害せらる。

〔淺新秘策〕

一、極月二日越前府中近邊柳原と申所茶店に而、小者躰之御國者を本多内藏介家來由井忠藏と申者切殺候旨、足輕飛脚を以福居町奉行大宮彦右衛門方より、當地町御奉行迄案内申越候。

本多内藏助は福井侯の老臣にして府中に在るもの

榮君は前田綱紀の女、二條吉忠の室

兵部大輔は福井侯

委細承届、追而以使者可申越候。尸骸は桶に入、假屋を構番人付置候。荷物者郡奉行預置候。忠藏事者家中へ預置候由申來候。扨町奉行下役人杉田助左衛門（與力之旨。若黨兩人・鑓持・挾箱持・草履取上下六人、二百石取申候由。）与申者、當五日に旅宿迄罷越候。町御奉行小堀左兵衛・稻垣與三右衛門充所之紙面持參仕候。町同心曾田次左衛門罷出、挨拶も仕候處、右書狀相渡候に付、書狀者追而受取可申候由致會釋置、七日に與三右衛門宅迄右助左衛門呼請申候。同役左兵衛罷越、次左衛門も達而相詰申候。助左衛門、玄關前に而刀を爲持上り候旨也。右小者は、榮君樣附割場小者傳兵衛と申者に候。十一月晦日金澤發出仕、幸尻馬に而罷越候。助左衛門罷越候樣子は、町奉行大宮彥右衛門內々關所往來過書之儀に而、左兵衛・與三右衛門とは書通も仕、交名も覺申事に付、幸下役人を以右忠兵衛切殺し候首尾も申述、畢竟兵部大輔殿へ者未申達候。相違候へば夫々格も有之事に候。中將樣思召も殘不申樣に仕、兵部大輔殿爲にも宜仕度物に候。郡方に而之儀に候間、郡奉行共可申達事に候得共、町奉行之事者前々申通候事も候故、內證示談旁罷越候。於御國ケ樣之御格も可有之候。小者躰に候へ者、其分にも事濟可申哉。畢竟之儀御國法之儀も承、先料簡も承合申度との事。第一小者を切殺し候首尾も咄し申爲、旁罷越候由申候。當朔日內藏助儀福居城へ出勤仕候。其供之內之忠藏に候。二日白鬼女之渡に而船中殊之外込合候。風雪も甚敷候。小者傳兵衛幸尻馬に乘馬も爲乘可申旨申候。風に而馬は難乘候旨舟頭申聞候へ

共、急用に而罷越候者に候由、船中に而慮外之仕合有之候得共、其分に仕罷在候。忠藏ハ先達而罷越、柳原茶店前に而小用を調罷有候所に、傳兵衛馬に而罷越、荷物忠藏に當り申候。依之先刻船中に而も無禮仕、又只今如此に候。馬より下り候樣に申聞候。赤合羽着用仕居申候。下り候而脇指を探り申躰に付、先を仕候而者如何と切掛候へ者、笠をかけて少し疵付申候。後向に成退申樣子に付、ひたもの切掛突留申候。其並茶店に加州者七人在合候。風雪故何茂戸を閉候而内に罷有候處、喧嘩と申に付七人之者共罷出、我等同道に而は無之候得共、昨夜同宿仕、荏尻に少々荷物茂付申候。それに而も候哉と、立寄改見候得者、成程其馬に而候。右七人ハ、笠間安右衛門近々大坂より罷歸候筈に付、爲迎罷越候町日傭共に而候。然共同道人同斷之儀故、此譯立候迄ハ爾居に留置申由助左衛門申候。與三右衛門宅より罷歸候節式臺迄送出申候。玄關に而次左衛門ハ挨拶に申候ハ、御兩方樣被入御念、肩衣御着用忝存候旨申候。平生之限と申事不存故と相見得申候。畢竟御國に而之格承合申爲と申立罷越、當地之樣子口振も爲考差越候躰相見得申候。八日御年寄中越後丸ハ不時に寄合有之、左兵衛・與三右衛門へ迄紙面を以御申渡候趣ハ、他國扶持人之族を切殺し候例無之事、由井忠藏手前之儀者猶更被遂吟味、宜敷被取計可然事と申二ヶ條に候。此趣に候條宜敷可申聞との儀に候。國許に而他國奉公人を切殺候舊例とては無之候。足輕・小者等を手打に仕候侍共之事者多有之

越後丸は領内の越後屋船なり

候。此儀者其時々首尾次第に而、小者式に而も、其手打に仕候者尤に無之事に候へ者、或は追放・改易申付候。又は切腹申付候者も有之候。是等者此度被仰聞候に者當り不申、忠藏手前之儀者隨分御詮議被遂可然存候。小者に而も加賀守扶持人、其上榮君之御方附人之儀に候。忠藏事者内藏介殿家來に候へ者、陪臣之儀に候。ヶ樣之所にも御料簡可有之事と存候旨申聞候得者、助左衞門も成程尤に承知仕候旨申候。知行も取申人に候やと次左衞門相尋候所、内藏介家に而近習膳番を相勤候、知行取候哉其段は覺不申候由申候。扨尸骸并荷物者割場奉行より足輕小頭一人・足輕横目兩人・小者三人、安駄籠爲持罷越請取申候。

一、追而彥右衞門方より、町奉行迄紙面を以申越候は、山井忠藏儀國法をも違申儀有之、旁切腹申付候由申來る。

十二月十九日。德川吉宗使者を遣して前田吉德に鶴を贈る。

〔政隣記〕

十二月十九日御鷹之鶴上使、御使番遠山左兵衞殿を以御拜領。翌年二月六日御披、客有之。

十二月廿七日。大槻傳藏の兄七郎左衞門新に知行を受く。

〔護國公年譜〕

一、十二月二十七日大槻七郎左衞門只今迄御步横目與付。新知百三十石被下、新番組御步被仰付、御近習

番可相勤旨被仰渡。但內藏允兄也。

是歲。郡奉行等百姓の心得方を令す。

〔改作方雜留〕

御郡御定書

一、浦方・宿方に被立置候高札之表、違背仕間敷候事。

一、上樣御荷物舟之儀は不及申、他國諸大名衆荷物、難風に逢候節御馳走仕儀、彌油斷仕間敷候。勿論破損舟於有之節、跡々之ごさく船道具等に至迄取らさし不申樣、早速締仕、十村幷に御奉行に可及案內事。

一、津留・津入、其外諸事御定之品々彌可相守事。

一、其組十村申付儀、村肝煎・組合頭違背仕間敷候。村肝煎・組合頭方より小百姓へ申渡儀、是又違背いたす間敷候。若十村幷村肝煎・組合頭非分申懸候はゞ、小百姓方より直に御郡奉行に可申斷事。

一、御領國百姓中其外遊民に至迄、公事沙汰に付目安等上る儀有之は、如先規其組之十村副書を以、御郡奉行迄可上之候。縱直々言上仕度儀有之候共、村肝煎は十村迄書付可出之候。

但十村手前之儀申上度事有之は、御郡奉行・改作奉行迄書付出可申候。右兩奉行之事訴におい

遊民は田地を有せざる農民の義

ては、御算用場に可申上候。御算用場に對して申上品有之ば、大御目付迄書付可出候。右之役人指置、直に訴狀等於上之は、不及理非急度可被行曲言旨被仰出事。

一、其組之十村非分有之、小百姓方より御扶持人十村及斷候を隱置、後日に相聞候はゞ、御扶持人十村可爲越度事。

一、いたづら成百姓、申立にも成間敷儀を公儀を掠、公事沙汰に不成儀を、いたづら者そひへをこひ、下持を仕出入いたさせ、書付上之候はゞ、本人よりは下持仕者大罪に候間、曲言に可被仰付候。其組之十村・御扶持人吟味仕、御郡奉行に可申斷事。

一、律儀成百姓、公儀を恐可申上儀も不申上者は、十村・御扶持人見聞候通御郡奉行に可申聞事。

一、此以前より如申渡、在々諸百姓奢たる儀不仕、耕作致專に、身躰持立候樣に常々心懸、諸事無油斷はげまし可申事。

一、家作自今以後二間梁、ひさしは六尺に不可過。但高多持候百姓等、間廣く仕候は不苦候。往還筋人宿仕者は格別之事。

一、なげし作・杉戸附書院・組物一切無用、床ぶち・さんかまち塗候儀、唐紙張付堅く御停止之事。

御扶持人十村は單に御扶持人といふに同じ

そひへをこひ木の儘

一、衣類之儀、跡々御定之通、木綿布之外着用仕間敷候。但十村・御扶持人之儀者、男女共に紬御免許之事。

一、男女共に紫紅にふか染、此外之諸色、形なしに染可着用事。

一、百姓食物、常々雜穀を可用、米猥に不可食事。

一、十村・扶持人・惣百姓男女共、乘物一切御停止之事。

一、小百姓には不及申、御扶持人・十村・長百姓たりといふとも、常々振廻之差合仕間敷候。神事或は嫁娶・聟入或は葬送・年忌之刻、成程かろく可仕事。

しゆせん本のまい

一、御郡中在々に而酒・しゆせん・菓子、えそう之賣物爲賣申間敷候。但宿往還筋之分は、賣物見せ賣に仕儀は不苦事。

一、跡々より不有來異形之諸勸進御停止、幷他國座頭・舞廻・人形廻し・をどり子等、惣而無故者に宿貸候儀一切無用之事。

一、十村・御扶持人、其外百姓共より、給人・侍・町人ゑ音信仕間敷事。

一、御郡之者大正持口留罷通り候者、跡々之通彌御郡奉行ゑ相斷、通切手取可申候。無斷相越、後日に相聞候はゞ可爲越度事。

一、御領分之者与他領之者縁組、堅く申合間敷事。

頭振は前に遊民と記せるものに同じ

一、他領之者致欠落、當領へ罷越候を隱置、後日に相知候はゞ同罪に可被仰付事。

一、他領他國之者には不及申、御國之者に而も御郡ゟ初而引越移住仕者は、慥成請人爲立、其在所百姓構無之においては、十村指圖を以可爲致移住候。勿論此方ゟも案内可申事。

一、在々百姓・頭振他國ゟやとはれ候者、他國居留り不申樣に、一類共ゟ急度可申付候。跡々より他國ゟ參居留り候者有之候はゞ　十村致吟味、其一類に申付呼返可申事。

一、在々所々百姓・頭振男之分人數、一ヶ村切に十村帳面に記可置候。彌男女共に、當歲より宗門御改之帳面に書加へ可上之事。

一、御郡中より女年季奉公に他國ゟ遣候儀は、御郡奉行へ受指圖、其上に而十村請縮り可仕事。

一、在々之儀は、無筋者に一夜宿茂借し申間敷事。宿所たりといふ共、二夜共泊り候はゞ、請人取可申候。勿論一夜泊に而茂、夜行など仕無心許者に候はゞ、心を付見屆、不屆之仕合有之候はゞ押置、早速十村儀御郡奉行へ斷可申事。

一、百姓走り可申躰見聞候はゞ、早々村肝煎・組合頭へ申聞、押置可及案内候。若押置儀も成がたく候はゞ、近所之村肝煎へ申聞、近鄕之者共罷出押可申候。縱走可申旨申合候者に而も、其趣申あらはし候はゞ御褒美可被下候。走百姓有之旨申斷候所々村肝煎不罷出候はゞ、急度

曲言可被御付事。

一、御郡中瀬浦方舟貸候者は、跡々之通請人取可申候。當分に而も請人取不申舟にのらせ、欠落人有之候はゞ、船貸主可爲越度事。

一、他國他領ゟ紙幷かうず出候はゞ、御郡奉行ゟ斷可申候。自然隱遣候はゞ可爲曲言事。

一、御領分ゟ他國他領之商賣鹽入申間敷事。

一、往還道請取之在々より常々修理致し、損じ不申樣可仕候。捨置若及大破候はゞ、請取之在所肝煎・組合頭可爲越度候。勿論道端を掘ひろげ、道せばめ申においては可爲不屆事。

一、不依誰々に往行之刻、宿主たりとい ふ共送迎仕間敷候。御用に付罷越候人々、宿無滯可申付事。勿論御鷹抔被遣候節は、犬・猫つなぎ可申候事。

一、馬一疋に口引一人宛付可申候。一人して馬數追、勿論口をはなし申間敷候。用所調候節はつなぎ置可申候。附、道中馬方馬に乘申間敷事。

一、越中より金澤ゟ取よせ申給人米幷商賣米、宿々問屋等において猥に無之、第一馬方盜取不申樣に可仕事。

一、宿馬無滯樣に可申付事。

一、往還筋之儀は勿論、何之雖爲道筋、旅人相煩、其所に於令逗留は致介抱、住國委細に相

舟貸は舟借なるべし

尋可爲案内候。若又死去候はゞ、早速御郡奉行迄可申斷事。

一、道中に死人有之候はゞ、死骸に番人付置可案内事。

一、諸奉行にかぎらず、何に對し而も慮外成躰、且又不作法仕間敷事。

一、諸百姓中分之儀は、不依何事給人方ゟ申斷間敷事。

一、奉公人暇をもらひ、日用取・頭振に成候はゞ、曲言に可被仰付候。但引籠作仕儀者

（作仕儀者の後文を缺く）

一、御郡諸百姓中へ、金銀米錢加利足貸し物仕間敷候。賣物に仕成し、品を替月延抔に勿論仕間敷事。

一、切死丹宗改之事。文言省之。

一、後生願候共、耕作かせぎ之手擬にならず、勿論費なき様に願可申事。

一、御郡に新寺幷道心寺爲作申間敷候事。

一、御郡に牢人住居仕度旨申者有之候はゞ、百姓相對を以住居爲致候はゞ、御定之通請人承置、御郡奉行へ申聞、其上に而可爲致住居事。

一、新規之酒屋、彌御停止之事。

一、ばくちがましき儀一圓仕間敷候。惣別懸之諸勝負、何事によらず跡々より堅御停止之事。

一、船持幷商人他國ゟ罷越借錢仕、其所より及斷、公儀御苦惱に懸不申様に兼々可申渡事。

一、在々火之用心、跡々より如申渡互に令吟味、炭・灰等置所念を入可申候。若不沙汰之仕合有之、火事於出來は可爲不屆事。

一、火事出來御藏近所、跡々より十村方へ定置申渡置候通、早速罷出、無油斷火を防可申事。

一、往還道之橋、所々御收納藏・中出藏・作食藏修理等、幷破損所有之においては。文言省之。

一、御鷹右同斷。

一、御郡中に罷在頭振、百姓に成候はゞ、御郡奉行に案内可仕事。附、百姓手前つぶれ頭振に成、御郡に罷在候はゞ、是又可致案内事。

一、九十歲以上之者、子孫彌介抱可仕事。

一、鶴・白鳥野山に死有之候を見付候はゞ、拾取早速可致案内事。

一、たばこ本田畑に作候事、跡々より御停止之事。

一、小百姓縁組之事、双方より十村に書附出し、裏書を以相極、帳面に可記置候。下に而相定候而、以來に至出入出來候共、奉行所へ聞上申間敷事。

一、御郡野方・山方に不依、出來家望申者於有之は。文言省之。

一、捨子惣而生類あはれみ事。同上。

一、馬之筋をいため、又は尾先を燒申間敷事。

一、野山に有之人之死骸之事。文言省之。

一、金銀・衣類・諸道具によらす、拾申か又は土中より掘出し申儀有之候はゞ、早速可及案内候。隱置、後日に相知候はゞ可爲不屆事。

一、他國・他領より宿送り村送りに而申來儀、不依何事卽刻注進可申事。

一、伊勢參宮此外商賣等に他所へ罷越候者共相煩、何に不依介抱に逢候歟、又は宿送り抔に而在所へ罷歸候者於有之者、不隱置早速十村迄可致案內事。

一、猪・鹿・猿其外生類殺生仕間敷旨、公儀被仰渡御書立之通り之趣、兼而申渡置候を彌違背仕間敷事。

一、猪・鹿・猿此外生類、人馬に當り及難儀事有之候はゞ、其品可致注進事。

一、杉・檜之儀に付被仰出御書之趣、違背仕間敷事。

一、向後不依何時に、相場より下直之不相應に候賣物。文言省之。

一、質物取申候は。同上。

一、町中五人組之內、常々心立惡敷、商賣等茂不仕、無心元品之者有之候はゞ、早速相斷可申事。

享保十九年　　　　遠所　郡　奉　行

是歲。收納米の上納額を檢査する規定を改む。

〔加州郡方舊記〕

菊田邊角樣御改作御奉行之時分、初秋より入米之歩之割被仰渡、此割方福留村六郎右衞門方に寫有之に付、則左に留置。

米百高石之内

五　石	八月分
七　石	九月分
四十石	十月分
三十石	十一月分
十八石	十二月分

右之格を引、只今迄五日目・晦日目、月々兩度宛に被成御改候處、享保十九年より月に三度宛相改可申旨被仰渡に付、田井村吉郎兵衞・福留村間兵衞・御所村作丞、右御定御改作御奉行所に入御覽申候。右御定有之に付、此格を引、月に三度宛之出入相改申候。

享保十九年入米御定之歩

一厘七毛	八月十日

三厘四毛	同廿日
五厘一毛	同晦日
七厘四毛	九月十日
九厘七毛	同廿日
一歩二厘	同晦日
二歩二厘三毛	十月十日
三歩八厘六毛	同廿日
五歩一厘九毛	同晦日
六歩七厘九毛	十一月十日
八歩三厘九毛	同廿日
皆濟	同晦日

右覺書也。

右覺書田井之留帳にあり、寫之。但歩入御定は明暦年中之帳に有之處、菊田逸角も田井村二郎吉茂不存候哉、事新敷菊田申渡し有之。其時代も舊法は絶々是に而可知。

備後守は大聖寺侯前田利章

正月朔日。前田吉德江戸に於いて初めてその子重凞の年始の禮を受く。

〔護國公年譜〕

一、正月朔日如御例御登城、西丸へも御上り、御歸館以後於御居間書院、今年初而龜次郎殿御禮被仰上。(御長袴被爲召。)御太刀披露前田大學。備後守樣御禮、次年寄中初歳始之御禮等、御規式前々之通り。

正月十四日。幕府先に加賀藩の人數が火災消防に盡力したる功を賞す。

〔護國公年譜〕

一、正月十四日御用番本多中務大輔殿御宅へ聞番被召呼、當七日夜下谷同朋町出火之節、早速御人數被指出、所々防留候由。茅葺小家等多、風も有之處、何茂精出申候故大火にも不罷成候。與遣候樣被仰出、此段相達候樣中務大輔殿仰渡候。右被仰渡に付、其節罷出候火消之御小將等へ、御喜悅之旨可申聞旨被仰出有之候。

享保十三年三月湯島火事之節被仰出有之、御請使組頭相勤申に付、今日も右爲御受、御馬廻頭和田采女御使相勤候事。

正月十六日。前田吉德その生母預玄院を招き舞囃子を演ず。

〔政隣記〕

正月十六日預玄院樣御上邸御表江被爲入、御囃子被仰付。御前東北・小竹御鼓遊、備後守樣江口・融御舞被遊。津田玄蕃舞、前田大學大鼓、其外御近習之人々にも舞拍子方被仰付。

正月十八日。前田吉德義妹窕姫を招き舞囃子を演ず。

〔政隣記〕

十八日にも神田御前樣被爲入、右同斷に而、御前弓八幡・櫻川御鼓、備後守樣櫻川・唐船御舞、玄蕃・和田釆女舞、大學大鼓等、一昨日之通被仰付。

正月廿二日。本鄉邸の長屋に放火する者あり。

〔護國公年譜〕

一、正月二十二日夜四時過、八筋御長屋明小屋五筋目より出火。和田釆女初近所面々、家來等も罷出打消、其內御近習火消も罷越候。三輪藤兵衞罷越、見分之趣達御聽候處、追付火事所へ被爲入、備後守樣にも被爲入、御人數も被遣候。乍然早速鎭候に付御屆等無之候。

依之右近邊之小屋々々家來等、御吟味も有之候へ共相知不申。追而外之儀に而相知候。高

備後守は大聖寺侯

神田御前は前田綱紀の養女窕姫にして廣島侯淺野吉長の夫人

呂善太夫小者致付火候儀致白狀候。落着不被仰出內牢死。

正月廿六日。女の要求によりて之を刺殺し、己れ自害を果さゞりし他國者を死刑に處せしむ。

右落着左之通。

覺

美濃郡上流浪者　豐　助

豐助儀尾張那古屋よりすまと申女を召連、方々致流浪、能州石動山境内に而、すまと申旨にまかせ指殺、其身自害仕候處仕損候。此方御領之者、右之首尾に而指殺候はゞ、死罪に可被仰付御國法に候得共、他領之者を殺申儀に付、郡上幷尾張役人中へ御屆有之候處、豐助儀先年郡上追放之者に而貪着無之由。且又すま儀夫々吟味有之候得共、左樣之者不相知候間、此方に而可被相捌之旨申來候。然ば豐助儀人を殺候付而、死刑被仰付。

右之通奉窺――以上。

〔一卷帳大概〕

美濃郡上豐助与申者、尾張より女を同道仕相越、能州石動山境内に而右之女を指殺し、其身致自害候處、仕損罷在候付禁牢、美濃幷尾張に茂從公事場奉行申遣候一卷。

乙卯正月廿六日　　　　　　　　　　長甲斐守初十二人

山崎庄兵衛殿

伊藤内膳殿

富田織部殿

藤田主馬殿

二月朔日。火事裝束に立付の外、細袴・踏込・のりせんも亦用ひ得べきことを定む。

〔政隣記〕

二月朔日火事之節、立付之外不用樣に何も心得罷在候。細袴・踏込・のりせん何れにても勝手次第用可申事と御噂之由に付、以來細袴等着用可仕筈之事。

二月十一日。恒例により榮君に贈る物品の支出を會所に命ず。

〔前田貞直手記〕

二月十一日

一、左之紙面十日到來に付、例之通夫々申渡候。

榮君は前田綱紀の女、二條吉忠夫人

榮君樣ゟ每歲被進候品々別紙一通、遠田勘右衞門差出入御覽候間、可申渡旨申聞候付、右紙面指進之候條、例之通夫々可有御申渡候、以上。

正月廿五日　津田玄蕃判

圖書等五人樣

覺

一、五　疋　中　晒　布
一、二十五疋　中　八　講　布
一、十　六　疋　今幅平買八講布
一、十　端　中絹御國染
一、十　疋　御　國　中　絹
一、一束六帖　延小奉書紙
一、一束四帖　中　奉　書　紙
一、三　帖　中　廣　杉　原
一、七束三帖　並　杉　原
一、二九三束七帖　中　の　中　折

一、二十丸　中杉紙
右毎歳御遣方爲御用、被進候分如此御座候、以上。
正月六日　中村與左衛門
覺
一、二十五疋　中八講布
一、十六疋　今幅平買八講布
一、十端　中絹御國染
一、十疋　御國中絹
一、一束六帖　延小奉書紙
一、一束四帖　中奉書紙
一、三帖　中廣杉原
一、七束三帖　並杉原
一、二丸三束七帖　中の中折
一、二十丸　中杉紙
右榮君樣ゟ毎歳被進品々候條、京都御役人迄指越之、中村與左衛門ゟ相渡候樣、會所御役人

ゟ可被申渡事。

二月十一日　　玉井市正

御用人中村田半助ゟ渡

覺

一、五疋　中　縣　布　（其の他略）

右榮君樣ゟ如毎歳被進候條、中村與左衞門等斷次第可被相渡之候、以上。

卯二月十一日　　玉井市正

小川彌左衞門殿

神戸藤右衞門殿

前月廿五日之御紙面致到來候。毎歳榮君樣ゟ被進候品々、別紙一通中村與左衞門より遠田勘左衞門迄差越、入御覽被指越之候條、例之通御用人幷京都詰人ゟ可申渡旨、御紙面之趣致承知、如前々可申渡候、以上。

二月十一日　　玉井市正

津田玄蕃樣

三月廿四日、老臣長甲斐守高連卒す。

〔政隣記〕

三月廿四日長甲斐守高連卒去、享年三十五、脾胃痨之由。普請・鳴物三日遠慮。頭分以上爲伺御機嫌、月番安房守殿宅へ參出。右病氣御尋、今月七日早飛脚を以御肴一種被下之。廿一日御大小將青地彌四郎爲御使江戸發足、道中常より者急候樣被仰出。廿七日金澤着、翌日御使勤、夫より越後屋敷へ出、年寄中へ御意之死後に付趣申述。閏三月四日御請相濟、翌五日金澤發。

一、卒去之儀江戸へ廿九日に相聞え、御前御甥に付三日之御忌に候得共、日數過候故同夜半切に而御遠慮相濟候。公儀へ御屆者、右之趣晦日朝御達有之。御家中廿九日・晦日兩日鳴物遠慮、普請者不及遠慮候。右爲御悔御使御大小將山村嘉左衞門、閏三月二日江戸發。十一日金澤着、翌日御使相勤、廿五日金澤發出。

長高連は尙連の養子にして、前田吉德の妹恭姬は尙連の室なり

閏三月十五日。前田吉德側室鏑木氏の待遇を改む。

〔前田貞直手記〕

總姬樣御袋方、只今迄名を唱候得共、今般御充行等も相改り、向後御袋方と唱可申旨被仰出候。此段爲御承知申進置候、以上。

閏三月十五日　　津田玄蕃判

圖書等五人樣

御袋は鏑木氏、後の眞如院

四月二日、前田吉德の女總姬江戸富士權現に參詣す。

〔政隣記〕

四月二日總姬樣富士へ御宮參、御先詰御近習頭丹羽澤右衛門、騎馬御供御近習御馬廻松尾縫殿、同物頭並大槻内藏允。右之外喜代姬樣御宮參之節御同事。

五月朔日。表小將丹羽織部の小者、幕府旗本の家來の證人の證人たるを以つて辨銀を命ぜらる。

〔護國公年譜〕

一、四月晦日御表小將丹羽織部小者八内儀、御步内出磯右衛門小者權内請人に候。右權内儀御旗本衆家來之請人に立候に付、先頃公儀より辨銀之儀被仰渡候處、頃日欠落仕候。因之右八内儀明日稻生下野守殿迄可指出旨申來。則朔日割場奉行・聞番指添下野守殿へ罷越候處、辨銀之事被仰渡候。輕き者故急に指出兼可申旨に而、割場より取替指出候樣申渡候由、前田土佐守殿被仰渡、落着不仕内八内牢揚屋吟味所に指置可申旨、土佐守殿御申渡。右返上方之儀追而可申渡、八内手前相濟候間、主人勝手次第召仕候樣、五月五日右御同人御申渡候事。

五月十一日。前田吉德柳營に上り天下太平を祝する爲の演能を陪觀す。

〔政隣記〕

五月十一日權現樣天下一統之支干に今年相當、打續御太平を御祝御能被仰付に付、日光准后・御三家樣・此方中將樣、幷御三家・庶流・御譜代御大名・布衣以上御役人等見物被仰付。從此方樣一種一荷御獻上。御能五番有之、八半時頃御歸舘。於殿中御三家御同席御先代之通。御膳部御三家者薄盤、此方樣者高足打。右御禮、翌十二日兩御丸御登城、幷兩御老中、若年寄中御勤有之。十日にも依御奉書御登城之處、右御祝能御見物之儀、於御白書院中將樣御一人に御老中御列座被仰渡、明十一日半袴、五半時揃、且今十日御禮には不及旨、大御目付御申談に付御勤無之。

一、十一日御白書院に公方樣・大納言樣出御、日光准后御方於御上段御對顏。畢而御大廣間御下段御着座、紀伊中納言樣・中將樣・此方中將樣御出席、御能御見物御禮、御老中松平伊豆守殿御取合。於竹之御間三汁十菜之御饗應也。御能御番組。

弓八幡　八左衛門　田　村　寶生大夫　湯　谷　觀世大夫

船辨慶　七太夫　融　十太夫　あさふ　彌右衛門　唐すまふ　仁右衛門

〔政隣記〕

一、享保十六年台德院樣百回御忌御法事相濟候御祝儀御能有之。此方樣御饗應御席等之儀伺

有之候處、御先代之通与被仰出、結構之御様子と御城坊主衆など御邸ゟ參上被申聞候得共、其節御不豫に付御斷御登城不被遊故、御治定相知不申候處、此度御登城之處、右之通御先代御同事也。依之前田信濃守殿など御出、御祝儀御申上被成候。

一、十二日若年寄衆ゟも御廻勤之趣前記に有之候得共、此方様に者前々之趣を以若年寄衆ゟ者御勤不被遊候事。

六月。大雨あり。宮腰浦に多く漂着物を見る。

〔淺新秘策〕

一、今年氣候不順之事、三・四月頃より五月末迄は折節至而寒く、風も極而丑寅之方より吹揚、氣薄く候所、六月朔日土旺の日より暑威日に強く罷成候。五月十九日夜雨降候迄にて、六月廿日迄照つゞけ候。廿日頃より雷雨いたし、折節大雨も降候。六月末つかたより、宮腰浦海上へ色々の物漂流いたし候。獵師は業を棄て、只海上へ出でひろひ申候。人の死體など多有之、或は蚊帳にまとはれ候も有之候。人家の梁・棟等、其外家財種々の物漂流いたし候に付、近國に洪水も候哉、越前等にて候はゞ相知可申事に候得共、未其聞え無之候處、七月朔日頃より越前・近江等大洪水の沙汰有之候。當四日八幡山新善法寺より本多主水ゟ迄早飛脚到來、六月廿一日より廿三日迄大風大雨にて洪水、淀・八幡邊は十五年前之洪水よりは三尺の上水

増申候。風は東風にて候。田地押流或は泥入にて、皆不農に罷成候由申來候。大和・山城・近江・越前往來之路泥水流出、漸に罷通候。去廿七日罷出、四日に參着仕候由。

〔吉德公之記〕

一、七月五日、今江村十村源助より、改作奉行中迄相達候趣は、前月廿二日より大雨にて、越前筋山抜出水にて、山方・浦方の内數ヶ所村家過半潰れ、人馬も相損じ、海川へ押流候由、委く承合候旨に而相達候。

七月廿七日。前田吉德就國の暇を受く。

〔護國公年譜〕

一、七月二十七日御暇上使御老中本多中務大輔殿を以、縮緬三十卷・白銀百枚御拜領。從大納言樣、同日上使御老中松平能登守殿を以、紗綾二十卷御拜領。

七月廿八日。前田吉德登營して就國の辭見す。

〔護國公年譜〕

一、五月二十八日御國許への御暇爲御禮御登城被成候處、於御黑書院御禮被仰上、御懇之御意、御鷹・御馬御拜領、土佐守・玄蕃御目見被仰付、御卷物拜領被仰付、重疊難有被思召候。此段何茂不申聞候樣御意之趣、御弘有之。

八月廿二日、前田吉德鼓を打ち大槻朝元をして道成寺の能を演ぜしむ。

〔政隣記〕

八月廿二日預玄院樣御滯之處御快、總姫樣御宮參被爲濟候に付、御慰旁今日御能有之、御前御鼓に而、道成寺シテ大槻内藏允勤之。

八月廿五日。前田吉德江戸を發し歸國の途に就く。

〔護國公年譜〕

一、八月二十五日朝五半時過江戸御發駕、御作法前々之通。御道中無御滯。御供前田土佐守御家老・若年寄前田大學、一宿御跡御家老役津田玄蕃。

九月七日 前田吉德金澤に着す。

〔護國公年譜〕

一、九月七日申い刻金澤御着城。御作法如例、御歸國御禮之御使者成瀨内藏助當延、十二、二被仰付、同日金澤立、同十九日着、二十四日公儀江之御使相勤、二十八日登城御目見。獻上物・拜領物前々之通。御使相仕廻、十月江戸發足。

九月七日。前田圖書の自分差扣を免さる。

妙光院は妙香院にて前田綱紀の女良姫

今七日は九月

〔政隣記〕

一、前田圖書前月廿七日妙光院樣御祥月之處心付無之、行歩に罷越、鷹仕候に付、自分に差扣罷在候處、御免被仰出、今七日登城。

九月七日。前田吉德政務を裁する爲特に定日を設くることを廢す。

〔政隣記〕

九月七日。御在國に者毎月八日・十七日・廿五日御表に御出、年寄中・御家老中・若年寄中御前に被召出、御用御聞被遊候處、向後者御定日は可被指止候。大概之儀は紙面或は口上に而可被申上候。紙面に候得者間違も無之宜被思召候。重き御用之品、紙面に難調解品は、其段可被申上候。何にても不時御出可被遊候。若又御急用等之品は、尤其段可被申上候。早速御出可被聞召候旨被仰出候。御近習頭に者、今月十七日遠田勘右衛門演述有之。

何はいつなり

九月十七日。前田吉德の子利和江戸に生る。

〔政隣記〕

九月十七日於江戸。今日御男子樣御出生之由、廿二日金澤に申來。御產婦總姬樣御袋之方也。御名勢之佐殿与、從預玄院樣御七夜之節被進之。

一、右御出生に付、蟇目御用奥村内匠に仰付に付、十月十五日御刀等被下候儀如御例。

御年表に九月十九日に作る

九月廿二日、前田宗辰弓初の儀を行ふ。

〔政隣記〕

九月廿二日勝丸樣御弓初に付、弓一箱六張・御矢一箱・御靫三指・干鯛一箱、御使若年寄本多頼母を以被進之。九時前勝丸樣御出、於御居間書院吉田左太夫被召出、御目見被仰付。同上之御間御前御着座、勝丸樣蔦之間御廊下より御出、御出口に而御弓矢左太夫上之。御居間書院御廊下に御巻藁飾有之。御弓初御規式濟、重而御居間書院御勝手口より御出、上之間御前御着座之御右之方に御着座、御表小將御熨斗三方持出、勝丸樣江上之、御手自御いし左太夫江被下之。右之節御前左太夫江御意有之。畢而同御間御緣頬之方江勝丸樣御直り、御雜煮・御吸物御兩殿樣江上之、御盃事被遊。畢而左太夫被召出、御前重而御意有之、被爲入。御兩殿樣御いしめ・御半袴、吉田家三人幷御弓張替爲御用罷出候御射手小頭松平杢右衞門・御附前田將監いしめ・半袴、其外頭以上ふくさ小袖・布上下、御近邊者平士も布上下。但御居間書院御用懸り御表小將御番頭・同御横目・御表小將御膳奉行はのしめ着用。

一、鱠之間於御緣頬、若年寄前田大學を以、左太夫江御廣蓋に而御時服二領被下之。杢右衞門江若年寄席二之間に而、染物三反御目錄を以被下之。

一、右御祝於御奥書院、若年寄以上御雜煮・御吸物・御酒・御肴被下之。御給事御表小將。御酒

之内、遠田勘右衛門罷出、御意之趣申述。
一、前田將監・菊池十六郎・遠藤紋太夫・吉田三家、竪御近習頭今石動御用半田半左衛門・御用人・御臺所奉行、於舟之間御雑煮・御吸物等被下之。給事坊主。并御次廻在合候平士、於波之間右同樣被下之候。

九月廿二日。松樹盜伐の爲に禁牢せられたるものを宥し一村一作一歩の過怠免を命ず。

〔加州郡方舊記〕

覺

河北郡御所村惣右衛門下百姓　市兵衛

右之者御所村持山江柴苅に罷越、松木四本盜伐取、割木に仕金澤江賣に罷出候處、山廻之者見付捕及斷候に付、當七月廿六日町牢江入置申候。右落着之儀御申聞候樣に仕度奉存候、以上。

卯九月廿日　關　屋

御算用場　林

欠字過怠なるべし

右付札に。
河北郡御所村惣右衛門下百姓市兵衛、持山より松木四本盗伐取候に付、當八月十日より禁牢被申付所、日数立候條出牢被申付、以後之儀急度被申付可被相宥候。前格之通一村一作一歩
一［　］免可被申付候、以上。
卯九月廿二日　　御算用場
關屋殿
林殿

覺

草高二百一石七斗　　外十五石三斗御扶持高御所村長次郎
一、二石二斗四升三合　　定納口米　御所村
當一作過怠免一歩物成。
右御所村惣右衛門下百姓市兵衛松木盗伐申に付、禁牢被仰付置候處、今般御赦免被爲成難有系奉存候。仍之御格之通、村高に當一作過怠免就被仰付候。御藏納之儀急度申渡候。爲其私御請上之申候、以上。
享保二十年九月廿四日　　御所村　長次郎

九月廿八日。前田宗辰乘馬初の儀を行ふ。

〔政隣記〕

九月廿八日勝丸樣御乘馬初に付、若年寄西尾隼人長恒を以、金谷御殿迄御馬二疋鴾毛星・栃栗毛星被進之。御目錄隼人持參。尤御馬爲牽、御玄關前に御中間小頭牽出、御馬奉行村杢右衛門請取、御手綱勝丸樣に直に上之御頂戴。且又乘役絹川源兵衛も指添來。右爲御禮追付御登城、御近習頭を以御禮被仰上。追付御對顏之上、御先に蓮池御馬場に御越、中將樣にも追付蓮池御亭に被爲入、無程勝丸樣右栃栗毛に被爲召、御手綱絹川源兵衛上之、常道五篇被爲召相濟。御亭に被爲入、御前に御出之處、御熨斗三方御表小將持出、中將樣御手自被進之、御退座。次に勝丸樣御用主附御家老津田玄蕃・前田修理・玉井市正被召出、御意有之。誘引遠田勘右衛門。右相濟、直に中將樣金谷御部屋に被爲入、勝丸樣御のし御持參被上之。夫より御廣式に被爲入、御祝事有之。御歸之節重而御部舍に御着座、將監・十六郎・紋太夫被爲召、御意有之。御歸御往來共、勝丸樣御玄關まで御迎御送被遊候。

一、御祝御雜煮等被下方、且裝束御弓初之節同事。御供人御步以上布上下、其外御表向常服。

繁姫未だ嫁するに及ばずして二條宗熈室せり

一、村杢右衛門へ絹二疋、絹川源兵衛へ染物三端被下之。

一、同日勝丸様へ白糸織御鎧一領・干鯛一箱、御附御小將頭遠藤紋太夫御居間書院三之間に被召呼、遠田勘右衛門を以被進之候。則於御部屋被爲召候以後、爲御禮御出御對顔。

十月七日　大聖寺侯前田利章の女繁姫を吉徳の養女となし二條宗熈に嫁せしむることを許さる。

[政隣記]

十月十五日備後守様御嫡女繁姫様御年十三、御養女に被成、二條左大將様へ御縁組御願之處、當七日御名代出雲守様へ、於殿中御願之通被仰出候旨申來、難有被思召候段可申聞旨、出仕之面々へ御意月番安房守殿演述。依之爲御祝儀安房守宅へ参出。

右に付江戸へ之御禮、御大小將番頭篠原六郎左衛門廿二日發。二條様へ之御使御先手津田平次右衛門、大聖寺へ之御使御先手駒井與兵衛。

一、右に付廿二日從備後守様、御使者御家老野口兵部を以、二種・千疋被進、御口上御奏者成瀬左京取次之。兵部於御居間書院御目見、御大廣間二の間に而御料理被下之。御答者御家老玄蕃を以被仰進。

一、御名代出雲守樣西之丸江も御登城、御老中方・若年寄衆江も御廻勤。

十月十二日。米價低落を防止すべき幕令を齎らしたる飛脚金澤に達す。

〔政隣記〕

十月十二日。米直段下直に相成、武家幷百姓難儀、町人・諸職人等に至迄商ひ薄く、稼事も無之、世間一統之困窮に付、金一兩に江戸は一石四斗、大阪は一石に付銀四十二匁以上に買請可申候。若右より以下に買請候者、當十五日より一石に十匁宛運上に可差出旨申觸候樣、當五日被仰渡之趣、江戸より早飛脚今日到來。但右之通江戸・大阪米直段宜成候者、右に准じ諸國共に米直段宜賣買可仕旨も被仰渡書に有之。

附、十一月重而被仰渡有之候得共、指支申事而已に而米直段不貴。

十月十六日。櫻町天皇の即位を賀する爲、金澤より横山正從を使者として京に赴かしむ。

〔政隣記〕

十一月三日御卽位に付京都江之御使、人持組横山圖書正從江九月廿八日被仰付。十月十六日發足、廿二日京着。今月九日禁裡・仙洞江之御使勤、十六日京發、廿二日金澤歸着。

櫻町天皇受禪のことは此年三月廿一日に在り今月は十一月

十一月朔日。火災に際し藩侯の行列に加る者の鑓印に銀の二枚短册を附せしむ。

〔國事雜鈔〕

火事之節御行列に罷出候人々、鑓印銀之二枚短册を付け、右鑓印を以御供相しらへ申候。御行列之外は、銀二枚短尺鑓印用不申筈に候間、御承知被成、御組・御支配等にも夫々御申談置可被成候、以上。

十一月朔日　　御横目

十一月八日。前田吉德の子重靖江戸に生る。

〔政隣記〕

十一月八日亥刻、金澤於二之御丸御廣式御男子樣御出生。御生母奥泉氏。十五日御七夜、御名定番御馬廻御番頭杉江木工左衛門（兼御廣式御用）指上、嘉三郎殿与被稱。同日五百八十之餅并鯉一折二、御名に添上之。同日纂目御規式奥村内匠勤候に付、御前に召、御腰物等被下候。儀如御例。

十一月十五日。前田吉德櫻町天皇の即位を賀する爲め德川吉宗に物を献

る。

此時前田吉德は在國なり

右とは御卽位をいふ

〔德川實紀〕

十一月十五日月次例の如し。中略。御卽位を賀して三家幷に松平加賀守吉德より二種一荷、紀伊中將宗將卿より一種一荷、二十萬石以上は二種一荷、五萬石以上は一種一荷、五萬石以下も四位は同じく奉る。西城には三家・加賀守吉德より一種一荷、中將のかたより一種、二十萬石以上は一種一荷、五萬石以上は一種なり。四位も同じ。

〔政隣記〕

一、江戸に而今月十一日右御祝儀惣登城。十五日兩御丸へ二種一荷御獻上。

〔政隣記〕

一、右御祝儀江戸への御使、御馬廻松崎所左衞門、今月廿六日金澤發足。

十一月十六日。前田吉德放鷹に扈從する人數を減ずべきことを命ず。

〔政隣記〕

十一月十六日御鷹野御行列御減少、只今迄百二人之處七十五人に相極候事。

十一月廿五日。前田宗辰讀書初の儀を行ふ。

〔政隣記〕

十一月廿五日勝丸様御讀書初に付、右御用定番御馬廻組御書物奉行大地新八郎ゟ被仰付、布上下着用、金谷御殿ゟ罷出。大學之本文少々被爲讀候。

是月は大盡なり

十一月晦日、徳川吉宗の前田吉徳に贈れる鶴金澤に達す。

〔護國公年譜〕

一、十一月晦日宿継御奉書今朝六時到來、四時過鶴到來。但十二月二十五日御用番松平伊豆守江、聞番吉座傳右衛門被召呼、御奉書・御鶴御渡、御請書出來、同日戌ノ刻江戸御屋敷發足右御鷹之鶴、享保十七年之通御居間書院に而御頂戴之節、御近習頭松尾縫殿・伊藤六郎左衛門持出之。右御禮之御使者、御馬廻頭丹羽武兵衛被仰渡、十二月三日金澤發足、同十五日江戸着、御使勤之。同二十八日御目見、翌二十九日御奉書相渡、例之通拜領物も被仰付、翌年正月二日江戸發足、同十三日金澤歸着。

十二月廿五日とあるは誤なり

十一月、石動山天平寺智識廻の沿革に就き上申す。

〔加州郡方舊記〕

石動山智識廻之儀、加州三郡寛永之頃御紙面出申處に、寛永年中より中絶仕居申旨、東林院より寺社御奉行所ゟ願紙面、并先年御郡方ゟ出申御紙面之寫被指上、私共ゟ爲御見、舊記等有之哉相尋可申旨被仰渡候に付、承合候へ共、御紙面之寫等無御座候。寛永之頃に御改作以

前之儀に御座候。御改作に被仰付、加州三郡石動山智識廻之儀無御座候、以上。

享保二十年十一月

三郡十村廿七人連名

宛所御郡所に候哉、改作所に候哉、不知。

十二月十三日。家老津田玄蕃等前田吉德の意に違ふことありて職を免ぜらる。

十二月なり

津田玄蕃敬脩

〔浚新秘策〕

一、當十二日前田大炊殿忌中に候所、妹病死也。忌御免之旨被仰渡登城之所に、本多安房守殿・大炊殿兩人御前へ被爲召、久敷御密談有之候。暮に及候而退出に候。月番土佐守殿・筆頭大和守殿及奥村内匠殿には不被爲召候故、常之通八時退出に候。非常之事故人々不審に存候事。

一、十三日大和守殿・安房守殿・土佐守殿・大炊殿・内匠殿幷村井主膳殿出座、於御隱密所談合數刻に及候。奥村内記殿病中に付、宅へ迄爲御使大和守殿御越、御請は又登城候而被申上。暮に及各退出有之候。但御前へは不罷出候由。御家老津田玄蕃儀思召之品有之、御役儀被差除候旨、組頭奥村内匠殿宅に而被仰渡候。不調法之私に而思召にも叶不申候所、長々大切之御役相勤罷在、忝儀に奉存候由御請相濟、如何樣之筋御意に不應候哉、心得にも罷成候間承知仕度旨被申候所に、一圓何之御樣子に候哉不承候由挨拶に付、せがれ内藏助儀は、私御役

前田勘解由孝和
中川式部長定

儀故被召出、過分之御知行と被下置候間、御知行は指上申度候、且亦明後十五日出仕は相扣可申儀と存候旨被申候所に、此等之趣は各申談置候。內藏助ゟ被下候御知行等は尤不及頓着候。十五日出仕之儀も不及被相扣候。此度之儀は御自分迄に而茂無之、前田勘解由・中川式部も同前に候間、必出仕有之可然旨內匠殿被申渡候。勘解由・式部兩人之組頭大炊殿宅ゟ被招、玄蕃同前に被仰渡候。御横目不被罷出、御同役方立合も無之候事。十五日三人共登城有之、御目見も被仰付候。罪科之筋一向相知不申事。

一、右之儀に付思召と申趣、年寄衆も不被存候由風說區々に候。安房守殿は三度に及、思召之趣被仰候得共被仰出無之旨。就夫推察之巷說種々有之候得共、今以不慥候。或は此度和州發端に而、御貸渡銀配分私なる仕樣に付、是より出申儀とも申候得共、是式之儀に而三人一所に御役可被指除樣も無之、其上右銀子中川氏は借用有之外、兩人は且而借不被申候。左候得者此事とも不相聞候。こゝに一統左も可有之候に存候儀有之に付記置候。頃日和州等內讀有之、當月十五日に直に可相調と申事有之由。其趣は津田玄蕃嫡子內藏助、中川式部嫡子八郎左衛門兩人、若年寄之席ゟ相詰見習申樣に仕度と申事。前田勘解由儀少知に而御役儀難勤候、二千石御加增被下候樣に仕度と申事。式部願には諸大夫中は白小袖着用に候、前田修理と私は御前代以來相勤年罷寄候、外に御懇之筋も無之候間紅裏御免有之樣に仕度と申事。此

舊臘は享保二十年
立あふひは本多
坂の下は前田大炊
横山は大和守
笹之丸は奥村内記
土佐駒は前田
内匠は奥村
村井は主膳
九曜は長
三人は津田支蕃前田勘解由中川式部

之件和州等同心に而十五日を相待申候間、此趣を密に奉達御内聽候人有之、殊外御憤被遊、俄に十三日に安房守・大炊に御意等有之由に候得共、御隱密故一向思召之趣不存候と兩人共被申候共、又は實に右兩人に之御內用は別件之儀とも申候。右達御內聽候人は、玉井市正殿と申事に候。有澤氏話。

〔浚新秘策〕

一、舊臘以來童謠有之旨に而或人申聞る。能事情に叶ひ候諷ゆゑ書記しぬ。里巷の賤きとて忽にすべからず。其歌に曰く、扨々實なる立あふひ、つゞいてよいのは坂の下。御作法やぶりの横山や、且又笹之丸。きのどく土佐駒の、くちあひ調子もさだまらず。内匠は猩々ちどり足。世の中ういとて村井がいでぬもまゝならぬ。九曜が死んだは、御家のさかゆる基なり。御役儀御免の三人、ひとりはごうやらきこえたが、くわつとでかけて二尻のゆかぬは當世風、中村のむかしの歌もうたはれず、御幣あげても神ぞかなはぬ。

中村五兵衞中比稱雅樂、せがれ新藏といふ。

十二月十八日。大小將組頭中村五兵衞不行狀を以て役儀を除き逼塞を命ぜらる。

〔浚新秘策〕

一、十八日八時過、於越後屋敷、月番土佐守殿・内匠殿御立合、御横目青木彦太夫・西村甚太夫罷出候而、御大小將組頭中村五兵衛（六十五歲）罷出、被仰渡候は、五兵衛儀御部屋附以來段々役儀も被仰付候處、勤方不宜、第一不行狀に候。相憤改申かと御見合被遊候得共、彌不行狀に付、役儀は御取放、逼塞被仰付候由。退出之砌、長圍爐之間にて彦太夫出迎、肩衣取可申旨會釋いたし取申候。せがれ中村新藏（是は外へ養子に罷越候。）儀、組頭伊藤彦兵衛宅へ召出し、入江八郎右衛門立會、新藏儀平生不行狀之趣達御聽候。急度遠慮仕可罷在候由被仰出候。相頭溝口舍人氣色相滯候に付、御用番八郎右衛門罷出候由。

一、五兵衛若年以來不行狀共不違枚擧候。人望に背申事ども多候。當七月江戸御留守詰當番に付、其用意も仕罷在候所、五月頃思召有之候條五兵衛罷越に不及、番頭以下組中は富永數馬召連罷越候樣に被仰出候。組之役附相極候に同役へ之示談無之、番頭幷御横目へも不及内談、自分存寄迄に而相極、當春江戸表へ奉伺候而夫々申渡候。萬端御用之筋も右樣之勤方に候。御番頭は九里治兵衛、御横目は井口五郎左衛門也。當秋御歸國以後、二御丸御廣式に御次女中縫物役御用之旨にて、原九左衛門・多田要人等より御家中高知は給人分、頭分は中小將等之姉妹等相願候者有之候はゞ書出候樣に仕度旨、年寄衆迄紙面を以申達、御用番より諸頭へ被仰渡候。御小將組には願候者無之旨、御用番里見彌太夫より組々へ趣承屆、其段申達事

濟候所に、五兵衛近年愛妾有之、町人之女に而候。其者を呼寄、御次女中を爲願候。町人・百姓之子は願申事難成候に付、五兵衛家老何某が妹と稱し、由緒帳も作立、自筆に相調候而願候へば、早速願之通被仰出候。此儀孫太夫致承知、難心得相尋候所、俄に相願不及示談候。此女は容儀等も並に越候。只居申ものにて無之候由、心安參會仕もの共へは申候由。聞けるもの共大に驚候。此儀も此度露顯仕候と相見え、右女も頃日於御廣式御扶持被召放候由。

一、五兵衛此度土佐守殿・内匠殿へ對し申述候は、御奉公之儀精誠心懸相勤之、存誤候覺無御座候。行狀之儀も身に覺無御座候旨申候處、内匠殿、段々被仰出候上には、不入申分に候旨挨拶有之候由。廿一日夜中村典膳はいとこの同姓に付、用事も有之旨申越候に付旁見廻候處、五兵衛申候は、當春江戶詰之儀も被仰渡、罷越候に極申候所、重而思召有之候間不罷越樣に被仰出候。其時分は、何とぞ此上にも立身も被仰付候事と心底には存寄罷在候處に、今般之被仰付樣に而考候得者、行狀等も相改候歟との御思慮之儀と存當候。十八日於越後屋敷左樣之辨は且而無之、近頃申上間敷御請申上候事と、宅へ罷歸存付候。夫より以來平生之儀心附申候に、御部屋附候而相勤候以來段々不行狀之儀心附申候。此心底之趣土佐守殿・内匠殿迄申上度候得共、誰に可申入樣も無之候。御自分之儀に候條、不苦被存候はゞ、御兩方へ可然被申上候樣にと願候、依之典膳、廿二日御兩人に迄其存付申述候得者、ヶ樣にも可有之事に候。

其内御序も候はゞ可申上儀も可有之旨、挨拶御座候由。

一、廿一日御小將頭宮崎長太夫宅へ、里見孫太夫立會、御横目青木彦太夫・西村甚太夫兩人招之申渡し候。今般中村五兵衛肩衣ぬがせ候事、昨今之役儀に而も無之、數ヶ年御横目役も相勤候所、ヶ樣之儀前方詮議も不仕、平生不心懸故と思召候。急度役儀も御取上け可被遊候得共、先此度は其通に被遊候。此趣頭共宅に而屹と可申渡旨被仰出候。神田御前樣附物頭並成瀨十左衛門、先年御役儀御取放、組外に被仰付、逼塞被仰付候。其時甚太夫罷出、肩衣爲取候。其儀を存出同然と心得、此度も肩衣ぬがせ候。不念至極之至、御役儀も指上度候旨兩人より申上候而、御僉議有之如此被仰出候由。

十二月二十日。老臣等家中匡救の爲に用銀調達の手段を議し、尋いで町人鍋屋利兵衛を京阪に派遣す。

〔浚新秘策〕

一、舊臘廿日頃、大和守殿以下御年寄衆於御隱密所、御算用場奉行三人被相招、和州被申候は、御家中續銀の爲に御銀御用に候。其才覺に十村之内中橋村久左衛門・稻船新七兩人は、中町に罷在候鍋屋利兵衛と申者指加可指遣候。先の參會は十村共心次第に候。此趣御家老中へは爲知不申、かくし可申候。御横目久田清左衛門へも爲知不申樣に相心得可申旨被申渡候。

舊臘は享保二十年

天正寺村塡生村は越中

御前ゟ被相伺候へば、如何様共勝手次第に可仕旨被仰出候由。依之御奉行三人役所へ罷歸、役所之御隱密所へ改作奉行其外小役人共集之、右之趣迄内談候。鍋屋利兵衛事は、町奉行へ迄遂示談候へば、只今迄組合頭相勤候得共其役取除、御算用場奉行指圖次第御用相勤候様に申渡候。御算用場より御内意奉伺候へば、此銀之儀も其筋不宜思召候。年寄中伺候故、如何様共宜敷勝手次第与被仰出候。先は辨じ申間敷思召之趣に被仰渡候。久左衛門・新七罷越候様に申渡候へば、二人に入用銀六貫目餘宛被渡下候様に願申候。十四・五年も前、右久左衛門・新七に、天正寺村十右衛門・塡生村傳右衛門など申もの共に、右鍋屋利兵衛相加り、何方へ哉らん御かね才覺に罷越候。其時は御米切手七千石分之印物を渡し、御金調次第、段々此印章を證據に仕可相渡と申筋に而罷越候處、一圓に承知仕候もの無之、空敷罷歸候。此度は御米切手之沙汰は少も無之候。何を當目に仕事に候哉、合點不參候。其上被仰出候御内意も有之に、旁久左衛門・新七は不遣候。利兵衛一人罷越候儀は如何敷候に付、稲船手下に罷在候文次と申者指加、一人に銀子一貫目宛爲入用相渡遣候。兩人共、刀赦免、駕籠に而罷越候由。扨此起本は何方より出申哉と相尋候へば、中橋久左衛門儀和田釆女ゟ心安く出入仕候に付、私に御任せ被成候はゞ、才覺可仕旨申進、其趣を土佐守殿へ釆女申入候。土佐守殿迄合點に而は難成趣に付、大和守殿ゟ釆女申達、夫より示談相極候由。御家老之内玉井市正殿は、去

夏御發駕前、右久左衛門を內記殿惣十村ゟ取次役に申付度旨被相伺候節、內記ニ私曲も仕候、津田玄蕃幷市正兩人に而、御横目清左衛門ゟ相尋候はゞ其筋相知可申旨被仰出候事共有之候。夫故此兩人承候はゞ、久左衛門手前之事に付邪廃出來可仕歟との事と相聞え申候。

十二月廿五日。前田大炊叙爵して對馬守と稱す。

當月は十二月

〔護國公年譜〕

一、諸大夫御願之儀に付、當月十六日御用有之候間、御一家樣方之內御名代今日御登城被成候樣、昨日御用番より被仰渡、出雲守樣御登城。御家來諸大夫欠有之御願之所、御願之通被仰付候旨、御老中方出雲守樣へ被仰渡候由。依之直に西丸幷御老中方・若年寄衆御勤、本鄕御屋敷ゟ被爲入、右之趣品川主殿ゟ仰渡候。依之十二月二十五日御居間書院へ御出、年寄中被爲召、諸大夫御願被仰出候御普爲聽御直に被仰聞、何茂退座。重て前田大炊儀諸大夫仰付、對馬守に相改候樣御直に被仰渡退座。追而横山監物等三人幷御家老中被爲召、右之趣被仰聞。同二十九日於御廣間御年寄中御列座、人持頭等ゟ前田土佐守被仰聞候は、甲斐守代諸大夫之儀御願被成候處、御願之通被仰出、前田大炊叙爵被仰付、名をも對馬守与爲御改被成候。何れも申聞候樣御意之旨御演述也。

依之爲御祝儀、年寄中等表向出仕以上之面々相勤、御用番之者は御月番迄罷出候。

是歲。前田吉德歸國の後、演能放鷹等を廢す。

〔淩新秘策〕

中將樣御幼少之時より小鼓を御打覺被成、折節御能も御打被成候。去年御在府之内、幸五郎九郎を被爲召、段々御習事も被遊、道成寺迄も御傳授被成候。仍之御家中一統能拍子のみ朝暮稽古申、保生太夫以下家之者共晝夜召集、甚數樣子共に而、前田土佐守殿・津田玄蕃殿御指舞、前田大學殿は大鼓稽古に候。御馬廻頭和田釆女は、指舞稽古之願を申上、御小屋に保生を招き習申候。御馬廻之事は、御前代以來、御客方御用第一主付之役に付、自餘之頭分とは格別之勤方故、朝五時過より七時過迄毎日相詰候事、數十年來舊例に候處、土佐守殿・玄蕃殿内證申達置、毎日八時より退出、小屋に而二十五番宛日々稽古いたし、終に修練も仕候哉、初而山姥之能於御前に相勤候。或時遠田勘右衞門に迄御意被遊候は、我等小鼓を數寄候得者、頭分共も能拍子專に仕候樣子に候。是は我等に鼓を止よとの事に思ふと御意有之候。九月御歸國以後數ケ月立候得共、御能拍子等之沙汰一度も無之、御鷹野之御沙汰も且而無之、御夕飯後只一度御行步に御出被遊候迄に候。或時御近習頭共之内に御意被成候は、我等小鼓を打候得者、能儀こ存候哉家中專取はやし、頭共にも數寄過候体に付、態与御歸國以後御手にふれ不被成候。勝丸樣御仕舞御稽古御止被成可然候。乍然御幼少樣之事に候得者、意おりに申上候事は不入も

意おり本のまゝ

のに候。次第に寒氣に向候處、御舞扇は別而御ひえも可被遊候間、間遠に被成可宜と可申上候由、御守共迄被仰渡、其段申上大形御止被遊候。如此に候得共、横山和州・中川式部には押立たる能興行、前田土州には毎度稽古能、前田大學には和田釆女を毎々招寄亂舞いたに候由。横山氏には第一鷹野好物、鷹數も知れ不申程有之候。二十連迄は世上に而物語仕候共、夫より上之數は口外不仕樣にとの誓詞を申付置被申候。先頃御柄之鳥二つ獻上有之候處、即日被返下候而被仰出候は、世上も困窮、下々難儀之年と思召、御前には御歸國以後御鷹野には一度も御出不被遊候。然れば此餌柄は、大和守賞翫可然思召候旨に而御返し被成候。それに而も鷹野は止不申候。勝手至而困窮、家來之内扶持方取給銀之分は、當春以來一向渡り不申候。難儀至極今日を暮し兼候故、或は和州之知行所に罷越食物を盜、或は其所の松杉を剪候而、とがめ候へば名を名乘、大和守家來に候得共、春以來給分も無之相勤候得者、ヶ樣之事をも不仕候は而者難過候由を申、あばれ候も間々有之候。十二月半に成一人に銀百目計相渡候由。

元文元年

二月三日。改作奉行等を上國に派し銀子を才覺せしむ。

〔政隣記〕

二月三日改作奉行大塚彌五太夫・丹羽伊太夫御隱密御用被仰付、十日計之用意に而上方邊ゟ發足、同年冬に至歸候。是御家中勝手難澁に付、御貸渡之銀子才覺と申取沙汰也。

二月八日。今秋前田吉德及び宗辰出府の際の從臣を定む。

〔政隣記〕

二月八日當秋御參勤御供與村內匠・玉井市正被仰渡。但市正若年寄兼役に付、外に若年寄者不被召連候、相兼勤候樣被仰出。

〔政隣記〕

二月八日、當秋勝丸樣御出府に付、御供御家老前田圖書貞直、并御附前田將監・菊池十六郎・青木新兵衛・遠藤紋太夫被仰渡。

二月十一日。金澤城辰巳櫓下の石垣修理を命ず。

〔政隣記〕

二月十一日。辰巳御櫓下石垣張出候處御修覆被仰付候。外に御奉行不被仰付。御普請奉行ゟ御橫目津田五左衛門・御大小將戶田與一郎主付、御作事奉行・內作事奉行等加申付候樣被仰渡。四月廿八日全出來、右御用勤人々ゟ夫々拜領物被仰付。六月朔日大和守・安房守被爲召、御紋附御時服二領宛御內々に而被下之。御當代初右御修覆無滯依相濟候也。

二月廿四日。大槻朝元知行加増を命ぜらる。

〔政隣記〕

二月廿四日左之通被仰付。　大槻内蔵助

御加増二百石骨折相勤候に付被下之。

二月廿七日。細井藤太夫八十一歳を以て隠居を命ぜらる。

〔政隣記〕

二月廿七日御役替并隠居家督被仰付。

組外御番頭

隠居料三十人扶持　細井藤太夫政守宗閑と改

家督無相違四百石　同　右平次

右宗閑五十三歳に而家督、同五歳に而御大小將に被仰付、寶永六年大がね奉行、享保十年十二月廿五日組外御番頭、同廿一年隠居、于時八十一歳、米札出之、脇書二歳之有男子と附記す。元文三年又女子出生、延享四年八月八日食傷に而死、享年九十二。終年迄眼耳手足健也。歯は不十分由云々。

二月。用銀調達の爲改作奉行大塚彌五太夫等に京坂出張を命ず。

〔浚新秘策〕

一、二月朔日年頭御禮相殘候者共卯刻より登城、其外御使歸三人、初而御目見相願候子共、且又例月出仕候面々相詰候所に、八半時表へ御出、御禮等相濟候。九時表御居間に御出被遊候所、月番安房守へ御用有之、且又大和守伺之趣有之。依之表へ之御出遲罷成候由。大和守殿歸宅に而、內々大願に被存候他國御借金之儀、今日色々申上、大形九分計に仕寄安堵之由、近習之者共へ心祝など給候由。扨二日より段々御算用場奉行へ示談有之、開作奉行之內大塚彌五太夫・丹羽伊太夫兩人へ、中橋久左衛門・稻船新七兩人之十村指添、舊臘鍋屋利兵衛・百姓文次罷越候處へ參り、彌銀子才覺可仕旨被申渡候。利兵衛・文次罷越候樣子承合候所、先に而銀主共中々直には對談も不仕、手代等を指出致挨拶候。加賀守樣に御直に御用候はゞ成程御用に立申候。但大坂に之御廻米を以御返濟之儀、鴻池新七・具足屋七左衛門等同格之趣を以、御用相勤候樣に可被仰付候。御廻米も加賀守樣御詰米に而可被渡下候由申候旨。

一、彌五太夫等申候は、久左衛門与申者不實第一之者に候。他國に而彼此と不實成仕形候而は、不可然儀に御座候。其上私共被遣才覺候に、十村兩人指添罷越、何之益も有之間敷候。舊臘罷越利兵衛・文次など罷越候はゞ、一度知人にも罷成候もの共へ挨拶仕爲にも可宜候歟。十村兩人は無用に仕度候旨申候。尤成趣に付、其通与相極候所に、大和守殿より横山兵庫迄、

事長紙面被指越、是非共に久左衛門・新七は罷越候様に仕度候由、くどう申來候。依之重而會議有之、十村も相越候。但舊臘可遣哉与示談候節は、兩人刀を帯駕篭に而罷越候圖りに付、六貫五百目銀子相願候。此度者彌五太夫・伊太夫召連罷越候趣に候へば、辛尻につせ、一僕に而罷越可然候。左候はゞ扶持方代之外、銀二百目計貸渡し候而可然との儀に候所、是も和州へ内證申達候体に而、餘分請取申筈之由。今月十二日發出仕候筈也。彌五太夫・伊太夫は月俸并路銀等之外に、二貫目宛彼是之入用銀として被相渡候。惣而發出迄之渡り高十四貫目餘之御費に候事。

右之趣に候處、大和守殿より甚隱密に被申渡、親子兄弟に而も何御用との申品申間敷由に而、或は湯治と稱し、或は産物之品御用などゝ託し罷越候。先京都に罷越、密々に金子才覺之筋申談候。家中用金八千貫目計と申品、大森三郎兵衛などにも申聞、有増才覺御調寄有之候、其上を取持仕候様にとの趣に候。然處大坂に罷在候三井が手代越後屋清兵衛と申者之店借居い輕き町醫大原帯刀と申もの、清兵衛へ申談候。此度賀州より三井氏の金銀才覺之爲に役人中致上京候。是は大森三郎兵衛と三井縁者故に、若調ひも可申歟との意得に候。拙子儀此取持へ加り候へば、一生之資にも可罷成候。首尾次第扶持人にも可罷成候。何とぞ銀子取持も自由に罷成候様に、ならぬ迄も下取持いたしくれ候様に頼候。清兵衛申候は、三井事は諸大名

衆ゟ金銀取替候事、一向に不仕候故、左樣之儀は不罷成候。乍然御手前一生之貧にも罷成候由に候へば、見捨申も如何に候。こゝに鍵屋太兵衛と申もの、ケ樣之事に功者有之、取持も可仕候。此もの引合可遣由申聞候て、太兵衛を引付、淸兵衛は構不申候。帯刀事京都ゟ罷出候。扨又大坂に到而輕き町人播磨屋彦九郎と申者、帯刀と申談、浪人と稱し早川彦九郎と名乘、刀・脇刺を帶し、若黨兩人・仲間三人召抱、京都へ罷出、大塚・丹羽ゟ金銀之示談仕候。其下取持は皆以久左衛門仕候由。扨家中用金調候ほど其返濟之筋は如此と、大奉書紙に其趣を記し、其末に開作奉行頭大塚彌五太夫・丹羽伊太夫、勝手勘定役廣瀨久左衛門中橋事・笠原新六稲船事、下役窪田文次稲船手代、百姓事、取持人大原帯刀・早川彦九郎と交名を著し、京中・大坂其外近國觸廻し、御用相達候へば大坂着米三百俵充毎歳宛行、御會釋は鴻池等同斷に可有之与申觸候。一萬貫目迄は可相調旨申に付、大塚等兩人信用仕、飛脚を以和州ゟ迄三月半頃申達、先當座之褒美に御國染絹・肴等相贈候由。至而無根之儀、謀計を以か。一旦之利を得申爲迄に仕候事とは不存候旨。大坂邊にては山子又は雲助などゝ異名を付置候。盗賊之類に候故、此者之類に加り候へば、實に御用にも立可申与存寄候者も皆引入候。京都・大坂等詰人其外も、御家來數多有合候得共、至而隱密ニ申て心附申者も扣候而不申聞候。副田甚兵衛大坂より就御用出京次手に、大塚等に逢候而、近頃笑止成事共と存候へ共、先は相扣不申入候。早速此者共之手前引離れ、

別段之趣を以才覺有之候はゞ可然も可有之候。他國に而、ヶ樣之儀承知遠慮仕罷在候而は、根元御爲之所ぬけ申候。拙子申事迄にて難心得候はゞ、近々大坂へ罷出、當間安右衛門へも内意有之可然存候旨、異見を加申候。依之右兩人四月半頃大坂へ罷下り、安右衛門へ致對談候。安右衛門も甚兵衛同事に申合候。一時もはやく仕廻罷歸可然候。金銀才覺は不調候共、せめてはみやげは可有之ものに候。右由子等之付申首尾を明白に書記し、是を以申譯も立候樣に被仕候はゞ可宜哉と申候所、悉中橋久左衛門口入に而仕候儀と兩人申候由。今以京都に逗留未罷歸候。

四月二十二日記す。

五月に入、丹羽伊太夫一人罷歸候。御家中用金今以不相調候。

三月十一日。前田吉德大槻朝元の邸に臨み、尋いで朝元その妻を離別す。

〔淺新秘策〕

一、三月十一日御前には粟ヶ崎邊御鷹野に御出被遊、御歸路之節内藏允宅に御立寄可被成旨、中途に而御意有之。内藏允は御先に早々罷歸候。前々も毎度内藏允宅には被爲入候。但去冬婚禮仕候以後は不被成候旨。今日初而也。御膳等之用意も仕、妻方よりも品々獻上之用意も仕候。妻は淺井四郎三郎姉に而、伊崎彦右衛門妻之姉也。多分妻茂御目見可被仰付哉と、其内證も仕置候。一時計も被成御座御歸被遊候。妻は御目

見も不仕候。其夜四時に成候得共、內藏助路次之亭に居候而、內所ゟ不罷越候に付、老女などゟ申談、煎茶用意亭ゟ迄致持參、則內所かよひに而爲給候所、二・三椀に而給不申故、妻は奥ゟ罷越候。八時に至候得共內所ゟ不罷越候故、重而酒肴拵、亭ゟ致持參候所、內藏允は愛妾兩人有之、其者共を誘引、亭幷八幡之祠を設置其邊に池水有之、船を浮罷在候。其所ゟ妻盃持參酒を勸候得者、宵より餘程酒も給候故酒は無用と申候。妻に給候樣にと勸候。是も內藏允を見合、酒は被下間敷旨申候。妻强而申聞候得共、いやと申に付、左候はゞ我等給べきし可申旨に而、一つ給遣候へば妾もいたゞき申候。其時內藏允申候は、いやと申ものを無理に爲給候は、人に毒飼仕与申ものに候よし申候。妻承り、至而短氣成生れ付に候故、毒飼仕候とは難心得事に候。左樣得者あのもの共ゟ毒をあたへ申ものと思召候哉。私も給遣候と申候。內藏允たとへて申候へば左樣之筋に候と申所、人に毒飼仕と思召候而は、生而居候而無詮仕合に候。覺悟仕候旨申、其儘船より入水仕候。內藏助あわてゝ飛入引上げ候得共、水深く、彼此仕候內水餘程給申候。岸ゟ引上、內藏允は內所ゟ入申候。兩妾は泣さけび申候。其日御成に付、御小人頭園田理左衛門と申もの詰合、未罷歸候。此者承付けかけ出候而、妻をいだき內所ゟ引入申候。水を二・三升も吐候。藥等用、彼是仕候內に夜も明申候。乳母申候は、氣色も不宜相見え候、里ゟ罷歸遂養生申度候旨申候。內藏允承候而如何樣共いたし返し可申旨申付、

乗物にかゝさ載、十二日朝弟源右衞門方ゟ罷越候。四郎三郎改稱源右衞門。今年十七歳。

右内藏允妻には、元來先年定番々頭伊崎所左衞門嫡子新番彦右衞門方ゟ嫁娶申談候。其碑介は江守角左衞門・原田又太夫に候。近々願書附茂可指上とて示談有之砌、右女子ゟかくさ爲知候所、一圓合点不仕候而申候は、我等事午女淺井家の惣領にうまれ居候に、所左衞門嫡子彦右衞門体の小身もの、家筋も不慥方ゟ罷越候事は得仕間敷候。父源次郎殿御存生に候はゞ、ヶ様に而は有之間敷候。四郎三郎幼少、其上母儀も無御座候故、一家中ヶ様に被仕候事と存候。所詮一生嫁娶仕間敷候とて、手自髮を斷申候。各あきれ候得共可仕様も無之事故、角左衞門を以かくと所左衞門に爲知申候。所左衞門父子承之、不及是非次第に候得者、勿論其通一生嫁娶仕間敷と申趣に而事濟候。左候はゞ其妹をもらひ可申と申儀に而、妹も婚姻奉願候所、願之通被仰出、近年致嫁娶候。右之仕合故何方ゟも嫁娶相談に不及候。然所去秋御歸國以後、大槪方ゟ申談度旨、四郎三郎一家故、菊池十六郎・金森多門等ゟ申來候得共、右之趣を以斷に及候所、或時御近習に而定番頭遠田勘右衞門儀、十六郎迄申聞候者、内藏允と緣者之儀、其身寄迄に而も無御座、御前にも可然思召候。何とぞ示談相調候様にとの儀に付、伊崎その趣申述、畢竟侍中ゟ之相談は難成ものとて一家共存寄、其内一向坊主などへとらせ可申哉と申趣に御座候由申達候所、内藏允一々内證之事は合点にて御座候、

少も不苦候間申談度こ、重而勘右衛門を以申聞候。伊崎手前も是は格別之筋、如何様共こ申趣に相成、急に內談相調、十一月朔日嫁娶も調申候。其時分淺井方よりは江守角左衛門、大槻方よりは御近習之內關屋長太夫罷出、双方申談候。此縁談未相極內、前角御馬廻組長瀨藤太夫方に再嫁を望候娘有之儀、內藏允承及候而、申談度旨申懸候所、藤太夫同心不仕斷に及候。夫故淺井に申談候由に候事。

淺井源右衛門方に引取置候故、最早義絶可仕外無之候故、淺井方より書付も出し、引取可然こ示談候得共、十六郎以下僉議延々に候內、內藏允より離別之書附も上之、不縁之由源右衛門方に書狀を以申越候。

四月朔日。前田宗辰今年出府の時期に就き幕府の許可を得たることを告ぐ。

〔政隣記〕

四月朔日、例月出仕之面々御目見以後、竹之御間に列居、年寄中御列座。勝丸様御出府御時節、當九・十月頃こ御伺被成候處、御伺之通被仰出、忝被思召候、此段何茂可申聞旨被仰出候由、月番安房守殿演述。依之爲御祝儀、月番御宅に今・明日之內參出。

四月五日。金澤石浦新町より火を失す。

御祥月とは前田光高の忌辰をさす

〔政隣記〕

四月五日巳刻金澤石浦新町より出火、家數九十七軒類燒、未之刻鎭に付、大槻内藏允ゟ三十人方手合人數・御使番兩人被指添、火事所ゟ被遣。

〔大野木克寛日記〕

未ノ後刻石浦新町炎上、折節風有之及大火。予金谷御文庫可相詰順番といへ共、晝番に而相詰候に付、同役登城之間待合候故、出馬及猶豫之内、左京罷出候故、相代て直に石川御門より御文庫ゟ馳向。前田監物は從私宅直に御文庫ゟ出馬、將監者予御城退出以後登城と云々。左京儀者、火事場へ罷越防候樣に土佐守依指圖、人數を率馳向と云々。將監者直に相詰候。申刻頃に火鎭るに付、申談、監物・予人數揚退散。但未御城に相詰申時刻に付、予者金谷より直に石川御門より登城、尤火事裝束之儘也。將監者予と相替退下、於御城常服着用。予も七半時退出、直に天徳院拜參。町屋ゟ立寄、袷・熨斗目布上下着用。御祥月者每茂如此候。訖而直に歸宿。

長太夫者困所勞、火事之時分不能登城。

四月五日。能登鳳至郡輪島町に火災あり。

〔政隣記〕

四月なり

去る五日能州輪島百九十軒餘燒失。

四月七日。金澤卯辰より火を失す。

余は津田政隣

〔政隣記〕

四月七日巳刻金澤卯辰蓮昌寺門前より出火、酉刻鎮。類燒數二千百十一軒、内町家千四・五百、寺社六十軒。余・前田土佐守・奥村内匠・玉井市正・本多頼母・前田大學等何茂出馬、火爲防被申候。各依奉書也。

〔大野木克寛日記〕

今日四つ時過、卯辰日蓮宗蓮昌寺坂下之町家より出火、折節風烈敷、卽時に蓮昌寺に火吹附、暫時に及大火、餘燼四方に覆、其邊之神社・佛閣・町家・百姓等之家悉類燒、殆大火に及。因之定火消番者不及言、人持中過半雖馳向、炎猶盛に成、觀音町・春日町・森本町・大衆免、此邊之町々燒失。既に淺野川之橋も危候に付、老中土佐守・内匠幷玉井市正・横山監物・前田與十郎・奥村數馬等、依仰段々出馬防之と云々。及薄暮鎮る。今日類燒家數三千計と云々。其内御直勤之侍屋敷者十軒に不可滿と云々。猶後日具に可記之也。

直勤は昵近

四月廿四日。百姓の藩又は諸士に奉公する者といへども、十村に對し鍬米を納入すべきを令す。

一、諸郡百姓二男・三男・兄弟等、御家中ゟ奉公に罷出候者は勿論、御家ゟ被召抱候而も、兼米之儀裁許之十村より取立申御格に候。然所三十人者頭伊藤斤左衛門等より申越候者、御家ゟ被召抱候者ハ其段申達し、鐵米取立不申候處も、御格之旨に而取立組も有之候。此儀何れを用可申哉、可申越旨申越候。鐵米之儀者重き御締方に付、先年も被仰出之趣有之候。御家中ゟは勿論、御家ゟ被召抱候者に而も、鐵米取立不申而者御締方ゆるミ候間、是以前々之通り惣而鐵米之儀、急度取立可申候。近年了簡違之十村共有之躰に付、重而申渡置候。伊藤斤左衛門等ゟ及返答候紙面之寫、爲心得相達置候事。

右之通ニ諸郡急度相守、向後相違無之樣相心得可申候。尤請紙面可指出候、以上。

丙辰四月廿四日

中村勘太夫
粟田源右衛門
横山三郎兵衛
寺西平右衛門
吉田宅右衛門
横山三郎左衛門

大塚彌五太夫
丹羽伊太夫
不破門左衛門

御扶持人十村中

同紙面之寫

百姓せがれ等御家ゟ奉公に罷出候者、鍬米之儀に付、去歳以來度々預御紙面委細致承知。惣而百姓之せがれ・兄弟に至迄、重き御縮方有之、奉公に罷出候者鍬米取立不申而者、御縮方ゆるみ中に付、鍬米取不申儀難成趣に候。十村之内近年了簡違に而、鍬米取不申者も有之様に相聞候に付、是以後取立樣申渡置候間、左樣御心得可被成候。右御報早速可申達處、右之趣に而詮議仕儀有之延引罷成候、以上。

辰四月廿四日

中村勘太夫
栗田源右衛門
横山三郎兵衛
寺西半右衛門
吉田宅右衛門

丹羽伊太夫
不破門左衞門
大塚彌五太夫

伊藤十左衞門樣
不破諸左衞門樣

四月。濫に松樹の下附を請ふものあるも之を許さゞるべきを告ぐ。

〔袖裏雜記〕

一、私共支配石川・河北兩御郡於松山、近年度々松材木拜領被仰付候處、往還筋より見渡候松山、幷兩川上一里計指除置、其外之所々において爲相渡候處、次第に松山薄く罷成候。尤三・四里山之内へ入候而は、大木も多御座候得共、道惡敷御用木等に伐渡候ても、引出申儀難仕候付、御用に相立不申候間、只今迄之通松木拜領被仰付儀に候者、近年之内風与大木拂底に罷成候而は、如何敷奉存候。御郡方道筋橋材木、幷川除材木・百姓家作材木等に被下候儀は、先年より御格式御座候へば、可被差止樣茂無御座与奉存候間、是以後寺社方幷火事人等は松木被下候儀、御詮議之筋も可有御座与奉存候。元祿三年金澤火事之節松木伐出候所々、小松多出來、段々相いび候へ共、所により能相いび候木も有之、又者土地不宜、又者風强當り候

所などは、事之外のび兼申候。大小平均候而者四・五間計のび申に而可有御座哉之旨、山廻共も申聞、私共之見分にも其通に御座候。元祿三年よりは四十七年成候へども右之通に御座候。御用にも相立候程之松には、六・七十年計も立不申候而は難成御座候。右にも申上候通、三・四里計山之内へ入候而は大木多所も御座候へども、道悪敷、縱御用にても難引出御座候、以上。

卯八月廿八日　　林源太左衛門　判

闕屋佐左衛門　同

前田大炊様

卯は享保二十年

右入御覽候上、左之通申渡有之。

石川・河北兩御郡於手寄之山、近年度々松材木拜領人多伐出候付、松山薄く成申候。依之各存寄之趣、去年八月紙面被指出候故、入御覽申候。御郡方道筋橋材木、井川除材木・百姓家作に被下候儀者、先年より御格之通可被下候間、可被相渡候。其外拜領願之儀者、松山茂り大木も出來候迄は、先相止させ申等に候間、被得其意、連々松山茂り大木も出來候樣に被相心得、山廻り等へも可被申聞候事。

丙辰四月　　林源太左衛門相招渡之。

近年御歩並以下類燒に逢候者、松材木拜領相願候へば被下候へども、度々拜領人多、松木伐

出候付由薄く成候由、御郡奉行申聞候。仍之松山茂り、大木も出來迄者先不被下營に候へ實
而爲心得申達候事。

丙辰四月　大橋又兵衛へ渡之、定番頭を初支配有之人々に傳達候樣申含。

四月。江戸に於いて若黨・小者の三ヶ年以上滯在すべからざるを定む

〔遠田日記〕

一、於江戸若黨并小者出替等仕、只今迄は勝手次第幾年も詰延候得共、向後は三ヶ年を限爲相詰可申事。

但主人永請仕、居成に召仕候共、右之趣に可相心得候。若無據儀にて永請仕候者、其頭へ可及斷候。

四　月　右安房守殿被仰聞

五月九日。前田綱紀の十三回忌法會を金澤寶圓寺及び江戸傳通院に行ふ。

〔政隣記〕

五月九日、松雲院樣御十三回忌に付、昨今於天德院御法事有之。御奉行前田土佐守兩日共御參詣。勝丸樣にも御參詣。其外都而前々之通。五月十五日天德院等御招請、御能被仰付。於江戸も九日於廣德寺御茶湯有之、是又前々之通。

五月十五日。粟ヶ崎附近にて獵師の唐網を用ひて漁撈することを許す。

〔政隣記〕

五月十五日左之通り。

御留場之内、粟ヶ崎不湖に而唐網打申儀、向後獵師共者御免被成候事。

但獵師之外者、右不湖に而網打申儀、只今迄之通御停止之事。

右月番安房守殿被仰聞之由、御横目より觸有之。

留場は藩侯の放鷹地にして捕鳥の禁止區域。不湖は湖邊の潴水地

五月十五日。天德院等の僧を城中に延きて能を觀覽せしめ、法會執行の勞を慰す。

〔前田貞醇藏文書〕

五月十五日天德院初御寺方御招請之刻御作法等。

一、御寺方六半時過登城之事。

一、天德院・寶圓寺・瑞龍寺登城候はゞ、御玄關迄寺社奉行・御奏者番・御横目罷出致誘引、御大廣間に着座之事。

一、國泰寺・如來寺・玉泉寺・勝興寺登城候者、寺社奉行罷出誘引、御大廣間に着座之事。

一、天德院初御寺方御大廣間に着座以後、年寄中監物・與十郎・數馬、幷御家老役罷出、挨拶可仕事。

一、右之外長老中等登城之刻は、天德院等登城何茂虎之間に相扣有之、其以後寺社奉行・御奏者番・御横目等致差圖、竹之間に相通可申事。

一、天德院・寶圓寺・瑞龍寺・國泰寺・如來寺・玉泉寺・勝興寺は、於御小書院御能前御目見に付、先御大廣間より芙蓉之間迄寺社奉行・御奏者番誘引。御小書院へ御出被遊、天德院被罷出御目見、御用番披露、御意有之候者、座上之年寄共御挨拶申上。其次寶圓寺・瑞龍寺一所に被罷出、御目見同趣。國泰寺・如來寺・玉泉寺引續被罷出、御目見同趣。其次勝興寺被罷出、御目見同趣之事。

一、天德院初御前より直に、竹之間与虎之間之あいだ御廊下通へ被相越、長老中一統御目見相濟候以後、竹之間へ被相越事。

一、竹之間列居長老分は、天德院等御目見以前より座席定置、御大廣間下段御着座、二之間御襖左右へ開之、一統御目見。是又御用番披露。御意有之者、座上之年寄共御挨拶申上。追付御襖たて御簾揚之、御能初候事。

附、御簾者早朝よりおろし置候事。

但、平僧者御目見無之候に付、右之節御勝手ゟ退候事。

一、御能見物之席は、天德院・寶圓寺・瑞龍寺一間、國泰寺・如來寺・玉泉寺一間、屛風にて圍ひ勝興寺、其次惣出家中列座之事。

但、平僧は御緣頰に並居見物事。

一、御能初脇狂言之内、天德院等・勝興寺は見物之席にて居成に御菓子・御茶出可申候。長老中は於御大廣間並居、御菓子・御茶出事。

但、平僧中は虎之間にて被下之、勝興寺伴僧・殿原は柳之間にて可被下事。

一、御中入は被仰出次第に奉心得候。

一、天德院初長老分休息所御臺子、竹之間与虎之間御勝手之方杉戸際に指置、平僧中御臺子同杉戸之外障子際に指置事。

一、平僧中休息所之儀者、寺社奉行・御横目申談極置可申事。

一、天德院・寶圓寺・瑞龍寺御料理之時分、御居間書院へ被通候刻、且又御料理相濟御表ゟ被出候時分、御家老役之内誘引可仕事。

但、此御席年寄中之内一兩人相詰可申事。

一、國泰寺・如來寺・玉泉寺御料理之時分、御奥書院へ寺社奉行・御奏者番可致誘引事。

但、此御席御料理之内、年寄中折々罷出挨拶仕、且又御使、御家老役之内修理可相勤事。

一、勝興寺御料理之時分、御小書院に寺社奉行・御奏者番之内可致誘引事。

但、右同斷。

一、御大廣間長老中御料理之内、年寄中折々罷出挨拶仕、且又急度御使等は無之罷出、緩々御料理被給候樣挨拶可仕事。

一、平僧中虎之間にて御中入之内、代々御料理被下之。勝興寺伴僧・殿原は柳之間に而御料理被下候事。

但、代り候間に實檢之間に指扣可有之候事。

一、御居間書院御饗應之内御出被遊、天德院を初寶圓寺・瑞龍寺に御引菜被遊候事。

一、御料理相濟、御茶菓子御膳等引替、手水なしに其儘御濃茶、天德院・寶圓寺・瑞龍寺・國泰寺・如來寺・勝興寺に一服充出可申事。

一、御大廣間御料理不濟内、御居間書院・御奥書院御料理相濟候者、芙蓉之間へ溜被休足、重而御能初候時分、夫々見物之席へ相越、其儘御能初候事。

但、勝興寺は御小書院より直に見物所へ可被相越事。

一、御能相濟候以後、御大廣間敷居之外に御着座、天德院初出家衆一統御目見に付、御用番

披露。御意有之候者、座上之年寄共御挨拶可申上事。

一、御寺方御目見之刻、長老分者敷居を隔並居平伏、平僧者御勝手ゟ退可申事。

一、右畢而天德院初年寄中等ゟ一禮有之退出に付、年寄中幷監物・與十郎・數馬・御家老役御大式臺迄罷出、長老分ゟ者於御大廣間及挨拶候事。

但、年寄中等御七回忌之節御大式臺階上迄罷出候。寺社奉行・御奏者番・御横目は階下迄罷出候事。

一、御能初り、天德院等之席々御能組杉原紙一枚調之、寺社奉行持參相達事。

但、國泰寺等之席、勝興寺へも御能組可相達事。

一、御大廣間は御簾掛り候事。

但、御小書院は御簾懸り不申、御料理之内は御障子たて置候事。

一、頭分以上幷御かよひ、其外御用懸之人々、布上下着用可仕事。

但、外御用にて登城之御役人等常服、御城之内御番人等御歩並以上は、一統布上下着用可仕事。

一、御醫師・針立・外科替々相詰可申事。

一、當日矢天井・實檢之間御番人相止可申事。

以　上

六月十三日。水原左仲太、大塚彌八郎と刺違へて闘死す。

〔政隣記〕

六月十三日水原清左衞門（御小将頭之所病身に付及御斷、當年二月十七日願之通役儀御免、當時無役頭列）養子左仲太儀、實父定番御馬廻御番頭山崎久兵衞於宅、本組與力大塚彌八郎と刺違、双方即死。趣意不知、衆道之儀と沙汰也。

六月十五日。和田釆女用銀の調達主付を命ぜらる。

〔淩新秘策〕

一、六月十五日大和守殿・土佐守殿、和田釆女に被仰渡候は、御才覺銀大塚彌五太夫・丹羽伊太夫被仰付、久々在京仕候へ共事調不申候。御手前主付、幾重にも仕、御家中用金相調候様に可仕旨被申渡。於御次自御前も被仰渡有之様に仕度旨、大槻内藏允を以御兩人より被仰上候處、則内藏允を以、右御用主付候様被仰渡候。追而釆女願に付、於御次誓詞相調申候事。七月六日御發駕之後、役所も見立候由にて、御算用場・御普請會所等見立に而、御普請會所之内に而一ヶ所請取申候。其後御領國中十村共召集御内用申渡度旨、御算用場奉行へ示談有之候所、勝手次第之旨御奉行挨拶に而、能・越之十村不殘召集於私宅、夜中十人・二十人充誓詞申付候。町人之内にも爲致誓詞御内用可申付旨に候處、町奉行中同心無之に付不罷成候。惣而

釆女此度之御用は、御内用共多有之、至而隱密に仕候事之旨に而、近き親類緣者へも共筋不申顯候。乍然右御家中用金才覺、大塚・丹羽等にては役儀輕候故不相調候間、釆女可相勤と被仰渡候外者、且而何之被仰出も無之候。内藏允を以被仰渡候も、同然之儀者能相知申事共に候。釆女此御用被仰付候而、常々心安出入仕候町人道願屋彥兵衞・乾屋左助又は家來次田伊兵衞と申もの等京都ゟ爲登候事。但八月中大塚・丹羽兩人は、十村共引連罷歸候事。

一、當年十一月中二條關白樣姬君御入内之筈に而、此御祝儀使、豐先同役之内に而は和田釆女に而候。幸之儀に候條、五・六十日も先達而釆女上京仕、御かね才覺も仕可然与和州殿・土州殿示談、釆女へも共内證申談、共趣九月頃江戸表ゟ被相伺候處、甚思召に不相叶、順番之通御使には罷越候共、金銀才覺之儀は一向不申出樣にと固被仰出候事。依而十一月四日發出仕候。御入内は十五日に相濟、十二月三日罷歸候。家來次田伊兵衞は京都に相殘置候事。年内には一向金銀才覺之儀不相調候事。

一、和田才覺之銀子、京都町人平野屋次郎右衞門材木屋の由。与申者、三千貫目御用に可相立旨請合申候。但於大坂笠間安右衞門手前より印紙千枚請取申度候。左候はゞ三千貫目之内千貫目を以米を買置、二千貫目者金澤ゟ指下し、御家中へ貸渡可申候。印紙千枚を、千貫目之買米を以返濟之たてりに可仕与申目論に候旨、可然趣に候條、此通に有之度ものと、印紙千枚之儀安

銀高に仕以下誤寫あるべし

九月は元文二年

右衛門方へ大和守殿等より尋越候處、安右衛門申越候者、印紙千枚之儀銀高に仕九百目之儀に御座候。現米之事に而も六枚に上之御損徳にも預り不申候。但此印紙を以、京都に而銀子才覺仕候事に候はゞ、元來於大坂御用銀才覺之爲に申談置候印紙に候處、夫を以京都に而御家中用金銀之爲に取遣仕候はゞ、於大坂御用才覺之時つかへに可罷成ものと存候。此つかへさへ無之事に相究候はゞ、此方には何之支も申事も無之旨及返答候。仍之此才覺ニ不相調候由也。

一、九月御歸城之後、采女御次へ罷出、段々金銀才覺之首尾等大槪を以達御聽候由。一々思召に不相叶、內藏允と合點不仕候由不首尾に付、加役御斷申上可然御樣子に相聞。仍之十月末、采女方よりかね才覺之加役御斷申候而、下役共も散申候。

一、去暮以來采女下へ屬し、水島右近京都に在留、金銀才覺仕候處、十一月に至り七百五十貫目相調候由言上仕候由。然共御用に無之旨被仰出候。其外金澤町人道願屋彥兵衞・宮腰町人吉左衛門等も、皆々此御用不相勤樣に被仰付候由。

六月十五日　組外組多羅尾八平次及びその弟定番御馬廻組多羅尾淸太夫共に流刑に處せらる。

〔淺新秘策〕

前月は享保十九年十一月の事なるが如し

一、前月中頃組外番頭細井藤太夫組多羅尾八平次（三百石）、亂心之体にて一家寄合押込置候。其子細は八平次常々不行狀にて、博奕等之徒へも交申候。今般弟淸太夫（定番御馬廻百石）を呼申聞候は、當地にては收納米拂にくゝ候間、越中藏所へ罷越、夫々賣拂候樣に可仕旨申付候。淸太夫申候は、一夜泊にても遠所へ罷越候事は不仕御格に候。頭申達候ても、可成事にて無之候。其上御知行は不殘拂申体に候へば、たとひ藏所へ參候ても、二重賣に候得ば不罷成事に候旨申候所、散々立腹仕候。老母承り叱候へば、淸太夫をも手打に可仕爲體に付、其趣を淸太夫儀高田兵左衞門へ申聞候。兵左衞門は定番御番頭にて、八平次爲にはをぢに候故、兵左衞門承屆、其分には難成、亂心体と申立押込候由。然處是より以前、八平次同町に御馬廻戸田靱負組鶴見和太夫与申者有之。此者爲講山へ罷越候。日未明に出宅仕候所、半途より急用有之立歸申候。居間に掛置候刀・脇指四腰有之所、不殘見え不申候。彼是承合候に、六時迄は慥に有之候。少之内見不申候。賊入候而も間も無之事と申候。家來・小者之内に一人、昨夜下宿仕候者有之候。此者疑敷候旨にて、盜賊改役茨木覺左衞門へ迄指出候。遂吟味候處、疑敷筋は無之候。乍然此者之外には怪敷存者無之候に付、先牢之揚屋へ入置候。然處八平次方より、刀・脇指之切羽・鐔の類打潰し、それとは且而知れ不申樣に仕候品々賣出し候が、買取候者共有之、覺左衞門宅へ迄致持參候。和太夫家來召寄爲見候へ共、慥にそれとは難申候。怪敷仕形に付、

翌年は享保二十年

頭靭負迄に和太夫方より其趣申達候事。十一月の事。

一、八平次弟清太夫と申者、知行百石定番御馬廻組にて、杉江杢左衛門組にて候。相頭は高田兵左衛門にて、右兄弟爲には母方をぢにて候。清太夫手前不屆之儀御座候間、吟味被仰付候樣に一家中願候。其内は縮所へ入置申候八平次与同居に候。清太夫儀八平次へ自殺を勸、申候は、迚も罪科難遁相見え候へば自殺可然旨にて、刀を拔身に仕縮所へ入置候。八平次欺而其趣を受候而、爲後生經を書申度候間、料紙硯筆を貸候樣に申候て經を寫申候。其間に紙面を調置、兵左衛門見廻に罷越候節密に渡候。其紙面之趣は、清太夫儀八平次妻と申合ヶ樣に仕成、八平次に自殺をさすゝめ、惡事を悉く兄に負せ申謀に御座候。其上八平次妻をも犯し、不法至極之事ども一々記し置申候。妻幷妾をも縮所へ入置候由。

右之通吟味を願候に付、極月清太夫公事場にて吟味之上を以、多賀守兵衛に御預けに成申候。翌年江戸より被仰下候趣にて、重而公事場へ召出し、直に禁牢罷成候。八平次に對し候事にても無之、近年野山へ罷越、粟之類を過分に盜取、俵に入置候。此一事難陳候而申顯れ候。八平次爲後生申立、經を寫し度与申儀は承違に候。法華八卷寺方より借出し、其裏に悉く清太夫惡事を巧み申始終、幷妻分に仕置候妾有之候、是に清太夫密通仕候て、申合候而ヶ樣に仕候趣等明白に書付申候。扨妻分与申者は多田故善太夫妹にて、先年逐電仕候堀田勘兵衛妻

にて、八平次とはいとこ違ほどの筋目有之候。善太夫は江守故覺右衛門爲に切殺され、勘兵衛は逐電仕流浪仕候故、こゝかしこ奉公も仕罷在、近年八平次妾に成居申候五十歳計之女にて候由。八平次に男子有之、其生母有之。是も妾に候。此ものは清太夫へ隨ひ不申候。右法華之裏に調置候ものは、兵左衛門等へ爲見可申爲に仕置事にては無之候。頭共之内へ爲見申度調置候へ共、縮所之内に有之故、可相達樣も無之、透を考居申内、八平次も二月之末於公事場御吟味有之、直に前田多宮へ御預に罷成候。於公事場右經之儀申出候に付、取擧見屆申候。第一和太夫刀・脇指の出處を吟味仕候所に、是は越中屋平四郎与申者より買取申候由にて、則請取手形も有之旨申候。其手形見候へば、八平次自筆にて候。平四郎無筆にて、書而くれ候樣にと申候故、調候得ば、印取出し押候旨申候。依之越中屋平四郎与申者御國中相尋候へば、二・三人も罷出候へ共、皆手跡相調申候。無筆之越中屋平四郎与申ものは無之候。夫故此請取も證據に難立候。追而八平次母幷兩人之妾迄も召出し遂吟味候。母は則高田兵左衛門姉妹之旨。高田勘左衛門・高田吉郎左衛門・伊藤平太夫等此緣者にて候。

元文元年辰六月十五日八平次能州島へ流刑、清太夫儀越中五ケ山ゐ流刑被仰付候。今年五月九日松雲院樣御十三回忌に付、一等輕く被仰渡候。八平次は多宮方へ只今迄御預け、清太夫は牢に罷在候。十六日定番御番頭高田兵左衛門へ被仰出候趣は、八平次兄弟一卷に付、最初

亂心之由にて一門共締申付候節、兵右衛門儀御役儀をも相勤候者に候所、未熟成示談疎忽之至思召候。依之御役儀を指除候。急度遠慮可仕旨被仰出候。

〔遠田日記〕

一、六月十六日、多羅尾靖太夫儀、於御郡方粟穗盗取候段不屆者に付、死刑に可被仰付者に候得共、此節之儀故一統御宥免、五ヶ山之内へ流刑被仰付候。且又せがれ三太郎儀、一類共へ被預置、十五歳に成候はゞ、配所江可被遣旨被仰出候由、今日於公事場奉行中靖太夫被申渡候に付、杉江杢左衛門より案内紙面あり。此時杉江杢左衛門は定番御番頭也。左候はゞ、靖太夫定番御馬廻か。

前文には六月十五日とあり

六月十八日。三田村監物・堀彌三左衛門先に相爭ひたるを以て知行を召放さる。

〔大野木克寛日記〕

六月十八日今日三田村監物儀、村井主膳長堅之宅江召寄、安房守列座。御横目樋口次右衛門罷出。監物儀先年堀彌三左衛門と出入之首尾不埒に付引籠罷有候。依之御知行四千石被召放、卅人扶持被下置候。急度逼塞可罷有旨被仰出。其趣主膳演述之、監物退出と云々。同日堀彌三左衛門儀、組頭伊藤彥兵衛宅江召寄、相頭幷御横目列座。彌三左衛門儀先年三田村監物と

此首尾は享保十四年十二月廿七日の條に在り

出入之首尾に付引籠罷有候。依之御知行三百五十石被召放、十五人扶持被下置候。急度逼塞可罷有旨被仰出之趣、彥兵衛申渡之。御請之躰尤之樣子に候由也。右兩人に被仰渡之趣、色々取沙汰有之候へ共不知、追而可記乎。

十九日、今日三田村監物せがれ新次郎被爲召、新知三千石內千石與力知被下置、人持に御加被遊旨、月番土佐守申渡之。

同日、堀彌三左衛門せがれ藤馬被爲召、新知二百石被下置、御馬廻組に御加被遊旨、土佐守申渡之。

六月十九日。德川吉宗奉書を以て前田吉德の暑中の安を問ふ。

〔德川實紀〕

六月十九日。寬永・增上兩寺に御使して檜重つかはされ、暑候を問はせらる。松平加賀守吉德には奉書もて同じ御尋あり。

七月四日。大槻朝元、前田修理の女と婚することを許さる。

此の文本年三月十一日の條に續く

〔浚新秘策〕

如此に候處、無間源右衛門病死仕候。源右衛門妻は前田修理殿娘に而、願上り申迄に而未被仰出候內、源右衛門六月二十日頃病死仕候。但右源右衛門家忠中に願之通被仰出、妻は二十

日遠慮之格に候。然處其娘を内藏允再縁申合度旨修理殿願に而、御發駕前七月四日急に被仰出、縁談申合候。離別之妻之兄之妻に候處、夫を以再縁仕候も、又其家へ我娘を遣候も、其に言語道斷之事に候。修理殿は七十有餘に候。委く子息大學取扱にて相調候よし。此女元來小塚新左衛門縁組申合置候處、新左衛門病死に付淺井に申讀候。然者最初者小塚新左衛門、二度目は淺井源右衛門、三度目は大槻内藏允也。

七月六日。前田吉德金澤を發し、十八日江戸に着す。

〔政隣記〕

七月六日金澤御發駕、御供奥村内匠・玉井市正。十八日江戸御着、蔦之間迄龜次郎殿・喜代姫樣にも御出迎。

十九日上使御老中本多中務大輔殿御出。八月十五日御登城御參勤御禮、内匠・市正御目見等都而如御例。

但八月廿八日月並御登城被遊候處、今度御參勤御禮之時分公方樣出御不被遊、大納言樣に而相濟申候。今日月並之御登城初而之處に、公方樣出御、定式之通於御黒書院御禮被仰上候刻、御懇之被爲蒙上意候。右享保十五年に茂此通に候處、別に御禮無之。猶更御用番松平伊豆守殿ゟ聞番を以御尋之處、先例之通不及御勤等旨申來。

七月。本郷邸に於ける前田宗辰の居室造營竣成す。

〔政隣記〕

五月上旬より、江戸御上邸之内勝丸樣御居宅御作事初り、七月上旬出來。内作事奉行兩人不時に出府、都合四人。御用人等折節見廻、御步橫目等罷出。

七月。鳳至郡輪島の船頭傳九郎等朝鮮に漂着す。

〔可觀小說〕

一、今茲秋七月能州輪嶋の船一艘大風に漂流、朝鮮國に令着岸候。依之對州人在大坂留守居役中川四郎五郎來狀に、御領分能州鳳至郡輪嶋町廿三端帆船頭傳九郎与申者、水主ともに十四人乘組、米を積爲商賣大坂へ志し、七月九日輪嶋出帆、數日乘流、同十七日長州津の嶋を見懸候處、南風に而風波强、洋中に漂居、同十八日南風彌烈、其上霧深く罷成候に付、桂を据つかれ可申と切掛候處、霞之間山見懸候故、乘懸候へば、沖手に飛瀨有之及破船候に付、傳間に取乘灘に漕寄可申与仕候處、傳間を打返し、十四人之者共散々に罷成、其節水夫之内勘四郎・七右衛門と申もの溺死いたし、殘十二人之者共、傳間或は船板に取付、朝鮮國慶尙道之内長鬐と申所に漂着仕別條無之旨、彼國に指置候對馬守家來より對州に案内申越に付、對州には到着次第使者相附、御當地町御奉行所に送屆候筈に御座候。依之於江戸表御老中樣へ

据つかれ本のまゝ

傳間は傳馬舟

御當地は大坂

承届御案内申上候に付、於此表町御奉行所ゟ御届可申上与國元家老共より申越候に付、今日町御奉行所御月番樣へ罷出、右之趣御案内申上候。此段爲御知申上候、以上。

九月十七日

八月十五日。前田吉德登營して參覲の禮を行ふ。

〔德川實紀〕

八月十五日月次例の如し。少しく御惱有なれば、大納言殿のみ拜賀をうけ給ふ。松平加賀守吉德始て參覲九人。

八月廿三日。高山善左衛門の妻怪事に會す。

〔政隣記〕

一、今年御大小將御番頭高山善左衛門七月六日御參勤御供に而發、・在江戸之内、八月廿三日同人妻人持組小幡大炊家來給人何某娘廿五歳也、懷孕、既に十一ヶ月に滿て產を催、婆醫師魚住道徹を招く。醫婆未至内夕八時過、右孕婦忽然と失たり。家内驚て尋れ共見えず。其内日も暮、灯を以て再三尋るに、土藏之二階に苦しむ聲聞えしゆゑ、不取敢上り見るに什器之間に孕婦伏してあり。然れ共正氣無之に付、蘇香圓を用て心氣復し、右婦曰、安產男子を得しが、いつく共なく其子を取て行くと覺えて其外の事は覺なしといふ。先常之間に連來り、醫・婆に見するに、昨日迄之胎氣とは大に違ひ

常婦の如しと云。然れ共出產の驗しはいさゝかも無之、衣類に穢血の附たるも無之。只胎氣の散たる迄也。扨又怪しきは、此日風雨甚しかりしに、孕婦土藏迄行しに衣裳少しも不濡、手足にも泥土つく事なし。右等之趣江戶善左衞門方へ不得止事を申遣候事。

八月廿四日。大槻朝元の兄長左衞門等班列を進めらる。

〔政隣記〕

八月廿四日左之通被仰付。但於江戶也。

新知百石宛被下之　御鷹方御步橫目より　大槻長左衞門

御步小頭並　御小人頭より　園田理左衞門

但、理左衞門病氣に付御國へ之御暇奉願、昨日發足之筈に候處、今日右之通被仰出、尤彌昨日歸候筈也。

九月朔日。金澤堤町に金銀引替座を開く。

〔御年譜〕

一、九月朔日より堤町中屋長左衞門方に而、金銀文丁銀与引替座初る。

九月二十日。前田吉德夫人十七回忌法會を江戶傳通院に行ふ。

〔政隣記〕

九月廿日光現院様御十七回忌於傳通院昨今百部御法事。御代香寺社御奉行牧野越中守殿、御法事御奉行奥村内匠、諸事御用御小將頭富永數馬、御用人湯原甚右衛門。此外諸事御十三回忌等同斷。

〔徳川實紀〕

九月二十日。けふ光現院の御方十七年周忌の法會、傳通院にて行はるゝによりて、寺社奉行牧野越中守貞通に代參命ぜられて、香銀二十錠すゝめ給ふ。松平加賀守吉徳出仕して謝し奉る。

九月廿一日。前田宗辰金澤を發して江戸に赴く。

〔政隣記〕

九月廿一日快天、勝丸様、巳ノ下刻金澤御發駕、今夜今石動御泊。爲御祝詞頭以上月番前田對馬守殿御宅に參出。御供人前記二月八日之人々、并御道中奉行御行列奉行相兼御小將頭前田源兵衛、御先手兼御部舍御用者村田半助、御弓支配御先手駒井與兵衛、御筒支配預玄院様附物頭並小幡平三、御長柄奉行御使番水野次郎太夫、御旅館番和田御前様附物頭並小川忠四郎、御大小將番頭篠原六郎左衛門、同御横目坂野藏人、此外御身附之人々也。平士以下略之。多分致交代之人々也。御日圖之通御旅行。

一、御袋之方同日御一宿御跡より御越、御着御同日。御居宅續之御廣式に御着、御供之御留守居物頭多胡要人、御廣式御用達高崎左兵衞、御醫師森玄育等也。但從御袋之方御願に而、四月四日御供被仰出候由。

〔大應公年表〕

一、元文元年九月二十一日金澤御出府也。御行列等略之。大概萬石之御行粧也。御挾箱對無紋。但騎馬有。京都本鄕邸內御居宅に在す。

九月廿三日。使を京師に遣はして前田綱紀の女榮君の從三位に敍せられたるを祝せしむ。

〔政隣記〕

八月廿七日二條左府樣被補關白職に、榮君樣政所從三位口宣、以勅使被進候由申來。右御祝儀之御使、組外御番頭庄田主稅、九月廿三日金澤發足、十月十一日歸着。

九月廿五日。前田吉德の女喜代姬、安藝侯の嗣子淺野宗恒と婚を定む。

〔政隣記〕

九月廿五日喜代姬樣御緣組御願書、當十六日細井佐次右衞門殿御旗本行也。を以被上之候處、昨日依

御本書今日御登城之處、安藝守樣御嫡伊勢守樣に御縁組御願之通被仰出、御禮御老中・若年寄衆に御勤。於金澤者十月十五日出仕之面々に御祝詞、土佐守殿御宅に頭以上一統參出。

一、右に付翌廿六日從安藝守樣、御使者大番頭並松宮庄助・副使御留守居佐藤彥兵衛被遣之。於御勝手座敷御口上御直に御聞、御意有之被爲入。誘引御馬廻頭由比五郎左衛門。御使者に御料理被下、重而被召出御直答。

一、安藝守樣に人持品川主殿被遣、聞番井上三太夫指添罷越。

一、右同日頭以上に御弘有之。

九月廿八日。新鑄の銀貨を通用し賃銀を三割増とすべきを命ず。

〔國事雜鈔〕

當町諸職人手間料・日用賃銀等三割相增候樣、先達而町奉行に被仰渡、諸色直段も右に准じ遂詮議、今吹銀を以直段相立申筈に御座候。就夫御郡方手間料・日用賃等も三割相增、諸色直段之儀も當町に准じ候樣、今吹銀を以直段相立候樣に被申渡与奉存候に付、此段申上候、以上。

九月廿八日　奥村彈正

松原善右衛門

横山兵庫

前田對馬守様

別紙之通御用番對馬守殿へ相達候間、寫指遣候條、夫々可被申渡候、以上。

辰十月六日　　　御算用場

澤田伊佐右衛門殿

十月六日。強風雨の爲能登に損害多く、海嘯越中境關所を襲ふ。

〔政隣記〕

元文元年十月六日強風雨、能州邊別而損家多。伏木・放生津津波打、伏木五十軒海中に引入、人十七人行衛不知、放生津家三十軒崩れ、獵綱等過分に損失。

〔國事雜鈔〕

當境昨六日戊之刻より大風に御座候處、段々風茂強御座候内、俄高波罷成、關御關所へ浪着申に付私罷出、并當番之與力足輕御道具等無相違指除申候。濱御關所御番所波に而流申候。御縮方之儀に御座候間、早速御作事所に被仰遣可被下候。浪引次第假御番所申付、御番人爲相守可申候。勿論往還筋境町之内金剛川橋落申候。尤損じ申所々、并足輕・小者・町家・百姓等つぶれ損家、別紙之通指上申候。今七日申之刻より少々波もしづまり申候に付、以飛脚御案内申上候、已上。

十月七日　　　　　　　　　澤田伊佐右衛門

御年寄衆宛所

十月七日。前田宗辰江戸に着す。

〔政隣記〕

十月七日快晴、勝丸様昨夜蕨驛御泊に而午刻御着府。本郷より南御門御馬に而中之口より被為入、年寄中等并頭以上御用に不差合面々、何も中之口腰懸前に罷出蹲踞。青木新兵衛御先立仕、御溜に被為入、遠田勘右衛門を召、御前に之御口上被仰上、追付於御居間書院御對顔、御熨斗、亀次郎殿にも御出御對顔。其後同御間に而伊勢守様等御對顔。夫より御出入衆に御逢。其後御廣式に被為入、其後御居宅被為入。但蕨御泊迄、御近習頭坂井甚右衛門を以蒔繪御吞一箇被進之候。且今七日御旅裝束之儘御對顔、伊勢守様等に者布御上下に被召替候而御對顔也。

一、中將様御着日御同事与被仰出、一統布上下着用。

十月十一日。前田吉德の側室鈴木氏の兄弟を祿す。

〔遠田日記〕

十月十一日

一、喜代姫様御袋兄弟、浪人に而町方に罷在候鈴木左兵衞与申候。喜代姫様御緣組も相濟候故、今日二百石に被召出、組外に被仰付。坪光甚右衞門御小屋迄罷越、誘引罷出、內匠殿被仰渡候由。

一、總姫様御袋之方兄弟之鏑木大進、芝神明神職也。此者御合力扶持深川米五十人扶持被下之。御廣式へ召呼候而坪光等申渡す。

十一月朔日。前田宗辰・重熈初めて寶生大夫に就きて仕舞を習ふ。

〔政隣記〕

十一月朔日勝丸様・龜次郎殿ゟ寶生大夫初而御目見被仰付。御兩方様御仕舞被遊爲御見、御稽古始。

十一月十五日。前田綱紀の孫永姫櫻町天皇の女御として入内す。

〔政隣記〕

十一月十五日永姫君（二條關白吉忠公第二之御姫様、御母公榮君様也。）御入内今日被爲濟。依之爲御祝詞、同廿一日惣御出仕、御服紗御小袖・御上下に而御登城。右爲御祝儀京ゟ之御使、御馬廻頭和田釆女十一月四日金澤發出。

十二月十一日、二條宗熙、前田吉徳の養女繁姫に結納を贈る。

〔政隣記〕

十二月十一日、從二條左大將樣繁姫樣ゟ御結納被進候に付、今日本郷御邸ゟ晝頃北小路治部大輔大紋着用參上。御勝手座敷上之御間に而御口上御直に被聞召。其以後同二之間に而御料理被下、西御書院組頭溝口孫左衛門殿御相伴、御盃も被下。御贐物末三原代金七枚五両前田帶刀殿御持出被下之。畢而御直答有之、退出。備後守樣とも御料理之上御盃事被遊、實生大夫等小謠被仰付。御退出後長圍爐裏之御間に而、年寄中初頭分以上ゟ御吸物・御酒等被下之。御酒之内御使御近習頭、給仕御歩也。御近習頭者御居間書院四之間に而被下之、給仕坊主也。

一、治部大輔披候以後、旅宿ゟ御使御家老玉井市正を以、白銀二十枚・干鯛一箱、從繁姫樣縮緬五卷・干鯛一箱被下之。

一、今日之御祝儀頭分以上御帳に付、御近習頭者年寄中席ゟ出、御祝儀申上。

一、御結納物等左之通。

御小袖三重紅梅・あや・しゆちん・白ねり。

御附帶二筋紅白・干鯛一折・昆布一折。

鰑一折・御樽三荷・御目録。

中將樣ゟ
御太刀一腰・御馬一疋・干鯛一箱。
晒布一箱・御樽二荷・御目錄二通。
勝丸樣ゟ
御太刀馬代・干鯛一箱・御目錄。
預玄院樣ゟ　一種五百疋・御目錄。
同日繁姫樣御事、御出入衆等御尋候者、向後勝丸樣御妹子樣与可申達旨被仰出。

十二月廿一日。幕吏加賀藩の八丈島にある宇喜多氏に遣はしたる物品の難船したることを報ず。

〔前田貞直筆記〕

以手紙啓上仕候。甚寒御座候得共、愈御堅勝可罷成御勤仕、珍重奉存候。然者當夏浮田一類中ゟ之御見屆物被遣候に、則八丈島玉置四郎右衛門預り御用船に積遣候所、右御船當十月六日於新島に破船之旨注進申越候間、爲見分庚會幸助新島へ渡、委細吟味仕候所、積荷不殘潮入に罷成候。葛籠一荷之儀は掛揚候之間、汐出し干立等申付、此度幸助歸帆之砌積請來り申候。然所金子幷御目六箇之儀別段に封遣候間、彼等方にて錠前付小箱に入置候處、御船打破れ水

船に罷成候節、即時に流失仕候旨申に付、段々吟味仕候所、流失に紛無之相聞ゑ申候。依之右之段御勘定所ゑも御届申上候。右葛籠物御渡可申候。次に金子幷御目録箱流失之段吟味之趣等、得御意申度候間、今明日中に喜六郎方迄御一人可被遣候、右之段捕者共より得貴意候様、喜六郎申付如此御座候、以上。

十二月廿一日

齋藤喜六郎手代
樋口儀八郎
度會幸助
大條平内

松平加賀守様御内　古屋傳右衛門様

覺

一、葛籠二つ
内之品々左之通

一、染絹表裏十三疋
一、染帷子二十一端
一、木綿七十四端
一、上帯十七筋
一、三尺手拭二十一筋
一、染たぐり二十一筋

一、中折紙三十束　　　一、小刀・剃刀・鋏十本
一、扇子十本　　　　　一、牛黄圓三香合
一、西大寺三包　　　　一、腹留藥三包
一、虫藥三包　　　　　一、すが糸六百目
一、綿二十把　　　　　一、筆十對
一、墨三挺　　　　　　一、苧六百目
一、茶六斤

右者八丈島浮田一類中ゟ之見届物、先達而御用船積候所、御舟當十月六日於新島破船に付潮入に罷成候所、懸揚候由にて、右葛籠物品々書面之通御渡、受取申候、以上。

辰十二月廿二日　　　　松平加賀守内　大柳權兵衛

齋藤喜六郎樣御手代　度會幸助殿

是歲。村肝煎に命じ半紙帳に納租の高を記錄せしむ。

〔河合錄〕

一、歩入与申は、御藏入幷町藏給人米共、都而一村惣納所之米高を、何月何日迄に何歩々々与數を極而納るに付、是を歩入与云。

一、歩入御定左之通り

八　月	十五日迄	二厘五毛	九　月	十五日迄	三厘五毛
	晦　日迄	二厘五毛		晦　日迄	三厘五毛
十　月	十五日迄	二　歩	十一月	十五日迄	一歩五厘
	晦　日迄	二　歩		晦　日迄	一歩五厘
十二月	廿　日	一歩八厘			
	〆皆濟				

一、半紙帳とは、一村宛村肝煎より其組裁許へ、一ヶ月切納米高精質之所を、半枚之紙に而爲書出、一組分一册に仕、裁許より改作所へ指出候。是を半紙帳与云也。

一、右半紙帳出す儀、元文元年より始り、一ヶ月兩度十五日晦日宛取立指出儀に成來候へ共、事多く、都而幅當勝になり名のみに成候由。寛政六年より一ヶ月一度宛可出旨申渡有之、半紙帳出候得者相しらべ、格別歩落之村方は可及穿鑿事。御用繁之折抔他郡御扶持人にしらべさせ候儀も有之。

一、年柄により米出來後れ申年、八月十五日歩入不得致儀有之内、晦日之歩入ゟ立込納度与申儀、其郡御扶持人より以小紙願出承届る儀有之。

元　文　二　年

正月朔日。前田吉德柳營に登りて正を賀す。

〔重熙公御年譜〕

一、元日中將樣御登城、御歸館被遊、勝丸樣於江戸初而御禮被仰上、次龜次郎殿御禮被仰上。（御太刀披露 玉井市正）

正月四日。前田吉德、生母預玄院の古稀を祝す。

〔政隣記〕

正月四日預玄院樣今年御七十歲に付、御賀爲御祝儀、今日縮緬十卷・綿三十把・鹽鴨一箱・干鯛一箱・御樽一荷、御近習定番頭遠田勘右衛門御使に而被進之。

正月十三日。老臣奧村數馬その近習の爲に殺さる。

〔浚新秘策〕

元文二年丁巳正月十三日夜半に至り、奧村數馬殿宅に而喧嘩有之旨に而、拙宅門前甚騷敷候。追而喧嘩に而は無之、數馬殿近習者を被致手討候旨申候。又暫有之、手討之後自殺被仕候とも申候。十四日未明頃、横山大和守殿（實の續伯父也。）御越候。其後前田對馬守殿も御越候。（母方に而外戚也。）其以後之披露には吐血に而頓死之旨、一家中其外十四日朝見舞候衆中にも之披露之由。前田土佐守殿は晝前、本多安房殿も其次に舊宅へ御越候。十五日登城之節誰彼承合候處、實に家來共之內弑逆に而死者に無紛樣子承知仕候事。數馬殿、舊臘廿八日江戸より、御使者御小將中村才記を以、御家督之儀被仰渡候。今年十九歲也。內記殿去冬十月四日卒去、當十四日に而百

（頭注）舊宅本のまゝ

本文は青地禮幹の本多安房守に上れる意見書なり

日に候事。

一、十七日房州公に書狀を以申進候趣如左。

別　啓

此度與數馬殿、縊死之儀に付雜說區々申候內、私承請候趣は、十三日夜中近習相勤候笹田新右衞門と申者、（家老笹田孫右衞門養子也。實は是も家老三浦彥右衞門末子。）數馬殿氣に違申品有之、散々叱り被申、手討にも可仕ものに候得共、此時節柄故不及其儀候旨被申候而退被申候。新右衞門重而罷出、遣作もなく數馬殿を切殺申候。家老齋藤次郎左衞門せがれ半左衞門有合、新右衞門は即座に切殺、其身も手負申候。此趣に候處、横山大和守殿幷前田對馬守殿內談相究、吐血に而卒死之趣に、十四日朝一家中始夫々披露有之候。江戸へは尤早飛脚を以言上有之由に御座候。乍恐私存候は、君父を弑逆仕候は臣子の極罪、大義の所有少も不可誣事に候所、吐血に而頓死と流布仕候而は、甚失其當候。定而大和守殿より、其實は明白に言上有之、江戸表より御裁判被成下候迄は、先吐血に而頓死仕候と披露仕置候旨、被仰上候ものに而可有之と推察仕候。若又實を以言上無之、江戸表にも頓死と言上有之儀に候者、誣君欺天之大咎、弑逆之者に荷擔被成ものと可申候。左樣に候而は、御國之諸士心服仕間敷候。以來莫大の違亂にも及可申与奉存候。惣而十年以來、自殺に而相果候ものを吐血と申掠め、檢使の御定を不用、爲其頭者も追而不及吟味、

中黒哲無は六左衛門の隱居名

目を閉罷在候旨粗風説に御座候。亂心自殺に而さへ御大法ら御座候。増而爲家臣所弑候而吐血と申儀、一向有之間敷儀に奉存候。且與村之家中に而も、主人を殺し候者之父兄及其子等も、皆歴々として其家に奉公仕罷在候事、何とも難成事と奉存候。乾度新右衛門弑逆之罪を御正し、其養父孫右衛門・實父三浦藤右衛門及子弟之輩迄も、夫々御刑法に被仰付、扨內記殿家督之筋は別儀を以御沙汰有之候はゞ、諸事明白に相聞え、御政道も立可申儀与奉存候。御國闢基高德公以來、百五・六十年及候得共、七手等之家に終に不承及事御座候。乍恐世間に無之儀に而も無御座候。近々德川の御家に而、家康公御祖父清康公は、已に阿部彌七郎が爲めに被害御變死に候得共、終に隱密に被成御頓死之沙汰は不及承候。

一、君臣父子夫婦之三綱は、治國の大事不及申上事に御座候。此筋乾度立候得者、其餘の枝葉は少々の出入有之候而も、さのみ不足愁に候。然に近年中黒哲無死後間も無之、三十餘年御奉公も爲扣爲引籠罷候實子前田傳十郎を世間に爲致徘徊、御目見迄も被仰付候。是に而父子之倫は失申候。大槻內藏允妻は、淺井源右衛門姉に御座候處、離別仕候。源右衛門妻は前田修理殿息女に御座候。未及嫁娶內源右衛門相果候所に、人の不幸を幸被成、內藏允再緣、修理殿より御願に而被仰付候。是に而夫婦之倫は失申候。況や修理殿御家柄は、於御國一・二と稱し申程重き御同姓に而、至て卑賤之大槻と婚姻と申儀、是又夫婦之倫に而無御座候。兎角

十四日とあるは十三日なるべし

に言語道斷之事共に御座候。此上に此度數馬殿之弑逆を御正し不被遊、吐血頓死之沙汰に而相止候はゞ、君臣之倫も失可申候。三綱之重きも如此汚れて、何を以御國政は立可申哉与乍憚憤嘆仕候。

一、大和守殿・對馬守殿御内談如何樣に御座候共、尊前樣御一人乾度思召も被仰上候はゞ、上にも誠に柱石社稷之臣と可被思召候。世間に而少有心もの共は、打寄候而兼而御噂申上候にも、一國一人之樣に奉稱、賴母數事に奉存候。夫故にても候哉童謠に迄も、扨々實なる立奉と歌唱仕と承及、常に大慶仕候。此實なると申儀萬端に相涉申事、尤此度之大儀には猶更誠實に無御座候にては、天人の感道も有之間敷奉存候。餘り不與成風說共御座候故、私共及候趣共、料簡之筋、乍憚申上置候。定而相違之事共も可有御座候。宜御採擇可被遊候、以上。

正月十七日　　青地藤太夫　判

安房守樣　臺下

〔諸士系譜〕

奥村數馬保命、享保十四年新知二千五百石、元文元十二廿八繼家督一萬七千四百五十石、同二正十四死、二十歲、家來三浦新右衞門殺害。

兵部端則、數馬保命弟・始丹三郎、元文二閏十一廿七亡父内記温良知行之内一萬石相續、數馬

名跡有思召不被及御沙汰旨有命、寛保三死。

二月十一日。德川吉宗、前田吉德に鶴を贈る。

〔政隣記〕

二月十一日御鷹之鶴、上使御使番米倉六郎右衛門殿を以御拜領。三月朔日御披客有之。

二月廿五日。能登に於ける鼠害に關して幕府に上申す。

〔政隣記〕

二月廿五日能州御預地・御領所共、鼠多出候に付、公儀え御屆有之。牝鼠はうぐろもちに似たり。牡鼠は常之形に而虎生也。子は茶色。右鼠に喰れ候躰に而、牛馬も十疋許宛斃候由也。

〔可觀小說〕

一、去年丙辰秋頃能州海邊に鼠甚多相見、人々怪しみ候。海中より涌出候樣にも申、或はうるめいわしの類の所化かとも申候。冬中地中に隱れ、春に至り山野に遍滿し候故、土方領一萬石分、只今は御預け地凡村數六十餘有之處、三十ヶ村に及び、此方御領分之內は三百九十ヶ村に及び、麥根等を嚙盡し、山に至りては木根をも嚙候。土方領に而辛皮村の牛三頭嚙殺候。牛の脊骨を喰候。二月に至ては、此方御領內奧郡に而馬十一疋喰殺候。田物之儀者不及申候。中居村之三右衛門注進、十一日に到來、卽日郡奉行不破仲太夫・開作奉行（栗田源右衛門 芝山三郎左衛門）

（丙辰は元文元年）

（辛皮村は唐川村にて此時幕府領なり）

両人并御預地奉行河合七郎左衛門可遣旨、年寄衆御申渡候。十八日發出。

〔可観小説〕

能州の鼠も非常鼠。尾短く形小くして體弱し。地中に伏行して高きに登ること不能は、是鼴鼠の類ならん。大小形色大抵有四品、大なるは常鼠より稍大にして虎毛なり。此鼠は甚害なし。至て小さき鼠、其嘴鳥嘴の如し。此鼠其害をなすこと至て甚し。田のうねに產育するを見れば、一產に二十子あり。猫をして捕しむれば放して不喰。

〔上田源助舊記〕

一、元文元年・同二年能州筋鼠多徘徊、作物并牛馬迄も喰痛候に付、爲見分御郡奉行不破忠右衛門殿等三人、能州廻村有之候。右祈禱能州十村共より伊勢大神宮へ代參爲指登、能州所々於宮々に祈禱、其外寺庵においても祈禱仕、淨土眞宗寺庵には大衣に而阿彌陀經讀誦有之。元文二年三月八日百姓末々迄一統一日精進仕候所、鼠絶申に付、爲祈禱料改作所より定打銀之內を以、銀子十貫百四十五匁能州四郡へ被仰付候事。

〔加藤氏日記〕

覺

一、一貫七百二十目　於石動山・一宮鼠退治御祈禱料

奥・口は能登の奥郡と口郡なり

二百二十三匁	荻谷組	二百四十五匁	杉野屋組
百八十目	堀松組	百八十三匁	相神跡組
百四十三匁	芹川組	百三十四匁	武部組
百五十二匁	鰀目組	百十四匁	高田組
九十三匁	笠師組	百二十五匁	中嶋組
百十八匁	能登部組		

〆

右鼠退治御祈禱料両所に指遣申儀、延引仕儀沙汰之限之旨、忠太夫様奥・口に被仰渡候。当月十日を限り指遣、切手を取指上候様に被仰渡候。右日限延引仕候はゞ書付を取、其上に而御詮議可被成旨御座候。則組々割符いたし進申候。尤鼠徘徊不仕組々之分、右割符之内少々宛御減可被成候。於相談所御示談可被成候。何之故にも早速両所に可被進候。

一、右割符銀村々より御取立之儀、御見合可被成候。何茂十村中御手前才覚被成可被遣候。則此段も忠太夫様より被仰渡候、以上。

五月六日　　三階村源五

堀松村平七郎

口郡十村中宛所

二月。家來の給銀支拂に新鑄の銀貨を以てすべきことを命ず。

今吹銀は元文元年改鑄したるもの

〔政隣記〕

二　月

一、家來給銀今吹銀に而可相渡旨御觸有之。割場小者等之給銀は、當春より不殘今吹銀に而相渡之。御家中家來者今吹銀に而者承引不仕、半銀は古銀交渡候方過半之由也。

三月十二日。前田吉德の藏する飮膳正要を書寫せしめて幕府に納る。

〔文新齋日錄〕

一、元文二年三月十三日松平加賀守吉治が藏本、飮膳正要を寫して獻ぜしめらる。御書物日記に、飮膳正要元文二年正月十六日松平加賀守へ書寫差出候樣被仰付、同三月十三日獻之。

三月十六日。諸士に役銀・出銀の上納を懈らざらしむべきを令す。

〔政隣記〕

三月十六日御家中之面々困窮、當春役銀・出銀不得指上、飯米等にも指支候躰之者も有之旨粗相聞、達御內聽候處、米下直之儀者知れ候事に候得者、兼而其心得を以嚴重致儉約、取續候

樣可相心得處、左樣之詮も無之不心得故と被思召候。役銀・出銀之儀は品重き事に候得者、指支候者は、急度御咎ゐ不被遊候はでは難被爲成候間、頭々も兼々其心得有之、除知等も爲仕置、上納爲仕可申儀との御内意之旨、御月番安房守殿頭々・御用番ゐ被申渡之。

四月二日。前田吉德の子利和、江戸富士社に宮參を行ふ。

〔政隣記〕

四月二日晴天、勢之佐殿御宮參、富士ゐ御參詣、御作法如御先例。騎馬御供、御近習物頭鷹栖左門・同物頭並大槻内藏允。

〔御厩方舊記〕

一、勢之佐殿元文二年四月二日御宮參、直に御中屋敷ゐ被爲入。於御中屋敷預玄院樣御菓子・御酒被下、從中將樣小頭ゐ白銀三匁、從預玄院樣三十人之者・御中間等三十一人ゐ鳥目二十貫文被下候。御召馬別黑駮、但鞍置に而四月朔日於御居宅被進、御請大槻内藏助殿上之。御供小頭萩原宇太夫。御供役御中間忠兵衞・元右衞門・半右衞門。御使馬仙臺黑。平御中間次左衞門・理右衞門、沓籠一人。

四月六日。前田宗辰名を犬千代と改め、翌日又左衞門利雄と改む。

〔政隣記〕

四月六日勝丸樣御名、犬千代樣与御改被遊候樣、御使御家老前田圖書を以被仰進、爲御祝御熨斗目被爲召被爲入。翌七日犬千代丸樣御溜迄御出之段達御聽、御ふくさ給・布御上下御着用、御居間ゟ被爲招。犬千代丸樣ニ御ふくさ給・布御上下に而御出之所、御名又左衛門樣与被稱候樣、御實名利雄公と可被稱旨御意に而、御判物共二通御硯蓋に被載、御直に被進之。御取合遠田勘右衛門申上。追付御のし三方上之候處、御手自御のし又左衛門樣ゟ被進、御三方迄引之。右之趣同日前田圖書諸頭ゟ被申聞、各常服に而承之、組・支配ゟも申聞。右之趣於金澤者、五月朔日出仕之面々ゟ御月番御演述、左之通。

勝丸樣御名、代々之御童名に付、前月六日犬千代丸樣与御改、翌朝又左衛門樣与御改被遊候。此段何茂申聞候樣に被仰出候。且又御實名利雄樣与奉稱候旨、御家老中より申來候。

右之趣同役中傳達、組・支配之人々ゟも相達候樣可被申談候事。但今日出仕無之面々ゟ者、向寄より相達可申候。

四月六日。前田吉德の養女繁姬江戸を發して金澤に向ふ。

〔政隣記〕

四月繁姬樣ゟ爲御餞別、生絹二十疋・御干菓子入檜重・御鼻紙入十五・御たばこ入二十・箱入生綿一折、御使御近習頭伊藤六郎左衛門を以被進之。御子樣方よりも、御銘々樣より御餞別物

被進之。

一、同六日五半時頃、繁姫樣備後守樣御邸より御發輿、金澤に被爲入。御供も備後守樣御家來頭分に者小栗平八郎、此方樣より者今月交代之侍六人相加り御供仕。頭分に者御留守居物頭多胡要八、去秋勝丸樣御袋之御方に指添出府、今般芝山政太夫与交代に付、繁姫樣御道中御附使者与申趣に而御供被仰付。上州神桑川高水、越後姫川も風高、一日宛御逗留。廿六日金澤御着、金谷御廣式に被爲入、翌廿七日小栗平八郎大聖寺に罷越。

但、發輿に付御附使者御近習頭坂井茜右衞門、御泊浦輪迄之御進物御使者御表小將脇田清左衞門被進之。

（廿五日は廿六日なるべし）

〔政隣記〕

同年四月六日、江戸備後守樣御邸より御發駕、廿五日金澤金谷御廣式に御着、御道中御供人、侍并足輕等不足之分此方樣より御足、他國路に而は備後守樣御姫樣之御格、御領國に而は此方樣御姫樣之御格。

四月七日。前田吉德、宗辰を伴ひて閣老を歷訪す。

〔政隣記〕

四月七日又左衞門樣御儀、中將樣御同道に而五時御出、御老中御用番松平左近將監殿に被爲

入御對顏、御目見御禮。前々者御老中方先御逢之儀に付被爲入。御退去之後御着賞之儀、左近將監殿言之外御感に而、御出入坊主衆大須玄善へ御噂之由。且外御老中方にも段々御同道、同月廿三日御目見御禮書、御用番に細井佐次右衛門殿を以御達被遊候事。

四月廿三日。中御門上皇崩御の報江戸より金澤に達す。

〔政隣記〕

四月十八日、今月十一日仙洞樣崩御之旨江戸に申來。翌十九日一統兩丸御登城。金澤に者廿三日江戸より申來、普請・鳴物等五日遠慮。右に付京都に之御使、御持筒頭永原勘左衛門に被仰渡、五月二日金澤發足、同廿五日歸着。

四月廿八日。前田宗辰初めて徳川吉宗に謁す。

〔徳川實紀〕

月次例の如し。松平加賀守吉徳が子又左衛門は、銀・紗綾・馬をさゝげ、初見の禮をとる。

〔政隣記〕

四月廿八日又左衛門樣今日御禮被仰付候間御同道、五時御登城、中將樣にも御禮可被仰上旨、昨日九半時御老中方御連名之御奉書到來に付、今日六半時過御兩殿樣御同道御登城。月次御禮相濟、於御白書院又左衛門樣御禮被仰上、中將樣も御禮被仰上。中將樣は御服紗・御半上下、又左衛門樣は御のしめ・御長袴御着用。

但御敷居之一疊目に而御禮、御太刀披露御敷居之内二疊目之由。畢而御兩殿様御一所に御出御、敷居之内に御着座、御懇之被蒙上意。但いまだ御無官に候得共、向後少將之御格与、御用番松平左近將監殿より、御役人中へ御申渡有之候由。將又殿中今日御内習被遊候節者、侍從之御席に候處、少將之御格元祿十五年中將様初而御目見之御格こ、左近將監殿御申渡に而、又改而少將之御席に而御内習被遊候。附、中將様初而御目見之節御禮疊者、今般こ御同事、御太刀は敷居之内一疊目に候處、結句此度は御太刀疊一疊上に而御座候也。

右御城相濟、西御丸へ御上り、夫より直に御老中方・若年寄衆へ御同道に而御廻勤、九時前御歸館。追付於御居間書院、又左衞門様御長袴に而中將様(御のしめ御半上下)へ御禮被仰上。御太刀披露前田圖書(長袴着)川御馬代金御表小將(長袴着)持出御禮相濟、重而御出、御着座上之間御左之方。(是迄御太刀御表小將引之候處、此度前田圖書殿被伺、御仰出之趣も有之、向後年頭等御子様方御禮之節、御太刀披露引共御家老中被勤筈に相極、今日より右之通に相成。)圖書御取合申上。此時御腰物來國光代七百貫、(此刀は元祿十五年二月十五日從相公様中將様へ、松平之御稱號被進候節、於御前被進候御腰物也。)被進之。玉井市正(のしめ半上下着。)持出上之、御頂戴御次へ御退、御帯被遊御出、御禮被仰上。此時市正御取合被申上。此時御表小將御熨斗持出、御前へ上之、御手自被進之。

一、今朝御獻上、左之通。

公方様へ從又左衞門様

御太刀一腰（但造り御太刀）・白銀三十枚（御目録）・綸紗十卷（包のし木地臺）・御馬裸脊一疋（瓦毛）。

大納言樣ゟ

御太刀・白銀・御馬同斷。但卷物無之。（御馬黒駮。）

公方樣ゟ従中將樣

紗綾二十卷・包のし御目録。

大納言樣ゟ

紗綾十卷・包のし御目録。

〔政隣記〕

一、今日又左衛門樣騎馬御供青木新兵衛（御馬廻頭兼御附）、則御城中茂御供。外御附御番頭堀只右衛門・御側小將西尾内膳。御先御玄關ゟ罷越、人持前田將監・聞番古屋傳右衛門、何も熨斗目・上下着用、此外羽織袴に而御供仕。

一、今日御城に而、御式臺階之上迄伊勢守樣御出迎被遊、御幼少に付將監御先ゟ罷越、御玄關より御間之内御供仕。

一、今日御出入之御方々大勢御出、御歸館後御祝儀御申上、御料理済御退出。其内前田信濃守殿・前田帯刀殿・細井佐次右門殿等御殘、御役者中も罷出居申に付、御慰労御囃子等被仰付、

御酒燕有之。

一、今日在江戸諸頭ゟ、左之通御家老衆御演述。

又左衛門樣御目見御願之儀、前月廿三日御用番松平左近將監殿迄御達置被遊候處、同廿七日御老中方御連名之御奉書到來、翌廿八日御同道に而御登城可被成旨に付、則今日御登城被遊候處、於御白書院御目見被仰上、御禮之御格式も御宜、中將樣にも御禮被仰上候處、御懇之被爲蒙上意、重疊忝御仕合思召候。此段何も可申聞旨御意に候。

四月。能登に星隕つ。

〔可觀小說〕

一、是歲四月能州に隕る星爲石、土入打寄て割之。其石十六日に郡奉行より執政所ゟ出之。五月金澤より其割石一つ奉之。隕る時光あり。其時は柔にして次第に堅實す。江戸へ越候石は一・二寸許、外は丸め如にして黑く、內は常の石とは違ひ、沙のかたまれるやうにして堅し。色青黑うして重し。

五月朔日。前田吉德、宗辰の謁見を賀して祝儀を贈る。

〔政隣記〕

一、五月朔日從中將樣又左衛門樣ゟ、今度御目見之爲御祝儀、御太刀代・綿三十把・二種・五百

疋、御使御家老玉井市正を以被進之。

一、五月朔日前田圖書・玉井市正并前田將監・菊池十六郎、其外又左衛門様附之頭分以上江、今般御目見被仰上候に付、御祝拜領被仰付。圖書・市正江者時服三宛、將監・十六郎江者紗綾二卷・白銀五枚宛、青木新兵衛・遠藤紋太夫・村田牛助江者絹二疋・白銀三枚宛、堀只右衛門・武田杢左衛門江者絹三疋被下之。但圖書・市正於御前被下、將監・十六郎も同斷、圖書・市正、從又左衛門様も被下物有之。

五月二日。先に中御門上皇崩御せしを以て使者を京師に發せしむ。

〔御年表〕

五月二日、前月十一日仙洞崩御に依て、御使者御持筒頭永原勘左衛門孝忠を、京都へ今日差上らる。

五月五日。去年朝鮮に漂流したる鳳至郡輪島の船頭等金澤に歸着す。

〔護國公年表〕

就御尋口上書を以申上候。

私儀去年鳳至郡輪嶋町兵右衛門十四人乘之船、船頭水主被雇、去年七月九日越中東岩瀨に而米八百三十一石餘積請、大阪へ爲積登申候に付、九日東岩瀨出船仕、七月十二日輪嶋崎浦江

馳寄、夫より段々馳登申候所、七月十七日長州津之嶋沖に而、辰巳風に吹替大荒に罷成、最早帆持申事成不申候に付、帆おろし任風流申候所、次第に波風強、舟立兼危罷成申候に付、七月十八日段々米打捨候得共、彌波風強水舟に罷成、最早何國之沖共方角相知不申、助り可申儀とは不奉存、覺悟相極居申候所、十八日七つ時分、少霞はれ山相見え申候得共、何國共曾而不奉存、何とぞ馳寄申度檣伐に懸り候所、舟飛瀬に懸申に付、驚何角仕内破船仕候故、船頭・水主十四人共橋舟に乘移流申候內、右橋舟茂打返、船頭・水主ちり〴〵に罷成、舟板等に取付居申、漸一人・二人充揚候得共、何れ茂十方失罷在申候。其内少氣も付申候故、揚申人數相しらべ候得者、十四人之內十二人揚、水主之内七右衛門・勘四郎相見え不見候故、橋舟打返申候節溺死仕与奉存候。則山際に畠等も有之、作毛御座候に付、定而近邊に人家可有御座与奉存、何茂一所に山端を廻候得者、人家を見付申候に付、皆々嬉敷其方へ罷越申候處、人大勢罷出申候を見申候得者、日本人とは爲躰も違申候故、何茂驚申候。然共無是非儀に奉存、何卒助くれ候樣に申候得共、私共申儀曾而聞入不申、又右之者共申儀も聞取申儀不罷成候故、手を合おがみ候得者うなづき、家之脇に納屋躰之所有之、右之所へ十二人、追付眞鍮之器物にさじを添、粥をくれ申候。則其夜其家に燒火を仕明申候。

一、同十九日朝破損仕候場所之方へ手まねをいたし、十二人共連行申候。舟粕幷棹箇流寄有

之候に付、是等を取結小屋建くれ、十二人共右小屋に入置、麦飯唐津之椀に而くれ申候。
一、同二十一日には、所之御役人と相見え申仁馬に乗、御家来衆与相見申人大勢被召連御越被成、右小屋之脇に小屋御建御入被成候而、十二人之者共御覧被成、舟御往来も御覧候而、夫より食も一日に三度宛、酒も一度充被下候。
一、同二十三日九時分に、唐人爲躰に而二人罷越、其方共何國者に候哉、此所者朝鮮國之由申候。其時朝鮮國と申事初而承申候。私共は加賀之國之者と申候所、則舟御往来之而書寫申候。且又荷物者何を積申候哉与相尋被申候に付、米千六百六十二俵餘積申と答申候。其外武具・道具等無之哉与相尋被申候に付、船頭傳九郎手に脇指一腰有之候得共、破船之節捨り申と申候所に、金銀所持仕候哉与相尋申に付、金銀之儀者無御座与申候。然ば錢は無之候哉与相尋候に付、船頭・水主遣錢五貫文程所持仕候得共、是も破船之砌捨り申候。右二人之通詞、一人は舟御往来之寫を、對州御役人中御入被成候クワンと申所へ持參被致候。一人は十二人之者介抱、其外食物等之ために殘し置申候。
一、海中に相果舟水主之内、七右衛門死骸、七月二十三日七つ時分流寄申候。同二十五日朝勘四郎死骸流寄申候に付、二人共死骸葬申度与右通詞人に願申候得ば、此所に而者葬申事不罷成由に而、舟粕を以箱を指し被申、木綿一疋被下候に付、二人死骸を包箱に入申候。二十

五日十二人之船頭・水主共を舟に爲乘、右之死骸入候箱共に舟に入、段々浦々を引舟に迄り、八月二日ウワンカイと申所へ參申候。則クワンと申所より、對州御役人早舟に而大勢即刻御越被成候に付、則對州御役人へ御渡、大船に乘移、ウワンカイと申所に居申候。其時給十二・帶十二筋・手拭十二、御目錄を以對州御役人方より被下候。其外桶・半・膳・椀・味噌・醬油・酒等之入用之物、且又椀道具・かみそり幷紙一丸被下候。御役人二人宛晝夜御附、二日代りに而御座候。脇に小早舟一艘に、御役人五人御乘御附被成候。是茂二日代りに御座候。逗留之內素麪五十箱、十二人之者共へ對州御役人より被爲下候。

一、水主二人之死骸、ウワンカイに葬被下候樣願申候處、御聞屆之上、朝鮮國へ御尋に被遣、願相叶、則クワンと申所に日本人之墓所有之、其所に土葬に御取置被下候。

一、舟破損所に而、朝鮮國御役人より舟御出し、米等御尋させ被成候處、米十八俵捕揚、御改、少々之物迄不殘、對州へ私共乘船に積迄り被下候。

一、八月二十二日に對州クワンより御役人大勢御越、ウワンカイの濱に小屋を懸、十二人之者共舟より御上、破損之儀一々御尋被成候。其節酒三升入一樽、三組重に生菓子御入、對州御役人より被下候。

一、九月二十二日御在番役內市郎兵衛樣と申方御出被成、十二人之者共ウワンカイ之濱へ被

召上、酒三升入樽共・生菓子三重、市郎兵衛様より被下候。則朝鮮國之儀事濟、對州へ被遣候儀被仰渡、尤今日朝鮮國より饗應御座候段御申渡に御座候。然處長五尺幅二尺五寸計之膳に、二十品計盛立御座候。其内に存居申ものは、くり・かき・うごん、其外は存不申物に候。御振舞之後かき一袋、木綿十二疋、三・四斗入計之米八俵、昆布一抱、鯡筒鯡之様成細き長き魚一抱、酒一升計とくりに入被下候。

一、八月二日より九月二十二日迄は、五日目に三斗五升入之米一俵、干鱈五枚、鮎之鹽辛五合程、わかめ一抱、味噌・薪・鹽・油共に被下候。其外生肴并ぼうだら躰之もの毎日被下候。味噌之味は甚敷、給申事難成御座候。是迄者朝鮮國御賄に御座候。此内にも對州御役人より、味噌・醬油・酒・たばこ・茶等被下候。朝鮮國事濟、對州御役人方へ御請取被遊候而より、諸事御賄對州御役人方より、何に而も入用物段々被下候。

一、九月二十六日ウソンカイ出船刻、五百石計之舟に舟粕不殘、糯米十八俵積入、十二人之船頭・水主共不殘乘、對州御役人二人御乘被成候。外に二艘に御役人一人宛御乘被成候。同日對州サスナ御番所へ着仕候。此御番所において御詮議御改等嚴敷儀に御座候。此所に而ふさ六十二被下候。十月二日迄罷在候。

一、十月三日サスナ御番所出船仕刻、浦々より引船數艘御出被下候。十月四日對州之内かも

おへ入津仕候所、かもお御役人中よりやさい被下候。同九日朝出船仕、同日御城下府中へ入津仕、則府中に而御番所へ同十一日に被召出、委細相尋に御座候。翌十二日にいて庵様ニ申御寺へ被召出、朝鮮國之様子、且又十二人之者共宗旨之儀御尋被成候に付、委細申上候。其砌府中御役人中より、三斗入之米三俵、錢四貫文、味噌八貫目、醬油一升入一つ、酢五升入一つ、鹽三俵、薪一足、此分御目錄を以被下候外、木綿わた入十二被下候。同十八日朝迄罷在申候。

一、御城下府中に罷有申候内、御番所御役人より被仰渡候者、舟宿はかた屋宇右衛門と申宿申付候間、何に而も相賴申度事有之候はゞ可申上旨、段々被仰聞候に付、舟粕之儀大阪迄舟路遠路積登申儀も如何に奉存候間、此所に捨置申候而成共罷登申度与申上候得共、捨置申儀不罷成候間、左候はゞ入札拂に成共相願候様、舟宿はかたや宇右衛門被申聞候に付、其段奉願申候所、其通被仰付、入札三通之內、高札右銀六百三十五匁一分五厘に而、則代銀請取申候。糯米十八俵、舟粕之內少々相殘、大阪迄積登申候。

一、十八日に府中出船仕、前書之通御役人中御乘、外使者舟一艘御奉行木寺源五右衛門様御乘被遊、一所に御登に御座候。同日いきの國かざもと入津仕、同二十一日出船、同二十三日同國はせの浦入津仕、十一月五日出船、同六日下關入津、同七日出船、同十日はりま杓子入

何方は此方樣歟

津仕、同十一日出船、同十二日兵庫へ入津仕、同十五日船出、同日大阪へ入津仕候所、其日者船中に罷有、翌十六日に對州御役所へ御召に而罷越申候所、對州御役人衆御召連、同日大阪御奉行所へ罷出申候所、鴻池喜七郎殿に御預け、夫より加賀御座敷樣に參申候。糯米十八俵、殘候舟粕、并入札代銀等鴻池喜七郎殿へ御預け被成候。

一、十一月二十日大阪御奉行所に被召出、破損并朝鮮國之儀委細御尋御座候。同二十二日、當二月三日、同十六日、三月四日・五日・六日晩に被召出御尋被遊候。四月二十七日大阪御奉行所に又々罷出候樣被仰渡、罷出申候所、江戸表より何之御構茂無御座候而事相濟候間、勝手次第罷歸可申旨被仰渡、則何方へ對し御構無御座旨被仰渡候。大阪御奉行所へ罷出申儀、始終九度罷出申候。每度御尋之趣に而、大坂御奉行所へ罷出申刻は、御屋敷より御兩人、且又鴻池喜七郎御手代五人、私共御召連御出被成候。晝飯等鴻池喜七郎殿より御持參、十二人之者共へ被下候。

一、大阪に罷有申内、此方樣御屋敷萬事御賄に御座候。則茶・たばこ・薪・油・炭等承申者一人、食其外野菜等仕候者一人被仰付候。

一、大阪に罷有申内、木綿下帶十二筋此方樣御屋敷より被下候。

一、罷歸申時分、大阪より伏見迄十二人參申川舟一艘此方樣御屋敷より御雇舟被遊、賃銀之

儀則御屋敷より御渡被遊候。

一、十二人之者共、大阪より金澤迄路銀として、一人に付古銀二十目充、都合二百四十目拜借仕候。前月二十七日大阪罷立、當五日金澤へ參着仕申候。

右書上申通相違無御座候、以上。

元文二年五月

鳳至郡輪嶋町兵右衛門沖船頭

傳九郎

同　水主　六兵衛

同　清五郎

同　又兵衛

同　七兵衛

同　藤兵衛

同　彦兵衛

同　萬吉

同　又助

同　長吉

同　半　兵　衛

同　炊　三　右　衛　門

御　算　用　場

右御算用場ゟ差上申に付、寫仕上之申候、以上。

巳五月十日　　大澤村　儀左衛門　判

御改作御奉行所

五月六日。菊池十六郎等日光社參を命ぜられて江戸を發す。

〔政隣記〕

五月四日、又左衛門様今度初而御目見被仰上候に付、日光ゟ之御使菊池十六郎武敬ゟ先頃被御渡、今夜御前ゟ被召出、判金二枚・卷物二・御羽織一御目録を以被下之、從又左衛門様白銀十枚、御手自綿二端被下之。聞番古屋傳右衛門も、被指添候に付御前ゟ被召出、從又左衛門様判金一枚被下之。

〔政隣記〕

一、六日兩人共江戸發出、八日日光參着、九日御代拜勤之、御使書等認江戸被指上、同日夕發足、廿日金澤ゟ歸着、御歩古市忠左衛門差添候事。

朱書の通とあるは四月廿八日江戸にて諸頭へ演述の末文御意に候とあるを拙者共へ以御書被仰下候としたるなり

五月十一日。金澤にて前田宗辰の德川吉宗に謁したることを頭並以上の士に告ぐ。

〔政隣記〕

一、於金澤者五月十一日布上下着用、五半時登城候樣、前日月番前田對馬守殿依御廻文、頭並以上登城之處、於竹之御間年寄中列座、對馬守殿右朱書之通御演述、畢而覺書座頭迄被相渡、江戸同樣之趣に付留略す。（本文中飛脚に而九日到來）

右御弘畢而、今日登城之面々爲御祝儀、今日・明後十三日之內年寄中宅江相廻可申候。幼少病氣等に而今日登城無之面々者、向寄より傳達、御用番宅迄以使者可申越由、對馬守殿御指圖之由、御横目中覺書を以申談也。

今日之儀組・支配江申觸之否詮議之處、中將樣初而御目見之時分、平士御祝儀申上候儀は無之故、此度も平士江者不申觸事に相極り候事。

五月十五日。前田宗辰會津侯松平容貞の妹常姬と婚を約す。

〔政隣記〕

五月十五日又左衞門樣御縁組、肥後守樣御妹常姬樣与就被仰合候、今日肥後守樣江前田帶刀

殿を以被仰遣、あなた御仕廻、重而帯刀殿御越、從肥後守樣に佐々木五郎右衛門殿を以被仰越、御口上帯刀殿御聞、帯刀殿より前田圖書に御演述達御聽。追付中將樣御出、五郎右衛門殿に御對顏、御熨斗出、二汁七菜之御料理。帯刀殿・細井佐次右衛門殿も御相伴に而出也。五郎右衛門殿与者御盃事も被遊候。右畢而肥後守樣に之御答、中將樣御直に五郎右衛門殿に被仰入相濟候。肥後守樣に帯刀殿御越候而之首尾茂、右之趣に候由。翌十六日右御願書細井佐次右衛門殿を以、御用番松平伊豆守殿に御達、肥後守樣より者佐々木五郎右衛門殿を以被上之候處、御首尾能御受取に付、爲御悦肥後守樣より御留守居横山多仲被遣、御料理被下之。

六月四日、前田宗辰の婚姻幕府によりて許可せらる。

［政隣記］

一、六月四日前日之依御奉書御登城之處、又左衛門樣御緣組御願之通被仰出。依之西丸并御老中方・若年寄衆御勤御歸館。又左衛門樣に右之趣於御居間書院御直に被仰入、御いし被進。畢而御家老中被爲召被仰聞候由。其後御老中席に頭以上御呼御演述。

又左衛門樣御緣組、肥後守樣御妹子樣被仰合御願被遊候處、御願之通被仰出、御仕合被思召候。此段何茂申聞候樣被仰出候。右御祝儀何茂御帳に付、且今日御左右相知候上一統布上下着用、御表向六日迄布上下着用仕候事。

一、右御願濟、御日柄不指合候得者御使者御取遣之筈に候處、今四日者肥後守樣御障日に付、同月十五日御使者御家老二千三百石武川源助、御留守居中根新八同道罷越、前田圖書ゟ源助御口上申述。預玄院樣・龜次郎殿・喜代姫樣ゟ之御口上者、中將樣ゟ迄也。又左衞門樣ゟ者御口上無之、新八申述。其後御勝手座敷上之間ゟ御出、源助被召出、御口上直に申上。畢而新八も被召出、其後御勝手座敷於二之間に、前田帶刀殿御相伴候而御料理被下。新八者御廣間溜に而、聞番中村助右衞門相伴に而御料理被下。相濟、重而最前之御間ゟ御出、源助ゟ御答被仰含、預玄院樣等之御答は新八ゟ助右衞門申述。右御用携候面々、淺黄帷子・返小紋之外勝手次第着用。肥後守樣ゟ者、同日玉井市正被遣之、聞番後藤瀨兵衞同道。但披候後、兩人ゟ御吸物等被下之。

一、右御弘、於金澤は六月十五日諸頭ゟ御月番土佐守殿被仰聞、江戸表与同趣也。右御祝儀御年寄衆迄ゟ相廻候。御家老中ゟ者勤に不及、組中ゟも不申聞候事。

附、御弘之節等不罷出人々は、向寄より傳達与有之節之儀、向後筆頭より申達候筈に示談相極り候事。

六月廿一日。百姓の遺子幼弱なるを以て後見高としたる田地の取扱に就いて令す。

〔司農典〕

跡々より、村々百姓悴幼少に而親致病死候者有之候得者、二十歳に罷成候迄、爲後見一類之者又ハ他人に而も申付置致耕作、數年相立せがれ二十歳に罷成、急度家高相渡、双方より證書付相斷申格に有之候處、二十歳に罷成候而も、病氣等に而見合置不相渡者有之候。相煩候而も二十歳に罷成候ニハ、早速引渡可申筈に有之候處、及延引に申者有之段難心得候。若病氣指重り、跡高等後見人共より不引渡内令病死候得者、跡目中絶に罷成候趣に付、御改作之法に違、左候得ば肝煎・組合頭ニ不念之儀有之候條、向後及延引に申者越度可申付事。

右之趣急度相守、夫々嚴重申渡、請書付指出可申候、以上。

丁巳六月廿一日　　改作奉行

諸郡御扶持人・十村中

六月廿八日。前田宗辰登營して首服し正四位下左近衛權少將に任じ佐渡守宗辰と稱す。

〔德川實紀〕

六月廿八日。月次例の如し。松平加賀守吉德が子又左衞門御前にて首服し、御名の一字賜はりて、正四位下の少將に叙任し、佐渡守宗辰と改む。よて御盃下され、備前國眞長の御刀を

賜ふ。宗辰よりは行光の刀・儀刀金五枚・縮緬十卷・馬一疋を奉る。

〔政隣記〕

六月廿八日御老中方御連名之御奉書を以、又左衛門樣御元服被仰付候間、今廿八日五半時御登城、中將樣にも御登城御禮可被仰上旨申來。御兩殿樣共御長袴被爲召、御同道御登城之處、公方樣・大納言樣御黑書院に出御、又左衛門樣御禮被仰上、御一字御拜領、御用番本多中務大輔殿、正四位下少將被任之儀被仰渡之上、御官位之御禮被仰上、御盃御頂戴、御肴御直に被進、御刀備前眞長代金二十枚御拜領、御名佐渡守宗辰公与御改。諸事御作法畢而中將樣御禮被仰上、次に中將樣・佐渡守樣御一所に御出御着座、被蒙上意。

出御以前、御奏者番衆・御大目付衆御取持に而御習禮有之由。此間於御館之御内習之は、餘程御好等有之致相違候得共、一篇御聞請、其儘御會得、無殘所御進退之由。御老中方御三人共御出、御習禮御覽。是は外御大名方御元服之節者決而無之事之旨等、前田信濃守殿御越被申也。

一、今日又左衛門樣御元服に付、一統月次御出仕相止。

一、御本丸相濟、御兩殿樣御同道西御丸に御登、御奏者に被謁。夫より御老中方・若年寄衆御廻勤、九時前御歸館。中將樣御居間書院に御着座、佐渡守樣御出、御熨斗出。夫より御表に

因幡御前は鳥取侯池田吉泰の室

御出、御一門樣等ゟ御對顏。其以後御家老衆ゟ、今日之御首尾御意、頭共ゟ茂可申聞旨御意に付、御席に而御弘有之。於金澤ハ七月四日頭分以上ゟ御弘有之。左之通。

又左衞門樣御元服可被仰出候條、先月廿八日御兩殿樣御登城被成候樣に、前廣御老中方御連名之御奉書到來。則御登城被遊候處、於御黑書院御目見、御一字御拜領、被爲正四位下少將、御盃・御肴・御腰物御頂戴、御懇之被爲蒙上意。中將樣にも御禮被仰上、重疊難有被思召候。此段何茂可申聞旨、以御書被仰下候。

御名佐渡守樣、御實名は宗辰樣与被稱候事。

右御祝儀、年寄衆五ヶ所今日中可相勤候。病氣等之分者、月番迄以使者可申越旨被仰聞候由、御横目中申談也。附、頭々より組・支配ゟ申聞候儀、御請申候處、前々之通可相心得旨安房殿御申に付、諸組共今日御弘之通紙面に調、組・支配ゟ觸出之。

附、右御祝儀勤、大和守忌中に候得共、無構相勤候事。

六月廿八日。前田綱紀の女敬姫逝去す。

〔可觀小説〕

一、因幡御前樣六月廿八日夜御逝去之事。敬姫御事。此間少々御滯、御浮も有之、御不食に付、六・七日前より佐々伯順調藥被召上、爲指御沙汰茂無之處、廿七日朝俄に御寒り、御附物頭清太

夫より言上、早打御使者本郷御邸に參候。九時前相模守樣より早打を以御大切之趣被仰遣、御前にも俄に被成御座、暮過御歸館に候。廿七日より長尾文哲御藥に而、少々御開きに候旨。廿八日七時過重而相模守樣より早打を以、御大切至極之旨被仰進。先前田圖書早打を以被遣、次に玉井市正も被遣、御前にも急に可被成御座候所、又早打を以最早御事切させられ候旨被仰遣、御出者止申候由。

實者廿七日戌刻御逝去被遊候處、相模守樣鈴木淸太夫を被召、加賀守殿御父子共明廿八日者大切成御公用有之候事に候へば、淸太夫儀心得可有之事与被仰聞候。仍之廿八日夜御逝去と御披露有之由に相聞え候。

六月晦日。德川吉宗使を遣はして前田吉德を訪はしむ。

是月は大盡なり

〔德川實紀〕

六月晦日。松平相模守吉泰が室うせければ、奏者番高木主水正正陳して弔慰せらる。又松平加賀守吉德をも御たづねあり。これはその妹なるによりてなり。

七月朔日。金澤寺町に火災あり。

〔御年譜〕

一、七月朔七時過、寺町本妙寺門前より出火、百七軒燒失。淨安寺・理證院・松月寺・少林寺・

伏見寺・安住寺・千手院・本妙寺類燒。

七月九日、徳川吉宗人參種を交附せしめて加賀藩に播種を命ず。

〔兎鷄網〕

昨宗仙院御出、私共之内御遣可被成由に付、則罷出候處、先年丹羽正伯より指越申候人參苗、於御國横山大和守殿に而御植付榮候由、則相達上聞に茂候御様子に而、此度松平石見殿を以人參種五十粒御渡被成、私儀御屋舖ゟ御心易御出入仕候間致持參、右之趣夫々被相達、御國ゟ者指越爲御蒔候樣に存候旨、右石見守殿御申聞候に付致持參候由宗仙院御申聞、右種御渡に付、委細承知いたし候。只今加賀守他出いたし候間、請取歸宅之上可相達旨致挨拶候。右御渡人參種上之申候。於國許爲蒔置、否御屆等何方迄仕候而可然御座候之旨承合候處、爲御蒔候而五十粒不殘つき申ものにても無御座候間、何本生候趣私方迄可被仰聞候由候。尤土拵等御國に功者成仁茂可有御座候得共、若土拵等之儀御聞合被成度候はゞ、牛込に罷在候草花屋功者に土拵等仕り、私方ゟも出入いたし候間、此者に成共爲御聞合可被成旨、私迄御申聞被成候、以上。

元文二年七月九日　　後藤瀨兵衛

別紙之趣達御聽候處、澤村源之丞・苗島村久左衛門ゟ相渡爲蒔可申候。土拵等之儀は横山大和

守承合可申候。尚又於此元茂土拵等之儀爲御尋、可被仰遣候條、此段右迄可相達候由被仰出、人參種一箱五十粒被渡之候に付、指越之申候、以上。

元文二年七月九日　　　遠田勘右衞門

御算用場奉行衆中

七月十一日。江戶より使を遣して關白二條吉忠の病を問はしむ。

二條關白は前田綱紀の壻にして是歲八月三日薨去

〔政隣記〕

七月十一日二條關白樣御異例に付、御見廻御使從江戶御大小將高田知左衞門被遣、今日發足、廿二日京着御使勤、八月二日金澤ゟ歸着。但知左衞門儀、發足之砌古金二十兩拜借。是表向他國御使之節拜借之御格初也。會所より受取、金澤歸着之上追付上濟。

七月十二日。前田吉德、德川吉宗に巢鷂を獻る。

〔政隣記〕

七月十一日巢鷂御獻上。但公儀當時巢鷂御有合無之に付、若御用に候者被獻度由、御側衆澁谷和泉守殿迄兼而御內意被仰達置候。今般御忌中に成候に付、御忌明之上御伺可被成處、今日松平左近將監殿ゟ開番被召呼、井上三太夫參出之處、御忌中無御構、明十二日御鷹可被指上旨被仰渡候に付、翌日廣瀨件吾据之、大槻長右衞門指添、開番中村助左衞門召連之、左近

將監殿に罷越上之。御目錄者御忌中故指濟不申。同十八日御忌明に付、右御目錄差上之候處、同日御喜色之由御奉書、左近將監殿より到來。

七月廿七日。前田吉德に就封の暇を賜ふ。

〔政隣記〕

七月廿七日御暇上使御老中松平右京大夫殿、從大納言樣之上使御老中松平能登守殿御出之旨に候處、御痛有之に付右京大夫殿御兼、御拜領物如御例。廿八日御登城御禮、前田圖書・玉井市正御目見等、都而御例之通。

〔政隣記〕

一、同年七月廿八日御歸國御暇爲御禮、西之御丸にも御登り之處、竹千代樣に初而御目見。依之翌廿九日爲御禮兩御丸に御登、御老中方も御勤被遊候。但御暇以後御登城、先者無之事に候得共、格別之趣に付而与申事也。

但、紀州樣等者、七月朔日初而御目見被成候得共、其節中將樣に者御忌中に付、此度初而御目見と云々。

竹千代は德川家治、是年五月廿二日生

八月十六日。前田吉德の女楊姬江戸に生る。

〔政隣記〕

母は鏑木氏
眞如院

武敬は菊池
十六郎

八月十六日曉八時、江戸御上邸於御廣式御姫樣御誕生、御用番にも御屆有之。廿二日迄御血氣に付御使者等之御勤も無之。御名從預玄院樣被進楊姫樣与被稱。

八月廿一日。前田宗辰の位記口宣受領の爲の使者江戸を發す。

〔政隣記〕

八月廿一日佐渡守樣御任官位記口宣請取之御使、去年より詰番に而在江戸之御小將頭前田源兵衞に、先達而御內意有之候處、御忌中に被爲成延引。七月十八日御忌明之上表立被仰渡置候處、御奉書相渡候に付、今日江戸發、東海道より九月三日京着。御使相濟、十四日京發、十九日金澤に歸着、口宣幷御懸緒御免狀箱御月番に上之。是兼而被仰出、今秋江戸詰に罷越候御大小將之內澤田忠太夫指留置、同日右品々月番大和守殿忠太夫に御渡に付、請取之上直に發足、廿八日江戸參着、御家老中を以上之。但御掛緒御免狀は、飛鳥井殿御弟子に被爲成、則飛鳥井殿より御免狀御出候。御禮金一枚被遣之。

九月朔日。金澤寺町に火災あり。

〔大野木克寬日記〕

九月朔日申刻頃、野田寺町須田菜と哉覽申浪人の家より出火、折節風烈敷殆及大火、松月寺・伏見寺・理證院・淨安寺等一宇も不殘炎燒。仍江守氏は金谷御文庫へ參出、武敬本宅へ歸宿、

予ハ越後屋敷ゟ罷出る。途中差急にハ不及事故馬を静ニ為す。越後屋敷ゟ参出、其段御用番土佐守殿ゟ言達之。然所土州被申聞候ハ、未火も鎮不申、玉泉寺の方危様子に候間、右之邊へ罷越火防候様就被申渡。奉承知旨及御請、急に馬を馳宿所ゟ立歸、夫々人数を揃、急に野町の方ゟ罷越候様申付差遣し、馬を早め玉泉寺近く野町四丁目小路の内輪闇全昌寺の前迄罷越候處、御横目井口五郎左衛門に行合候所、五郎左衛門申候ハ少林寺只今燒失、此火を防候様申聞候故、馬より下立、町屋屋根へ上り、人数も上げ、押懸り防可申と存候處、隣の町屋に松平大膳烈敷防候躰に見え申に付、一往以使者及挨拶候處、鎮寄に候間先扣候様に返答、其上下火に成働にも不及。夫より向の火しきりに野町本通りゟ吹出可申様子に付、其方ゟ可打向と存、則人数を揚、本通り五丁目千壽院門前町屋ゟ人数を押上げ、防可申押懸り候處、同役前田監物依奉書に出馬。但監物には未相見得不申候。縦建置防申躰に付、兼而申談候通申合防可申旨家來迄申聞、下抽圓居押立させ、夫々加下知爲防申候折節、同司横山長太夫も奉書にて出馬、一所に申談爲防之候。其内監物も馳來り防之候。火はしきりに吹出し可申躰故、随分烈敷加下知候處、無難防留、千壽院本堂には炎燒候得ども、門并門番所・門前の家主圓屋太兵衛は無異儀消留申候。尤樋口次郎右衛門・井口五郎右衛門順見、於屋上及挨拶候。其外作八矢・津田内藏介等依奉書出馬之躰に候へ共、わきに扣申候。人数揚候時分、玉泉寺前より妙慶寺坂通り

罷歸候。此時漸及暮訖。西町橋之邊に而、土佐守殿歸宿ゐ路に而行逢候故、火事場之樣子明日以紙面可申上旨言達之。幸監物・長太夫先に罷歸候故、馬を乘寄、紙面等之事申談、行別令歸宿。

〔浚新秘策〕

一、九月朔日犀川寺町和田釆女家來次田伊兵衞宅より出火、折節東北風烈敷大火に成、寺院八・九軒町屋八・九十軒致燒失候。此火事之内、玉泉寺裏門へ迄町奉行稻垣與右衞門罷越令見分候處に、火消役成瀨内藏助纒持あがり有之、段々罷越候体に候。然處右纒持申候は、こゝはかくれに而不入所に候とて、纒をおろし他所へ可罷越と仕候。與三右衞門其体を見候て申聞候は、成程此所はかくれに而候。乍然玉泉寺は御寺に而、此所防留不申候ては御寺へ危く候。只此所に而防可然旨申聞候へば纒持承請、又其所へあがり申候。其時迄は主人内藏助は不罷越候。然所纒添之者給人高橋安右衞門と云。罷越申候は、何者に候へば此所に居候哉、邪魔に成候。外へ罷越候樣に申候。與三右衞門は玉泉寺門より罷越候而、其所には歩立に而罷在候故、見違候而申聞与存候に付、手前は火事場之役人に候、其方誰之家來に候へば左樣之儀申候哉与申聞候へば、人數之内へ紛入候。其内に又一人罷越申候。小扶持人川越源兵衞と云。火消之邪魔に罷成候と度々申聞候へ共居申候哉与聲高に申故、與三左衞門其方は誰之家來に候へば左樣之儀法外成事

共を申候哉、我等稲垣與三右衛門に而候と申所に、後より內藏助見付被申、右之者を散々に叱り申候。與三右衛門申候。度々慮外千萬之事共申聞候。ヶ樣之者共其分に被成置候はゞ、御相手には御自分与存候旨申候所、成程御尤に存候、其分には不仕意得候之由申、右家來は脇へ引分、火事場より足輕等指添、宅へ被相返候。扨裏門之內に足輕番所有之、其所へ與三右衛門を相招き、只今家來ども慮外之仕合、則自分に見屆置候。御堪忍候而珍重存候。急度可申付事与存寄候。爲其申達候旨被申。與三右衛門被入御念候御挨拶、致承知候。急度御叱被成候事能御座候と申立別れ候。其夜八時與三右衛門宅に迄、使者を以於火事場之挨拶申來。扨右之者共は屹度申付樣有之候に付、縮申付候旨使者申候。依之一往返答之上に、右兩人之交名は如何申候哉、其品如何樣之者に候哉与取次意得に爲相尋候處、私儀は內藏助方用人相勤、泊番に暮頃より罷出候迄に而、火事場之樣子も不承、交名も不存候旨申候に付、左候はゞ此御返答は追而可申進候。被仰越候趣は承知、入御念候事に存候旨迄かろく申遣候。翌二日御小將頭前田源兵衛見舞に罷越、昨日之樣子承知、內藏助へ少々筋目も有之心安候故、是へも見廻候へば、右兩人之家來は殺害申付候等与內藏助被申候故、最早與三右衛門へ挨拶も相濟、遺念も無之体に候へば、それ迄には及申間敷と存候。閉門に而も被申付可然哉与存候趣に申達候。御自分にも其思召にも候哉。內藏助賴有之罷越候に而は無御座候。御心安申通候事故

罷越候旨申候。與三右衛門申候は、一々思召承知、内藏助殿彼場に而早速預御挨拶、思召も被仰聞候へば、是に而事濟申儀に候。然者最早殺害など被申付事に而無之候。但其挨拶は追而申達候はんと存候旨申聞、源兵衛は相返し候。扨三日朝拙宅へ與三右衛門被罷越、右源兵衛口上之趣被申聞、殺害迄には及申間敷事に候。先達而内藏助挨拶も有之、事濟申候。然共其砌急度申付樣有之と一言被申候は、殺害可申付旨存候与申存寄に而候由。其一言も候故、達而其心得与相聞え候。内藏助殿へ少々内緣有之、心安き樣子に候條、與三右衛門存寄申達、首尾調申度候。其儀相濟候上に、使者被差越候挨拶旁、此方より使者遣申度旨申聞候故、安き挨拶に候、罷越可申達旨申入置候。扨内藏助殿へ罷越、段々おもはくも承り、與三右衛門存寄も申述候所、彼場に而御約束も申入置候程に存候故、是非とも殺害可申付与存、縮も申付候得ども、如此段々被仰聞候うへに候間、其所は一等宥免相加、先縮は可申付置候。此段與三右衛門へ宜敷申入候樣に仕度候旨申聞候。追而は如何樣に候共、先閉門可申付哉与、是は内藏助示談有之候に付、私存寄は、閉門与申儀不入ものと存候。蟄居・閉門と候へば、赦免之期も有之樣に相聞え、如何に御座候。殺害を一等宥免と候へば、永く縮被仰付置候程相應之事は無之歟と存候旨申入候へば、能合點に而尤に存候旨被申聞候。則即日其趣與三右衛門へ申達、與三右衛門よりも使者を以挨拶申述、事濟候。

九月二日。横山大和守指扣を命ぜらる。

〔政隣記〕

九月二日於金澤左之通。

横山大和守貴林

思召御座候間指扣被仰付旨、従江戸被仰下候旨、大組頭兼御近習野村七兵衛・御表小將横目服部五郎左衛門、大和守宅ゟ罷越被仰出之趣相含候に付、委細不知。右に付組者村井主膳支配之、御城代者本多安房守一人に而被相勤筈也。

九月四日。前田吉徳江戸を發し十六日金澤に着す。

〔政隣記〕

九月四日江戸御發駕、同十六日辰五刻御歸城。公儀ゟ御禮之御使者多賀宇兵衛同日發足。但十五日迄御忌に候得共、追而趣有之、十六日迄御忌中与相成候に付、十七日發足之旨に而御使勤之。

但、御内用有之に付、御暇より三十日過候得共、來月初迄四・五日御發駕御延引に成度旨、

八月廿三日御用番ゟ以御番御届有之。

九月六日。大聖寺侯前田利章卒す。

常五郎は利章の子前田信成

圓通院は前田利直

〔政隣記〕

一、備後守樣利章公、八月廿九日より御滯之處、急御指重に而御座候由、御道中信州丹波島御晝休江申來、大聖寺江之御見廻御使御近習物頭丹羽澤右衛門九月九日也。江被仰渡、早打に而發出。同日善光寺迄當六日御卒去之旨申來、御聞懸御悔之御使番遠田伊織、是又早打に而大聖寺江被遣。兩人共判金一枚・御羽織一宛、澤右衛門江は爲御內々金十兩被下之。

一、金澤より御大小將宮崎清右衛門大聖寺江罷越、御樣躰相伺、御途中迄早打に而罷越可申上旨、六日月番前田對馬守殿被申渡。同夜金澤出立、大聖寺江罷越、夫より九日善光寺に而御樣躰申上。

一、御卒去之儀金澤江相聞、御大小將田尻吉太夫大聖寺へ罷越、常五郎殿初御樣躰相伺、御途中迄可申上旨、七日に對馬守殿被申渡。同日大聖寺江罷越、尤早打に而十日朝信州野尻に而申上。

一、御卒去に付、御先手物頭前波和兵衛大聖寺江可罷越旨被仰渡、足輕三人相渡召連、九日金澤發出罷越。於大聖寺町宿相定罷在、若あなた御家老中及示談候筋も有之候者、間有之時者金澤江申越、年寄中指圖次第、指急申品者存寄之通申談候等之由。

圓通院樣御卒去之節、物頭郡彌三兵衛罷越例也。但、彌三兵衛者御關所江も折々廻申候處、

造酒丞は前田利道

此度和兵衛者御闕所ゟ廻り候に者不及旨被仰渡。御歸國之上、和兵衛可罷歸旨被仰出候段、大聖寺ゟ申來、金澤ゟ歸候事。

一、御氣滯之儀、江戸ゟ者十一日に相聞、御醫師長尾文哲老御在所ゟ被參候儀、前田丹後守殿を以從備後守樣御願之處、御願之通同日被仰出、文哲老十四日朝發足之筈に候處、御卒去之儀十三日夜相知、文哲老不及發足、十四日朝御卒去之儀出雲守樣御用番御宅ゟ御出御屆被成候。但實者六日御卒去に候得共、御首尾有之、七日御卒去と御屆被成候事。

一、造酒丞樣・幸姬樣ゟ御悔之御使、御大小將國澤彌兵衛ゟ、信州牟禮於御泊九日夜被仰渡、十日罷立、十四日江戸着御使勤、十六日發足歸。

一、江戸御邸普請鳴物御忌之内相、鳴物者御忌明候而も五日許相候樣前田將監申談。於金澤鳴物者六日より十日迄日數五日、不押立普請は三日、諸殺生者十五日迄可爲遠慮旨御觸有之。

一、御法號正智院殿前備州太守從四位下廓山泰然大居士。御年四十七、大聖寺實性院に被葬之。

十八日御葬式に付御馬廻頭和田采女、從槃姬樣物頭澤平次右衛門（御先手）御先手被遣。廿一日御法事に付御代香御馬廻頭丹羽武兵衛、從槃姬樣御先手原田又右衛門被遣。十月十日於寶圓寺御法事有之、中將樣御參詣。但御寺近に罷在者、鳴物等自分に一日可差扣旨御觸有之。

〔德川實紀〕

この利章、またこは宗家加賀守綱紀が四男にて、飛驒守利直がつぎこなり、寶永五年三月廿八日初見し、十二月十八日敍爵して備後守こ稱し、正德元年正月廿九日襲封し、享保元年十二月十八日從四位下に敍し、ことし九月七日四十七歲にて失せぬ。

九月十六日。德川吉宗使を前田吉德・宗辰に遣はして前田利章の卒去を弔す。

〔德川實紀〕

九月十六日。江戶に於て松平備後守利章身まかりしかば、驛使もて宗家加賀守吉德を御たづねあり。松平佐渡守宗辰には、奏者番丹羽和泉守薰氏して弔慰の御使あり。

〔政隣記〕

九月十六日於江戶、備後守樣御卒去に付爲御悔、佐渡守樣𠂊上使御奏者番丹羽和泉守殿御出、御作法前々之通、尤御茶不出之。中將樣𠂊者御用番本多中務大輔殿御宅𠂊問番被召呼、中村助右衛門罷出候處、御奉書相渡、早飛脚を以差上之。御奉書に候間、半足輕迄に而者如何こ之僉議に而、小頭差添候事。

前々ケ樣之儀御奉書有之節者、此方樣之儀以宿繼被遣候處、御先格こ違候趣、本多殿役人

九月七日は屆出の日なるべし

迄助右衛門段々申達置候由。

右以御奉書御機嫌御尋之御禮使、御馬廻頭伊藤彦兵衛、今月廿五日金澤發足、十月廿五日歸着。

十月十三日、茶道頭山家宗佐投獄せられ次いで能登に流さる。

〔政隣記〕

十月十三日御茶堂頭山家宗佐御吟味之品有之、公事場牢揚屋に入。宗佐儀御茶堂頭に而、御近邊に拘り候御用をも相勤候處、於江戸賤仕沙汰有之候得共、右勤柄之者故に候哉、御近習遠田勘右衛門・丹羽淳右衛門、同御横目篠田新左衛門を以御吟味、閏十二月廿八日能州嶋に流刑被仰付、御表向之不及沙汰に、御憐愍と云々。右に付宗佐兒御茶堂役市井友佐遠慮仰付、曾有之御免。

十月十五日。御馬廻組杉野善兵衛の弟磯太夫若黨を殺さんとして果さず

〔溪新秘策〕

一、十月十五日八時分、御馬廻土肥庄兵衛組杉野善兵衛三百石弟磯太夫儀、善兵衛若黨小村宅右衛門と申者、不屆有之由に而手討に仕候處、少々傷付候而宅より逃出候。善兵衛宅は小立野石引町後に而候。右宅右衛門は無刀、磯太夫は脇刺迄に而追懸候所、石引町之商家へ逃入

候。其所に而切懸候所、桁へ切込候。其内に宅右衛門又逃出、見失候故、磯太夫は宅へ歸申候。善兵衛其内は遠方へ行歩に罷出候に付、此段先へ案内仕候。夜に入罷歸候旨。右宅右衛門は、安房守殿下屋敷之内にをひ有之、本多賴母殿中小將北村久左衛門与申者之家へ逃入罷在候。其夜善兵衛方より、宅右衛門儀請取可申旨に而小者指越候。久左衛門申候は、手負候上、遠方こゝかしこかけ廻候而、ここの外つかれ申候。夫共疵付候ものに候へば任仰指進可申儀に候へども、小者体不憶成ものへは何とも相渡難申候旨申含、右小者は相返し候。扨善兵衛儀夜中組頭庄兵衛宅へ罷越、弟磯太夫手討之趣申達、宅右衛門引取殺害可仕旨及相談候所に、何とぞ下に而事濟候樣に取計可然旨、取次を以申聞候。頃日瘧相煩引籠罷在候旨申立、善兵衛へ逢不申。善兵衛儀、下に而事濟し申仕樣合點不參候。是非引取殺害爲仕度と申候得共、達而下に而相濟候樣にと庄兵衛指圖に付、其夜は其分に罷成申候。十六日久左衛門宅に迄、善兵衛より申越候は、宅右衛門請取申儀は、兩請人へ申渡候。請人罷越候はゞ可相渡旨申來候。然共終日請人不罷越候。庄兵衛病中に付、丹羽武兵衛を以、善兵衛願書付は年寄衆迄指出申候。其趣は、若黨北村宅右衛門儀、弟磯太夫手打損じ疵付候間、右宅右衛門儀召捕殺害仕度候旨書付出候。御用番前田土佐守殿御請取置候。未被仰渡内十七日に及候而、磯太夫書付一通是又武兵衛持參差上、土佐守殿御請取置候。其書付之趣は、善兵衛若黨北村宅右衛門

儀、不屆之儀有之手討に仕度、一端疵付候得共手討仕損申候。必可致殺害ほどの儀に而も無御座候。兄善兵衞家來之儀に而も御座候。常々厄介にも預り罷在候事にも御座候。旁右宅右衞門其分に仕免仕度と申趣に候。御同列之内いづれも被申候は、磯太夫書付之趣何とも始終難心得、手ぬるき事共に相聞候、其上浪人無息之者之書付差上申例も無御座事に候。善兵衞願之筋迄に而事濟可申儀に候。磯太夫書付は被相返可然哉との儀に付、土佐守殿より武兵衞御呼寄之段御申述、磯太夫書付御返被成處、武兵衞申候には、磯太夫申聞之儀も一理有之事与存指上申候。凡手討など申事は、一旦之念に而仕申事に御座候得ども、一時間有之候へば心氣も鎭り、忿相止候へば其分之事与奉存候。是非殺害仕度と申筋でも無御座候に付、取次差上申候間、御聞届被下度旨達而申候へども、いづれも合點難被成候。其上無息之者、直書付上り申例も無之旨再三被仰含候所、左候はゞ兄善兵衞書付共に可被下旨申に付、其段者格別之儀にて、兩通共武兵衞ゟ御渡候。扨十七日に及候へ共、久左衞門宅に宅右衞門罷在、埒明不申候。如此に候而は不埒成ものに付、頼母殿より土肥庄兵衞へ迄紙面被遣、慥成者指越請取候樣に、庄兵衞より申渡候樣に仕可然旨御申遣候筈に而、其趣罷成候所、善兵衞方より慥成者共差越候而渡遣候故、庄兵衞ゟ之書狀は被相止候。扨土佐守殿被仰含候趣、武兵衞申談候所、善兵衞書付は其儘差上。磯太夫願之趣は不相止、庄兵衞承屆候而其趣紙面を以相願

候。兎角庄兵衛・武兵衛両人迄示談之体に付、如此に候。同役中不残料簡も承合候はゞ、慥に其内にには此通にには無之存寄も可有之候間、いづれも承合、其料簡を以重而被相願候様にこの御年寄衆御示談に候所、御馬廻頭之内由比五郎左衛門・入江八郎左衛門は、病氣に而引籠罷在候。溝口舍人・松原善右衛門は江戸ゟ御使に罷在不在合候。同役戸田靱負・和田采女・伊藤彥兵衛等俄に庄兵衛宅ゟ寄合、逐相談候得共、外之料簡は無之、磯太夫之趣も一理有之儀に付、庄兵衛・武兵衛先達而申上候通りに何も存寄候由、紙面を以申述候由。扨此最中に、十八日組外宮川安右衛門儀、兼而右磯太夫を聟養子に奉願置候。然共此度家來手討之始末、何とも安右衛門心底に難叶候。ヶ樣之もの養子に可仕存寄無御座候。一度願書付上置候得ども、御斷申上候旨に而書付出之。御番頭江守角左衛門承屆、尤に存候に付、十八日願書付上之候。一統養子緣組願之儀、十九日に被仰渡候筈に而、安右衛門願も願之通被仰出候由候得ども、遮而御斷之書付差上申候に付、尤に被思召候旨被仰渡候。扨善兵衛願紙面、勝手次第に可仕旨被仰出候。磯太夫儀に付被仰出候は、此度手討之首尾不埒に候。老母取さへ候故仕損申旨申上候儀も、御合點不參候。磯太夫儀御知行も被下置候者に候はゞ、急度可被仰付筋も候得共、畢竟無息之ものゝ儀に候へば、不及御頓着候。疵付候若黨北村宅右衛門事は、頭共料簡次第に可仕旨被仰出候。武兵衛事士佐守殿へ御尋申候は、頭共料簡次第に可仕と被仰出候。是は

實林院は前田綱紀の女敬姬正智院は大聖寺侯前田利章

造酒丞は前田利道

殺害仕候而可然可有御座候哉。又は宥免仕可然可有御座候哉与相窺申候所に、爲其頭共料簡次第と被仰出候得者、手前共指圖に不及候旨被申聞候。庄兵衛与示談之上、宅右衛門呼出し、士中へ奉公之儀者構候而暇申渡候由。

十月廿三日。使を日光に遣はして前田宗辰の任官を謝せしむ。

〔政隣記〕

十月廿三日佐渡守樣御任官に付、日光御使前田將監、副使聞番井上三太夫ゟ、先達而御内意有之候處、實林院樣之御服、正智院樣之御服に而延引之處、昨廿二日御服明に付今日發足被仰付、御歩柘植覺太夫被差添、廿六日日光ゟ參着、翌廿七日夜同所出立、十一月二日江戸ゟ歸着、三太夫直に金澤ゟ歸。

十月廿七日。前田利道大聖寺侯前田利章の襲封を命ぜらる。

〔德川實紀〕

十月廿七日。加賀國大聖寺の城主松平備後守利章が遺領七萬石を、その子造酒丞利道につがしむ。

〔政隣記〕

十月廿七日造酒丞樣爲御名代、御一類之內今日晝時、御用番松平左近將監殿御宅ゟ御出候樣

申來、出雲守樣御越之處、備後守樣御家督無相違造酒丞樣ゟ御相續被仰出候段被仰渡。于時御五歳。依之御家督之御禮、十一月廿一日御名代出雲守樣被仰上。

右御祝儀之御使組外御番頭中孫丞、十一月十八日金澤發足。此御答禮御使者生駒萬兵衞金澤ゟ罷越、閏十一月八日登城、御進上御太刀馬代二種一荷。萬兵衞御目見被仰付。

出雲守は富山侯前田利隆

十月。能美郡粟津温泉の浴客より毎日錢一文を徴收することの許可を求む。

〔今江組巨細掌記〕

湯治人一文錢之事

私共在所に温泉御座候に付、諸方より湯入人罷越申候。就夫山中・山代には毎日湯入人相改、帳面に相記縮方致來り候。粟津村之儀御領境にも罷在候に付、右之通相改、彌不審者入込不申樣に仕度奉存候。則山中・山代には右相改申造用旁、湯入一人より一日に一文宛錢を申請、湯之本尊藥師之入用にも仕申候。私共在所之儀も、湯之本尊藥師之坊守折々中絶仕候儀、迷惑に奉存候に付、右之通相改申候はゞ、幸一文錢之儀は、藥師之坊守助成に爲致度奉存候。此段以後迄相縮、尤一文錢湯宿方ゟ引込不申樣、互に納得之上相極申候に付、此趣御聞屆被成置被下候樣奉願申候。爲其書付を以申上候、以上。

造用は雜用

元文二年十月

栗津村肝煎　次郎兵衛

組合頭　三郎兵衛

伊右衛門

源右衛門

徳兵衛

太郎兵衛

久三郎

善五郎

里兵衛

七左衛門

平右衛門

伊兵衛

文兵衛

今江村　源助殿

右私組下粟津村湯宿共善村之趣、畢竟御縮方にも罷成可申候間、向後此通相守候様可申渡候

哉奉寬候、以上。

今江村源助

關屋佐左衞門殿

林源太左衞門殿

表書之通見屆本文之通申付候條、御締方之儀猶更可申渡候、以上。

關屋佐左衞門　印

林源太左衞門　印

右一文錢中古山中・山代二文宛に相成候に付、粟津之儀も二文宛に致度与、大王寺より寺社御奉行所に相斷候由に而、天明七年より二文宛大王寺收納被致候由。

此の文本年十一月十五日の條の續なり

十一月六日。前田吉德、大槻朝元の邸に臨む。

〔淩新秘策〕

十一月六日、今年初而大豆田邊へ御鷹狩に、、八時過御出被成、七時半大槻宅へ被成御座、六時過迄御留座。是は婚禮前座敷之樣子爲御覽候由。老母御目見、御杯被下候由。御内々を以て金子百兩被下、内藏允にも三百兩被下候旨。内藏允、御箱肴幷水仙花一臺上之候旨也。

十一月八日。儉約勵行の爲屋根以外の修繕を廢し又賄の給付を停止すべ

此の文元文元年七月四日の條に續く
翌年は元文二年

きことを定む。

〔政隣記〕

十一月八日御儉約之儀段々御詮議有之、御作事方御修覆等も指止、三・四ヶ年之間は屋り迄御修覆、御賄之儀も相止候趣に被仰渡、江戸表ゟ左之通御月番以御紙面被仰渡。

今般重而御儉約之僉議有之候に付、御賄之儀一向相止申趣に候。乍然急御用等出來、翌日ゟは難相延儀に而、七時過迄も居延申儀有之候者、其節者御賄可有之事。

右之趣達御聽にも候條、只今迄御賄有之所々ゟ、各より可被申談候事。

巳十一月八日　本多安房守

御儉約奉行中

十一月十五日。大槻朝元、前田修理の女を娶る。

〔淡新秘策〕

内藏允緣者前田修理殿と相極め、間も無江戸表御發駕に付、江戸へ御供に罷越候。翌年九月御歸國之節致御供罷歸、十一月十五日致嫁娶候。修理殿子息大學殿より、此度嫁娶も萬端之取持菊池十六郎に賴被申候。十六郎は淺井源右衛門と實は同家に付、右修理殿娘は故源右衛門妻に候。此度緣者之内藏允者、源右衛門姉之夫に而、其妹を離別いたし置候而、源右衛門

此の文は本年十一月六日の條の續なり爲御祝は前田吉德よりなり

妻を其身再婚与有之儀、何こも可有事に而無之候。然共内藏允妻離別仕候時分、双方一家不遺存念、向後義絶には及申間敷と申含置候由に付、此度之取持も頼被申趣に候。乍然何とも難取持候に付、御馬廻頭戸田靱負を以、十六郎より取持等之儀斷に及候處、大學被申候は、此度御斷候趣に而は、去春内藏允妻離別仕候首尾に付、御心底被遺候事と存候。但左樣之事は無之哉と被申候。靱負申候は、遺念有之に而も無之とも無御座候。只何とも此度之御取持は難仕存候故、私を以御斷申入候旨申述候由。右嫁娶十五日より、十六郎并金森多門病氣申立引籠罷在候。十五日迎人は御近習頭中村次右門、送人は松平左京、廿一日聟入之日相伴は、御近習頭三輪藤兵衞并中村次右衞門父子・久保壽齋也。料理之節、出料刀は奥村彈正、脇刺は奥村内膳。大學殿より脇指被出、松平左京持參。但此脇刺は、先祖以來什物來國光之由被申述候。内藏允罷越候節、大學には玄關敷付へ迄爲迎被罷候由。萬端之崇敬準之候事。御家中少も有心輩者、賀儀に不罷越候由。

〔浚新秘策〕

同月十五日婚禮相濟候後、爲御祝、内藏允に御樽代千匹・御餌柄雁児、母に御樽代五百匹、妻に綿十把、此外爲用意、燭臺十本・膳部百人前被下候。將又前田修理父子にも絹三十疋被下、内藏允より内々より遺候旨、風聞に候。

十五日夜中、何ものゝ仕候哉、内藏允長屋腰板に狂歌二首落書仕置候旨。其二首者、

やれも味噌こるは猶味噌やるも味噌是ぞ三々九さり味噌也

まへ田家に修理を加へん老い身いなごむすめには恥を大學

松平左京跡乘仕候事を狂歌に、

跡乘で今や加増を松平座輿でもなく無興なりけり

如此に而嫁娶相濟、一年半計にて女子出生、其上に修理女は病死に候事。

十一月廿七日。金澤の東南空に赤氣を望む。

〔護國公年表〕

一、十一月二十七日曉金澤に而、東南之方甚赤候事如朱に而、西北へも相照候。二十八・九日も日出之頃赤氣不常候。二十九日未時より南風烈敷、初夜頃に相止候。此風之兆に而候哉と申候所、風後も赤氣止不申、次第に和暖に成候而、二十五・六日前より雪五・六寸も積候所皆消失候。山々之雪も段々消候。閏十一月十五日寒に入候所、次第に和暖に成て、氣二・三月頃之樣に成、蚊・蛆も粗出、蛙出聲候。遠山之内戸室・育王山等も雪消候。二十二日又南風烈、晝夜大雨に候所、夜四つ時前流星の光甚照地、其聲如雷候。二十三日・四日・五日天日氣能、二十六日雨後に雪降、夜中二寸許。

午は元文三年

右之趣に候所、今月四日京都には雪五・六寸降申旨、十日之使に申來候。去月二十七日以來曉東南赤氣出申事は、上方筋は別而甚敷候旨也。私記江戸も曉天赤氣甚敷候。金昌。江戸表は十二月末に桃花盛に咲候。京邊正月初桒花正開、金澤は午の正月半頃桃花も催、櫻咲候所も所々に有之候。

十一月廿八日。德川吉宗、前田宗辰に初めて雁を贈る。

〔政隣記〕

十一月廿八日佐渡守様へ、上使御使番佐野吉允殿を以、初而御鷹之雁二御拜領。上使之御先へ御鳥來、於御玄關御番頭並堀只右衛門に、御抱守奥村五左衛門相加り受取之、御廣間へ持參。差續上使御出有之、佐渡守様敷附迄御出迎、御廣間へ御誘引、上意御拜聽、雁御頂戴、御勝手へ引之。御料理御斷、御菓子等出、御盃事被遊、畢而御請相濟、御退出。右御禮御登城之筈に候得共、七時頃に成候故、御老中迄御勤、出雲守様御同道也。從御前右御禮使者御馬廻組栂織人、閏十一月十三日金澤發、廿四日江戸着、十二月五日江戸發歸。

一、右御披、於江戸十二月二日出雲守様等御招請、御盃事之内小謡、依御所望一調仕舞等被仰付。右雁、中將様へ御取分被上之候に付、十二月廿五日御頂戴、御下若年寄以上へ、松之御間・二之間に而被下之、御意之趣遠田勘右衛門申述、御菓子・雁・御吸物被下之、給事新番。

但、御酒之内御近習頭丹羽澤右衛門勤之。

十二月十五日。櫻町天皇の女御皇女を生み給ひしを以て賀使を派遣す。

女御は前田綱紀の孫永君

〔政隣記〕

十二月十五日女御門十一月十一日午刻御平産、姫宮御降誕之儀、十五日金澤江告來。爲御祝儀京都江之御使、御先手前波和兵衛被仰付、今日金澤發足。

右姫宮稚女、一宮様与可奉稱之處、思召御座候而美喜姫様与可奉稱旨被仰出。

附録年表

正徳四年　甲午　　皇紀二三七四

正　月　○朔日前田綱紀朝服を着けて年寄中諸大夫たるものの年賀を受く。(一)
○廿八日大聖寺侯前田利章金澤城に登る。(一)

二　月　○七日富山城の本丸災に罹る。(二)
○廿一日金澤城に於いて將軍宣下祝賀の爲能を張行す。(二)
○廿九日前田利長の百回忌法會終りたるを以て金澤城に能を張行し諸寺の住僧を招請す。(三)
○一季居奉公人缺乏するを以て町方等に仕して之に適するものを調査し屆出でしむ。(三)

三　月　○朔日金澤城橋爪門内の御厩飼料所に放火せしものあり。(五)
○八日前田綱紀他國に派遣する諸士の出發前その勤番を缺くことなからしむ。(七)
○十一日前田綱紀家老前田修理等を遣はして去年大聖寺藩動搖の善後策を講ぜしむ。(七)

四　月　○十五日前田綱紀養女壽姫金澤を發して京都に上り次いで西三條公福に嫁す。(八)

六　月　○二日出銀奉行岸村豐太夫公金を費消したるを以て自殺す。(九)
○十六日前田吉德夫人袖留の儀を行ふ。(一〇)
○廿一日德川家繼使者をして前田綱紀及び吉德の暑候を問はしむ。(一一)

七　月　○二日江戸にて諸士の使役する家來の取扱に關する心得を諭す。(一二)
○十日加賀藩の士伊藤平右衛門等、大聖寺藩家中動搖の善後策を講じてこの日金澤に歸る。(一三)
○十八日前田綱紀金澤を發して江戸に向ふ。(一三)

八　月　○十一日前田綱紀登營して參覲の禮を行ふ。(一三)

十　月　○二十日富山侯前田利興の江戸邸長屋類燒す。(一四)
○廿一日江戸邸に於いて三笠附をなし、酒食を賣り又は質物を取るを禁ず。(一四)

十二月　○二日琉球人來るを以て前田吉德江戸城に登る。(一五)
○十一日德川家繼使者を以て前田綱紀及び吉德の寒中の安を問はしむ。(一六)
○十六日米價下直なるを以て會所銀を借用する諸士の返濟期限を緩にするを許す。(一六)

〇廿九日兒島平兵衛を綠して加賀藩の儒者たらしむ。(一六)

正德五年　乙未　皇紀二三七五

正月 〇十二日越中境奉行に命じて支配所內の百姓にして長く領外に留まるものを調査召還せしむ。(一七)
〇廿四日加賀藩の專賣する食鹽の代價を引上げしむ。(一八)
〇每日江戸中荷持及び三度飛脚以外、別に金澤の町人木屋八兵衛等をして飛脚業を開始せしむべきことを稟請す。(一八)

二月 〇八日前田利當の女熊姫逝去す。(二〇)

三月 〇二日能登より加賀及び越中に廻漕する鹽の運賃を增額下附することを命ず。(二〇)
〇十四日越中境奉行に金澤木屋平兵衛等の自今江戸中荷持たるべきを告ぐ。(二一)
〇廿二日江戸中荷持の每月差立期日を定む。(二三)

四月 〇朔日能大夫諸橋權進服忌なるを以て今明日恒例の觀音院の能を停む。(二三)
〇十三日今日以後金澤城內權現堂に東照權現百回忌の法會を營む。(二四)
〇十七日東照權現百回忌に當るを以て前田吉德日光山に代參せしめ、自から上野の靈廟に詣づ。(二四)
〇十八日前田綱紀及び吉德、德川家繼に謁して日光山の法會終れることを賀す。(二五)

五月 〇朔日前田綱紀右大臣二條綱平を江戸の藩邸に請ふ。(二六)
〇六日前田綱紀二條綱平を江戸邸に招請す。(二六)

六月 〇廿五日德川家繼使者を以て前田綱紀及び吉德の暑中の安を訪ふ。(二八)

七月 〇廿八日前田綱紀及び大聖寺侯前田利章就封の暇を受く。(二八)

八月 〇廿二日物價高直なるを以て江戸詰の諸士に歸國後扶持方を增給すべきを告ぐ。(二九)
〇廿六日越中境奉行に江戸中荷持の廢業することを告ぐ。(三〇)

九月 〇四日前田綱紀江戸を發して歸國の途に就く。(三一)
〇七日前田吉德、德川家繼の病癒えたるを賀して物を獻る。(三一)
〇十六日前田綱紀、德川家繼の病癒えたるを賀して物を獻る。(三一)
〇十九日大聖寺侯前田利章歸封の途金澤城に立寄る。(三一)

十月 〇四日領國內の物價を低下せしむべきを諭す。(三一)
〇十七日金澤の魚問屋等藩侯所用の魚介を支障なからしむべく越中・能登の諸浦に令せんことを請ふ。(三三)

○二十日百姓の衣服器物を質素ならしむべきことを令す。(三五)

○廿四日三笠附を禁ずる幕府の令を領內に傳ふ。(三七)

十一月 ○諸士の放鷹によりて鶴及び白鳥を捕ふべからざるを告ぐ。(三八)

十二月 ○十二日扶持米を受くるものに賜はる屋敷の面積に關して答申す。(三八)

○十六日前田綱紀神道者田中左源太及び儒者中泉逸角をして書を講ぜしむ。(三九)

○十八日前田綱紀の家臣一人を叙爵すべき命を受く。(四〇)

○廿三日德川家繼使者を以て前田綱紀及び吉德の寒中の安を訪はしむ。(四一)

○晦日元大聖寺藩家老神谷內膳隱居を命ぜられ子太郎助加賀藩に仕へて寄合組に加へらる。(四一)

享保元年 丙申 皇紀二三七六

正月 ○晦日犯罪者逮捕に關する從來の手續を改むることを命ず。(四二)

○晦日今年金澤大雪なるを以て乘物を用ふるを許す。(四三)

二月 ○十八日商品の價格を廉ならしめ其在荷を潤澤にすべきを命す。(四三)

三月 ○十五日前田綱紀その女豐姫を訪ふ。(四七)

四月 ○十四日金澤の刀鍛冶等藩有山林の下伐を許されんことを請ふ。(四七)

○十六日 金澤城內にある東照宮の社僧等その祭儀に關して答申す。(四八)

五月 ○朔日前田吉德登營して德川家繼の昨日薨去したることを告げらる。(五〇)

○二日德川吉宗を上樣と稱すべきを告げらる。(五一)

○四日德川家繼薨去の報金澤に達す。(五一)

○五日金澤に於いて諸士に德川家繼の薨去を告ぐ。(五一)

六月 ○六日前田綱紀、德川家繼の喪終れるを以て月代を剃ることを許さる。(五二)

○七日前田吉德老中井上河內守の第に至りて新將軍德川吉宗に誓書を上つる。(五三)

○廿四日 前田綱紀・吉德前將軍德川家繼の遺物を受く。(五三)

○廿七日前田吉德登營して德川吉宗に物を献る。(五四)

七月 ○朔日江戶に於いて改元の令を傳ふ。(五四)

○朔日前田綱紀老臣等を召して新たに誓書を上つらしめ、又施政の方針を諭す。(五四)

○五日大阪に於ける加賀藩の貯藏米六萬五千石燒失

す。(五七)

○十四日石川郡宮腰に災あり。(五七)

○十八日前田綱紀金澤を發して參覲の途に就く。(五八)

○廿一日幕府加賀藩等の巡國使を命す。(五八)

○廿八日大聖寺侯前田利章登營して參覲の禮を行ふ。(五八)

八月 ○九日前田綱紀登營して參覲の禮を行ふ。(五九)

○十二日山本源右衞門江戸に召されたるを謝するの書を前田綱紀に上つる。(五九)

○十三日徳川吉宗將軍宣下の事あるを以て前田吉德江戸城に登る。(六〇)

○廿一日前田綱紀、内大臣二條綱平をその邸に招請す。(六〇)

○廿八日座頭等その施物を受くる場合等に關し請書を提出す。(六一)

○廿九日猿の出沒するものあるを以て之が撲殺を命す。(六二)

九月 ○二日前田綱紀及び吉德に新將軍宣下の祝儀として刀を贈らる。(六三)

○十四日山本三河、京都土御門家より加賀・能登・越中に於ける陰陽師の小頭を命ぜらる。(六四)

○十九日前田綱紀新將軍徳川吉宗に誓詞を上つる。(六七)

○廿四日河北郡の十村等郡内の鑛山に關して答申す。(六七)

○廿五日前田綱紀使を京都に遣はして女御の入内を賀せしむ。(六八)

十月 ○石川郡の十村等郡内の鑛山に關して答申す。(六八)

十一月 ○十日物價高貴なるを以て諸士に勤儉を守らしむ。(六九)

○廿一日今日以後前田綱紀、將軍宣下祝賀の爲老中等を招待す。(七一)

十二月 ○九日徳川吉宗使者を派して前田綱紀及び吉德に寒中の安を訪ふ。(七二)

○鳳至郡甲村に疫癘流行す。(七二)

是歲 ○小身の諸士鷹を飼ふことを禁す。(七三)

享保二年　丁酉　皇紀二三七七

正月 ○朔日前田綱紀登營して新年を賀す。(七三)

○廿二日江戸に於いて大聖寺侯前田利章の消防夫、仙石兵庫の消防夫と爭鬪す。(七四)

二月 ○十日宿驛に立つる高札の文字不鮮明なるものを改めしむ。(七五)

○十三日金澤下近江町に災あり。(七六)

○加賀藩領内の高辻張を幕府に上つる。(七六)

○非人小屋の收容人數減少して千百餘人となる。

(八一)

三月 ○十一日前田吉德登營して武家法度を閲覽す。(八一)

四月 ○廿五日幕府の巡國使鳥井權佐等金澤に着す。(八二)

○加賀藩より八丈島に於ける宇喜多氏一族に贈與する物品の種類を幕府に屆出づ。(八三)

五月 ○十九日前田綱紀初めて德川吉宗の放鷹によりて獲たる梅首鷄を受く。(九二)

六月 ○十二日大聖寺侯前田利章江戸に於いて防火の功を賞せらる。(九三)

○金澤に於いて家中の士の猥に夜行するを禁ず。(九三)

七月 ○廿七日前田綱紀就封の暇を受く。(九四)

○廿八日前田綱紀登營して就封の辭見す。(九四)

○廿八日金澤に火災あり。(九五)

九月 ○十二日前田吉德、綱紀に代りて江戸城に上り封國の判物を受く。(九六)

○廿一日前田綱紀歸國の際木曾路より京都に赴くべきことを告ぐ。(九六)

○廿三日前田綱紀に從ひ木曾路を經て歸國する諸士の旅費增給を出願するものを戒む。(九七)

○廿三日歸國の際具足櫃等を運搬するものゝ杖を突くことを許す。(九八)

○廿四日大聖寺侯前田利章木曾路を經て歸國す。(九八)

○廿四日歸國の際家中の使用する人馬及び宿舍に關する心得を令す。(九九)

○廿七日前田綱紀江戸を發し武藏桶川に着す。(一〇〇)

○廿八日前田綱紀武藏桶川を發し同國本庄に着す。(一〇一)

○廿九日前田綱紀武藏本庄を發して上野坂本に着す。(一〇一)

十月 ○朔日前田綱紀上野坂本を發し信濃望月に着す。(一〇二)

○二日前田綱紀信濃望月を發し同國下諏訪に着す。(一〇三)

○三日前田綱紀信濃下諏訪を發して同國藪原に着す。(一〇三)

○四日前田綱紀信濃藪原を發し福島の關門を經て同國野尻に着す。(一〇四)

○五日前田綱紀信濃野尻を發し美濃中津川に着す。(一〇九)

○六日前田綱紀美濃中津川を發して同國御嵩に着す。(一〇九)

○七日前田綱紀美濃御嵩を發し同國赤坂に着す。(一一一)

○八日前田綱紀美濃赤坂を發し近江木本に着す。

（一二四）

○九日前田綱紀近江木本を發し越前今庄に着す。（一二六）

○十日前田綱紀越前今庄を發し同國金津に着す。（一二八）

○十一日前田綱紀越前金津を發して加賀小松に着す。（一二八）

○十二日前田綱紀加賀小松を發し松任に着す。（一三一）

○十三日前田綱紀加賀松任を發して金澤に歸城す。（一三一）

十一月　○六日幕府先に德川吉宗の前田綱紀に賜ひたる鷹を交附す。（一三三）

十二月　○廿一日德川吉宗、前田綱紀及び吉德の寒中の起居を存問す。（一三三）

享保三年　戊戌　皇紀二三七八

正　月　○廿七日石川・河北二郡の駒寄を命す。（一三四）

○封銀に贋銀を混じたる者あるを以て公事場に於いて吟味せしむ。（一三五）

二　月　○十二日河北郡二俣村去年災に罹るを以て建築用の松材下附を出願す。（一三五）

○十九日家中無用の會合を行ふことを禁す。（一三六）

○晦日羽咋郡大念寺新村の百姓に銀米を課せんことを議す。（一三七）

○晦日金澤附近にて網を張り小鳥を捕ふることを禁す。（一三〇）

四　月　○二日幕府加賀・越中より望み得る隣國の高山を調査して屆出でしむ。（一三二）

○六日金澤小立野に火を失し、如來寺・經王寺等類燒す。（一三二）

○七日齋藤久右衞門、弟子永島長藏を殺害せんと請ひたるを許す。（一三四）

○十一日前田綱紀及び吉德、柳營に於いてその刀持を玄關式臺に上らしむることを許さる。（一三五）

○十八日加州郡奉行等草多の爭議に關して決裁したる結果を通牒す。（一三五）

六　月　○廿一日參覲に供奉する近習の士に奧納戸銀の借用を許す。（一三七）

○廿二日加賀諸郡に令し疫癘流行の村名及びその死亡せる人數を屆出でしむ。（一三八）

○八丈島の宇喜多氏一族より去年合力米を受けたる謝狀及び今年更にこの贈與を請ふの書到着す。（一三八）

七　月　○十六日前田綱紀金澤を發して參覲の途に就く。（一四一）

○前田綱紀參覲の途、越中新川郡泊町が海波の爲に侵さるゝを以てその位置を轉することを許す。（一四二）

八　月　○十日神谷太郎助藩の老臣に屋敷の下附を請ひその

許可を得たるを以て奉行等手續の不當を議す。(一四二)

○廿八日前田綱紀江戸城に登りて參覲の禮を行ふ。(一四三)

十　月　○三日前田綱紀、德川吉宗に陪して蹴鞠を觀る。(一四四)

○五日前田綱紀の女豐姫逝去す。(一四四)

閏十月　○廿八日幕府新金銀の通用を令す。(一四五)

十二月　○三日德川吉宗使者を遣して前田綱紀及び吉德の寒候を問はしむ。(一五〇)

是　歲　○物價貴きを以て江戸詰の近習に御納戸銀の借用を許す。(一五〇)

享保四年　己亥　皇紀二三七九

正　月　○十六日江戸に於ける割場の規程を定む。(一五〇)

○耕稼春秋の著者土屋又三郎歿す。(一五二)

二　月　○廿二日金澤に於いて銀座福久屋新右衞門・紙屋又兵衞等禁牢に處せらる。(一五三)

三　月　○四日前田吉德江戸の郊外平尾に放鷹す。(一五五)

○四日前田綱紀、京極式部卿家仁親王の江戸下向に際し之を訪問すべきことを幕府に屆出づ。(一五六)

○十五日前田綱紀江戸城に登り德川吉宗の男兒を擧げたるを祝す。(一五七)

○十五日前田綱紀、前大納言中院通躬を本鄉邸に招請す。(一五七)

○十六日左大臣二條綱平本鄉邸に臨む。(一五八)

○廿一日前田綱紀及び吉德、德川吉宗の男兒の出生七夜を祝して物を上つる。(一六一)

○廿一日家中通稱を源藏といふものを改めしむ。(一六一)

○廿四日前田綱紀の養女誠姫逝去す。(一六二)

四　月　○四日羽咋・鹿島二郡の紺問屋を增し中買等の取締を嚴にせしむ。(一六三)

○廿四日侍從四辻實長使を江戸に遣はして前田綱紀の合力米を贈れるを謝せしむ。(一六四)

○廿四日能登の郡奉行等本年小物成の增額徵收の可能なることを上申す。(一六四)

○晦日石川・河北二郡の豆腐營業に關して上申す。(一六五)

五　月　○廿六日江戸に於いて永井七郎右衞門等朝鮮來聘使迎人馬御用を命ぜらる。(一六六)

○廿七日江戸に於いて山口武太夫等朝鮮來聘使迎御用を命ぜらる。(一六六)

○廿九日江戸に於いて星野九右衞門等朝鮮來聘使迎御用を命ぜらる。(一六七)

六　月　○二日朝鮮使節來聘に付き遠江及び江戸に派遣を命ぜらる丶足輕・小者等の數を定む。(一六七)

○四日金澤に於いて橫目里見孫太夫に遠江舞坂へ出

發の準備を命ず。(一六八)

七　月　○廿二日今年徵收する夫銀の增額を命ず。(一六九)

○廿七日前田綱紀就封の暇を受く。(一七〇)

○廿八日大聖寺侯前田利章就封の辭見す。(一七〇)

八　月　○四日朝鮮來聘使迎御用永井七郎右衞門等江戶を發す。(一七一)

○廿五日前田綱紀就封の暇を得たるを以て登營辭見す。(一七二)

九　月　○十一日前田綱紀、稻生宣義編する所の庶物類纂を幕府に獻ず。(一七三)

○廿七日前田綱紀・吉德共に朝鮮來聘使の到着を淺草に觀る。(一七四)

十　月　○十二日前田吉德朝鮮人の曲馬を對馬侯宗義誠の邸に觀る。(一七五)

○十五日朝鮮來聘使歸途に就くを以て前田綱紀の女節姬等之を淺草に觀る。(一七六)

○十七日加賀藩の里子と幕府の上り者との比較に付き答申す。(一七六)

十一月　○四日前田綱紀歸國の期を延ぶることを許さる。(一七七)

十二月　○九日前田吉德登營して德川吉宗より朝鮮の黃鷹を贈らる。(一七八)

享保五年　庚子　皇紀二三八〇

正　月　○朔日前田綱紀疾むを以て使を遣はして登營新正を賀せしむ。(一七九)

○十九日幕府の老中を諸侯の訪ひたる際に於ける取次の慣習を前田綱紀に答申す。(一七九)

二　月　○二日前田綱紀使を京都に遣はして皇子の降誕を賀し奉らしむ。(一八〇)

○四日十村等松の木を盜伐せし者に對する處分の慣例を答申す。(一八一)

○六日家中の士、百姓より徵する夫銀を元祿九年前の額に復せしむ。(一八二)

○七日前田吉德夫人、辰松八郎兵衞の操人形を見る。(一八三)

○十日領國内に住する刀鍛冶の人別を幕府に屆出づ。(一八三)

○廿六日前田綱紀、品川東海寺の住僧を江戶駒込邸に招請す。(一八六)

三　月　○四日前田綱紀、萬福寺獨文和尙を本鄕邸に招請す。(一八七)

○十日前田綱紀使を京都に遣はして女御の崩御を弔せしむ。(一八七)

○廿七日前田綱紀、本鄕邸附近延燒するを以て消防の事に從ふ。この日富山侯前田利興の下邸亦火く。(一八八)

四月　○二日前田綱紀江戸を發し京都に向ふ。(一八九)
○三日前田綱紀桶川驛を發し、十四日近江大津に着す。(一八九)
○七日金澤に於いて元祿銀等の通用は明年中を限るべき幕令を傳ふ。(一九五)
○十五日前田綱紀近江大津を發して京都に入り、十六日夜半退京して又大津に着す。(一九六)
○十八日前田綱紀近江大津を發し、廿三日金澤に歸城す。(二〇二)

五月　○十六日町奉行等茜染を專業とする茜屋理右衞門歿後の狀況を答申す。(二〇五)
○廿八日町奉行等雛人形の價格を制限したることを上申す。(二〇八)
○廿九日幕府前田綱紀の養女䋥姬を鶴岡侯世子酒井忠寄に嫁せしむることを許す。(二一〇)

六月　○廿一日淺野川出水し觀音山・愛宕山等崩壞す。(二一〇)

七月　○九日幕府大聖寺侯前田利章が參覲の期を延ぶることを許す。(二一一)
○十六日先に前田綱紀參覲の延期を請ふ爲發したる使者、許可を得て金澤に歸着す。(二一一)

八月　○十六日江戸に往復する飛脚業の沿革に關し上申す。(二一二)

九月　○二十日前田吉德夫人逝去す。(二一三)
○廿三日前田綱紀金澤を發して參覲の途に就く。(二一六)
○廿五日前田吉德夫人逝去の報金澤に達す。(二一七)

十月　○六日前田綱紀江戸に着す。(二一七)

十一月　○朔日大聖寺侯前田利章參覲の禮を行ふ。(二一八)

十二月　○廿八日前田綱紀參覲後初めて登營し德川吉宗に謁す。(二一八)
○廿八日前田綱紀、德川吉宗より鶴を賜らる。(二一九)

享保六年　辛丑　皇紀二三八一

正月　○朔日前田綱紀疾むを以て使者を登營せしめ新正を賀す。(二二〇)

二月　○十日本年の小物成・夫銀・地子銀等の割增上納を命す。(二二一)
○十日能登奧郡の十村等、公領黑島村の漁民が加賀藩領藤瀨村の海境を侵すことを上申す。(二二二)
○廿七日前田吉德夫人の御守殿撤去を命す。(二二三)

三月　○三日富山侯前田利興の江戸下邸類燒す。(二二三)
○四日前田綱紀の江戸駒込邸類燒す。(二二四)
○五日幕府使者を遣はして前田綱紀の罹災を慰問せしむ。(二二六)
○五日富山侯前田利興歸邑せしを以てその貸小屋を加賀藩の用に供す。(二二六)

四月 ○七日前田綱紀疾に罹る。(三二七)

○十一日江戸に出張を命ぜらるゝ十村等に扶持方を給することを稟請す。(三二七)

○十三日能登鳳至郡の十村、再び公領黑島村と加賀藩領藤濱村の漁場爭議に關して上申す。(三二九)

○十五日客臘幕府より賜ふ所の鶴を調理披露す。(三三〇)

○十七日前田綱紀上野東照宮に詣でんとせしが故ありて止む。(三三一)

○十七日前田吉德初めて德川吉宗に隨ひ江戸城紅葉山の靈廟に豫參す。(三三二)

○廿五日鹿島郡三階村の十村、切高する者の監督を嚴にすべきを同僚に告ぐ。(三三三)

六月 ○廿五日鳳至郡の公領黑島村、加賀藩領鹿磯と海境を爭ひて敗訴に歸す。(三三三)

○廿八日河北潟の魚類多く死することを屆出づ。(三三九)

○廿八日金澤米仲買業者の人數を上申す。(三四〇)

○前田利常夫人百年忌に際し赦を行ふべきを命ず。(三四一)

七月 ○廿七日前田綱紀就封の暇を受く。(三四二)

○廿七日大聖寺侯前田利章就封の暇を受く。(三四二)

○廿八日前田綱紀登營して就封の辭見す。(三四三)

○家中の屋敷にある奉公人以外十五歲以上の男女員數を屆出でしむ。(三四三)

九月 ○十八日今日より江戸傳通院に於いて前田吉德夫人の一周忌法會を執行す。(三四三)

十月 ○廿五日幕府前田綱紀の來春まで引續き在府せんとの請を允す。(三四五)

十一月 ○百姓の納租其の他に關する心得を諭す。(三四五)

○廿七日前田綱紀その藏する府志類十三部を幕府に獻ず。(三五〇)

是歲 ○婦人の衣服を華美ならしむることなく、又會合の際の飮食を簡易にすべきを諭す。(三五二)

○淺野川の大橋を改架す。(三五三)

○加賀藩庶民十五歲以上のもの、數を調査す。(三五三)

○幕府諸國鍛冶の鍛刀を徵し、加賀藩より兼若、勝國の作を上つる。(三五六)

享保七年　壬寅　皇紀二三八二

正月 ○四日大學頭林信篤、前田綱紀の八十齡を祝して物を贈る。(三五八)

○十七日前田綱紀物を林信篤父子に贈る。(三六一)

○廿一日伴八矢の與力向又太夫を拘束せし者等處罰せらる。(三六二)

○廿四日山本源右衛門、前田綱紀の壽を賀して和歌を上つる。(三六三)

○廿九日江戸に於いて火災の際家中の心得べき條項を定む。(二六三)

二月 ○五日前田綱紀・吉德自ら本郷邸附近の防火に從ふ。(二六五)

○八日前田綱紀、近習火消淺賀佐右衞門等の功を賞す。(二六六)

○廿二日幕府罪人を諸侯の領内より追放することを禁ず。(二六七)

○廿二日是日以後前田利長夫人の百回忌法會を玉泉寺に行ふ。(二六八)

○廿八日幕府の命により新國史等の書を領内に探索せしむ。(二六九)

○廿九日鶴岡侯酒井忠寄、前田綱紀の養女彩姬に納采す。(二七三)

三月 ○十一日金澤町奉行宮崎長太夫、火消役大音帶刀の家臣を斬る。(二七四)

○十五日前田吉德登營して法會等諸事を節すべき命を受く。(二七九)

○廿六日紀伊侯德川宗直、前田綱紀に大明律諺解を贈る。(二七九)

四月 ○十九日富山に於いて前田正甫の第十七回忌法會を營むを以て香奠を贈る。(二八〇)

○廿四日前田綱紀法曹類林等の書を幕府に献ず。(二八〇)

○晦日前田吉德、德川吉宗の增上寺靈廟參詣に豫參す。(二八〇)

○晦日德川家繼の七回忌法會を天德院に營む。(二八一)

五月 ○朔日幕府佳節每に前田綱紀に物を賜ふことを廢す。(二八一)

○朔日金澤の町人小松屋由兵衞の女孝行を以て賞せらる。(二八二)

○六日幕府前田綱紀在江戸の期間を延ぶることを許す。(二八四)

○廿六日德川吉宗、室鳩巢に命じて前田綱紀の政治を問はしむ。(二八四)

○廿九日郡奉行等、城鐘音響の達する距離を上申す。(二八九)

六月 ○六日前田綱紀幕府に類聚國史の内三册を献ず。(二九二)

○廿八日幕府その能登に於ける領邑の政治を加賀藩に委託す。(二九五)

○放鷹に關する從前の禁令を勵行すべきことを促す。(三〇三)

七月 ○三日幕府諸侯を召して米穀の上納を命じ、在府の期間を短くす。(三〇五)

○七日能美郡今江村の百姓等、御馬廻組岩田武太夫

の子傳左衛門を凌辱す。(三〇七)

九月 ○十九日今明兩日前田吉德夫人の三回忌を江戸傳通院に營む。(三〇八)

○二十日金澤に於ける地子町組合頭の袴摺銀徵收の方法を改めんことを稟請す。(三〇九)

○廿八日前田綱紀去々年來引續き在府せしも、參覲の期に當るを以て物を幕府に上つる。(三〇九)

十月 ○四日前田吉德江戸平尾邸に放鷹す。(三一一)

○十三日德川吉宗自ら獲る所の鶴を前田綱紀に賜ふ。(三一二)

享保八年　癸卯　皇紀二三八三

正月 ○廿二日前田綱紀・吉德父子、德川吉宗の初老を祝して物を献る。(三一四)

○十村等領內の高札に關して答申す。(三一四)

二月 ○十三日德川吉宗鶴を前田綱紀に贈る。(三一五)

○前田綱紀眼疾を榎並玄怡に治療せしむ。(三一六)

三月 ○十三日前田綱紀就封の暇を受く。(三一六)

○十六日石川郡宮腰に災あり。(三一七)

○晦日能登に於ける諸職人の工料を定む。(三一七)

四月 ○十二日前田綱紀隱居を請ふの意あることを豫め幕府に告ぐ。(三一九)

○二十日加賀の郡方に命じて往還筋の修繕を嚴にせしむ。(三一九)

○廿六日前田綱紀幕府の士六郷主馬に託して隱居の願書を提出せしむ。(三二〇)

○廿六日前田綱紀隱居を出願したることを金澤の老臣に報ずる書を認めしめ、使者晝日を以て發す。(三三)

五月 ○朔日前田綱紀金澤の老臣等に書を與へて出府の準備をなさしむ。(三二五)

○九日德川吉宗、前田綱紀の隱居及び吉德の家督相續を許す。(三二六)

○十日能登に於ける栗樹伐採の手續を令す。(三二六)

○十五日前田吉德登營して德川吉宗に黒書院に謁す。(三二九)

○廿一日金澤に於いて前田綱紀の隱居許可せられたることを披露す。(三二九)

○廿四日領內の町人及び百姓に藩侯代替の事を告ぐ。(三三二)

○廿八日諸奉行及び家中一同に領內の治安を維持すべきを告ぐ。(三三三)

六月 ○十一日藩侯代替に付き禁裏・仙洞に派すべき使者を命ず。(三三四)

○十一日本多周防守名を安房守に復す。(三三四)

○十五日前田綱紀は肥前守、吉德は加賀守と改む。(三三五)

○十六日幕府今枝民部の乘輿を出願したるを許す。(三三五)

○廿八日改宗及び寺替に關する規定を令す。(三三六)

○廿八日前田吉德登營して家督相續を謝す。(三三七)

七月 ○七日前田吉德登營し白書院に於いて德川吉宗に謁す。(三四二)

○十八日金澤の諸士に幕府に於ける藩侯代替の禮を終れることを告ぐ。(三四三)

○十九日前田綱紀使を日光に遣はして物を東照宮に獻す。(三四三)

○廿一日前田綱紀、吉德の招待せんとするを辭す。(三四四)

○廿六日前田吉德家督相續披露の爲幕府の老中を招待す。(三四四)

○廿九日前田吉德家督相續披露の爲一門を招待す。(三四五)

八月 ○四日是日以後能を催し出入衆を招待す。(三四五)

○十八日前田吉德左近衞權中將に陞任す。(三四六)

○廿二日前田綱紀致仕を謝して德川吉宗に刀を獻る。(三四七)

○廿八日前田吉德柳營に上りて陞任を謝す。(三四七)

九月 ○朔日前田吉德陞任を父綱紀に謝す。(三四八)

○十一日前田吉德使を日光に遣はして物を東照宮に獻す。(三四八)

○十二日前田吉德就封の暇を受く。(三四八)

○十三日前田吉德登營して就封の辭見す。(三四九)

○十三日前田綱紀の養女毅姬、鶴岡侯の嫡子酒井忠寄に嫁す。(三四九)

○十五日酒井忠寄聟入の儀を行ふ。(三五一)

○廿一日前田綱紀舅入を辭し、祝儀の爲物を酒井忠寄等に贈る。(三五二)

○廿九日前田吉德來春まで在府せんとの請を許さる。(三五三)

十月 ○十一日前田吉德陞位の口宣を受領す。(三五四)

十二月 ○六日德川吉宗、前田吉德に放鷹によりて獲たる鶴を贈る。(三五四)

○十八日幕府前田吉德の家臣二人をして叙爵せしむ。(三五四)

○廿六日十村にして處罰中にあるもの、鍬手米及び代官口米の處分法を定む。(三五五)

是歲 ○金澤城外蓮池邸の庭に松を植う。(三五六)

享保九年 甲辰 皇紀二三八四

正月 ○朔日前田綱紀所勞を以て年頭の禮を受けず。(三五七)

○朔日金澤に於いて諸士に横山監物・本多嘉藤次二人の諸大夫に任ぜられたることを告ぐ。(三五八)

二月 ○七日幕府加賀藩に委託せる領邑の租額增加を賞

す。(三五九)

○十日幕府前田綱紀の献じたる清獬眼抄を文庫に納む。(三六〇)

○廿六日横山大和守・本多安房守江戸に着し、諸大夫に任ぜられたることを謝す。(三六〇)

三月 ○朔日前田吉徳去冬幕府より賜ふ所の鶴を披露す。(三六二)

○朔日前田綱紀その持鎧を吉徳に譲與す。(三六二)

○四日婚禮及び養子縁組の祝儀を簡略にすべきことを令す。(三六三)

○八日横山大和守・本多安房守江戸を發して歸國の途に就く。(三六九)

○十三日前田綱紀の女節姫を柳原御前と稱す。(三六九)

○十八日前田綱紀の病癒えざるを以て歸國延期を幕府に請ふ。(三七〇)

四月 ○廿七日前田綱紀の病小康を呈す。(三七〇)

閏四月 ○二日前田綱紀の病篤きを以て使を伊勢神宮に遣はし快癒を祈らしむ。(三七二)

○七日前田吉徳、綱紀の病癒えざるを以て引續き滯府することを許さる。(三七三)

五月 ○朔日前田吉徳、綱紀の病漸平癒を諸寺社に祈願せしむ。(三七三)

○二日徳川吉宗、前田綱紀の病篤きを以て使を遣はして之を慰問せしむ。(三七四)

○四日藩醫南保玄隆前田綱紀を診する爲金澤を發す。(三七五)

○五日徳川吉宗再び使を遣はして前田綱紀の病狀を問はしむ。(三七七)

○五日前田綱紀、吉徳を招き直封の長持を讓與す。(三七七)

○六日前田綱紀の病勢大に漸む。(三七八)

○九日前田綱紀江戸に薨ず。(三七九)

○前田綱紀行狀。(三八一)

○十一日徳川吉宗使を遣はして前田綱紀の薨去を弔せしむ。(四四八)

○十一日家中總代の士前田綱紀の病を問はんが爲金澤を發す。(四四九)

○十三日前田綱紀の訃金澤に達す。(四四九)

○十三日前田綱紀の法諡を松雲院と號す。(四五一)

○十四日前田綱紀の靈柩を下街道經由歸國せしむること等を定む。(四五一)

○十五日今日以降越中境より金澤に至る道路を修理せしむ。(四五二)

○十七日奥村伊豫守に命じて葬禮の奉行たらしむ。(四五二)

○十八日前田綱紀の靈柩成る。(四五三)

○十九日前田吉德、綱紀の靈柩に供奉すべき諸士を召して之を勞す。(四五三)
○二十日前田綱紀の靈柩江戸を發す。(四五四)
○廿一日今明日江戸廣德寺に於いて前田綱紀の追弔法會を行ふ。(四五六)
○廿三日金澤の民家弔意を表する爲に懸けたる簾を撤す。(四五六)
○廿六日前田綱紀の靈柩金澤に入る際路傍に拜觀するを禁ず。(四五七)
○廿六日年寄以下の士、十七日金澤より發せしめたる弔問の使者江戸に着す。(四五七)
○廿八日前田吉德江戸に於いて赦を行ふの命を發す。(四五八)
○廿八日御側小將及び御近習横目の職名を改む。(四五八)

六月

○六日家中の月代を剃るべき日限を定む。(四五八)
○七日前田綱紀の靈柩金澤に着す。(四五九)
○十日前田綱紀の遺骸を金澤城南野田山の塋域に葬る。(四六〇)
○十四日今日より天德院に於いて前田綱紀の追弔法會を營む。(四六〇)
○十八日金澤に於いて大赦を行ふ。(四六一)
○十八日大阪御買手役赤尾三太夫等越中五ヶ山に流さる。(四六一)
○十八日今明日金澤玉泉寺に於いて窮民を賑救す。(四六三)
○十九日前田綱紀三十五日の追弔法會を天德院に行ふ。(四六五)
○廿四日本願寺別院に於いて前田綱紀の追用法會を行ふ。(四六五)
○廿八日前田綱紀四十九日の追弔法會を天德院に行ひ、翌日百日の法會を豫修す。(四六五)

七月

○九日前田綱紀の位牌所及び墓所參拜に關して令す。(四六六)
○十一日前田吉德江戸を發し初めて入封の途に就く。(四六六)
○廿二日前田吉德金澤に着す。(四六七)
○廿三日今明兩日金澤の町民前田吉德の入國を祝す。(四六八)
○廿四日前田吉德來月朔日以降諸士の拜禮を受くべきを告ぐ。(四六八)
○廿五日大聖寺侯前田利章の使者金澤城に登りて前田吉德の入國を祝す。(四七〇)
○廿六日二條綱平の使者金澤城に登りて前田吉德の入國を祝す。(四七〇)

八月

○朔日本日以後家中の諸士前田吉德に謁してその入

國を賀す。(四七二)
〇十四日今後故なく改名することを禁す。(四七三)
〇十七日前田吉德金澤神護寺及び野田山の廟に參詣す。(四七三)
〇十八日御次番の職名を改む。(四七四)
〇十九日幕府前田吉德が本年參覲すべき時期を令す。(四七四)
〇廿一日前田吉德入國の祝儀として座頭及び瞽女を賑恤す。(四七四)

九月 〇三日石川郡の百姓等、村井村の十村與三右衞門等の家を襲ひて騷擾す。(四七四)
〇十八日前田吉德老臣本多安房守の屋敷に相對する明地の竹木を伐採すべきことを命す。(四七五)
〇廿一日人持組主馬恣に前田吉德の室に入り言上する所あり。後流に處せらる。(四七七)
〇廿二日前田吉德石川郡粟ヶ崎に放鷹す。(四八四)
〇町人の婚禮を行ふ家に礫を投ずるを禁す。(四八四)

十月 〇十日前田吉德、家老及び若年寄の執務規程を定む。(四八四)
〇十八日前田吉德の生母預玄院を江戸染井の新邸に住せしむ。(四八六)
〇廿一日前田吉德金澤を發して參覲の途に上る。(四八六)
〇晦日御藏入代官等に命じて納租の檢査を嚴にせしむ。(四八七)

十一月 〇十日立圓寺の住僧輿に乘じて町廻の御小將に暴言す。(四八八)
〇十一日前田吉德登營して參覲の禮を行ふ。(四九四)
〇十五日前田吉德江戸に於いて親交ある諸家との贈答を廢せしむ。(四九五)

十二月 〇十一日米價下直なるを以て諸士の藩に納入すべき役銀等の延期を許す。(四九五)
〇廿五日馬廻組野村傳兵衞、人持組永原大學に屬する歩士を斬殺す。(四九六)
〇廿七日德川吉宗、前田吉德に鶴を贈る。(四九六)
〇廿八日江戸に於ける加賀藩の諸場・諸手合に儉約を命す。(四九六)
〇廿八日與力吉田與兵衞、その妻及び密夫を殺害す。(四九七)

是歳 〇疫疾大に流行す。(四九八)

享保十年　乙巳　皇紀二三八五

正月 〇朔日前田吉德登營して年頭の禮を行ふ。(四九八)
〇廿四日禁牢者宥免に關する手續を定む。(四九九)
〇廿八日曩に德川吉宗より賜はりたる鶴を料理披露す。(五〇〇)

二月 〇五日金澤城越後屋敷の時鐘を改鑄するを以て鶴の

丸の早鐘を代用す。（五〇二）
○領内の十村に命じ小作の入上を怠る諸村を調査せしむ。（五〇二）

三月 ○十日江戸留守詰の家老津田玄蕃、府内の乘輿を許さる。（五〇三）
○十日金澤町の市場札に關して答申す。（五〇三）
○十一日前田吉德就封の暇を受く。（五〇四）
○十二日前田吉德登營して就封の辭見す。（五〇四）
○十八日前田吉德江戸を發す。（五〇五）
○廿二日奉公人裁許場所を廢せられたるも尙奉公人たるものを減ぜしむべからざるを告ぐ。（五〇五）
○廿六日大聖寺侯前田利章その從臣七人を金澤に還附す。（五〇六）

四月 ○四日前田吉德金澤に着す。（五〇七）
○十七日十村等山伏の所持する燒印札を人目に觸れ易く携行せしめんことを要求す。（五〇七）
○廿一日高野山天德院に前田綱紀の石塔を建立せんことを請ふ。（五〇九）
○廿五日前田吉德の子宗辰生る。（五一〇）
○廿六日德川家重の元服を賀せしむる爲使者を金澤より發せしむ。（五一一）
○廿六日釜屋彦九郎時鐘を改鑄して金澤城内に納る。（五一二）

五月 ○朔日前田宗辰の幼名を勝丸と稱す。（五一四）
○七日能美郡小松に地震あり。（五一五）
○八日今明日前田綱紀の一周忌法會を天德院に執行す。（五一五）
○十一日前田吉德その子宗辰の出生を幕府に屆出づ。（五一六）

六月 ○朔日前田宗辰松平氏を冒すことを幕府に屆出づ。（五一七）
○朔日家中諸士困窮するを以て借銀等の額を錄上せしむ。（五一七）
○朔日諸頭・諸役人より漫に直接藩侯の內意を伺ふことを禁ず。（五一七）
○廿九日故石黑源右衞門の借銀皆濟せられたるを以て、老臣等その子彦太夫に遺知を相續せしめんことを請ふ。（五一九）

七月 ○御步横目の火事裝束を定む。（五二〇）
○朔日德川家重西丸に移るを以て祝賀の爲に使者を金澤より發せしむ。（五二〇）
○十一日家計困窮の諸士に貸銀を許す。（五二〇）

八月 ○十六日前田宗辰色直の儀を行ふ。（五二三）
○廿六日前田吉德諸士の家計困難なるを以て儉約を命ず。（五二三）
○一步苅の法を示す。（五二五）

九月 ○二日石川郡の百姓等村井村に在る十村與三右衛門の家を破壞す。(五三〇)
○十八日前田宗辰金澤城二丸の廣式に移徙し、父吉德に謁す。(五三五)
○廿八日是日以後前田吉德の入國祝賀の爲に能を催す。(五三五)
十月 ○廿五日前田宗辰の誕生を祝して能を催す。(五三六)
十一月 ○七日家中諸士の河北郡森下川以北にて放鷹することを許す。(五三七)
十二月 ○廿八日德川吉宗の前田吉德に贈れる鶴金澤に着す。(五三八)
是歳 ○能登島の流人五十川當三郎を赦免す。(五三八)
○前田吉德河北潟附近に放鷹す。(五三九)

享保十一年 丙午 皇紀二三八六

正月 ○十六日大槻朝元扶持米を加増せらる。(五四〇)
○十五日鐵に德川吉宗より贈られたる鶴を披露す。(五四一)
二月 ○廿二日算用場に出頭する扶持人・十村・山廻の作法を正さしむ。(五四一)
○廿六日大聖寺侯前田利章金澤城に登る。(五四二)
○幕府、今後七年目毎に男女の人數を調査して屆出でしむ。(五四二)
○高田兵左衛門の子善左衛門白鳥を捕へしも罪を免さる。(五四三)
三月 ○三日御小將組頭松尾縫殿に對し不滿を抱く者を諭す。(五四三)
○四日百姓恣に垣根の竹木を伐採するを禁ず。(五四七)
○七日江戸邸に勤務する諸士の心得を諭す。(五四八)
○無組十村等羽咋・鹿島兩郡を巡回するに先だちその趣旨を告ぐ。(五五一)
○十村等の貸米をこふ爲城下に來るを禁じ耕作の督勵に努めしむ。(五五二)
四月 ○二十日役人等の書類取扱手續に關して命ず。(五五五)
○廿五日御居間方の者の野外にて御步横目に用務を命ずるを免す。(五五五)
五月 ○八日使を京都に遣はして二條吉忠夫人の痘瘡を見舞はしむ。(五五六)
○八日今明兩日前田綱紀の三回忌法會を天德院に行ふ。(五五六)
○廿八日前田宗辰初めて玄關前に出遊す。(五五七)
六月 ○十三日算用場奉行に命じて改作法を守らざる十村・百姓の取締を嚴にせしむ。(五五七)
○十六日德川吉宗の生母逝去するの報金澤に達す。(五六〇)
○廿二日諸士の借銀を整理する爲除知を命ず。(五六〇)
○廿八日京都に於ける加賀藩邸の一部燒失す。(五六一)

七月 ○十八日大槻朝元扶持を増し歩並に班せらる。(五六一)

八月 ○十日御大工・穴生等の帶刀を許す。(五六一)

○十五日前田吉德用銀の供給を命じたる金澤の町人に謁見を許す。(五六一)

○十五日前代より定められたる儉約の條目を嚴守せしむ。(五六二)

○廿一日家中の士にして狂氣により自他を傷つけし者等の知行を沒收すべきことを定む。(五六三)

○廿二日前田吉德金澤を發して參覲す。(五六四)

○廿九日大小將組古屋八郎兵衞を能登島に流すことを宣告す。(五六四)

○田租の皆濟方法に關して令す。(五六五)

○給人の收納米を藏宿に納入する方法に關して令す。(五六七)

九月 ○四日前田吉德江戸に着す。(五七一)

○十一日前田吉德登營して參覲の禮を行ふ。(五七二)

○盛岡侯南部大膳大夫前田氏の知を得んことを望む。(五七二)

十月 ○廿九日能大夫諸橋權進舞臺を建てたるを以て今日より四日間に亙り興行す。(五七三)

十二月 ○廿一日大槻朝元新番組の士に列す。(五七三)

○廿三日德川吉宗使者を派して前田吉德の寒候を問はしむ。(五七四)

○廿八日開番の待遇を物頭並に列す。(五七四)

享保十二年 丁未 皇紀二三八七

正月 ○朔日前田吉德登營して年頭の禮を行ふ。(五七四)

○四日前田吉德生母預玄院の六十歳に達したるを賀す。(五七五)

○廿四日頭分の士の旅行に駕籠を用ふるを許す。(五七五)

二月 ○十六日本鄕邸の舞臺に芝居を演ぜしむ。(五七五)

○廿一日前田修理梅鉢の紋章を用ふるを許さる。(五七六)

○廿六日村肝煎に小百姓を採用すること勿らしむ。(五七六)

○新開の免合等に關して令す。(五七八)

三月 ○十三日前田吉德就封の暇を受く。(五七九)

○十五日前田吉德登營して就封の辭見す。(五七九)

○十七日鹿島郡所口町に火災あり。(五八〇)

○廿五日前田吉德江戸を發して歸國の途に上る。(五八〇)

○江戸に於ける諸頭・諸役人勤方の舊例を記帳上申すべきを命ず。(五八〇)

四月 ○三日金澤にて新番及び御歩の華美なる服裝を禁ずることを令す。(五八二)

○三日江戸に於いて能脇師竹中市郎右衞門に賞賜

す。（五八二）

〇七日前田吉德金澤に着す。（五八三）

〇十二日體軀偉大なる牝馬を錄上せしむ。（五八三）

〇十七日前田吉德、金澤兩大橋內に火災ある時は自から出動すべき意を傳ふ。（五八五）

〇廿五日前田宗辰髮置の祝儀を行ふ。（五八五）

六月 〇十三日茜染の工人茜屋宰齋に扶持を給す。（五八六）

〇十五日能登の海中にて獲たる鮭魚を献る。（五八六）

七月 〇與力杉江治右衛門老臣に對し禮を失するを以て罰せらる。（五八六）

〇藏米の減量甚だしき者は代官をして辨償せしむべきを令す。（五八六）

八月 〇二十日時鐘を再び改鑄することを布告す。（五八七）

九月 〇六日前田宗辰金澤卯辰觀音院に宮參を行ふ。（五八八）

〇諸浦にて捕獲する鰤に付き十分一稅を脫すること勿らしむ。（五八二）

十月 〇十一日加賀藩の年寄以下蓮池庭にて紅葉を觀賞す。（五九四）

〇金澤に送付すべき魚類の量及び稅率に關して令す。（五九四）

十一月 〇二日新たに鑄造せる時鐘を聞き得る距離を錄上す。（五九七）

〇廿一日大槻朝元の弟長右衛門御歩となる。（五九八）

十二月 〇七日徳川吉宗使者を派して前田吉德の寒候を問はしむ。（五九九）

〇廿九日前田吉德、明年以降毎月三次日を期してその居室に老臣等を相會せしむ。（五九九）

享保十三年　戊申　皇紀二三八八

二月 〇十九日大聖寺侯前田利章柳營に登り參覲の禮を行ふ。（六〇〇）

〇二十日前田吉德命じて鶴を捕ふる爲め隨時放鷹を行ひ得るの準備を爲さしむ。（六〇一）

三月 〇朔日前田吉德諸士に判物印物を附與す。（六〇二）

〇七日徳川家重疱瘡を患ふとの報金澤に達し、次いで慰問の使者を發遣す。（六〇二）

〇廿二日前田吉德石川郡粟ヶ崎附近に狩獵す。（六〇三）

四月 〇六日前田吉德、奥村伊豫守の新邸に臨む。（六〇三）

〇廿二日紫野芳春院の住僧金澤城に登り前田吉德に謁す。（六〇四）

〇廿八日前田吉德河北郡太田に放鷹し潮水を渡りて石川郡粟ヶ崎邸に入る。（六〇五）

〇御扶持十村・平十村及び十村並の服務心得を諭す。（六〇五）

五月 〇五日江守角右衛門、多田善太夫と爭鬪して之を殺害す。（六〇七）

〇十五日前田吉德、徳川吉宗の日光社參を終りたる

を視し能を演ぜしむ。（六〇九）
○十七日御塩裁許川副十郎右衛門等非行あるを以て捕へらる。（六一〇）
○廿一日町人の子供にして狂言を演ずる者を召し前田宗辰の觀覽に供せしむ。（六一四）
○廿五日前田吉德放鷹の歸途大槻朝元の邸を訪ふ。（六一五）
○廿六日法規を恪守するが爲士人等各自定書の文を謄寫し置くべきを命ず。（六一五）

六月　○朔日前田吉德今秋參覲の途中日光に社參すべきを告ぐ。（六一六）
○二日若年寄今枝主水役儀を免ぜらる。（六一六）
○十七日曩に中絶せる儉約奉行を復舊しその五人を任命す。（六一八）
○廿三日能登島に流されたる堀主馬を縮所に監禁すべきを命ず。（六二二）
○大槻朝元邸の便宜を謀り新道を開く。（六二三）

七月　○四日各郡毎一段歩に於ける米の產額を答申す。（六二三）
○六日前田吉德儉約の實行に關して諭示す。（六二四）
○八日大槻朝元の養父足輕長太夫を御步に陞進せしむ。（六二五）

八月　○朔日今枝氏部の家士多和田彌四郎、黑田次郎左衛門を殺害す。（六二六）
○八日前田宗辰生母の兄上坂平兵衛新に祿せらる。（六三〇）
○十八日前田吉德參覲の爲に金澤を發す。（六三〇）

九月　○六日前田吉德江戸に着す。（六三一）
○十五日前田吉德登營して參覲の禮を行ふ。（六三三）
○廿二日金澤材木町に火災あり。（六三四）

十一月　○十一日遊行上人金澤に着す。（六三四）
○十五日金澤東本願寺末寺の遷佛式を行ふ。（六三四）
○二十日前田吉德幕府より領國の產馬を進獻すべき命を受く。（六三五）
○郡中諸村に勸進の徒を徘徊せしむること勿らしむ。（六三五）

十二月　○八日家中の士等更にその生活を質素にすべきを命ず。（六三五）
○十二日代官等前に納入したる米の缺損補償の用捨を請願す。（六三六）
○十六日前田吉德その生母預玄院等を饗應し能を演ぜしむ。（六三八）

享保十四年　己酉　皇紀二三八九

正月　○十八日前田吉德その初老の祝儀を生母預玄院に贈る。（六三八）
○廿七日德川吉宗、前田吉德に放鷹により獲たる

鷹を贈る。（六三八）

二　月　〇四日御步水野彌五兵衛先に江戶に於いて作法を誤りたるを以て遠慮を命ぜらる。（六三九）

〇四日江戶に隨從したる諸士に特に二ヶ月間の扶持方を增給すべきを告ぐ。（六三九）

〇十日郡奉行等牛馬賣買に關する從來の弊風を改むべきことを命す。（六四〇）

〇十三日江戶深川に在る加賀藩の土藏燒失す。（六四一）

〇十九日遊行上人金澤を發す。（六四二）

〇用水・地境等の訴訟に關する幕府の令を領內に傳達す。（六四三）

三　月　〇十日算用場奉行、百姓をして改作法を勵行せしむべきを命ず。（六四四）

〇十三日前田吉德就封の暇を受く。（六四七）

〇十五日前田吉德登營して就封の辭見す。（六四七）

〇廿八日前田吉德江戶を發して歸國の途に就く。（六四八）

四　月　〇十日家老玉井市正の自分指控を免さる。（六四八）

〇十一日前田吉德金澤に着す。（六四八）

〇二十日與力富井彥兵衛若黨の無禮を咎めて斬殺す。（六四九）

〇廿二日大槻朝元の邸に通ずる水道の改修を命す。（六四九）

〇廿五日前田宗辰着袴の儀を行ふ。（六四九）

〇廿九日大乘寺火に火く。（六五〇）

五　月　〇四日引免を請ふ村の願書を提出すべき期限を定む。（六五一）

〇八日德川家綱の五十回忌法會を金澤[illegible]寺に執行す。（六五一）

〇十八日各村にその高免帳を提出すべきことを命ず。（六五二）

六　月　〇六日百姓の悴幼少にして親を喪ひたるものゝ遺產管理に關して令す。（六五二）

〇廿五日藩の財政困難なるを以て諸役人に費用を節すべきを命ず。（六五三）

七　月　〇三日德川吉德奉書を前田吉德に遣して暑中の安を問ふ。（六五三）

〇七日能登に地震あり。（六五三）

〇十日家中の諸士に儉約を守り、行狀を愼むべきことを命す。（六六二）

〇十二日郡方の風俗を革正すべきを命ず。（六七〇）

〇二十日百姓の收納米を藏納するに際し藏雀と稱するものゝ手數料を徵するを禁ず。（六七一）

〇廿四日前田重熙江戶に生る。（六七二）

〇廿七日金澤町奉行等儉約に關し町人に令せしことを上申す。（六七三）

八月 ○町人百姓の貸借に關する前令を勵行せしむ。(六七五)

○二日奥村伊豫守、先に出生したる前田重煕の爲に蟇目の式を行ふ。(六七六)

○三日前田利常の女龜鶴姫の百回忌法會を金澤經王寺に執行す。(六七七)

○十四日家中の諸士に儉約を勵行し行狀を愼ましむる爲め橫目足輕を巡行せしむ。(六七七)

○廿七日有栖川宮の簾中男子を生むを以て賀使を發せしむ。(六八〇)

○家中諸士の婦女子遊興の爲猥に外出するを禁ず。(六八〇)

九月 ○郡奉行等百姓に儉約を命ず。(六八二)

○四日變死せる百姓の跡高は之を藩に沒收すべきことを命す。(六八四)

閏九月 ○九日能美郡小松町に火災あり。(六八四)

○廿四日領内に於ける今秋の風損・水損を幕府に上申す。(六八五)

○廿四日大槻朝元等に特に百石の加增知を命ず。(六八五)

○家中奉公人の給銀標準を示す。(六八六)

十月 ○六日舟山喜三兵衛先に江戸に於いて頭役成瀨十左衛門を害せんとしたるを以て能登島に在鄕を命ぜらる。(六八九)

十一月 ○十三日郡奉行石黒彦太夫役儀取放の上遠慮を命ぜらる。(六九一)

○二十日越中にある鳥見を毎月一次金澤に來らしめ、農民及び領境の事情を報告せしむ。(六九一)

○廿四日轉切支丹類族矢田萬六郞自殺す。(六九二)

○廿九日德川吉宗奉書を前田吉德に遣はして寒中の安を問ふ。(六九二)

十二月 ○毎日雲雀を賣買又は捕獲し、及び放鷹禁制の地域に於て唐網を用ひ漁撈することを禁ず。(六九三)

○十三日多賀信濃、前田綱紀の世以來三十年に亙りて蟄居せしを赦免せらる。(六九三)

○廿五日先に老臣中の諸大夫を補缺すべき許可を得たるを以て長九郞左衛門を甲斐守と稱せしむ。(六九三)

○廿七日米價下直なるを以て諸士に會所銀辨濟の期限を延ぶるを許す。(六九四)

○廿七日馬廻組堀彌三左衛門、人持組三田村監物と爭ひて之を傷つく。(六九四)

○廿八日空中に紅氣を現ず。(六九八)

享保十五年　庚戌　皇紀二三九〇

正月 ○朔日前田宗辰初めて年頭の禮に與る。(七〇〇)

○十二日本鄕邸類燒の難に罹る。(七〇一)

○十五日德川吉宗奉書を以て本鄕邸の罹災に關し慰問せしむ。(七〇三)

○廿四日十村手代の郡中に出張するもの丶宿賃等支給方を改めんと請ふ。(七〇三)

二月 ○十五日長甲斐守先に叙爵せられしことを前田吉德に謝す。(七〇四)

○十六日本郷邸の興造に着手す、(七〇五)

○廿一日儉約及び行狀に關する去秋の令を恪守すべきを命ず。(七〇六)

○廿一日大聖寺侯前田利章參覲の途次金澤に着す。(七〇七)

○藩の御鷹餌鳥指等十村屋敷内に入りて捕鳥することを禁ず。(七〇七)

三月 ○六日前田利常生母壽福院の百回忌法會を金澤經王寺に執行す、(七〇八)

○七日前田宗辰初めて放鷹を蓮池庭に行ふ。(七〇八)

○廿四日前田宗辰放鷹を行ひ、歸路老臣等の邸に臨む。(七〇九)

○晦日前田吉德本郷邸の建築を必要の部分のみに止むべきことを命ず。(七〇九)

四月 ○十三日淺野川大橋の工事成る、(七一〇)

○十五日幕府明年以後諸侯の上米を免除し、參覲は舊の如く一年詰とすべきを命ず。(七一〇)

○十七日本郷邸の南火之見番所を開く、(七一一)

○十八日本郷邸斧初の儀を行ふ。(七一二)

五月 ○八日今明日金澤天德院に前田綱紀の七回忌法會を行ふ。(七一二)

○十日前田宗辰初めて天德院に詣す、(七一二)

○十八日前田綱紀の法會終れるを以て菩提寺の住僧を招き能を觀覽せしむ、(七一三)

○廿三日前田吉德使者を金澤より發して水戸侯の家督相續を賀せしむ、(七一三)

○廿八日本郷邸の上棟式を行ふ。(七一三)

六月 ○十三日德川吉宗奉書を前田吉德に與へて暑中の安を問ふ、(七一四)

七月 ○六日今江・木場潟に於ける能美郡今江村等の漁場を侵害することを禁ず、(七一四)

○十八日水戸藩の答禮使金澤城に登りて前田吉德に謁す、(七一五)

○十九日犀川・淺野川出水す、(七一七)

八月 ○十日幕府先に罪人を領外に追放することを禁じたるを以てその代用刑を定む。(七一七)

○十六日本郷邸竣工し前田重煕等之に移る。(七二二)

○廿四日前田吉德金澤を發して參覲の途に就く。(七二二)

九月 ○朔日本郷邸の大門を開き、來客を大式臺より通行せしむ。(七二三)

○十日前田吉德江戸に着す。(七二三)

○十五日前田吉德登營して參覲の禮を行ふ。(七二三)
○廿九日前田綱紀の女節姫逝去す。(七二三)
○藩の鷹匠等郡方に於いて放縱の行爲あるを戒む。(七二六)

十月　○二日義に幕府の上使本鄕邸に臨みし際、朝倉武太夫・豐島權左衞門不法なりしを以て譴責せらる。(七二七)
○三日星、月輪中を貫く。(七二七)
○五日前田綱紀の女節姫逝去の報金澤に至る。(七二七)

十一月　○十二日前田宗辰金澤に於いて麻疹に罹る。(七二八)
○十五日本鄕邸建築に關して盡力したる諸吏に賞賜す。(七二八)
○十六日徳川吉宗放鷹によりて獲たる鶴を前田吉德に贈る。(七二八)
○十八日耕作損耗等の見分は御扶持人十村・平十村・新田裁許相共に之を行ふべきことを命ず。(七二九)
○十九日前田宗辰の麻疹癒ゆ。(七二九)
○廿八日前田重煕江戸に於いて麻疹に罹る。(七三〇)

十二月　○二日徳川吉宗使者を前田吉德に遣して姉節姫の死を弔せしむ。(七三〇)
○五日老臣奥村伊豫守麻疹に罹り金澤に卒す。(七三〇)
○十五日大槻朝元知行を加増せらる。(七三〇)

享保十六年　辛亥　皇紀二三九一

正月　○十三日中御門天皇の麻疹治癒し給ひしを以て使を遣はして天機を奉伺せしむ。(七三一)
○十六日十村等疱瘡・麻疹の妙藥として牛糞を用ふべきことを告ぐ。(七三二)
○廿六日前田重煕髮置の儀を行ふ。(七三二)

二月　○十日今江潟御藏所島の葭を苅り運上を納めんことを請ふ。(七三三)

三月　○朔日金澤小立野に火災あり。(七三五)
○米價大に下落す。(七三七)
○家中諸士に命じて儉約を勵行せしむ。(七三八)

四月　○朔日幕府諸侯に命じ江戸・大阪に於いて買米を實行せしむ。(七三九)
○十八日前田重煕江戸駒込の富士社に參詣す。(七四〇)

五月　○廿六日前田吉德の側室某歿す。(七四〇)
○廿七日本多安房守の用人大津重郎左衞門、足輕木村久平の爲に害せらる。(七四二)

六月　○六日能美郡吉原釜屋村の荷物改役人の勤務に關して令す。(七四五)
○晦日家中の諸士に各自の由緒一類附帳を上つる。(七四六)
○藏宿の取締方に付改善の方法を議す。(七四六)

七月　○七日前田吉德幕府の用金借上の命を奉ず。(七五二)
○二十日羽咋郡一宮村に火災あり。(七五三)

○廿七日前田吉德就封の暇を受く。(七五三)
○廿八日前田吉德登營して就封の辭見す。(七五三)

八月 ○五日前田吉德本鄕邸に象を觀る。(七五三)
○十六日前田吉德江戸を發して歸國の途に就く。(七五四)
○十八日石川郡泉野村の刑場を米泉村に移さんことを請ひて許さる。(七五四)

九月 ○百姓の上納する米穀の仕上及び包裝を完全にすべきを令す。(七五四)

十月 ○二日能美郡辰口村に溫泉を開かんことを請ふ。(七六〇)
○二十日河北郡小坂村における刑場の由來を上申す。(七六一)
○二十日毛利助右衞門その兒太兵衞の爲に斬殺せらる。(七六一)

十一月 ○十二日大槻朝元初めて能の仕舞を學ぶ。(七六二)
○晦日漢人梅村宗榮希有の高齡を以て歿す。(七六二)

十二月 ○廿四日深雪なるを以て道路の往來を安全にせしむ。(七六六)

享保十七年 壬子 皇紀二三九二

正月 ○朔日前田吉德金澤城に元日の儀を行ふ。(七六六)
○四日前田直躬金澤に於いて叙爵を命ぜらる。(七六六)
○九日追儺の儀を行ふ。(七六七)
○十六日大槻朝元知行を加增せらる。(七六七)
○十六日年寄奧村內記等に儉約方御用を命ず。(七六八)
○廿五日德川吉宗の前田吉德に贈與したる鶴金澤に着す。(七六八)
○領內九十六歲以上の長壽者七人を算す。(七六九)

二月 ○廿五日越中境奉行を命じ今後食祿八百石以上のもの五ヶ年交代たることを定む。(七六九)

三月 ○收納藏の米穀拂切となる後も倘代官の封印を施し置くべきを命ず。(七七〇)

四月 ○八日十村等石川郡泉村の刑場移轉に伴ふ納祖に關し意見を上つる。(七七一)
○十二日前田吉德の女喜代姬江戸に生る。(七七一)
○廿一日喜代姬生れしを以て奧村温良に命じて蟇目の儀を行はしむ。(七七二)
○廿九日德川家繼の十七回忌に當るを以て法會を金澤如來寺に行はしむ。(七七二)
○前田吉德命じて前侯の發布したる法規命令等一切の書類を提出せしむ。(七七三)

五月 ○廿八日金澤附近の道橋方の處務規程を上申す。(七七三)
○火消番の處務規程を修正す。(七七八)

閏五月 ○十四日大聖寺侯前田利章江戸城虎の門の修築を命ぜらる。(七八一)

○廿一日毛利太兵衛その弟を殺害したるを以て切腹を命ぜらる。(七八一)

六月 ○三日徳川吉宗驛使を以て前田吉德の暑中の安を問ふ。(七八五)

○廿四日石川郡笠舞村にある非人小屋裁許與力の處務規程を上申す。(七八五)

七月 ○二日前田利政の百回忌法會を京都に行ふ。(七九一)

○六日前田吉德金澤を發して參覲の途に就く。(七九一)

○廿一日前田吉德登營して參覲の禮を行ふ。(七九二)

八月 ○十日靈元法皇崩御の報江戸に達す。(七九二)

○二十日前田光高夫人の忌日に自今精進を廢し遊獵を行ひ得べきことを告ぐ。(七九二)

○廿四日前田吉德丹頂の鶴を飼ひ老臣以下に之を觀覽せしむ。(七九三)

○廿八日幕府加賀藩より先に借上げたる金子の半額を返濟すべきを告ぐ。(七九三)

九月 ○十四日代官手代等非行多きを以てその採用を嚴にすべきを命ず。(七九四)

○十八日江戸に於いて藩侯の供先より歸邸せしむる使者の通門に關して規定す。(七九六)

○二十日前田吉德夫人の十三回忌法會を江戸傳通院に行ふ。(七九七)

○前田吉德使を上りて靈元法皇の崩御を弔す。(七九八)

秋 ○米作に蟲害多し。(七九八)

十月 ○十日前田吉德上野に於ける德川綱吉の二十五回忌豫修法會に參詣す。(七九九)

○十八日羽咋郡神子原村の土地に龜裂を生ず。(八〇〇)

十一月 ○十六日前田重煕の遊び相手を選定す。(八〇一)

十二月 ○九日幕府前田吉德の意を容れ、先に借上げたる金子の殘額返濟の期を延ぶべきを告ぐ。(八〇一)

○十六日前田吉德幕府より唐犬を受く。(八〇二)

○十九日德川吉宗放鷹によつて獲たる鶴を前田吉德に贈る。(八〇二)

○廿八日大聖寺侯前田利章江戸城虎の門の助役竣成の功を賞せらる。(八〇三)

是歳 ○家中諸士に儉約の勵行を命ず。(八〇三)

○雪大に降る。(八〇四)

享保十八年 癸丑 皇紀二三九三

正月 ○朔日前田吉德江戸に於いて初めて大聖寺侯前田利章の年禮を受く。(八〇四)

○十五日前田吉德登營してその政績に對する賞詞を受く。(八〇五)

○十九日米價騰貴したるを以て貧民に廉價販賣を開始す。(八〇六)

○廿一日前田重煕着袴の儀を行ふ。(八〇八)

○晦日鹽川安左衛門の家に於いて伎藝を觀覽する爲

集れるものを檢擧す。(八〇八)

二月 ○二日幕府加賀・能登の農民の食料として雜穀を作るべきことを命ず。(八一〇)

○改作奉行等勸農に努力すべきことを十村に諭す。(八一一)

三月 ○四日窮民に米穀を貸與することを許す。(八一三)

○十一日前田吉德、三條西公福を傳奏屋敷に訪ふ。(八一五)

○十一日金澤に木の實降る。(八一五)

四月 ○十三日前田吉德側室淸月院の一周忌法會に大槻朝元藩侯の代參を行ふ。(八一六)

○十七日前田吉德、德川吉宗に隨ひて江戸城紅葉山の靈廟に豫參す。(八一七)

○廿四日大聖寺侯前田利章の子利道江戸に生る、(八一七)

○廿六日金澤傳馬町より出火す。(八一七)

○廿七日幕府、諸侯以下の妾を正妻とすることを禁す。(八二〇)

○廿九日金澤犀川雨寶院火を失す。(八二一)

五月 ○七日前田吉德の女喜代姬江戸富士權現に參詣す。(八二二)

○十九日富山侯前田利興卒す。(八二三)

○廿九日石川郡の曳舟業者騷擾す。(八二四)

六月 ○金澤に於いて夜中提燈を齎さずして往來することを禁ず。(八二五)

七月 ○四日石川郡笠舞村にある非人小屋の增築を命ず(八二七)

○十八日前田吉德の女喜代姬髮置の儀を行ふ。(八三〇)

○十八日大槻朝元知行を加增せらる。(八三一)

○廿七日前田吉德就封の暇を受く。(八三一)

○廿八日前田吉德就封の爲德川吉宗に謁見す。(八三一)

○風邪大に流行す。(八三一)

八月 ○七日幕府加賀藩よりの借銀殘額を返濟す。(八三二)

○十九日前田吉德江戸を發して歸國の途に就く。(八三二)

九月 ○朔日前田吉德金澤城に歸る。(八三三)

○十八日前田綱紀の外孫永君、東宮御息所たるの勅許を得たるの報金澤に達す。(八三三)

十月 ○四日新川郡の山林濫伐に關する處刑を定む。(八三四)

○十一日德川吉宗夫人逝去したるの報金澤に達す。(八三五)

○能美郡粟津村の大王寺を帳內の寺院たらしめんと請ふ。(八三五)

十一月 ○九日前田吉德の女總姬江戸に生る。(八三八)

○領內收穫の減損額を幕府に屆出づ。(八三八)

十二月 ○十一日德川吉宗驛使を遣はして前田吉德の寒中の

安を問ふ。(八三九)
○十二日盗賊奉行配下の足輕等伎藝の道具を携行する前田伊織の家來を捕ふ。(八三九)
○廿二日人持組前田伊織等伎藝の者を聘したるを以て罰せらる。(八四三)
○廿四日御醫師赤佐玄人似切手を行使したること發覺し自殺す。(八四五)
○廿六日御馬廻組佐々喜太夫の若黨、不明の人物より落書を手交せらる。(八四六)
○米價高直なるを以て藩内要樞の地にその廉賣を行はしむ。(八四七)
○鷹の飼料として犬を殺すことを禁ずる幕令を傳ふ。(八四七)

是歳 ○金澤蛤坂の道路を開鑿す。(八四八)

享保十九年　甲寅　皇紀二三九四

正月 ○朔日前田吉徳金澤に於いて年頭の儀式を行ふ。(八四八)
○朔日前田土佐守大紋素袍に劍梅鉢の紋章を用ひ爲に物議を釀す。(八四九)
○十三日中黑六左衛門實子を廢嫡し養子に家督を相續せしむ。(八五二)
○十七日十村等に勸農の職務を怠るべからざるを告ぐ。(八五五)

三月 ○十一日前田吉徳祝儀の内意を以て能を催す。(八五八)
○廿六日切支丹類族松井溫庵の娘さわ自殺す。(八五九)

四月 ○十三日前田宗辰初めて乘馬を試む。(八六〇)
○廿五日前田宗辰能を演じ、吉徳は鼓を囃す。(八六〇)

五月 ○十三日大槻朝元物頭並に列せらる。(八六一)
○廿一日前田宗辰金澤田井口に放鷹す。(八六二)

六月 ○十六日前田宗辰金谷殿の廣式に移轉す。(八六二)
○廿七日徳川吉宗驛使を以て前田吉徳の暑中の安を問ふ。(八六三)

七月 ○四日前田吉徳江戸邸の御表に出づる時の法式を定む。(八六三)
○六日前田吉徳參覲の途に上り、年寄前田土佐守破格を以て之に隨行す。(八六四)
○廿五日金澤百姓町より火を失す。(八六六)

八月 ○十二日舊藩臣室直淸江戸に歿す。(八六六)

九月 ○十九日幕府領に騷擾する者ある時は、隣接萬石以上の諸侯其の鎭撫に從ふべきの令金澤に達す。(八七一)

十月 ○九日諸士の知行及び役料知を併せ八百石以上を受くるものに鶴を飼ふを許す。(八七三)
○十五日日雇人夫の雇銀を定む。(八七三)

十一月 ○十二日前田吉徳他行の際その着笠を持參せしむる小者の服裝を改めしむ。(八七四)

十二月 ○二日加賀藩の小者越前府中にて殺害せらる。(八七四)

〇十九日徳川吉宗使者を遣はして前田吉徳に鶴を贈る。(八七七)

〇廿七日大槻朝元の兄七郎左衛門新に知行を受く。(八七七)

是歳 〇郡奉行等百姓の心得方を令す。(八七八)

〇收納米の上納額を檢査する規定を改む。(八八六)

享保二十年　乙卯　皇紀二三九五

正月 〇朔日前田吉徳江戸に於いて初めてその子重熈の年始の禮を受く。(八八八)

〇十四日幕府先に加賀藩の人數が火災消防に盡力したる功を賞す。(八八八)

〇十六日前田吉徳その生母預玄院を招き舞囃子を演ず。(八八九)

〇十八日前田吉徳其妹榮姫を招き舞囃子を演ず。(八八九)

〇廿二日木部邸の長屋に放火する者あり。(八八九)

〇廿六日女の要求によりて之を刺殺し、己れ自害を果さゞりし他國者を死刑に處せしむ。(八九〇)

二月 〇朔日火事裝束に立付の外、細袴・踏込・のりせんも亦用ひ得べきことを定む。(八九一)

〇十一日恒例により榮君に贈る物品の支出を會所に命ず。(八九一)

三月 〇廿四日老臣長甲斐守高連卒す。(八九四)

閏三月 〇十五日前田吉徳側室鈴木氏の待遇を改む。(八九五)

四月 〇二日前田吉徳の女總姫江戸富士權現に參詣す。(八九六)

五月 〇朔日表小將丹羽織部の小者、幕府旗本の家來の證人たるを以つて辨銀を命ぜらる。(八九六)

〇十一日前田吉徳柳營に上り天下太平を祝する爲め演能を陪觀す。(八九六)

六月 〇大雨あり。宮腰浦に多く漂着物を見る。(八九八)

七月 〇廿七日前田吉徳就國の暇を受く。(八九九)

〇廿八日前田吉徳登營して就國の辭見す。(八九九)

八月 〇廿二日前田吉徳鼓を打ち大槻朝元をして道成寺の能を演ぜしむ。(九〇〇)

〇廿五日前田吉徳江戸を發し歸國の途に就く(九〇〇)

九月 〇七日前田吉徳金澤に着す。(九〇〇)

〇七日前田圖書の自分差控を免さる。(九〇〇)

〇七日前田吉徳政務を裁する爲特に定日を設くることを廢す。(九〇一)

〇十七日前田吉徳の子利和江戸に生る。(九〇一)

〇廿二日前田宗辰弓初の儀を行ふ。(九〇三)

〇廿二日松樹盜伐の爲に禁牢せられたるものを宥し一村一作一歩の過怠免を命ず。(九〇三)

〇廿八日前田宗辰乘馬初の儀を行ふ。(九〇五)

十月 ○七日大聖寺侯前田利章の女繁姫を吉德の養女となし二條宗熙に嫁せしむることを許さる。(九〇六)

○十二日米價低落を防止すべき幕令を齎らしたる飛脚金澤に達す。(九〇七)

○十六日櫻町天皇の卽位を賀する爲、金澤より横山正從を使者として京に赴かしむ。(九〇七)

十一月 ○朔日火災に際し藩侯の行列に加る者の鑓印に銀の二枚短册を附せしむ。(九〇八)

○八日前田吉德の子重靖江戸に生る。(九〇八)

○十五日前田吉德櫻町天皇の卽位を賀する爲め德川吉宗に物を獻る。(九〇八)

○十六日前田吉德放鷹に扈從する人數を減ずべきことを命ず。(九〇九)

○廿五日前田宗辰讀書初の儀を行ふ。(九〇九)

○晦日德川吉宗の前田吉德に贈れる鶴金澤に達す。(九一〇)

○石動山天平寺智識廻の沿革に就き上申す。(九一〇)

十二月 ○十三日家老津田玄蕃等前田吉德の意に違ふことありて職を免ぜらる。(九一二)

○十八日大小將組頭中村五兵衞不行狀を以て役儀を除き逼塞を命ぜらる。(九一三)

○二十日老臣等家中匡救の爲に用銀調達の手段を議し尋いで町人鍋屋利兵衞を京阪に派遣す。(九一六)

○廿五日前田大炊叙爵して對馬守と稱す。(九一八)

是歲 ○前田吉德歸國の後、演能放鷹等を廢す。(九一九)

元文元年 丙辰 皇紀二三九六

二月 ○三日改作奉行等を上國に派し銀子を才覺せしむ。(九二〇)

○八日今年前田吉德及び宗辰出府の際の從臣を定む。(九二一)

○十一日金澤城辰巳櫓下の石垣修理を命ず。(九二一)

○廿四日大槻朝元知行加增を命ぜらる。(九二二)

○廿七日細井藤太夫八十一歲を以て隱居を命ぜらる。(九二三)

○用銀調達の爲改作奉行大塚彌五太夫等に京阪出張を命ず。(九二三)

三月 ○十一日前田吉德大槻朝元の邸に臨み、尋いで朝元その妻を離別す。(九二六)

四月 ○朔日前田宗辰今年出府の時期に就き幕府の許可を得たることを告ぐ。(九二九)

○五日金澤石浦新町より火を失す。(九二九)

○五日能登鳳至郡輪島町に火災あり。(九三〇)

○七日金澤卯辰より火を失す。(九三一)

○廿四日百姓の藩又は諸士に奉公する者といへども、十村に對し鍬米を納入すべきを命す。(九三一)

○濫に松樹の下附を請ふものあるも之を許さゞるべ

きを告ぐ。(九三四)

○江戸に於いて若黨・小者の三ヶ年以上滯在すべからざるを定む。(九三六)

五月 ○九日前田綱紀の十三回忌法會を金澤寶圓寺及び江戸傳通院に行ふ。(九三六)

○十五日粟ヶ崎附近にて獵師の唐網を用ひて漁撈することを許す。(九三七)

○十五日天德院等の僧を城中に延きて能を觀覽せしめ、法會執行の勞を慰す。(九三七)

六月 ○十三日水原左仲太、大塚彌八郎と刺違へて鬪死す。(九四一)

○十五日和田采女用銀の調達主付を命ぜらる。(九四二)

○十五日組外組多羅尾八平次及びその弟定番御馬廻組多羅尾清太夫共に流刑に處せらる(九四四)

○十八日三田村監物・堀彌三左衞門先に相爭ひたるを以て知行を召放さる。(九四八)

○十九日德川吉宗奉書を以て前田吉德の暑中の安を問ふ。(九四九)

七月 ○四日大槻朝元、前田修理の女と婚することを許さる。(九四九)

○六日前田吉德金澤を發し、十八日江戸に着す。(九五〇)

○本郷邸に於ける前田宗辰の居室造營竣成す。(九五一)

○鳳至郡輪島の船頭傳九郎等朝鮮に漂着す。(九五一)

八月 ○十五日前田吉德登營して參覲の禮を行ふ。(九五二)

○廿三日高山善左衞門の妾怪事に會す。(九五二)

○廿四日大槻朝元の兄長左衞門等班列を進めらる。(九五三)

九月 ○朔日金澤堤町に金銀引替座を開く。(九五三)

○二十日前田吉德夫人十七回忌法會を江戸傳通院に行ふ。(九五三)

○廿一日前田宗辰金澤を發して江戸に赴く。(九五四)

○廿三日使を京師に遣はして前田綱紀の女榮君の從三位に叙せられたるを祝せしむ。(九五五)

○廿五日前田吉德の女喜代姫、安藝侯の嗣子淺野宗恒と婚を定む。(九五五)

○廿八日新鑄の銀貨を通用し貸銀を三割增とすべきを命ず。(九五六)

十月 ○六日強風雨の爲能登に損害多く、海嘯越中境關所を襲ふ。(九五七)

○七日前田宗辰江戸に着す。(九五八)

○十一日前田吉德の側室鈴木氏の兄弟を祿す。(九六八)

十一月 ○朔日前田宗辰・重煕初めて寶生大夫に就きて仕舞を習ふ。(九五九)

○十五日前田綱紀の孫永君櫻町天皇の女御として入内す。(九五九)

十二月 〇十一日二條宗煕、前田吉德の養女繁姫に結納を贈る。(九六〇)
〇廿一日幕吏加賀藩の八丈島にある宇喜多氏に遣はしたる物品の難船したることを報ず。(九六一)

是歳 〇村肝煎に命じ牛紙帳に納租の高を記錄せしむ。(九六三)

元文二年 丁巳 皇紀二三九七

正月 〇朔日前田吉德柳營に登りて正を賀す。(九六四)
〇四日前田吉德、生母預玄院の古稀を祝す。(九六五)
〇十三日老臣奥村數馬その近習の爲に殺さる。(九六五)

二月 〇十一日德川吉宗、前田吉德に鶴を贈る。(九六九)
〇廿五日能登に於ける鼠害に關して幕府に上申す。(九六九)
〇家來の給銀支拂に新鑄の銀貨を以てすべきことを命ず。(九七二)

三月 〇十三日前田吉德の藏する飮膳正要を書寫せしめて幕府に納る。(九七二)
〇十六日諸士に役銀・出銀の上納を懈らざらしむべきを令す。(九七二)

四月 〇二日前田吉德の子利和、江戸富士社に宮參を行ふ。(九七三)
〇六日前田宗辰名を犬千代と改め、翌日又左衞門利雄と改む。(九七三)
〇六日前田吉德の養女繁姫江戸を發して金澤に向ふ。(九七四)
〇七日前田吉德、宗辰を伴ひて閣老を歷訪す。(九七五)
〇廿三日中御門上皇崩御の報江戸より金澤に達す。(九七六)
〇廿八日前田宗辰初めて德川吉宗に謁す。(九七八)
〇能登に星隕つ。(九七九)

五月 〇朔日前田吉德、宗辰の謁見を賀して祝儀を贈る。(九七九)
〇二日先に中御門上皇崩御せしを以て使者を京師に發せしむ。(九八〇)
〇五日去年朝鮮に漂流したる鳳至郡輪島の船頭等金澤に歸着す。(九八〇)
〇六日菊池十六郎等日光社參を命ぜられて江戸を發す。(九八八)
〇十一日金澤にて前田宗辰の德川吉宗に謁したることを頭並以上の士に告ぐ。(九八九)
〇十五日前田宗辰會津侯松平容貞の妹常姫と婚を約す。(九八九)

六月 〇四日前田宗辰の婚姻幕府によりて許可せらる。(九九〇)
〇廿一日百姓の遺子幼弱なるを以て後見高としたる田地の取扱に就いて令す。(九九一)

〇廿八日前田宗辰登營して首服し正四位下左近衞權少將に任じ佐渡守宗辰と稱す。(九九二)

〇廿八日前田綱紀の女敬姬逝去す。(九九四)

〇晦日徳川吉宗使を遣はして前田吉德を訪はしむ。(九九五)

七月 〇朔日金澤寺町に火災あり。(九九五)

〇九日徳川吉宗人參種を交附せしめて加賀藩に播種を命ず。(九九六)

〇十一日江戸より使を遣はして關白二條吉忠の病を問はしむ。(九九七)

〇十二日前田吉德、徳川吉宗に巣鷂を獻る。(九九七)

〇廿七日前田吉德に就封の暇を賜ふ。(九九八)

八月 〇十六日前田吉德の女楊姬江戸に生る。(九九八)

〇廿一日前田宗辰の位記口宣受領の爲の使者江戸を發す。(九九九)

九月 〇朔日金澤寺町に火災あり。(九九九)

〇二日横山大和守指控を命ぜらる。(一〇〇四)

〇四日前田吉德 江戸を發し十六日金澤に着す。(一〇〇四)

〇六日大聖寺侯前田利章卒す。(一〇〇四)

〇十六日徳川吉宗使を前田吉德・宗辰に遣はして前田利章の卒去を弔す。(一〇〇七)

十月 〇十三日茶堂頭山家宗佐投獄せられ次いで能登に流さる。(一〇〇八)

〇十五日御馬廻組杉野善兵衞の弟織太夫若黨を殺さんとして果さず。(一〇〇八)

〇廿三日使を日光に遣はして前田宗辰の任官を謝せしむ。(一〇一二)

〇廿七日前田利道大聖寺侯前田利章の襲封を命ぜらる。(一〇一二)

十一月 〇能美郡粟津溫泉の浴客より每日錢一文を徵收することの許可を求む。(一〇一三)

〇六日前田吉德、大槻朝元の邸に臨む。(一〇一五)

〇八日儉約勵行の爲屋根以外の修繕を禁じ又賄の給付を停止すべきことを定む。(一〇一六)

〇十五日大槻朝元、前田修理の女を娶る。(一〇一七)

〇廿七日金澤の東南空に赤氣を望む。(一〇一八)

〇廿八日徳川吉宗、前田宗辰に初めて雁を贈る。(一〇一九)

十二月 〇十五日櫻町天皇の女御、皇女を生み給ひしを以て賀使を派遣す。(一〇二〇)

就業

侯爵前田家囑託　日置　謙

昭和八年十二月十五日印刷
昭和八年十二月二十日發行
（非賣品）

著作者　東京市目黒區駒場町八百六十一番地
侯爵前田家編輯部

發行者　東京市淀橋區東大久保町二丁目三百十七番地
石黒文吉

印刷者　石川縣金澤市高岡町九十番地ノ二
高橋覺吉

印刷所　石川縣金澤市高岡町九十番地ノ二
明治印刷株式會社




EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03018 0574